

桑原遺跡

住宅・都市整備公団坂戸入西地区土地区画整理事業関係  
埋蔵文化財発掘調査報告

— V —

1992

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



SJ67 出土土器



SJ48 出土土器



## 序

埼玉県坂戸市の西北部に位置する入西地区周辺は、早くから多くの遺跡が所在することで知られている地域であります。台地上には、毛呂町にまたがる苦林古墳群など大小の古墳群が確認されており、東流する越辺川に育まれた低地部は縄文時代から人の営みが認められ、弥生時代の終わりには多くの墳墓が形成された地として注目されております。また、現在水田地帯として利用されている地域は、古代の土地区画制度である条里制が施行された領域として「入西条里」の名称が付けられております。古代末には、武蔵武士の原形となる武蔵七党が興り、当地でも児玉党の流れをくむ入西氏や浅羽氏関連の遺跡が数多く残されております。

これまで営々と時を重ねてきた当地においても、近年の都市開発は目覚ましいものがあります。この程、住宅・都市整備公団による土地区画整理事業が実施されることになりました。当地に所在する埋蔵文化財に関する取り扱いについては、関係各機関の協議が重ねられた結果、11ヶ所の遺跡については財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施して記録保存が図られることになりました。本書はそれらの内、昭和63年度に実施された桑原A・B遺跡の調査報告であります。

発掘調査の結果、古墳時代後期から中世に至る集落遺跡であることが明らかとなりました。中でも、76軒に及ぶ竪穴住居跡が調査された古墳時代後期の集落は、その余容が明らかにできた種な事例であります。当地における歴史的環境を解明する上で貴重な資料を提供してくれました。また、出土遺物には、土師器、須恵器などの土器類の他、石製模造品、勾玉、管玉などの祭祀遺物、装身具、更に鉄製品等極めて質の高い出土遺物を得ることができました。

これらの発掘調査の成果をまとめた本書が、埋蔵文化財保護に関する教育・普及の資料として、また学術研究の基礎資料として広くご活用頂ければ幸いです。

刊行にあたり、調査に関する調整に尽力して頂きました埼玉県教育局指導部文化財保護課をはじめ、発掘調査から本書の刊行に至るまでご協力頂きました住宅・都市整備公団首都圏開発本部、同埼玉西宅地開発事務所、坂戸市教育委員会ならびに関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成4年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 荒井修二

## 例 言

1 本書は、埼玉県坂戸市大字掘込字桑原236他に所在する桑原A・B遺跡の発掘報告書である。発掘調査届に対する文化庁長官からの指示通知番号は、昭和63年7月7日付け委保第5の1055である。

2 調査は、坂戸市入西地区土地区画整理事業に先立つ事前調査であり、埼玉県教育局指導部文化財保護課の調整を経て、住宅・都市整備公団の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

3 発掘調査は、プラント・オパール調査を昭和60年3月1日～昭和62年3月31日までの3年間で実施、桑原A遺跡は昭和63年4月1日～平成元年3月31日まで、桑原B遺跡を昭和62年11月2日～同年12月25日まで実施した。整理・報告書作成は平成2・3年度に受託し、これを実施した。入西地区土地区画整理事業関係の既刊発掘調査報告書は、遺跡別に三分冊が刊行されている。既刊の三冊は以下のとおりである。

『金井遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第86集 平成元年

『広田遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第89集 平成2年

『塚の越遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第101集 平成3年

4 発掘調査は桑原A遺跡を大谷徹・赤熊浩一・杉崎茂樹・村田健二が、桑原B遺跡を長岡孝志が、整理・報告書作成は村田が実施した。発掘調査および整理・報告書作成作業の担当者、組織は第I章に示した。

5 遺跡の基準点測量ならびに航空写真は朝日航空株式会社、遺構内の自然科学分析（炭化材）は株式会社パレオ・ラボ、出土土器の胎土分析は株式会社第四紀地質研究所、建物建蔽体（プラント・オパール）の分析については、富崎大学農学部藤原宏志氏、古環境研究所に委託した。分析結果については第V章に掲載した。

6 本書に使用した航空写真以外の写真は、大谷、赤熊、長岡、杉崎、村田が撮影し、遺物写真については村田が撮影した。

7 本書の執筆は第I章第1項を埼玉県教育局指導部文化財保護課、第IV章第1項を長岡が担当し、以上を除くその他の章は村田が担当した。

8 本書に掲載した資料は、平成4年度以降埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管している。

9 本書の編集は資料部資料整理第1課の村田が行なった。

10 本書を作成するにあたり、下記の方々からご教示、ご協力を賜った。（敬称略）

伊藤研志（坂戸市市史編集室） 加藤恭朗、北瀬彰男、柳楽 理（坂戸市教育委員会）

宮島秀夫（東松山市教育委員会） 渡辺 一（鳩山町教育委員会） 出縄康行（大里村教育委員会）

酒井清治（国立歴史民俗博物館） 駒宮史朗（県立自然史博物館）

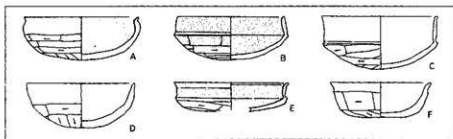
# 凡 例

本書に掲載した遺構図、遺物実測図、遺物観察表の指示は以下の通りである。

- 1 遺構番号は現地調査時の番号と一部異なる部分が生じたため、新旧対比表を巻末に付した。
- 2 遺構名は下記の略号で表記した部分がある。  
 S J = 住居跡    S B = 掘立柱建物跡    S K = 土 壙  
 S E = 井戸跡    S D = 溝 跡            S Z = 方形周溝墓
- 3 遺跡全体図における X・Y 数値は、平面直角座標第Ⅱ系（原点＝北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒）に基づく各座標値を示す。また矢印の方向は、全て座標北を指す。
- 4 実測図の縮尺は原則として以下の通りである。  
 遺跡：遺構分布 1/500（付図）  
 遺構：住居跡、遺物分布、掘立柱建物跡、土壙、井戸跡＝1/80 カマド＝1/40  
 遺物：土器＝1/4（一部 1/5） 玉類＝1/1×2 古銭＝1/2 鉄製品＝1/4
- 5 実測図内の網部の表示は以下の通りである。



- 6 実測図内のドット表示は以下の通りである。  
 ○＝須恵器 ●＝土師器 ▲＝模造品類 △＝鉄製品 ■＝石製品
- 7 遺物観察表の胎土に使用した略号は、R＝赤色粒子 B＝黒色粒子 W＝白色粒子 K＝角閃石 Ha＝白色針状物質 U＝雲母 S＝砂粒 G＝その他 で表示した。
- 8 遺物観察表の残存率表示は、断面に表わした現存高に対する数値である。
- 9 報告書内の色彩表現は、農林省水産技術会議事務所監修『標準土色帳』に準拠した。
- 10 遺物観察表の器種（坏）の表示は次の通りである。A：碗状で口縁部が「S」字状。B：横做坏、口縁部は内傾、内外面赤彩。C：横做坏。D：埴形。E：所謂比金型坏。F：平底



# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
I 発掘調査に至るまでの経過	
1 発掘調査に至る経過	1
2 発掘調査・整理の組織	2
3 発掘調査・整理作業の経過	4
II 地理的環境と周辺遺跡	
1 地理的環境	5
2 周辺遺跡の概要	7
III 桑原 A 遺跡	
1 遺跡の概要	15
2 検出された遺構と遺物	
(1) 住居跡	17
(2) 堀立柱建物跡	265
(3) 土壇と井戸跡	284
(4) 溝跡	309
(5) グリット出土の遺物	319
IV 桑原 B 遺跡	
1 遺跡の概要	325
2 検出された遺構と遺物	329
V 鑑定報告	333
VI 結 語	359
桑原 A 遺跡住居跡一覧表	388

## 挿 図 目 次

第1図	桑原遺跡の位置	5	第51図	第11号住居跡出土遺物	53
第2図	周辺の遺跡	6・7	第52図	第12・13号住居跡・カマド	54
第3図	開発地域内(人西地区)の遺跡	8・9	第53図	第12号住居跡遺物分布	55
第4図	基本順序	8	第54図	第12号住居跡出土遺物	55
第5図	桑原A遺跡全体図(1)	8・9	第55図	第13号住居跡出土遺物	56
第6図	桑原A遺跡全体図(2)	16	第56図	第14号住居跡・遺物分布	57
第7図	第1号住居跡	17	第57図	第14号住居跡カマド	58
第8図	第1号住居跡カマド・貯蔵穴	18	第58図	第14号住居跡出土遺物	59
第9図	第1号住居跡遺物分布	18	第59図	第15号住居跡・カマド	60
第10図	第1号住居跡出土遺物	19	第60図	第15号住居跡出土遺物	60
第11図	第2号住居跡・カマド	20	第61図	第16・17号住居跡・カマド	61
第12図	第2号住居跡炭化材	21	第62図	第16・17号住居跡遺物分布	62
第13図	第2号住居跡貯蔵穴・焼土溜まり	21	第63図	第16号住居跡出土遺物	63
第14図	第2号住居跡遺物分布	22	第64図	第17号住居跡出土遺物	63
第15図	第2号住居跡口玉・ガラス小片	22	第65図	第18号住居跡・出土遺物	64
第16図	第2号住居跡出土遺物(1)	23	第66図	第19号住居跡・出土遺物・カマド	65
第17図	第2号住居跡出土遺物(2)	24	第67図	第19号住居跡出土遺物	66
第18図	第2号住居跡出土白玉(1)	25	第68図	第20号住居跡	66
第19図	第2号住居跡出土白玉(2)	26	第69図	第20号住居跡カマド・遺物分布	67
第20図	第2号住居跡出土白玉・石製模造品	27	第70図	第20号住居跡出土遺物	68
第21図	第3号住居跡	29	第71図	第21号住居跡・遺物分布	69
第22図	第3号住居跡炉跡・貯蔵穴	30	第72図	第21号住居跡出土遺物	70
第23図	第3号住居跡出土遺物	30	第73図	第22号住居跡	71
第24図	第4号住居跡・カマド	31	第74図	第22号住居跡出土遺物	71
第25図	第4号住居跡遺物分布	32	第75図	第23号住居跡・遺物分布	72
第26図	第4号住居跡出土遺物	33	第76図	第23号住居跡カマド	73
第27図	第5号住居跡	34	第77図	第23号住居跡出土遺物	73
第28図	第5号住居跡カマド	35	第78図	第24号住居跡	74
第29図	第5号住居跡遺物分布	36	第79図	第24号住居跡遺物分布	75
第30図	第5号住居跡出土遺物(1)	37	第80図	第24号住居跡カマド	75
第31図	第5号住居跡出土遺物(2)	38	第81図	第24号住居跡支脚転用の台付瓦	75
第32図	第6号住居跡・カマド	39	第82図	第24号住居跡出土遺物	76
第33図	第6号住居跡遺物分布	40	第83図	第25号住居跡・カマド・遺物分布	78
第34図	第6号住居跡出土遺物	41	第84図	第25号住居跡出土遺物(1)	79
第35図	第7号住居跡・遺物分布	42	第85図	第25号住居跡出土遺物(2)	80
第36図	第7号住居跡カマド	43	第86図	第26号住居跡・遺物分布	81
第37図	第7号住居跡出土遺物	43	第87図	第26号住居跡カマド	81
第38図	第8号住居跡・カマド	44	第88図	第26号住居跡出土遺物	82
第39図	第8号住居跡遺物分布	45	第89図	第27号住居跡・遺物分布	83
第40図	第8号住居跡出土遺物	45	第90図	第27号住居跡出土遺物	83
第41図	第9号住居跡・カマド	46	第91図	第27号住居跡カマド・貯蔵穴	84
第42図	第9号住居跡遺物分布	47	第92図	第28号住居跡出土遺物	84
第43図	第9号住居跡出土遺物(1)	48	第93図	第28号住居跡	85
第44図	第9号住居跡出土遺物(2)	49	第94図	第29号住居跡	86
第45図	第10号住居跡	50	第95図	第29号住居跡出土遺物	87
第46図	第10号住居跡遺物分布	50	第96図	第30号住居跡・遺物分布	88
第47図	第10号住居跡出土遺物	51	第97図	第30号住居跡カマド	89
第48図	第11号住居跡	51	第98図	第30号住居跡出土遺物(1)	90
第49図	第11号住居跡カマド	52	第99図	第30号住居跡出土遺物(2)	91
第50図	第11号住居跡遺物分布	52	第100図	第31号住居跡	92

第101回	第31号住居跡遺物分布	92	第153回	第47号住居跡出土遺物	130
第102回	第31号住居跡カマド・貯蔵穴	93	第154回	第48号住居跡	131
第103回	第31号住居跡出土遺物	93	第155回	第48号住居跡炭化材・遺物分布	132
第104回	第32号住居跡・遺物分布	94	第156回	第48号住居跡カマド	133
第105回	第32号住居跡カマド	95	第157回	第48号住居跡出土遺物(1)	134
第106回	第32号住居跡出土遺物	95	第158回	第48号住居跡出土遺物(2)	135
第107回	第33号住居跡	96	第159回	第48号住居跡出土遺物(3)	136
第108回	第33号住居跡遺物分布	96	第160回	第48号住居跡出土遺物(4)	137
第109回	第33号住居跡カマド	97	第161回	第49号住居跡・遺物分布	139
第110回	第33号住居跡出土遺物	97	第162回	第49号住居跡カマド	140
第111回	第34号住居跡・遺物分布	98	第163回	第49号住居跡出土遺物	140
第112回	第34号住居跡カマド	98	第164回	第50号住居跡・遺物分布	141
第113回	第34号住居跡出土遺物(1)	99	第165回	第50号住居跡カマド	142
第114回	第34号住居跡出土遺物(2)	100	第166回	第50号住居跡出土遺物(1)	143
第115回	第35号住居跡・遺物分布	101	第167回	第50号住居跡出土遺物(2)	144
第116回	第35号住居跡カマド	101	第168回	第51号住居跡・遺物分布	146
第117回	第35号住居跡出土遺物(1)	101	第169回	第51号住居跡出土遺物	147
第118回	第35号住居跡出土遺物(2)	102	第170回	第52号住居跡	147
第119回	第36号住居跡	103	第171回	第52号住居跡出土遺物	148
第120回	第36号住居跡出土遺物	103	第172回	第53号住居跡	148
第121回	第37号住居跡・遺物分布	104	第173回	第53号住居跡出土遺物	148
第122回	第37号住居跡出土遺物	105	第174回	第54号住居跡・カマド	149
第123回	第38・39号住居跡	106	第175回	第54号住居跡出土遺物	149
第124回	第39号住居跡カマド	107	第176回	第55・56号住居跡	150
第125回	第38号住居跡出土遺物	107	第177回	第55号住居跡出土遺物	151
第126回	第39号住居跡出土遺物	107	第178回	第56号住居跡カマド	151
第127回	第40号住居跡	108	第179回	第57号住居跡・カマド・貯蔵穴	152
第128回	第40号住居跡カマド	108	第180回	第57号住居跡遺物分布	153
第129回	第40号住居跡出土遺物	108	第181回	第57号住居跡出土遺物	154
第130回	第41号住居跡・遺物分布	109	第182回	第58号住居跡	155
第131回	第41号住居跡カマド	110	第183回	第58号住居跡カマド・貯蔵穴	156
第132回	第41号住居跡出土遺物(1)	111	第184回	第58号住居跡遺物分布	156
第133回	第41号住居跡出土遺物(2)	112	第185回	第58号住居跡出土遺物(1)	157
第134回	第42号住居跡・遺物分布	113	第186回	第58号住居跡出土遺物(2)	158
第135回	第42号住居跡カマド	114	第187回	第59号住居跡・カマド	160
第136回	第42号住居跡出土遺物	115	第188回	第59号住居跡出土遺物	161
第137回	第43号住居跡	116	第189回	第59号住居跡遺物	162
第138回	第44号住居跡・遺物分布	117	第190回	第60号住居跡・カマド・出土遺物	163
第139回	第44号住居跡出土遺物	118	第191回	第61号住居跡・カマド	164
第140回	第45号住居跡	119	第192回	第61号住居跡遺物分布	165
第141回	第45号住居跡遺物分布	120	第193回	第61号住居跡出土遺物	165
第142回	第45号住居跡カマド	120	第194回	第62号住居跡・遺物分布	166
第143回	第45号住居跡出土遺物	121	第195回	第62号住居跡カマド	166
第144回	第46号住居跡	122	第196回	第62号住居跡出土遺物	167
第145回	第46号住居跡遺物分布	123	第197回	第63号住居跡・遺物分布	168
第146回	第46号住居跡カマド	123	第198回	第63号住居跡出土遺物	169
第147回	第46号住居跡出土遺物(1)	124	第199回	第64号住居跡	170
第148回	第46号住居跡出土遺物(2)	125	第200回	第64号住居跡カマド	170
第149回	第46号住居跡出土遺物(3)	126	第201回	第64号住居跡遺物分布	171
第150回	第47号住居跡	128	第202回	第64号住居跡出土遺物(1)	172
第151回	第47号住居跡遺物分布	129	第203回	第64号住居跡出土遺物(2)	173
第152回	第47号住居跡カマド	129	第204回	第65号住居跡	174

第205回	第65号住居跡遺物分布・カマド	174	第257回	第82・83号住居跡遺物分布	217
第206回	第65号住居跡出土遺物	175	第258回	第82号住居跡カマド	217
第207回	第66号住居跡	176	第259回	第82号住居跡出土遺物(1)	218
第208回	第66号住居跡出土遺物	177	第260回	第82号住居跡出土遺物(2)	219
第209回	第67号住居跡・カマド	178	第261回	第83号住居跡カマド	220
第210回	第67号住居跡遺物分布	179	第262回	第83号住居跡出土遺物	220
第211回	第67号住居跡出土遺物(1)	180	第263回	第84号住居跡	221
第212回	第67号住居跡出土遺物(2)	181	第264回	第84号住居跡出土遺物	221
第213回	第68号住居跡	182	第265回	第85号住居跡	222
第214回	第68号住居跡カマド・遺物分布	183	第266回	第85号住居跡カマド	223
第215回	第68号住居跡出土遺物	184	第267回	第85号住居跡出土遺物	223
第216回	第69号住居跡	185	第268回	第86号住居跡	224
第217回	第69号住居跡カマド	185	第269回	第86号住居跡カマド	224
第218回	第69号住居跡遺物分布	186	第270回	第86号住居跡遺物分布	225
第219回	第69号住居跡出土遺物(1)	187	第271回	第86号住居跡出土遺物	226
第220回	第69号住居跡出土遺物(2)	188	第272回	第87号住居跡・遺物分布	227
第221回	第70号住居跡・遺物分布・カマド	189	第273回	第87号住居跡カマド・貯蔵穴	227
第222回	第70号住居跡出土遺物(1)	190	第274回	第87号住居跡出土遺物	228
第223回	第70号住居跡出土遺物(2)	191	第275回	第88号住居跡	230
第224回	第71号住居跡	192	第276回	第88号住居跡遺物分布	231
第225回	第71号住居跡出土遺物	192	第277回	第88号住居跡カマド・貯蔵穴	231
第226回	第72号住居跡	193	第278回	第88号住居跡出土遺物(1)	232
第227回	第72号住居跡出土遺物	193	第279回	第88号住居跡出土遺物(2)	233
第228回	第73号住居跡	193	第280回	第89号住居跡	235
第229回	第73号住居跡遺物分布	194	第281回	第89号住居跡出土遺物	235
第230回	第73号住居跡出土遺物	194	第282回	第90号住居跡	236
第231回	第74号住居跡	195	第283回	第90号住居跡カマド・貯蔵穴	236
第232回	第74号住居跡遺物分布・カマド	196	第284回	第90号住居跡出土遺物	237
第233回	第74号住居跡出土遺物	197	第285回	第91号住居跡	237
第234回	第75号住居跡・遺物分布	198	第286回	第91号住居跡カマド	238
第235回	第75号住居跡カマド	199	第287回	第91号住居跡出土遺物	238
第236回	第75号住居跡出土遺物	199	第288回	第92号住居跡	238
第237回	第76号住居跡	200	第289回	第92号住居跡カマド	239
第238回	第76号住居跡遺物分布・カマド	201	第290回	第92号住居跡遺物分布	239
第239回	第76号住居跡出土遺物(1)	202	第291回	第92号住居跡出土遺物(1)	240
第240回	第76号住居跡出土遺物(2)	203	第292回	第92号住居跡出土遺物(2)	241
第241回	第77号住居跡・遺物分布	204	第293回	第93号住居跡	242
第242回	第77号住居跡カマド	205	第294回	第93号住居跡カマド・貯蔵穴	242
第243回	第77号住居跡出土遺物	206	第295回	第93号住居跡遺物分布	243
第244回	第78号住居跡・遺物分布	207	第296回	第93号住居跡出土遺物	244
第245回	第78号住居跡カマド・貯蔵穴	208	第297回	第94号住居跡	245
第246回	第78号住居跡出土遺物	209	第298回	第94号住居跡カマド	245
第247回	第79号住居跡	210	第299回	第94号住居跡出土遺物	245
第248回	第79号住居跡・カマド	210	第300回	第95号住居跡	246
第249回	第79号住居跡出土遺物	211	第301回	第95号住居跡カマド	247
第250回	第80号住居跡	211	第302回	第95号住居跡遺物分布	247
第251回	第80号住居跡出土遺物	212	第303回	第95号住居跡跡	248
第252回	第81号住居跡・遺物分布	213	第304回	第95号住居跡出土遺物(1)	249
第253回	第81号住居跡カマド・貯蔵穴	214	第305回	第95号住居跡出土遺物(2)	250
第254回	第81号住居跡出土遺物(1)	214	第306回	第96号住居跡	251
第255回	第81号住居跡出土遺物(2)	215	第307回	第96号住居跡カマド	252
第256回	第82・83号住居跡	216	第308回	第96号住居跡出土遺物	252

第309回	第97号住居跡	253
第310回	第97号住居跡出土遺物	253
第311回	第98号住居跡	254
第312回	第98号住居跡・カマド	254
第313回	第98号住居跡出土遺物	255
第314回	第99号住居跡・カマド	256
第315回	第99号住居跡遺物分布	257
第316回	第99号住居跡出土遺物	258
第317回	第100号住居跡	259
第318回	第100号住居跡出土遺物	260
第319回	第101号住居跡	260
第320回	第101号住居跡カマド	261
第321回	第101号住居跡出土遺物	261
第322回	第102号住居跡	262
第323回	第102号住居跡カマド・貯蔵穴	263
第324回	第102号住居跡出土遺物	264
第325回	桑原A遺跡遺構分布	265
第326回	第1号掘立柱建物跡	266
第327回	第1号掘立柱建物跡出土遺物	266
第328回	第2号掘立柱建物跡	267
第329回	第3号掘立柱建物跡	268
第330回	第3号掘立柱建物跡出土遺物	268
第331回	第4号掘立柱建物跡	269
第332回	第4号掘立柱建物跡出土遺物	270
第333回	第5号掘立柱建物跡	271
第334回	第6号掘立柱建物跡	272
第335回	第6号掘立柱建物跡出土遺物	272
第336回	第7号掘立柱建物跡	273
第337回	第7号掘立柱建物跡出土遺物	274
第338回	掘立柱建物跡群(総柱建物)	274
第339回	第8号掘立柱建物跡	275
第340回	第9号掘立柱建物跡	275
第341回	第10・11号掘立柱建物跡	276
第342回	第11号掘立柱建物跡出土遺物	277
第343回	第12・13号掘立柱建物跡	277
第344回	第14号掘立柱建物跡	278
第345回	第15・16号掘立柱建物跡	279
第346回	第17号掘立柱建物跡	280
第347回	第18号掘立柱建物跡	281
第348回	第19・20号掘立柱建物跡	282
第349回	第21号掘立柱建物跡	283
第350回	第1～9号土壇跡	284
第351回	第1～6号土壇跡出土遺物	285
第352回	第10～15号土壇跡	287
第353回	第10～15号土壇跡・出土遺物	287
第354回	第16～22号土壇跡出土遺物	288
第355回	第16～23号土壇跡	289
第356回	第24～35号土壇跡	291
第357回	第24～31号土壇跡出土遺物	292
第358回	第36～42号土壇跡	294
第359回	第36～38号土壇跡出土遺物	295
第360回	第1～2号井戸跡	296

第361回	第1～2号井戸跡出土遺物	297
第362回	第3～5号井戸跡	297
第363回	第3～5号井戸跡出土遺物	298
第364回	第6～8号井戸跡	300
第365回	第6～7号井戸跡出土遺物	300
第366回	第9～13号井戸跡	301
第367回	第9～12号井戸跡出土遺物	302
第368回	第14～16号井戸跡	303
第369回	第15～16号井戸跡出土遺物	305
第370回	第17号井戸跡・出土遺物	305
第371回	第17号井戸跡出土遺物	306
第372回	第18～20号井戸跡	307
第373回	第18～20号井戸跡出土遺物	308
第374回	桑原A遺跡遺構分布	309
第375回	第2～3号溝跡出土遺物	310
第376回	第4～8号溝跡出土遺物	312
第377回	第9号溝跡出土遺物	313
第378回	第14～17号溝跡出土遺物	315
第379回	第23号溝跡出土遺物	317
第380回	溝跡略号	318
第381回	グリッド出土遺物(1)	319
第382回	グリッド出土遺物(2)	320
第383回	桑原A遺跡出土古銭	322
第384回	坏木葉底拓影図	323
第385回	桑原A遺跡住居跡集成	324
第386回	桑原B遺跡全体図・水田跡・土壇	326
第387回	桑原B遺跡水田面確認トレンチ層序	328
第388回	桑原B遺跡出土遺物(1)	329
第389回	桑原B遺跡出土遺物(2)	330
第390回	桑原A遺跡炭化村採取地点	334
第391回	プラント・オパール調査(1)	346
第392回	プラント・オパール調査(2)	347
第393回	プラント・オパール調査(3)	348
第394回	プラント・オパールの出現傾向(1)	353
第395回	プラント・オパールの出現傾向(2)	354
第396回	植物体生産量の推定値(1)	355
第397回	植物体生産量の推定値(2)	356
第398回	植物体生産量の推定値(3)	357
第399回	植物体生産量の推定値(4)	358
第400回	古墳時代後期の集落	359
第401回	編年図(1)坏形土器	363
第402回	編年図(2)	366
第403回	編年図(3)	367
第404回	集落の変遷(古墳時代後期)	368
第405回	古代の集落	371
第406回	集落の変遷(古代)	373
第407回	編年図(4)	374
第408回	編年図(5)	375
第409回	中世の集落	377
第410回	集落の変遷(中世)	379
第411回	集落の変遷(近世)	380
第412回	円窓土器集成	386



## 写真図版目次

巻頭図版	S J 67 出土土器 S J 48 出土土器	図版 7	第19号住居跡 第19号住居跡カマド
図版 1	桑原遺跡全景（南上空より俯瞰） 桑原遺跡集落部分（東上空より俯瞰）	図版 8	第20号住居跡 第20号住居跡セクション 第20号住居跡カマド・亮（4・5）出土状態 第20号住居跡甕（6）出土状態
図版 2	第1号住居跡 第1号住居跡貯蔵穴（12・13） 第1号住居跡遺物出土状態 第2号住居跡 第2号住居跡カマド 第2号住居跡甕（23）出土状態 第2号住居跡小型甕（20）出土状態 第2号住居跡白玉・石製模造品	図版 9	第23号住居跡カマド 第24号住居跡 第24号住居跡カマド 第24号住居跡貯蔵穴 第25号住居跡 第25号住居跡カマド 第25号住居跡貯蔵穴 第25号住居跡甕（13）甕（17・19）出土状態 第25号住居跡遺物出土状態
図版 3	第3号住居跡 第3号住居跡高坏（2・4）出土状態 第3号住居跡炉跡 第3号住居跡炊製紡錘車（6）出土状態 第4号住居跡 第4号住居跡高坏（6）出土状態 第4号住居跡坏（2・4）出土状態 第4号住居跡甕（11）出土状態	図版 10	第26号住居跡 第26号住居跡カマド 第27号住居跡 第27号住居跡カマド 第27号住居跡貯蔵穴 第27号住居跡遺物出土状態 第28号住居跡 第29号住居跡 第30号住居跡
図版 4	第5号住居跡 第5号住居跡カマド 第5号住居跡貯蔵穴 第5号住居跡炭化材出土状態 第5号住居跡勾玉出土状態 第5号住居跡高坏（41）出土状態 第5号住居跡小型高坏（39）出土状態 第5号住居跡高坏（33）出土状態	図版 11	第30号住居跡「間仕切り溝」 第31号住居跡 第31号住居跡カマド 第32号住居跡 第33号住居跡 第34号住居跡 第34号住居跡遺物出土状態
図版 5	第6号住居跡 第6号住居跡カマド 第7号住居跡 第7号住居跡カマド 第8号住居跡 第9号住居跡 第9号住居跡貯蔵穴 第9号住居跡カマド	図版 12	第34号住居跡遺物出土状態 第34号住居跡遺物出土状態 第35号住居跡 第35号住居跡カマド 第36号住居跡 第37・38・39号住居跡 第39号住居跡カマド 第39号住居跡「勾玉」出土状態
図版 6	第10号住居跡 第12号住居跡 第12号住居跡カマド 第12号住居跡紡錘車（14）出土状態 第12号住居跡遺物出土状態 第12・13号住居跡 第14号住居跡 第14号住居跡カマド	図版 13	第40号住居跡 第41号住居跡 第41号住居跡カマド 第41号住居跡南セクション 第41号住居跡遺物出土状態 第41号住居跡遺物出土状態 第41号住居跡遺物出土状態 第41号住居跡遺物出土状態
図版 7	第15号住居跡 第16号住居跡 第16号住居跡遺物出土状態 第17号住居跡 第17号住居跡遺物出土状態 第18号住居跡		

- 図版14 第42号住居跡  
第42号住居跡カマド  
第42号住居跡セクション  
第42号住居跡遺物出土状態  
第43号住居跡  
第44号住居跡土壇  
第44号住居跡遺物出土状態  
第44号住居跡遺物出土状態
- 図版15 第46号住居跡  
第46号住居跡カマド  
第46号住居跡遺物出土状態  
第46号住居跡遺物出土状態  
第46号住居跡遺物出土状態  
第46号住居跡遺物出土状態  
第46号住居跡遺物出土状態  
第46号住居跡遺物出土状態
- 図版16 第47号住居跡  
第47号住居跡カマド  
第47号住居跡カマド  
第47号住居跡貯蔵穴  
第47号住居跡貯蔵穴  
第47号住居跡遺物出土状態  
第47号住居跡結核草出土状態  
第47号住居跡遺物出土状態
- 図版17 第48号住居跡  
第48号住居跡カマド  
第48号住居跡転ばし根太  
第48号住居跡カマド・貯蔵穴  
第48号住居跡転ばし根太細部  
第48号住居跡転ばし根太断面  
第48号住居跡遺物出土状態  
第48号住居跡遺物出土状態
- 図版18 第49号住居跡  
第49号住居跡カマド  
第49号住居跡遺物出土状態  
第49号住居跡遺物出土状態  
第50号住居跡  
第50・51号住居跡遺物出土状態  
第50号住居跡カマド  
第50号住居跡貯蔵穴
- 図版19 第50号住居跡遺物出土状態  
第50・51号住居跡セクション  
第50号住居跡遺物出土状態  
第50号住居跡遺物出土状態  
第51号住居跡  
第52号住居跡  
第53号住居跡  
第54号住居跡
- 図版20 第55・56号住居跡  
第57号住居跡  
第57号住居跡カマド  
第57号住居跡(支脚)
- 図版20 第57号住居跡貯蔵穴  
第57号住居跡「副仕切り溝」  
第57号住居跡遺物出土状態  
第57号住居跡遺物出土状態  
第58号住居跡
- 図版21 第58号住居跡遺物出土状態  
第58号住居跡カマド  
第58号住居跡カマド  
第58号住居跡遺物出土状態  
第58号住居跡遺物(4)出土状態
- 図版22 第59号住居跡  
第59号住居跡カマド(切開前)  
第59号住居跡貯蔵穴  
第59号住居跡カマド(切開後)  
第59号住居跡貯蔵穴(周壁)  
第59号住居跡カマド
- 図版23 第60号住居跡  
第60号住居跡カマド  
第61号住居跡  
第61号住居跡カマド  
第61号住居跡貯蔵穴  
第61号住居跡遺物出土状態  
第61号住居跡遺物出土状態  
第61号住居跡遺物出土状態  
第61号住居跡遺物出土状態
- 図版24 第62号住居跡  
第62号住居跡カマド  
第63号住居跡  
第62号住居跡カマド  
第64号住居跡  
第64号住居跡カマド  
第64号住居跡遺物出土状態  
第64号住居跡遺物出土状態
- 図版25 第65号住居跡遺物出土状態  
第65号住居跡カマド  
第65号住居跡遺物出土状態  
第65号住居跡遺物出土状態  
第66号住居跡  
第66号住居跡遺物出土状態  
第67号住居跡  
第67号住居跡カマド
- 図版26 第68号住居跡  
第68号住居跡貯蔵穴  
第68号住居跡遺物出土状態  
第69号住居跡  
第69号住居跡セクション  
第69号住居跡カマド  
第69号住居跡貯蔵穴  
第69号住居跡遺物出土状態  
第70号住居跡遺物出土状態  
第70号住居跡
- 図版27 第70号住居跡  
第70号住居跡遺物出土状態  
第70号住居跡カマド

- 図版27 第70号住居跡貯蔵穴  
第71号住居跡
- 図版28 第73号住居跡  
第73号住居跡カマド状態  
第73号住居跡貯蔵穴  
第73号住居跡遺物出土状態  
第74号住居跡  
第74号住居跡カマド  
第74号住居跡カマド掘り方  
第74号住居跡遺物出土状態
- 図版29 第75号住居跡  
第75号住居跡カマド  
第75号住居跡遺物出土状態  
第76号住居跡  
第76号住居跡カマド  
第76号住居跡カマド掘り方  
第76号住居跡遺物出土状態  
第76号住居跡遺物出土状態
- 図版30 第77号住居跡  
第77号住居跡カマド  
第77号住居跡カマド内遺物  
第77号住居跡カマド遺物出土状態  
第77号住居跡貯蔵穴  
第78号住居跡  
第78号住居跡カマド  
第78号住居跡貯蔵穴遺物出土状態
- 図版31 第79号住居跡  
第79号住居跡炭化材  
第79号住居跡カマド  
第79号住居跡貯蔵穴  
第79号住居跡遺物出土状態  
第80号住居跡  
第80号住居跡転ばし根太  
第80号住居跡土製勾玉
- 図版32 第81号住居跡  
第81号住居跡カマド  
第81号住居跡貯蔵穴  
第82号住居跡  
第82号住居跡カマド  
第82号住居跡貯蔵穴
- 図版33 第83号住居跡  
第83号住居跡カマド  
第84号住居跡  
第84号住居跡カマド  
第85号住居跡  
第85号住居跡カマド  
第85号住居跡遺物出土状態  
第85号住居跡遺物出土状態
- 図版34 第86号住居跡  
第86号住居跡カマド  
第87号住居跡  
第87号住居跡カマド
- 図版34 第87号住居跡カマド内遺物  
第88号住居跡  
第88号住居跡カマド  
第88号住居跡カマド遺物
- 図版35 第88号住居跡貯蔵穴  
第88号住居跡遺物出土状態  
第88号住居跡遺物出土状態  
第88号住居跡遺物出土状態  
第89号住居跡遺物出土状態  
第90号住居跡  
第90号住居跡カマド  
第90号住居跡貯蔵穴
- 図版36 第91号住居跡  
第91号住居跡カマド  
第92号住居跡  
第92号住居跡遺物出土状態  
第92号住居跡カマド  
第92号住居跡カマド遺物出土状態  
第92号住居跡遺物出土状態  
第92号住居跡遺物出土状態
- 図版37 第93号住居跡  
第93号住居跡カマド  
第93号住居跡貯蔵穴  
第93号住居跡(4)出土状態  
第93号住居跡遺物出土状態  
第94号住居跡  
第94号住居跡カマド  
第94号住居跡カマド遺物出土状態
- 図版38 第95号住居跡  
第95号住居跡カマド  
第95号住居跡遺物(40)出土状態  
第96号住居跡  
第96号住居跡カマド・貯蔵穴  
第96号住居跡遺物出土状態  
第97号住居跡  
第98号住居跡
- 図版39 第98号住居跡カマド  
第99号住居跡  
第99号住居跡カマド  
第99号住居跡貯蔵穴  
第101号住居跡  
第101号住居跡遺物出土状態  
第102号住居跡
- 図版40 第102号住居跡カマド  
第1号掘立柱建物跡  
第2号掘立柱建物跡  
第3号掘立柱建物跡・第2土壇  
第5号掘立柱建物跡  
第4号掘立柱建物跡  
第4号掘立柱建物跡(P5セクション)  
第6号掘立柱建物跡  
第6号掘立柱建物跡(P7出土遺物)

- 図版41 第7号掘立柱建物跡  
第8号掘立柱建物跡  
第9号掘立柱建物跡  
第9・10号掘立柱建物跡  
第10号掘立柱建物跡  
第11号掘立柱建物跡  
第12・13号掘立柱建物跡  
第14号掘立柱建物跡
- 図版42 第15・16号掘立柱建物跡  
第17号掘立柱建物跡  
第18号掘立柱建物跡  
第19・20号掘立柱建物跡・第38号土壇  
第1号土壇  
第4号土壇出土遺物  
第5号土壇(セクション)  
第7号土壇
- 図版43 第8号土壇遺物出土状態  
第8号土壇遺物出土状態  
第14号土壇  
第15号土壇遺物出土状態  
第15号土壇遺物出土状態  
第16号土壇  
第21号土壇  
第23号土壇
- 図版44 第3号井戸跡  
第3号井戸跡(セクション)  
第4号井戸跡  
第4号井戸跡(セクション)  
第5号井戸跡  
第5号井戸跡遺物出土状態  
第6号井戸跡  
第6号井戸跡(セクション)
- 図版45 第15号井戸跡  
第16号井戸跡  
第2号溝跡  
第2号溝跡(第15号住居跡)  
第3号溝跡遺物出土状態  
第3号溝跡遺物出土状態  
第3号溝跡(セクション)  
第3号溝跡遺物出土状態
- 図版46 第5号溝跡遺物出土状態  
(I-13)グリッド遺物出土状態  
第15号溝跡石製模造品出土状態  
第15号溝跡石製模造品出土状態  
第15号溝跡  
第21号溝跡  
調査区東部溝跡(発掘前)  
第2号墳基
- 図版47 B区水田跡  
B区水田跡・河床跡  
B区北壁断面  
B区溝東側プラン
- 図版47 B区1号溝跡遺物出土状態  
B区1号溝跡遺物出土状態  
B区1号溝跡遺物出土状態  
B区1号溝跡遺物出土状態
- 図版48 第1号住居跡出土遺物2・4・13  
第2号住居跡出土遺物20・23・24・34
- 図版49 第2号住居跡(白玉I-110)  
第2号住居跡(ガラス111~113石製模造品)
- 図版50 第2号住居跡出土遺物2・8・35  
第3号住居跡出土遺物2・4・6  
第4号住居跡出土遺物2・6・10
- 図版51 第4号住居跡出土遺物1  
第5号住居跡出土遺物12・26・27・34・41  
第6号住居跡出土遺物19  
第7号住居跡出土遺物7  
第9号住居跡出土遺物3・17  
第9号住居跡出土遺物20・22  
第12号住居跡出土遺物9・10・14  
第14号住居跡出土遺物4・5・10・11・12・13
- 図版52 第14号住居跡出土遺物21  
第15号住居跡出土遺物1  
第17号住居跡出土遺物4  
第18号住居跡出土遺物1  
第19号住居跡出土遺物  
第20号住居跡出土遺物2・7・10
- 図版53 第21号住居跡出土遺物2・15  
第24号住居跡出土遺物5・6・18・24・25  
第25号住居跡出土遺物1・3・4
- 図版54 第25号住居跡出土遺物13・17・19  
第27号住居跡出土遺物1・2・3  
第29号住居跡出土遺物3・5
- 図版55 第29号住居跡出土遺物9  
第30号住居跡出土遺物4・7・9  
第31号住居跡出土遺物3・5  
第33号住居跡出土遺物1  
第34号住居跡出土遺物2・3
- 図版56 第34号住居跡出土遺物4・8・10・11  
第35号住居跡出土遺物1・2・11
- 図版57 第41号住居跡出土遺物5・6・8・11・12・14  
15・16・17・18・35
- 図版58 第34号住居跡出土遺物28・30・34  
第42号住居跡出土遺物5・8・9・19・20・21
- 図版59 第42号住居跡出土遺物18・21  
第44号住居跡出土遺物5・6・12・16・27  
第45号住居跡出土遺物11・13・14
- 図版60 第45号住居跡出土遺物12  
第46号住居跡出土遺物1・2・5・20・22・23  
28・48
- 図版61 第46号住居跡出土遺物15・39・52  
第47号住居跡出土遺物9・10・11・13  
第48号住居跡出土遺物19・22・25
- 図版62 第48号住居跡出土遺物1・14・17・18・26
- 図版63

- 図版63 第48号住居跡出土遺物27・34・40・41
- 図版64 第48号住居跡出土遺物31・33・36・47・50
- 図版65 第49号住居跡出土遺物2・4・7  
第50号住居跡出土遺物1・9・10・12  
第50号住居跡出土遺物14・16・19・21・28
- 図版66 第50号住居跡出土遺物25・26・29・41・43  
45・46
- 図版67 第51号住居跡出土遺物1  
第57号住居跡出土遺物4・8  
第58号住居跡出土遺物2・3・9・10・11  
12・24
- 図版68 第58号住居跡出土遺物13・14・18・23  
第59号住居跡出土遺物1・3・4・5・6
- 図版69 第59号住居跡出土遺物7・8  
第61号住居跡出土遺物2・3・4  
第62号住居跡出土遺物2・5
- 図版70 第62号住居跡出土遺物1・4・6・7  
第63号住居跡出土遺物1・9  
第64号住居跡出土遺物1・4・5
- 図版71 第64号住居跡出土遺物7・8・11・12・13  
第64号住居跡出土遺物14・18・20・24
- 図版72 第65号住居跡出土遺物1・4・5・6・7  
8・11・12・15・16
- 図版73 第65号住居跡出土遺物9・13  
第66号住居跡出土遺物3  
第67号住居跡出土遺物2・5・6・7・19  
20・21・23
- 図版74 第67号住居跡出土遺物13・14・16・17・30  
第68号住居跡出土遺物1・3・4  
第69号住居跡出土遺物3・4・8
- 図版75 第69号住居跡出土遺物6・7・11・29・32  
第70号住居跡出土遺物1・4・13
- 図版76 第73号住居跡出土遺物2~7  
第74号住居跡出土遺物1・2・4・6・8・9
- 図版77 第74号住居跡出土遺物13  
第75号住居跡出土遺物8  
第76号住居跡出土遺物1・8・10・11  
第77号住居跡出土遺物7
- 図版78 第78号住居跡出土遺物2~7・8~11  
14・15
- 図版79 第78号住居跡出土遺物1・18  
第79号住居跡出土遺物3  
第80号住居跡出土遺物5  
第81号住居跡出土遺物1・3・9・17  
第82号住居跡出土遺物1・3・4
- 図版80 第82号住居跡出土遺物7・9・11・12・16・27  
30・31  
第85号住居跡出土遺物5
- 図版81 第86号住居跡出土遺物3・4・6  
第87号住居跡出土遺物4・5  
第88号住居跡出土遺物6・7・9・11・12
- 図版82 第88号住居跡出土遺物20・25・29・31・36
- 図版82 第89号住居跡出土遺物1  
第90号住居跡出土遺物3
- 図版83 第92号住居跡出土遺物3・5・6・10・12  
16・18  
第93号住居跡出土遺物
- 図版84 第93号住居跡出土遺物2・3・4・15  
第94号住居跡出土遺物2・3  
第95号住居跡出土遺物10・13・15・41
- 図版85 第95号住居跡出土遺物33・34・38・40  
第96号住居跡出土遺物1・3
- 図版86 第99号住居跡出土遺物3・4・6・8・12  
13・25  
第100号住居跡出土遺物26  
第101号住居跡出土遺物9  
第102号住居跡出土遺物5・6
- 図版87 第5号住居跡石製勾玉(44)  
第26号住居跡砥石(7)  
第35号住居跡刀子(16)  
第39号住居跡勾玉(6)  
第44号住居跡紡錘車(29)  
第47号住居跡紡錘車(15)  
第67号住居跡石鏝  
第69号住居跡砥石  
第75号住居跡土製丸玉(9)  
第80号住居跡土製勾玉  
第81号住居跡管玉(18)  
第95号住居跡砥石  
第9号住居跡砥石  
第5号溝跡土鏝  
第15号溝跡石製模造品
- 図版88 第49号溝跡刀子  
第101号住居跡鉄製鏝  
第2号溝跡刀子  
第9号溝跡刀子  
グリッド出土硯
- 図版89 第15号土鏝跡  
第16号土鏝跡  
第27号土鏝跡  
第2号井戸跡  
第3号井戸跡  
第4号井戸跡  
第5号井戸跡  
第3号溝跡  
第3号溝跡  
グリッド出土遺物  
桑原B遺跡
- 図版90

# I 発掘に至るまでの経過

## 1 発掘調査に至る経過

首都圏における人口増加の波は著しく、全国の三分の一の人口が集中している。埼玉県ではそれに対応するため、住宅・都市整備公団等を中心に住宅対策及び地域環境整備計画が進められている。

坂戸市入西（西部）地区については、住宅・都市整備公団より区画整理方式による住宅開発事業が計画された。

住宅・都市整備公団では文化庁との間で取り交わされた「住宅・都市整備公団の事業施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取り扱いに関する覚書」に基づき、埼玉県教育委員会へ「坂戸市入西（西部）地区における埋蔵文化財の取り扱いについて」照会した。

県教育委員会では、埋蔵文化財遺跡地名表に基づき、昭和56年1月20日付け教文第918号をもって次の通り回答した。

### 記

#### 1. 文化財の所在

名 称	所 在 地	種 別	時 期
坂戸市No99	坂戸市大字旭込	古 墳	古墳時代後期
杉塚古墳	宇 桑 原		

上記の他に桑里遺構及び畑地部分に集落遺跡の所在が予想される。

#### 2. 取り扱いについて

- (1) 開発予定地内は事前の遺跡分布調査及び必要に応じて試掘調査を実施して、遺跡の所在を確認する必要がある。
- (2) 上記の結果を基に埋蔵文化財ができるだけ現状保存できる開発計画を策定することが望ましい。
- (3) 計画上、やむを得ず現状変更する場合は、文化財保護法第57条の3の規定により、事前に文化庁長官あて埋蔵文化財発掘通知を提出して、記録保存のための発掘調査を実施すること。
- (4) 発掘調査を実施する場合は、事前に坂戸市教育委員会及び県文化財保護課と協議すること。

住宅・都市整備公団と県教育委員会では開発予定地内に所在する遺跡の取り扱いについて協議を重ねた結果、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団に委託して昭和59年度から発掘調査を実施することに決定した。

文化財保護法に基づき、住宅・都市整備公団からは埋蔵文化財発掘通知、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団からは埋蔵文化財発掘調査届が文化庁長官へ提出され、桑原遺跡の発掘調査は、昭和63年4月1日～平成元年3月31日まで実施された。

## 2 発掘調査・報告書刊行事業の組織

### a 発掘調査（昭和59年～同61年度）

理 事 長 長 井 五 郎  
 副 理 事 長(昭和 59年度)岩 上 進  
 (同60-61年度)岩 田 明  
 常 務 理 事(昭和 59年度)石 川 正 美  
 管 理 部 長(昭和 59年度)小 宮 秀 男  
 常 務 理 事 兼  
 管 理 部 長(同60-61年度)町 田 勝 義

#### 庶務経理

主 任 関 野 栄 一  
 主 事 江 田 和 美  
 主 事 岡 野 美 智 子  
 主 事 福 田 浩  
 主 事 本 庄 朗 人

#### 発掘

調査研究部長 中 島 利 治  
 副部長兼調査  
 研究第五課長 小 川 良 祐  
 調査研究第三  
 課 長(昭和 59年度)水 村 孝 行  
 調査研究第二  
 課 長(同60-61年度)胸 宮 史 朗  
 調 査 員 昼 間 孝 志  
 調 査 員 木 戸 春 夫  
 調 査 員 赤 熊 浩 一

### b 発掘調査（昭和62年度）

理 事 長 長 井 五 郎  
 副 理 事 長 百 瀬 陽 二  
 常 務 理 事 兼  
 調査研究部長 早 川 智 明  
 理 事 兼  
 管 理 部 長 原 田 家 次

#### 庶務経理

主 査 関 野 栄 一  
 主 事 江 田 和 美  
 主 事 岡 野 美 智 子  
 主 事 福 田 浩  
 主 事 本 庄 朗 人

#### 発掘

調査研究部  
 副 部 長 塩 野 博  
 調査研究部  
 第 二 課 長 昼 間 孝 次  
 調 査 員 昼 間 孝 志

#### 協力者

坂戸市教育委員会 地元区長および地元住民各位

### c 発掘調査（昭和63年度）

理 事 長 長 井 五 郎  
 副 理 事 長 百 瀬 陽 二  
 常 務 理 事 兼  
 調査研究部長 早 川 智 明  
 理 事 兼  
 管 理 部 長 原 田 家 次

#### 庶務経理

管理課長 関 野 栄 一  
 主 事 江 田 和 美  
 主 事 岡 野 美 智 子  
 主 事 本 庄 朗 人  
 主 事 斉 藤 勝 秀

発 掘

調 査 研 究

副 部 長	塩 野 博
調 査 研 究 第 2	
課 長	昼 間 孝 次
主 任 調 査 員	村 田 健 二
主 任 調 査 員	杉 崎 茂 樹
調 査 員	赤 熊 浩 一
調 査 員	大 谷 徹

協 力 者

坂戸市教育委員会 地元区長および地元住民各

d 報告書作成事業 (平成2年度)

理 事 長	荒 井 修 二
副 理 事 長	早 川 智 明
常 務 理 事 兼	
管 理 部 長	古 市 芳 之
庶 務 経 理	
庶 務 課 長	高 田 弘 義
主 査	松 本 晋
主 事	長 滝 美 智 子
経 理 課 長	関 野 栄 一
主 任	江 田 和 美
主 事	本 庄 朗 人
主 事	斉 藤 勝 秀
主 事	菊 地 久

整 理 事 業

資 料 部 長	栗 原 文 藏
資 料 部 副 部 長 兼	
資 料 整 理 第 一 課 長	増 田 逸 朗
主 査	村 田 健 二

e 報告書作成事業 (平成3年度)

理 事 長	荒 井 修 二
副 理 事 長	早 川 智 明
常 務 理 事 兼	
管 理 部 長	倉 持 悦 夫
庶 務 経 理	
庶 務 課 長	高 田 弘 義
主 査	松 本 晋
主 事	長 滝 美 智 子
経 理 課 長	関 野 栄 一
主 任	江 田 和 美
主 事	福 田 昭 美
主 事	腰 塚 雄 二
主 事	菊 池 久
整 理 事 業	
資 料 部 長	中 島 利 治
資 料 部 副 部 長 兼	
資 料 整 理 第 一 課 長	増 田 逸 朗
主 査	村 田 健 二



### 3 発掘調査・整理作業の経過

発掘調査は、桑原B遺跡を昭和62年11月2日から同年12月25日までの凡そ2ヶ月、桑原A遺跡は昭和63年4月1日から平成元年3月31日の1ヶ年を調査期日として実施した。整理・報告書作成作業は埋蔵文化財センター・大甲整理事務所にて平成2・3年度に実施した。発掘調査・整理作業・報告書作成の工程は以下の通りである。

昭和62年11月桑原B遺跡の調査開始。昭和59・60年度に実施したプラント・オパールの調査の結果、イネ科の種子が数ヶ所の試掘グリットで検出された。その内、比較的状態の良い桑原A遺跡の北側低地部（桑原B遺跡）2,000㎡について実施した。重機による表土除去後、遺構確認調査を行ない、桑里遺構の存否を確認する。その結果、古墳時代後期の水田跡を検出したが、桑里に関連する遺構の検出はなく、予定した調査回数を終了する。

昭和63年4月桑原A遺跡の調査開始。重機による表土除去後、遺構確認調査を行なう。その結果、調査対象区全域に多数の河床跡が東西に走っており、遺構確認面の多くは河川の氾濫によりもたらされた砂礫により覆われていた。また、中央に浅い谷部が確認されその東西に遺構が検出された。西側には住居跡が南北にそれぞれ集中する個所が確認され、東側には方形周溝墓（2基）が検出された。調査は北部の住居跡群（凡そ60軒）から実施し、遺構の分布密度の濃い中央を避け北辺から開始する。中央の谷部は試掘溝を設けた後、重機により畑土を除去する。北部の住居跡群は9月末にはほぼ終了する。

10月から、漸次南部の集中個所に調査の主力を移すと共に、東側の方形周溝墓（2基）についても周溝の掘削等を開始する。住居内から炭化材の出土が頻繁となり、調査の進行が鈍化する。10月末の段階で方形周溝墓の調査を全て完了する。

昭和64年1月段階で、南部の住居跡群の調査をほぼ終了し、調査途中の井戸跡、溝跡、掘立柱建物跡の調査に入る。

3月中旬、遺構の調査はほぼ完了、航空写真撮影の準備にかかる。3月末全ての調査を終了。

「整理・報告書作成作業」

平成2年4月桑原遺跡の整理作業開始。遺物の水洗、注記、接合作業、第二原因の作成、H誌の整理作業を行なう。水洗、注記作業、第二原因の作成は6月末段階で終了。7月末に接合、石膏による部分的な補修作業を終了する。

8月遺物実測、遺構のトレースに着手。

10月遺物のデータベースの作成に着手。図化した2,000点のデータを記入。

平成3年1月遺物実測終了。遺構トレース、遺物のデータベースの入力を3月末完了。

平成3年4月遺物トレース開始。遺物データをテキストファイルに変換、遺物観察表の作成を行なう。6月末段階で完了。

7月割付け作業、写真図版用の遺物石膏復元開始。9月遺物写真撮影。

10月本文割付け作業終了。

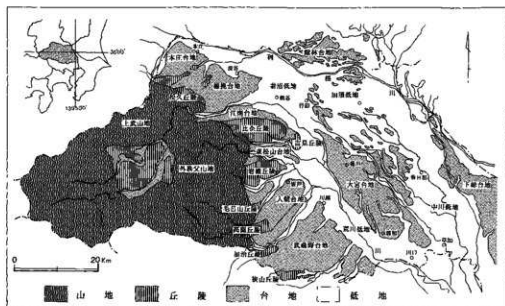
12月写真図版の割付けが終了し、報告書作成に関連する作業が完了する。

## II 地理的環境と周辺遺跡

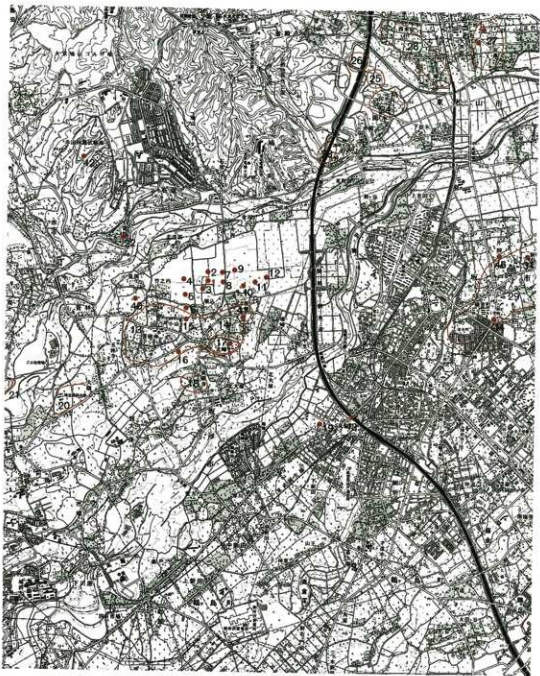
### 1 地理的環境

桑原遺跡は、東武東上線北坂戸駅の西3kmに位置する。行政的には、A区が坂戸市大字船込字桑原236他に、B区は同桑原214他に所在する。遺跡は越辺川と高麗川に挟まれた毛呂台地の北東部に当たり、標高28～30mの平坦な低台地（沖積台地）である。調査前の景観は、その大半が水田、畑地として利用されており、一部は葎の生い茂る部分も残されていた。

地形的には外秩父また山地から派生する毛呂丘陵、高麗丘陵が枝状に東に張り出し、その周囲には入間台地の一支台、毛呂台地、坂戸台地が越辺川、高麗川、葛川の開拆により前者は複雑な地形を、後者は平坦で穏やかな低台地を形成しており、対照的な在り方を示す。毛呂台地は毛呂山町東部から坂戸市西部、城山周辺の標高150mをピークに北東方向にのび、東に向かって急激に高さを減じて毛呂台地に移行する。台地内は葛川・越辺川・高麗川の支流が縦横に流れ、小河川のひとつが坂戸市東和田付近で越辺川に合流する。毛呂台地の東側は広大な沖積地の広がりを見せる。広瀬遺跡（報文Ⅱ）で触れた通り、堀込（稲荷前遺跡）周辺を基点に低台地が、北東方向に向かって堀込字南耕周辺（中耕遺跡）までの沖積地内にも定められる。それらは丁度、現行の地形図内の水田の駐畔の進みとして認識できる（第3図）。桑原A区の集落跡はその乱れの中に、そして桑原B区の水田跡は整った畦畔の中に求められる。



第1図 桑原遺跡の位置



- |             |           |            |            |           |
|-------------|-----------|------------|------------|-----------|
| 1 桑原 A 遺跡   | 2 桑原 B 遺跡 | 3 田島遺跡     | 4 欄田遺跡     | 5 稲荷前遺跡   |
| 8 広面 A 遺跡   | 9 中將遺跡    | 10 金井 A 遺跡 | 11 金井 B 遺跡 | 12 足洗遺跡   |
| 15 坂の越 1 号墳 | 16 大河原古墳群 | 17 北峰古墳群   | 18 成願寺古墳群  | 19 土屋神社古墳 |
| 22 重郎横穴     | 23 駒廻遺跡   | 24 田木山遺跡   | 25 桜山古墳群   | 26 舞台遺跡   |
| 28 高坂古墳群    | 29 新町古墳群  | 30 勝呂神社古墳  | 31 胸山古墳    | 32 塚越古墳群  |
| 35 牛塚山 1 号墳 | 36 紺屋古墳群  | 37 中小坂古墳群  | 38 上広谷古墳群  | 39 鶴ヶ丘古墳群 |
| 42 鳩山窯跡群    | 43 花影遺跡   | 44 相模場遺跡   | 45 柘遺跡     | 46 勇福寺遺跡  |
| 49 清進場遺跡    | 50 宮町遺跡   | 51 附島遺跡    | 52 木曾免遺跡   | 53 高窪遺跡   |

第 2 図 周辺の遺跡

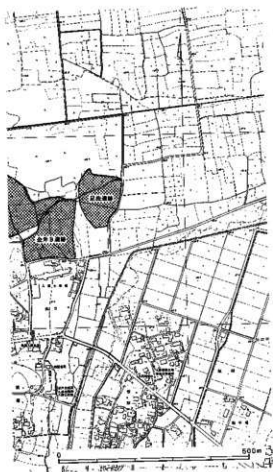


- |                   |           |
|-------------------|-----------|
| 6 塚の越遺跡           | 7 広面B遺跡   |
| 13 苔林古墳群          | 14 入西古墳群  |
| 20 川角古墳群          | 21 西戸古墳群  |
| 27 代正寺・大西遺跡 (古墳群) |           |
| 33 雷電塚古墳          | 34 牛塚山古墳群 |
| 40 長岡遺跡           | 41 北峰西浦遺跡 |
| 47 下石井遺跡          | 48 若葉台遺跡  |
| 54 上谷遺跡           | 55 薮ヶ岡遺跡  |

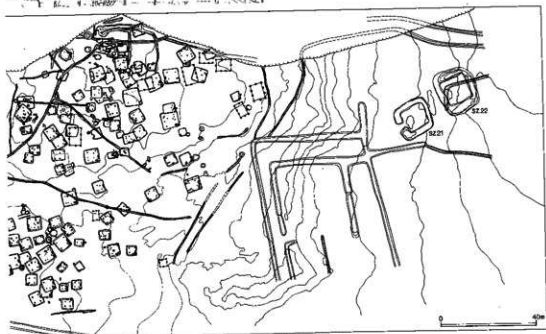
## 2 周辺遺跡の概要

桑原遺跡では、古墳時代初頭の方形周溝墓と古墳時代後期を中心とした集落が調査された。概ね4世紀と6世紀の墓跡と集落に要約できる。ここでは、その年代に沿って、坂戸市域を中心に周辺遺跡の概要を記すこととし、合わせて入西遺跡群の概要についても触れておく。まず、弥生時代全般を通してみると、沖積地との比高差の大きな台地縁辺に集中する傾向にあるが、一方では入西遺跡群の中耕遺跡にみられるように沖積低地に進出する例や沖積地との比高差をもたない例などが報告され、当該期の占地形態の一端が漸次明らかとなりつつある。坂戸市域に於ける弥生時代の黎明は中期後半以降に求められる。坂戸台地の北東端上、島状の孤立した台地上に位置する附島遺跡では南関東系の宮ノ台期の住居跡と方形周溝墓が検出され、同じく中期後半で坂戸台地縁辺に位置する塚越渡戸遺跡では、北関東系の甕、高坏の他、石斧が出土している。木曾免遺跡では、集落に伴う環濠が検出された。小沼堀之内遺跡では、土壁内に2個の甕を打ち欠き、合せ口状に据え置き、更に小型の甕で閉塞した甕棺墓が出土している。高麗川を臨む台地上には、方形周溝墓8基を検出した花影遺跡があり、全て四隅の切れるタイプで、しかも吉ヶ谷式期の古相を示す資料が出土している。周囲から当該期の集落は検出されていない。後期の遺跡は、吉ヶ谷式土器を出土する鶴ヶ丘遺跡があり、飯盛川に面した小規模な集落が調査されている。柘遺跡は坂戸台地の北斜面に位置し、四隅の切れる方形周溝墓4基、壺棺墓1基が調査され、中部高地形擔掛紋を有する土器の出土が報告されている。同様に、勇福寺遺跡でも2軒、吉ヶ谷式土器を出土した石井前原遺跡で1軒の住居跡が調査されているが何れも後半乃至は終末に位置し、集落としての規模は小さい。





眼を転じて越辺川左岸に注目すると、高坂台地東端に代正寺・大西遺跡が存在する。バイパスの建設に伴う調査で、路線幅ではあるが中期後半～後期前葉の方形周溝墓15基、後期後半～古墳時代初頭の住居跡46軒が調査された。当該期の高坂台地に於ける拠点的な集落遺跡であることが明らかとなった。なお、前者からは南関東系の久ヶ原式土器が、後者からは吉ヶ谷式土器が出土している。古墳時代前半の遺跡は、まず長岡遺跡が挙げられる。弥生時代同様遺跡の規模が小さく、継続しないケースが多い中において、越辺川右岸の人西沖積低地を東に臨み坂戸台地北辺に位置する本遺跡は、大型のしかも安定した集落内容と考えられる。隣接する人西遺跡群に形成された方形周溝墓群をその墓域に当てることも可能であり、遺跡群の最も西に位置する輪荷前遺跡が有力な候補となる。この他、坂戸台地上には5世紀前半まで継続する高窪遺跡、弥生時代後期から続く木曾免遺跡、石井前原遺跡、勇福寺遺跡など4～5世紀代に営まれた小規模な集落が知られている。勇福寺



第5図 桑原A遺跡全体図(1)

遺跡では住居跡の他、方形周溝墓5基が検出されており、内1基は一辺18mを測る。古墳時代後期に入ると遺跡数は飛躍的に増大し、入西遺跡群の桑原A遺跡、金井A遺跡にみられるように比較的規模の大きな集落が沖積微高地へ進出し、生産基盤が大きく変化したことを物語っている。また、当該地域に於ける古墳構築の萌芽期を漸く迎えることになり、現状では遅くとも6世紀初頭には出現しているものと考えられる。越辺川中流域の毛呂台地、坂戸台地には若林古墳群、新町古墳群と総称される大規模な二つの古墳群が存在する他、台地縁辺を中心に小規模な古墳群が多数存在する。多くは既に燬滅もしくはその墓目に晒されているが、現状の分布状況からその概要について触れておきたい。入西遺跡群の南に連なる毛呂台地上には、前方後円墳5基、円墳47基を擁する若林古墳群（坂戸市域＝原原古墳群、毛呂山町域＝大類古墳群）が存在する。東西190m、南北180mの狭い範囲に、全長25～45mの前方後円墳5基が近接して築造され、南に群集する円墳群とは明らかにその分布域を異にしている。正式の調査を経っていないが概ね6世紀後半から7世紀代に相次いで構築されたものと考えられるが、この時期に前方後円墳が近接集中する事例は余りなく特異な在り方とされている。若林古墳群の東側、越辺川の支流の葛川流域には小規模な古墳群が点在する。善能寺、大河原、三福寺、北峰、成願寺等の古墳群がそれで、「入西古墳群」と総称されている。これらは若林古墳群が墓域を東に拡大した結果とみる解釈が有力であり、本来は一体の古墳群であったと思われる。構成は前方後円墳7基、円墳52基である。調査は個人住宅建設関係により実施され、古墳群の性格も比較的明確である点、若林古墳群とは対照的である。中でも、昭和31年に消滅した入西塚古墳（旧坂戸105号墳）からは彷彿鏡2面、挂甲一式、鉄針1、鉄槍1、直刀1、鉄鏃30の出土が知られており、本来は30～40m級の前方後円墳であったことが指摘されている。出土遺物から6世紀初頭の年代が与えられている。この他、7世紀前半と考えられる旧毛呂山1109号墳は石室に速く利根川水系産の角閃石安山岩が使用されている。開発地で調査された塚の越1号墳もこの古墳群を構成する内の一つである。前方部だけの調査であるが、円筒埴輪、人物埴輪が出土しており6世紀後半の古い段階に位置付けられている。若林古墳群の両方には越辺川左岸に川角古墳群、右岸に西戸古墳群が分布する。川角古墳群は前方後円墳5基、円墳91基で構成される。西戸古墳群は前方後円墳を欠く円墳14基の構成で、扇張り型横穴式石室を採用する古墳が多く、調査された9号墳の被葬者は小用庵寺造営に深い関わりをもった人物の墓として捉えられている。築造年代は概ね7世紀代と考えられている。高麗川の形成した沖積地を築む石上神社古墳は直径50m、高さ10m程の円墳状を呈するが、本来は前方後円墳であったとされる。尚、周囲には既に燬滅した大型墳の存在が伝承されている。高麗川右岸の浅羽には、直径50m、高さ4.5mの大型円墳である土屋神社古墳が存在する。石室構造から7世紀前半の築造と推定され、前方後円墳消滅後の有力首長墓として位置付けられている。坂戸台地北東部、越辺川右岸の河岸段丘上には広範囲に古墳群の分布が認められ、総称して新町古墳群としている。その盟主的な古墳は、全長63mを測る入開地方最大の前方後円墳、胴山古墳である。埴輪の存在は確認されているが、埋葬施設は不明である。同様のことは東方2kmに所在する雷電塚古墳（全長52mの前方後円墳）についてもいえる。坂戸台地に於ける最大級の古墳（50m級）2基が比較的距離に、しかも6世紀の中葉から後葉にかけて構築されている。また、新町古墳群に含まれる勝戸古墳群（円墳47基）の主墳勝呂神社古墳は全長50m

を上回る規模を有しており、勝呂庵寺造営との関連が注目される。勝呂古墳群の東方には塚越古墳群が谷を挟んで対峙する。現状は前方後円墳1基、円墳11基が残されている。同一台地上には船屋古墳群（円墳3基現存）、更に南には中小坂古墳群（円墳6基現存）など小規模な古墳群が散在する。小畔川の左岸段丘上には下小坂古墳群が所在する。現状では、前方後円墳1基、帆立貝式前方後円墳1基、円墳22基から構成され、発掘調査により1号墳は木炭部を採用し、円筒埴輪が検出され、3号墳には粘土部を埋葬施設に採用、内部から多珠文鏡1面、馬具の出土が報告されており、4号墳からは銅製金張りの銅の他、人物埴輪の樹立が確認されている。遺物から、1、3号墳は6世紀前半、4号墳は6世紀後半の年代が与えられている。この他、小河川に解析された台地上には上広谷古墳群、脚折古墳群、鶴ヶ丘古墳群など小規模な古墳群の存在が知られている。この内、鶴ヶ丘古墳群は、7世紀後半の終末期段階に位置する方墳で、石室下に飯茶をもつ築造方法がとられている。

該期の集落は、坂戸台地北東域の中小坂遺跡群として包括されている中には、上谷遺跡、前林遺跡、金山遺跡、西谷ツ廬跡など5世紀から奈良・平安時代まで連続する比較的安定した集落及び6世紀後半の須志窯が存在する。中でも上谷遺跡は6世紀前半を中心に77軒の住居跡が調査されている。所謂「比企型坪」との関連でも注目される。また、広大な沖積低地を挟んで越辺川を北に臨む勝呂遺跡は、昭和54年勝呂庵寺確認の際調査され、6世紀前半～7世紀前半の住居跡28軒が調査された。近接する勝呂神社古墳は全長50mを越す円墳であるが、集落とはほぼ同時期に構築されたと考えられている。集落が途切れる7世紀後半には勝呂庵寺が造営される。人西耕地を臨む坂戸台地の縁辺には、花見塚遺跡、長岡遺跡など規模が比較的大きく継続性のある集落が散見される。

奈良・平安時代の遺跡は分布域も広がり密度も増すが、規模の点では二階川に面する清進場遺跡、若葉台遺跡が他を圧倒する内容をもつ。若葉台遺跡は、未だ根強く「人聞部衛」説が支持されている遺跡であるが、「王」の焼印をもつ木皿、奈良三彩の小壺、帯金具、銅鈴などの遺物から「富める村」のイメージが強く印象付けられる。清進場遺跡からは鉄製の「おもり」が、清進場遺跡に内包される宮町遺跡では8世紀中葉の住居跡から石製の鍬と鉄製金具3点が出土した他、「路家」の墨書が検出されており交通の要所としての位置付けが可能とされている。

#### 【参考文献】

- 埼玉県 1987 「荒川人文Ⅰ」 荒川総合調査報告書2  
坂戸市教育委員会 1987 「古代のさかど」坂戸市遺跡発掘調査概報  
坂戸市教育委員会 1988 「坂戸市遺跡群発掘調査報告書第1集」  
坂戸市教育委員会 1989 「坂戸市遺跡群発掘調査報告書第2集」  
大谷 徹他 1989 「東国における後・終末期古墳の基礎的研究」（1）「研究紀要」第5号埼玉県  
埋蔵文化財調査事業団  
坂戸市教育委員会 1990 「坂戸市遺跡群発掘調査報告書第3集」  
大谷 徹 1991 「宮町遺跡Ⅰ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第96集



#### 一 開発地内の遺跡概観 一

開発面積119万㎡の内、遺跡として確認されたのは12遺跡延べ39万㎡である。占地の違いから遺跡の立地する環境は大きく異なる。つまり、開発地の南西部、毛呂台地の北側斜面に位置する塚の越遺跡は標高35m、沖積地との比高差6mを測る。同様に南東部に位置する金井B遺跡、足洗遺跡も坂戸台地上に位置する。これに対し、他の8遺跡は埋没ローンを主体とする標高27～30mの沖積微高地に占地しており、高麗川、越辺川による冠水の影響が認められる。

【中群遺跡】沖積微高地に位置し、調査面積は35,000㎡である。方形周溝墓6基（弥生時代終末期～古墳時代初期）、住居跡86軒（縄文早期～中期10軒、弥生時代終末期～古墳時代初期の集落76軒）が調査されている。方形周溝墓は、方台部の一辺が10mを越える大型のものから一辺4mに満たないものまで規模に大きな幅をもつ。大型の周溝墓の内3基に1m程の盛土が遺存する。平面形は周溝が全周するもの、四隅の切れるもの、一辺の中央が切れるもの、隅の一角が切れるものがある。

周溝墓は、集落が廃絶されて間もなく構築された。出土遺物は周溝から東海系、古く谷系などを含む底部穿孔の甕、壺、埴、器台、高坏などの土器類の他、一木造り二又鋸などの木製品が、住居跡は方形プランが一般的で、中央に炉跡を設ける。大半が火災にあっていない。遺物は日常の煮沸具、供膳具の他異形土器の出土も多数認められる。（平成1・2年度調査 平成4年度報告）

【足洗遺跡】狭小な島状の台地に占地。7世紀後半から9世紀を中心とする集落遺跡で北側に開口部をもつ馬蹄形を呈する。検出した遺構は住居跡40軒、掘立柱建物跡29棟、井戸跡18井、土壇193基で、内縄文時代後期の住居跡1軒が含まれる。住居跡は台地中央部に集中して多くの新旧関係をもち、掘立柱建物跡は南西と北東に集中するが、主軸方位は群間で異なる。（平成元年度調査）

【金井B遺跡】毛呂台地の北東端に位置し、標高31m、沖積地との比高差は3mを測る。検出された遺構は、金井遺跡同様7世紀～9世紀にかけての住居跡31軒、掘立柱建物跡14棟の他、13～14世紀の鋳造関連遺構（熔解炉15基、鋳造遺構9基、掘立柱建物跡9棟、井戸跡17井、粘土採掘坑2ヶ所、土壇272基、溝跡45条）の他、集石土壇2基、墓塚7基が調査された。特に、中世の鋳造遺構の検出は当該期の鋳物師集団の生産活動の実態を知る資料として、関東地方では初めての調査例である。遺物は台地上面と、二段にわたって形成された平場から鋳造関連遺構を中心におびただしい鉄滓、銅滓が認められ、鍛冶炉から鉄の梃形滓、鍛造削片、熔解が周囲の土壌から梵鐘の鋳型片（龍頭、乳、笠形、帯、駒の爪、捺押）が多量に出土した他、鋳の鋳型、唐草紋様をもつ壺状の鋳型など豊富な種類が確認された。（平成元年度調査）

【金井遺跡】毛呂台地北東端の斜面の一部と沖積微高地に位置し、標高27mを測る。調査区は東西方向に2本の小支谷が入り島状の景観をなしている。検出された遺構は住居跡73軒（古墳時代後期44軒、奈良時代13軒、平安時代16軒）、土壇700基（古墳時代後期～中世）、井戸跡16井（古墳時代後期～平安時代）、溝跡50条、掘立柱建物跡9棟、ビット多数が調査された。集落は古墳時代が北側の谷を挟んで東西に、奈良時代には北と南の谷の間に、平安時代は西側にそれぞれ時代毎に変遷がみられる。また、土壇のなかには鋳造関係に使用されたと考えられるものが含まれており、鉄鍋の鋳型片多数が検出されている。これらは、東側に隣接する金井B遺跡同様、中世鋳物師集団の

生産跡と考えられ、調査区外の部分を含めた関連領域はかなり大規模なものとなることが想定できる。(昭和60年度調査事業団報告第86集)

〔広面D遺跡〕沖積微高地に位置し、東西60m、南北90m程の沖積微高地に位置する。遺跡は方形周溝墓20基が主たる遺構で生活した痕跡を残さない純粋な墓域としての領域である。小規模な谷地を挟んで北東には中耕遺跡、南西には桑原A遺跡に方形周溝墓群が直線的に連なり4世紀代の一大墓域群を形成している。墓域の中央に位置する通称柵塚(SZ09)は、溝を含めた規模が東西52m×42mにもおよび、当該地域の発生期古墳と比較しても遜色のない規模といえる。また、2m程の盛り土が遺存し、南東及び北東に長さ3m程の張り出し部が確認されたことに加え、南西には斜めに掘り残した陸橋を設けるなど方形周溝墓としては珍例に属する。柵塚の周囲を取り巻く周溝墓は溝の形態により、四隅を残すタイプ、一周するタイプ、方台部中央が切れるタイプ、隅の一部が切れるタイプなど多彩である。出土遺物は壺、小型点、埴、器台、台付甕など全て土器で、甕類を除く器種には赤彩を施す例が多い。(昭和62・63年度調査事業団報告第89集)

〔広面A遺跡〕広面B遺跡の南に位置する東西30m、南北40m程の標高28mの沖積微高地である。当初、塚群の存在を想定した領域であるが、検出された遺構は溝跡2条、土塚14基、井戸跡で所産時期は出土した土鍋、カワラケ、陶磁器類から概ね中世と考えられる。(事業団報告第89集参照)

〔桑原A遺跡〕住居跡102軒(古墳時代後期～平安時代)、掘立柱建物跡21棟(奈良・平安時代～中世)、井戸跡20井、溝跡23条を中心に集落が構成されている。集落構成に関する溝の役割は各時代を通じて大きい。(詳細は第三章 桑原A遺跡を参照)

〔桑原B遺跡〕桑原A遺跡の北に広がる沖積地。プラント・オパール調査の成果を基に、水田跡の確認調査を実施した。その結果、大野の一部を検出したが、自然流路からの引き込み溝、或いは畦畔の単位・形状を明確にするには至っていない。周囲から7世紀の須恵器(埴、壺)が出土している。調査面積は2,000㎡。(詳細は第四章 桑原B遺跡を参照)

〔田島遺跡〕毛呂台地の北東に連なる低台地(標高29m)に位置し、西に稲荷前遺跡、北東に棚田遺跡、北には桑原遺跡が隣接する。検出された遺構は、古墳時代後期の住居跡6軒、掘立柱建物7棟、土塚7基、溝跡9条、井戸跡9井、ビッド89基である。掘立柱建物跡は掘り型が小規模であることから中世以降の所産と考えられる。調査区の北を東西に貫する第1号溝跡からは6世紀前半の土器が多量に検出された。本来、第1号溝跡は6世紀前半に形成された桑原遺跡の南限を意図した溝である。集落については、稲荷前遺跡に帰属する内容と思われる。(昭和61～63年度調査)

〔棚田遺跡〕毛呂台地の北に広がる沖積微高地に位置し、標高28.5mを測る。検出された遺構は、住居跡28軒(6世紀前半)、溝跡2条、畦状遺構1ヶ所、歴史時代の井戸跡5井、土塚7基である。住居跡は3～6軒を一単位のまとまりとして6ヶ所程が確認された。出土土器から桑原遺跡に若干先行する段階と考えられ、当該地域におけるカマド導入後間もない時期に位置付けられる。南限を画する溝は東に向い、桑原遺跡(24号溝跡)、田島遺跡(1号溝跡)を経由して更に東方に延びる。時期は田島遺跡の一括資料から6世紀前半と考えられる。(昭和63年度調査)

〔稲荷前遺跡〕毛呂台地の北側に広がる沖積微高地に位置し、東に田島遺跡、北東に桑原遺跡、

北に田島遺跡、南に塚の越遺跡がそれぞれ隣接している。調査区は東西に走る谷地により南北に分割され、更に北側は北から入る谷地により東西に分割されることから3ヶ所の調査区となり、南から時計回りにA・B・Cと呼称している。検出された遺構は、人遺跡群中最も遺構の分布密度が高いA地区からは奈良・平安時代の住居跡136軒、土壇295基、井戸跡47井、溝跡39条、掘立柱建物跡31棟、特殊遺構6基が調査され、B地区からは古墳時代前期の方形周溝墓17基、古墳時代前期～奈良・平安時代の住居跡85軒、土壇62基、井戸跡14井、溝跡9条、掘立柱建物跡6棟、特殊遺構1基が、C地区からは古墳時代前期の方形周溝墓19基、古墳時代前期～奈良・平安時代の住居跡94軒、土壇137基、井戸跡30井、溝跡30条、掘立柱建物跡11棟、特殊遺構4基が調査されている。特に、方形周溝墓は北線に東西に分布しており、桑原A遺跡、広面B遺跡、中耕遺跡に至る一大墓域群を形成している。8・9世紀の遺構からは地山窯跡産の須恵器が多量に出土し、円面硯、獸脚付短頸壺、鉄鉢形鉢などの特異な器種がみられる他、「内」の印刻をもつ資料、意味不明の墨書「□尺木」、「大里郡」「多摩郡男用」等律令期の武蔵の因に実在した郡名が複数読み取れる8世紀中頃の墨書土器が出土している。(昭和61～63年度調査 A地区に関しては事業団報告 第120集)

〔塚ノ越遺跡〕毛呂台地の北東部に位置し、標高35m、沖積地との比高差は5～8mを測る。検出された遺構は、住居跡82軒(縄文時代中期2軒、弥生時代中期2軒、6世紀末～8世紀代78軒)、前方後円墳1基(6世紀 前方部調査)、掘立柱建物跡9棟(奈良・平安時代)、土壇274基(中世)、井戸跡247井(奈良時代～中世)、溝跡78条(奈良時代～中世)、火葬跡1基である。住居跡は4.5m×5.0m前後の比較的小型のものが多く、古墳時代後期のものには屋外への排水溝をもつ住居跡が存在する。掘立柱建物跡の中には1m余りの掘り型をもつ3棟が含まれ、総じて3間×2間の母屋を基本とする。廂持ちの建物も2棟検出された。溝跡は区画性が高く、井戸跡及び検出されていない建物群との組み合わせが想定される。前方部のみ調査された前方後円墳の周溝からは、ほぼその全容を知られる正装男子人物埴輪、盾持人物埴輪の他、女子人物埴輪、馬形埴輪の較橋部分、そして12個体分の円筒埴輪が出土している。中世関係の遺物には火葬墓から青銅製5針片が、青銅製神像が遺構外から出土している。(昭和61年度調査 事業団報告 第101集)

#### 参考文献

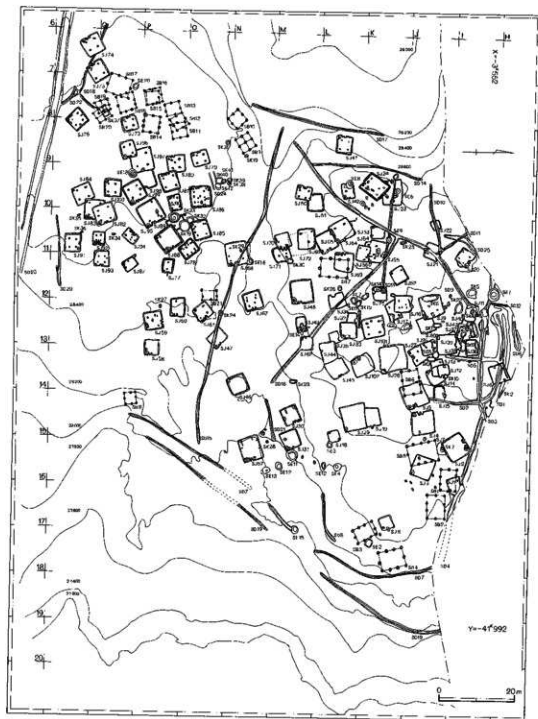
- 村岡孝志 1989 「金井遺跡」(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 第86集  
 村田健二 1990 「広面B遺跡」(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 第89集  
 村岡孝志 1991 「塚ノ越遺跡」(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 第101集  
 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1985 「年報5」 昭和59年度  
 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1986 「年報6」 昭和60年度  
 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1987 「年報7」 昭和61年度  
 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1988 「年報8」 昭和62年度  
 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1989 「年報9」 昭和63年度  
 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1990 「年報10」 平成元年度

### Ⅲ 桑原A遺跡

#### 1 遺跡の概要

検出された遺構は、住居跡102軒、掘立柱建物跡21棟、土塋42基、井戸跡20井、溝跡25条、方形周溝墓2基（事業報告書第89集 広面遺跡に収録）である。Ⅱ-2で触れた通り、遺跡の立地する低位台地は南から北に解析する谷地により東西に二分されており、遺構分布も様相を異にしている。東側部分は方形周溝墓2基以外に遺構の検出はない。これらの方形周溝墓は本来、北東に隣接する広面B遺跡の方形周溝墓群に包括されるもので、両遺跡を隔てる浅い谷地を越えて古墳時代前期の墓域が西に拡大した結果とみることができる。これに対し、西側部分は6世紀中葉を初現とする集落が以後最低半世紀程の間に建て替えをくり返し、安定した集落構成がみられる。集落は越辺川の浸食作用で生じた台地縁辺の崖線を北限とし、東西は浅い谷地により画され、南限は集落の初現段階に設けられた幅2mの規模を有する23号溝跡により画される。内部は南北にそれぞれ30軒前後の住居跡の集ながみられ、その間に23号溝跡と並行するかたちで15号溝跡が配されている。15号溝跡は該期の住居跡との新旧関係を有する他、石製模造品が複数検出されており、集落内における重要な位置を担っていたものと考えられる。住居跡は竪穴住居に限られ、平地住居の存在を示す事例はない。竪穴住居跡は、一辺4～6mの規模をもち、内部施設にはカマド、貯蔵穴、4本を基調とした支柱穴の常備など画一的な構成であるが、カマド方位の不統一、竪跡を併設する住居跡の存在など多様な要素も含んでいる。出土遺物は比較的豊富で、主体を占める坏、長胴化した甕、把手を有する甌、支脚転用の高坏などが一般的であり、小型甌、小型甕の出土も多い。僅かではあるが須恵器坏、壺、高坏が出土している。安定した様相をみせていた6世紀代の集落は、以後7・8世紀には全くその痕跡を留めず、再び集落が形成されるのは8世紀の終末近くに至ってからである。その間の集落は23号溝跡を介して南に隣接する田島遺跡、東方の金井遺跡、足洗遺跡、南西に位置する塚ノ越遺跡など比較的高い密度の分布を示す。8世紀終末から始まる集落は、6世紀代とは大きく様相を異にし、溝（土塋、間名垣を伴うものと思われる）による防衛性、計画的な高い構成と思われる。居住域（住居跡）は北に集中し、二重の溝により内包され、倉庫群と考えられる掘立柱建物跡（桁行2間×梁行2間を基調とした総柱建物）は東西を小規模の溝跡、南は23号溝跡により画されている。住居跡の新旧関係から最低3時期に分けることが可能である。その間、居住域は小規模の溝により幾つかの少区画に分けられていた可能性がある。その際、竪穴住居に併存する掘立柱建物は中心的な建物として位置付けられ、竪穴住居、掘立柱建物、井戸を居住域の最小単位として構成されるものと考えられる。南に位置する掘立柱建物跡は桁行2間、梁行2間の建物に混在して桁行3（4）間、梁行2間の建物跡が存在するが、規模的には同値のものが多く、これらも総柱建物と同様の解釈が可能と考えられる。出土遺物は刀子、鎌などの鉄製品の出土が比較的多いものの、相対的には少なく、時間的位置付けの困難なものも少なくない。溝により内包された集落は9

世紀後半代には姿を消し、以後無遺構の状態を経て14、15世紀に再度居住した痕跡が認められる。  
この段階は「く」の字状の溝と井戸、土壘と僅か1棟の掘立柱建物が主要な遺構である。出土遺物  
には、瀬戸製の皿、椀、天目茶碗、硯など文化的色彩の濃い遺物が含まれている。



第6図 桑原A遺跡全体図(2)

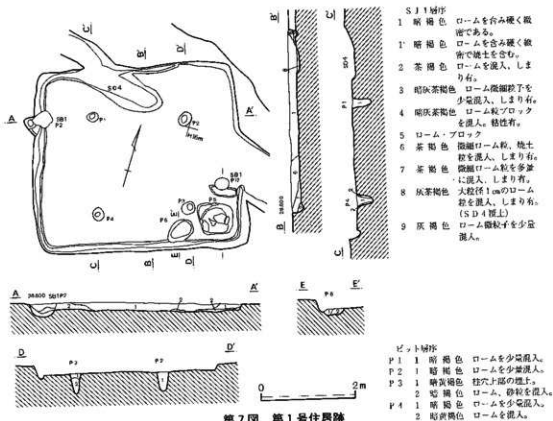
## 2 検出された遺構と遺物

### (1) 住居跡

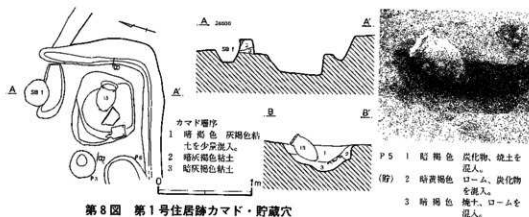
#### 第1号住居跡 (第7図)

H-15・16 Grid に位置する。新旧関係は1号掘立柱建物跡、4号溝跡に北半部が切られる。規模は長軸4.52m、短軸3.91mの整った隅丸長方形を呈する。主軸の方位はN-10°-Eを指す。深さは18cmを測る。覆土は全般にローム・ブロックを多量に混入する暗褐色土を主体とする。カマドは東壁の南寄りにある。遺存状態は第4号溝跡に破壊され、南袖および燃焼部の一部が遺存するに過ぎない。壁溝は北東コーナー部を除く各壁下を巡り、幅30cm、深さ25cmを測る。貯蔵穴は南東コーナー部のカマドに隣接する位置にあり、平面形は隅丸方形、規模は85cm×75cm、深さ25cmを測る。柱穴はP1-P4が主柱と考えられ、径25cm、深さ40cmの規模で統一されている。平面形は略円形。壁溝は北東コーナーの周囲を除く各壁下に認められ、幅30cm、深さ5cmの規模をもって巡る。出土遺物は貯蔵穴内から宛形の長胴甕・甕が、周囲からは坏類が検出された。

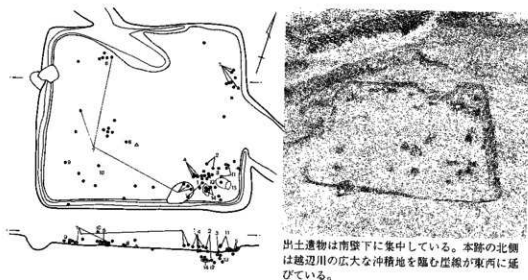
出土遺物(第10図)遺物の総数は71点を数える。坏は口縁部が小さく外傾する椀形に限り模倣坏は含まない。(9、10、12)の甕の整形は腹位の鉋削りが主体だが、胴部・口縁部に刷毛目痕を部分的に残す。(13)は頸部の内・外面には指痕による圧痕が連続して加えられる。(14)は大型の甕である。



第7図 第1号住居跡



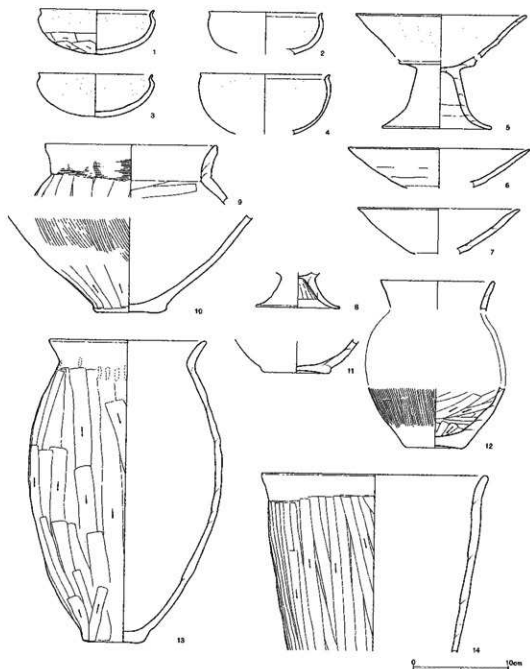
第8図 第1号住居跡カマド・貯藏穴



第9図 第1号住居跡遺物分布

第1号住居跡遺物観察表 (第10図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	坏A	12.0		4.7		R・B・W・K・G	A	暗褐色	10%	床直	29.50
02	3	坏A	12.0		4.7		W・K・R・G	A	暗褐色	55%	貯穴	18.19
03	12	坏A	(12.0)		(4.5)		W・R・B・G	A	鈍い橙褐色	15%	貯穴	20.34
04	11	坏A	(13.8)		(6.5)		W・B・R・G	A	鈍い橙褐色	50%	掘土	22-23-24-49
05	1	高坏	38.0	11.6	(12.0)		R・W・U・U・G	A	暗褐色	70%	掘土	9.11.12.13
06	7	高坏	(19.0)				R・W・K・Ms・G	A	灰白色	30%	床直	26.27.28.65
07	6	高坏	(17.0)				W・K・R・G	A	橙褐色	20%	床直	7.26.27.28
08	8	高坏	(18.0)	8.8			U・R・W・B・G	A	淡黄褐色	60%	掘土	34
09	9	类					K・W・B・R・G	A	暗褐色	5%	床直	44
10	4	类					G	A	暗黄褐色	35%	掘土	32.40.41
11	10	类		7.0			U・W・R・B・G	A	暗褐色	40%	貯穴	55.56
12	5	小型甕	(12.0)	6.0	(17.5)		G	A	赤褐色	10%	貯穴	62
13	14	甕	16.2	5.3	31.7		G	A	明褐色	55%	貯穴	
14	13	甕	24.0				R・W・B・K・Hs	A	灰褐色	40%	貯穴	26.67

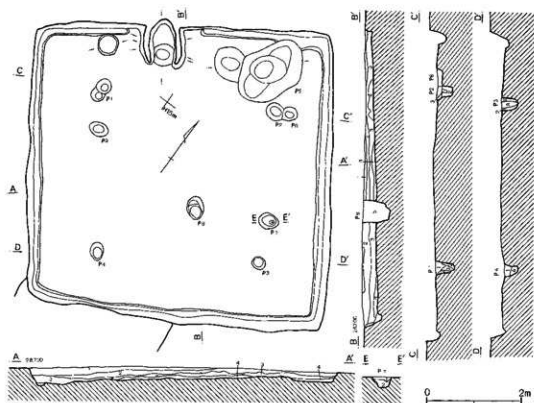


第10図 第1号住居跡出土遺物

第2号住居跡 (第11図)

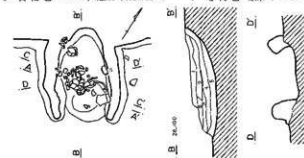
H・I-14・15 Gridに位置し、北東コーナーを4号溝跡に、南西壁を7号住居跡にそれぞれ切られる。規模は東西6.40m、南北6.35mの整った正方形プランを呈する。深さは30cmを測る。主軸の方位はN-33°-Wを指す。覆土はフラットな平行堆積を示し、全面に炭化物(材)、焼土を密に混





S J 2 層序

- |       |               |       |                          |
|-------|---------------|-------|--------------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土、炭化物を混入。    | 4 黄褐色 | 炭化物(材)を多量に混入し、焼土、ロームを混入。 |
| 2 暗褐色 | (1層に比べやや濃い)   | 5 暗褐色 | (S J 7層序説明参照)            |
| 3 黄褐色 | ローム、焼土、炭化物混入。 | 6 暗褐色 | 灰床(ローム・ブロック多量混入)。        |



A HAY30

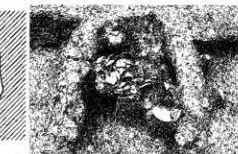
K

カマド跡序

- |       |                      |
|-------|----------------------|
| 1 暗褐色 | 焼土、炭化物、ロームを混入。       |
| 2 赤褐色 | 焼土ブロックを多量に混入。        |
| 3 暗褐色 | 焼土ブロック(厚0.5-1cm)     |
| 4 赤褐色 | 焼土を主体とする。            |
| 5 黄褐色 | 焼土、炭化物混入。ローム・ブロック混入。 |
| 6 暗褐色 | 若干の焼土ブロックを混入。        |

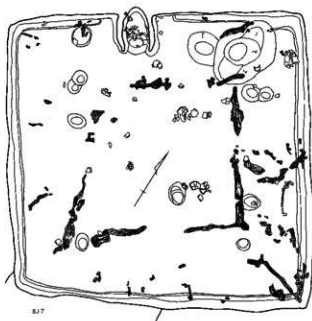
C

0 1m



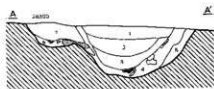
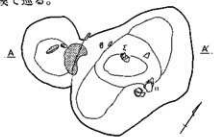
多くの窠と共に支脚転用の高杯が出土している。

第11図 第2号住居跡・カマド

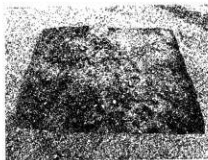


第12図 第2号住居跡炭化材

袖の長さ83cm、燃焼空間は50cm×50cm、深さ27cmが求められる。天井部以外の遺存は良好である。貯蔵穴はカマドの東、北東コーナー間に設けられている。規模は南北1.6m、東西1mの長楕円形の掘り込みで、中央に40cm×30cm、深さ55cmのピットが再度掘り込まれている。覆土中には多量の炭化材が認められる。ピットは10ヶ所検出され、内P1～P2は同規模のピットが重複しており、建て替えのおこなわれたことが想定できる。壁溝はカマドを除く全ての壁下を幅30cm、深さ30cmの規模で巡る。

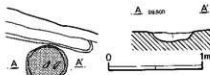


- |     |   |   |    |                     |
|-----|---|---|----|---------------------|
| P 5 | 1 | 所 | 褐色 | 焼土、炭化物、ロームを多量に混入。   |
| (貯) | 2 | 層 | 褐色 | 炭化物、ロームが多くやや明るい。    |
|     | 3 | 層 | 褐色 | きめ細かい焼土、炭化物、粘土を混入。  |
|     | 4 | 層 | 褐色 | 炭化物を多量に混入、焼土も混在。    |
|     | 5 | 赤 | 褐色 | 焼土を主体とする。           |
|     | 6 | 暗 | 褐色 | 焼土ブロック、炭化材を多量に混入。   |
|     | 7 | 暗 | 褐色 | 炭化物を多く混入。           |
|     | 8 | 暗 | 褐色 | ローム、炭化物を混入、しまり・粘性有。 |
| P 6 | 1 | 層 | 褐色 | 焼土、炭化物、ロームを混入、しまり有。 |

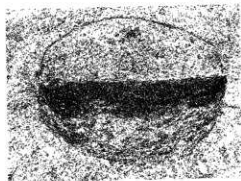


炭材・垂木がそのまま焼け落ち、床面には完形土器の出土が目立つ。

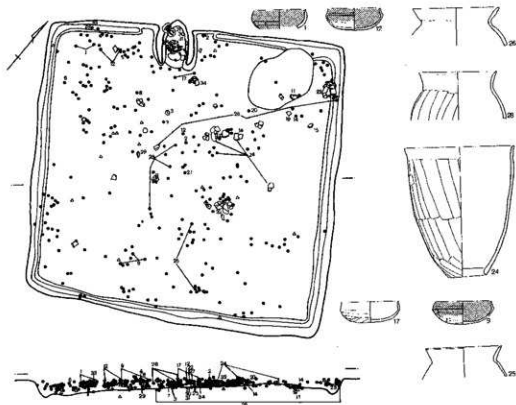
入する。特に、P1～P4の間には炭材と思われる炭化材が最大2mの規模で、また垂木材と思われるものが放射状に検出された。カマドは北壁の西偏した位置にある。規模は両袖間で95cm、壁への切り込み17cm、



焼土固まり層序  
1 焼土ブロック主体、2層の炭化物(材)を混在。

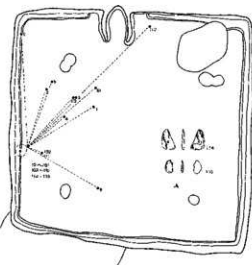


第13図 第2号住居跡貯蔵穴・焼土固まり

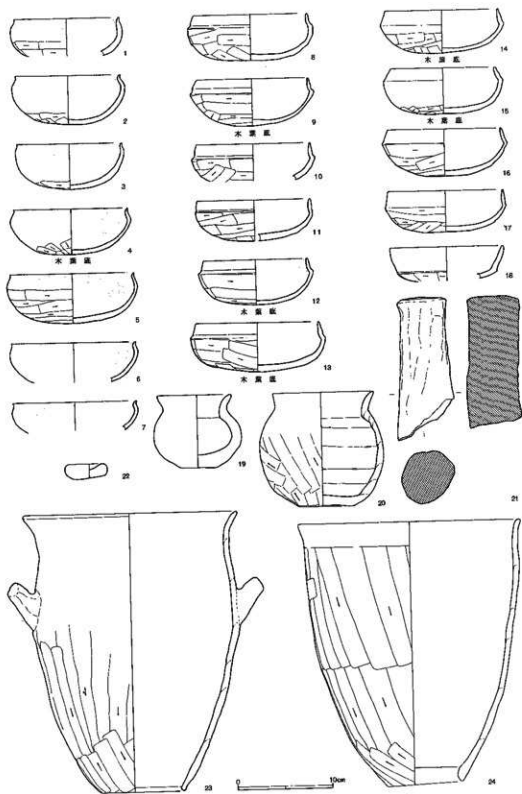


第14図 第2号住居跡遺物分布

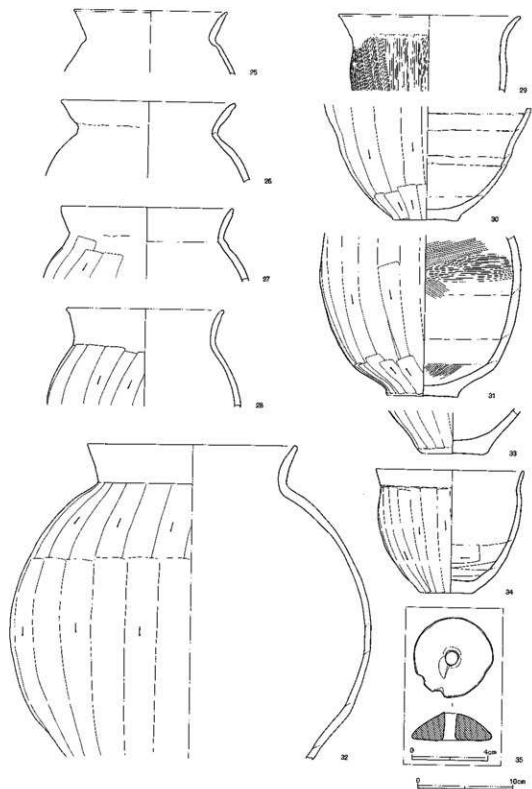
出土遺物(第16~20図) 遺物はカマド内、貯蔵穴周辺を中心に出土しており、概して住居の東半部に集中している。内訳は坏18、小型甕2、甌2、手ずくね1、支脚1の他、滑石製の白玉、模造品ガラス製小玉が床面直上の状態で集中して出土した。坏は口縁部が外傾する碗形器と模倣坏(蓋模倣を含む)の2大別ができ、大半は内面および外面上半に赤彩が施される小型甕(19)は全体が肥厚、整形はナデで内面と胴部上半に赤彩を施す。石製模造品は2点出土、全て滑石製の剣形品と思われるが完形は無い。(114)は縦(2.74)cm、横(1.85)cm、厚さ0.32cm、40%残存。(115)は縦(1.72)cm、横(1.10)cm、厚さ0.25cmで20%残存。(116)は石製紡錘車、径4.2cm、厚さ1.4cm、重量26gを測り、材質は滑石製である。完形。



第15図 第2号住居跡白玉・ガラス小玉



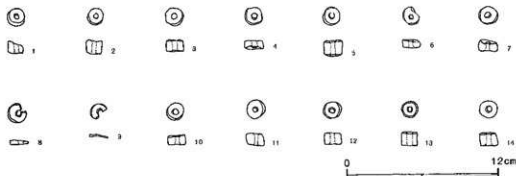
第16图 第2号住居跡出土土物(1)



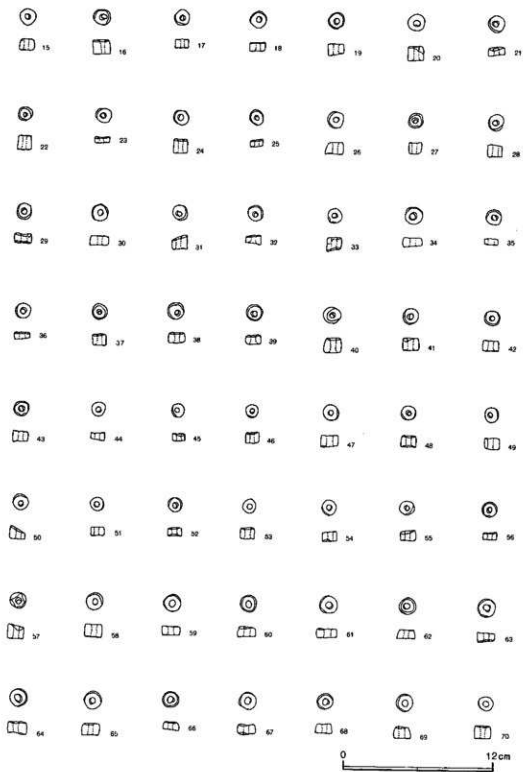
第17图 第2号住居跡出土遺物(2)

第2号住居跡遺物観察表 (第16-17図)

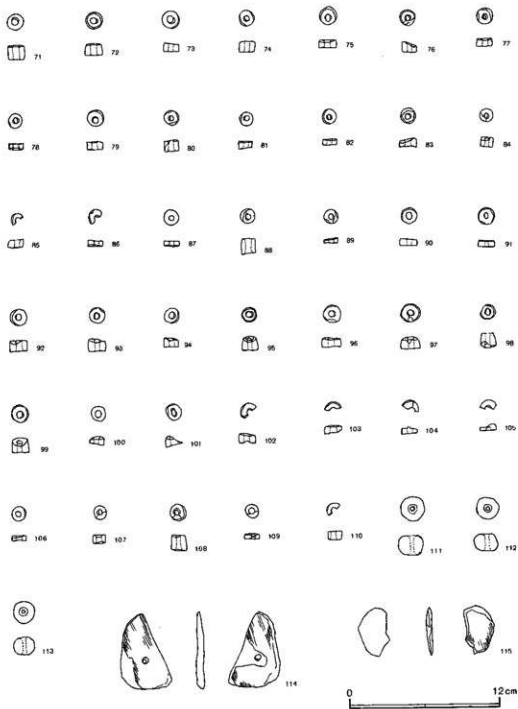
No	洲	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	坏A	(11.0)				W-B-G	A	明赤棕色	10%	覆土	11.14
02	6	坏A	11.0		5.1		W-K-B-G	A	淡赤褐色	60%	カマド	287
03	8	坏A	(11.0)	4.8			W-R-G	A	鈍い褐色	50%	覆土	53
04	14	坏A	12.0	4.8		125	W-U-G	A	淡赤褐色	90%	床直	151
05	17	坏A	13.0	5.2		173	U-W-K-G	A	鈍い褐色	90%	覆土	33
06	16	坏A	(13.0)				U-W-G	A	鈍い褐色	30%	覆土	21.カマド2
07	20	坏A	(13.0)				W-K-G	A	鈍い褐色	10%	覆土	59
08	5	坏B	12.0		4.8		W-B-U-G	A	暗褐色	60%	覆土	50
09	15	坏B	11.8		4.9		W-U-G	A	赤褐色	50%	覆土	117.194.196
10	4	坏B	(12.0)				G	A	赤褐色	20%	覆土	37
11	3	坏B	(12.0)		(4.3)		W-R-G	A	明灰褐色	30%	貯穴	3
12	12	坏B	11.0		4.7		W-U-R-G	A	淡赤褐色	40%	覆土	13.30.138
13	9	坏B	13.0		5.1		U-W-B-G	A	明赤褐色	70%	貯穴	1
14	11	坏B	12.0		4.5		U-W-G	A	明赤褐色	60%	床直	256
15	13	坏B	11.0		4.8		W-U-K-G	A	灰赤褐色	60%	床直	264.316
16	19	坏B	12.0		5.0		W-B-K-G	A	鈍い褐色	60%	貯穴	2
17	10	坏B	12.2		4.3		W-U-K-G	A	淡赤褐色	70%	覆土	45.47
18	18	坏C	(12.0)		(4.6)		W-G	B	灰褐色	20%	覆土	
19	25	小型甕	8.0	3.8	7.7	337	U-W-B-G	B	鈍い褐色	20%	完形	床直 258
20	1	小型甕	10.5	5.8	12.0		W-U-K-B-R	A	明赤褐色	80%	覆土	59.307
21	34	支脚	5.6	(13.7)			W-B-U-S-G	A	鈍い褐色	60%	カマド	一括
22	30	土製品	3.8	1.5	25.0	25	W-U-K-G	A	鈍い褐色	完形	覆土	139
23	28	甕	(22.4)	8.8	29.2		G	A	鈍い黄褐色	75%	床直	265
24	27	甕	23.4	7.9	27.5		G	A	明黄褐色	70%	覆土	144.149.150
25	22	甕	(16.0)				W-U-G	A	灰褐色	10%	床直	185.225
26	24	甕	(18.0)				W-B-U-G	B	暗灰青褐色	15%	覆土	130.268
27	21	甕	18.0				W-B-G	A	灰褐色	10%	覆土	137
28	31	甕	(16.8)				W-U-K-R-G	A	橙 色	20%	覆土	122.129.133
29	23	甕	19.0				W-B-U-G	A	黄褐色	15%	覆土	69
30	33	甕					G	A		90%	カマド	一括
31	29	甕	7.6				W-U-B-R-G	B	黄棕色	50%	カマド	2
32	32	甕	22.1				G	A	黄褐色	30%	覆土	206
33	26	甕		5.4			W-K-B-R-U	B	橙 色	25%	覆土	1
34	7	小型甕	15.5	5.5	12.9	620	W-R-K-G	A	明赤褐色	完形	覆土	48



第18図 第2号住居跡出土土白玉(1)



第19图 第2号住居跡出土白玉(2)



第20図 第2号住居跡出土白土・石製横造品



第2号住居跡出土白玉・ガラス小玉計測表(1)

(単位: mm)

No	実測No	A×B×C : 穿孔径	重量g	No	実測No	A×B×C : 穿孔径	重量g
1	36	0.70×0.65×0.40 : 0.21	0.15	46	84	0.60×0.60×0.30 : 0.20	0.22
2	37	0.60×0.60×0.40 : 0.15	0.14	47	85	0.60×0.60×0.40 : 0.20	0.33
3	38	0.60×0.70×0.40 : 0.21	0.24	48	86	0.60×0.50×0.40 : 0.20	0.25
4	39	0.60×0.70×0.30 : 0.21	0.11	49	87	0.60×0.60×0.40 : 0.20	0.25
5	40	0.60×0.60×0.50 : 0.21	0.27	50	88	0.60×0.60×0.40 : 0.20	0.23
6	41	0.60×0.60×0.30 : 0.30	0.15	51	89	0.50×0.50×0.30 : 0.20	0.15
7	42	0.60×0.70×0.40 : 0.21	0.18	52	90	0.55×0.55×0.40 : 0.20	0.25
8	43	0.60×0.70×0.20 : 0.20	0.02	53	91	0.50×0.50×0.40 : 0.20	0.19
9	44	0.60×0.60×0.20 : 0.21	0.04	54	92	0.60×0.50×0.40 : 0.20	0.25
10	48	0.60×0.70×0.40 : 0.11	0.28	55	93	0.60×0.50×0.40 : 0.20	0.24
11	49	0.70×0.60×0.40 : 0.15	0.29	56	94	0.60×0.25×0.30 : 0.20	0.18
12	50	0.60×0.60×0.40 : 0.20	0.33	57	95	0.60×0.60×0.50 : 0.20	0.35
13	51	0.55×0.55×0.45 : 0.20	0.27	58	96	0.60×0.60×0.40 : 0.20	0.25
14	52	0.60×0.60×0.50 : 0.20	0.29	59	97	0.60×0.60×0.30 : 0.20	0.20
15	53	0.50×0.50×0.40 : 0.20	0.25	60	98	0.50×0.60×0.40 : 0.20	0.18
16	54	0.60×0.60×0.30 : 0.20	0.34	61	99	0.60×0.60×0.30 : 0.20	0.20
17	55	0.50×0.50×0.30 : 0.20	0.18	62	100	0.50×0.60×0.30 : 0.20	0.18
18	56	0.60×0.60×0.30 : 0.20	0.24	63	101	0.60×0.60×0.30 : 0.20	0.18
19	57	0.60×0.60×0.40 : 0.20	0.25	64	102	0.60×0.60×0.40 : 0.20	0.23
20	58	0.60×0.60×0.50 : 0.20	0.31	65	103	0.60×0.60×0.40 : 0.20	0.28
21	59	0.60×0.60×0.30 : 0.20	0.19	66	104	0.50×0.60×0.30 : 0.20	0.16
22	60	0.50×0.50×0.30 : 0.20	0.34	67	105	0.60×0.60×0.30 : 0.20	0.22
23	61	0.60×0.60×0.20 : 0.20	0.14	68	106	0.50×0.60×0.30 : 0.20	0.18
24	62	0.50×0.50×0.50 : 0.20	0.29	69	107	0.50×0.60×0.40 : 0.20	0.28
25	63	0.50×0.60×0.30 : 0.20	0.18	70	108	0.50×0.50×0.50 : 0.20	0.25
26	64	0.60×0.60×0.40 : 0.20	0.27	71	109	0.50×0.60×0.50 : 0.20	0.30
27	65	0.50×0.50×0.40 : 0.20	0.24	72	110	0.50×0.60×0.40 : 0.20	0.25
28	66	0.50×0.50×0.40 : 0.20	0.29	73	111	0.50×0.50×0.30 : 0.20	0.13
29	67	0.50×0.50×0.40 : 0.20	0.24	74	112	0.60×0.60×0.40 : 0.20	0.28
30	68	0.60×0.60×0.40 : 0.20	0.23	75	113	0.60×0.60×0.30 : 0.20	0.22
31	69	0.50×0.50×0.50 : 0.20	0.30	76	114	0.60×0.60×0.40 : 0.20	0.24
32	70	0.60×0.60×0.30 : 0.20	0.17	77	115	0.60×0.60×0.30 : 0.20	0.23
33	71	0.50×0.50×0.45 : 0.20	0.30	78	116	0.55×0.60×0.20 : 0.20	0.15
34	72	0.60×0.60×0.30 : 0.20	0.19	79	117	0.60×0.60×0.30 : 0.20	0.20
35	73	0.50×0.50×0.20 : 0.20	0.14	80	118	0.50×0.60×0.40 : 0.20	0.20
36	74	0.50×0.50×0.20 : 0.20	0.14	81	119	0.60×0.55×0.30 : 0.20	0.19
37	75	0.50×0.50×0.40 : 0.20	0.30	82	120	0.50×0.60×0.20 : 0.20	0.12
38	76	0.60×0.60×0.40 : 0.20	0.29	83	121	0.60×0.50×0.30 : 0.20	0.17
39	77	0.50×0.50×0.30 : 0.20	0.22	84	122	0.50×0.50×0.30 : 0.20	0.18
40	78	0.60×0.60×0.50 : 0.20	0.36	85	123	0.50×0.50×0.30 : 0.20	0.05
41	79	0.60×0.60×0.40 : 0.20	0.27	86	124	0.60×0.60×0.20 : 0.20	0.06
42	80	0.60×0.60×0.40 : 0.20	0.28	87	125	0.60×0.60×0.20 : 0.20	0.15
43	81	0.50×0.50×0.40 : 0.20	0.24	88	126	0.50×0.50×0.50 : 0.20	0.24
44	82	0.50×0.50×0.30 : 0.20	0.14	89	127	0.60×0.50×0.20 : 0.20	0.24
45	83	0.50×0.50×0.30 : 0.20	0.12	90	128	0.50×0.60×0.25 : 0.20	0.12

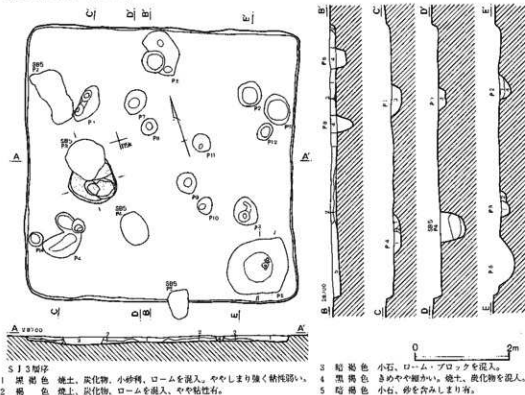
第2号住居跡出土白土・ガラス小玉計測表(2)

(単位: mm)

No	実測No	A×B×C: 穿孔径	重量g	No	実測No	A×B×C: 穿孔径	重量g
91	129	0.60×0.60×0.20 : 0.20	0.15	103	141	0.60×0.60×0.30 : 0.20	0.07
92	130	0.60×0.60×0.40 : 0.20	0.25	104	142	0.60×0.50×0.30 : 0.20	0.08
93	131	0.50×0.60×0.40 : 0.20	0.24	105	143	0.50×0.50×0.20 : 0.20	0.05
94	132	0.50×0.50×0.30 : 0.20	0.14	106	144	0.50×0.50×0.15 : 0.20	0.09
95	133	0.50×0.50×0.40 : 0.20	0.19	107	145	0.50×0.50×0.30 : 0.20	0.16
96	134	0.60×0.60×0.30 : 0.20	0.25	108	146	0.60×0.60×0.60 : 0.20	0.39
97	135	0.50×0.60×0.30 : 0.20	0.20	109	147	0.50×0.50×0.20 : 0.20	0.08
98	136	0.40×0.50×0.40 : 0.20	0.20	110	148	0.50×0.50×0.30 : 0.20	0.07
99	137	0.60×0.60×0.50 : 0.20	0.28	111	45	0.90×0.90×0.70 : 0.10	0.57
100	138	0.50×0.50×0.20 : 0.20	0.18	112	46	0.80×0.80×0.60 : 0.10	0.40
101	139	0.60×0.60×0.40 : 0.20	0.18	113	47	0.80×0.80×0.70 : 0.10	0.41
102	140	0.60×0.60×0.30 : 0.20	0.11				

(A×B: 径, C: 厚さ)

第3号住居跡(第21図)



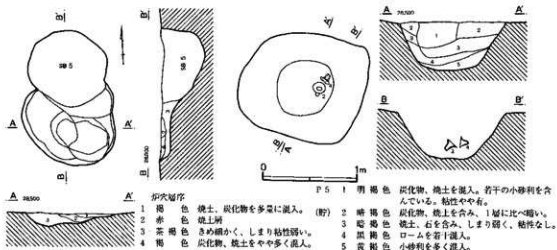
S 1 3 短序

- 1 灰褐色 焼土、炭化物、小砂利、ロームを混入、ややしまり強く粘り強い。  
2 褐色 焼土、炭化物、ロームを混入、やや粘性有。

ピット短序

- P 1 1 褐色 焼土、炭化物、ロームを混入、しまり弱い。  
2 黄褐色 ロームを多量に混入、しまり有。  
3 灰褐色 きめ細かく、下丁のロームを混入。  
P 2 1 褐色 焼土、炭化物、ロームを混入、しまり弱い。  
2 黄褐色 ロームを多量に混入、しまり有。  
3 暗褐色 きめ細かく、石子のロームを混入。  
P 3 1 黄褐色 ロームを多量に混入、しまり有。  
2 暗褐色 きめ細かく石子のロームを混入。  
P 4 1 褐色 焼土、炭化物、ロームを混入、しまり弱い。  
2 黄褐色 ロームを多量に混入、しまり有。  
P 7 1 褐色 焼土、炭化物、ロームを混入、しまり有。  
2 黄褐色 ロームを多量に混入、しまり有。

第21図 第3号住居跡

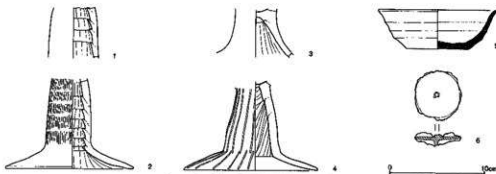


第22図 第3号住居跡炉跡・貯蔵穴

I-15 Grid に位置する。5号掘立柱建物跡に切られる。規模は東西5.8m、南北5.76m、平面形は整った方形を呈する。主軸の方位はN-72°-Wを指す。壁体は急な傾斜を示し、壁高は12cmを測る。覆土は焼土・炭化物を密に含む。炉跡は5号掘立柱建物跡のP11により北半部を切られる。規模は東西1.0m南北1.2m、深さ13cm程の浅い皿状の掘り込みを呈する。貯蔵穴は南東コーナーにあり、規模は1.47m、南北1.26m、深さ56cmを測る。平面形は略円形を呈する。ピットはP11~P14が主柱穴と考えられ径40cm、深さ30cmを測るが、西壁側の2穴は建て替えの痕跡がある。他に、西壁下に2穴、中央に5穴、東壁下に2穴が認められ20~30cmの深度を有する。壁溝は存在しない。出土遺物は貯蔵穴から高坏の脚部が2点検出された他は覆土中に少量散漫な分布を示すが大半

第3号住居跡遺物観察表 (第23図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	3	高坏		13.5			K-W-G	B	淡褐色	20%	床直	66
02	2	高坏					W-B-R-G	A	鈍い橙色	40%	貯穴	1
03	4	高坏					K-W-G	B	淡灰褐色	20%	床直	59
04	1	高坏	12.4	14.2			W-R-K-G	A	鈍い橙色	40%	貯穴	2
05	5	須坏	12.4	6.8	4.0		Ha-K-W-G	A	灰白色	40%	覆土	一括

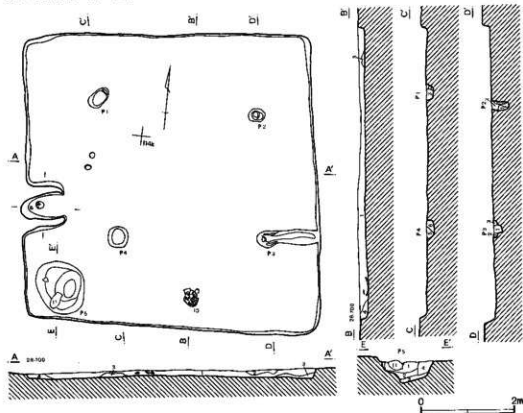


第23図 第3号住居跡出土遺物

は本跡を切る5号掘立柱建物跡に帰属するものと考えられる。

出土遺物(第23図)(1-4)は全て高坏の脚部。艇身で長脚、裾部で強く開く。整形は(2)にカキ目が残る他縦位の磨きが主流。(6)は鉄製紡錘車で円盤部のみ残存。径5cm、軸径0.4cmを計る。

第4号住居跡(第24図)



ピット層序

- P 1 3 暗褐色 2層に比べ、ロームが少ない。  
 P 2 1 黄褐色 きめ細かく、ロームを多量に混入。しまりやや弱い。  
 P 3 暗褐色 ローム、焼土を混入。しまりやや弱い。  
 P 3 1 黄褐色 きめ細かくロームを多く混入。しまりやや弱い。  
 P 3 2 暗褐色 ロームを混入。やや粘性有り。  
 P 3 3 暗褐色 ローム、焼土を混入。しまりやや弱い。  
 P 4 5 暗褐色 焼土、炭化物、ロームを混入。しまりやや強い。  
 P 4 6 暗褐色 1層に比べ、各粒子は少なく、ロームを混入。

S J 4 層序

- 1 灰褐色 隙間なローム、焼土を混入。やや粘性有。  
 2 暗灰褐色 隙間なローム、焼土を混入。やや粘性有。  
 3 暗灰褐色 1層のロームを多量に含む層の部分である。  
 4 暗灰褐色 隙間なロームを混入。ややしまりを欠く。

- P 5 1 暗褐色 焼土、炭化物を混入。若干の小石を混入。  
 (附) 2 暗褐色 1層に近似するが、焼土、炭化物(径1-2mm)を多く混入。  
 3 黄褐色 きめはやや粗雑である。砂粒子、ロームを混入。  
 4 明褐色 1層に比べ明るく、焼土、炭化物を多く混入。

※ P 4 は他と埋土の層相が異なる。P 1 は柱を据えた跡にローム上(2層)を敷設している。

カマド層序

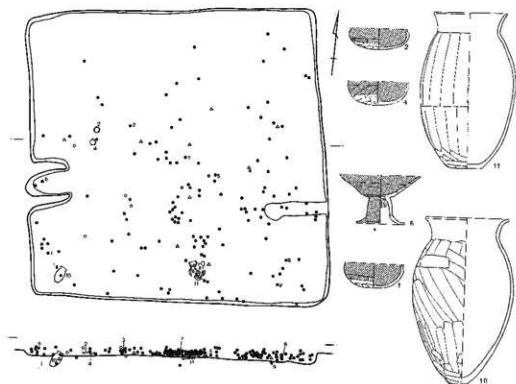
- 1 暗黄褐色 ロームに焼土ブロックを多量に混入。粘性有。  
 2 灰黄褐色 焼土を混入下部は山砂が厚く。粘性有。  
 3 暗灰黄褐色 焼土、炭化物を混入。

※ 全般的に遺存が悪い。突き口部分と思われる部分の断面は、ほとんど欠けて残っていない。掘・内掘・天井部分など、相当部分が、欠損している。

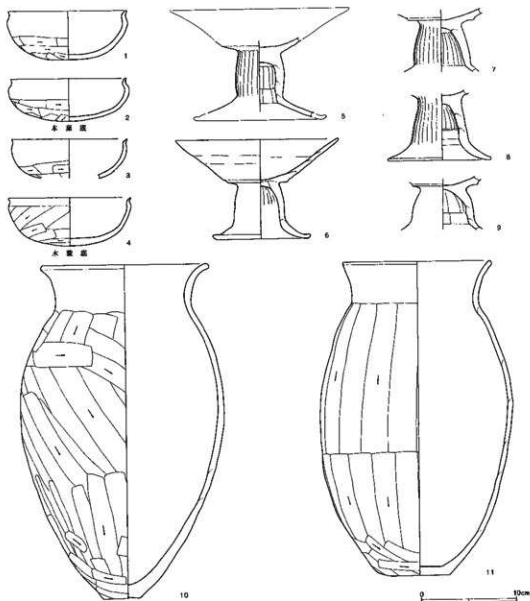
第24図 第4号住居跡・カマド

I-14 Gridに位置する。切り合い関係はない。規模は東西6.32m、南北6.34m、深さ12cmを測る。平面形は南東コーナーが若干張り出した略方形を呈する。主軸の示す方位はN-81°-Eを指す。覆土は焼土、ロームを多量に混入する灰褐色土が主体で、壁際にロームの混入が目立つ。カマドは西壁の南東コーナー寄りに偏在して構築されている。規模は両袖間1.02m、壺への切り込みは10cmを測る。底面は床面と同レベルである。燃焼空間は袖の内側で53cm、長さ1mである。中央に高坏(8)が直立した状態で出土。貯蔵穴は南西コーナーにあり、1.0m×1.2mの規模で、平面形は略円形、中間にテラスをもち再度掘り込まれている。テラスまでの深さ20cm、最深部までは56cmを測る。ピットは土柱と思われるP1~P4の4本が検出された。規模は径50cm深さ20cmでP2のみ70cmを測る。P3から東壁間には所謂間仕切り溝跡が存在し、幅35cm、深さ20cmを測る。壁体は堅緻で急な立ち上がりを示す。遺物はカマド内に高坏(8)、貯蔵穴内のテラス上に甕(10)が、カマド正面には坏類、南壁下に甕(11)がそれぞれ床面直上で出土している。

出土遺物(第26図)内訳は坏4、高坏5、甕2である。坏類は所謂横置坏は存在せず、比較的深い輪状のものにより占められる。余て赤彩が施される。高坏は脚部がやや長く、裾部での屈曲後大きく開くもの(6)が主流と思われる。甕は長胴で口縁部の開きは小さい。整形は縦位・斜位の莖削り、特に底部周辺は軌跡に削りが施される。



第25図 第4号住居跡遺物分布



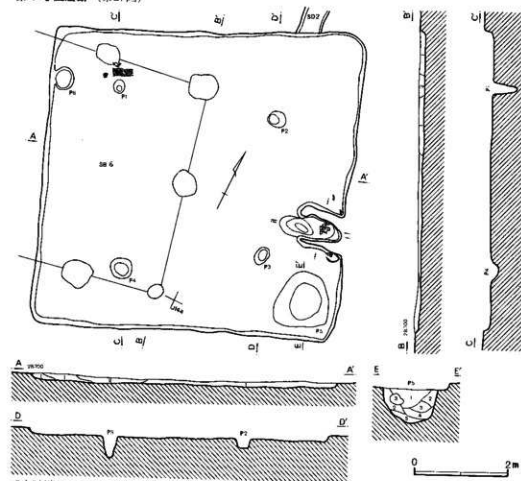
第26図 第4号住居跡出土遺物

第4号住居跡遺物観察表 (第26図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	4	坏A	12.4		5.1		W-R-Ha-G	A	橙 色	50%	貯藏穴	150
02	11	坏A	12.0		4.5		W-K-B-R-G	A	橙 色	70%	覆土	27
03	6	坏A	(12.0)		(4.1)		W-B-R-G	A	淡橙 色	30%	覆土	28
04	5	坏A	12.8		5.0	182	W-B-U-A-G	A	赤橙 色	定形	覆土	25
05	7	高坏					W-B-Ha-G	A	橙 色	50%	覆土	103
06	3	高坏	18.4	10.0	10.4	385	W-B-A-G	A	淡赤橙 色	完形	カマド	151

07	9	高坏		10.9		W-Ha-K-G	A	橙 色	40%	覆土	84
08	8	高坏		10.9		W-B-R-G	A	橙 色	40%	覆土	143
09	12	高坏				W-B-G	A	橙 色	40%	覆土	139
10	1	堦	17.1	3.9		G	A	明黄褐色		床直	2
11	2	堦	15.8	6.5		G	A	橙 色	80%	床直	39

第5号住居跡 (第27図)



S J 5 城址

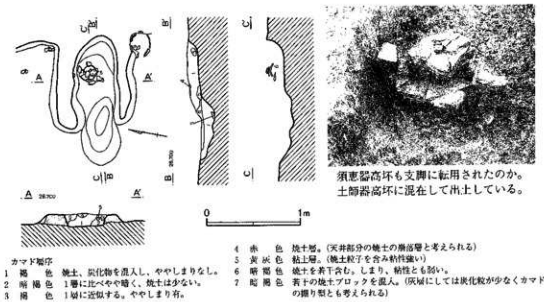
- 1 灰 褐色 縦横なローム、焼土を混入。しまり石。  
 1' 灰 褐色 1層の焼土を多く含む部分である。  
 2 暗灰褐色 多量の崩れた炭化物を混入。焼土を混じ、ややしまりなし。  
 崩れ過程の凹みを利用して築られた土壁の覆土で、多量の土

器片を混入。

ビット層序

- P 5 1 灰 褐色 ぐずれたローム、壁かに焼土を混入。下方部分はしまりなし。  
 (断) 2 灰 褐色 ローム、焼土を僅かに混入。壁くしまる。  
 3 灰 褐色 ぐずれたロームを多量に混入し、焼土、炭化物も混入。  
 4 暗灰褐色 ぐずれたローム、焼土、炭化物、砂粒を混入。しまりなし。  
 5 暗黄褐色 ロームを混する砂質土・小石を多量に含む。しまりなし。土層から、比較的初期層に埋没した状況が伺えるが人為的な埋没とは思われない。5層に包含される跡は、木釘埋穴が砂質ローム部分まで切り込まれた為のものであろう。覆土から七脚跡が鏡片出している。

第27図 第5号住居跡

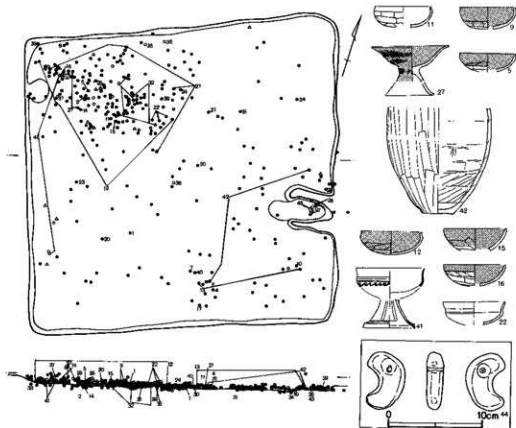


第28図 第5号住居跡カマド

I・J-13・14 Gridに位置する。東半部を6号掘立柱建物跡、北東コーナーを2号溝跡に切られる。平面形は整った方形を呈し、炭椋は東西6.6m、南北6.54m、深さ14cmを測る。主軸の示す方位はN-68°-Eを指す。覆土は焼土・炭化物を混入する灰褐色土による単一層で、僅かに壁際周辺で炭化材の混入が増す。カマドは西壁のやや南寄りに構築されている。規模は両袖間で0.9m、内側で0.4m、長さ1.05mを測る。壁への切り込みはなく壁体をそのまま使用している。器設部には支脚の代用として坏(6)と壺(42)が据えられている。貯蔵穴はカマドの南、南東コーナーにあり、平面形は不整形、規模は東西1.32m、南北1.16m、深さ0.80mを測る。ピットは主柱の4本(P1-P4)が検出された。規模は径40-50cm、深さ20-40cmを測る。覆土には総じて焼土・炭化物の混入が認められる。壁溝は認められない。出土遺物の大半は覆土中に含まれるが、床面に近い位置、貯蔵穴内から出土するものが比較的多い。総数341点と数量的には多いが、大半は小破片で完形はない。

出土遺物(第30・31図) 坏は碗状のもの16点、模倣坏は8点出土している。バリエーションは豊富で、碗状のものには口縁部端が外傾するタイプを主流に半球状で口縁部端に変化の認められないもの(15・16)がある。模倣坏では口縁部が直立するもの(17)、内傾するもの、口縁部が内傾後中位で外傾する(18)がある。高坏は8点あり、坏部下端に稜を有するもの(28)もたないもの(26・27)がある。脚部は緩やかに内傾し裾部で大きく開くものが主流。他に短い柱状部分から裾部で緩やかに開く(29)、ミニチュアで手ずくね(39)がある。多くは赤彩を施す。須恵器は坏1、蓋4、高坏1の計6点が出土している。(44)は石製勾玉。全長3.1cm、幅2.0cm、厚さ0.9cm重量8gである。材質は滑石製。床面直上で出土。

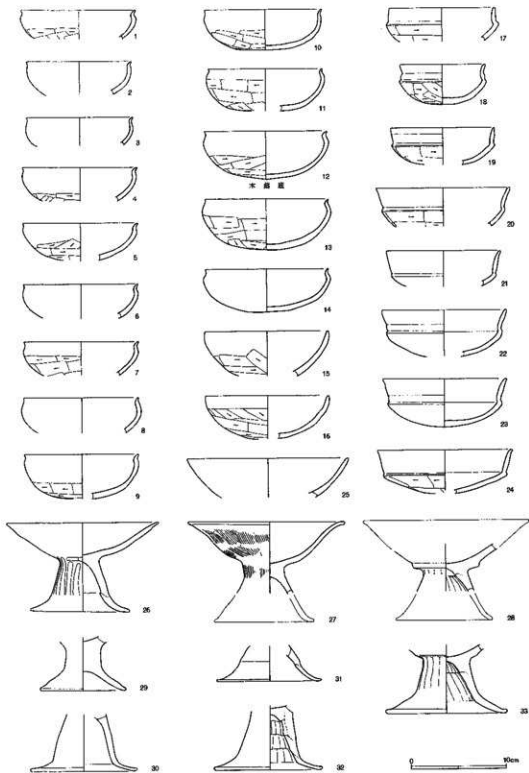




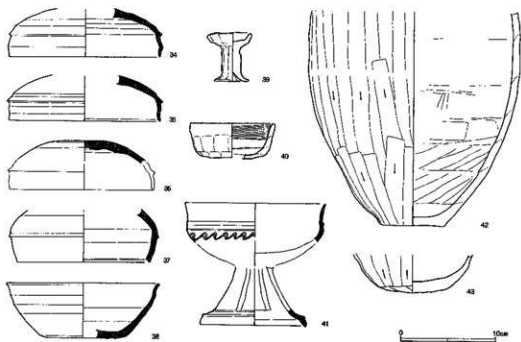
第29图 第5号住居跡遺物分布

第5号住居跡遺物觀察表 (第30图)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	烧成	色調	残存	位置	注記番号
01	32	坏A	(12.0)				G	A	灰褐色	10%	床直	157
02	17	坏A	11.0				W·K·G	A	橙 色	20%	覆土	288
03	33	坏A	(11.0)				G	A	淡褐色	10%	覆土	
04	34	坏A	(12.0)				R·B·G	A	橙 色	10%	覆土	132
05	18	坏A	(12.0)				W·G	A	橙 色	10%	覆土	287
06	31	坏A	(12.0)				W·B·G	A	橙 色	10%	カマF	132
07	29	坏A	(12.0)				K·W·G	A	橙 色	10%	覆土	314
08	27	坏A	12.0				W·B·G	A	灰赤色	10%	覆土	3
09	28	坏A	(12.0)				U·W·B·G	A	鈍い褐色	30%	覆土	16, 36, 84
10	5	坏A	12.2		4.2	170	W·S·U·G	A	橙 色	90%	床直	272
11	25	坏A	(12.0)				W·B·G	A	淡赤褐色	40%	覆土	212, 72
12	9	坏A	(13.0)		5.0		W·B·G	A	灰赤色	40%	覆土	89, 176, 233
13	13	坏A	(13.0)		(5.3)		W·R·G	A	鈍い赤褐色	10%	貯穴	131, 145
14	3	坏A	13.2		4.6		W·K·G	A	灰褐色	40%	覆土	199
15	22	坏D	(13.0)				U·W·B·G	B	灰白色	30%	床直	41, 214
16	11	坏D	(13.0)				S·W·B·U·G	B	淡黄色	20%	覆土	185
17	14	坏B	(11.0)				W·B·U·G	A	赤褐色	10%	覆土	316
18	15	坏B	9.0		4.2		W·R·G	A	淡赤褐色	15%	覆土	一括



第30图 第5号住居跡出土遺物(1)

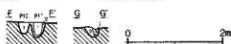
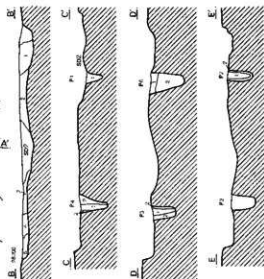
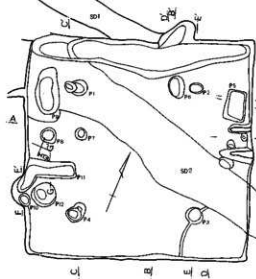


第31図 第5号住居跡出土遺物(2)

第5号住居跡遺物観察表 (第30図)

19	24	坏1	(11.0)			W・B・Ha・G	A	赤褐色	10%	覆土	貯蔵穴
20	16	坏1	12.0			W・B・K・G	A	明褐色	20%	覆土	156
21	35	坏1	(12.0)			W・R・G	B	浅黄褐色	10%	覆土	112
22	20	坏1	(13.0)			W・G	A	褐色	20%	覆土	76, 229, 230
23	2	坏1	13.0	5.1		R・W・U・G	B	明褐色	50%	覆土	329
24	44	坏2	(14.0)	(5.6)		W・U・B・S・G	A	にぶい褐色	30%	覆土	74
25	12	高坏	(17.0)			U・W・G	A	淡褐色	10%	覆土	22, 65
26	41	高坏	16.0	11.4	9.3	G	A	淡褐色	60%	覆土	333
27	8	高坏	16.6			W・B・G	A	淡褐色	70%	覆土	12, 532, 70, 71
28	26	高坏				W・R・S・G	A	赤褐色	30%	覆土	
29	6	高坏		8.8		U・W・R・G	B	褐色	40%	覆土	338
30	10	高坏	(11.0)			W・R・G	A	鈍い赤褐色	30%	覆土	372
31	21	高坏	(11.0)			W・B・S・G	A	鈍い褐色	10%	覆土	109
32	7	高坏	11.2			S・W・R・G	A	鈍い赤褐色	40%	覆土	20, 37, 77, 218
33	1	高坏	12.8			W・K・R・G	A	灰褐色	50%	覆土	173
34	36	蓋	(16.0)			G	A	灰色	20%	覆土	46-99
35	37	坏1	(14.0)		(5.0)	W・G	A	灰色	30%	覆土	15
36	38	坏1				W・G	A	灰色	10%	覆土	91
37	45	蓋	(14.0)			W・B・G	A	灰白色	10%	覆土	256 供忠器
38	39	坏3				G	A	灰褐色	30%	覆土	266
39	4	高坏	4.7	5.2		U・W・B・G	B	灰黄褐色	80%	覆土	1
40	26	坏3	(9.0)	(3.7)		U・W・H・G	C	灰褐色	30%	覆土	315
41	40	高坏	(12.0)	(12.8)		G	A	灰色	20%	床面	183, 267
42	19	蓋		7.2		W・U・R・B・Ha	B	鈍い褐色	20%	覆土	129, 320
43	3	蓋				R・W・K	A	鈍い	2%	覆土	332, 333

第6号住居跡 (第32図)



S16層序

- 1 暗褐色 ローム、焼土が少量混入。しまりなし。
- 2 暗褐色 焼土ブロックが少量混入。
- 3 暗褐色 焼土、ロームを少量混入。
- 4 暗褐色 焼土、炭化物を多量に混入。
- 5 暗褐色 ローム土を多量に混入。

間仕切溝層序

- 1 黒褐色 炭化物を混入。
- 2 暗褐色 ロームを多量に混入。
- 3 黒褐色 ロームを多量に混入。

P11層序

- P1 1 暗褐色 ロームを多量に混入。
- P2 1 暗褐色 ローム、焼土を少量混入。
- P3 2 暗褐色 ローム、(陶土)
- 1 暗褐色 焼土、炭化物を少量混入。
- 2 暗褐色 ローム。
- P4 1 暗褐色 ローム、焼土を少量混入。
- 2 暗褐色 焼土、炭化物を少量混入、粘性有。
- P5 1 赤褐色 焼土を多量に混入。
- (貯) 2 暗褐色 黒土、焼土を少量混入。
- 3 暗褐色 黒土、焼土を少量混入。
- P6 1 暗褐色 焼土、炭化物を少量混入。
- 2 暗褐色 ローム。
- P10 1 黒褐色 ロームを多量に混入。
- P11 2 暗褐色 ロームを少量混入。
- 3 暗褐色 ロームを多量に混入。



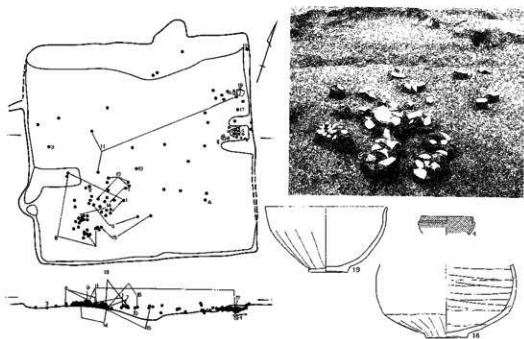
カマダ層序

- 1 暗褐色 焼土を少量混入。
- 2 赤褐色 焼土を多量に混入。
- 3 暗褐色 ローム、黒色土を混入。



支脚転用の高環。逆位で原位置を保っている。

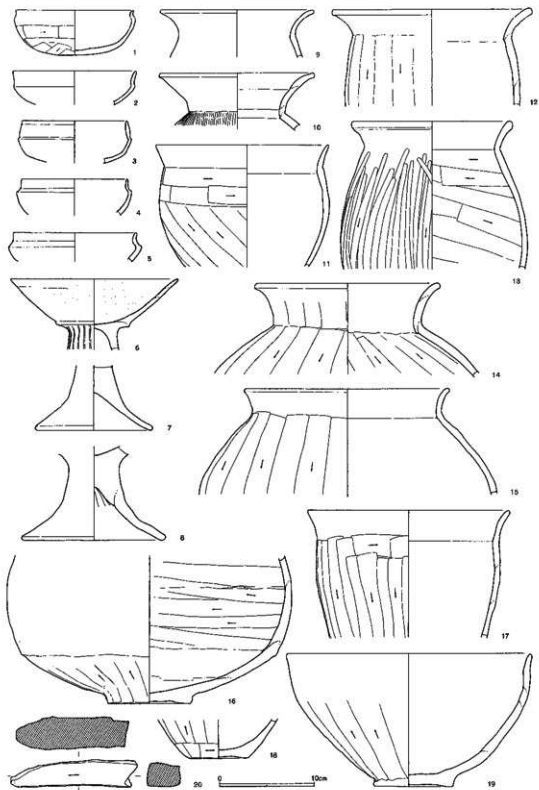
第32図 第6号住居跡・カマダ



第33図 第6号住居跡遺物分布

G・H-13 Gridに位置する。本跡は集落内の最も北に位置し、僅か5 m程で台地の縁辺に接し、並行して走る1・2号溝跡により北半部を切られる。規模は東西5.04m、南北5.0m、深さ16cmを測る。平面形は整った方形を呈する。主軸の示す方位はN-68°-Eを指す。覆土は焼土・ローム粒を混入する灰褐色土を主体に、壁際では多量の炭化物(材)・焼土の検出がある。カマドは東壁のほぼ中央に位置し、袖部のみ良好に遺存している。規模は両袖間で0.8m、袖の内側で0.32m、長さ0.7mを測る。壁への切り込みはなく壁体をそのまま使用。器設部に高坏(6)が逆位の状態で出土している。貯蔵穴(P5)はカマドの北側に隣接して検出された。平面形は長方形、規模は東西0.45m、南北0.63m、深さ14cmを測る。覆土は多量の焼土を混入する他、鉢(19)が内部北側より出土している。ピットは主柱と思われるP1~P4の他、P1とP4間にP7が西壁下に2穴(P8・P12)がP2の西に接してP6が存在する。P1~P4の規模は径25~35cm、深さ50~60cmを測る。壁体は堅緻で立ち上がりは急である。壁溝北壁下のみ認められ、幅0.7m、深さ12cmを測る。また、西壁から東に所謂間仕切り溝が幅0.6m、長さ1mに渡って掘り込まれている。出土遺物は貯蔵穴およびカマド内から検出されたもの以外は覆土中に散漫な分布を示し、遺存率も40%以下のものに占められる。

出土遺物(第34図) 坏は杓形態の(1)以外は全て所謂横置坏の範疇に含まれる。高坏は坏部に強い段を有し、直線的に開き脚部が低い柱状のもの(6)と、器壁が厚く低い柱状の脚部の2種がみられる。甕は小型の(9~11)を除くとほぼ2種に分けられる。口縁部の開きが小さく胴部の膨らみが大い(14~16)と口縁部の開きが大きく胴部の膨らみが小さな細身のタイプ(12・13)である。整形は(10)にカキ目がみられる他は縦位の筒削りが主流である。

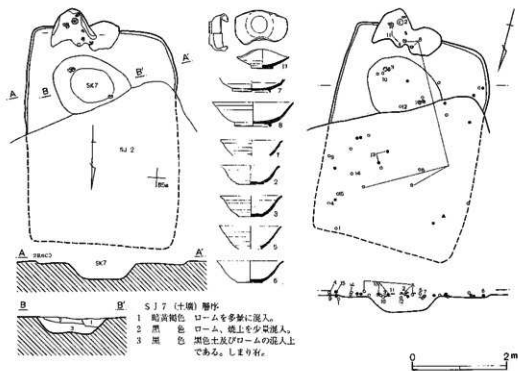


第34图 第6号居跡出土遺物

第6号住居跡遺物観察表 (第34回)

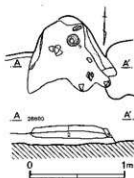
No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	7	坏A	12.2		4.7	135	W・B・G	A	淡赤褐色	90%	床直	41.55.82
02	6	坏B	(13.0)				U・W・G	B	橙 色	10%	覆土	一括
03	5	坏B	11.0				U・W・B・G	A	橙 色	20%	床直	28
04	2	坏B	11.0				B・W・U・R・G	A	橙 色	20%	カマド	101
05	4	坏B	13.0				U・W・B・G	A	暗赤褐色	10%	覆上	一括
06	3	高坏	17.8				U・W・G	A	橙 色	65%	カマド	
07	9	高坏	12.4				W・R・G	B	橙 色	40%	覆土	36
08	8	高坏	15.0				U・W・G	B	橙 色	30%	床直	60.62.82
09	10	甕	16.0				W・B・G	A	灰白色	5%	床直	85
10	13	甕	16.4				W・K・R・G	B	鈍い黄褐色	30%	覆上	32
11	11	小型甕 (17.0)					U・W・R・Ha・G	B	灰褐色	20%	床直	13.29.30
12	18	甕	21.0				U・W・R・G	B	淡赤褐色	15%	床直	20
13	15	甕	17.0				U・S・W・G	B	浅黄褐色	40%	床直	35.37.38.44
14	14	甕	19.2				B・U・Ha・G	B	灰黄色	20%	覆土	36.52.72
15	17	甕	21.0				U・W・G	B	鈍い黄褐色	15%	床直	39.58
16	20	甕	8.8				W・B・K・U・Ha	B	橙 色	20%	覆土	40.51
17	12	甕	(21.5)				U・R・R・W・G	A	橙 色	40%	覆土	貯蔵穴86
18	16	甕	5.8				W・U・G	B	淡褐色	20%	覆土	一括
19	1	鉢	25.4	7.1	13.9		W・B・S・U・Ha	B	橙 色	75%	覆土	99
20	19	砾石					G	A	灰白色	50%	覆上	一括

第7号住居跡 (第35回)



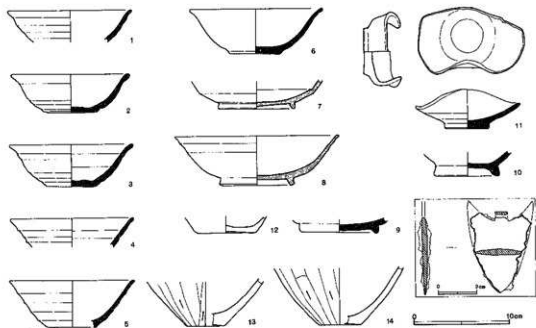
第35回 第7号住居跡・遺物分布

1-14・15 Gridに位置する。北側で2号住居跡を切り、本跡の中央を7号土壌により切られる。2号住居跡との切り合いは本跡が浅く覆土も近似しているため区分は困難であった。平面形は南北に長軸をもつ長方形を呈し、規模は東西3.18m、南北は遺物の分布状態から4.5m前後と推定される。深さは5cmを測る。主軸の示す方位はほぼ磁北を指す。覆土は1cm程の厚さで床面を広く覆う黒色土とその上を被覆する黄褐色土からなる。カマドは南壁の南東コーナー寄りにある。遺存状態は極めて悪く、東西0.9m、南北0.85mの範囲に粘土・焼土塊の分布が確認できる。掘り型は東西0.6m、南北0.65m、深さ10cm、平面形は略円形を呈する。壁への切り込みは20cmを測る。ピットは検出されなかった。遺物は全てカマド内およびカマドの検出段階に出土している。



第36図 第7号住居跡カマド

出土遺物（第37図）（7）は緑釉の稜椀、高台部は低く体部下半の稜は弱い。猿投窯K-90に比定される。（8）は灰釉の稜椀、胴部が緩やかに張りながら少し外反気味の口縁部に至る。底面は糸切り後ナデで整形が加わるが中央に糸切り痕を残す。高台断面形は施で面取りが施され明瞭な稜を作り出している（三日月高台第1類）。釉の範囲は内外面が一致せず外面は稜の下位までおよび刷毛がけがみられる。美濃窯産でK-90並行段階と思われる。須恵器坏は口径12.0~13.0cm、底径5cm強、器高4.5cmが平均的な計測値で、口径>底径×2の法量比を示す。甕(13・14)は「コ」の字口縁変底部と思われる。底面の整形は行なわず所謂「砂底」である。



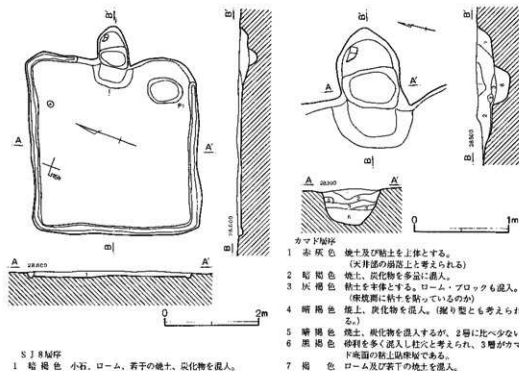
第37図 第7号住居跡出土遺物



第7号住居跡遺物観察表 (第37図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重G	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	須环	(13.0)				S-W-G	B	灰白色	20%	覆土	43
02	4	須环	12.4	5.2	4.0	120	U-W-G	B	灰白色	完形	カマド	6
03	1	須环	13.2	5.1	4.4		W-K-Ha-G	B	橙 色	60%	覆土	20
04	13	須环	(13.0)				Ha-W-G	A	オリーブ灰色	10%	覆土	42
05	11	須环	(13.0)				W-R-G	B	浅黄褐色	20%	覆土	28
06	5	須环	14.1	5.2	4.7		K-S-G	B	灰白色	70%	覆土	9
07	7	緑釉皿		8.0			W-G	A	明緑灰色	30%	覆土	18
08	5	灰釉皿		7.2			G	A	灰白色	70%	カマド	2,3,27,39
09	15	須环		8.0			W-G	A	灰白色	25%	覆土	36
10	14	須环		7.0			R-W-G	B	黄褐色	10%	覆土	21
11	5	須耳皿	11.0		4.1		U-G	A	灰白色	70%	カマド	7
12	3	环		6.0			R-S-G	B	黄褐色	20%	覆土	23
13	10	类	(14.0)		4.5		W-B-U-G	A	浅黄褐色	20%	覆土	30
14	12	壳	(4.4)				U-W-R-G	B	浅黄褐色	20%	覆土	38

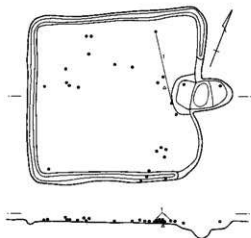
第8号住居跡 (第38図)



第38図 第8号住居跡・カマド

第8号住居跡遺物観察表 (第40図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重G	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	須壺	19.0		3.9		U-Ha-W-K-G	A	灰 色	80%	覆土	2,17



第39図 第8号住居跡遺物分布

り型から知られる規模は突き口を構成する南北90cm、東西40cmの平円状の掘り込みが住居跡内に位置し、壁外に南北60cm、東西45cm、深さ30cm程の一段低い楕円形の掘り込みが燃焼空間、さらに外に向かって南北65cm、東西45cmの半円状の掘り込みが煙道部と思われる。覆土はロームと焼土が重層している。ピットはカマドの南、南東コーナーに貯蔵穴がみられる他柱穴は存在しない。規模は東西50cm、南北75cm、深さ8cmを測る。平面形は楕円形を呈する。壁溝は南東コーナーを除く各壁下を幅25cm、深さ15cm程で巡る。出土遺物は須恵器甕の胴部破片が覆土全体に分布する他、須恵器蓋が北西コーナー部で出土した。

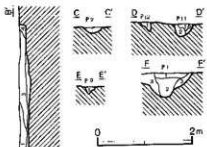
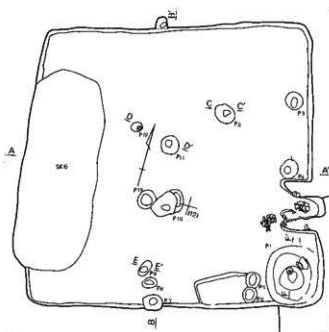
#### 第9号住居跡 (第41図)

I-11・12 Gridに位置する。南東コーナー部で10号住居跡を、西壁では6号土壇を切る。平面形は整った方形を呈する。規模は東西6.30m、南北5.94m、深さ20cmを測る。主軸の示す方位はN-75°-Eを指す。覆土は攪乱が広範囲に、しかも深く及んでいるため地山の砂礫を多量に混入している。基本的にはローム混入の暗褐色土が主体で壁際に黒色土が認められる。カマドは東壁の南寄りに位置する。規模は両袖間で1.12m、壁からの袖の長さ65cm、壁への切り込みは23cmを測る。袖材は砂質粘土で内面は10cm大の礫により補強されている。燃焼部には堯(21・22)が、その下から支脚が据え置かれている。底面は平坦で掘り込みはない。貯蔵穴はカマドの南、南東コーナーにあり、平面形は略円形、規模は東西1.13m、南北1.11m、深さ55cmを測る。ピットはP2が30cmの深度をもつ他は10cm内外の極めて貧弱なものである。壁体は堅緻である。壁溝は存在しない。遺物はカマド、貯蔵穴を中心に認められるが、特に高坏(15・16)はコーナーから貯蔵穴に向かって流れ込む状態が看取できる。遺物の多くは覆土中に小破片として存在する。また、床面のははは全域にわたって10~20cm大の自然石が多数検出されている。



第40図 第8号住居跡出土遺物

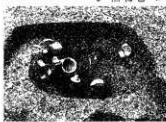
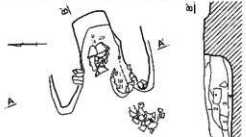
集落の最東端、J-16 Gridに位置する。切り合い関係はない。平面形は南東コーナーのみ隅丸の方形を呈する。規模は東西3.74m、南北3.59m、深さ9cmを測る。主軸の示す方位はN-68°-Wを指す。覆土は焼土、炭化物を多量に混入する暗褐色土の単層であるがかなり激しい攪乱を受けている。カマドは東壁中央に構築されている。天井部および袖部はすでに崩壊して存在しない。掘り



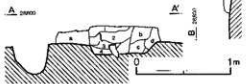
- ピット層序
- P 1 1 暗褐色 焼土、土器小片を混入。
  - (貯) 2 黒褐色 焼土、礫を混入。
  - 3 暗褐色 砂礫を多量に混入。
  - 4 暗褐色 砂礫を多量に混入。
  - P 2 1 黒褐色 ロームを少量混入。
  - P 9 1 黒褐色 炭化物、ロームを混入。
  - P 11 1 黒褐色 炭化物を少量混入。
  - 2 暗褐色 ロームを多量に混入。
  - 3 暗褐色 ロームを多量に混入。
  - P 12 1 黒褐色 ロームを少量混入。



- S J 9 層序
- 1 暗褐色 円礫を多量に混入。(径10cm)
  - 2 暗褐色 砂礫(径5mm)を密に混入。
  - 3 暗褐色 円礫、砂礫を混入。
  - 4 暗褐色 円礫、砂礫を混入。
  - 5 黒褐色 ローム・ブロック、砂礫を混入。



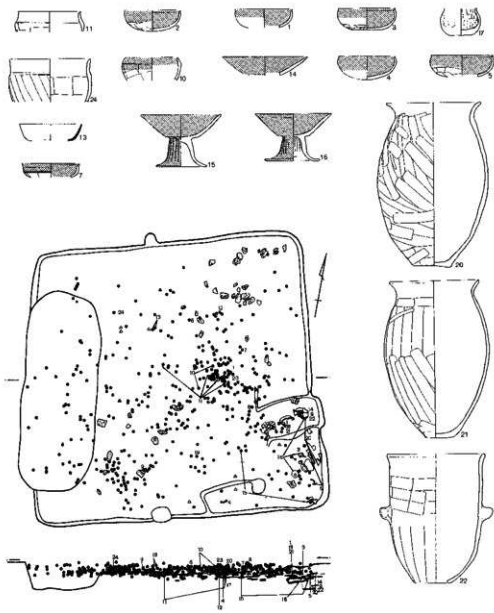
貯蔵穴の上部には日常雑器を納める棚状の施設が想定される。出土土器の大半は完形である。



- カマド層序
- 1 暗褐色 砂質粘土を多量に混入。
  - 2 暗褐色 砂質粘土を多量に混入。
  - 3 暗褐色 赤化粘土である。
  - 4 黄褐色 粘土質である。
  - 5 灰黄褐色 砂質粘土である。
  - 6 灰黄褐色 砂質粘土に焼土・ブロックが混入。
  - a 暗褐色 砂礫を多量に混入。
  - b 灰白色 砂質粘土である。
  - c 暗褐色 砂質粘土、焼土を混入。
  - d 暗褐色 砂礫を多量に混入。

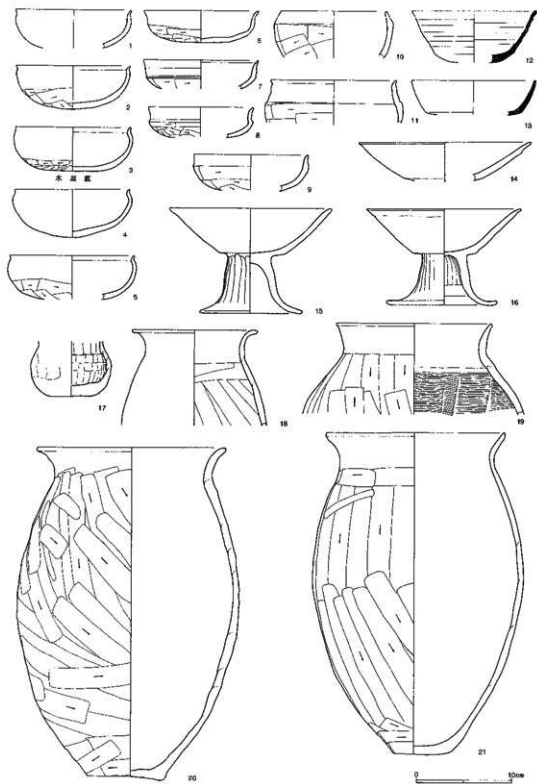


第41図 第9号住居跡・カマド

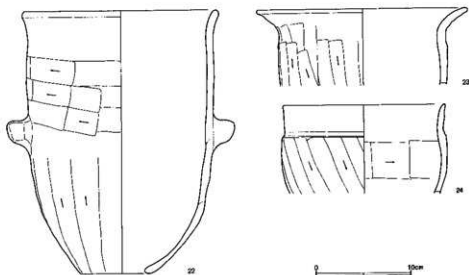


第42図 第9号住居跡遺物分布

出土遺物（第42～44図）は口縁部が外傾する椀タイプと模倣杯の双方が出土しているが前者が量的に圧倒している。底部は丸く器高が高い（1・4）と平坦に近い（3・5）がある。高杯は杯部下端に強い稜をもち直線的に開き、脚部は開きが小さく胴部で急激に開く（15・16）。甕は頸口縁で頸部から胴部へ緩やかに移行、胴部は長胴で底面が肥厚するものが多い。整形は斜位の寛割りで、底部は軟材に削り込む。甗は小振りな把手をもつ（22）は口縁部の開きが弱く、直線的に胴部下半まで延び、底部へは急激にすはまる。（22）は口縁部が強く外反。



第43图 第9号住居跡出土遺物(1)

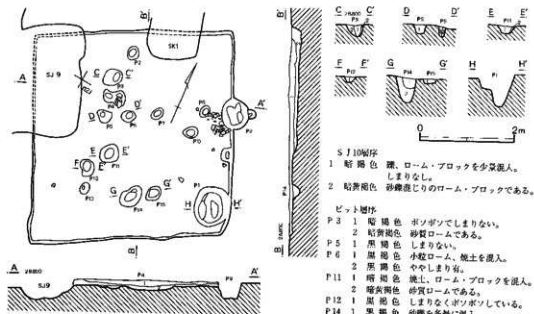


第44図 第9号住居跡出土遺物(2)

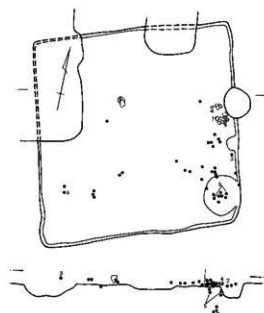
第9号住居跡遺物観察表(第43図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重 <sup>g</sup>	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	16	坏A	(12.0)				W・B・R・G	A	浅黄褐色	20%	カマド	462
02	8	坏A	(12.0)		(4.5)		U・R・B・G	A	淡褐色	30%	カマド	一括
03	12	坏A	(12.0)		(4.6)		U・W・R・G	A	赤褐色	70%	覆土	SP5-5
04	9	坏A	12.0		4.9		U・W・G	A	橙 色	70%	覆土	460
05	14	坏A	(13.0)				R・W・G	A	淡赤褐色	30%	覆土	P5-4.14
06	1	坏B	12.1		3.4		W・G	A	淡赤褐色	60%	覆土	237
07	17	坏E	(12.0)				B・W・G	B	橙 色	20%	覆土	110
08	3	坏E	(11.0)				W・B・G	A	黄褐色	20%	覆土	123
09	15	坏D	(12.0)				R・U・W・G	A	赤棕色	20%	カマド	446
10	11	碗	11.0				U・B・R・G	B	淡褐色	20%	覆土	97.148
11	4	坏B	13.0				U・W・B・G	A	橙 色	40%	覆土	315.330.341.
12	5	須坏	(13.0)				B・W・G	B	灰白色	20%	覆土	89
13	6	須坏	(13.0)				W・G	A	灰白色	20%	覆土	317.318
14	13	高坏	(18.0)				U・W・R・G	A	赤褐色	40%	カマド	446
15	21	高坏	17.0	10.8	11.9		G	A	明赤褐色	80%	覆土	P5-15.358
16	19	高坏	16.0	11.2	10.1		R・U・W・G	A	赤褐色	70%	カマド	5P-5.13
17	18	小型壶		4.2			U・Ha・W・R・G	B	浅黄褐色	60%	覆土	334
18	20	甕	(13.0)				U・W・B・G	A	橙 色	10%	カマド	462
19	10	甕	(16.0)				U・B・W・R・G	B	淡褐色	15%	覆土	166
20	23	甕	19.8	7.0	34.3		G	A	鈍い赤褐色	95%	貯穴	SP5-1.3.7.8
21	24	甕		5.8	63.5		G	A	鈍い褐色	50%	カマド	462
22	22	甕	20.0	7.1	27.4		G	A	橙 色	60%	カマド	464
23	7	甕	(22.0)				U・B・R・G	B	淡褐色	20%	覆土	325
24	2	甕	(17.0)				U・W・Ha・G	B	灰褐色	20%	覆土	16

第10号住居跡 (第45図)



第45図 第10号住居跡



第46図 第10号住居跡遺物分布

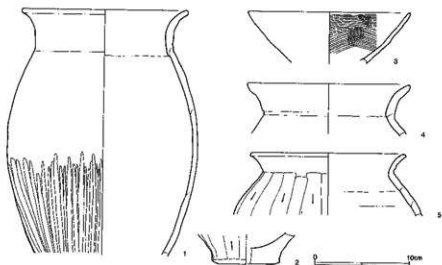
溝はない。遺物は総数39点と少なく、カマド想定位置以外は極めて散漫な分布である。

出土遺物 (第47図) 甕(1)は直立気味に立ち上がり中位で弱く外反する口縁部で、胴部は長胴。(4・5)は「く」の字状口縁を呈し外反が強い。高坏(3)は内面刷毛目を残す。

I-12 Gridに位置する。北東コーナーを9号住居跡、北壁の一部を1号土竪に、東壁中央を17号ピットにそれぞれ切られる。平面形は整った方形、規模は東西4.25m、南北4.30m、深さ20cmを測る。主軸の示す方位はN-19°-Wを指す。覆土は砂礫混じりの暗褐色土が上面を、ローム、ブロックを多量に混入する暗黄褐色土が床面全域を覆う。カマドは東壁中央を切る17号ピット周辺に粘土、焼土が密に分布することや壺がまとまって出土していることからピット周辺の位置に想定することが可能である。貯蔵穴はカマド想定位置の南、南東コーナーにあり、平面形は楕円形、規模は東西0.77m、南北0.84m、深さ55cmを測る。床面は中央を境に北半部が漸次レベルを下げ、凹凸が激しくなる。ピットは11ヶ所確認されたが、P3(深さ55cm)以外は20cm以下の深度である。壁

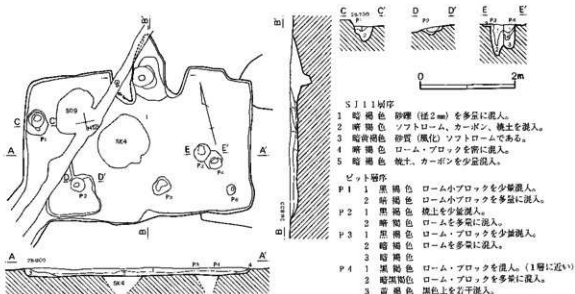
第10号住居跡遺物観察表 (第47図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重Q	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	甕	(17.4)				W・U・R・G	A	棕色	30%	床直	1
02	5	甕		7.2			W・B・U・Ha・G	B	棕色	25%	覆土	4
03	3	高坏	(17.0)				W・U・G	A	赤褐色	20%	覆土	7
04	1	甕	(17.0)				W・U・G	A	棕色	20%	覆土	1
05	4	甕	(16.4)				W・R・G	B	淡赤褐色	10%	貯穴	32,36



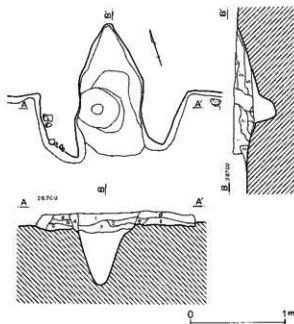
第47図 第10号住居跡出土遺物

第11号住居跡 (第48図)

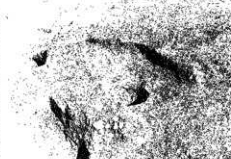


第48図 第11号住居跡



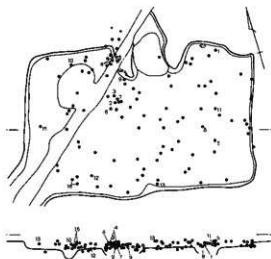


第49図 第11号住居跡カマド



砂質粘土とロームを混在した袖材は崩れやすく遺存は極めて悪い。

- カマド層序
- 1 暗褐色 小粒ローム・ブロックを多量に混入。
  - 2 黒褐色 焼土、ローム・ブロックを密に多量に混入。
  - 3 黒褐色 焼土の混入が極めて多い。
  - 4 黒褐色 砂質粘土上、焼土を混入。
  - 5 黄褐色 ローム・ブロックを混入。
  - 6 褐色 焼土、砂質ローム混じりである。
  - a 灰褐色 砂質ローム、焼土の混在土である。
  - c 暗褐色 砂質ローム混じりである。
  - d 白 粘土質である。
  - e 灰白色 白色粘土と砂質粘土の混在土である。
  - f 暗褐色 しまり、粘性有。

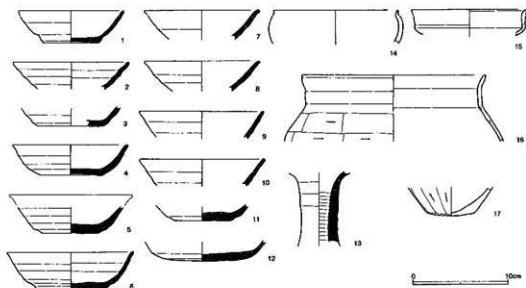


第50図 第11号住居跡遺物分布

H-11・12 Gridに位置する。東側で40号住居跡、西側で4、9号土壁、9、10号溝跡を切っており本跡が最も新しい。平面形は東西に長軸をもつ整った長方形、規模は東西4.81m、南北3.07m、深さ15cmを測る。主軸の示す方位はN-14°-Eを指す。覆土は砂礫・ソフトロームを混入する暗褐色土が主体で壁際にローム、焼土の混入が目立つ。カマドは北壁中央にあり、袖部のみ遺存している。規模は両袖の外側で1.65m、内側で0.6m、長さ1.45mを測る。壁外への切り込みは0.74mである。ピットは6本検出された。規模は径30~40cm、深さ15~70cmの円形乃至不整形で、P3・P4が最も深いが対応するものない。壁溝は存在しない。遺物は

カマド内から出土した(1)の坏を除くと大半は覆土中に散漫な分布を示す。出土総数は112点を数えるが遺存率は50%以下である。

出土遺物(第51図)須恵器坏と土師器甕に分けられる。坏は体部下半に稜をもって立ち上がるものが多い。法量は口径12~13cm、底径6~7cm、器高6cmに集中している。胎土に白色針状物質を多量に混入し焼成は良い。甕は「コ」の字状口縁の台付甕(16)で全体に器壁は薄い。



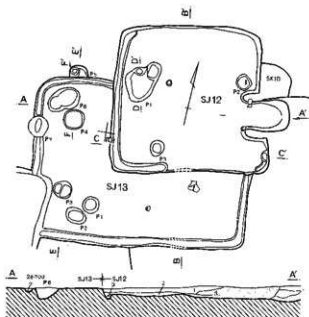
第51図 第11号住居跡出土遺物

第11号住居跡遺物観察表 (第51図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重G	胎土	焼成	色 調	残存	位置	注記番号
01	4	須环	11.0	6.0	3.4		Ha・W・G	A	灰白色	50%	カマド	112
02	5	須环	(12.0)				W・Ha・G	A	灰白色	10%	床底	83
03	11	須环		(7.0)			Ha・W・G	A	灰白色	10%	覆土	19
04	8	須环	(12.0)	(6.4)	3.2		Ha・W・U・G	A	灰白色	40%	覆土	29.32
05	14	須环		5.8			U・Ha・W・G	A	灰白色	30%	覆土	62
06	10	須环	(13.0)	(7.2)	3.8		Ha・U・W・G	A	灰白色	30%	覆土	74
07	12	須环	(12.0)				Ha・W・G	A	灰 色	10%	覆土	84
08	13	須环	(12.0)				W・G	A	灰白色	5%	覆土	98
09	7	須环	13.0				W・B・G	A	灰白色	30%	覆土	35
10	6	須环	(13.0)				W・Ha・G	A	灰白色	10%	覆土	23
11	15	須环		6.0			U・Ha・W・G	A	灰白色	20%	覆土	49
12	16	須环					B・W・G	A	灰 色	5%	床底	7
13	9	須壺					W・B・U・G	A	灰 色	15%	覆土	38
14	2	环A	(13.0)				W・B・G	A	赤褐色	5%	覆土	
15	3	环E	(12.0)				W・G	A	赤褐色	5%	覆土	76
16	1	堿	(19.5)				R・W・U・G	A	明赤褐色	15%	覆土	4.5
17	17	堿		5.0			U・W・R・G	A	灰白色	5%	覆土	

第12号住居跡 (第52図)

I-1 3 Gridに位置する。南半部で13・14号住居跡を切り、カマドの北半を11号土壌に切られる。平面形は方形を呈する。規模は東西3.37m、南北3.02m、深さ18cmを測る。主軸の示す方位はN-80°-Eを指す。覆土はローム・焼土・炭化物を含む暗褐色土、黒褐色土が住居の中心に向い交互に流入している。カマドは東壁中央に位置し袖部のみ良好に遺存する。規模は両袖の外側で1.0m、内側で0.6m、長さ1.07mを測る。壁外への切り込みは55cmである。燃焼面は平坦で床面と同一レベルである。ピットは3本検出された。内P1としたものは明らかに後出の掘り込み(土

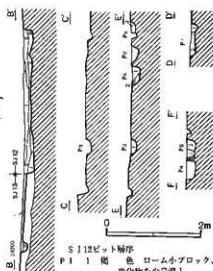


SJ12層序

- 1 暗褐色 ローム、焼土を少量混入。
- 2 黒褐色 ローム小ブロックを多量に混入。しまり有。
- 3 暗褐色 ローム・ブロックを混入。
- 4 黒茶褐色 焼土、炭化物を多量に混入。
- 5 暗褐色 焼土、炭化物を多量に混入。
- 6 褐色 ローム、焼土、炭化物を少量混入。
- 7 黒褐色 ローム、焼土を少量混入。
- 8 暗褐色 ロームを多量に混入。

SJ13層序

- 1 黒褐色 焼土、炭化物を少量混入。
- 2 暗褐色 焼土を少量混入。

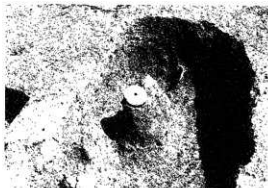
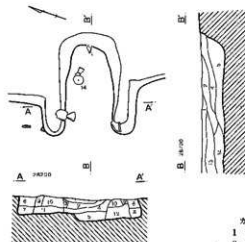


SJ12ピット層序

- P1 1 褐色 ローム小ブロック、焼土、炭化物を少量混入。
- 2 褐色 ローム小ブロックを多量に混入。

SJ13ピット層序

- P3 1 黒褐色 ロームを少量混入。
- P4 1 黒褐色 ロームを少量混入。
- 2 暗褐色 ロームを多量に混入。
- P5 3 黒色 ロームを少量混入。  
(破片を先に割った丸いビートの切り合いは不明である)
- P6 1 暗褐色 ロームを少量混入。
- 2 暗褐色 ロームを多量に混入。



カマド燃焼部から出土した紡錘車。かなり大型の須恵器甕を使用している。

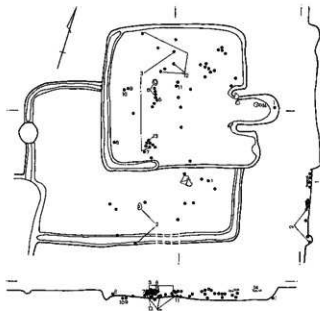
カマド層序

- 11 黒褐色 ローム・ブロックを混入。しまりなし。
- 12 黒褐色 ローム、焼土を混入。しまりなし。
- 13 黒茶褐色 焼土、炭化物を多量に混入。
- 14 黒褐色 ローム小ブロックを多量に混入。

- 1 暗褐色 ローム、焼土を少量混入。
- 2 暗褐色 焼土、炭化物、焼土を少量混入。
- 3 暗茶褐色 粘土ブロックである。
- 4 褐色 暗茶褐色粘土、焼土を多量に混入。
- 5 暗褐色 ローム小ブロックを少量混入。(隅り型埋土)
- 6 黒褐色 ローム小ブロックを混入。
- 7 暗黒褐色 ローム・ブロックを多量に混入。
- 8 茶褐色 焼土を少量混入。
- 9 黒褐色 ロームを混入。しまり有。
- 10 黒褐色 暗灰色粘土ブロック、焼土ブロック、炭化物、ロームを多量に混入。しまり有。

第52図 第12・13号住居跡・カマド

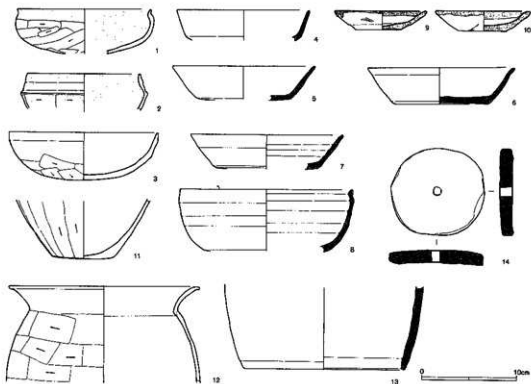
壁)に上面を切られている。規模は径30cm、深さ10~20cmを測る。3本に対応する南東コーナー周辺には検出されていない。壁溝は西壁下と南壁下の一部に認められ、幅20cm、深さ8cm程を測る。遺物は総数55点、カマド内およびその周辺に集中する。P1を切る土壌内からは瀬戸皿2枚が完形で出土している。



第53図 第12号住居跡遺物分布

で出土している。

出土遺物(第54図)須恵器坏(4~7)は口径14~15cm、底径10cm前後、器高3.5~4cmを計る。底面は切り離した後全面回転彫削り。甕は「く」の字状口縁で器壁は薄い。(14)は須恵器甕胴部片利用の紡錘車で口径10.2cm×8.8cm、重量140gを計る。



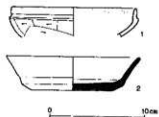
第54図 第12号住居跡出土遺物

第12号住居跡遺物観察表 (第54図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	4	坏A	(14.0)				U・W・G	A	淡棕色	5%	カマド	52
02	6	坏B	(12.0)				W・G	A	淡赤棕色	15%	カマド	一括
03	9	坏D	15.8		5.0		Ha・B・W・R・G	B	浅黄棕色	40%	覆土	15, 36
04	10	須环	(14.0)				W・G	A	灰色	10%	覆土	
05	7	須环	(15.0)	(10.0)			U・G	A	灰白色	20%	覆土	26
06	1	須环	15.3	9.2	3.8		W・G	A	灰白色	70%	覆土	21, 24
07	8	須环	(16.0)	(10.6)	3.5		Ha・W・G	A	灰白色	20%	覆土	37
08	5	須环	18.0				S・W・G	A	灰白色	20%	覆土	39
09	2	瀬戸皿	9.7	4.7	2.0	72	G	A	浅黄棕色	定形	床直	P1-2
10	3	瀬戸皿	9.8	5.0	2.1	95	G	A	浅黄棕色	定形	床直	P1-2
11	12	甕		6.4			U・W・G	A	淡棕色	20%	覆土	12
12	14	甕	20.0				W・B・G	A	橙 色	15%	覆土	14, 17, 20
13	13	甕		(17.0)			W・Ha・G	A	灰白色	10%	覆土	31
14	11	紡錘車				140	W・G	A	オリーブ灰色	定形	カマド	49

## 第13号住居跡 (第52図)

I-13 Grid に位置する。北東部を12号住居跡、南西コーナーを3号土壌に切られ、南半で14号住居跡を切る。平面形は東西に長い長方形を呈し、規模は東西4.62m、南北3.45m、深さ5cmを測る。主軸の示す方位はN-80°-Eを指す。覆土は焼土、炭化物を多量に混入する黒褐色土が主体である。カマドは検出されていない。ピットは7ヶ所認められ余て西半部に集中している。規模は径40cm、深さ20-40cmのものが多く、壁溝は本来一周していたものと考えられる。遺物は総数14点と少ない。



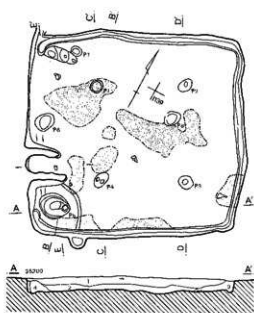
第55図 第13号住居跡出土遺物

第13号住居跡遺物観察表 (第55図)

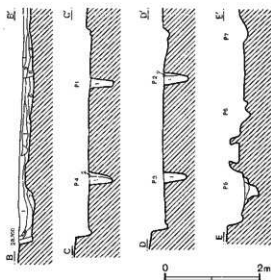
No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	坏B	(13.0)				U・W・G	A	赤棕色	15%	覆土	3
02	2	須环	14.0	8.6	3.4		Ha・W・G	A	灰 色	60%	覆土	7, 14

## 第14号住居跡 (第56図)

I-13 Grid に位置する。西半部は12、13号住居跡に切られる。形状は南東部がやや内径した略方形を呈する。規模は東西4.63m、南北4.50m、深さ31cmを測る。主軸の示す方位はN-63°-Eを指す。覆土は焼土ブロックを多量に混入する黒褐色土が主体である。カマドは西壁の南西コーナー寄りにあり、袖部のみ良好に遺存している。規模は、両袖部の外側で0.86m、内側で0.50m、長さ、0.85mを測る。壁外への切り込みはなく、壁体をそのまま使用している。燃焼面の掘り込みはなく床面と同レベルで使用。カマド内からは、定形の支脚 (25) がほぼ原位置で出土している。貯蔵穴はカマドの南、南西コーナーにある。形状は、東西1.10m、南北1.16m、深さ10cm弱浅い円形の掘り込みの内側に60×50cm、深さ40cmの円形のピットが再度掘り込まれている。内部は焼土、



- S J14層序
- 1 黒褐色 焼土、ロームを少量混入。しまり有。
  - 1' 黒褐色 1層より焼土を多量に混入。
  - 2 新緑褐色 焼土ブロック、炭化物を多量、ロームを少量混入。
  - 2' 暗黒褐色 2層よりローム、ブロックを多量に混入。
  - 3 黒褐色 ローム小ブロックを多量に混入。
  - 4 黒褐色 ロームを少量混入。(壁材の可能性有り)
  - 5 暗黒褐色 ロームを多量に混入。
  - 6 暗黒褐色 ロームを多量に混入。(焼土の混入はほとんどない)
  - 7 明褐色 ロームを多量に混入。



ピット層序

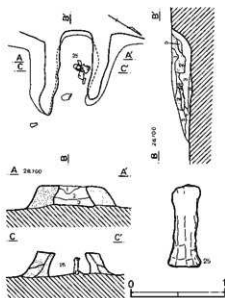
- |     |   |      |                 |
|-----|---|------|-----------------|
| P 1 | 1 | 黒褐色  | ローム、焼土を少量混入。    |
| P 2 | 1 | 黒褐色  | ロームを少量混入。       |
|     | 2 | 暗褐色  | ローム小ブロックを多量に混入。 |
| P 3 | 1 | 黒褐色  | ロームを少量混入。       |
| P 4 | 1 | 黒褐色  | ロームを少量混入。       |
|     | 2 | 暗褐色  | ローム小ブロックを多量に混入。 |
| P 5 | 1 | 黒褐色  | ロームを少量混入。       |
| (貯) | 2 | 暗褐色  | ローム・ブロック        |
|     | 3 | 暗黒褐色 | ローム多量、焼土少量を混入。  |



床面は焼土・炭化物に広く覆われている。遺物は破片が多く、焼土の上面から出土しており二次焼成は受けていない。

第56図 第14号住居跡・遺物分布

炭化物が多量に混入していた。ピットは9本検出され、円P 1～P 4が主柱穴と思われる。主柱穴の規模は径30cm、深さ40～50cmを測る。壁溝はカマドを有する西壁を除く各壁下を、幅17cm、深さ5cmで巡る。遺物は総数118点を数える。



カマド層序

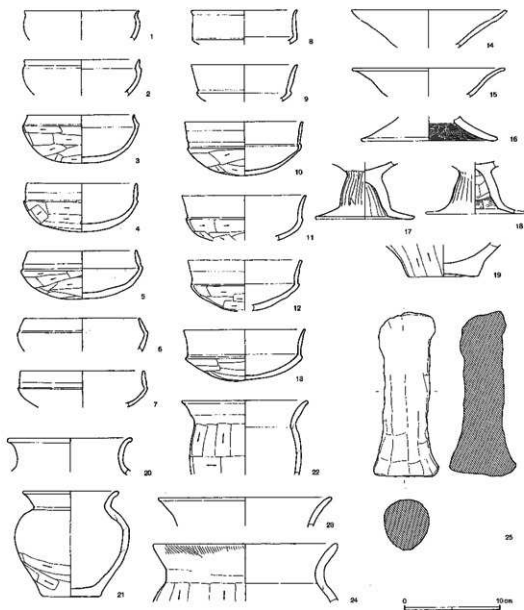
- 1 暗赤色 焼土、粘土を少量混入。
- 2 灰褐色 粘土。
- 3 暗褐色 焼土、粘土、炭化物を少量混入。
- 4 赤褐色 焼土化している。
- 5 黒褐色 焼土ブロックを多量に混入。
- 6 暗褐色 焼土、粘土を少量混入。
- 7 黒色 炭化物多量、焼土ブロック少量を混入。
- 8 褐色 ロームを多量に混入。(樹り型・埋土成いは火床面下層)
- 9 暗灰色 焼土、粘土を多量に混入。

第57図 第14号住居跡カマド

第14号住居跡遺物観察表 (第58図)

No	番号	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	5	坏A	(12.0)				W・R・G	A	淡赤褐色	20%	覆土	63
02	6	坏A	(12.0)				W・B・G	A	明灰褐色	20%	覆土	67
03	22	坏B	11.2	5.1	175		W・G	A	赤褐色	完形	覆土	23
04	3	坏B	11.9		201		W・R・G	A	褐色	完形	覆土	37
05	23	坏B	11.6				W・G	A	赤褐色	70%	覆土	53
06	8	坏B	(12.0)				W・B・G	A	褐色	10%	覆土	5
07	15	坏B	(13.0)				W・R・G	A	赤褐色	20%	覆土	56
08	11	坏C	(11.0)				W・U・G	A	褐色	10%	覆土	59
09	12	坏C	(11.0)				W・U・G	A	鈍い褐色	10%	覆土	28
10	14	坏C	12.5	5.7			W・U・G	A	赤褐色	70%	覆土	61
11	7	坏C	13.0	(5.0)			R・W・G	A	浅灰褐色	60%	覆土	45
12	4	坏C	12.0	(5.3)			G	A	淡赤褐色	50%	覆土	74
13	19	坏C	12.8	5.3	215		U・Ha・W・G	A	淡赤褐色	完形	覆土	20
14	10	高坏	(16.0)				W・U・G	A	淡赤褐色	10%	覆土	49
15	16	高坏	(16.0)				U・B・R・G	A	褐色	10%	覆土	82
16	17	高坏		(14.0)			R・W・G	A	淡褐色	20%	覆土	36
17	2	高坏		10.4			W・U・G	A	赤褐色	40%	床直	22
18	9	高坏					W・G	A	褐色	30%	覆土	16
19	24	甕		7.4			W・Ha・G	B	赤灰色	25%	覆土	9.10
20	21	小型甕	(13.0)				R・G	A	明灰褐色	5%	覆土	62
21	1	小型甕	10.2	6.2			G	A	赤・黒色	75%	床直	1.3.7.8
22	13	小型甕	(13.0)		11.0		U・W・G	B	灰赤色	20%	覆土	73
23	18	甕	(18.0)				W・B・G	A	浅黄褐色	10%	覆土	65
24	20	甕	(19.4)				U・W・G	A	淡赤褐色	5%	覆土	39

出土遺物(第58図)坏は横做坏主体の構成。口縁部は外傾し、赤彩を施さないものが多い。高坏は坏部が大きく開き中位で更に外傾。脚部は坏部に比して小型。裾部で強く屈曲。支脚(25)は基部の径7.0×6.0cm、先端部径4.8cm、器高17.3cm、重量660gを計る。

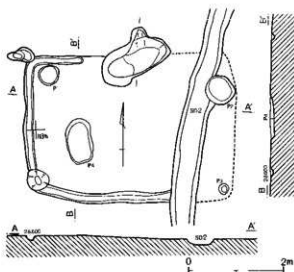


第58図 第14号住居跡出土遺物

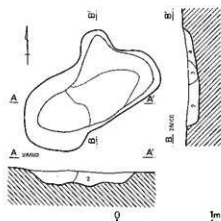
第15号住居跡 (第59図)

I-13・14 Grid に位置する。東半部は自然傾斜と割平のため遺存状態は極めて悪い。更に、南北に走る 2 号溝跡に切られる。形状は東西に長軸をもつ長方形で、規模は東西 4.50m (推定)、南北 3.05m、深さ 5cm を測る。主軸の方位はほぼ北を指す。カマドは北壁の中央にあり、遺存状態は悪い。掘り型から得られる数値は東西 1.5m、南北 0.7m、深さ 14cm の浅い楕円形を呈する。この掘り込みにより袖部および燃焼空間を型造っている。壁外への切り込みは 58cm を測る。ピットは各コ





ピット層中  
P1 1 赤褐色 径4-5cm大のローム・ブロックを混入。しまりなし。



S 15カマド層序  
1 黒褐色 ロームを多量に、焼土、炭化物は少量混入。  
2 暗茶褐色 しまりなし。カマドを壊す古い擾乱層。  
3 暗黄色 焼土、ロームを少量混入。カマドを壊す古い擾乱層。  
4 暗褐色 ローム・ブロックを混入。カマドの掘り型は埋土である。

第59図 第15号住居跡・カマド

一ナ一部あるいはその周囲に主柱と思われる4本がある。規模は径40-45cm、深さ10-40cmを測る。壁溝は西半部において幅20cm、深さ5cmの規模で検出された。遺物は8点と少ない。



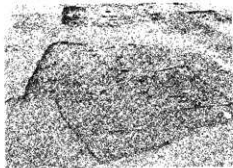
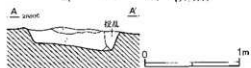
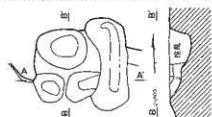
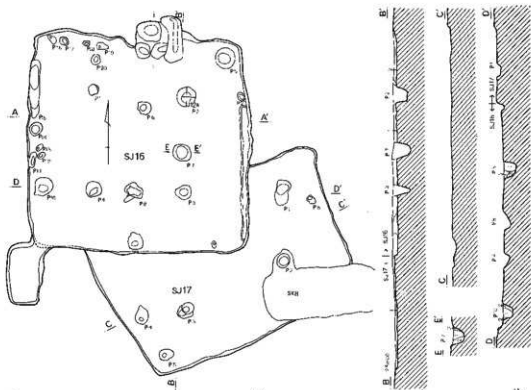
第60図 第15号住居跡出土遺物

第15号住居跡遺物観察表 (第60図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	坏A	14.0		8.5	480	Ha-U・W・R・G	B	浅黄褐色	90%	カマド	6

第16号住居跡 (第61図)

1・J-11・12 Grid に位置する。南東部で17号住居跡を切り、南西コーナーを擾乱により切られる。平面形は整った方形を呈する。規模は東西4.76m、南北4.55m、深さ14cmを測る。主軸の方位はほぼ北を指す。覆土はローム、炭化物、焼土を混入する黒褐色土が主体で壁際には茶褐色土がみられる。カマドは北壁のやや東寄りに設けられているが擾乱により遺存状態は極めて悪い。掘り型によると、住居の内側に2cm程の浅い掘り込みを設けて袖部とし、奥に径50cm程の楕円形ピットを配して焼成部としている。壁外への切り込みは30cmを測る。ピットは壁際に小規模なものが多数が検出され、中央には主柱と思われる4本 (P1-P4) が、北東コーナーとカマドの正面に各1本検出されている。規模は径30cm、深さ20cm前後を測る。貯蔵穴は存在しない。壁溝は東・西壁下に断続的に認められる。規模は幅20cm、深さ10cm程である。遺物総数69点、分布は散漫で遺存状態も50%以上は僅かに1点である。



SJ16層序

- 1 黒褐色 砂質、ローム、炭化物を少量混入。
- 2 暗褐色 砂質、ローム、砂礫を多量に混入。
- 3 茶褐色 砂質、ローム、横土を多量に混入。

SJ17層序

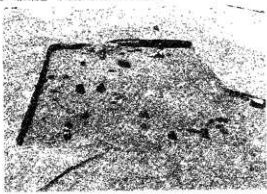
- 1 暗褐色 砂質、ロームを少量混入。

ピット層序

- P3 1 暗褐色 砂礫混じりである。
- 2 黒褐色
- 3 暗褐色 ソフトローム層である。
- P7 1 暗褐色 砂礫混じりである。ローム・ブロックを混入。
- 2 暗褐色 砂礫混じりである。ローム・ブロックを密に混入。
- P10 1 暗褐色
- 2 暗褐色 ローム・ブロックを多量に混入。

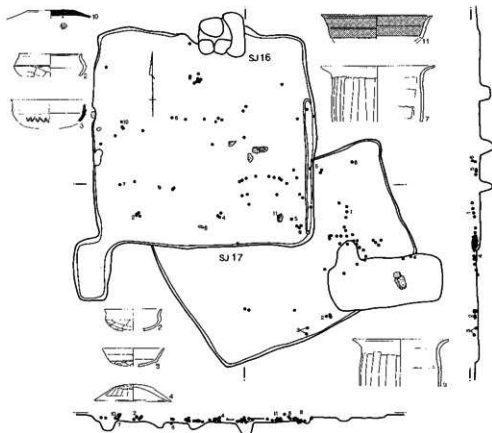
カマド層序

- 1 暗褐色 焼土、砂礫、砂質粘土である。
- 2 暗褐色 砂礫混入、焼土も少量混入。



第61図 第16・17号住居跡・カマド

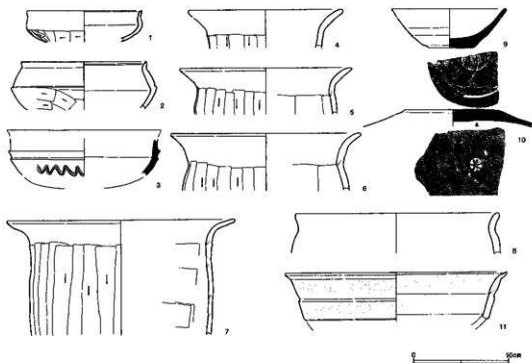
出土遺物（第63図）住居の廃絶時期を示す良好な資料は検出されていない。坏は(1)が所謂比企型坏に、(2)は口縁端部が突出、口縁全体は緩やかに内傾、(3)は体部に4本歯歯による横走波状紋が認められる。(4-7)は口縁部の屈曲が大きく、胴部の影らみの弱い甕、(10)の内面には「木」の印刻がみられる。(11)は口縁部下半に薄い帯状の隆帯が付されている。



第62図 第16・17号住居跡遺物分布

第16号住居跡遺物観察表（第63図）

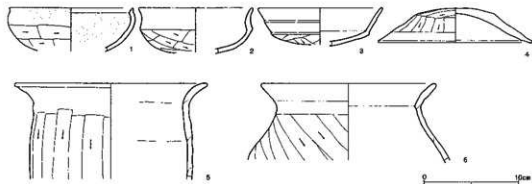
No	測	器種	口径	底径	高さ	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	3	坏E	(12.0)				W-G	A	明赤褐色	30%	覆土	
02	4	坏B	(13.0)				W-B-G	A	明赤褐色	20%	覆土	30
03	8	須高坏	(16.0)				G	A	灰白色	5%	覆上	
04	11	甕	(16.0)				Ha-U-W-G	B	淡褐色	10%	覆土	39
05	5	甕	(18.0)				W-R-G	B	淡褐色	10%	覆土	47
06	6	甕	(20.0)				W-L-B-G	B	鈍い赤褐色	10%	床直	17
07	2	甕	24.0				U-W-B-G	A	鈍い褐色	40%	覆土	28
08	10	甕	(21.0)				Ha-U-W-G	A	淡褐色	10%	覆土	63
09	1	須环	12.2	4.7	4.1		U-W-G	B	明灰褐色	70%	覆土	
10	9	須釜					G	A		40%	覆土	13
11	7	鉢	23.0				W-B-G	A	赤褐色	10%	覆土	46



第63図 第16号住居跡出土遺物

第17号住居跡 (第61図)

J-11・12 Gridに位置する。北西部を16号住居跡に、南東部を9号土壌にそれぞれ切られる。平面形は東西に長軸をもつ長方形で、規模は東西5.10m、南北3.30m、深さ5cmを測る。主軸の示す方位はN-66°-Eを指す。覆土は砂質でローム混入の暗褐色土を主体とする。貯蔵穴、カマドは検出されていない。ピットはP2およびP3と16号住居跡内のP1が主柱と考えられ、残りの対応するピットは9号土壌に破壊されたものと思われる。P5・P6は出入り口に関連したものと思われる。P1～P3の規模は径30～50cm、深さ30cmを測る。壁溝は認められない。遺物は出土総数45点と少ない。



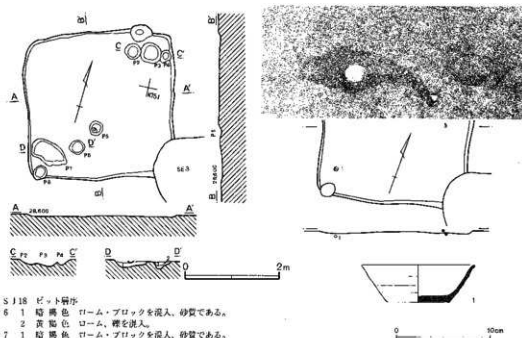
第64図 第17号住居跡出土遺物

第17号住居跡遺物観察表 (第64図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	坏A	(13.0)				U・Ha・W・G	A	橙 色	20%	覆土	7
02	3	坏B	(12.0)				HaU・W・B・G	A	橙 色	20%	覆土	40
03	2	坏C	(13.0)				W・U・G	A	橙 色	40%	覆土	38,39
04	6	壺	16.4		3.6		U・W・G	B	淡赤褐色	70%	覆土	34
05	4	罍	(20.0)				W・B・G	A	淡褐色	45%	覆土	1
06	5	甕	(18.0)				W・U・Ha・G	A	明灰褐色	10%	覆土	25

第18号住居跡 (第65図)

K-14・15 Grid に位置する。南1.7mには同一の主軸を有する3号掘立柱建物跡がある。南東コーナーは3号井戸跡に切られる。平面形は整った方形、規模は東西3.23m、南北3.10m、深さ4cmを測る。主軸の示す方位はN-75°-Eを指す。覆土は砂質でローム混入の暗褐色土である。カマドは存在しない。ピットは北東コーナー周辺に4ヶ所、南西コーナー周辺に4ヶ所認められるが掘り型も明瞭ではなく、深さも10cmに満たないものである。壁溝は存在しない。遺物は総数6点に過ぎない。内1点は唯一図示した須恵器坏でP8から出土している。

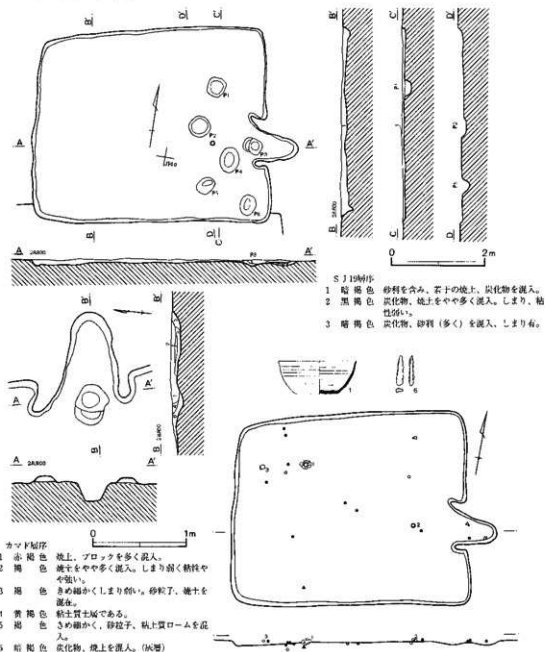


第65図 第18号住居跡・出土遺物

第18号住居跡遺物観察表 (第65図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	須坏	12.0	6.6	3.9		W・Ha・G	A	灰白色	70%	覆土	1

第19号住居跡 (第66図)

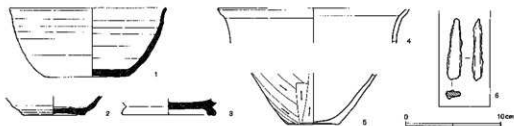


第66図 第19号住居跡・出土遺物・カマド

J-14 Grid に位置する。南壁は29号住居跡を切っている。平面形は東西に長軸をもつ閉九長方形、規模は東西5.13m、南北4.11m、深さ9cmを測る。上軸の示す方位はN-80°-Eを指す。覆土は焼土、炭化物を混入する暗褐色土が主体。カマドは東壁の南東コーナー寄りにある。規模は袖部の外側で1.12m、内側で0.53m、煙出しまでの長さ1.05mを測る。壁外への切り込みは0.63mを測る。燃燒部は径35cm、深さ25cm程の掘り込みが相当する。袖は粘性の高い粘土により構築。ピツ

第19号住居跡遺物観察表 (第67図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	須碗	15.4	8.4	7.3	323	Ha-W-G	A	灰色	90%	床直	6
02	3	須環		6.6			W-G	A	灰白色	30%	覆上	13
03	4	須環	10.0				W-B-G	A	灰色	20%	カマド	1
04	2	甕	(20.0)				L-B-K-G	A	淡褐色	20%	カマド	一拵
05	5	甕		(5.7)			G	A	鈍い藍色	5%	カマド	一拵

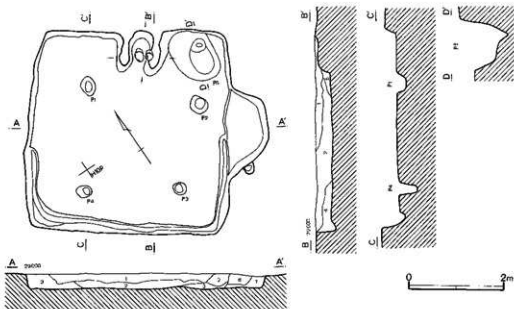


第67図 第19号住居跡出土遺物

トはカマドの周囲に5ヶ所が集中している。規模は径40～50cm、深さ10cm前後である。貯蔵穴・壁溝は存在しない。出土した遺物の総数は18点で、カマドおよびカマド周辺に集中している。

出土遺物(第67図)刀子(6)は全長6.4cm、幅1.2cm、厚さ0.4cmで、刃部および切っ先部は腐食が激しく遺存しない。

第20号住居跡 (第69図)



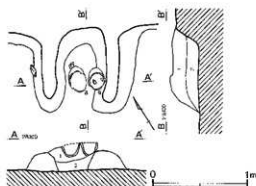
S J20層存

- 1 灰茶褐色 ロームを僅かに混入。しまりなし。
- 2 灰黒褐色 ロームを稀かに混入。しまりなし。
- 3 灰黒褐色 2層よりやや明るい。

- 4 灰茶褐色 多量のロームを混入。
- 5 灰黒褐色 カマド流出土の山砂を混入。
- 6 暗灰褐色 ロームを混入。住居より古いピットである。
- 7 灰褐色 ロームを多量に混入。住居より古いピットである。

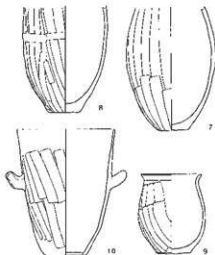
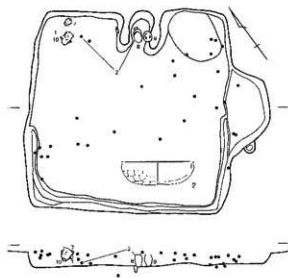
第68図 第20号住居跡

H-10・11 Gridに位置する。本跡から台地縁辺部までは僅か3 m弱である。東壁は45号土壌を切っている。平面形は整った正方形を呈する。規模は東西4.28m、南北4.24m、深さ36cmを測る。主軸の示す方位はN-37°-Eを指す。覆土はしまりのないシルト質の灰黒褐色が主体、壁際には多量のロームが混入している。カマドは北壁の中央にあり、袖部の遺存状態は良好に保っている。規模は両袖の外側で1.06m、内側で3.55m、煙出しまでの長さ0.92mを測る。燃焼面は掘り込まれておらず床面と同レベルであり、壁体への切り込みもない。燃焼部から支脚、甕2個体が出土している。貯蔵穴はカマドに隣接して東コーナーにある。平面形は楕円で東西1.39m、南北0.90m、深さ0.71mの規模を有する。ピットは主柱穴と思われる4本が検出された。平面形は円形、径30~40cm、深さ20~50cmを測るが、深さについては南に深いものが北に浅いものが配されている。壁溝は南半部のみ認められ、幅30cm、深さ10cmを測る。遺物はカマド内出土の甕(4・5)および支脚の他、カマド周辺の床面近くから坏がまともって出土している。



カマド層序

- 1 暗灰褐色 焼土、ロームを混入。
- 2 灰黄褐色 ローム、焼土を混入。

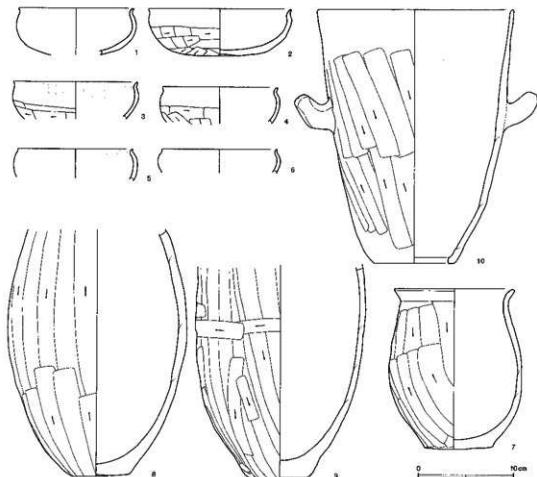


第69図 第20号住居跡カマド・遺物分布



第20号住居跡遺物観察表 (第70図)

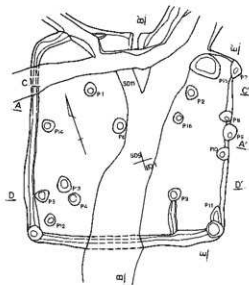
No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	6	环A	(12.0)		(5.0)		W・G	A	赤棕色	55%	覆上	1
02	5	环A	15.0		4.9		W・B・G	A	橙 色	80%	覆上	31, 34
03	7	环A	(13.0)				W・U・R・Ha・G	A	赤褐色	10%	カマド	一括
04	8	环A	(12.0)				W・U・B・R・G	A	浅黄棕色	5%	カマド	一括
05	9	环A	(12.0)				W・B・U・Ha・G	A	浅黄棕色	5%	カマド	一括
06	10	环A	(12.0)				U・W・Ha・B・G	A	棕色	5%	カマド	一括
07	2	小型甕	12.6	6.9	16.7	867	G	A	赤彩色	完形	覆土	1
08	4	甕		6.5	(25.7)		G	A	鈍い黄褐色	40%	カマド	34
09	1	甕		6.2			G	A	橙 色	60%	カマド	35
10	3	甕		20.5	8.5	26.4	G	A	明赤褐色	80%	覆上	1



第70図 第20号住居跡出土遺物

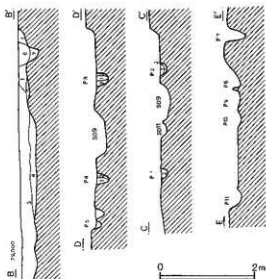
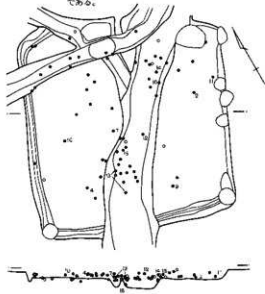
出土遺物(第70図) 环(1・2)は口縁部が小さく外傾する碗タイプで内外面赤彩。甕は長胴で膨らみが小さい。甕(6)は胴部から直線的に立ち上がり口縁部に変化はない。

第21号住居跡 (第71図)



S J21層序

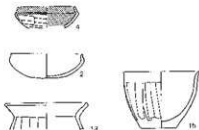
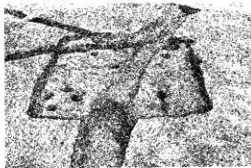
- 1 茶褐色 ローム層細粒、焼土をごく僅かに混入。
- 2 茶褐色 砂質ロームを混入。
- 3 灰茶褐色 ローム、礫を混入。S D 9 覆土、上部の包含が比較的多い。
- 4 黒褐色 ローム、礫を混入。S D 9 覆土、上部の包含が比較的多い。
- 5 暗褐色 ローム、炭化物を混入。S D 11 の層土である。
- 6 灰茶褐色 ローム、礫を混入。3層と略同質でS D 10 覆土である。



- 7 黒褐色 ローム、礫を混入。4層と略同質でS D 10 覆土である。

ピット層序

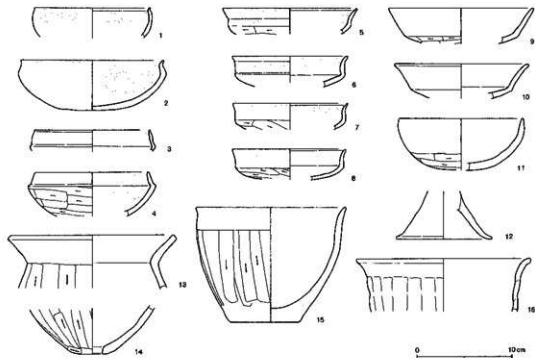
- P 1 1 灰黄褐色 小礫石粒を混入。  
 P 2 1 灰黒褐色 ローム、焼土を混入。EPA-A'に於いては柱状と思われる。  
 2 暗黄褐色 小礫石粒を混入。  
 P 3 1 灰黒褐色 ローム、焼土を混入。EPA-A'に於いては柱状と思われる。  
 2 暗黄褐色 小礫石粒を混入。  
 P 4 1 灰黒褐色 ローム、焼土を混入。EPA-A'に於いては柱状と思われる。  
 2 暗黄褐色 小礫石粒を混入。



第71図 第21号住居跡・遺物分布

1-10 Gridに位置する。住居跡の中央を南北に延びる9・10号溝跡、東西に延びる11号溝跡に切られる。平面形は方形、規模は東西4.24m、南北4.56m、深さ36cmを測る。主軸の示す方位はN-55°-Wを指す。覆土は砂質ロームを多量に混入する茶褐色土を主体とする。カマドは10号溝跡により破壊されている。貯蔵穴は北東コーナーにある。平面形は不整形、規模は東西65cm、南北45cm、深さ26cmを測る。ピットはP1~P4が主柱穴で、径25cm、深さ15~30cmを測る。主柱以外に12ヶ所が検出されたが全て壁際を中心に分布している。P3と南壁間には所謂間仕切り溝が幅15cm、深さ10cm程の規模で存在する。壁溝は西、南壁下を幅25cm、深さ10cmで巡る。出土遺物は総数68点を数えるが、本跡を切る9~11号溝跡に伴うものと思われ、須恵器の小片を多量に含む。

出土遺物(第72図) 坏は口縁部上半が外傾する碗タイプと模倣坏の他、口縁部が直立後先端で外反し、浅く小振りな「比企型坏」が4個体混入している。



第72図 第21号住居跡出土遺物

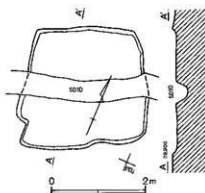
第21号住居跡遺物観察表(第72図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	6	坏A	(12.0)				U・W・G	A	橙 色	10%	覆土	
02	1	坏A	15.0		5.2	235	W・U・Ha・G	B	赤彩色	90%	覆土	25
03	8	坏B	(12.0)				U・W・G	A	橙 色	10%	覆土	一括
04	3	坏B	(12.0)				W・U・G	A	橙 色	10%	覆土	2
05	12	坏E	(14.0)				U・W・G	A	橙 色	10%	覆土	一括
06	4	坏E	(12.0)				W・G	A	橙 色	10%	覆土	
07	7	坏E	(12.0)				W・R・G	A	橙 色	10%	覆土	20
08	10	坏E	(12.0)				U・W・G	A	橙 色	10%	覆土	
09	13	坏D	(15.0)				W・R・G	B	橙 色	20%	覆土	21

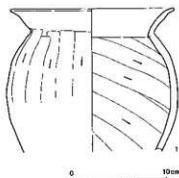
10	11	环	(14.0)					Ha・W・U・G	A	鈍い褐色	10%	覆土	17
11	9	环D	(13.0)					U・W・G	B	褐色	30%	覆土	27
12	5	高环	(10.0)					R・B・W・G	A	褐色	15%	覆土	24
13	15	罌	(17.0)					W・B・G	A	浅黄褐色	5%	覆土	4.7
14	16	瓶						W・U・G	B	浅黄褐色	20%	覆土	35
15	2	小型罌	15.5	14.1	12.0	810		G	A	棕色	55%	覆土	63
16	14	瓶	(18.0)					W・U・G	A	褐色	10%	覆土	42

### 第22号住居跡 (第73図)

I-11 Grid に位置する。東西に走る10号溝跡により中央を切られる。平面形は南辺が長い台形を呈する。規模は東西2.77m、南北2.52m、深さ10cmを測る。主軸の示す方位はN-71°-Eを指す。カマド・貯蔵穴・壁溝などの施設は皆無である。遺物は2点のみである。



第73図 第22号住居跡



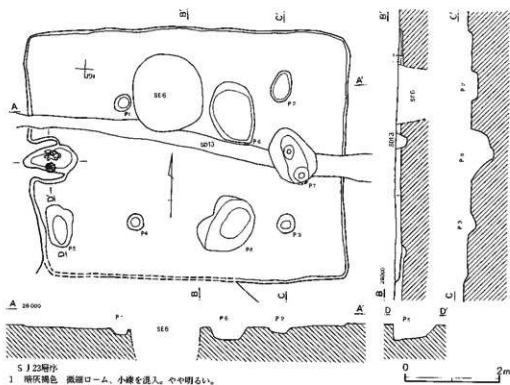
第74図 第22号住居跡出土遺物

### 第22号住居跡遺物観察表 (第74図)

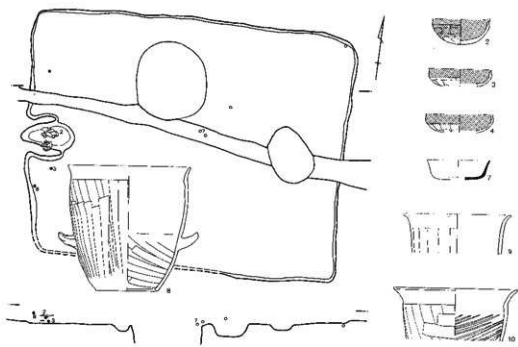
No	測	器種	口径	底径	器高	量g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	小型罌	(17.0)				W・Ha・U・G	B	浅黄褐色	15%	覆土	1

### 第23号住居跡 (第75図)

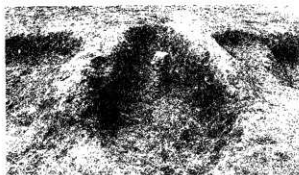
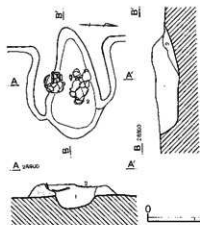
J-9 Grid に位置する。南で24号住居跡を切り、中央では13号溝跡、6号井戸跡に切られる。形状は東西に長軸をもつ整った長方形を呈する。規模は東西6.95m、南北5.30m、深さ14cmを測る。主軸の示す方位はN-89°-Eを指す。覆土は小礫、ロームを多量に混入する暗灰褐色土が主体である。カマドは西壁の中央にあり、袖部は原形をよく残している。規模は袖の外側で0.96m内側で0.46m、煙出しまでの長さ1.18mを測る。掘り型は前記計測値の通り舟形の浅い掘り込みである。貯蔵穴はカマドの南、南西コーナーにある。平面形は楕円形、規模は東西90cm、南北60cm、深さ23cmを測る。ピットはP1-P4が主柱穴で、規模は35-45cm、深さ15-25cmを測る。このほかP6-P8は径1-1.30m、深さ50-60cmを測る不整形の落ち込みが検出されたが本跡との関係は不明。壁溝は検出されていない。遺物はカマドおよびカマド全面の床面直上に集中して認められるが、出土総数23点と少ない。



- S J 23層序
- 1 暗灰褐色 微細ローム、小礫を混入、やや明るい。
  - 2 暗灰褐色 ローム微細粒多量に混入。

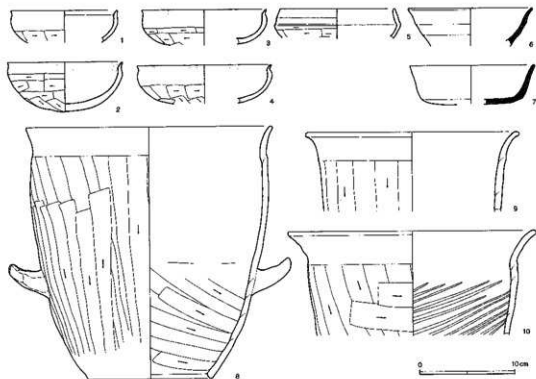


第75図 第23号住居跡・遺物分布



- カマド部序  
 1 暗茶褐色 焼土ブロックを混入。  
 2 灰茶褐色 砂質ローム、混合土、焼土を混入。

第76図 第23号住居跡カマド



第77図 第23号住居跡出土遺物

第23号住居跡遺物観察表 (第77図)

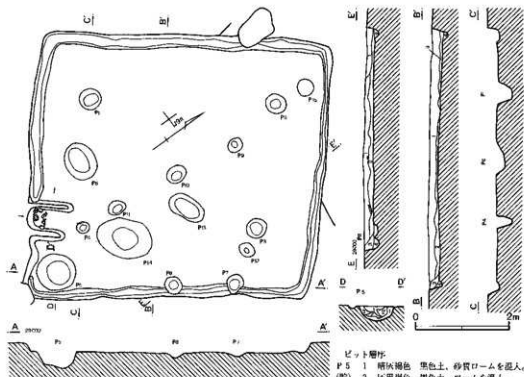
No	測	器種	口径	底径	體高	重G	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	坏A	(11.0)				W・U・G	B	浅黄褐色	20%	覆土	一括
02	6	坏A	12.0		5.3		G	A	鈍い赤褐色	60%	カマド	10
03	3	坏A	(13.0)				W・B・U・G	A	浅黄褐色	20%	覆土	2
04	1	坏A	14.0				W・B・G	A	浅黄褐色	60%	覆土	18
05	4	坏B	(12.0)				W・U・G	A	褐色	20%	覆土	一括
06	8	須坏	(13.0)				B・W・G	A	灰白色	5%	覆土	16

07	7	須環	(13.0)		(4.1)	W·R·S·G	A	灰白色	20%	覆土	4
08	10	甌	26.0	13.0	26.3	W·B·G	A	赤褐色	40%	覆土	1
09	5	甌	(22.5)			W·B·U·G	A	浅黄褐色	10%	覆土	一括
10	9	甌	26.2			W·B·G	A	淡褐色	5%	覆土	一括

出土遺物(第77図)甌は典型的な横楕円は認められず、やや器高が高く口縁部が外傾する楕形甌が主流である。甌は頸部の変化が小さく直線的に立ち上がるものに限られる。(8)は胴部下半に把手を貼付している。

### 第24号住居跡(第78図)

J・K-9 Gridに位置する。北で23号住居跡に切られる。台地の縁まで西に15mの距離にある。平面形は南北に長軸をとる長方形を呈する。規模は東西6.35m、南北5.60m、深さ26cmを測る。主軸の示す方位はN-36°-Eを指す。覆土はローム、小礫を含む暗灰褐色が主体である。カマドは南壁の南コーナー寄りにあり、袖部を良好に遺存している。規模は両袖部外側で0.86m、内側で0.42m、煙出しまでの長さ0.95mを測る。壁外への切り込みはなく、壁体をそのまま使用している。燃焼部への掘り込みは5cm程で皿状を呈する。貯蔵穴は南コーナーにあり、平面形は円形、規模は東西0.83m、南北0.74m、深さ34cmを測る。ピットは主柱穴4本(P1-P4)の他、東壁中



S J 34層序

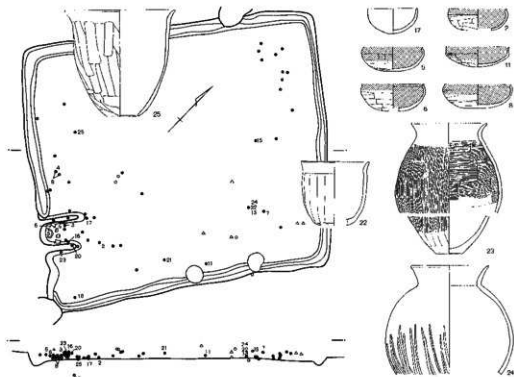
- 1 暗灰褐色 横楕円ローム、小礫を混入。
- 2 暗灰褐色 1層よりロームを多く含み、小礫を多量に混入。
- 3 暗灰褐色 ローム塊を多量に混入。
- 4 暗灰褐色 砂質ロームが主体で、しまりなし。

ピット層序

- P 5 1 暗灰褐色 黒色土、砂質ロームを混入。
- (貯) 2 暗灰褐色 黒色土、ロームを混入。
- 3 暗灰褐色 黒色土がやや多い。
- 4 暗 褐色 ロームを混入。

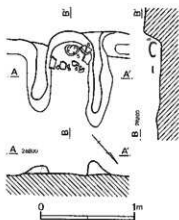
第78図 第24号住居跡

央にP7、P8を含め10ヶ所が検出された。主柱穴の規模は径40～50cm、深さ20～30cmを測る。P13、P14は直接本跡には伴わない土城状の掘り込みである。礎溝はカマドを除く全ての礎下を幅26cm、深さ10cm程で巡る。出土遺物はカマド内から小型台付壺(18)、坏(5、8、14)、カマドの脇から甑(25)が出土しているが、図示した完形度の高いものは主に東半部から出土している。



第79図 第24号住居跡遺物分布

出土遺物(第82図)坏は口縁部が外傾する碗タイプが主体で、若干の模倣坏、柄がみられる。甑は小型台付壺(18)が特異である。甑は整形にバラエティーがある。(23)はカキ目を明瞭に残す他、(22)は縦位の寛削り、(24)は下半に磨きが認められる。

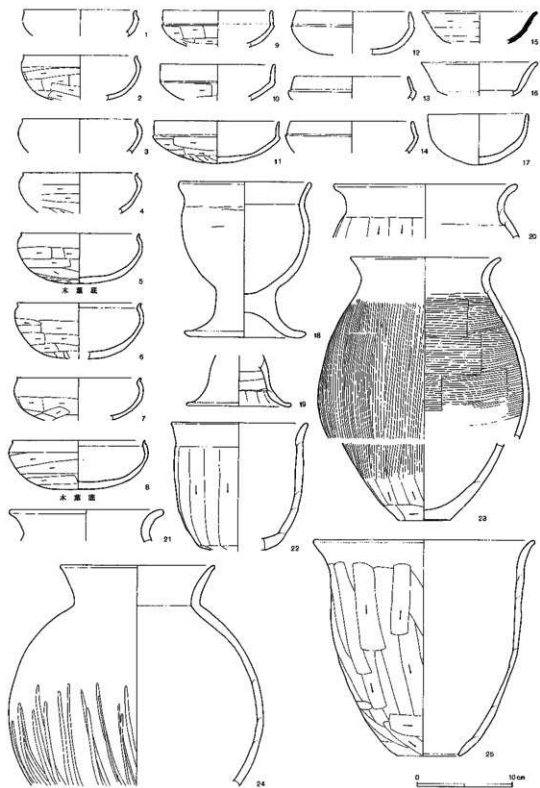


第80図 第24号住居跡カマド



第81図 第24号住居跡支脚転用の台付壺





第92图 第24号住居跡出土遺物

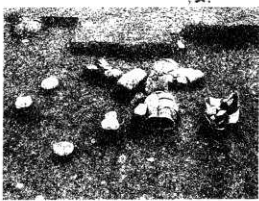
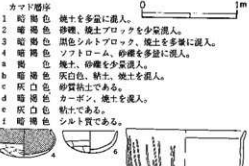
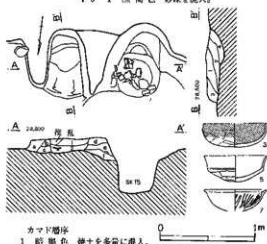
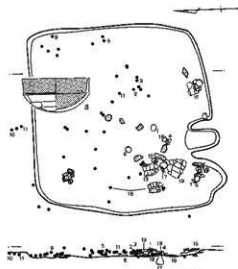
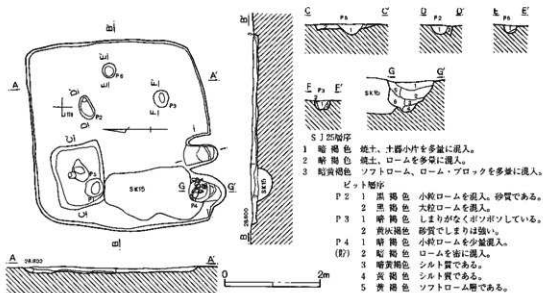
第24号住居跡遺物観察表 (第82図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	17	坏A	(12.0)				B-U-G	A	橙 色	10%	覆土	-括
02	3	坏A	(12.0)				W-U-G	A	橙 色	15%	覆土	28
03	8	坏A	(12.0)				W-G	A	橙 色	10%	覆土	47
04	7	坏A	(12.0)				Ha-U-W-G	A	橙 色	20%	覆土	55
05	5	坏A	12.4		5.2		U-W-G	A	橙 色	80%	覆土	63
06	18	坏A	(13.0)				B-R-U-G	A	橙 色	40%	覆土	カマド60
07	15	坏A	(13.0)				W-Ha-G	A	橙 色	10%	覆土	14
08	10	坏A	14.0		5.1		W-B-G	A	橙 色	70%	覆土	54,55
09	4	坏B	(11.5)				U-W-G	A	橙 色	30%	覆土	-括
10	19	坏B	(12.0)				B-W-G	A	橙 色	10%	覆土	-括
11	11	坏B	13.0		4.5		U-R-B-W-G	B	橙 色	70%	覆土	19
12	9	坏B	(12.0)				W-G	A	橙 色	5%	覆土	-括
13	21	坏B	(12.0)				W-B-G	A	橙 色	10%	覆土	23
14	13	坏B	(13.0)				W-B-G	A	橙 色	10%	覆土	-括
15	16	須坏	(12.0)				Ha-W-G	A	灰白色	20%	覆土	12
16	14	坏	(12.0)				W-U-G	A	橙 色	10%	覆土	41
17	23	坏D	10.6		5.3		U-W-G	A	浅黄褐色	80%	覆土	34
18	6	白付甕	15.0	14.0	16.1		G	A	鈍い赤褐色	85%	貯穴	67
19	12	高坏	(11.0)				W-G	A	橙 色	15%	覆土	-括
20	20	甕	(19.4)				W-B-U-G	A	橙 色	15%	覆土	40
21	21	甕	(16.0)				W-U-G	B	鈍い黄褐色	5%	覆土	24
22	22	小型甕	14.4		(13.5)		W-B-U-G	B	橙 色	50%	覆土	23
23	25	甕	15.8	5.6	(32.0)		W-B-U-G	B	橙 色	70%	覆土	43
24	2	甕	16.0				G	A	橙 色	5%	覆土	23
25	1	甕	22.9	6.7	22.5		G	A	鈍い橙 色	95%	覆土	-括,58

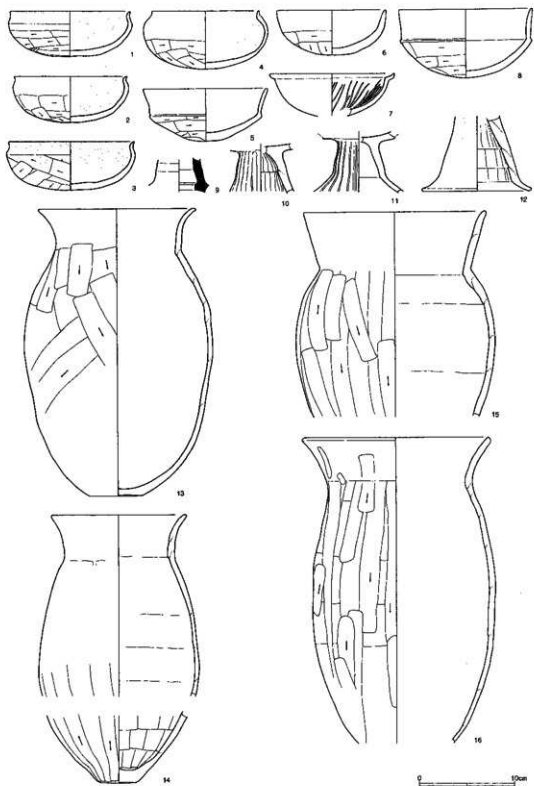
## 第25号住居跡 (第83図)

J-11 Gridに位置する。北で13号溝跡に切れられ、西で15号土壌を切る。平面形は北西および南東コーナーが隅丸の方形を呈する。規模は東西4.00m、南北3.75m、深さ12cmを測る。主軸の示す方位はほぼ北を指す。覆土は焼土、ロームを多量に混入する暗褐色土を呈する。カマドは南壁の南西コーナー付近にあり、袖部のみ良好に遺存。規模は両袖部外側1.02m、内側0.36m、煙出しまでの長さ0.71mを測る。燃焼部は径55cm、深さ10cm程の浅い円形の掘り込みを呈する。貯蔵穴(P4)はカマドの西に隣接しており、平面形は略円形、規模は東西0.60m、南北0.45m、深さ28cmを測る。主柱穴は3ヶ所(P1~P3)が検出されたが残る南西位置のもの不明。他にP3の北に方形の浅い掘り込みを伴うP5、棟上げ柱と思われるP6がある。主柱穴の規模は径35cm、深さ20~30cmを測る。壁溝は検出されていない。遺物はカマドおよび貯蔵穴の前面を中心に甕、甗の完形が土圧により潰れた状態で出土している。また、一辺20cm前後の自然石が住居全体に床面直上の状態で検出された。

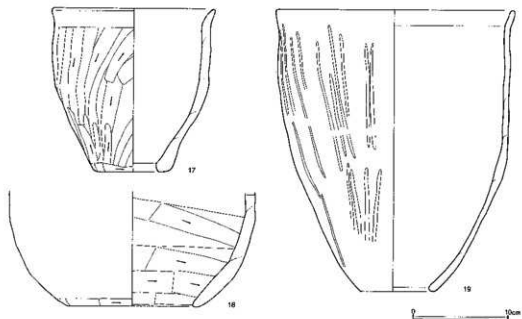
出土遺物(第84・85図)坏は碗状のものと模倣坏双方が認められる他、口縁部上半が強く外反し受け口状をなす(7)がある。甕は長胴のものが主体で、口縁部が長く直線的で直口縁状をなす(15)や比較的口縁部の長いものが目立つ。甗は口縁部の外反が弱いものが多い。小型の(17)、大型の(19)は共に同様のプローションを呈する。



第83図 第25号住居跡・カマド・遺物分布



第84图 第25号住居跡出土遺物(1)



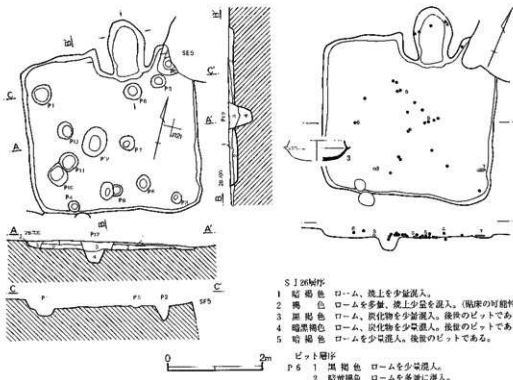
第85図 第25号住居跡出土遺物(2)

第25号住居跡遺物観察表 (第84・85図)

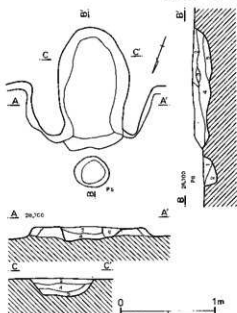
No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	5	坏A	12.6		4.6	185	W・B・G	A	棕色	完形	覆土	50
02	6	坏A	12.0		4.8	200	R・W・G	A	棕色	完形	覆土	13
03	9	坏A	13.2		5.1		B・W・U・G	A	橙黄色	80%	貯穴	12
04	8	坏A	11.4		6.1		U・W・B・G	A	橙黄色	70%	覆土	51
05	10	坏B	13.4	5.4			R・B・W・G	A	橙黄色	80%	貯穴	2
06	4	坏D	11.5		4.7	170	W・U・K・G	A	橙黄色	完形	被土	49
07	7	瓶	(13.0)				W・U・G	A	橙黄色	30%	貯穴	7
08	11	坏B	14.2		7.2	245	W・B・G	A	橙黄色	90%	貯穴	14
09	15	須高坏					W・Ha・G	A	灰色	20%	覆土	3
10	12	高坏					W・B・G	A	橙黄色	30%	覆土	27
11	13	高坏					W・B・G	A	橙黄色	40%	覆土	26
12	14	高坏					W・U・G	A	浅黄棕色	40%	覆土	48
13	1	甕	16.4	3.3	29.8		G	A	明黄褐色	85%	覆土	45
14	17	甕	14.0	3.8	(28.0)		R・W・B・G	A	淡橙黄色	40%	カマド	一括
15	18	甕	19.0				W・R・U・B・G	A	浅黄棕色	30%	覆土	54
16	19	甕	(20.0)				G	A	褐色	50%	覆土	38, 44
17	2	小型瓶	16.9	6.0	17.2		G	A	明黄褐色	90%	覆土	47
18	16	瓶		(13.4)			U・W・G	A	褐色	20%	覆土	51
19	3	瓶	25.0	7.8	29.3		G	A	明黄色	95%	覆土	46

第26号住居跡 (第86図)

I-12・13 Gridに位置する。南で26号住居跡を切り、北東コーナーを5号井戸跡に切られる。平面形は隅丸方形、規模は東西3.62m、南北3.32m、深さ18cmを測る。主軸の示す方位はN-17°-Wを指す。覆土はローム、焼土を多量に混入する褐色土・暗褐色土が主体である。カマドは北壁



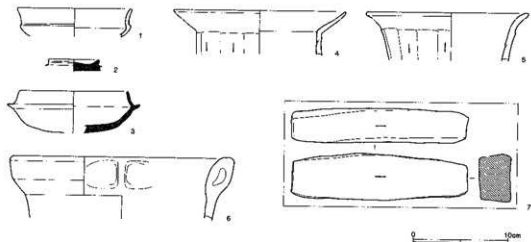
第86図 第26号住居跡・遺物分布



- カマド番号
- 1 暗黒褐色 ローム多量、焼土少量を混入。
  - 2 暗褐色 ローム、焼土少量を混入。
  - 3 焼土ブロック
  - 4 暗褐色 ローム多量、焼土炭化物少量を混入。
  - 5 暗黒褐色 焼土を少量混入。
  - 6 暗褐色 ローム、焼土を少量混入。(粗乱)

第87図 第26号住居跡カマド

のやや東寄りにあり、袖部のみよく遺存している。規模は両袖の外側で1.38m、内側で0.52m、胴道先端までの長さ1.25mを測る。壁外への切り込みは63cmである。焚口の前面には径30cm、深さ10cm程の円形の小ピットがあり、カマドに付随した消し室の用途が考えられる。貯蔵穴はカマドの東に隣接してあるが、東半部は5号井戸跡に切られる。形状は略円形と思われ、規模は径50cm前後、深さ35cmを測る。ピットは12ヶ所検出され、一見アトランダムな分布を示すが、P1・P3・P6・P9の4本が主柱と考えられる。規模は径45cm、深さ20cm弱を測る。他はカマドに対面するP8が40cmの深さを有する。壁溝は存在しない。遺物の出土総数は29点と少ない。分布はカマド内と住居の中央に集中している。砥石(7)は東壁下、須恵器鉢(3)は中央にそれぞれ床面直上で出土している。また、覆土上層には中・近世の遺物が多数出土している。



第88図 第26号住居跡出土遺物

第26号住居跡遺物観察表 (第88図)

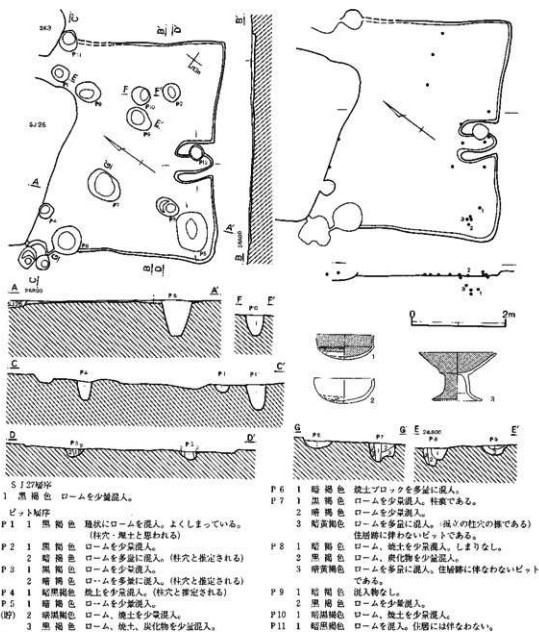
No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	6	坏B	(12.0)				W-G	A	赤褐色	10%	覆土	一括
02	4	須壺					W-G	A	灰白色	5%	覆土	一括
03	5	須坏	(11.0)				W-G	A	灰白色	30%	覆土	18
04	2	壳	(18.0)				W-B-U-G	A	橙色	20%	カマド	4
05	3	甌	(17.0)				W-R-G	B	赤褐色	40%	覆土	12
06	7	内耳罎	(22.0)				W-R-U-G	A	鈍い黄褐色	10%	覆土	17
07	1	砥石				540	G	A	鈍い赤褐色	完形	覆土	24

第27号住居跡 (第89図)

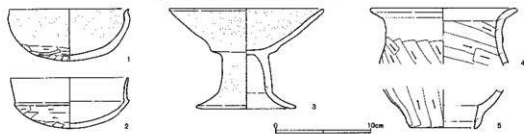
I-12・13 Gridに位置する。北で26号住居跡、3号土壌に切られる。平面形は長方形、規模は東西4.47m、南北1.70m、深さ7cmを測る。主軸の示す方位はN-34°-Wを指す。覆土はロームを混入する黒褐色土が主体。カマドは南壁中央に位置し、袖部のみ遺存する。規模は両袖部の外側で0.88m、内側で0.32m、煙道部先端までの長さ0.82mを測る。壁外への切り込みはない。貯蔵穴は南西コーナーにあり、形状は隅九方形、規模は東西0.86m、南北0.70mを測る。ピットはP1-P4が主柱穴で、径40cm、深さ20-50cmを測る。他に7ヶ所検出されたが、P11はカマドを破壊しており後出のものである。壁溝は存在しない。遺物は貯蔵穴内から高坏1、坏2がほぼ完形で出土している他は全て小片で見えるべきものはない。

第27号住居跡遺物観察表 (第90図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	3	坏A	12.4		5.4	246	W-U-Ha-G	A	棕色	完形	貯穴	2
02	2	坏C	12.2		5.3	145	W-B-U-G	A	浅黄褐色	完形	貯穴	1
03	1	高坏	17.3	10.5	10.4	480	G	A	鈍い赤褐色	完形	貯穴	3
04	4	壳	(15.5)				Ha-W-U-G	A	淡橙色	20%	覆土	一括
05	5	甌		(7.0)			Ha-W-B-G	A	淡橙色	20%	覆土	一括

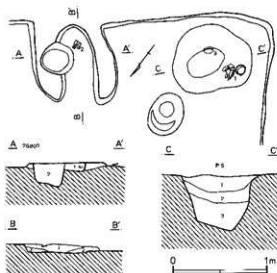


第89図 第27号住居跡・遺物分布



第90図 第27号住居跡出土遺物



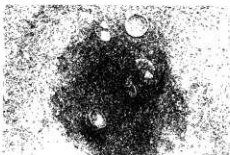


カマド図序

- 1 明黄褐色 厚1～2cm大の焼土を混入。
- 2 黄褐色 焼土を多量に混入。
- 3 暗黒褐色 焼土、炭化物を少量混入。
- 4 黒褐色 焼土、灰褐色粘チアブロックを混入、(カマドを壊すピット)



後世のピットにえぐられたカマド

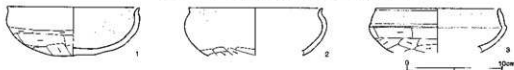


貯蔵穴内に落下した完形の坏

第91図 第27号住居跡カマド・貯蔵穴

第28号住居跡 (第93図)

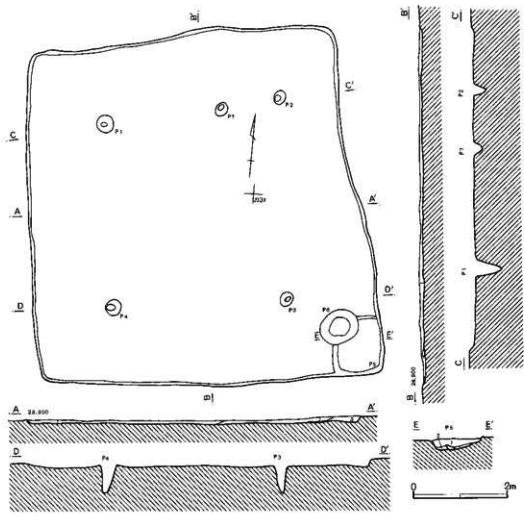
I・J-12・13 Gridに位置する。切り合い関係はない。形状は南辺が他の3辺を大きく上回り略台形を呈する。規模は東西7.33m、南北7.59m、深さ8cmを測り、本跡中最も広い床面積を有する。覆土は黒褐色主体の単一層で、砂礫・カーボンを多量に含む。カマドは東壁中央に焼土の分布が認められるに止まる。貯蔵穴は南東コーナーにある。平面形は正方形と考えられるが隣接してP6が存在するため明確ではない。本来一体となって機能する可能性もある。規模は東西1.10m、南北1.24m、深さ26cm、P6は東西0.82m、南北0.70m、深さ57cmを測り、形状は円形である。主柱穴はP1～P4が該当し、径30cm、深さ40～60cmを測る。壁溝は存在しない。遺物は出土総数24点と少なく、主に南壁下および東壁下に坏の大型破片が分布しているに過ぎない。



第92図 第28号住居跡出土遺物

第28号住居跡遺物観察表 (第92図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	3	坏A	(14.0)		5.0		B・W・U・G	A	緑色	40%	覆土	4
02	1	坏A	(14.0)				W・B・G	A	棕色	20%	覆土	6
03	2	坏B	(13.0)				B・W・G	A	藍色	30%	覆土	2

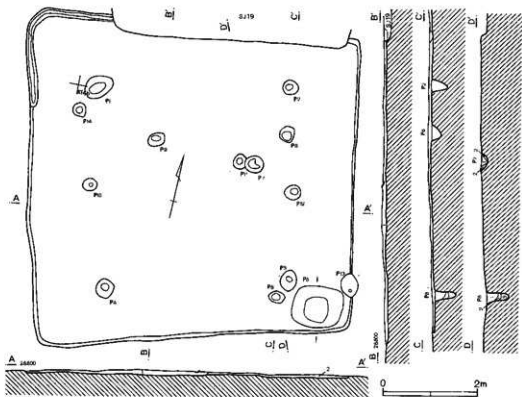


- S J 28号序
- |                      |                  |                        |
|----------------------|------------------|------------------------|
| 1 黒褐色 砂礫を多量に混入。      | 3 黒褐色 ローム、砂礫を混入。 | ピット順序                  |
| 2 黒褐色 砂礫及びカーボン灰土を混入。 | 4 黒褐色 ローム、砂礫を混入。 | P 5 1 黒褐色 ロームを少量混入。    |
|                      |                  | (貯) 2 茶褐色 焼土、炭化物を少量混入。 |

第93図 第28号住居跡

第29号住居跡 (第94図)

J・K-14 Grid に位置する。北で19号住居跡に切られる。形状は整った方形を呈する。規模は東西6.98m、南北7.02m、深さ8cmを測る。主軸の示す方位はN-12°-Wを指す。覆土は炭化物、焼土を多量に混入する黒褐色を主体とする。カマドは検出されていないが、東壁、南東コーナー寄りに焼土の分布が顕著である。貯蔵穴は南東コーナーにあり、形状は隅丸方形、規模は東西1.10m、南北0.87m、深さ26cmを測る。ピットは13ヶ所検出された。内主柱穴はP 1～P 6が相当し、6本柱により構成されるが、北西のP 7および南東のP 9、或はP 2～P 3間のP 8の存在から建て替えの可能性もある。P 1～P 6の規模は径30～40cm、深さ20～50cm前後である。壁溝は北西コーナー周辺だけ認められ、幅16cm、深さ6cmを測る。遺物は住居の中央および貯蔵穴の周囲に集中している。前者は本跡より後出の浅い落ち込みに伴う可能性がある。



S J 29層序

- 1 黒褐色 炭化物、幾十をやや多く混入。しまり、粘性弱い。  
 2 暗褐色 砂利を多く含む炭化物を混入。しまり有。

- P 8 1 黒褐色 粘土、炭化物を混入。  
 2 褐色 ロームを混入。  
 3 暗褐色 ロームを混入。

ピット層序

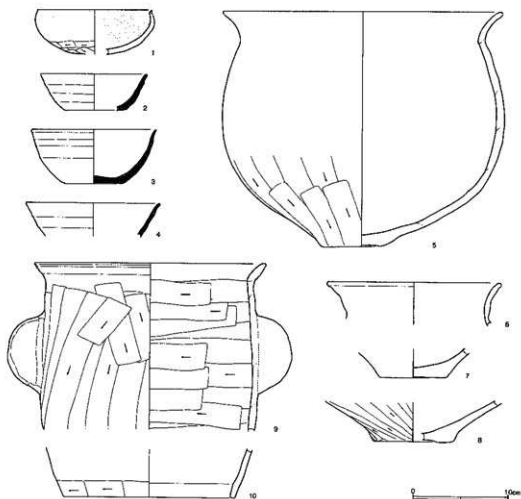
- P 7 1 暗褐色 きのやや粗く、小石を多量に混入。  
 2 砂層

第94図 第29号住居跡

出土遺物（第95図）（5）の甕は短口縁で鋭く外反、胴部の張りは弱く、底部へは急激にすぼまり、底径は小さい。（9）の甕は短口縁で鋭く外反、胴部は直線的で（10）の底径は大きい。把手は幅2.5cm、長さ8.5cmの縦長で断面半球状を呈する。

第29号住居跡遺物観察表（第95図）

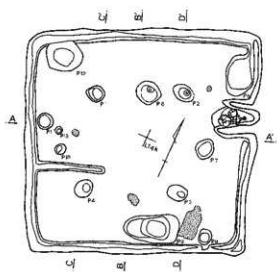
No	測	器種	口径	底径	器高	重 $\phi$	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	坏A	(12.0)				W-R-G	A	明灰褐色	30%	覆土	54
02	2	須坏	(11.0)				W-Ha-G	A	灰黄色	10%	覆土	一括
03	4	須坏	13.0	6.0	5.7		W-B-G	A	灰色	40%	覆土	一括内一括
04	3	須坏	(14.0)				W-Ha-G	A	灰白色	10%	覆土	一括
05	10	甕	(29.2)	5.8	24.5		G	A	赤褐色	50%	貯穴	10
06	5	甕	(18.4)				W-U-Ha-G	A	褐色	10%	覆土	30
07	7	甕		7.0			R-B-G	A	灰黄色	40%	覆土	一括内一括
08	8	甕		(8.0)			U-W-Ha-G	B	灰褐色	40%	覆土	34
09	9	甕	24.4				U-W-G	A	淡棕色	30%	覆土	49
10	6	甕	(18.0)				B-W-G	A	淡棕色	10%	覆土	16



第95図 第29号住居跡出土遺物

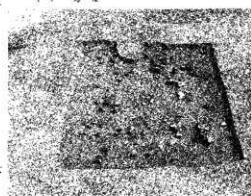
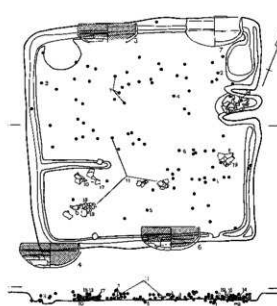
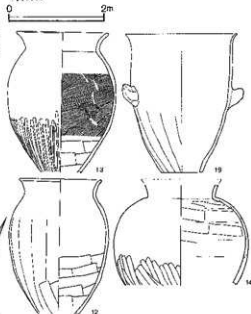
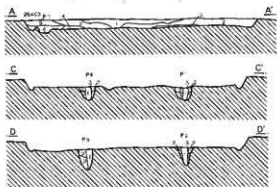
第30号住居跡 (第96図)

L-14 Grid に位置する。切り合い関係はない。形状は整った方形を呈する。規模は東西4.87m、南北4.67m、深さ22cmを測る。主軸の示す方位はN-65°-Eを指す。覆土は焼土を混入するⅠ・Ⅱ層の暗褐色土により被覆されるが、壁際にはブロック状の焼土、炭化物(材)が多量に検出された。カマドは東壁の北寄りにあり、袖部のみ良好に遺存する。規模は両袖の外側で0.82m、内側で0.28m、煙道先端までの長さ1.04mを測る。壁外への切り込みはなく、燃焼部は東西0.98m、南北0.5m、深さ10cm程の楕円形の掘り込みに一体化されている。貯蔵穴はカマドに隣接して北東コーナーにあり、形状は略隅丸方形、規模は東西0.85m、深さ12cmを測る。ピットは13ヶ所が検出された。内、主柱穴はP1-P4が該当、径40cm、深さ35-50cmを測る。他はP10・P11が入口部に想定できる。P3の北側には所謂間仕切り溝が西壁下壁溝から東へ1.5m程認められる。規模は幅18cm、深さ8cmを測る。壁溝はカマド、貯蔵穴を除く各壁下に幅25cm、深さ5cm程を巡る。遺物はカマド内に支脚転用の高坏(9)と甕2個体(14・16)がカマドの南に甕(19)が床面から、他は住居の中央部に集中して検出された。多くは焼土、炭化物同様、床面直上で出土している。

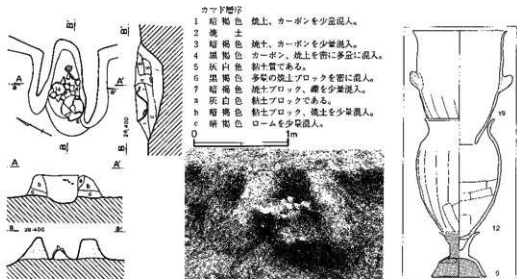


- S J 30号序
- 1 暗褐色 焼上、炭化物、ロームを混入。
  - 2 暗褐色 1層に比べ、ロームを均一に混入。
  - 3 黒褐色 暗色上を主体とし、ロームを混入。
  - 4 赤褐色 焼土ブロックを混在。しまり、粘性やや弱い。
  - 5 暗褐色 焼上、炭化物、ローム及び砂粒子を混在。
  - 6 暗褐色 ロームを混在。
  - 7 黄褐色 ロームを主体とする。砂粒を多く混入。

- ピット形状
- P1 1 暗褐色 ローム、焼土を少量混入。
  - 2 暗黒褐色 ロームを多量に混入。
  - 3 暗黄褐色 ロームを多量に混入。
  - P2 1 暗褐色 ロームを多量、焼土を少量混入。
  - 2 暗黒褐色 ロームを多量に混入。
  - 3 暗黄褐色 ロームを多量に混入。
  - P3 1 暗褐色 ローム、焼土を少量混入。
  - 2 暗黒褐色 ロームを少量混入。
  - 3 暗黄褐色 ロームを多量に混入。
  - P4 1 暗褐色 ロームを少量混入。
  - 2 暗黒褐色 ロームを少量混入。
  - 3 暗黄褐色 ロームを多量に混入。



第96図 第30号住居跡・遺物分布

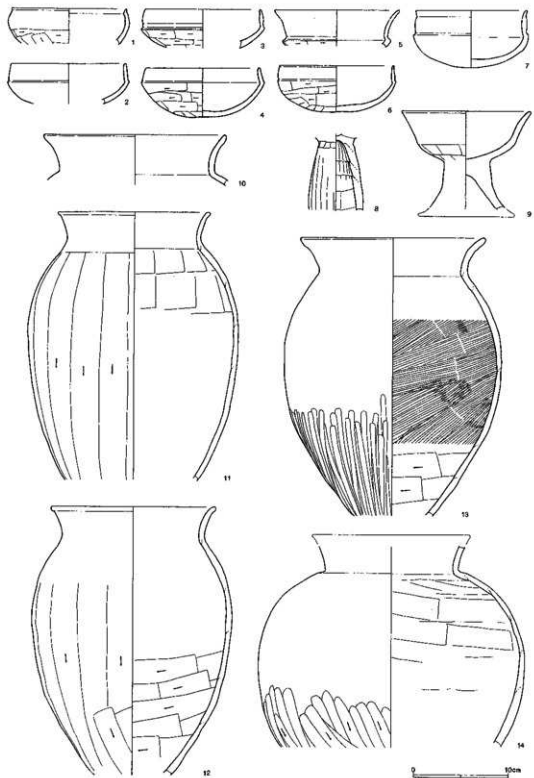


第97図 第30号住居跡カマド

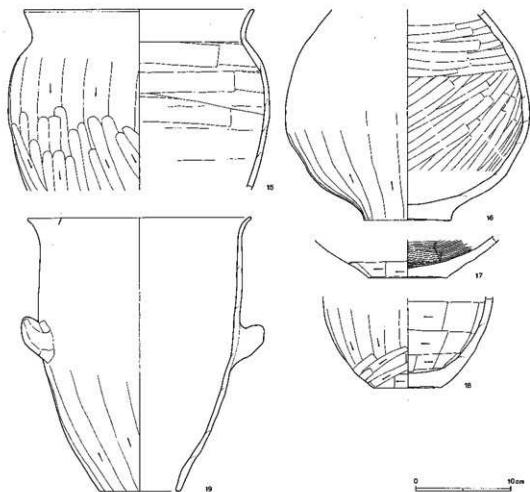
出土遺物（第98・99図）は模倣坏が主体でパリエーションも豊富である。口縁部が短く内傾する（2～4・6）、口縁部上端で外傾する（7）、外傾する（5）がある。赤彩の顕度が高い。高坏は長脚で柱状をなす脚部が出土しているが、口縁部が外傾する模倣坏をのせた（9）の太く短い開きの大きなものが本跡個々のセットに組み込まれるものであろう。甕は短口縁で広口の（11）を除くと長胴でふくらみの弱い（12～15）と直立ぎみに立ち上がり球形胴部の（16～18）に2分される。

第30号住居跡遺物観察表（第99図）

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	7	坏A	(12.0)				W・G	A	橙色	10%	覆土	58
02	4	坏B	(12.0)				W・R・G	A	橙色	30%	覆土	87
03	5	坏B	(12.0)				W・R・G	A	橙黄色	20%	覆土	40
04	9	坏B	12.0		5.2	190	W・Ha・G	A	浅黄橙色	90%	覆土	80
05	3	坏B	(13.0)				W・G	A	橙黄色	20%	覆土	44
06	6	坏B	12.0				W・Ha・G	A	橙黄色	40%	覆土	65
07	10	坏C	11.6		6.0	200	U・W・G	A	黄橙色	40%	覆土	24.26.27.31.
08	8	高坏					W・G	A	浅黄橙色	5%	覆土	72
09	2	高坏	13.2				G	A	橙黄色	70%	カマド	23
10	12	甕	(19.0)				Ha・U・W・B・G	A	淡橙黄色	30%	覆土	4
11	13	甕	(16.4)				W・Ha・R・G	A	浅橙黄色	40%	覆土	2
12	19	甕		(17.0)			W・R・Ha・U・S	B	鈍い橙黄色	20%	覆土	2
13	18	甕	19.0				W・U・Ha・G	A	橙黄色	40%	覆土	45
14	16	甕					W・R・G	A	赤橙黄色	30%	カマド	6
15	11	甕	(24.0)				W・B・U・G	A	淡橙黄色	40%	覆土	2.7.17.47
16	17	甕		9.2			U・Ha・W・G	B	淡橙黄色	40%	カマド	13
17	15	甕		8.4			W・R・G	A	橙黄色	5%	覆土	2
18	14	甕		(7.0)			W・Ha・U・G	A	赤橙黄色	60%	覆土	カマド
19	1	瓶	23.5	(8.4)			G	A	明黄褐色	80%	覆土	65



第98図 第30号住居跡出土遺物(1)

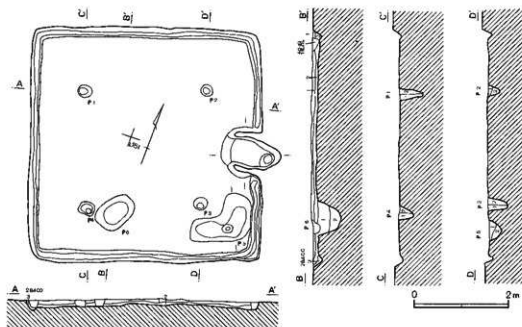


第99図 第30号住居跡出土遺物(2)

第31号住居跡 (第100図)

I-14・15 Gridに位置する。切り合い関係はない。形状は整った正方形を呈する。規模は東西5.02m、南北4.98m、深さ16cmを測る。主軸の示す方位はN-70°-Eを指す。覆土は床面を黒褐色土が広く覆い、その上を焼土、炭化物を多量に混入する暗褐色土が被覆する。壁際にロームの崩壊が目立つ。カマドは東壁の中央にあり、袖部のみ良好な遺存を示す。規模は両袖の外側で1.05m、内側で0.52m、煙道部先端までの長さ1.29mを測る。壁外への切り込みは43cmである。燃焼部は東西1.29m、南北0.70m、深さ20cm程の浅い掘り込みに包含される。貯蔵穴は南東コーナーにあり平面形は「L」字状をなす。規模は東西1.28m、南北0.99m、深さ33cmを測り、中央に径22cm、深さ10cmの小ピットを伴う。ピットは主柱穴(P1~P4)の4ヶ所他、P3・P4間に径0.86m×0.59m、深さ50cmのP6がある。主柱穴の規模は径35~55cmを測る。壁溝はカマドを除く全ての壁下を巡る。遺物は出土総数80点、南西コーナーから住居の中央に向かう流れが看取できる。本跡に伴う可能性のある坏(3・5)はカマドの周囲に床向直上で出土している。





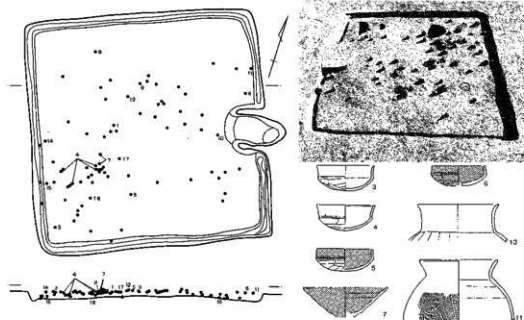
- S J 31 順序
- 1 暗褐色 ローム、焼土、炭化物を少量混入。
  - 2 黒褐色 ロームを多量に混入。
  - 3 暗黄褐色 ロームを多量に混入。

ピット順序

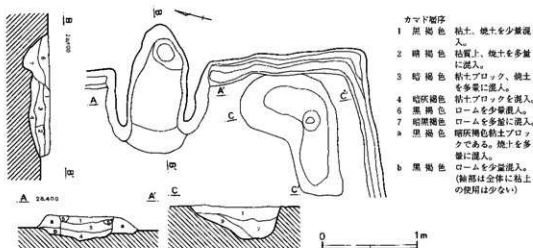
- P 1 1 黒褐色 ロームを少量混入。  
 2 暗黒褐色 ロームを多量に混入。
- P 2 1 黒褐色 ロームを少量混入。  
 2 暗黒褐色 ロームを混入。

- P 3 1 黒褐色 ロームを少量混入。  
 2 暗黄褐色 ロームを多量に混入。
- P 4 1 暗褐色 ロームを少量混入。  
 2 暗黄褐色 ロームを多量に混入。
- P 5 1 暗褐色 ローム、焼土を少量混入。(野)  
 2 黒褐色 ロームを多量に混入。  
 3 暗黄褐色 ロームを多量に混入。
- P 6 1 暗黄褐色 ロームを少量混入。(シルト質)  
 2 暗黒褐色 シルト質である。

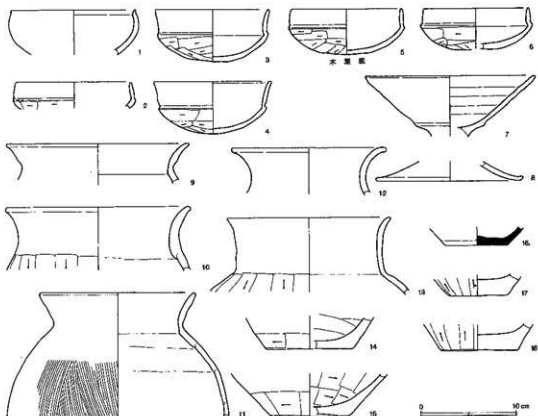
第100図 第31号住居跡



第101図 第31号住居跡遺物分布



第102図 第31号住居跡カマド・貯蔵穴



第103図 第31号住居跡出土遺物

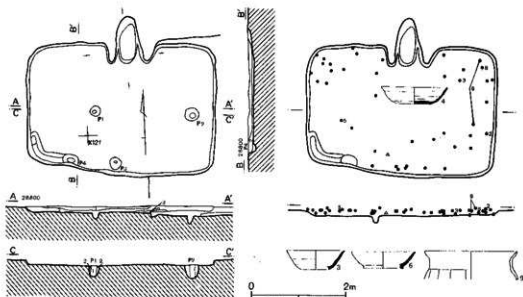
出土遺物（第103図）坏は典型的な模倣坏と口縁部が内傾し、受部の段が弱いタイプに分けられ、後者は全て赤彩を施している。甕は(11)のように刷毛目を明瞭に残すもの他、長く直立気味の口縁部をもつ(13)、口縁部下半が肥厚する(9)などがあり、多彩である。

第31号住居跡遺物観察表 (第103図)

No	測	種類	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	6	坏A	(13.0)				W・B・G	A	橙 色	30%	覆土	28
02	4	坏B	(12.0)				W・R・G	A	橙 色	10%	覆土	一括
03	5	坏C	12.0		5.4		W・R・G	A	橙 色	80%	覆土	65
04	1	坏C	12.4		5.4		B・G	A	橙 色	50%	覆土	40.46.52.59
05	3	坏B	11.6		4.7		W・R・U・G	A	橙 色	60%	覆土	71
06	2	坏B	(11.0)		(4.3)		W・B・G	A	橙 色	30%	覆土	2
07	9	高坏	18.0				W・Ha・G	A	橙 色	50%	覆土	34.39
08	10	高坏	(15.0)				W・R・G	A	淡褐色	30%	覆土	21
09	15	甕	(19.0)				W・R・U・G	A	橙 色	10%	覆土	24
10	8	甕	(19.0)				W・B・G	A	橙 色	20%	床直	5
11	11	甕	(16.0)				W・U・G	A	橙 色	10%	覆土	1
12	16	甕	(16.0)				R・U・G	A	黄褐色	5%	覆土	23
13	7	甕	(17.0)				W・R・Ha・U・G	A	赤褐色	30%	覆土	一括
14	1	甕		(9.0)			R・B・U・G	A	橙 色	25%	覆土	36
15	17	甕		(8.0)			W・Ha・U・G	A	黄褐色	15%	覆土	62
16	18	須坏		6.4			W・B・Ha・S・G	A	浅黄褐色	20%	カマド	カマド
17	13	甕		6.2			Ha・U・R・W・G	A	橙 色	50%	覆土	33
18	14	甕		8.2			Ha・U・R・W・G	A	赤褐色	40%	覆土	55

第32号住居跡 (第104図)

K-12 Grid に位置する。東で33号住居跡を切り、北でカマド煙道部先端を擾乱により切られる。形状は東西に長軸をもつ隅丸長方形を呈する。規模は東西4.30m、南北4.56m、深さ16cmを測る。主軸の示す方位はN-87°-Eを指す。覆土は砂質粘土、白色粘土、焼土を多量に混入する暗褐色



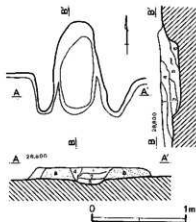
S J 32層序

- 1 暗褐色 砂質粘土、白色粘土、焼土を多量に混入。
- 2 暗褐色 大粒の砂質粘土を混入。
- 3 暗褐色 砂質、焼土を少量混入。

ピット層序

- P 1 1 暗褐色 小粒ローム、焼土を少量混入。
- 2 暗褐色 ロームを密に混入。硬く締まっている。
- P 2 1 暗褐色 ロームを多量に混入。

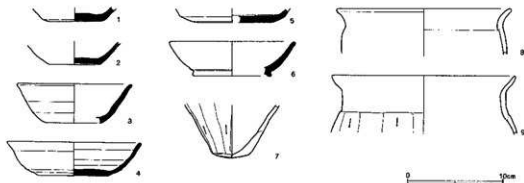
第104図 第32号住居跡・遺物分布



カマド断序

- 1 暗褐色 コーボン、焼土を多量に混入。
- 2 暗褐色 焼土、ソフトロームを混入。
- 3 灰褐色 砂質粘土、焼土を多量に混入。
- 4 暗褐色 焼土、カーボンに混入。
- 5 暗褐色 焼土、白色粘土ブロックを密に混入。
- 6 暗褐色 ソフトロームを密に、焼土を少量混入。
- 7 暗褐色 砂質粘土、カーボンを混入。
- 8 暗褐色 砂質粘土、焼土を混入。

第105図 第32号住居跡カマド



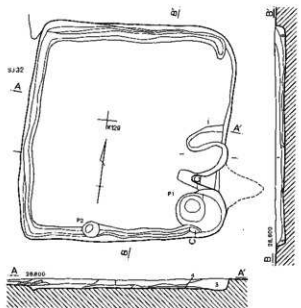
第106図 第32号住居跡出土遺物

第32号住居跡遺物観察表 (第106図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	4	須环	6.0				Ha・W・K・G	A	灰色	30%	カマド	カマド一括
02	6	須环	5.4				Ha・W・B・G	A	灰色	40%	覆土	39
03	8	須环	(12.0)			(4.1)	W・B・S・G	A	灰白色	20%	カマド	カマド
04	3	須环	14.0	7.4		3.5	Ha・W・G	A	灰黄色	60%	覆土	30
05	5	須环		8.6			W・Ha・G	A	灰白色	30%	覆土	14
06	7	須环		8.2			B・W・G	A	灰白色	30%	覆土	一括
07	9	甕		4.0			W・B・U・S・G	A	浅黄褐色	10%	カマド	
08	2	甕	(18.0)				Ha・W・B・G	A	褐色	5%	覆土	33
09	1	甕	(19.2)				W・B・U・G	A	褐色	15%	覆土	32, 37

土を主体とする。カマドは北壁中央にあり、袖部のみ良好に遺存する。規模は両袖部外側で1.07m、内側で0.35m、煙道の先端までの長さ0.98mを測る。燃焼空間は南北0.98m、東西0.35m、深さ8cmの浅い土壇状を呈する。貯蔵穴はない。ピットは東西軸線上に2ヶ所あり、主軸と思われる。径25cm、深さ40cmの規模を有する。他にカマドに對峙してP3が存在する。壁溝は南西コーナーの一部に認められ、幅25cmを測る。遺物は出土総数43点を数える。大半は浮いた状態で出土しており、北西コーナーと南東コーナーに分布の中心をもつ。後者に接合資料が1例ある。

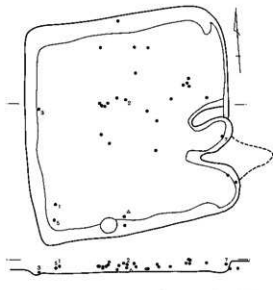
第33号住居跡 (第107図)



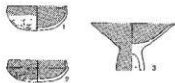
- C
- S J 33層序
- 1 暗褐色 小粒ローム、焼土ブロックを少量混入。
  - 2 暗褐色 黒褐色ブロック、小粒ロームを密に混入。
  - 3 暗褐色 ロームを密に混入。
  - 4 暗褐色 小粒ロームを密に、焼土ブロックを少量混入。
  - 5 暗褐色 小粒ローム、カーボンを混入。
- ピット層序
- P 1 1 暗褐色 シルト質である。
  - (貯) 2 暗褐色 シルト質である。
  - 3 暗褐色 黄褐色シルトである。(融山に埋没)

第107図 第33号住居跡

K-12 Gridに位置する。西壁の一部は32号住居跡に切られる。形状は略方形を呈する。規模は東西4.30m、南北4.56m、深さ16cmを測る。主軸の示す方位はN-87°-Eを指す。覆土はロームブロック混入の暗褐色土を主体とし、壁際に炭化物、焼土が多量に検出された。カマドは東壁の南寄りにあり、旧カマドを破壊して構築されている。新カマドの規模は両袖部外側で1.25m、内側で0.53m、煙道部先端までの長さ0.95mを測る。壁外への切り込みは10cmと小さく、燃烧部もフラットで床面と同レベルで使用。旧カマドは一層南東コーナー寄りにある。煙道部のみを遺存する。壁外への切り込みは0.95mを測る。貯蔵穴は南東コーナーにあり、形状は略円形、東側は壁外に20cm程張り出して構築。規模は東

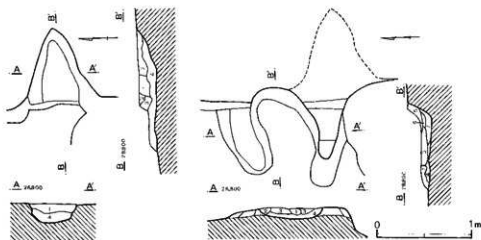


南西コーナーから出土した完形の埴2点と高埴。



第108図 第33号住居跡遺物分布

西1.08m、南北0.95m、深さ30cmを測る。ピットは床面上にはなく南壁中央付近に径35cm、深さ26cmのP1が存在するだけである。壁溝はカマドの存在する東壁の除く各壁下を、幅25cm、深さ6cmの規模で廻る。遺物は出土総数31点、住居の中央に散漫な分布を示す。西および南壁下には自然石が多数検出された。図示した坏(1・2)、高坏(3)は全て床面直上で出土している。



旧カマド層序

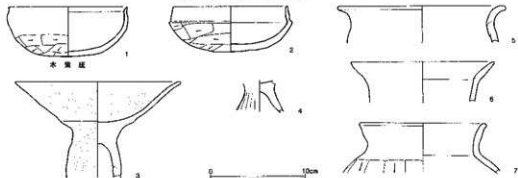
- 1 黒褐色 シルト質で焼土を多量に混入。
- 2 黒褐色 シルト質で焼土を混入。
- 3 砂質粘土
- 4 黒褐色 シルト質で砂礫、焼土を混入。

新カマド層序

- 1 灰黄褐色 砂質粘土である。

- 2 明褐色 赤化砂質粘土である。
- 3 暗褐色 小粒ローム、焼土を混入。
- 4 暗褐色 砂質粘土、焼土を少量混入。
- 5 暗褐色 焼土を少量混入。
- 6 灰黄褐色 砂質粘土である。
- 7 黒褐色 シルト質で、多量の焼土カーボンを含み混入。

第109図 第33号住居跡カマド



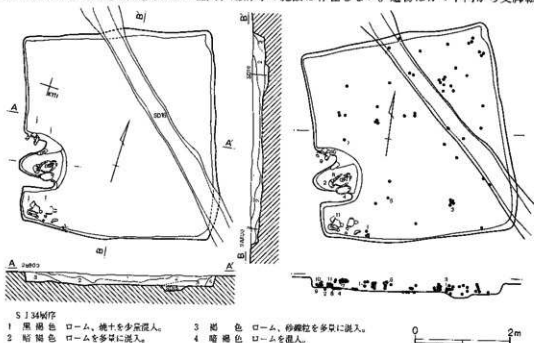
第110図 第33号住居跡出土遺物

第33号住居跡遺物観察表 (第109図)

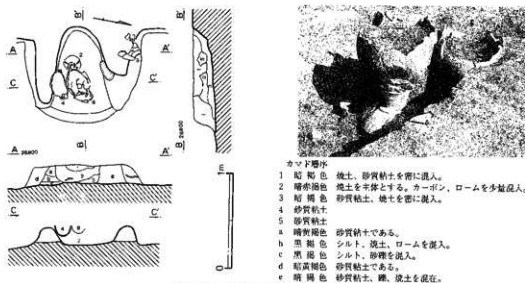
No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	坏A	12.4		5.2	162	R・B・G	A	橙褐色	90%	床直上	2
02	1	坏B	12.0		4.6		W・G	A	橙褐色	30%	焼土上	8
03	7	高坏	17.3				G	A	赤褐色	70%	覆土上	28
04	3	高坏					W・R・G	A	橙褐色	20%	覆土上	一括
05	6	甕	(17.0)				U・Ha・W・G	A	橙褐色	5%	覆土上	28
06	5	甕	(15.0)				W・U・G	A	橙褐色	10%	覆土上	カマド一括
07	4	甕	(13.0)				Ha・U・W・G	A	橙褐色	15%	カマド	24

### 第34号住居跡 (第111図)

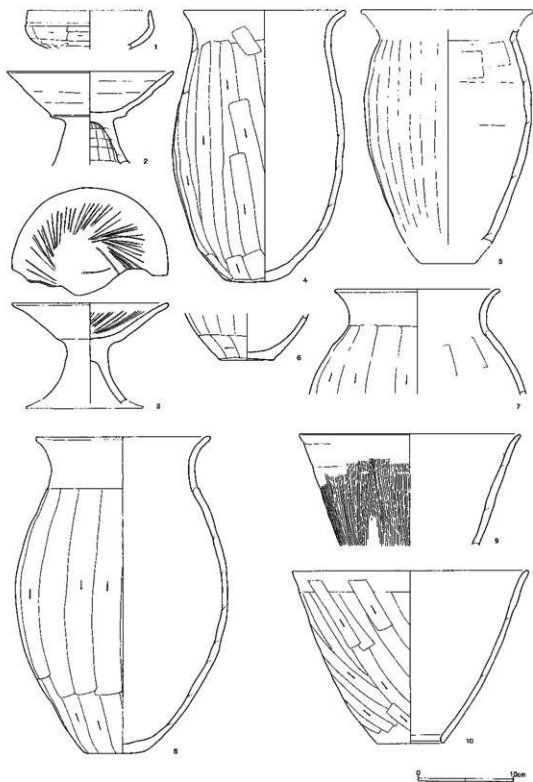
K-11・12 Grid に位置する。北東部を16号溝跡に切られる。形状は東西に長軸をとる長方形を呈する。規模は東3.98m、南北4.34m、深さ20cmを測る。主軸の示す方位はN-76°-Eを指す。覆土はローム、焼土を多量に混入する黒褐色を主体とする。カマドは西壁の南寄りにあり、袖部のみ良好に遺存する。規模は両袖部の外側で1.24m、内側で0.55m、煙道部先端までの長さ0.92mを測る。壁外への切り込みは10cmである。燃焼部は東西1.02m、南北0.80m、深さ3cm程の浅いU形の掘り込みを呈する。貯蔵穴および柱穴、壁溝等の施設は存在しない。遺物はカマド内から支脚転



第111図 第34号住居跡・遺物分布

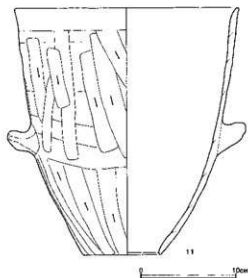


第112図 第34号住居跡カマド



第113图 第34号住居跡出土遺物(1)





第114図 第34号住居跡出土遺物(2)

用の高坏(2)、堯2個体(4・8)の他、袖材としての川原石がカマドの南、南西コーナーから甌(11)が完形ないし50%以上の遺存で出土している。また、南東コーナー付近から高坏(3)が床面直上で出土している。本跡の出土総数は58点を数える。

出土遺物(第113・114図)高坏は口縁部が直接的に立ち上がり、下端に強い段をもち、脚部は円錐状にひろく。(3)は坏部内面に放射状の暗紋を有する。堯は長胴で縦位の鋭削りにより整形。甌はやや小型の(9・10)と大型で把手を装着した(11)がある。(9)は縦位の刷毛目により整形。

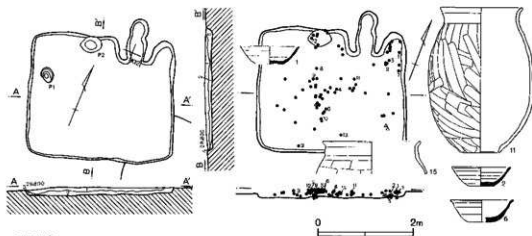
第34号住居跡遺物観察表(第113・114図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	4	坏B	(13.0)				W・B・G	A	橙色	20%	カマド	44
02	7	高坏	17.5				W・U・G	A	橙色	90%	覆土	61
03	3	高坏	16.4				G	A	黄褐色	50%	カマド	56
04	2	堯	17.0	6.9	28.2		G	A	黄褐色	60%	カマド	60
05	6	堯					B・W・G	A	橙色	40%	覆土	40
06	8	堯		5.8			W・B・U・G	A	橙色	5%	覆土	一括
07	5	堯					W・R・U・Ha・G	A	赤褐色	15%	覆土	50
08	11	堯	18.2	5.3	33.0		G	A	明赤褐色	55%	カマド	59
09	9	甌	23.0				W・B・Ha・G	A	橙色	40%	覆土	カマド62
10	1	甌	24.7	6.9	17.9		G	A	橙色	60%	覆土	カマド62
11	10	甌	23.6	8.3	25.9		G	A	鈍い橙色	90%	覆土	51

第35号住居跡(第116図)

K-12 Gridに位置する。南東で44号住居跡を切る。形状は東西に長軸をとる長方形を呈する。規模は東西3.12m、南北2.62m、浅さ14cmを測る。主軸の方位はN-19°-Wを指す。覆土はローム、焼土ブロックを多量に混入する暗褐色土を主体とする。カマドは北壁の東寄りにあり、袖部のみ良好に遺存。規模は、両袖部外側で0.88m、内側で0.32m、煙道部先端までの長さ0.95mを測る。壁外への切り込みは0.55mである。焼成面はフラットで床面と同レベルを呈する。袖部は砂質粘土により構築。ピットはカマドの西と、西壁寄りに認められる。P1は径30cm、深さ33cm、P2は径40cm、深さ25cmを測る。共に用途は不明。壁溝は存在しない。遺物は坏類が北東コーナー寄りに、(11)を含む堯類は住居の中央に、それぞれかなり浮いた状態で出土。

出土遺物(第117・118図)(1-6)は須恵器坏、法量比は口径>底径×2である。(7-9)は台付堯、(12-15)の堯を含め口縁部は「コ」の字状を呈する。(11)の甌は長胴堯をそのまま穿孔して用いた感がある。本跡に伴わない可能性が高い。(16)は鉄製の刀子。残存値は全長4.9cm。

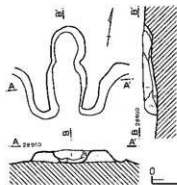


S J 35編序

- 1 暗褐色 大粒ローム (径5mm)、焼上ブロックを粗に少量混入。  
 2 暗黄褐色 ソフトローム、黒色ブロックを密に混入。  
 3 黄褐色 ロームを粗に少量混入。

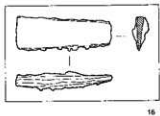
- 4 暗黄褐色 ソフトローム密に混入。  
 5 暗褐色 ソフトローム、焼上を密に混入。

第115図 第35号住居跡・遺物分布



カマド編序

- 1 黒褐色 黒色シルト、黄褐色シルト、焼上を多量に混入。  
 2 黒褐色 黒色シルト、微土、カーボン少量混入。  
 3 黒褐色 黒色シルト、ロームを混入。  
 4 暗黄褐色 黒色シルト、ロームを密に混入。



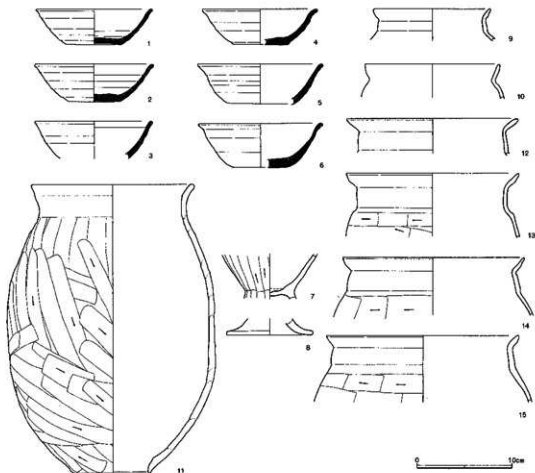
第117図 第35号住居跡出土遺物(1)

第116図 第35号住居跡カマド

第35号住居跡遺物観察表 (第118図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	6	須环	12.2	5.8	3.7		W・Ha・G	A	灰白色	70%	覆土	6
02	5	須环	12.4	5.4	3.9		W・Ha・G	A	灰白色	70%	覆土	8
03	4	須环	(12.0)				Ha・W・G	A	灰白色	20%	覆土	42
04	1	須环	(12.0)	(5.8)	(3.7)		W・B・G	A	橙褐色	30%	覆土	66
05	3	須环	(13.0)	(6.8)	(4.2)		W・B・G	A	淡橙褐色	30%	覆土	71
06	2	須环	(13.0)	(5.8)	(4.6)		W・G	A	灰白色	30%	覆土	48
07	8	台付蓋					R・W・G	A	橙褐色	10%	覆土	7
08	7	台付蓋			(9.0)		W・B・G	A	橙褐色	20%	覆土	29
09	13	类	(12.0)				W・U・G	A	淡橙褐色	5%	覆土	28
10	14	蓋	(14.0)				W・R・G	A	橙褐色	5%	覆土	45
11	15	蓋	16.8			30.1	G	A	鈍い褐色	95%	覆土	12
12	11	蓋	(18.0)				B・W・G	A	淡橙褐色	10%	覆土	32
13	9	蓋	(18.0)				W・U・B・G	A	赤橙褐色	10%	覆土	21

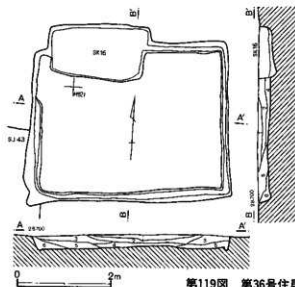
14	12	亮	(19.0)			B・W・G	A	淡棕色	5%	覆土	一括
15	10	変	(20.0)			U・W・B・G	A	黄棕色	10%	カマド	一括



第118図 第35号住居跡出土遺物(2)

#### 第36号住居跡 (第119図)

H-12 Grid に位置する。北で17号土壌、南で18号土壌に切られる。平面形は東西に長軸をもつ長方形を呈する。規模は東西4.40m、南北3.36m、深さ30cmを測る。主軸の示す方位はN-88°-Eを指す。覆土は壁際に第I次埋没土(黒色土)の堆積が顕著で全体は焼土ブロック・炭化物混入の黒色土とローム混入の暗褐色土が交互に堆積している。カマドは北壁に存在した可能性が高いが、17号土壌との切り合いにより不明。貯蔵穴、ピット等の検出はない。壁溝は北西コーナー周辺を除く各壁下を、幅35cm、深さ35cmの規模で巡る。遺物は出土総数僅か10点である。余て住居の中央に浮いた状態で出土している。

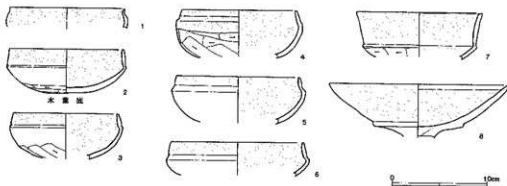


第119図 第36号住居跡



壁際の第一次埋没土が明瞭に区分される。

- S J 36層序
- |        |                    |
|--------|--------------------|
| 1 暗褐色  | ローム多量、焼土、炭化物を少量混入。 |
| 2 黒色   | 造土ブロック、炭化物を多量に混入。  |
| 3 暗黒褐色 | ロームを多量に混入。         |
| 4 暗褐色  | ロームを極多量に混入。        |
| 5 暗黄褐色 | ロームを多量に混入。         |
| 6 黒褐色  | ロームを多量に混入。         |
| 7 暗黒褐色 | ロームを多量に混入。         |
| 8 茶褐色  | ロームを多量に混入。         |



第120図 第36号住居跡出土遺物

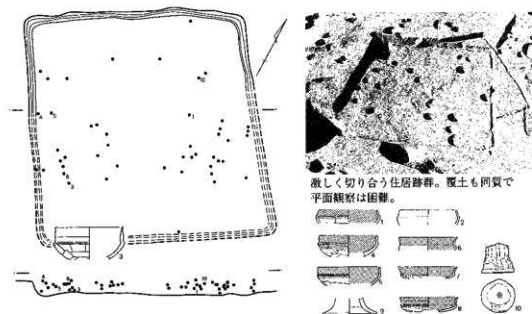
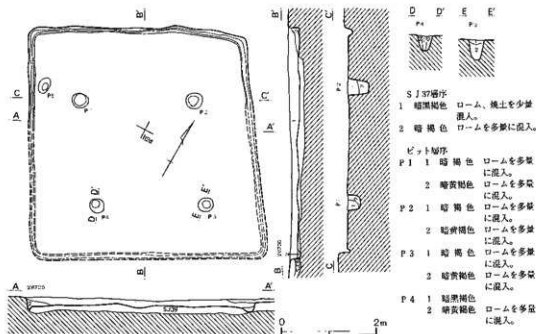
第36号住居跡遺物観察表 (第120図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	8	坏A	(12.0)		4.6		W・B・U・G	A	橙 色	10%	覆土	一括
02	5	坏B	12.2				W・B・G	A	赤褐色	60%	覆土	一括.3
03	2	坏B	(11.0)				W・R・U・G	A	赤褐色	30%	覆土	一括.3
04	7	坏B	(12.0)				W・U・G	A	橙 色	20%	覆土	10
05	4	坏B	(13.0)				W・K・B・G	A	橙 色	20%	覆土	3
06	6	坏B	(14.0)				W・R・G	A	赤褐色	10%	覆土	一括
07	3	坏C	(13.0)				W・B・U・G	A	橙 色	10%	覆土	一括
08	1	高坏	19.0				W・U・B・K・G	A	黄橙色	35%	覆土	1

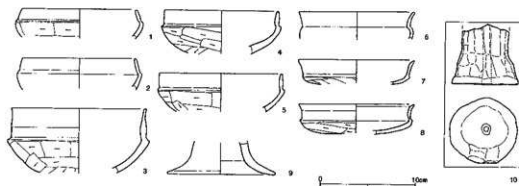
第37号住居跡 (第121図)

H・1-12 Grid に位置する。38・39号住居跡を切り、18号土壌に切られる。3軒が入子状に切り合っているためプランは推定の域を出ない。形状は方形を呈すると思われる。規模は東西4.62m 南北4.90m (推定)、深さ16cmを測る。主軸の示す方位はN-60°-Eを指す。カマドは検出できな

かった。ピットは主柱穴と思われる4ヶ所（P1～P4）が東西2.1m、南北1.9mの等間隔の配置が認められる。規模は径30～35cm、深さ30～40cmを測る。貯蔵穴は存在しない。壁溝は切り合い関係をもたない、北半部は幅15cm、深さ25cmの規模で巡ることから一周するものと思われる。床面は、48・49号住居跡と切り合う部分はローム・ブロックを多量に含む黒褐色土により貼床がなされている。遺物は出土総数47点を数える。小破片が多く、住居の中央に浮遊した状態で出土している。



第121図 第37号住居跡・遺物分布



第122図 第37号住居跡出土遺物

第37号住居跡遺物観察表 (第122図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	3	坏B	(12.0)				K・R・W・G	A	浅黄橙色	10%	覆土	6
02	5	坏B	(12.0)				W・G	A	橙 色	10%	覆土	一括
03	8	坏C	(14.0)				Ha・U・W・R・G	A	橙 色	20%	床直	40
04	6	坏B	(12.0)				B・W・U・G	A	橙 色	30%	覆土	34
05	1	坏B	(13.0)				W・B・G	A	赤橙色	30%	覆土	33
06	7	坏E	(12.0)				W・Ha・U・G	A	橙 色	10%	覆土	一括
07	4	坏E	(12.0)				W・R・G	A	浅黄橙色	10%	覆土	一括
08	2	坏E	(12.0)				W・B・G	A	赤橙色	40%	覆土	39
09	9	高坏		(11.5)			B・W・U・G	A	橙 色	15%	覆土	一括
10	10	支脚		7.2			W・Ha・G	A	橙 色	5%	覆土	3

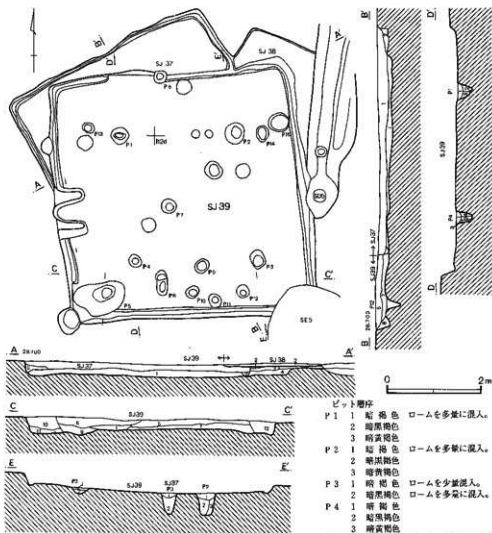
出土遺物(第122図)本跡に帰属する遺物は少ないと思われる。坏は(1-6)と(7・8)に大きな時間差が存在する。(7・8)は所謂「比企型坏」と思われる。

#### 第38号住居跡 (第123図)

H-12・13 Gridに位置する。東半部を南北に走る5号溝跡に、西は37号住居跡に切られ、39号住居跡に切っている。遺存する部分は僅かで、北西コーナーの周囲の形状から方形プランであることが理解できる。壁高は10cm、壁溝は認められない。遺物は須恵器坏3点が出土しているが、本跡には帰属せず5号溝跡からの流入と考えられる。

#### 第39号住居跡 (第123図)

H・I-11・12 Gridに位置する。37・38号住居跡および5号井戸跡、5号溝跡に切られる。形状は正方形を呈する。規模は東西5.36m、南北5.20m、深さ23cmを測る。主軸の示す方位はN-86°-Eを指す。覆土は床面を広く覆う暗褐色土を、焼土・ロームを多量に混入する黒褐色土が被覆するが大半は38号住居跡に破壊され遺存しない。カマドは西壁のほぼ中央にあり、袖部のみ良好に遺存する。規模は両袖間の外側で1.06m、内側で0.34m、煙道先端までの長さ0.68mを測る。壁外への切り込みはない。貯蔵穴は南西コーナーにあり、形状は不製楕円形、規模は東西1.13m、南



- ピット層序
- |     |        |              |
|-----|--------|--------------|
| P 1 | 1 暗褐色  | ロームを多量に混入。   |
|     | 2 暗黒褐色 |              |
|     | 3 暗黄褐色 |              |
| P 2 | 1 暗褐色  | ロームを多量に混入。   |
|     | 2 暗黒褐色 |              |
|     | 3 暗黄褐色 |              |
| P 3 | 1 暗褐色  | ロームを少量混入。    |
|     | 2 暗黒褐色 | ロームを多量に混入。   |
| P 4 | 1 暗褐色  |              |
|     | 2 暗黒褐色 |              |
|     | 3 暗黄褐色 |              |
| P 5 | 1 暗褐色  | ローム、焼土を少量混入。 |
|     | (貯)    | 2 黒褐色        |
|     | 3 暗黄褐色 | 砂礫粒を少量混入。    |

S J 38層序

- 1 褐色 ローム、焼土を少量混入。

S J 39層序

- 1 暗褐色 ロームを多量、焼土を少量混入。(S J 37貼り床)  
 2 暗黄褐色 焼土を多量に混入。(S J 38(床面))  
 3 暗黒褐色 ローム、焼土を少量混入。(S J 38覆土)  
 4 暗黄褐色 ロームを多量に混入。(S J 38覆土)  
 5 暗褐色 ローム、焼土、炭化物を少量混入。(S J 38覆土)

- 6 暗黒褐色 ローム、焼土を少量混入。(S J 37覆土)

- 7 暗黒褐色 ローム、焼土を少量混入。

- 8 暗黄褐色 ロームを多量に混入。

- 9 暗黒褐色 ロームを多量に混入。(S J 37覆土)

- 10 暗褐色 流土ブロックを多量に混入。(S J 39覆土)

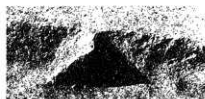
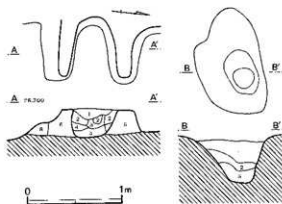
- 11 暗褐色 ロームを多量に混入。(S J 39覆土)

- 12 暗黒褐色 ローム、焼土を少量混入。

第123図 第38・39号住居跡

北0.67m、深さ52cmを測る。ピットは15ヶ所が検出された。内、支柱穴はP1～P4で、径30～40cmを測る。他は37・38号住居跡に含まれる可能性もある。壁溝はカマドと北壁の一部を除き幅25cm、深さ35cmで巡る。遺物の出土総数は僅か8点である。全て37号住のワク外からの出土である。

出土遺物(第125・126図)シルト岩製勾玉(6)は全長2.30cm、幅0.88cm、厚さ0.61cmを測り、穿孔部径は2.2mmである。重量3.5g



袖の一方は早くから消失している。

- カマド層序
- 1 暗褐色 暗褐色粘土、焼土を少量混入。
  - 2 暗褐色 粘土ブロック、焼土ブロックを少量混入。
  - 3 暗黒褐色 焼土を少量混入。
  - 4 暗灰藍色 焼土小ブロック多量、炭化物を少量混入。
  - 5 暗黒褐色 焼土、炭化物を少量混入。
  - 6 暗灰藍色 粘土 崩壊土である。
  - 7 暗黒褐色 焼土を少量混入。
  - 8 暗灰藍色粘土 内面は焼熱を受け、赤化している。

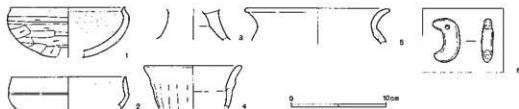
第124図 第39号住居跡カマド



第125図 第38号住居跡出土遺物

第38号住居跡遺物観察表 (第125図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	瓶環	(12.0)				W・B・Ha・G	A	灰白色	10%	覆土	一括
02	3	瓶環	(12.0)				W・R・Ha・G	A	灰白色	10%	覆土	一括
03	1	瓶環	(12.0)	(5.4)	(3.4)		W・B・G	A	灰色	20%	覆土	一括



第126図 第39号住居跡出土遺物

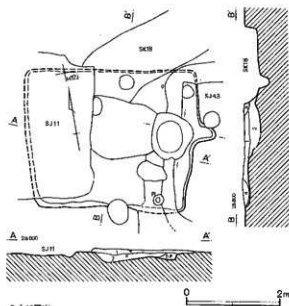
第39号住居跡遺物観察表 (第126図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	環A	(12.0)				W・B・G	A	赤褐色	30%	覆土	1
02	1	環B	(12.0)				W・B・G	A	赤褐色	20%	覆土	3
03	4	高環					R・W・K・G	A	橙黄色	10%	覆土	一括
04	3	鉢	(10.0)				B・R・G	A	浅黄褐色	5%	覆土	一括
05	5	甕	(15.0)				W・Ha・K・G	A	橙黄色	10%	覆土	5

第40号住居跡 (第129図)

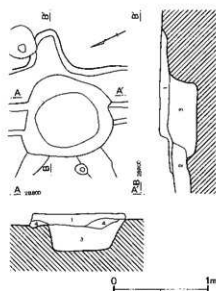
H-12 Grid に位置する。西で11号住居跡、北で19号土壌に切れ、東で43号住居跡を切る。形状は東西に長軸をもつ長方形と思われる。規模は東西3.70m、南北2.85m、深さ12cmを測る。主軸





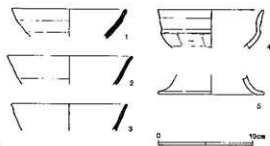
- S J40層序
- 1 暗褐色 ロームを少量混入。
  - 2 暗褐色 ロームを多量に混入。(床下土層覆土)
  - 3 暗褐色 灰化物、焼土を多量に混入。
  - 4 暗褐色 ロームを少量混入。
  - 5 暗褐色 ローム、焼土を少量混入。

第127図 第40号住居跡



- カマド層序
- 1 黒褐色 焼土ブロック、粘土ブロック、灰化物を多量に混入。(カマド覆土。ほとんど基底層のみ遺存)
  - 2 暗褐色 ロームを混入。(床下土層覆土)
  - 3 暗褐色 ロームを混入。(塵状に混入し人為的に埋めている床下土層覆土)
  - 4 暗褐色 ローム、焼土を少量混入。

第128図 第40号住居跡カマド



第129図 第40号住居跡出土遺物

の示す方位はN-14°-Eを指す。覆土はローム、焼土を少量混入する暗褐色土を主体とする。カマドは東壁のほぼ中央にあり、袖部の痕跡を僅かに残す。掘り方の規模は東西0.78m、南北1.02m、深さ10cmの楕円形を呈する。煙道部は壁外へ45cm程突出している。貯蔵穴はない。ピットは6ヶ

所検出されたが本跡に帰属する否かは不

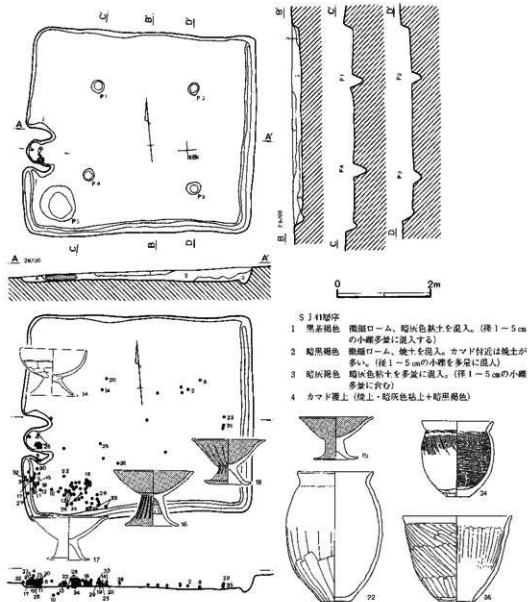
明。カマドの正面に東西1.60m、南北1.22m、深さ28cm程の土塊状の掘り込みが検出されたが性格は不明。壁溝は存在しない。

第40号住居跡遺物観察表 (第129図)

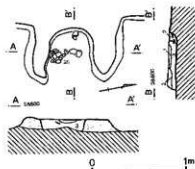
No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	3	須环	(12.0)				W・Ha-G	A	灰色	10%	覆土	一括
02	4	須环	(13.0)				W・Ha-G	A	灰色	10%	覆土	一括
03	5	須环	(12.0)				W・Ha-G	A	灰色	10%	覆土	一括
04	2	杯B	(11.0)				B・W-G	A	黄褐色	20%	覆土	一括
05	1	高环		(11.0)			U・W-G	A	浅黄褐色	10%	覆土	一括

### 第41号住居跡 (第130図)

K-8 Grid に位置する。切り合い関係はない。北部に群集するグループとしては最も西に位置する。形状は東西に長軸をもつ隅丸長方形を呈する。規模は東西3.70m、南北2.85m、深さ12cmを測る。主軸の示す方位はN-14°-Eを指す。覆上は焼土、ローム混入の黒褐色土を主体とする。カマドは西壁のやや南寄りにあり、袖部のみ良好に遺存する。規模は両袖間外側で1.04m、内側で0.48m、煙道先端までの長さ0.62mを測る。壁外への切り込みはなく、燃焼面もフラットで床面と同レベルである。貯蔵穴は南西コーナーにあり、形状は楕円形、規模は東西0.72m、南北0.76m、深さ24cmを測る。ピットは支柱穴(P1~P4)のみである。規模は径25~30cm、深さは



第130図 第41号住居跡・遺物分布



- カマド層序  
 1 暗茶灰色粘土 焼土を混入。  
 2 暗茶灰色粘土 焼土ブロックを多量に混入。  
 (天井部分の崩落・堆積と  
 思われる)  
 3 青灰茶褐色 焼土、炭化物を混入。

第131図 第41号住居跡カマド

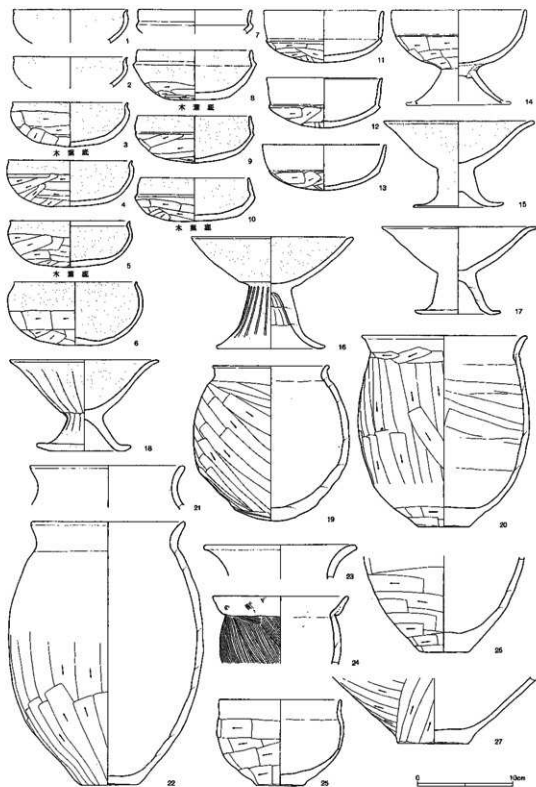
(14)がある。後者には赤彩がない。小型甕は器形のバリエーションが豊富であるが、底部の器壁が総じて厚い。(24・32・34)は刷毛目整形。甗(23・24)は小型で底部を急激にしぼり込んでいる。

20cm前後である。壁溝は東および南壁下のみ認められる。規模は幅18～28cm、深さ20cmを測る。遺物は出土総数80点を数える。カマド内から甕(26・28)を中心とする煮沸具が、貯蔵穴およびその周辺から坏、高坏などの供膳具類が浮いた状態で出土している。図示した大半の遺物はこの位置に集中しており、他は住居の中央で床面直上の状態で出土している。

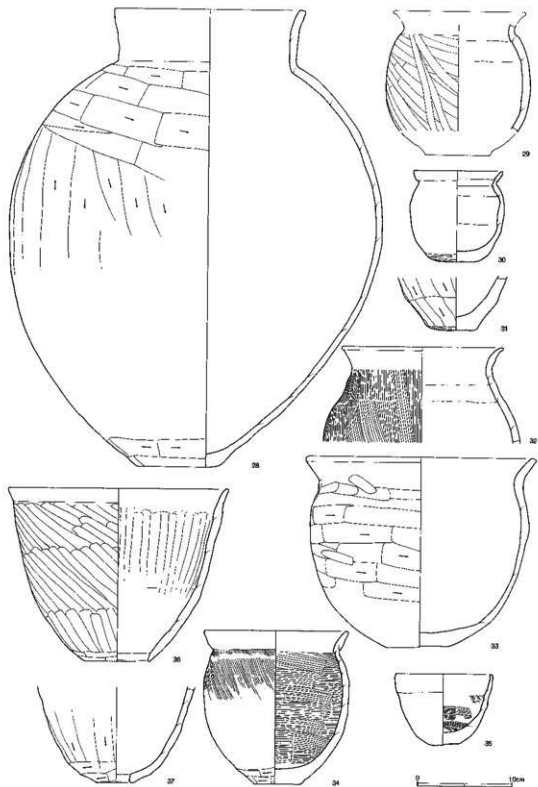
出土遺物(第132・133図)坏は碗形態のものが主体で、器高の差に多少バリエーションがある。模倣坏の典型例(11～13)は全て赤彩されていない。高坏は体部下端に段をもたず直線に立ちあがり、脚部の裾部が急激に開く(15～18)タイプと「ハ」の字状の脚部に模倣坏をのせた

第41号住居跡遺物観察表(第132・133図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重9	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	8	坏A	(12.0)				W・B・U・G	A	橙 色	10%	覆土	一括
02	9	坏A	(12.0)				W・B・U・G	A	赤褐色	30%	床直	5
03	17	坏A	12.4		4.6	180	W・B・Ha・R・G	A	橙 色	完形	覆土	62
04	11	坏A	13.2		4.8		W・B・U・G	A	赤褐色	60%	床直	49
05	15	坏A	12.4		4.9	182	W・R・B・G	A	橙 色	完形	床直	47
06	12	坏A	13.0		6.6	330	B・W・Ha・G	A	橙 色	完形	覆土	52
07	10	坏B	(12.0)				W・B・U・G	A	橙 色	20%	覆土	一括
08	13	坏B	12.2		5.2		W・K・B・U・G	A	赤褐色	70%	床直	4
09	7	坏B	12.0		4.9	175	W・R・G	A	橙 色	完形	覆土	44
10	16	坏B	11.6		4.6	180	B・W・U・Ha・G	A	淡黄褐色	完形	貯穴	75
11	19	坏C	12.6		5.4	190	B・W・U・G	A	黄褐色	完形	覆土	42
12	18	坏C	12.0		5.2	140	B・R・W・U・G	A	黄褐色	90%	覆土	43
13	20	坏D	13.0		4.7		W・R・G	A	橙 色	70%	貯穴	40
14	29	高坏	14.0				W・U・B・G	A	橙 色	50%	覆土	65
15	4	高坏	15.7	9.5	9.0		G	A	鈍い橙色	80%	覆土	45
16	1	高坏	18.0		(11.6)		G	A	赤 色	80%	覆土	21
17	3	高坏	16.0	7.0	9.1	330	G	A	鈍い橙色	完形	覆土	61
18	6	高坏	15.6	9.9	9.5	385	G	A	赤黒色	完形	覆土	46
19	25	小型甕	12.0		16.2		Ha・U・W・K・G	A	橙 色	50%	覆土	53
20	32	甕	(17.0)	5.4	20.0		Ha・U・K・W・B	A	赤褐色	50%	覆土	66
21	24	甕	16.0				K・W・U・G	A	橙 色	10%	覆土	一括
22	5	甕	15.9	6.5	27.2		G	A	明赤褐色	75%	貯穴	58
23	27	甕	(16.0)				U・W・B・G	A	橙 色	10%	覆土	3
24	26	小型甕	(14.0)				W・B・K・Ha・U	A	黄褐色	20%	貯穴	貯蔵穴
25	14	小型甕	13.0	5.0	8.9		W・R・B・Ha・G	A	橙 色	60%	覆土	8
26	34	甕		5.0			W・U・Ha・K・G	A	橙 色	20%	覆土	80
27	36	甕		7.6			B・W・U・G	A	橙 色	35%	覆土	60
28	37	甕	20.0	8.4	47.7		U・Ha・W・B・G	A	明褐色	50%	カマド	30.31.32.39

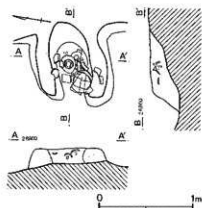


第132圖 第41号住居跡出土遺物(1)



第133图 第41号住居跡出土遺物(2)





第135図 第42号住居跡カマド

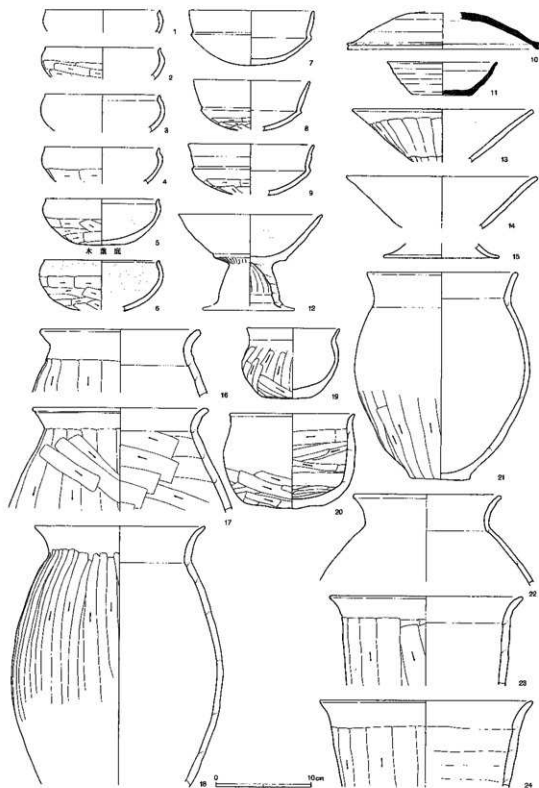
深さ45cmを測る。ピットは4ヶ所が検出された。配置はアトランダム、規模は径40~50cm、深さ25cm前後を測る。壁溝は北壁下のみ認められ、幅20~30cm、深さ40cmの規模を有する。遺物はカマド内に甕(21)、支脚転用の高坏(12)、坏(8)が他は東半部を中心に浮いた状態で出土している。

出土遺物(第136図)坏は碗形態、模倣坏共に出土しているが前者が主体を占める。高坏は坏部下端に段をもち、直線的に立ち上がるものが多い。小型甕は広口で器高の低いもの(19・20)。甕は長胴で縦位の筒削り整形が主体を占める。

第42号住居跡遺物観察表(第136図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	20	坏A	(12.0)				W・Ha・G	A	橙 色	10%	覆土	一括
02	11	坏A	(12.0)				W・B・K・G	A	赤褐色	10%	覆土	一括
03	15	坏A	(12.0)				W・U・G	A	橙 色	10%	覆土	一括
04	7	坏A	(12.0)				W・B・G	A	赤褐色	20%	覆土	34
05	6	坏A	11.8		4.8		W・B・U・Ha・G	A	赤褐色	70%	覆土	34
06	8	坏A	(12.0)				W・B・G	A	赤褐色	30%	覆土	13
07	10	坏C	13.2		5.7	171	U・W・G	A	緑 色	完形	覆土	31
08	13	坏C	12.4				B・G	A	橙 色	60%	カマド	48
09	12	坏C	(13.0)				B・R・G	A	橙 色	20%	覆土	17
10	14	須壺	(20.0)				W・R・G	A	灰 色	5%	覆土	一括
11	5	須坏	11.4	6.2	3.4		Ha・W・B・G	A	灰 色	60%	覆土	35
12	9	高坏	15.0				W・B・K・G	A	赤褐色	80%	カマド	51
13	16	高坏	(19.0)				W・U・G	A	橙 色	15%	覆土	27
14	17	高坏	(20.0)				W・U・G	A	橙 色	10%	床直	19
15	19	高坏	(12.0)				W・B・U・G	A	橙 色	15%	覆土	18
16	23	甕	(16.0)				W・B・U・G	A	黄褐色	30%	覆土	24
17	24	甕	(18.0)				W・B・K・U・G	A	橙 色	20%	覆土	33
18	4	甕	17.9				G	A	緑 色	60%	覆土	12
19	2	小型甕	9.7		7.3	225	G	A	鈍い棕色	95%	覆土	50
20	1	小型甕	13.1	8.0	10.0		G	A	黄褐色	70%	覆土	20
21	3	甕	15.5	6.3	21.6		G	A	明褐色	70%	カマド	一括
22	22	甕	(15.0)				W・B・G	A	橙 色	20%	覆土	22
23	18	甕	(20.0)				B・W・U・G	A	浅黄褐色	20%	覆土	30
24	21	甕	(22.0)				W・U・Ha・R・G	A	浅黄褐色	20%	覆土	32

K-9 Gridに位置する。北西コーナーを8号井戸跡に切られる。形状は東西に長軸をとる長方形を呈する。規模は東西4.40m、南北3.45m、深さ26cmを測る。主軸の示す方位はN-81°-Eを指す。覆土は砂質ローム、焼土を多量に混入する暗黄灰褐色が床面を薄く広く覆い、その上を主体となる黒褐色土が被覆する。カマドは東壁の中央にあり、袖部のみ良好に遺存する。規模は両袖間の外側で0.86m、内側で0.34m、煙道部先端までの長さ0.86mを測る。壁外への切り込みはなく、燃焼面もフラットで床面と同一レベルである。貯蔵穴はカマドの南、南東コーナーにあり、形状は不整形、規模は東西0.90m、南北0.67m、

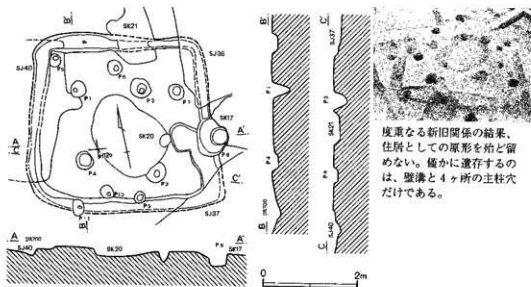


第136图 第42号住后跡出土遺物



### 第43号住居跡 (第137図)

H-12 Grid に位置する。南北でそれぞれ40、36、37号住居跡に切られ、更に18、21、22号土壁に切られる。部分的に遺存する壁体および壁溝から、形状は隅丸方形であることが理解できる。規模は東西4.11m、南北3.77m、深さ7cmを測る。主軸の示す方位はN-78°-Wを指す。カマドは北壁中央に掘り型だけ遺存する。燃焼部は東西に長い楕円形を呈し、東西0.80m、南北0.68m、深さ30cmを測る。壁外への切り込みは30cmである。貯蔵穴はない。ピットは11ヶ所が検出でき、P1-P4が主柱穴と思われる。径は30cm前後、深さは30-45cmを測る。壁溝は幅広でしっかり掘り込んでいる。幅30cm、深さ15cmで各壁下を巡る。出土遺物はない。



第137図 第43号住居跡

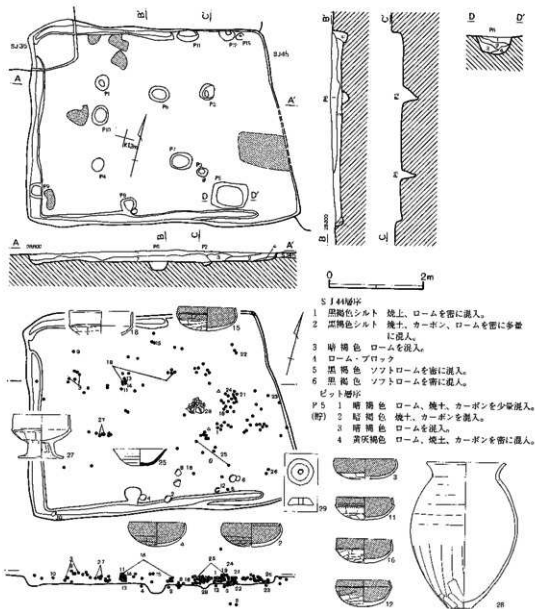
度重なる新旧関係の結果、住居としての原形を殆ど留めない。僅かに遺存するのは、壁溝と4ヶ所の主柱穴だけである。

### 第44号住居跡 (第138図)

K-12・13 Grid に位置する。南東で45号住居跡を切り、北西コーナーを35号住居跡に切られる。形状は東西に長軸をもつ長方形を呈する。規模は東西5.75m、南北4.15m、深さ20cmを測る。主軸の示す方位はN-76°-Eを指す。覆上は焼土、ロームを多量に混入する黒褐色シルトが主体で、壁際にロームの混入が顕著。カマドは東壁の南寄りにあるが、焼土、砂質粘土の分布として認識できる程度で掘り込み等はない。貯蔵穴は南東コーナー付近にある。形状は長方形、規模は東西0.84m、南北0.51m、深さ42cmを測る。ピットは13ヶ所検出された。P1-P4が主柱穴で、径25-35cm、深さ20-35cmを測る。壁溝は幅33cm、深さ34cmの規模で北壁を除く各壁下を巡る。床面には西半部を中心に焼土ブロック、炭化物のブロックが多量に認められる。遺物は出土総数134点を数える。貯蔵穴内およびその周囲から坏(4-6、12、25、26)6点が集中しており、カマドの正面から高坏(27)と甕(28)が土圧でつぶれた状態で出土している。

出土遺物(第139図)坏は碗タイプと模倣坏が同様な比率で出土している。赤彩の度合は前者が圧倒している。須恵器坏(19-26)は法量比、口径>底径×2。35号住居に帰属する。高坏(27)は短く柱状で袖部が急激に開く脚部に模倣坏をのせたもの。紡錘車(29)は径5.4×5.5cm、厚さ

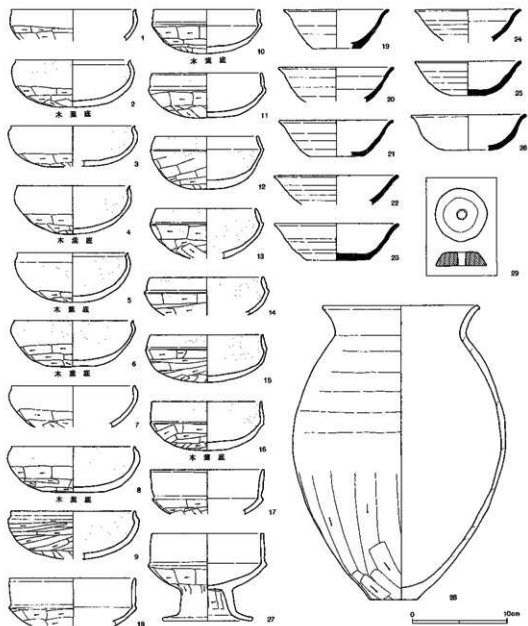
1.4cm、重量65gを計る。材質は滑石製である。



第138図 第44号住居跡・遺物分布

第44号住居跡遺物観察表 (第139図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	7	坏A	(13.0)				Ha-W-G	A	赤橙色	10%	覆土	104
02	22	坏A	12.0		4.9	182	W-B-U-K-G	A	赤褐色	90%	覆土	117
03	14	坏A	(13.0)				W-U-G	A	明赤褐色	30%	覆土	10, 14
04	21	坏A	12.0		5.1	196	W-U-G	A	赤褐色	完形	床底	16
05	19	坏A	11.8		5.2	183	U-W-B-G	A	赤褐色	90%	床底	122
06	27	坏A	12.8		4.8	190	W-B-U-G	A	赤褐色	90%	床底	133

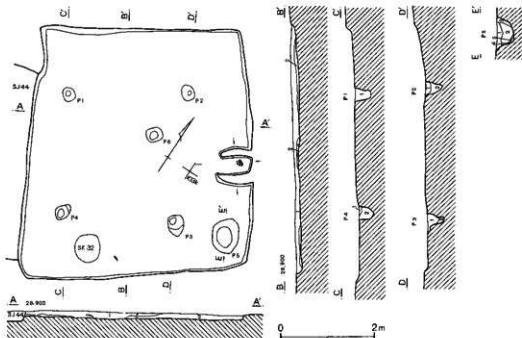


第139图 第44号住居跡出土遺物

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
07	8	坏A	(13.0)				U·W·G	A	赤褐色	20%	覆土	一括
08	23	坏A	13.2		4.8		W·B·U·K·G	A	赤褐色	80%	覆土	119
09	17	坏A	(13.0)				W·B·Ha·U·G	A	鈍い褐色	20%	覆土	26
10	24	坏B	11.0		4.6		W·B·Ha·U·G	A	赤褐色	80%	覆土	115
11	11	坏B	11.6		4.7		W·B·G	A	褐色	50%	覆土	23
12	26	坏B	11.0		5.6		W·B·K·G	A	褐色	80%	貯穴	121
13	15	坏B	10.4				W·B·G	A	褐色	40%	覆土	22

No	測	器種	口径	底径	器高	重0	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
14	16	坏B	(12.0)				W・B・U・G	A	棕色	20%	覆土	24
15	18	坏B	(12.0)		(5.0)		W・B・K・G	A	赤褐色	60%	覆土	34
16	20	坏B	11.6		5.2	175	W・B・U・G	A	赤褐色	90%	床直	119
17	13	坏C	(12.0)				U・W・B・G	A	橙黄色	30%	覆土	一括
18	12	坏C	(13.0)				B・W・U・G	A	橙黄色	30%	覆土	19, 29
19	9	須环	(11.0)	(5.2)	(4.1)		Ha・W・B・G	A	灰白色	20%	覆土	49
20	3	須环	(12.0)				Ha・W・G	A	灰色	30%	覆土	一括
21	2	須环	(12.0)				Ha・B・W・G	A	灰色	20%	覆土	75
22	1	須环	(13.0)				Ha・B・W・G	A	灰白色	20%	覆土	39
23	10	須环	13.2	6.7	3.8		Ha・W・B・G	A	棕色	80%	覆土	73
24	5	須环	(11.0)				Ha・W・B・G	A	灰白色	20%	覆土	45
25	4	須环	11.2	3.8	3.6		Ha・W・B・G	A	灰白色	50%	覆土	61, 67
26	6	須环	(12.0)	(5.0)	(3.7)		Ha・W・B・G	A	灰白色	30%	覆土	69
27	25	高坏	12.0	(9.6)			W・U・G	A	橙黄色	70%	覆土	108, 109
28	28	甕	16.6	5.4	30.6		G	A	橙・褐灰色	50%	覆土	

### 第45号住居跡 (第140図)



#### S J 45層序

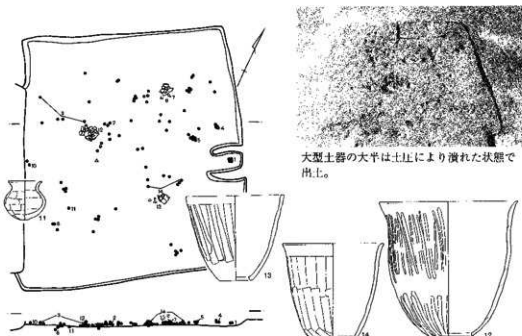
- 1 暗褐色 砂利、ローム、若干の焼土、炭化物を含みしり粘性は弱い。  
2 暗褐色 ローム、砂利混在。しりやや有。

#### ピット層序

- P 1 1 暗褐色 ローム、砂利を混入。しりや有り。  
2 暗褐色 ローム、砂利を混入。しりや有り。  
3 暗褐色 きめは粗雑である。ローム、炭化物を混在。  
P 3 1 暗褐色 ローム、砂利を混入。しりや有り。  
2 暗褐色 きめは粗雑である。ローム、炭化物を混在。

- P 4 1 暗褐色 ローム、砂利を混入。しりや有り。  
2 暗褐色 きめは粗雑である。ローム、炭化物を混在。  
P 5 1 暗褐色 焼土(厚3-5mm)を多く含み、小石を混在。  
2 暗褐色 1層と近似するがしりやがやや弱く粘性に欠ける。  
3 暗褐色 石(径5-8cm)を多く含む。若干のロームを混在。  
4 暗褐色 ローム、砂粒子を主体とする。  
5 暗褐色 しりや弱く、きめ細かく砂質である。

第140図 第45号住居跡



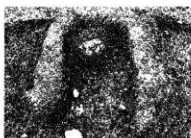
第141図 第45号住居跡遺物分布

大型土器の大半は土圧により潰れた状態で出土。



第142図 第45号住居跡カマド

カマド層作  
1 黒褐色 砂利、ロームを混在、  
しまり悪い。  
2 赤褐色 焼土を主体とする。

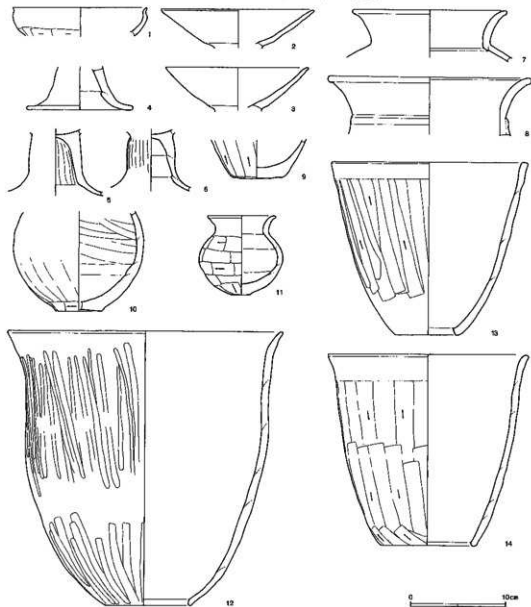


壁、火床面への掘り込みは全くない。  
砂質粘土による袖のみが遺存する。

K-13 Grid に位置する。西で44号住居跡に切られる。形状は南北に長軸をもつ方形を呈する。規模は東西4.92m、南北5.35m、深さ13cmを測る。主軸の示す方位はN-58°-Eを指す。覆土はローム、焼土を少量含む粘性の弱い暗褐色土である。カマドは東壁のほぼ中央にあり、砂質粘土を主体とした袖部のみ良好に遺存する。規模は両袖側の外側で0.82m、内側で0.34m、煙道先端までの長さ0.75mを測る。壁外への切り込みはない。燃焼面はフラットで床面と同一レベルである。貯蔵穴は南東コーナーにあり、形状は楕円形、規模は東西0.56m、南北0.73m、深さ41cmを測る。ピットは6ヶ所が検出され内、主柱穴はP1-P4が相当する。規模は径30~45cm、深さ35cm前後を測る。壁溝は存在しない。遺物は出土総数50点を数える。遺物はカマド内に坏(1)、カマド前面に高坏(4・5)他は主柱穴の内側で土圧によりつぶれた状態で出土している。

出土遺物(第143図) 高坏は脚部の作りで分類が可能。端部近くまで緩やかに開き、先端で開きを増す(4)と、柱状をなし裾部で急激に開く(5・6)がある。甑は口縁部から底部まで直線的

で、底径の小さな (13)、口縁部が僅かに外傾する (12・14) がある。



第143図 第45号住居跡出土遺物

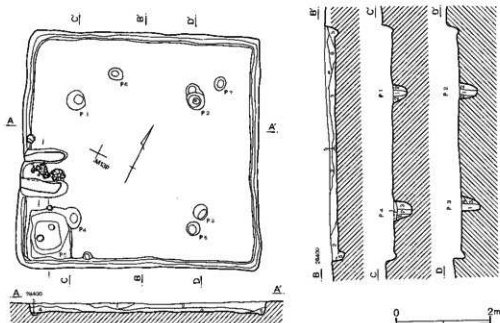
第45号住居跡遺物観察表 (第143図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	4	坏A	(14.0)				W・B・G	A	赤橙色	20%	カマド	カマド
02	11	高坏	(15.0)				W・R・B・G	A	赤橙色	15%	覆土	30
03	13	高坏	(16.0)				W・B・U・G	A	橙 色	10%	覆土	1.55
04	5	高坏		(11.0)			W・B・G	A	赤橙色	30%	覆土	54
05	8	高坏					B・W・G	A	橙 色	5%	覆土	53
06	7	高坏					B・W・U・G	A	橙 色	5%	床直	58

07	3	煮	(16.0)				W・B・G	A	橙 色	20%	床直	51
08	9	麦	21.0				W・B・G	A	赤橙色	20%	床直	51
09	6	麦		5.4			K・S・W・U・G	A	浅黄褐色	5%	覆土	
10	10	小型竈	( 5.0)				W・B・U・G	A	浅黄褐色	40%	覆土	5
11	14	小型竈	7.2		8.3		W・B・G	A	浅黄褐色	50%	覆土	14
12	2	瓶	29.0	9.0	28.5		G	A	赤褐色	60%	床直	
13	1	瓶	20.6	6.5	18.0		G	A	明黄褐色	60%	床直	
14	12	瓶	(21.0)	(12.0)			U・W・B・G	A	浅黄褐色	20%	床直	17.45

### 第46号住居跡 (第144図)

M-13・14 Grid に位置する。切り合い関係はない。形状は整った方形を呈する。規模は東西 5.23m、南北 4.93m、深さ 15cm を測る。主軸の示す方位は N-64°-E を指す。覆土は黒色土が床面を覆い、その上を焼土ブロック、黄褐色粘土ブロックを多量に含む暗茶褐色土が被覆する。カマドは西壁南寄りにあり、袖部の遺存は良好である。規模は両袖間外壁で 1.04m、内側で 0.40m、煙道部先端までの長さ 0.98m を測る。壁外への切り込みはない。燃焼面はフラットで床面と同一レベルである。貯蔵穴は南西コーナーにあり、形状は長方形、規模は東西 1.11m、南北 0.95m、深さ 0.59m を測る。ピットは主柱穴 4ヶ所の他 3ヶ所が検出されたが、P 8 は P 3 の建て替えと思われる。



#### S J 46 貯蔵

- 1 暗茶褐色 焼土ブロック、黄褐色粘土ブロックを多量に混入。
- 2 黒褐色 ロームを少量混入。
- 3 暗黒褐色 ローム、焼土を少量混入。
- 5 暗黒褐色 粘性のロームを混入。
- 6 暗黒褐色 ロームを少量混入。
- 7 黒褐色 焼土を多量に混入。

#### ピット層序

- P 1 1 暗黒褐色 ローム、砂礫粒を少量混入。
- 2 暗黄褐色 ローム、砂礫を多量に混入。

#### P 2

- 1 黒褐色 ロームを少量混入。(柱頭明瞭)

#### P 3

- 1 暗黒褐色 ロームを少量混入。

#### P 4

- 1 暗黒褐色 ローム、炭化物を少量混入。
- 2 暗黄褐色 ロームを多量に混入。

#### P 5

- 1 暗黒褐色 ローム、砂礫を多量に混入。

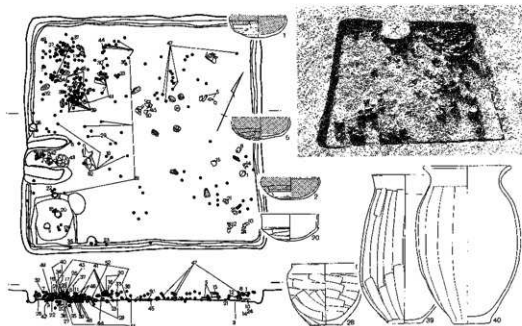
#### P 8

- 1 黒褐色 焼土、炭化物を少量混入。

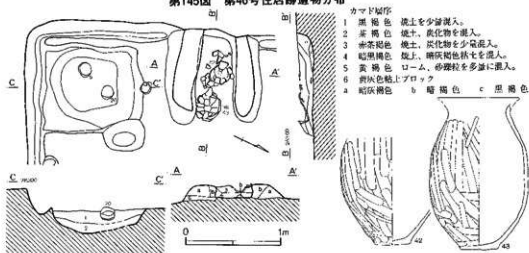
#### (貯)

- 2 暗褐色 ロームを多量に混入。

第144図 第46号住居跡



第145図 第46号住居跡遺物分布

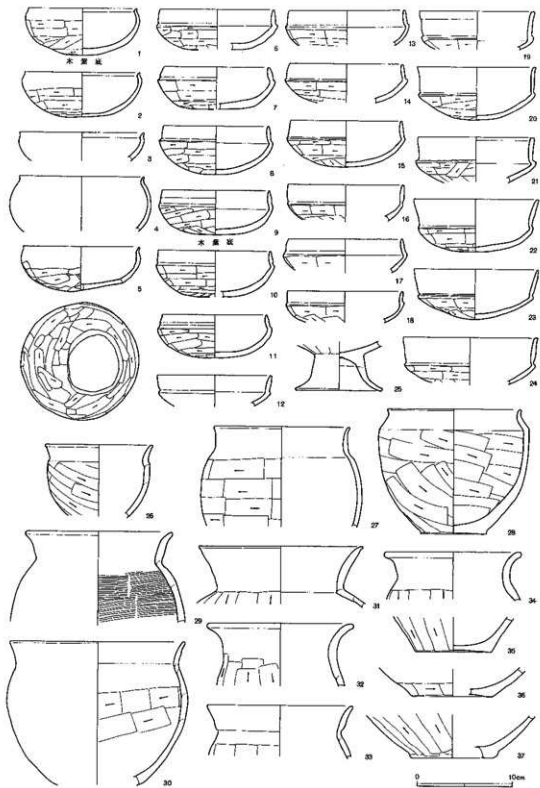


第146図 第46号住居跡カマド

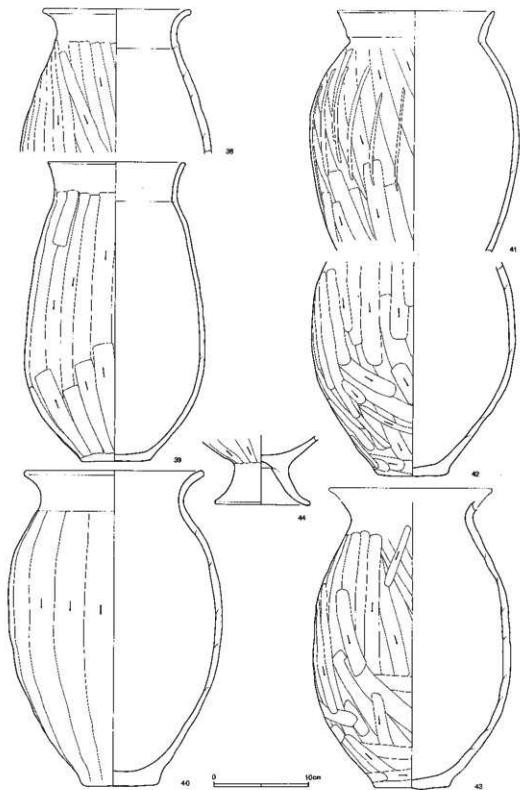
る。規模は径35～55cm、深さ30～55cmを測る。壁溝はカマドを除く各壁下を幅15～20cm、深さ50～60cmで巡る。遺物は出土総数261点を数える。最も密な分布は北西コーナーを中心に認められ、小破片、自然石を主体に住居の中央へ流れ込んでいる。完形あるいは図示可能な遺物はカマド内の甕(36、43)2個体、貯蔵穴の坏(9、17、20)3個体および東半部に床面直上で出土した坏(1、8、10、12、15、21)6個体などである。

出土遺物(第147～149図)坏は碗形態と模倣坏の双方が出土しているが模倣坏が圧倒している。模倣坏も大きく2分類が可能。受部の段が不鮮明で碗状に近いものと口縁部が体部と同値で直立ないし外傾するものがある。後者は赤彩しない。(5)は焼成前の穿孔、穿孔径5.8×6.8cm。高坏(25)は短い柱状の脚部で裾部が小さく開く。坏部は模倣坏をのせるものと思われる。小型甕は広

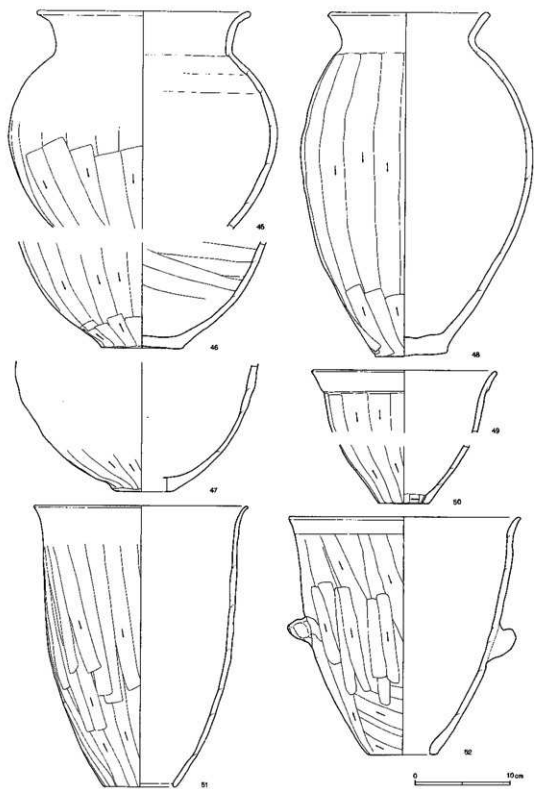




第147图 第46号住居跡出土遺物(1)



第148图 第46号住居跡出土遺物(2)



第149图 第46号住居跡出土遺物(3)

口 (26、30)、直立口縁 (27)、肩部から急激にすぼまり先端が直立する (28) がある。莖は、長胴のものが主体。最大径を胴部下半にもつ (38、39)、中位にもつ (40~43、48)、球形胴部の (45) がある。甑は把手をもつ (52) を含め、口縁部の変化は小さく、僅かに外傾。(49) は頸部に弱い段をもつ。

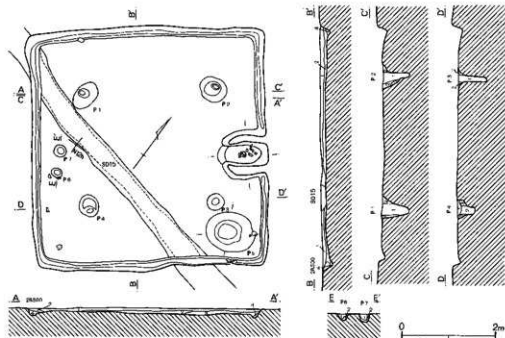
第46号住居跡遺物観察表 (第147~149図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重0	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	7	坏A	11.4		4.9	172	W・B・G	A	橙 色	完形	床直	7
02	8	坏A	12.0		4.7		W・B・U・Ha-G	A	橙 色	70%	貯穴	75
03	24	坏A	(13.0)				W・B・G	A	赤褐色	20%	床直	一括
04	19	坏A	(13.0)				W・B・Ha-G	A	淡褐色	10%	覆土	一括
05	25	坏A	12.2		4.6		G	A	赤褐色	5%	覆土	40, 41
06	9	坏B	(12.0)		(4.4)		W・B・U・G	A	淡褐色	30%	覆土	102
07	14	坏B	(11.0)				W・B・U・G	A	淡褐色	40%	覆土	104
08	2	坏B	11.0		5.1		W・B・K・G	A	赤褐色	60%	床直	9
09	11	坏B	11.4		4.7	180	K・W・B・U・G	A	橙 色	完形	貯穴	73
10	1	坏B	(11.8)				B・W・K・U・G	A	赤褐色	40%	覆土	1
11	13	坏B	11.0		4.6		W・B・U・G	A	橙 色	40%	覆土	159
12	22	坏B	(12.0)				W・B・U・G	A	赤褐色	20%	覆土	3
13	20	坏B	(12.0)				W・B・U・G	A	淡褐色	10%	覆土	一括
14	4	坏B	(12.0)				W・G	A	明赤褐色	20%	床直	8
15	6	坏B	11.8		4.9		W・B・U・G	A	赤褐色	60%	覆土	6
16	21	坏B	12.0				W・B・U・G	A	橙 色	20%	覆土	93
17	23	坏B	12.0				W・B・U・G	A	橙 色	20%	貯穴	248
18	18	坏B	(12.0)				W・B・U・G	A	淡褐色	20%	貯穴	246
19	10	坏C	(12.0)				B・W・U・G	A	橙 色	20%	覆土	一括
20	3	坏C	12.4		5.6	140	W・R・U・G	A	橙 色	完形	貯穴	74
21	16	坏C	(12.0)				W・U・G	A	橙 色	30%	覆土	5
22	15	坏C	(13.0)				W・B・U・G	A	橙 色	20%	覆土	90
23	12	坏C	(13.0)		(5.3)		B・R・W・G	A	橙 色	40%	床直	247
24	5	坏C	(14.0)				W・B・U・G	A	赤褐色	30%	覆土	2
25	29	高坏		9.0			W・R・B・U・G	A	橙 色	50%	覆土	105
26	32	小型甕	(11.0)				W・B・U・G	A	橙 色	20%	覆土	178
27	26	小型甕	(14.0)				W・B・R・U・G	A	浅黄褐色	30%	覆土	144
28	28	小型甕	14.0	7.0	13.1		Ha・U・W・B・G	A	橙 色	50%	覆土	103
29	40	小型甕	(15.0)				Ha・W・B・G	A	浅黄褐色	20%	覆土	96, 100
30	27	小型甕	(18.0)				Ha・U・W・B・G	A	赤褐色	30%	覆土	219, 221
31	34	甕	(17.0)				W・B・G	A	淡褐色	5%	覆土	4
32	33	甕	(15.0)				W・B・U・G	A	淡褐色	10%	覆土	115
33	30	甕	(15.0)				B・W・U・G	A	赤褐色	20%	床直	230
34	41	甕	(14.0)				W・Ha・B・U・G	A	浅黄褐色	5%	覆土	125
35	38	甕		(8.0)			W・B・U・G	A	淡褐色	15%	覆土	81
36	29	甕		(8.4)			W・U・Ha-G	A	浅黄褐色	20%	カマド	65, 250
37	37	甕		(8.4)			U・W・G	A	淡褐色	10%	覆土	154
38	35	甕	(15.0)				W・B・U・G	A	淡褐色	20%	覆土	197
39	46	甕	14.4	7.2	31.2		G	A	橙 色	70%	覆土	180, 190, 200
40	48	甕	18.2	8.0	(32.3)		G	A	橙 色	85%	整溝	122, 147, 149
41	45	甕	16.4				G	A	明赤褐色	60%	覆土	183, 216, 218
42	49	甕		7.0	(22.3)		G	A	黄褐色	5%	カマド	251
43	50	甕		7.8			G	A	鈍い橙色	50%	カマド	250

44	42	竹付巻		9.4			W・B・U・G	A	藍色	5%	覆土	224
45	53	巻	22.0				W・B・U・G	A	藍色	30%	覆土	39
46	36	巻		9.0			S・W・B・U・G	A	赤褐色	20%	覆土	168,171,172
47	51	巻					G	A	鈍い藍色	25%	覆土	43,55,56,57
48	47	巻	15.8	7.7	36.0		G	A	藍色	75%	覆土	164,183,185
49	31	飯	(19.0)				W・B・U・G	A	淡棕色	20%	覆土	136
50	44	小型飯		5.0			B・U・G	A	藍色	30%	床直	39
51	17	飯			29.4		G	A	棕色	60%	覆土	64,92,97,99
52	52	飯	24.3	7.4	24.8		G	A	鈍い藍色	85%	覆土	69,76,77,94

### 第47号住居跡 (第150回)

M・N-12・13 Gridに位置する。東西に走る15号溝跡により住居の中央を切られる。形状は整った方形を呈する。規模は東西5.05m、南北5.13m、深さ13cmを測る。主軸の示す方位はN-52°-Eを指す。覆土は焼土、炭化物を多量に含む黒褐色土が主体。カマドは東壁のほぼ中央にあり、袖部は良好に遺存している。炭模は両袖部外側で1.04m、内側で0.38m、煙道部先端までの長さ



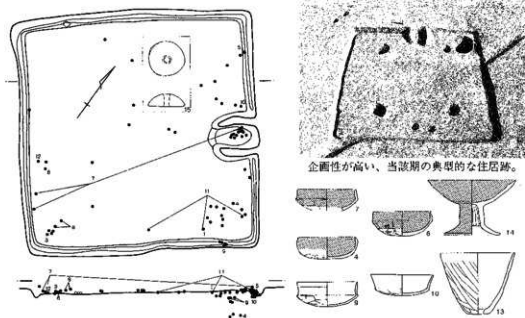
#### S J 47 層序

- 1 黒褐色 焼土、炭化物を少量混入。
- 2 暗茶褐色 ロームを多量に、焼土、炭化物を少量混入。
- 3 暗褐色 ローム、焼土を多量に混入。
- 4 暗黒褐色 ロームを多量に混入。

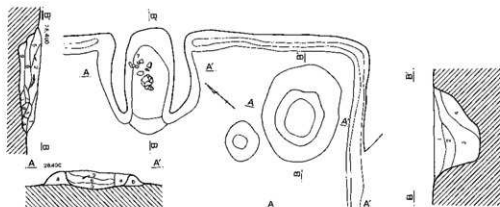
#### ピット層序

- |     |        |                |     |        |                  |
|-----|--------|----------------|-----|--------|------------------|
| P 1 | 1 暗黒褐色 | ロームを少量混入。      | P 4 | 1 黒褐色  | ロームを少量混入。        |
|     | 2 暗茶褐色 | ロームを多量に混入。     |     | 2 暗茶褐色 | ロームを多量に混入。       |
| P 2 | 1 暗茶褐色 | ローム、砂礫粒を少量混入。  |     | 3 暗褐色  | ロームを少量混入。        |
|     | 2 暗褐色  | 砂礫粒を少量混入。      | P 5 | 1 黒褐色  | ローム、焼土を少量混入。     |
|     | 3 暗黒褐色 | 砂礫粒、ロームを多量に混入。 | (貯) | 2 暗黒褐色 | ロームを多量に幾十は少量混入。  |
| P 3 | 1 黒褐色  | ローム、焼土を微量に混入。  |     | 3 暗茶褐色 | ローム、焼土、炭化物を少量混入。 |
|     |        |                |     | 4 暗茶褐色 | ロームを多量に混入。(砂礫質)  |
|     |        |                | P 6 | 1 暗茶褐色 | 粘質。              |
|     |        |                |     | 2 暗茶褐色 | ローム多量混入。         |
|     |        |                | P 7 | 1 暗茶褐色 | 粘質。              |
|     |        |                |     | 2 暗茶褐色 | ローム多量混入。         |

第150図 第47号住居跡



第151図 第47号住居跡遺物分布



カマド層序

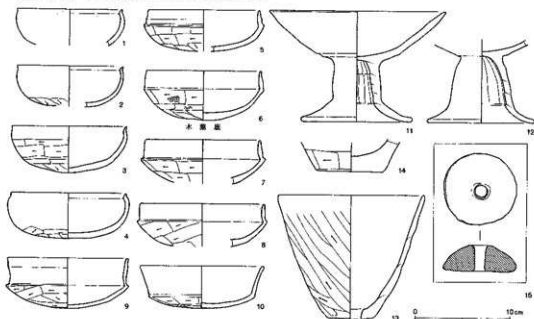
- 1 赤褐色 焼土、黄褐色粘土を少量混入。
- 2 暗黄褐色 焼土を多量に混入。(粘質土)(天井部崩落土)
- 3 焼土ブロック
- 4 茶褐色 焼土、ロームを少量混入。
- 5 暗黄褐色 焼土ブロックを多量に混入。(粘土質)(天井部崩落上)
- 6 暗褐色 炭化物、焼土ブロックを多量に混入。
- 7 暗茶褐色 焼土を少量混入。
- 8 黒褐色 焼土、炭化物を多量に混入。
- 9 暗黒褐色 黄褐色粘土ブロック、焼土を多量に混入。(掘り型残土)

第152図 第47号住居跡カマド

1.07mを測る。壁外への切り込みはない。燃焼面は深さ5cm程の浅い皿状を呈する。貯蔵穴は南東コーナーにあり、形状は楕円で中間に段を有する。規模は東西1.06m、南北0.82m、深さ50cmを測る。ピットは主柱穴4ヶ所(径50~60cm、深さ40~60cm)検出された。柱間の距離は東西2.45m、南北2.80mを測る。カマド正面の南壁下には出入口と思われる小ピット2ヶ所が遺存する。壁溝はカマドを除く各壁下に幅24cm、深さ5cm程で巡る。遺物は出土総数66点を数える。出土状態はカマ

下内に甕(14)と坏(7)が各1点、貯蔵穴から坏(4)が出土している他は南西コーナー周辺に集中して出土している。

出土遺物(第153図)坏は碗状と模倣坏が存在するが後者が主体である。模倣坏の典型例(9・10)に赤彩はみられない。高坏は坏部が直線的にのび、下端に段を有する。脚部は柱状で裾部は急激に開く。(14)は小型甕、口縁部に変化はなく底部まで直線的に開く。紡錘車(15)径3.8×3.7cm、厚さ1.4cm、重さ25.5gを計る。材質は滑石製。

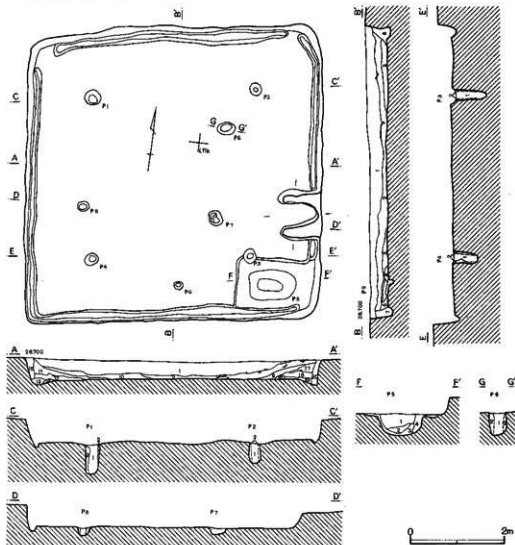


第153図 第47号住居跡出土遺物

第47号住居跡遺物観察表(第153図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	11	坏A	(11.0)				B・W・G	A	赤橙色	20%	覆土	19
02	10	坏A	(11.0)				W・B・G	A	橙 色	40%	覆土	一括
03	3	坏A	12.0		4.8		W・G	A	赤橙色	50%	覆土	39
04	5	坏A	(12.0)		(4.7)		B・W・U・G	A	浅黄褐色	30%	貯穴	44
05	4	坏B	(11.7)				W・B・U・G	A	橙 色	30%	覆土	1
06	12	坏B	12.0				B・W・G	A	赤褐色	80%	床直	37
07	8	坏B	(12.0)				W・B・G	A	赤橙色	40%	カマド	25.38.47
08	6	坏B	(13.0)				W・B・U・G	A	橙 色	30%	覆土	23.24
09	7	坏C	12.8		5.2	120	W・R・B・G	A	浅黄褐色		完形	40
10	9	坏C	13.4		4.4		W・B・G	A	橙 色	80%	カマド	4
11	2	高坏	18.6	11.6			W・B・K・G	A	橙 色	70%	覆土	15.19.20
12	13	高坏		11.0			W・B・U・G	A	鈍い橙色	60%	床直	36
13	1	小型甕	15.2	4.9	12.9		G		明黄褐色	80%	覆土	
14	14	甕		7.0			W・B・U・G	A	淡橙色	5%	覆土	一括

第48号住居跡 (第154図)



S 148層序

- 1 暗褐色 門礎、ローム、砂礫を多量に混入。
- 2 黒褐色 門礎、砂礫を混入。(遺物・土器類多量混入)
- 3 カーボン焼上層
- 4 暗褐色 カーボンを密に焼上に少量混入。
- 5 暗褐色 多量の焼上、カーボンを混入。
- 6 淡褐色 焼上層である。
- 7 暗褐色 大粒のロームを混入する。しまり有。
- 8 暗褐色 ソフトロームを混入。しまり有。
- 9 暗褐色 多量のローム、砂質粘土を混入。
- 10 灰褐色 多量の砂質粘土を混入。
- 11 暗褐色 多量の粘土、ロームを混入。
- 12 暗褐色 多量のロームを混入。
- 13 暗褐色 大粒のロームを混入。しまり有。
- 14 黄褐色 ソフトロームを混入。
- 15 暗褐色 ソフトロームを混入。しまり有。
- 16 暗褐色 多量の砂質粘土、焼土を混入。
- 17 暗褐色 焼土及びロームを多量混入。
- 18 暗褐色 焼土、砂質粘土、ロームを多量に混入。

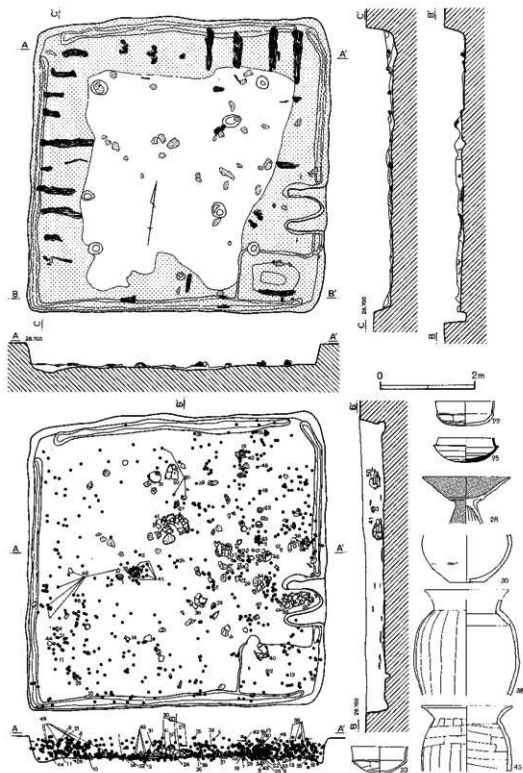
- 19 黒褐色 黄褐色粘土、ロームを多量に混入。
- 20 暗褐色 焼土を少量混入。

ピット層序

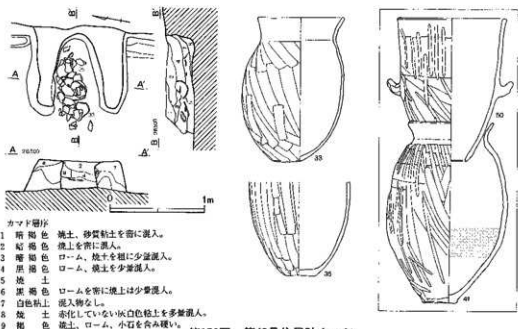
- P 1 1 黒褐色シルト 焼上、カーボン混入。
- 2 暗褐色シルト ローム・ブロック物を混入。
- P 2 1 黒褐色シルト 焼上、カーボンを混入。
- 2 暗褐色シルト ローム、礫を混入。
- P 3 1 黒褐色シルト 焼土、カーボンを混入。
- 2 暗褐色シルト
- P 4 1 黒褐色シルト
- 2 暗褐色シルト
- P 5 1 暗褐色 ロームを基調、焼上、カーボンを多量に混入。(貯)
- 2 黒褐色 カーボン、焼土を混入。
- 3 黒褐色 ロームを混入。
- 4 暗褐色 ローム、焼土、カーボンを混入。
- P 6 1 暗褐色シルト
- 2 暗褐色シルト

第154図 第48号住居跡





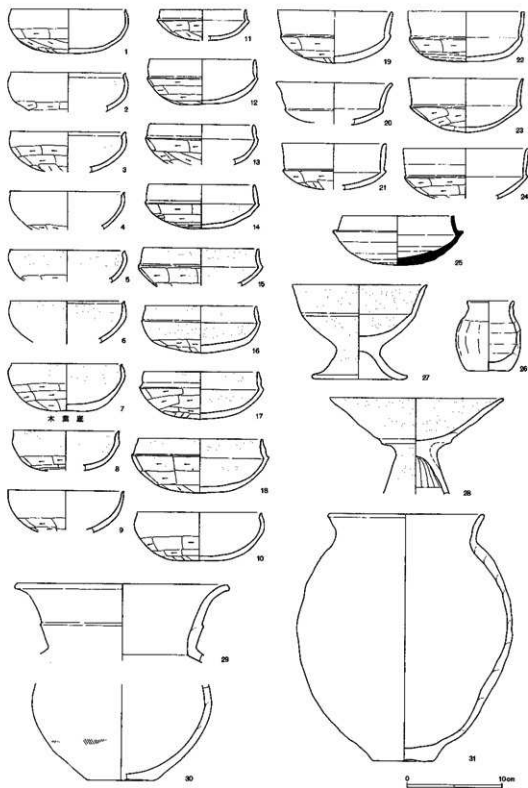
第155图 第48号住居跡炭化材・遺物分布



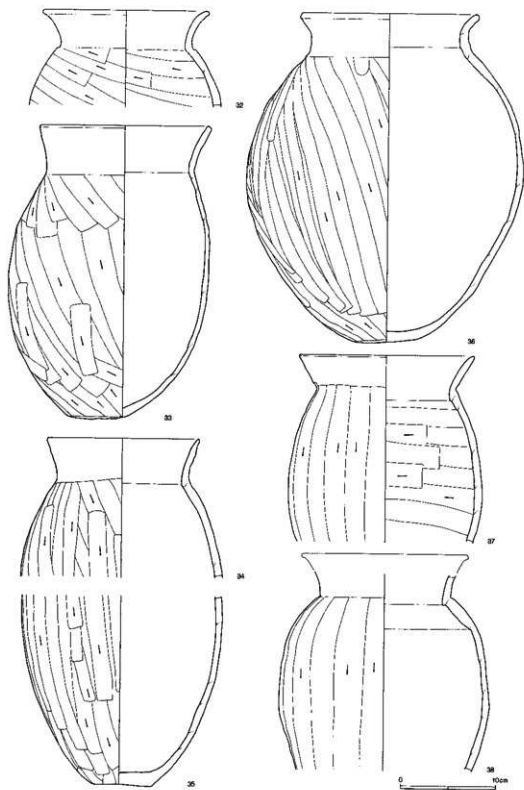
第156図 第48号住居跡カマド

L-11 Gridに位置する。新旧関係はない。形状は整った方形を呈する。規模は東西6.31m、南北6.17m、深さ45cmを測る。主軸の示す方位はN-84°-Eを指す。覆土はレンズ状に堆積する暗褐色上下に多量の土器を含む黒褐色土が薄い膜の様に広く覆う。壁上面に向かって多量の焼土塊、炭化材を含む黒色土層がみられる。壁下はローム・ブロック、焼土塊を含む暗黄褐色土により壁体の上面は覆われている。カマドは東壁の南寄りにあり、南東コーナーから1.65mに位置する。砂質粘土により構築された袖部はほぼ原形のまま遺存している。両袖間の規模は外側1.06m、内側で0.45m、煙出し部までの長さ0.85mを測る。燃焼面はフラットで床面と同レベルである。燃焼部には本来使用されていた甕2個体(33、35)が正位の状態で出土している。貯蔵穴は南東コーナーにあり2重の掘り込みをもつ。外側は東西1.80m、南北1.25m、深さ5cm程の浅い長方形をなし、内側に位置する掘り込みは東西0.98m、南北0.62m、深さ61cmを測る。貯蔵穴内からは小型甕(40)、坏3点(12、13、16)が出土している。ピットは主柱穴と思われる4ヶ所(径30~40cm、深さ50~60cm)が検出され他に4ヶ所が存在する。主柱穴間の距離は東西3.4m、南北3.4mを測り、程等間隔であることが解る。壁溝はカマド部分を除く各壁下を幅20~40cm、深さ10cm程で巡る。遺物は出土総数693点を数える。

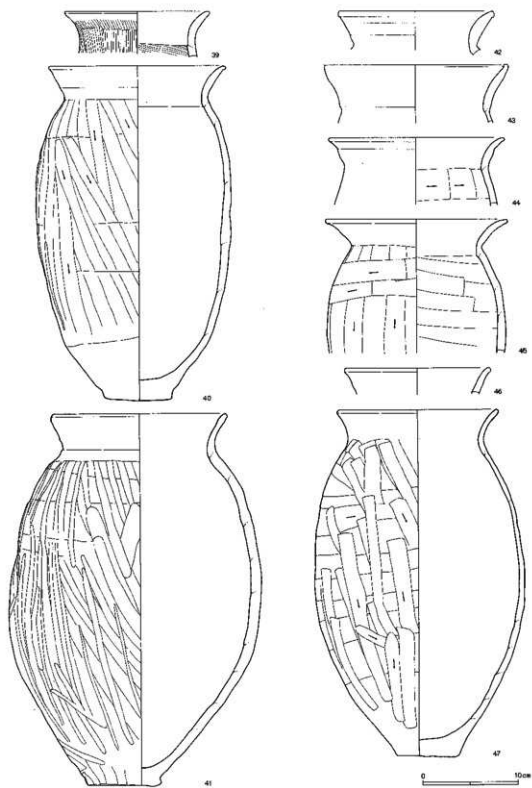
炭化材、遺物の出土状態(第155図)炭化材は北および西壁下に密な分布がある。壁から1.20mの幅で、40~50cmの間隔をもち、中央に向かい放射状に検出された。最大のものは長さ1.15m、幅24cm、厚さ10cm程の丸太材で、半截し加工面を「下」の状態で使用している。これらは所謂「ころばし根太」と考えられ、上面に直交する方向に板材等(炭化材からは茅類の植物繊維が附着していた)をはわせ、床として使用したと思われる。貯蔵穴上面にも同様な炭化材が認められるが、これらは貯蔵穴上面を覆う蓋として使用された可能性がある。遺物は第2層に添うようにほぼレンズ状に出土するものと、床面直上のものに分離できる。床面直上の資料にはカマド、貯蔵穴内出土



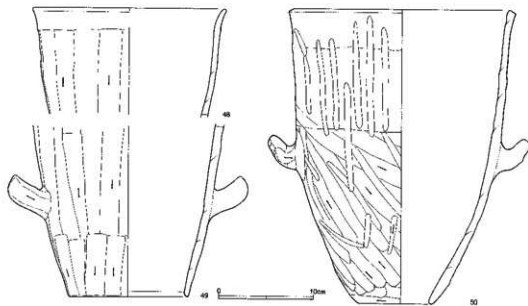
第157图 第48号住居跡出土遺物(1)



第158图 第48号住居跡出土遺物(2)



第159图 第48号住居跡出土遺物(3)



第160図 第48号住居跡出土遺物(4)

の他、北側の炭化材との境に甕(31)、と甑(50)が、住居のほぼ中央に高坏(28)、甕4個体(31・36・37・41)が土圧により潰れた状態で出土している。これらは調査「ころばし根太」の内側に集中してみられ、支柱穴4本により区画された内区、言い換えれば「土間」として使用された空洞内で出土していることになる。

出土遺物(第157~160図)坏は碗状で口縁端部の外傾が弱いタイプと模倣坏、更に模倣坏と碗状の双方の特徴を具備したタイプに分かれる。出土頻度は特に卓越したものはない。須恵器坏(25)は、受部先端の稜はやや甘く、立ち上がり端面は僅かに内傾する。体部の削りは時計とは反対の回転を示す。高坏は模倣坏(27)と直線的に立ち上がり下端で段をもつタイプ(28)に分かれるが、共に赤彩されている。甕は長胴のものが主体であるが、口縁部中位に弱い段をもつタイプ(29)を含め球形胴部に近いタイプ(36)も散見される。甑は把手をもつものが主体で、法量的にかなり幅がありそうである。全体的に口縁部の変化は少なく直線的に立ち上がるものが多い。

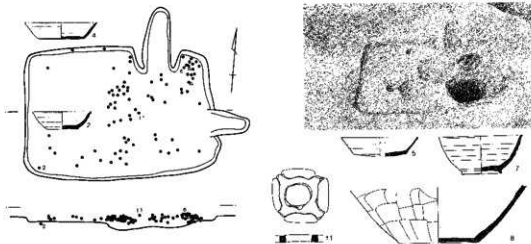
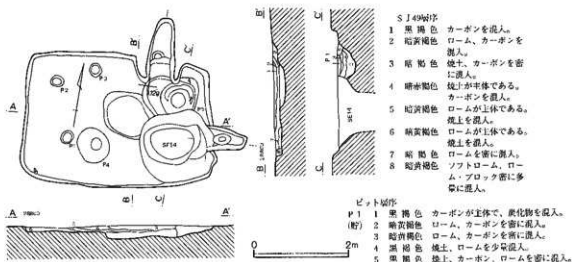
第48号住居跡遺物観察表(第157・158・159・160図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	坏A	12.0		4.6		W・B・G	A	橙 色	70%	覆土	621
02	5	坏A	12.0				W・B・U・G	A	浅黄褐色	30%	覆土	341
03	14	坏A	(12.0)				W・B・G	A	橙 色	20%	覆土	112
04	9	坏A	12.0				R・B・G	A	橙 色	10%	覆土	61
05	24	坏A	(12.0)				G	A	明赤褐色	10%	覆土	121
06	20	坏A	(12.0)				W・B・G	A	赤褐色	20%	覆土	114
07	17	坏A	11.6		4.9	210	W・U・G	A	赤褐色	完形	床直	544
08	16	坏A	(11.0)				W・B・G	A	赤褐色	20%	覆土	285
09	26	坏D	(12.0)				W・K・K・U・G	A	赤褐色	30%	覆土	276
10	6	坏A	13.0				W・B・U・G	A	橙 色	40%	覆土	645
11	22	坏B	(9.0)				U・W・B・G	A	橙 色	20%	覆土	217

12	4	坏B	(11.0)				W-B-U-G	A	橙 色	30%	覆土	633
13	21	坏B	(11.0)				B-W-G	A	赤橙色	20%	貯穴	191
14	2	坏B	11.0	4.6	162		W-B-U-G	A	赤橙色	完形	覆土	343
15	23	坏B	(12.0)				W-U-G	A	橙 色	20%	覆土	412
16	15	坏B	11.8	4.9			W-B-G	A	鈍い赤褐色	80%	貯穴	482
17	8	坏B	12.2	5.0			B-W-G	A	赤橙色	70%	覆土	
18	18	坏B	13.0	5.7			W-B-U-G	A	浅黄橙色	70%	覆土	89
19	3	坏C	12.0	5.4	220		W-B-U-G	A	鈍い橙色	完形	覆土	547
20	10	坏C	12.0				R-B-G	A	橙 色	20%	覆土	一括
21	13	坏C	(11.0)				W-B-G	A	橙 色	20%	覆土	277
22	11	坏C	12.2	5.2	170		W-B-G	A	橙 色	完形	床直	542
23	19	坏C	12.0	5.7	162		W-B-U-G	A	鈍い黄橙色	90%	覆土	440
24	12	坏C	(13.0)				W-B-U-G	A	橙 色	30%	覆土	524
25	7	須坏	11.8	5.2			W-B-G	A	灰白色	70%	覆土	34
26	25	小型竈	4.8	4.3	7.3	176	W-B-Ha-U-G	B	鈍い橙色	完形	床直	647
27	41	高坏	14.0	10.1	9.8	386	G	A	橙 色	90%	覆土	563
28	27	高坏	(18.0)				W-B-G	A	浅黄橙色	30%	覆土	148
29	30	炭	(22.0)				Ha-B-W-G	A	橙 色	10%	覆土	128
30	35	炭		7.2			B-W-U-G	A	橙 色	30%	覆土	20.87,369
31	46	炭	16.4	6.5	25.7		G	A	黒褐色	60%	覆土	29
32	34	炭	(17.0)				Ha-U-W-R-G	A	橙 色	20%	床直	499
33	49	炭	18.0	6.5	30.5		G	A	明黄褐色	80%	カマド	682,683
34	43	炭	15.4				G	A	橙 色	45%	床直	597
35	42	炭		6.2			G	A	明赤褐色	60%	カマド	685
36	48	炭	19.0	8.0	34.3		G	A	赤褐色	60%	覆土	622,623
37	28	炭	(18.0)				W-U-Ha-B-G	B	橙 色	40%	床直	574
38	40	炭					G	A	鈍い赤橙色	30%	覆土	601,605,640
39	32	炭	(15.0)				U-W-G	A	橙 色	5%	覆土	383
40	50	小型竈	18.4	7.7	35.0		G	A	明赤褐色	70%	床直	629
41	47	炭	18.6	7.8	38.8		G	A	灰黄褐色	90%	覆土	31
42	37	炭	(16.0)				W-B-S-G	A	橙 色	10%	覆土	66
43	29	炭	(19.0)				W-B-G	A	浅黄橙色	20%	覆土	659
44	33	炭	(18.4)				Ha-U-W-B-G	A	橙 色	10%	覆土	308
45	31	炭	(19.0)				Ha-U-W-K-G	A	鈍い橙色	30%	覆土	498,502,505
46	38	炭	(15.0)				Ha-W-B-U-G	A	橙 色	60%	覆土	586
47	45	炭	17.0	6.6	36.2		G	A	明赤褐色	90%	覆土	
48	39	飯	(20.0)				W-B-Ha-G	A	橙 色	40%	床直	55
49	36	飯		12.4			W-B-U-G	A	橙 色	30%	覆土	214,215,288
50	44	飯	23.5	7.8	30.4		G	A	橙 色	95%	床直	562

#### 第49号住居跡 (第161回)

L-12 Grid に位置する。南東部に14号井戸跡に切られる。形状は東西に長軸をとる隅丸長方形を呈する。規模は東西3.87m、南北2.83m、深さ13cmを測る。主軸の示す方位はN-3°-Wを指す。覆土は炭化物、焼土を多量に含む黒褐色土が主体である。カマドは北壁と東壁に構築されており、北壁のものが新しい。新カマドは東寄りにあり、袖部のみ良好に遺存する。規模は両袖部の外側で1.03m、内側で0.46mを測る。煙道部先端までの長さ1.50m、壁外への切り込みは0.88mである。燃焼面は深さ8cm程の浅い掘り込みを呈する。旧カマドは14号井戸跡に焚き口部を破壊されており煙道部のみ遺存。壁外への切り込みは0.70cmを測る。貯蔵穴は北東コーナーにあり、形状は楕円形、規模は東西83cm、南北78cm、深さ37cmを測る。ピットは土塊状のものがカマドの東と正面に

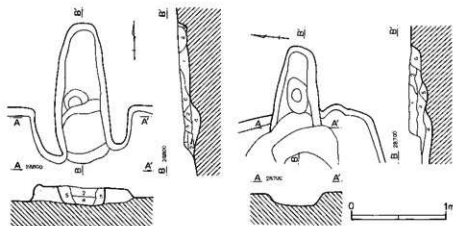


第161図 第49号住居跡・遺物分布

第49号住居跡遺物観察表 (第163図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	5	須蓋					G	A	灰色	30%	覆土	一括
02	1	須环	(12.4)	6.4	3.7		G	A	黄灰色	70%	覆土	67
03	9	須环		(7.0)			G	A	灰色	20%	貯穴	一括
04	2	須环	(15.0)	(10.0)	3.5		W・D・Ha・G	A	淡赤褐色	70%	覆土	一括
05	3	須环	(16.0)	(10.0)	(3.7)		G	A	灰色	30%	覆土	一括
06	8	須环	(15.6)				G	A	灰黄色	20%	覆土	70
07	4	須碗	(17.4)	8.2	8.0		G	A	灰色	70%	貯穴	一括
08	11	甕		(16.6)			W・G	A	灰白色	15%	覆土	SE14一括
09	10	甕	(21.0)				G	A	褐色	30%	貯穴	一括
10	6	甕		7.2			G	A	褐色	10%	覆土	一括
11	7	須瓶					G	A	褐灰色	5%	覆土	33





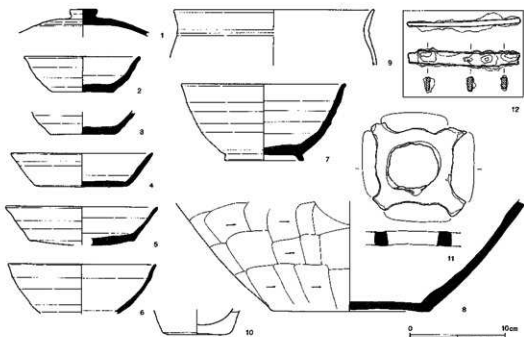
北カマド層序

- 1 暗褐色 ローム、焼土を密に混入。
- 2 黒褐色 カーボンである。焼土の混入がある。
- 3 暗褐色 カーボンを少量混入。
- 4 暗褐色 ローム、カーボンを多量に混入。
- 5 暗褐色 ローム、カーボンを多量に混入。
- 6 灰黄褐色 ローム、黄褐色ローム、粘土多量に混入。
- 7 暗褐色 焼土、ロームを密に混入。
- 8 暗褐色 混入物なし。
- 9 暗褐色 焼土を少量混入。

東カマド層序

- 1 黒褐色 焼土、砂質粘土を多量に混入し、シルト質である。
- 2 暗黄褐色 カーボン、焼土を混入し、シルト質である。
- 3 黒褐色 ロームを多量に混入。
- 4 暗褐色 砂礫を密に混入。(SE14微土)
- 5 砂質粘土
- 6 暗褐色 焼土、ロームを密に混入。

第162図 第49号住居跡カマド



第163図 第49号住居跡出土遺物

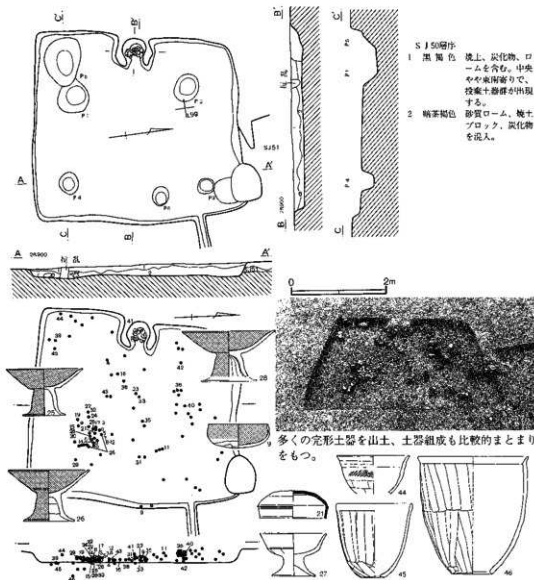
2基認められる他、西側に3ヶ所存在する。最も大きなP4の規模は73×65cm、深さ18cm、他は10cm前後の深さである。壁溝は存在しない。遺物は出土総数84点を数える。出土傾向は貯蔵穴の周

間とカマドの正面に集中するが、かなり浮いた状態のものが多い。

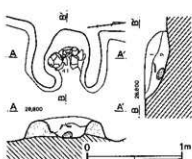
出土遺物（第163図）須恵器が大半を占める。坯は口径の大きなもの（15-16cm）が主体で、法量比は口径<底径×2である。底面がやや突き出しており、すわりの悪いものがある（4、5）。

### 第50号住居跡（第164図）

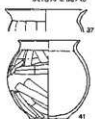
L-9 Grid に位置する。北東で51号住居跡を切る。形状は南北に長軸をもつ長方形を呈する。規模は東西3.97m、南北4.31m、深さ22cmを測る。主軸の示す方位はN-15°-Eを指す。覆土は全体に炭化物、焼土、ロームを混入するが、床面を覆う2層はロームの混入が増す。カマドは西壁



第164図 第50号住居跡・遺物分布



カマド図序  
 1 灰褐色 焼土、ロームを混入。  
 2 明灰褐色 焼土、粘土ブロック、炭化物を混入。



比較的遺存状態の良いカマド、内部から小型甕が出土している。

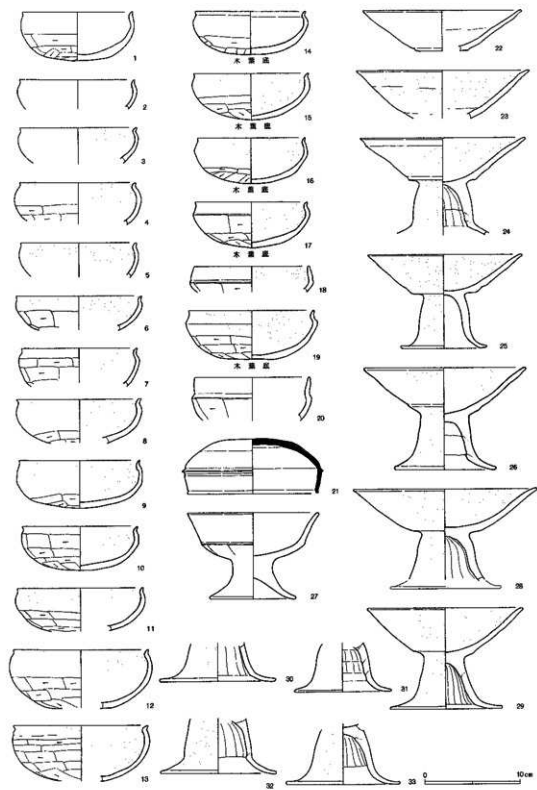
第165図 第50号住居跡カマド

のほぼ中央にあり、袖部は良好な遺存状態といえる。規模は両袖部外側で0.91m、内側で0.30m、煙出しまでの長さ0.68mを測る。壁外への切り込み、燃焼面への掘り込みはない。袖部は砂質粘土により構築。燃焼部には、甕 (37)、高坏 (23) が検出されている。貯蔵穴は南西コーナーにあり、形状は東西に長軸をもつ不整形円形、規模は東西1.02m、南北0.87m、深さ28cmを測る。ピットは主柱穴4ヶ所の他2ヶ所が検出されている。規模は径40~60cm、深さ20~30cmを測る。壁溝は存在しない。遺物は総数96点を数える。出土状態は、カマド内の他貯蔵穴内から小型甕 (39)、小型甕 (45)、鉢 (44) のセットが、カマドの周囲から坏3点 (4、9、38)、高坏2点 (23、33)、小型甕2点 (36、42)、甕1点 (43) が床面直上で出土した。また、P1・P3の間から坏7点 (3、6~8、12、14、15)、須恵器蓋 (21)、高坏6点 (24、26~29、32)、小型甕 (41)、甕 (45) が集中して出土している。

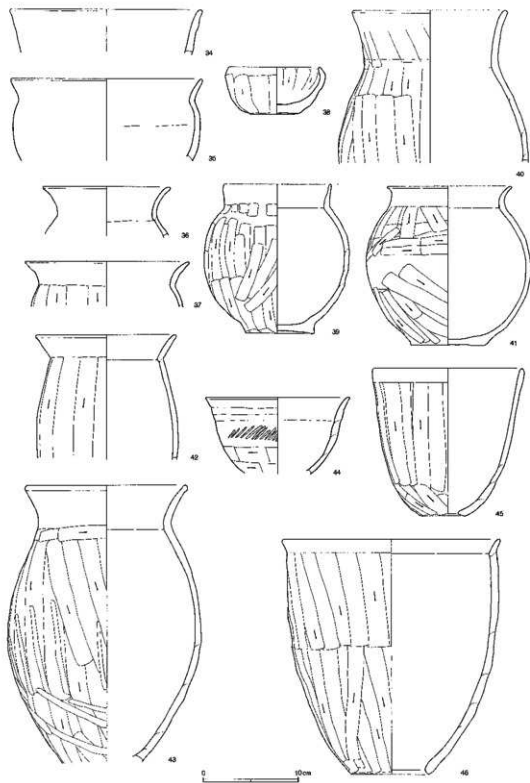
出土遺物 (第166・167図) 坏は小片で出土している (20) を除く全てが口縁部の外傾する椀タイプにより占められる。赤彩率も (1) を除く全てにみられる。口径は11~12cm大のものが最も多く、(12) の様に14cmを越えるものもある。高坏は模倣坏のをせる (27) 以外は全て直線的に立ち上がる口縁部で、下端に段をもち、赤彩されたものにより占められる。須恵器蓋 (21) は受部の作りがシャープで、立ち上がりはやや内傾し、端面直前で外反。立ち上がり端面は内傾。小型甕は短口縁で直立さみで球形胴部のものが多い。甕は長胴であるが膨らみは大きい。鉢 (44) は口縁部が緩やかに外傾胴部上半には断面の丸い木口状の同時施工具によるナダが下から上に向かってみられる。甕は口縁部に変化が無く直線的で、底部が急激にすぼまる小型甕 (45) と口縁部が短く、鋭く外反する (46) がある。

第50号住居跡遺物観察表 (第166・167図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重口	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	16	坏A	(11.6)		5.1		W・B・R・G	A	褐色	40%	覆土	一括
02	18	坏A	(12.0)				W・R・G	A	褐色	10%	覆土	一括
03	19	坏A	(12.0)				W・B・G	A	赤褐色	10%	覆土	18
04	30	坏A	(12.0)				W・B・G	A	褐色	15%	覆土	78
05	34	坏A	(12.0)				W・B・G	A	褐色	20%	崖直	22
06	28	坏A	(13.0)				W・B・G	A	褐色	20%	覆土	14.28
07	29	坏A	(12.0)				W・B・G	A	鈍い褐色	10%	覆土	22



第166图 第50号住居跡出土遺物(1)

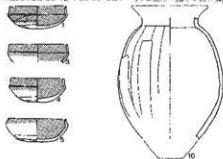
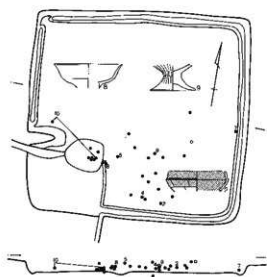
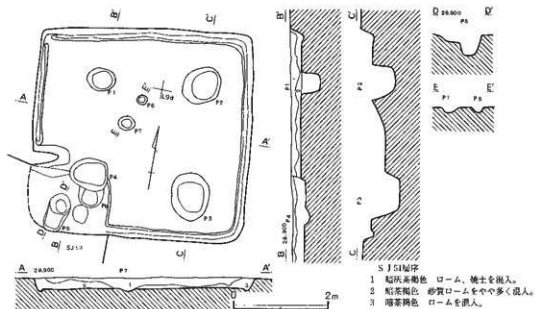


第167图 第50号住居跡出土遺物(2)

08	17	坏A	(13.0)			W・B・G	A	橙 色	20%	覆土	22
09	10	坏A	12.6	5.0		W・B・G	A	橙 色	70%	覆土	37
10	22	坏A	12.4	4.6		W・B・U・G	A	橙 色	40%	覆土	一括
11	35	坏A	13.0			W・B・G	A	鈍い橙 色	40%	覆土	41
12	15	坏A	14.0			W・B・G	A	橙 色	30%	覆土	22
13	31	坏A	(14.0)			W・D・K・G	A	橙 色	20%	覆土	一括
14	8	坏A	11.6	4.5	175	U・B・W・G	A	浅黄橙 色	90%	覆土	12
15	20	坏A	12.0	4.8		W・R・K・G	A	橙 色	70%	覆土	13
16	13	坏A	11.4	4.8	180	W・B・G	A	赤橙 色	完形	床直	75
17	7	坏A	11.6	4.8	174	W・B・U・G	A	浅黄橙 色	90%	覆土	19
18	33	坏B	(12.0)			W・G	A	橙 色	10%	覆土	一括
19	14	坏A	13.0	5.1		W・B・K・G	A	橙 色	80%	覆土	23
20	32	坏B	(12.0)			K・W・U・G	A	浅黄橙 色	10%	覆土	一括
21	23	須蓋	13.6	5.7		W・B・G	A	灰白色	50%	覆土	30
22	40	高坏	16.8			W・U・G	A	赤橙 色	30%	覆土	26
23	39	高坏	(18.0)			Ha・W・B・G	A	赤橙 色	30%	床直	70
24	36	高坏	17.4			W・B・G	A	橙 色	60%	床直	25
25	24	高坏	16.4	9.2		W・B・K・G	A	浅黄橙 色	60%	覆土	15, 17
26	21	高坏	17.0	10.8	10.6	W・B・R・G	A	浅黄橙 色	60%	床直	7, 22
27	25	高坏	14.0	9.2	9.0	W・U・G	A	淡橙 色	40%	覆土	一括
28	11	高坏	19.4			W・B・R・G	A	赤橙 色	70%	覆土	13
29	12	高坏	16.4	11.8	10.5	W・B・U・G	A	赤橙 色	60%	覆土	1
30	43	高坏		12.0		W・U・B・G	A	橙 色	20%	覆土	13
31	37	高坏		(10.4)		W・R・G	A	橙 色	25%	覆土	36
32	44	高坏		(12.0)		W・B・G	A	橙 色	10%	床直	26
33	38	高坏		12.2		W・B・G	A	橙 色	5%	覆土	71
34	45	甌	(20.0)			W・B・G	A	橙 色	5%	覆土	一括
35	26	小型甕	(20.0)			W・B・G	A	鈍い橙 色	20%	覆土	60
36	6	小型甕	(13.0)			W・R・B・G	A	鈍い黄橙 色	10%	覆土	62
37	27	甕	(17.0)			W・S・G	A	橙 色	10%	カマド	一括
38	9	須蓋	9.4	4.9	189	W・U・Ha・G	A	浅黄橙 色	完形	床直	74
39	2	小型甕	11.1	7.0	15.6	G	A	黄褐色	完形	貯穴	83
40	3	甕	16.0			G	A	明赤褐色	30%	覆土	54
41	4	小型甕	12.8	7.7	16.6	G	A	橙 色	50%	覆土	87
42	42	小型甕	(15.0)			Ha・U・W・G	A	赤橙 色	30%	床直	65
43	1	甕	16.5	(31.8)		G	A	橙 色	90%	覆土	73
44	41	鉢	(15.0)			U・Ha・W・B・G	A	赤橙 色	20%	覆土	82
45	5	小型甕		4.5	15.5	G	A	明褐色	完形	貯穴	85
46	6	甕	23.0	8.0	24.5	U・B・W・Ha・S	A	赤褐色	90%	貯穴	96

### 第51号住居跡 (第168図)

K・L-9 Gridに位置する。南西コーナーを50号住居跡に切られる。形状は隅丸方形を呈する。規模は東西4.61m、南北4.35m、壁高23cmを測る。覆土はローム、焼土を混入する暗灰茶褐色が主体で、床面上を暗茶褐色土が薄く覆っている。カマドは西壁南寄りにあり、南半部は50号住居跡により切られている。残存する北袖部は幅45cm、長さ81cmを測る。壁外への張り込みはない。貯蔵穴は南西コーナーにあり、形状は楕円形、規模は東西45cm、南北83cm、深さ44cmを測る。ピットは主柱穴4ヶ所が検出されたが、規模は不均一である。P1は径60×46cm、深さ38cm、P2は径80×75cm、深さ48cm、P3は径80×98cm、深さ65cm、P4は径80×67cm、深さ52cmを測る。壁溝は幅15～25cm、深さ5cm程でカマドを除く各壁下を巡る。遺物は出土総数32点と少ない。全て西半部より出土している。



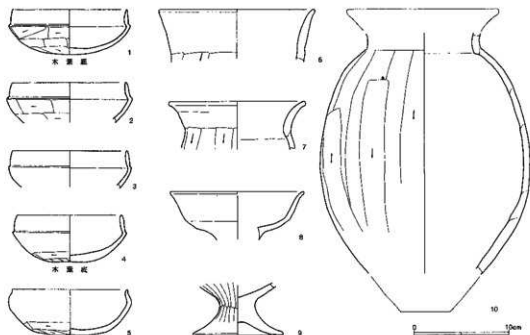
第168図 第51号住居跡・遺物分布

第51号住居跡遺物観察表 (第169図)

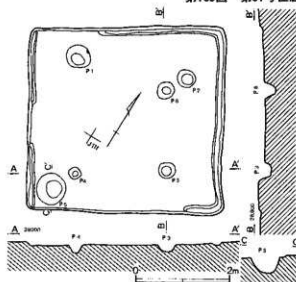
No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	坏皿	12.0		4.7		Hs-U・W・B・G	A	橙色	40%	貯穴	貯蔵穴
02	1	坏皿	(12.0)				W・R・G	A	橙色	30%	覆土	14
03	4	坏皿	(12.0)				W・B・G	A	橙色	20%	覆土	一折

第52号住居跡 (第170図)

04	3	环B	11.0		4.9	W・B・G	A	橙 色	70%	覆土	17
05	5	环A	12.0		4.7	W・B・U・G	A	橙 色	50%	覆土	5
06	8	甑	(16.0)			W・B・U・G	A	淡橙 色	10%	覆土	--括
07	7	小形甕	(14.0)			Ha・U・W・B・G	A	赤橙 色	10%	覆土	12
08	9	高环	(14.0)			U・W・B・G	A	橙 色	20%	覆土	25
09	6	高环		9.4		W・U・G	A	橙 色	40%	覆土	7
10	10	長甕				U・B・R・G	A	淡橙 色	30%	覆土	2.31



第169図 第51号住居跡出土遺物



第170図 第52号住居跡

I・J-11 Grid に位置する。新旧関係はない。形状は整った方形を呈する。規模は東西4.16m、南北3.88m、深さ8cmを測る。主軸の示す方位はN-58°-Eを指す。カマドは西壁中央の壁溝の途切れた部分にその痕跡を見出すことができる。貯蔵穴は南西コーナーにあり、形状は円形、規模は東西0.62m、南北0.64m、深さ29cmを測る。ピットは主柱穴と考えられる4ヶ所とP2の内側にP5が存在する。主柱穴の規模は径25-50cm、深さ15-20cmを測る。壁溝はカマド部分の他、北壁下の西半部、南壁下には認められない。規模は幅20cm、深



さ5cm程を測る。主柱穴間の距離はP1を除くP2-P3、P3-P4間は1.7mで整然と配置されている。出土遺物は総数12点と少なく、図示可能なものは概1点に過ぎない。

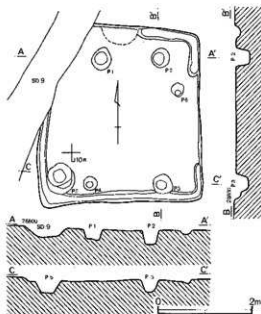


第171図 第52号住居跡出土遺物

第52号住居跡遺物観察表 (第171図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	甕	(15.0)				U・W・B・G	A	橙 色	20%	覆土	一拵

第53号住居跡 (第172図)



第172図 第53号住居跡

J-10 Gridに位置する。新旧関係は北西コーナーを9号溝跡により切られる。形状は南北に長軸をもつ方形を呈する。規模は東西3.50m、南北3.71m、深さ4cmを測る。カマドは北壁中央に焼土、粘上の分布により痕跡を残している。貯蔵穴は南西コーナーにあり、形状は円形で南側に中段を設けている。規模は東西60cm、南北66cm、深さ25cmを測る。主柱穴は4ヶ所検出された。配置は南、北壁にそれぞれ偏在しており、主柱穴に囲まれた内区は南北に長い長方形となる。規模は径40~45cm、深さ20~30cmを測る。他に東北コーナー



第173図 第53号住居跡出土遺物

付近にP5が存在する。径25cm、深さ30cmを有するが性格不明。壁溝は東壁の中央、カマドの周囲を除く壁下を巡っている。幅15~25cm、深さ10cmを測る。

第53号住居跡遺物観察表 (第173図)

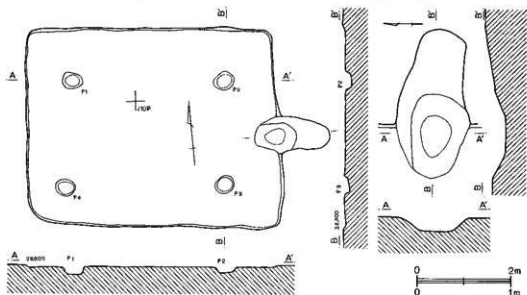
No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	須蓋	(12.4)	6.4	3.7		C	A	黄灰色	70%	覆土	67



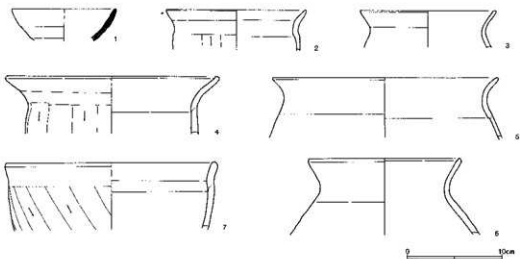
発掘調査で最も重要な作業行程遺構確認作業

第54号住居跡 (第174図)

J-10 Grid に位置する。新田関係は北に位置する55号住居跡を切り、東に位置する56号住居跡に切られる。形状は東西に長軸をとる隅丸長方形を呈する。規模は東西5.45m、南北4.20m、壁高5cmを測る。主軸の示す方位はN-95°-Eを指す。カマドは東壁の中央にあり、僅かに掘り型を遺存する。焚き口から燃焼部にかけては東西0.9m、南北0.6m、深さ15cm程の浅い楕円形の掘り込みを呈している。貯蔵穴はない。ピットは主柱穴4ヶ所が検出された。規模は径40~45cm、深さ10~15cmを測る。壁溝はない。遺物は覆土中から20点程出土しているに過ぎない。



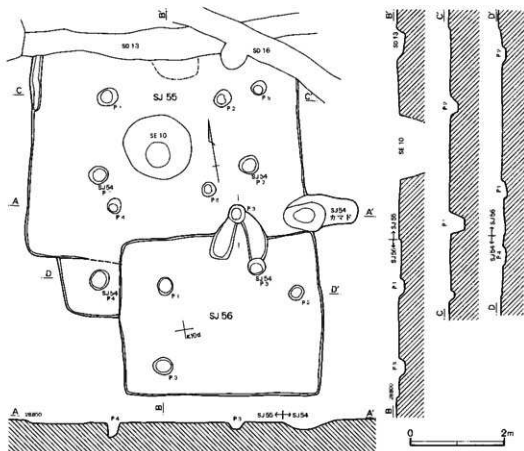
第174図 第54号住居跡・カマド



第175図 第54号住居跡出土遺物

第54号住居跡遺物観察表 (第175図)

No	測	種類	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	環状	(13.0)		(3.2)		Ha・W・B・G	A	灰色	10%	覆土	一括
02	4	小型甕	(14.6)				W・R・G	A	赤褐色	10%	覆土	一括
03	6	小型甕	(13.0)				G	A	明赤褐色	10%	覆土	一括
04	7	甕	(22.6)				G	A	褐色	10%	覆土	一括
05	3	甕	(38.0)				G	A	明赤褐色	10%	カマド	一括
06	2	甕	(16.0)				G	A	褐色	10%	覆土	一括
07	5	甕	(22.0)				U・R・R・G	A	明赤褐色	5%	覆土	一括

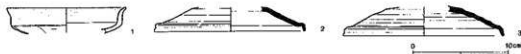


第176図 第55・56号住居跡

第55号住居跡 (第176図)

J-10・11 Grid に位置する。新旧関係は54・56号住居跡、住居の中央では10号井戸跡に、北壁の大半は13・16号溝跡に切られ、本跡が最も古い。形状は東西に長軸をもつ長方形を呈する。規模は東西5.86m、南北は推定で4.6m、壁高2cmを測る。主軸の示す方位はN-78°-Eを指す。カマドは北壁中央にその痕跡を残す。貯蔵穴は北東コーナー近くにあり、形状は円形、規模は径0.57×0.66m、深さ32cmを測る。ピットは主柱穴4ヶ所の他、貯蔵穴の南に1ヶ所認められる。規模は径

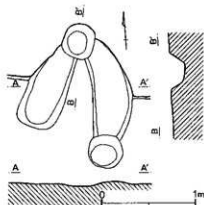
30-40cm、深さ20-30cmを測る。壁溝は西壁に一部認められる。幅23cm、深さ7cmを測る。遺物は覆土中から10数点が出土している。



第177図 第55号住居跡出土遺物

第55号住居跡遺物観察表 (第177図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	坏E	(12.6)		(2.3)		G	A	明赤褐色	15%	覆土	一括
02	1	須壺	16.0		(2.0)		G	A	灰白色	10%	覆土	一括
03	3	須壺	(17.0)		(3.0)		G	A	黄灰色	30%	覆土	一括



第178図 第56号住居跡カマド

第56号住居跡 (第176図)

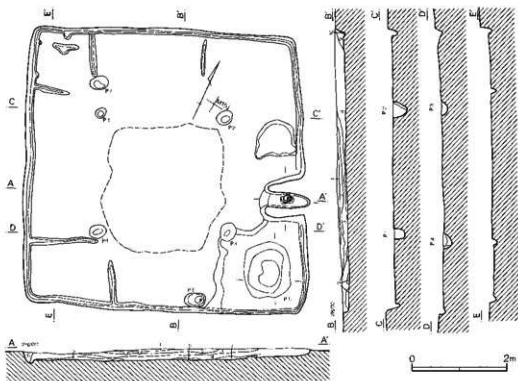
J・K-10 Gridに位置する。新旧関係は54・55号住居跡を切り、本跡が最も新しい。形状は東西に長軸をとる長方形を呈する。東西4.47m、南北3.38m、壁高10cmを測る。中軸線の示す方位はN-9°-Eを指す。カマドは北壁の東寄りであり、袖部のみ僅かに遺存する。規模は両袖部外側で1.25m、内側で0.35m、煙出しまでの長さ1.1mを測る。壁外への切り込み0.55mである。主柱穴は3ヶ所が検出されたが南東部は欠落している。主柱穴の規模は径30-40cm、深さ10cm内外である。壁溝は存在しない。

第57号住居跡 (第179図)

M-14・15 Gridに位置する。集落の最も南東にある。新旧関係はない。形状は整った正方形を呈する。規模は東西6.04m、南北5.89m、壁高20cmを測る。主軸の示す方位はN-21°-Wを指す。覆土は黒色シルトと灰白色シルトが重層的に上位を形成、主体は焼土を混入した暗褐色土である。カマドは東壁のはほぼ中央にあり、袖部を良好に残す。規模は両袖間外側で0.95m、内側で0.3m、煙出しまでの長さ1.06mを測る。焚き口から燃焼部へは10cm程の落差をもって浅い皿状の燃焼空間へ続く。貯蔵穴は南東コーナーにあり、周囲を方形の周堤が巡る。規模は東西1.96m、南北1.82m、高さ5cm程を測る。貯蔵穴は南北に長い隅九方形を呈し、規模は東西0.98m、南北1.14m、深さ20cmを測る。ピットは6ヶ所検出された。内、主柱穴はP1-P4が該当し、規模は径25-40cm、深さ15-30cmを測る。主柱穴と壁の間には所謂「間仕切り溝」がある。西側はそれぞれの壁から垂直に延び計4条、東側は北東位置の柱穴に対し北から延びる1条、南東部は貯蔵穴の方形区画により存在しない。規模は幅14cm、深さ5cm、最大長1.45m(南西壁)を測る。壁溝はカマド、貯蔵穴を除く各壁下を幅15cm、深さ10-15cmで巡る。遺物は出土総数21点と少ない。カマド

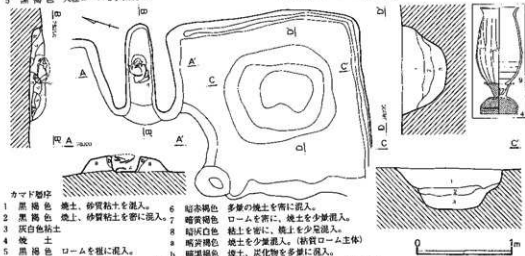
内から高坏（3）、甕（9）が検出された他、カマド正面に甕（5）、南西隅仕切り周辺、北西隅仕切り周辺など土圧によりつぶれた状態のものが出土しており流入した遺物は皆無に近い。

出土遺物（第181図）高坏（3、4）の坏部は模倣坏の形状を呈する。甕は口縁部中位に段をもち直立ぐみに立ち上がる（5、7）と胴部下半に最大径をもった長胴タイプ（9）がある。



S J 57層序

- |       |                           |        |                    |
|-------|---------------------------|--------|--------------------|
| 1 暗褐色 | シルト質で灰白色シルトを混入。           | 6 暗褐色  | ソフトロームを多量に混入。しり強い。 |
| 2 灰白色 | シルト質である。                  | 7 黒褐色  | ローム、焼土を多量に混入。      |
| 3 黒褐色 | シルト質で灰白色シルトを混入。           | 8 黄灰褐色 | 黒色シルト、ロームの混在土である。  |
| 4 暗褐色 | 黒色系シルトを基調とし、ローム、少量の焼土を混入。 | 9 黒褐色  | シルト質である。           |
| 5 黒褐色 | 大粒ロームを多量混入。               | 10 青褐色 | ローム質である。           |



カマド層序

- |         |               |        |                   |
|---------|---------------|--------|-------------------|
| 1 黒褐色   | 焼土、砂質粘土を混入。   | 6 暗赤褐色 | 多量の焼土を南に混入。       |
| 2 黒褐色   | 焼土、砂質粘土を密に混入。 | 7 暗黄褐色 | ロームを密に、焼土を少量混入。   |
| 3 灰白色粘土 |               | 8 暗灰白色 | 粘土を密に、焼土を少量混入。    |
| 4 焼土    |               | 9 黄褐色  | 焼土を少量混入。（粉質ローム主体） |
| 5 黒褐色   | ロームを粗に混入。     | a 暗赤褐色 | 焼土、灰化物を多量に混入。     |

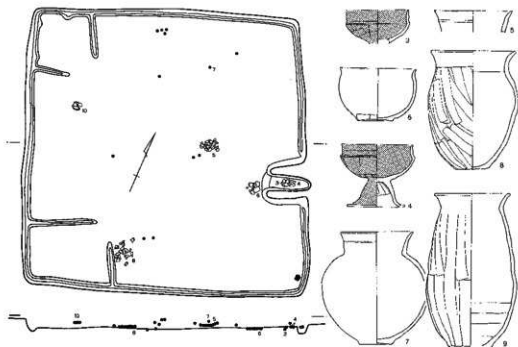
第179図 第57号住居跡・カマド・貯蔵穴



所謂「間仕切り」状の遺構。その用語の是非はともかくとして、主柱と組み合わされた構造は「堅固」で企画性に富む。

ピット層序

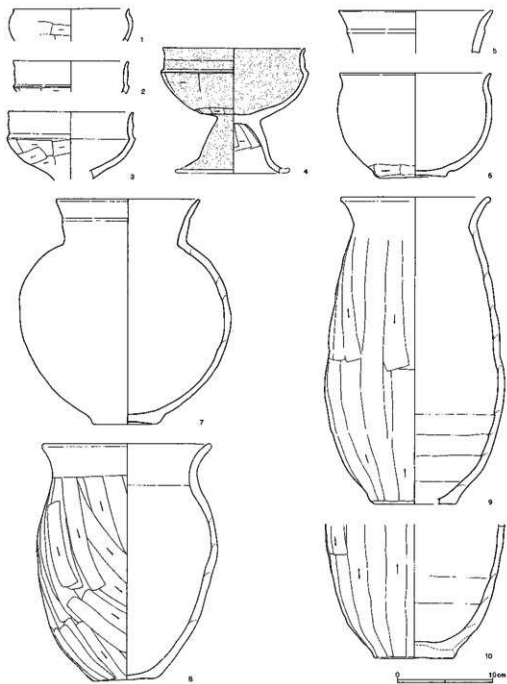
- P.1 1 暗褐色 ロームを混入。  
 P.2 1 暗褐色 砂礫を密に混入。  
 P.2 2 暗褐色 ローム、礫を混入。  
 P.3 1 暗褐色 ロームを多量に混入。  
 P.4 1 暗褐色 焼土、小粒ロームを混入。  
 P.4 2 暗褐色 ソフトローム、礫を混入。  
 P.4 3 暗褐色 砂礫、ロームを密に混入。  
 P.5 1 黒褐色シルト ローム、焼土を混入。  
 (貯) 2 黒褐色シルト ローム、砂礫を密に混入。  
 P.5 3 黒褐色シルト ローム、砂礫を多量に密に混入。



第180図 第57号住居跡遺物分布

第57号住居跡遺物観察表 (第181図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	坏A	(12.0)				W・B・G	A	赤褐色	10%	覆土	一括
02	2	坏B	(12.0)				W・B・G	A	橙褐色	10%	覆土	一括
03	3	高坏	(13.0)				W・B・G	A	橙褐色	15%	カマド	20, 25, 57
04	9	高坏	15.0		(13.0)		G	A	純い赤褐色	85%	カマド	21
05	5	甕	(16.0)				S・W・B・R・G	A	橙褐色	5%	床直	14
06	7	小型甕	15.8	7.1	10.7	662	G	A	明赤褐色	完形	床直	15
07	8	甕	15.0	7.0	23.5		G	A	橙褐色	60%	覆土	2
08	10	甕	17.9	6.8	24.5		G	A	黄褐色	70%	床直	16
09	6	甕	(15.0)	(9.0)	(32.0)		W・B・U・G	A	橙褐色	30%	カマド	カマド
10	4	甕	8.4				W・B・U・G	A	淡橙褐色	20%	覆土	13

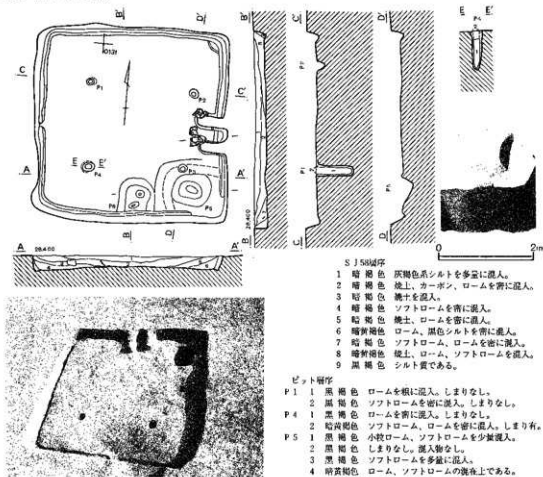


第181図 第57号住居跡出土遺物

第58号住居跡 (第182図)

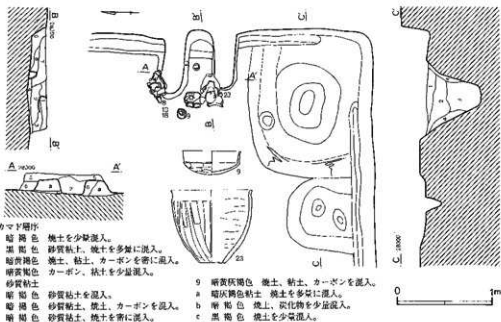
O-12・13 Grid に位置する。新旧関係はない。形状は整った正方形を呈する。規模は東西4.12m、南北4.12m、壁高22cmを測る。主軸の示す方位はN-87°-Eを指す。覆土は焼土、炭化物、ロームを多量に混入する暗褐色土が主体である。カマドは東壁中央にあり、袖部を良好に遺存

する。規模は両袖間外側で98cm、内側で28cm、煙出しまでの距離72cmを測る。壁外への掘り込みはない。燃焼面はフラットで床面と同一レベルを示す。貯蔵穴は方形の土堤により囲まれており、規模は東西1.37m、南北1.04m、幅40cm、高さ6cm程を測る。貯蔵穴本体は形状不整形を呈し、東西0.82m、南北0.68m、深さ58cmを測る。ピットは主柱穴4ヶ所が検出され2m前後にほぼ等間隔に配されている。主柱穴の規模は径20cm、深さ45-85cmを測る。南壁下中央には一辺75cm程の浅い方形の掘り込み中に径15cm、深さ15cm程の小ピットが2ヶ所検出された。出入口部と考えられる。壁溝は西壁中央および南東コーナーで一部途切れるが、他は各壁下に幅20cm、深さ5cm程で巡っている。カマド部分も一度掘り込まれた後、再度埋めて使用している。遺物は出土総数48点を数える。出土状態はカマド内、両脇、正面にその大半が集中している。概ね住居廃絶時の遺物と考えてよい。坏は碗タイプと模倣坏に2大別でき、前者は法量的に人型品が目立つ他赤彩される頻度も高い。高坏は直線的に開く口縁と柱状で長脚の作りである。小型壺(14)は口縁部が長く立ち上がりも急に開きが弱く胴部は球状を呈する。甕は長胴甕に代表されるが、短口縁でソロバン玉状の胴部を呈する(18)など作りの粗雑なものが多い。飯は小型で作りの良い(23)とやや粗雑な作りの大型品(24)がある。

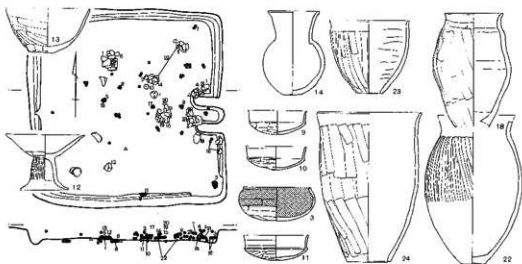


第182図 第58号住居跡

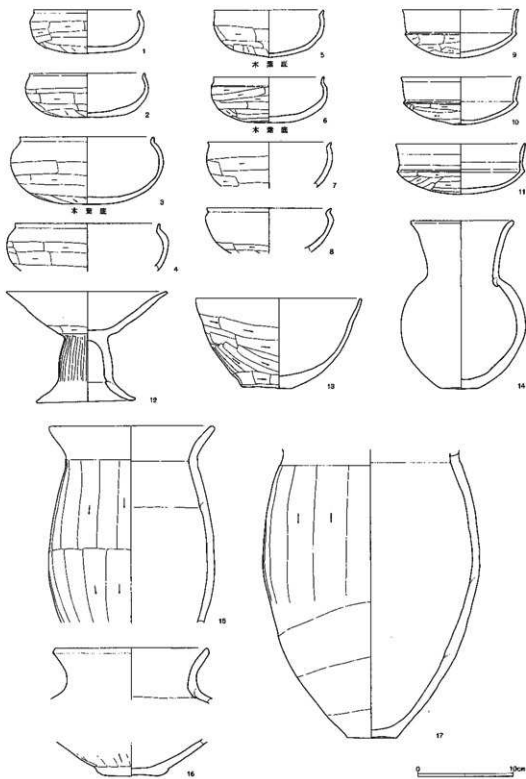




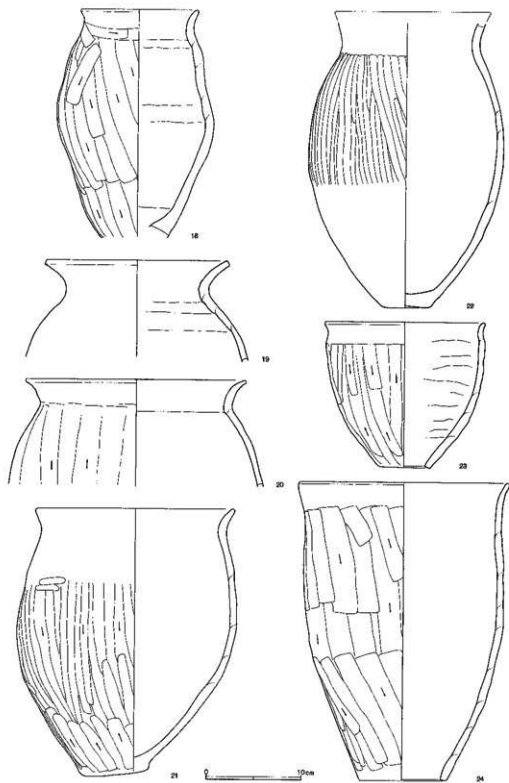
第183図 第58号住居跡カマド・貯蔵穴



第184図 第58号住居跡遺物分布



第185图 第58号住居跡出土遺物(1)



第186图 第58号住居跡出土遺物(2)

第58号住居跡遺物観察表 (第185・186図)

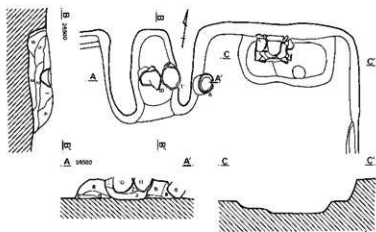
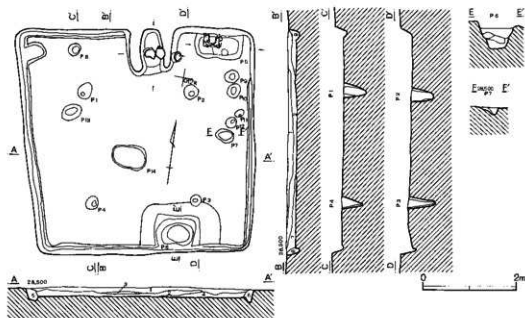
No	測	種別	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	13	坏A	11.2		4.5	185	B・W・U・G	A	橙 色	95%	覆土	17
02	17	坏A	(12.0)		( 4.5)		W・B・U・G	A	淡橙色	50%	覆土	7
03	11	坏A	14.0		7.0		W・B・G	A	淡橙色	60%	床直	33
04	18	坏A	(15.0)				W・B・G	A	橙 色	20%	覆土	17
05	15	坏A	11.4		4.9	148	W・B・U・G	A	橙 色	完形	覆土	19
06	16	坏A	11.4		4.7	185	W・B・U・G	A	橙 色	完形	床直	38
07	19	坏A	(13.0)				W・B・U・G	A	淡橙色	20%	覆土	13
08	14	坏A	13.0		( 5.0)		W・B・U・G	A	赤橙色	80%	覆土	3
09	12	坏C	12.0		5.0	116	U・W・B・G	A	淡橙色	90%	床直	43
10	10	坏C	12.4		5.0	130	W・B・U・G	A	赤橙色	90%	床直	8
11	9	坏C	13.4		5.2		B・W・U・G	A	橙 色	70%	覆土	34
12	3	高坏	17.0		10.4	520	G	A	明赤褐色	完形	覆土	36
13	2	鉢	17.2	5.9	9.3	452	G	A	橙 色	完形	床直	19
14	7	小型壺	(10.5)	4.0	17.5	810	G	A	明赤褐色	95%	床直	
15	23	甕	16.4				W・B・U・G	B	淡橙色	40%	床直	24
16	22	甕	(16.0)	( 7.0)			U・Ha・W・R・B	A	淡橙色	15%	覆土	30, 32
17	5	甕		5.0			G	A	明赤褐色	60%	床直	25
18	4	甕	12.2		23.6		G	A	黄橙色	90%	床直	29
19	21	甕	(19.0)				W・B・U・G	A	浅黄橙色	5%	覆土	34
20	20	甕	(23.0)				K・W・B・U・G	A	橙 色	15%	覆土	22
21	8	甕	20.5	6.8	27.5		G	A	明赤褐色	55%	覆土	一括, 17
22	6	甕	5.6	(29.7)			G	A	橙 色	80%	覆土	10, 12
23	25	甕	16.8	5.4	15.2		G	A	明赤褐色	75%	覆土	47
24	1	甕	21.5	9.0	31.1		G	A	明黄褐色	95%	床直	1

## 第59号住居跡 (第187図)

O-12 Grid に位置する。新旧関係はない。形状は北辺だけが極だつて長いため台形を呈する。規模は東西5.05m、南北4.73m、壁高20cmを測る。主軸の示す方位はN-9°-Eを指す。覆土はローム・ブロックを多量に混入する黒褐色土が主体である。カマドは北壁の東寄りにあり、袖部の遺存は良好である。袖部の規模は外側で1.15m、内側で0.38m、煙出しまでの長さは0.95mを測る。壁外への掘り込みはない。焼成面は2-3cmの浅い皿状の掘り込みを呈する。貯蔵穴は北東コーナーにあり、形状は隅丸長方形、規模は東西1.04m、南北0.50m、深さ20cmを測る。カマドに相對する南壁下には東西1.70m、南北0.85m、幅30cm、高さ5cm程の長方形を呈する土堤状の高まりをもつ区画内に、形状隅丸方形、規模、東西0.85m、南北0.45m、深さ38cmの貯蔵穴状のピットが検出された。主柱穴はP1-P4が該当する。規模は径20-45cm、深さ15-20cmを測る。他に8ヶ所検出されているが、東壁下のP11、P12は出入口部に付随するものと思われる。壁溝はカマド、貯蔵穴部分を除く各壁下を幅25cm、深さ10cm程で巡る。遺物は出土総数19点と少ないが、完形および図示可能なものが多い。カマド内から甕2個体(10、11)が、カマドの東側には小型甕(6)が置かれており、カマドの正面には甕2個体(7、9)坏2個体(1、3)、高坏(12)が土圧につぶれた状態で出土している。

出土遺物(第188図) 坏は碗状のものが主体で典型的な模倣坏は出土していない。高坏(4)は

直線的に大きく開く口縁部と下端の段の作りはシャープである。(6)は器壁が薄く作りの良い小型甕である。甕は長胴のものに限られるが、最大径、口縁部の形状に差異があり、一様ではない。



S J 59層序

- 1 黒褐色 ローム、ソフトロームを密に混入。
- 2 黒褐色 小粒ロームを少量混入。
- 3 黒褐色 混入物なし。
- 4 暗黄褐色 ローム、ソフトロームを密に混入。
- 5 黒褐色 ロームを密に混入。
- 6 暗黄褐色 ロームを密に混入。
- 7 黒褐色 小粒ロームを密に混入。
- 8 暗黄褐色 ソフトロームを密に混入。
- 9 黒褐色 混入物なし。しまり有。

カマド層序

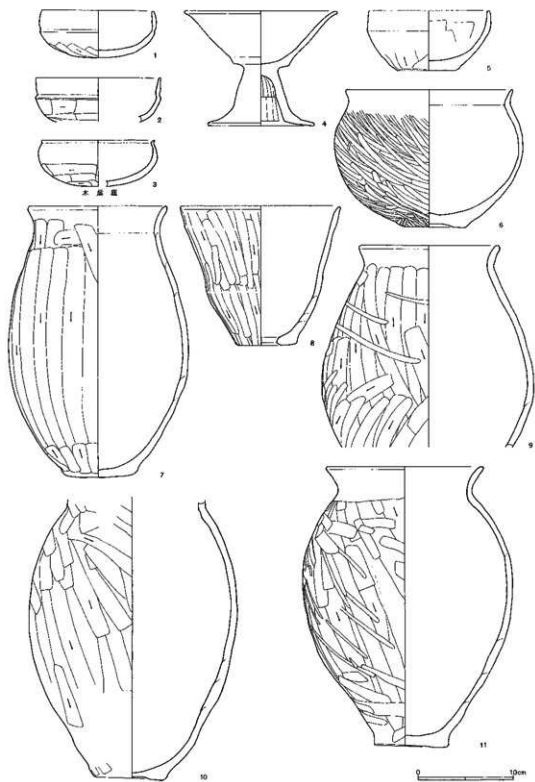
- 1 黒褐色 焼土、砂質粘土を少量混入。
- 2 黒褐色 多量の焼土及び砂質粘土を混入。

- 3 暗赤褐色 焼土ブロック(厚1cm)を密に混入。
- 4 暗褐色 焼土ブロックを少量混入。
- 5 黒褐色 焼土ブロックを密に混入。シルト質である。
- 6 暗赤褐色 焼土、砂質粘土である。
- a 暗黄褐色粘土 焼土を少量混入。
- b 暗褐色粘土ブロック 焼熱により赤色している。
- c 黒褐色 焼土を多量に混入。
- d 暗褐色 焼土ブロックを多量に混入。

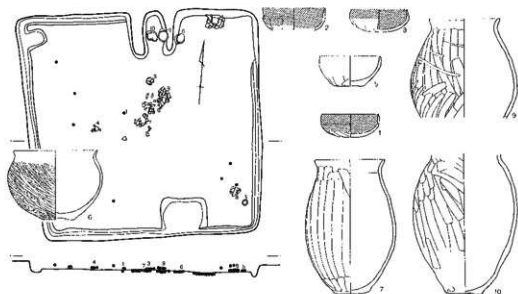
\*粘土により構築される。向かって右側の壁面が良く残っている。

カマド内から出土した甕、長胴甕、高坏からなる土器組成から、このような組み合わせが考えられる。支脚転用の高坏は必ず逆位で用いられる。組み合わせ後の器高は凡そ46cmを計る。

第187図 第59号住居跡・カマド



第188图 第59号住居跡出土遺物



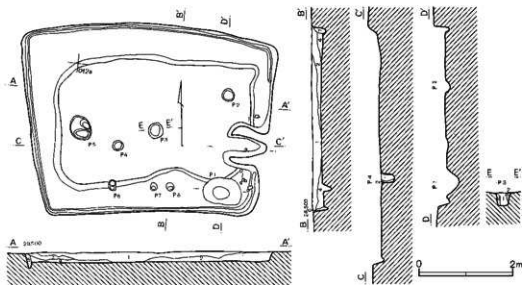
第189図 第59号住居跡遺物

第59号住居跡遺物観察表 (第188図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	9	坏B	11.6		4.9		W-B-G	A	赤褐色	80%	床直	5
02	8	坏B	(13.0)				W-B-G	A	赤褐色	10%	覆土	括
03	10	坏A	12.0		4.8	190	W-B-G	A	棕色	完形	床直	11
04	12	高坏	(16.0)	11.2			W-B-G	A	浅黄褐色	70%	覆土	9
05	11	碗	12.6	6.1	6.3	304	U-Ils-W-U-G	A	淡褐色	完形	覆土	14
06	4	小型甕	17.4	6.3	14.3		G	A	鈍い黄褐色	95%	カマド	17
07	2	甕	14.4	7.7	28.4		G	A	淡い琥珀色	60%	床直	16
08	1	小型甕	16.8	6.3	514.7	818	G	A	橙 色	完形	覆土	13
09	3	甕	14.7		(21.0)		G	A	鈍い黄褐色	5%	覆土	15
10	5	甕		7.2	(28.7)		G	A	橙 色	70%	カマド	18
11	6	甕	(16.0)	7.3	24.1		G	A	橙 色	65%	カマド	19

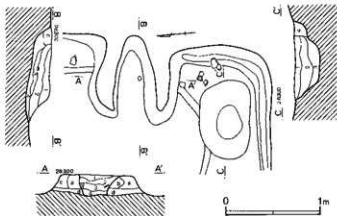
第60号住居跡 (第190図)

N・O-11・12 Gridに位置する。新旧関係はない。形状は東西に長軸をとる隅丸長方形を呈する。規模は東西5.32m、南北4.02m、深さ20cmを測る。主軸の示す方位はN-99°-Eを指す。覆土は黒褐色のシルト質土が主体で壁下にローム・ブロックを多量に混入する暗褐色土が堆積している。カマドは東壁の南寄りにあり、袖部の遺存状態は良好である。規模は両袖間外側で0.98m、内側で0.30m、焼出しまでの長さ0.94mを測る。壁外への掘り込みはない。燃焼面はフラットで床面と同一レベルである。貯蔵穴は南東コーナーにあり、形状は不整楕円形、規模は東西0.82m、南北0.55m、深さ30cmを測る。主柱穴と思われるピットはP1、P2の2ヶ所が相当し、他に4ヶ所検出された。P1、P2の規模は径30-45cm、深さ15-30cmを測る。床面は壁際から、平均70-80cmの幅で3-5cm程低く掘り込まれ、床面中央が方台状の高まりをもつ形状となる。壁溝は幅15cm、深さ12cm程で全周する。遺物は出土総数6点と僅かである。西壁下、北西コーナー寄りに丹の分布が認められた。



S J 60 層序

- 1 黒褐色 シルト質で、径5cm程のロームを密に混入。
- 2 黒褐色 シルト質で、ローム、ソフトロームを密に混入。
- 3 黒褐色 シルト質で、小粒ロームを少量混入。
- 4 黒褐色 シルト質で、カーボン、ロームを密に混入。
- 5 暗褐色 少量のロームを混入。しまり有。
- 6 暗褐色 少量のロームを混入。しまり有。
- 7 暗褐色 少量のロームを混入。しまり有。



カマド層序

- 1 黒褐色 ソフトロームを少量混入。
- 2 黒褐色 ソフトロームを密に、焼土を粗に混入。
- 3 赤褐色 焼土。
- 4 黒褐色 ロームを少量混入。
- 5 黒褐色 焼土、ロームを密に混入。
- 6 黒褐色 焼土、ロームを密に混入。
- a 暗茶褐色粘土。
- b 赤褐色 焼土ブロックを多量に混入。
- c 暗茶褐色 粘土を少量混入。

d 黒褐色 焼土、粘土を少量混入。

ピット層序

- P 3 1 暗黄褐色 ソフトロームを少量混入。
- 2 暗茶褐色 ソフトローム、ロームを密に混入。
- P 4 1 黒褐色 ソフトロームを密に混入。
- 2 明黄褐色 ソフトロームである。
- P 5 1 暗褐色 小粒ロームを密に混入。
- (貯) 2 黒褐色 ローム、カーボンを密に混入。
- 3 暗茶褐色 木炭、焼土、ロームを密に混入。
- 4 黒褐色 ソフトロームを密に混入。

第190図 第60号住居跡・カマド・出土遺物

第60号住居跡遺物観察表 (第190図)

No	洲	器種	口径	底径	器高	重Q	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	罏		7.0			W・B・H・G	A	淡褐色	30%	瓦土	3.5

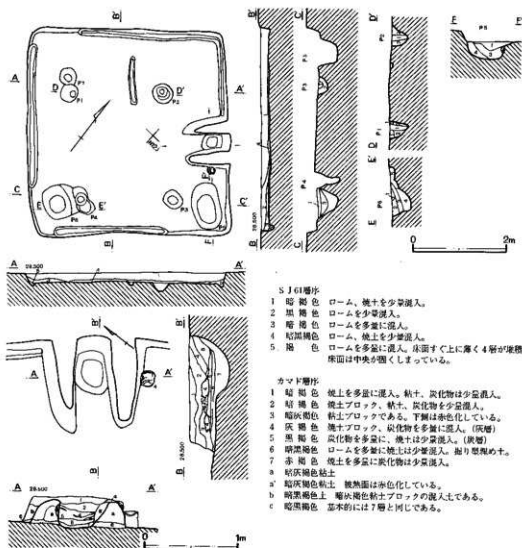
第61号住居跡 (第191図)

N-11・12 Gridに位置する。新旧関係は21号掘立柱建物跡に切られている。形状は整った方形を呈する。規模は東西4.27m、南北4.38m、壁高20cmを測る。主軸の示す方位はN-58°-Eを指す。覆土は焼土を多量に混入する暗褐色土が主体で、床面上は赤化した粘土が広く覆っている (第



4層)。カマドは東壁の中央にあり、袖部は良好に遺存。袖部の規模は外側で1.09m、内側で0.36m、煙出しまでの長さ1.02mを測る。壁外への掘り込みはない。燃烧部は径45cm、深さ8cm程の浅い皿状を呈する。貯蔵穴は東コーナーにあり、形状は隅丸長方形、規模は長軸0.97m、短軸0.50m、深さ40cmを測る。ピットは6ヶ所検出されたが、西側に位置するP4、P5は建て替えが想定される。規模は径40~60cm、深さ25~50cmを測る。壁溝は西、南コーナー部、カマド、貯蔵穴を除く部分にみられる。幅25cm、深さ12cmを測る。P1、P2間に北壁から南下する所謂間仕切り溝が1条検出された。遺物は出土総数9点と僅かである。全て床面直上から出土している。カマド脇から小型甕(4)が作居の中央には最大1.5mの接合距離をもつ甕(3)が出土している。

出土遺物(第193図)小型甕(4)を含め甕類は3個体出土している。球形胴部で(2)は最大径21cmを計る。



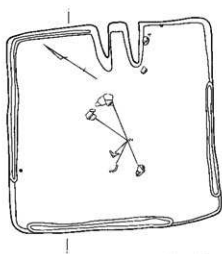
S J 61層序

- 1 暗褐色 ローム、焼土を少量混入。
- 2 黒褐色 ロームを少量混入。
- 3 暗褐色 ロームを多量に混入。
- 4 暗黒褐色 ローム、焼土を少量混入。
- 5 褐色 ロームを多量に混入。床面すく上に薄く4層が埋積している。床面は中央が固くしまっている。

カマド層序

- 1 暗褐色 焼土を多量に混入。軟土、炭化物を少量混入。
  - 2 暗褐色 焼土ブロック、軟土、炭化物を少量混入。
  - 3 暗灰褐色 軟土ブロックである。下層は赤色化している。
  - 4 灰褐色 焼土ブロック、炭化物を多量に混入。(灰層)
  - 5 黒褐色 炭化物を多量に、焼土を少量混入。(灰層)
  - 6 暗黒褐色 ロームを多量に焼土は少量混入。掘り懸れめし。
  - 7 赤褐色 焼土を多量に炭化物は少量混入。
- a 暗灰褐色粘土  
a' 暗灰褐色粘土 焼熱面は赤色化している。  
b 暗黒褐色上 暗灰褐色粘土ブロックの混入寸である。  
c 暗黒褐色 基本的には7層と同じである。

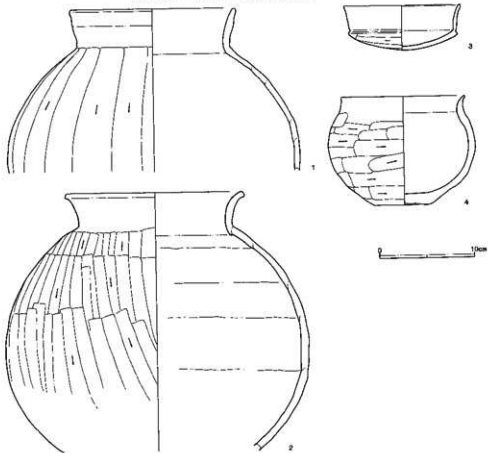
第191図 第61号住居跡・カマド



- ピット層序
- P 1 1 暗褐色 ロームを少量混入。  
 2 暗褐色 ロームを多量に混入。  
 P 2 1 暗褐色 ロームを少量混入。  
 2 暗褐色 ロームを多量に混入。  
 P 3 1 暗褐色 ロームを少量混入。  
 2 暗褐色 ロームを多量に混入。  
 P 4 1 黒褐色 ロームを少量混入。  
 P 5 1 暗褐色(黄) ロームが主体である。  
 2 暗褐色 ロームを多量に混入。  
 3 暗褐色 ロームを少量混入。  
 P 6 1' 暗褐色上 ローム、焼土を少量混入。  
 1 暗褐色 ローム、焼土を少量混入。  
 2 暗褐色上 ロームを多量に混入。  
 3 暗褐色 黒褐色土を混入。  
 4 暗褐色 焼土、炭化物を多量に混入。  
 5 暗褐色上 ロームを多量に混入。粘土の一部と考えられる。

\* P 6 は長方形の掘り型を持つため貯蔵穴の可能性がある。

第192図 第61号住居跡遺物分布



第193図 第61号住居跡出土遺物

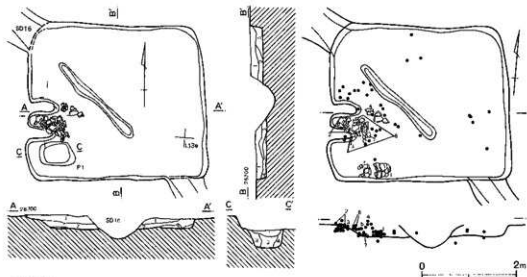
第61号住居跡遺物観察表 (第193図)

No	測	器種	口径	底径	群高	重0	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	甕	17.0				W・B・G	A	褐色	30%	カマド	一括

02	3	莖	18.6				W・B・K・G	A	赤褐色	40%	床直	2,3,4,5,6
03	1	杯C	12.0		4.6	135	W・B・G	A	褐色	完形	覆土	一括
04	4	小型炭	13.4	6.0	11.3		G	A	暗赤褐色	55%	カマド	9

### 第62号住居跡 (第195図)

L-12・13 Grid に位置する。北西から南東に走る16号溝に中央を切られる。形状は整った方形を呈する。規模は東西3.56m、南北3.31m、深さ25cmを測る。主軸の示す方位はN-86°-Eを指す。覆土は黒色シルトを主体とするが、倒木跡による攪乱が著しい。カマドは西壁の南寄りにあり、袖部のみ良好に遺存。規模は両袖間外側で0.93m、内側で0.28m、煙出しまでの長さは0.68m



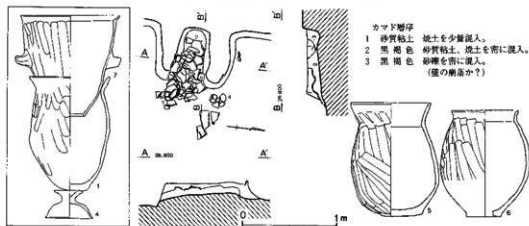
#### S J 62層序

- 1 暗褐色 砂礫を多量に混入。南平部は倒木痕の影響が大である。
- 2 黒褐色 シルト質である。砂礫を多量に混入。
- 3 暗赤褐色 シルト、砂礫、ロームを混入。
- 4 暗褐色 焼土、カーボンが多量に混入。
- 5 暗赤褐色 ローム、焼土を密に混入。

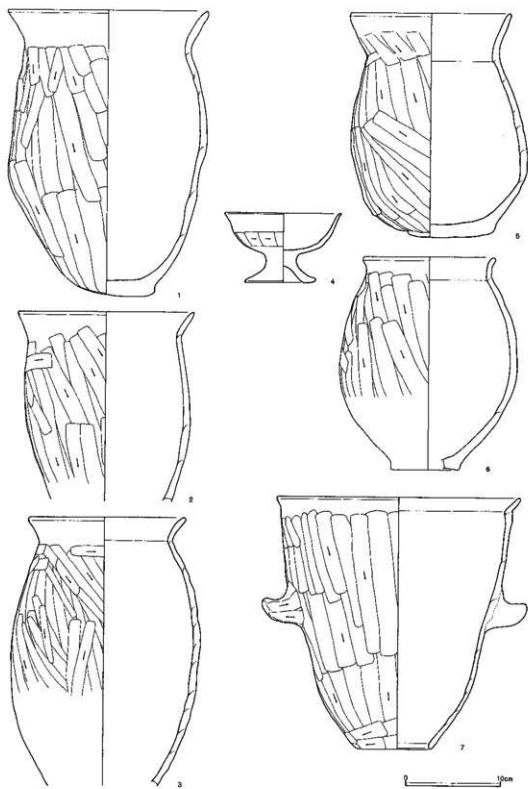
#### ピット層序

- P 1 1 暗褐色 焼土、ロームを少量混入。
- (貯) 2 暗褐色 木炭(炭化材)焼土を密に混入。
- 3 暗赤褐色 円礫、ロームを密に混入。
- 4 暗赤褐色 ロームを密に混入。

### 第194図 第62号住居跡・遺物分布



### 第195図 第62号住居跡カマド



第196图 第62号住居跡出土遺物

を測る。燃焼面は深さ5cm程の浅い皿状を呈する。貯蔵穴は南西コーナーにあり、形状は不整形、規模は東西75cm、南北48cm、深さ41cmを測る。ピット、壁溝は存在しない。遺物は出土総数62点を数える。カマド内および貯蔵穴の南に完形体の資料が集中している。中央は16号溝と擾乱により皆無である。

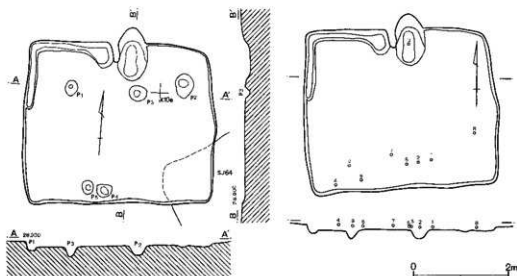
出土遺物（第196図）は粗雑な作りのものが多く、頸部のくびれは明確ではない。甌は短口縁で甌を祖形とした（6）と把手をもち薄手の（7）がある。

第62号住居跡遺物観察表（第196図）

No	測	器種	口径	底径	器高	重G	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	3	甌	20.8	7.5	29.9		G	A	橙色	完形	床直	42
02	4	甌	18.2		(19.5)		G	A	黄橙色	45%	カマド	49, 50
03	6	甌	15.6		(27.3)		G	A	橙色	50%	カマド	49
04	7	高坏	12.2	7.5	7.3		G	A	橙色	80%	カマド	45
05	2	甌	16.6	9.0	23.3		G	A	鈍い褐色	90%	床直	41
06	5	小甌甌	13.4	7.4	22.0		G	A	鈍い橙色	90%	カマド	48, 49
07	1	甌	25.3	7.7	26.8		G	A	橙色	75%	カマド	46

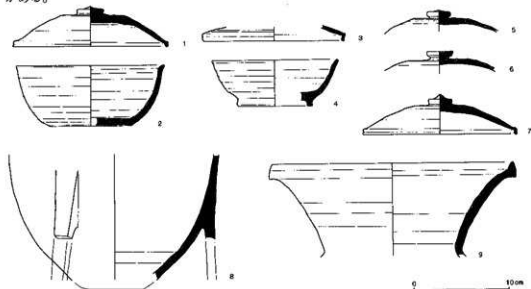
第63号住居跡（第197図）

K-9・10 Gridに位置する。新旧関係は東で64号住居跡を切り、西で9号溝に切られる。形状は東西を長軸とする長方形を呈する。規模は東西4.08m、南北3.37m、壁高8cmを測る。カマドは北壁中央に位置する。袖部は地山を削り出して芯としている。規模は幅28cm、長さ40cmを測る。燃焼部は楕円形の浅い掘り込みで、東西60cm、南北82cm、深さ10cmを測る。壁外へは30cm程掘り込み煙道部としている。ピットは5ヶ所が検出され、径30~40cm、深さ20cmの規模を有するP1、P2が主柱穴、カマド正面の浅く貧弱なP4、P5は出入口部と思われる。壁溝は北西コーナーを中心にそれぞれ1.5m程が検出され、幅20cm、深さ5cmの規模を測る。出土遺物は全体に散漫な分布を示し、その大半は須恵器の小片である。



第197図 第63号住居跡・遺物分布

出土遺物（第198図）須恵器は蓋、坏、高台付坏、甕、脚付甕がある。蓋はつまみの形態に差異がある。



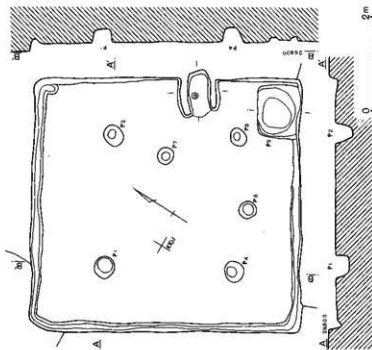
第198図 第63号住居跡出土遺物

第63号住居跡遺物観察表（第198図）

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	3	須蓋	16.4		4.2		G	A	褐灰色	80%	覆土	一括
02	1	須坏	(15.6)		6.3		G	A	灰色	45%	覆土	一括
03	4	須蓋	(14.8)				G	A	褐灰色	10%	カマド	一括
04	2	須坏	(13.2)			4.8	G	A	灰色	40%	覆土	一括
05	6	須蓋					G	A	黄灰色	30%	覆土	一括
06	7	須蓋					G	A	灰色	30%	覆土	一括
07	8	須蓋	(16.2)		4.1		G	A	黄灰色	55%	覆土	一括
08	9	須甕					B・W・G	A	灰白色	20%	覆土	一括
09	5	須甕	(25.0)				G	A	鈍い褐色	10%	覆土	一括

#### 第64号住居跡（第200図）

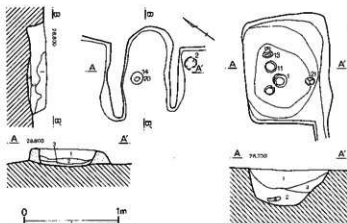
K-10 Gridに位置する。新旧関係は北で63号住居跡に切られ、南で65号住居跡を切る。形状は整った方形を呈する。規模は東西5.38m、南北5.74m、深さ15cmを測る。主軸の示す方位はN-58°-Eを指す。覆土は黒色シルトを主体とする。カマドは東壁の南寄りにあり、推部のみ良好に遺存する。規模は両袖間の外側で0.89m、内側で0.40m、煙出しまでの長さ0.95mを測る。壁外への掘り込みは20cmである。貯蔵穴は南東コーナーにあり、形状は長方形、規模は東西1.15m、南北0.92m、深さ35cmを測る。ピットは6ヶ所検出され、内主柱穴はP1～P4が該当する。形状は略円形、規模は径40～45cm、深さ30～35cmを測る。壁溝は北壁下を除く各壁下を15～25cm、深さ10cmで走る。遺物は出土総数32点と少ないが、完形および図示可能な資料に恵まれている。出土状態はカマド内に支脚転用の高坏（14）が逆位で、カマド周辺に坏3点（2、6、7）が、貯蔵穴内から



環2点 (10, 11)、高環 (13)、  
甕 (22) が検出されている。他  
は床直で環を中心に散漫な分布  
が認められる。

出土遺物 (第202・203図) 環  
は丸タイプと横做環の2大別で  
き、前者は全て赤彩。高環は  
「ハ」の字状に開く短脚に横做  
環をのせている。甕は長胴が主  
であるが、膨らみの強い (19)  
と直線的に底部に移行する  
(19) がある。甕は口縁部の変  
化が小さく、底部が急にすま  
るもの (23, 24) と底部まで直  
線的にのび、底径の大きな  
(25) がある。

第199図 第64号住居跡

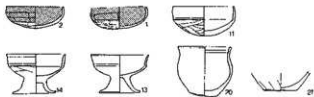


S J 64カマド層序

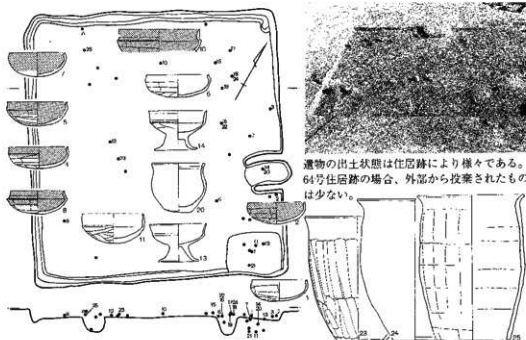
- 1 茶褐色 焼土を多量に混入。
- 2 暗褐色 焼土を混入。
- 3 灰褐色 カマド構築材の山砂、粘土を混入。  
使用に際しての調整上である。

ピット層序

- P 5 1 暗褐色 ローム、焼土、炭化物を  
少量混入。  
(貯) 2 暗褐色 砂質ロームを少量混入。  
3 紅褐色 砂質ロームを多量に混入。



第200図 第64号住居跡カマド

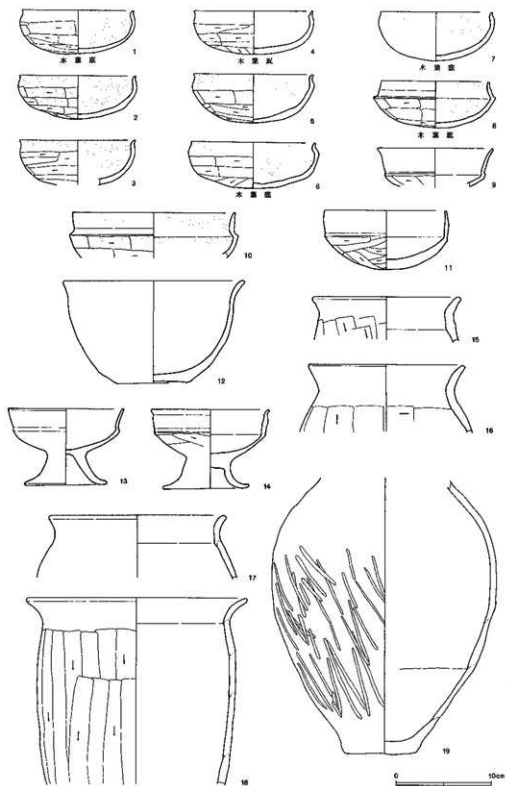


第201図 第64号住居跡遺物分布

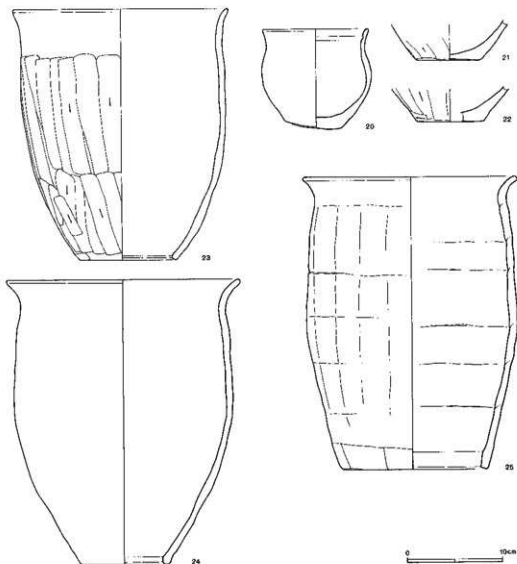
第64号住居跡遺物観察表 (第202・203図)

No.	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	12	环A	11.6		4.6	179	R・B・W・U・G	A	緑色	95%	貯穴	31
02	18	环A	12.0		4.5		W・G	A	赤褐色	70%	カマド	24
03	14	环A	(12.4)				W・B・U・G	A	赤褐色	30%	覆土	12
04	13	环A	12.4		4.6	193	W・B・U・G	A	褐色	完形	床直	一括
05	15	环A	12.4		5.1	215	W・R・U・G	A	藍色	完形	床直	一括
06	16	环A	(13.0)		(4.8)		W・B・U・G	A	赤褐色	60%	床直	19
07	17	环A	11.6		5.1		W・R・U・G	A	藍色	70%	覆土	13
08	8	环B	11.5		4.8	190	U・W・B・G	A	藍色	完形	覆土	22
09	11	环C	(12.0)				W・R・R・U・G	A	褐色	20%	覆土	一括
10	10	环B	17.0				U・W・G	A	赤褐色	20%	覆土	6
11	9	环C	12.8		6.1	265	U・W・B・G	A	褐色	完形	貯穴	28
12	1	鉢	18.6	7.4	10.5	710	G	A	明褐色	完形	貯穴	16
13	3	高坏	12.0	8.0	8.0	227	G	A	褐色	完形	貯穴	27
14	4	高坏	12.3	9.0	8.4	264	G	A	明赤褐色	完形	カマド	25
15	19	甕	(15.0)				W・B・U・G	A	淡褐色	5%	覆土	9
16	20	甕	(16.0)				U・W・B・G	A	褐色	10%	床直	14
17	21	甕	(18.0)				W・U・R・G	A	赤褐色	5%	床直	8
18	25	甕	23.0				G	A	明赤褐色	30%	覆土	10
19	7	甕		7.5	(38.6)		G	A	明赤褐色	48%	床直	11
20	2	小型甕	10.8	5.1	10.3	440	G	A	明褐色	完形	カマド	25
21	23	甕		6.8			W・B・U・Ha・G	A	淡褐色	20%	貯穴	32
22	22	甕		6.8			W・B・U・Ha・G	A	赤褐色	20%	覆土	14
23	5	甕	(22.4)	(10.5)	26.0		G	A	明赤褐色	60%	覆土	17
24	6	甕		9.0	(29.6)		G	A	灰黄褐色	35%	覆土	10
25	24	甕	(22.0)	(15.6)			B・R・W・U・G	A	赤褐色	20%	覆土	3





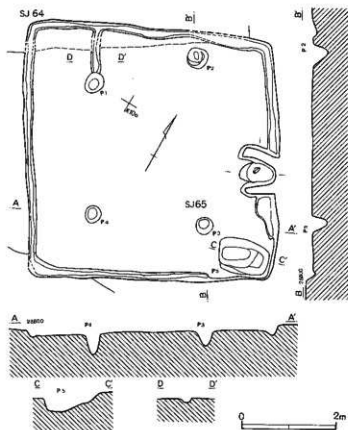
第202图 第64号住居跡出土遺物(1)



第203図 第64号住居跡出土遺物(2)

第65号住居跡 (第204図)

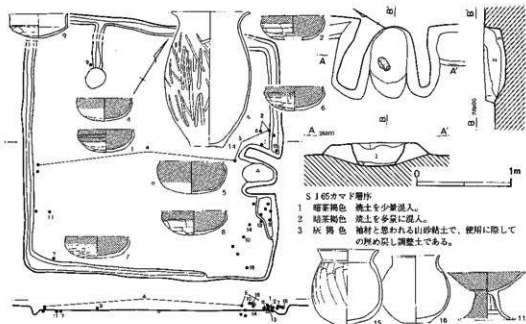
K・L-10 Grid に位置する。新旧関係は北で64号住居跡に切られ、南で66号住居跡を切る。形状は整った正方形を呈する。規模は東西5.45m、南北5.34m、壁高は最も高い南東壁で16cmを測る。主軸の示す方位はN-60°-Eを指す。カマドは東壁のほぼ中央にあり、袖部のみ良好に遺存。規模は両袖部外側で1.13m、内側で0.4m、煙出しまでの長さ0.85mを測る。壁外への掘り込みはない。燃焼面は10cm弱の浅い皿状を呈する。貯蔵穴は南東コーナーにあり、形状は不整形、規模は東西1.09m、南北0.73m、深さ30cmを測る。ピットは主柱穴(P1~P4)の4ヶ所が検出された。規模は径35~45cm、深さ30~67cmを測る。P4と北西壁間には所謂間仕切り溝が検出された。



第204図 第65号住居跡

規模は長さ0.95m、幅20cm、深さ7cmを測る。壁溝はカマドおよび貯蔵穴部分を除く各壁下を幅15cm、深さ4cm程を巡る。遺物は出土総数27点と少ない。出土遺物の大半はカマド袖部の両脇と貯蔵穴周辺に集中している。接合資料は2例確認できる。坏(4)はカマド前面のかなり浮いた位置から南西壁下まで4.2mの接合距離をもつ。

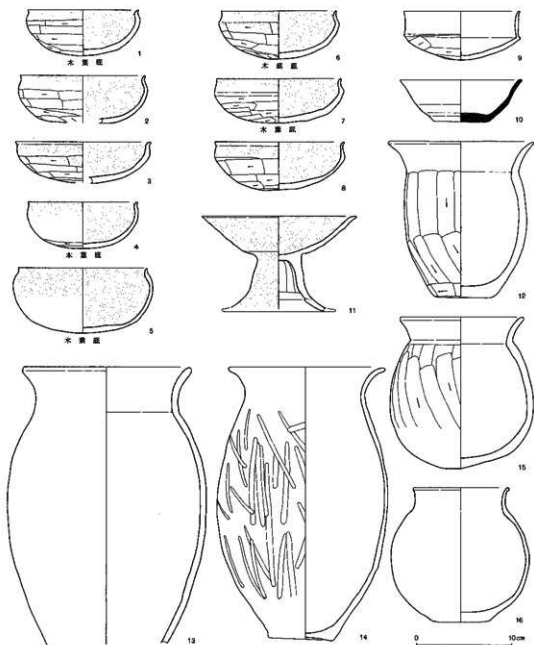
出土遺物(第206図)坏は模倣坏1点以外は全て碗タイプで赤彩が施されている。高坏(11)は直接的で下端に段を有する坏部。やや長脚である。小型甕は口縁部が大きく開き膨らみの弱い(12)と球形胴部の(15、16)がある。甕は長胴で縦位のナデが丁寧に施され、篋削り痕は不鮮明である。



第205図 第65号住居跡遺物分布・カマド

SJ 65カマド層序

- 1 暗茶褐色 焼土を少量混入。
- 2 暗茶褐色 焼土を多量に混入。
- 3 灰褐色 焼土と混入される山砂粘土で、使用に際しての灰の混入調整土である。



第206図 第65号住居跡出土遺物

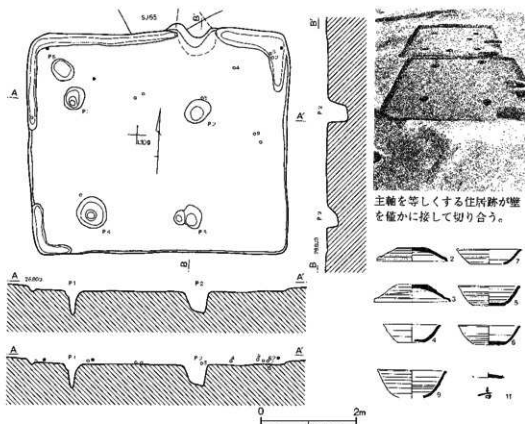
第65号住居跡遺物観察表 (第206図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	9	坏A	11.6		4.8	182	W・B・U・G	A	橙 色	完形	覆土	7
02	12	坏A	(13.0)		(4.9)		W・B・U・G	A	赤橙 色	40%	覆土	3.4
03	11	坏A	14.0		(4.3)		W・B・U・G	A	橙 色	60%	覆土	一拵
04	13	坏A	11.4		4.9		W・B・U・G	A	赤橙 色	60%	覆土	8.20
05	4	坏A	13.5		6.8	280	G	A	赤褐色	90%	覆土	4.8

06	10	坏A	12.0		5.0	175	W・B・U・G	A	橙 色	完形	床直	3
07	14	坏A	13.0		4.6		W・B・U・G	A	赤褐色	70%	床直	24
08	7	坏A	13.5		5.0	198	W・K・B・U・G	A	赤褐色	完形	覆土	13
09	8	坏C	12.0		5.1	151	W・U・B・G	A	橙 色	完形	床直	1
10	6	須坏	(12.4)	(5.6)	4.4		G	A	灰黄色	60%	覆土	17
11	16	高坏	16.2				G	A	赤褐色	70%	カマド	22,一括
12	2	小型甕	(15.3)	6.1	16.3		G	A	橙 色	80%	覆土	
13	1	甕	17.4		(30.0)		G	A	橙 色	50%	覆土	14
14	5	甕	(15.9)	6.8	28.3		G	A	赤褐色	50%	床直	16
15	15	小型甕		6.0	15.8		G	A	明黄褐色	50%	覆土	6.SJ64-23
16	3	小型甕	10.0	6.1	14.0		G	A	橙 色	60%	貯穴	18

### 第66号住居跡 (第207図)

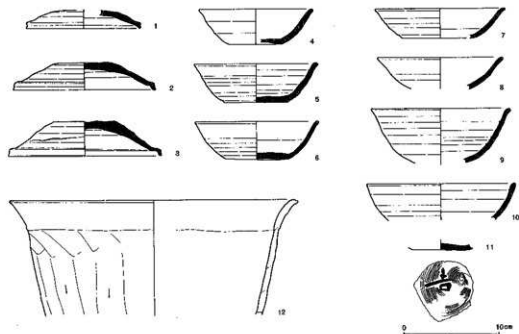
I-10 Grid に位置する。新旧関係は北で65号住居跡を切る。大部分を72号住居跡と重複するが新旧関係は不明。形状は東西に長軸をとる長方形を呈する。規模は東西5.53m、南北4.67m、壁高12cmを測る。主軸の示す方位はN-87°-Eを指す。カマドは北壁のやや東寄りにあり、遺存状態は極めて悪い。燃焼面の掘り込みはなく、焼土、粘土の広がり方が東西0.8m、南北1.2mの範囲で確認されたに過ぎない。壁外へは55cm突出する。貯蔵穴は北西コーナーにあり、形状楕円形、規模東西0.52m、南北0.4m、深さ20cmが検出されたが疑問が残る。ピットは主柱穴P1-P4の4ヶ所



第207図 第66号住居跡

が検出された。規模は径45-60cm、深さ40-60cmを測る。住居跡の西に偏在しており、東側に広い空間を設けている。壁溝は北壁下と西の一部および北西コーナーに認められる。幅20-38cm、深さ13cmを測る。出土遺物は13点に過ぎない。散漫で浮遊した状態で出土している。

出土遺物(第208図)甌(12)の他は全て須恵器である。蓋は口径に大きな差異がある。全てつまみはもたない。坏は口径12.0cm-15.6cmまで幅があるが13.0cm前後が最も多い。底面は全て回転糸切り痕がある。法量比は口径=2×底径である。坏(11)の底面に「吉」の墨書がある。



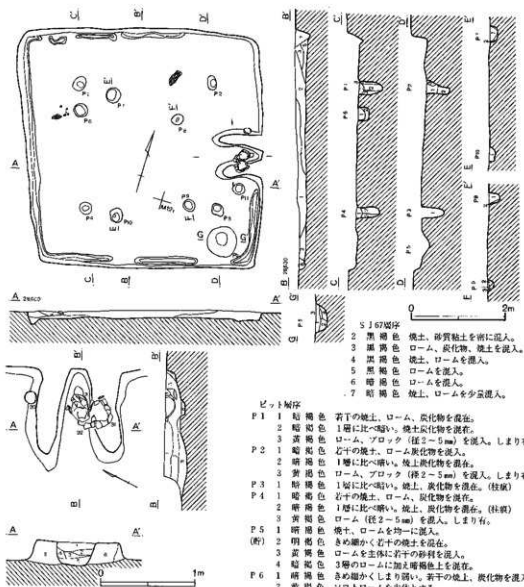
第208図 第66号住居跡出土遺物

第66号住居跡遺物観察表(第208図)

No	測	器種	口径	底径	器高	置9	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	須壺	(12.0)		(2.0)		G	A	灰色	25%	覆土	一括
02	8	須蓋	(15.0)	(5.8)	(2.8)		G	A	灰白色	50%	床面	13
03	12	須壺	16.0	6.2	3.6		W-IIa-S-B-G	A	橙色	70%	覆土	4
04	5	須坏	(12.0)		(3.5)		G	A	黄灰色	30%	覆土	7
05	9	須坏	(13.0)	(6.8)	(4.0)		G	A	浅黄色	40%	覆土	6
06	4	須坏	(13.0)	6.5	3.9		G	A	灰白色	40%	覆土	9
07	1	須坏	(13.6)		(3.2)		G	A	灰色	20%	覆土	一括
08	6	須坏	(13.0)		(3.3)		G	A	灰色	15%	覆土	一括
09	10	須坏	(14.6)				G	A	黄灰色	20%	覆土	10
10	3	須坏	(15.6)				G	A	灰色	10%	覆土	一括
11	7	須坏		6.0			G	A	灰白色	30%	覆土	11
12	11	甌	(30.0)				Ha-U-W-B-G	A	橙色	15%	覆土	199

第67号住居跡 (第209図)

M-11・12 Grid に位置する。新旧関係はない。形状は整った方形を呈する。規模は東西5.19m、南北5.04m、壁高23cmを測る。主軸の示す方位はN-73°-Eを指す。覆土は焼土、炭化物を多量に混入する黒褐色土が主体である。カマドは東壁の中央にあり、袖部は良好に遺存する。規模は両袖間の外側で1.03m、内側で0.32m、袖部の長さ1.12mを測る。壁外および燃焼面の掘り込みはない。貯蔵穴は南東コーナーにあり、形状は円形、規模は東西62cm、南北62cm、深さ31cmを測る。ピ



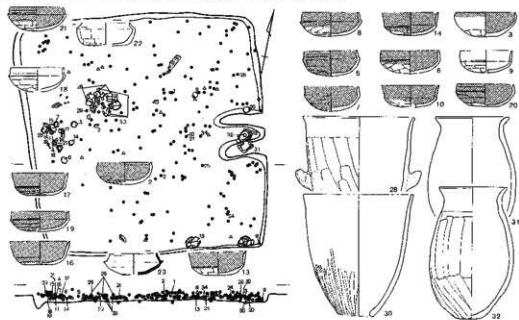
- カマド層序
- 1 暗褐色 焼土を少量混入。
  - 2 黒褐色 焼土、ロームを少量混入。
  - 3 暗黄褐色 ローム、焼土を密に混入。
  - 4 暗褐色 ローム、焼土を密に混入。
  - 5 暗褐色 焼土、炭化物を混入する。しまりやや有。
  - 6 黒褐色 きめ細かく若干の炭化焼土を混入。
  - 7 黄褐色 ローム、ブロックが主体である。

- ピット層序
- P 1 1 暗褐色 若干の焼土、ローム、炭化物を混在。
  - 2 暗褐色 1層に比べ暗い。焼土炭化物を混在。
  - 3 黄褐色 ローム、ブロック (径2-5mm) を混入。しまり有。
  - P 2 1 暗褐色 若干の焼土、ローム炭化物を混入。
  - 2 暗褐色 1層に比べ暗い。焼土炭化物を混在。
  - 3 黄褐色 ローム、ブロック (径2-5mm) を混入。しまり有。
  - P 3 1 暗褐色 1層に比べ暗い。焼土、炭化物を混在。(柱状)
  - P 4 1 暗褐色 若干の焼土、ローム、炭化物を混在。
  - 2 暗褐色 1層に比べ暗い。焼土、炭化物を混在。(柱状)
  - 3 黄褐色 ローム (径2-5mm) を混入。しまり有。
  - P 5 1 暗褐色 焼土、ロームを均一に混入。
  - 2 暗褐色 きめ細かく若干の焼土を混在。
  - 3 黄褐色 ロームを主体に若干の砂利を混入。
  - 4 暗褐色 3層のロームに加え暗褐色土を混在。
  - P 6 1 暗褐色 きめ細かくしまりなし。若干の焼土、炭化物を混入。
  - 2 黄褐色 ソフトロームを主体とする。
  - P 7 1 暗褐色 きめ細かくしまりなし。若干の焼土、炭化物を混入。
  - 2 黄褐色 ソフトロームを主体とする。
  - P 8 1 暗褐色 きめ細かくしまりなし。若干の焼土、炭化物を混入。
  - 2 暗褐色 ソフトロームを主体とする。
  - P 9 1 暗褐色 若干の焼土、ローム、炭化物を混在。
  - 2 暗褐色 きめ細かくしまりなし。若干の焼土、炭化物を混入。
  - 3 黄褐色 ソフトロームを主体とする。
  - P 10 1 暗褐色 きめ細かくしまりなし。若干の焼土、炭化物を混入。

第209図 第67号住居跡・カマド

ットは10ヶ所検出され、内P1-P4が支柱穴である。支柱穴の規模は径30cm、深さ50cmを測る壁溝は西壁下全面と、他は部分的に存在する。規模は幅26cm、深さ8cm程を測る。遺物は出土総数246点を数える。出土状態はカマド内に甕(32)と瓶(30)のセットの他坏2点(3、20)が、貯蔵穴および周囲から坏(24)と高坏(12)が、カマド正面の西壁下を中心に2つの集中箇所がある。西寄りのグループは坏12個が、東寄りには坏1点、甕2点、瓶2点が出土している。西壁から流入する覆土の堆積状態に準拠しており、住居廃絶後の投棄と思われる。

出土遺物(第211・212図)坏はおおむね4分類が可能である。椀タイプで比較的器高を有するもの(1-4)、模倣坏との中間をなすタイプで器高の内、口縁部の比が小さく段の張りが弱いもの(5-8)、模倣坏で底面が平低をなすタイプ(12-14、16、17)、模倣坏(9、15)がある。須志器坏(23)は、受部先端の縁は広く、立ち上がり端面は内傾。口縁部は大きく内傾する。体部の削りは時計とは反対の回転を示す。体部外面は自然軸が全面に認められる。甕は長胴で器壁が厚い。外面の整形は縦位の筒削りが主で、更にナデが加わり筒削りの不明瞭なものもある(31)。瓶は口縁部に変化が乏しく、直線的な作りで底部近くで急にすぼまる。

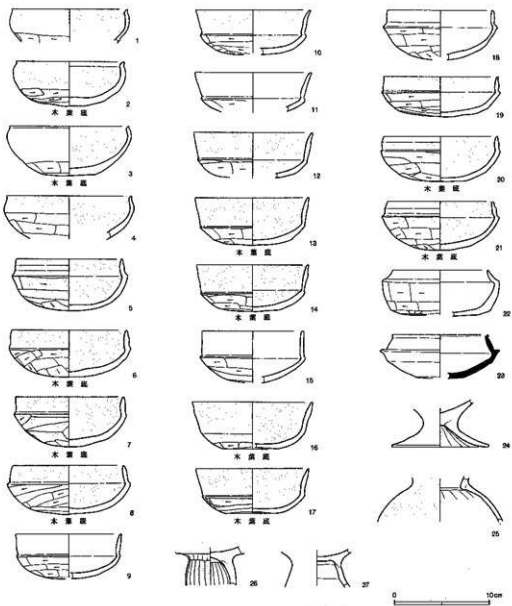


第210図 第67号住居跡遺物分布

第67号住居跡遺物観察表(第211・212図)

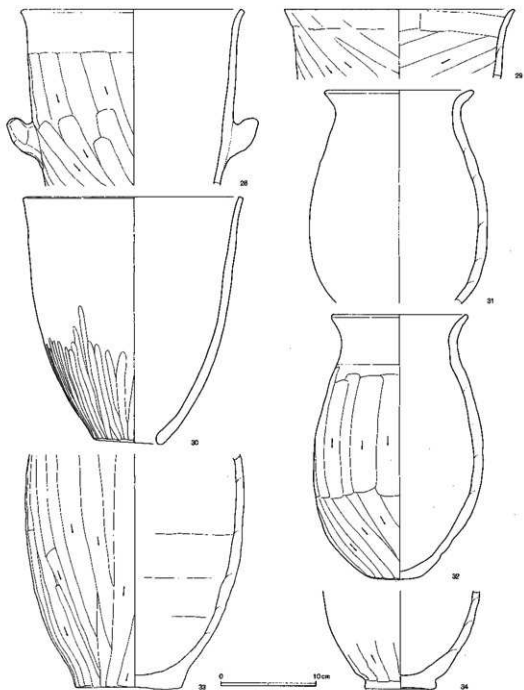
No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	29	坏A	(12.0)				U・W・B・G	A	橙 色	20%	床直	215
02	8	坏A	11.4		4.7	224	G	A	赤 色	完形	床直	31
03	14	坏A	12.6		5.2		U・W・B・G	B	赤褐色	80%	覆土	235
04	27	坏A	(13.0)				W・B・U・G	A	灰赤色	30%	覆土	182
05	9	坏B	11.2		5.4	186	G	A	明赤褐色	完形	貯穴	187
06	6	坏B	12.0		5.9	235	G	A	暗赤褐色	完形	覆土	186





第211図 第67号住居跡出土遺物(1)

07	11	坏B	11.3		5.2	210	G	A	赤色	完形	床直	177
08	16	坏B	11.8		5.2	215	G	A	黄褐色	完形	覆土	192
09	24	坏B	(11.0)				W-B-U-G	A	褐色	30%	貯穴	242
10	19	坏B	(12.0)				W-B-U-G	A	淡褐色	30%	覆土	61
11	23	坏B	(12.0)				W-B-G	A	淡い橙褐色	20%	覆土	174
12	22	坏B	12.6				W-B-U-G	A	鈍い赤褐色	60%	覆土	-括
13	21	坏B	12.0		5.0		W-B-U-G	A	鈍い褐色	70%	覆土	174
14	13	坏B	11.8		4.9	135	W-B-U-G	A	褐色	完形	覆土	185
15	18	坏C	(10.8)				W-B-G	A	浅黄褐色	30%	覆土	176
16	20	須壺	(12.6)				W-B-U-G	A	鈍い褐色	30%	カマド	181.182
17	10	坏B	12.0		4.6	156	G	A	明小褐色	完形	床直	178

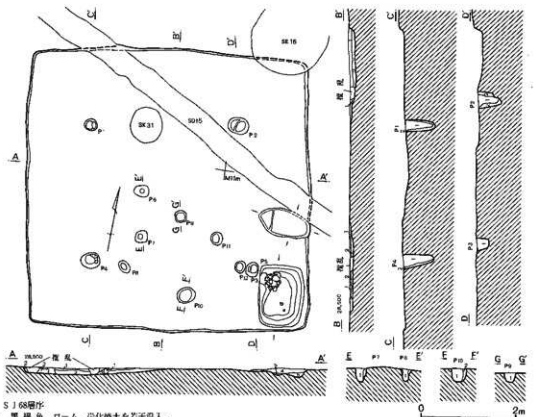


第212图 第67号住居跡出土遺物(2)

18	26	坏B	11.0			W·B·U·G	A	赤灰色	60%	灰土	173
19	28	坏B	(12.0)	(4.1)		W·B·U·G	A	赤橙色	30%	灰土	173
20	7	坏B	12.0	4.7	203	G	A	赤和色	完形	灰土	234
21	25	坏B	11.0	5.2		W·B·U·G	A	赤橙色	70%	灰土	180
22	17	坏B	10.0			W·B·U·G	A	橙 色	30%	灰土	190

23	15	須环	10.0		( 4.5)	W・B・G	A	灰白色	70%	床直	170
24	12	高环		(10.0)		R・W・B・G	A	橙 色	40%	覆土	41
25	34	小型壺				W・U・G	A	橙 色	20%	床直	52
26	30	高环				W・B・U・G	A	橙 色	20%	カマド	86
27	32	高环				W・B・U・G	A	橙 色	30%	カマド	61
28	4	瓶	22.8		18.4	G	A	鈍い褐色	5%	覆土	196,198,212
29	31	瓶	(24.0)			W・R・R・U・G	A	橙 色	10%	覆土	188
30	5	瓶	23.1	7.0	25.6	G	A	明赤褐色	40%	覆土	229
31	1	甕	15.4		22.2	G	A	鈍い褐色	5%	床直	195
32	3	甕	(14.6)	5.6	27.7	G	A	鈍い黄褐色	60%	覆土	230
33	2	甕		11.1		G	A	浅黄褐色	50%	覆土	198,203,204
34	33	小型甕		7.2		W・B・U・G	A	赤褐色	20%	覆土	67

第68号住居跡 (第213図)



S J 68層序

- 1 黒褐色 ローム、炭化焼土を若干混入。
- 2 黄褐色 ローム、炭化焼土を均質に混入。しまり有。
- 3 暗褐色 きめ細かく、ロームを若干混入。
- 4 暗褐色 焼土ブロック、炭化物をやや多く混在。しまりややなし。
- 5 黄褐色 ロームを混在。しまり有。

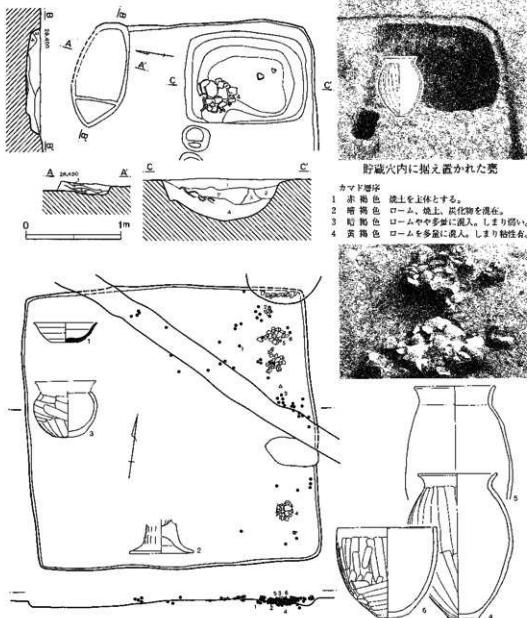
ピット層序

- P 1 1 暗黒褐色 若干の焼土、炭化物を混在。しまりやや弱い。
- 2 黄褐色 ロームを多量混入。(柱の周囲をロームで補強)
- P 2 1 暗黒褐色 若干の焼土、炭化物を混在。しまりやや弱い。
- 2 黄褐色 ロームを多量混入。(柱の周囲をロームで補強)
- P 3 1 暗黒褐色 若干の焼土、炭化物を混在。しまりやや弱い。
- P 4 1 暗黒褐色 若干の焼土、炭化物を混在。しまりやや弱い。
- 2 黄褐色 ロームを多量混入。(柱の周囲をロームで補強)

- P 5 1 暗褐色 きめやや粗雑。ローム、砂粒子、炭化焼土を混在。
- (附) 2 黒褐色 きめ細かい。ロームを混在。
- 3 黄褐色 ロームを混在。しまり有。
- 4 褐色 ロームを均質に混入。しまり弱く粘性有。
- P 6 1 暗褐色 きめ細かくしまり弱い。ローム、炭化焼土を混入。
- P 7 1 暗褐色 きめ細かくしまり弱い。ローム、炭化焼土を混入。
- P 9 1 暗褐色 きめ細かくしまり弱い。ローム、炭化焼土を混入。
- P 10 1 暗黒褐色 若干の焼土、炭化物を混在。しまりなし。
- 2 黄褐色 ロームを多量混入。(柱の周囲をロームで補強)

第213図 第68号住居跡

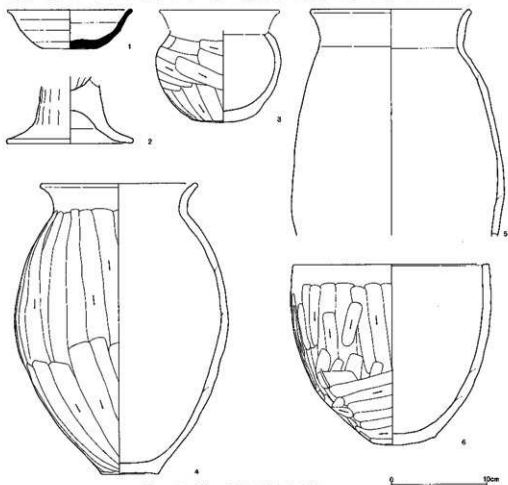
M・N-10・11 Gridに位置する。新旧関係は北西から南東に走る15号溝により、北半部の一部を切れ北西コーナーを16号井戸に、中央では31号土壇に切られる。形状は整った正方形を呈する。規模は東西5.95m、南北5.93m、壁高13cmを測る。主軸の示す方位はN-78°-Eを指す。覆土はローム、炭化物、焼土を多量に混入する黒褐色土が主体である。カマドは東壁の南寄りに存在するが、その大半は15号溝により破壊されている。遺存部分から燃焼空間を推定すると、東西0.98m、南北0.60m、深さ10cmの浅い皿状の落ち込みが想定される。焚き口部は幅50cm程が考えら



第214図 第68号住居跡カマド・遺物分布

れる。貯蔵穴は南東コーナーにあり、形状は長方形で内部に入れ子状の落ち込みを有する。規模は東西1.30m、南北0.96m、深さ44cmを測る。ピットは11ヶ所検出され、内P1～P4が主柱穴である。規模は径30～45cm、深さ60～70cmを測る。壁溝は存在しない。出土遺物は総数70点を数える。遺物の大半は貯蔵穴内およびカマドと北西コーナー間に集中している。中でも貯蔵穴内から完形の甕（4）が土圧により潰れた状態で出土している。

出土遺物（第215図）甕は全て長胴で、整形は縦位の鏡削りの状態で使用している（4）と縦位のナデ整形が加わる（5）がある。（6）は甕の製作中鉢に転用したものと考えられる。



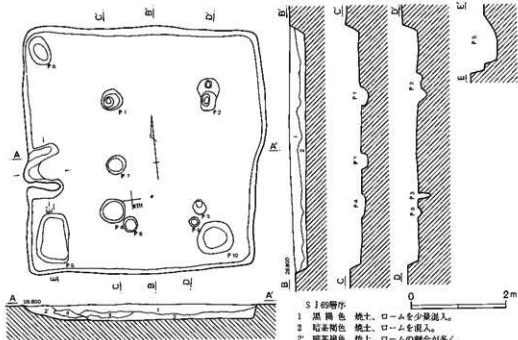
第215図 第68号住居跡出土遺物

第68号住居跡遺物観察表（第215図）

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	須环	13.0	6.1	4.1	165	G	A	灰色	完形	床直	5
02	4	高坏		13.0			B・W・G	A	橙 色	40%	覆土	18
03	6	小型甕		7.0			G	A	橙 色	70%	覆土	一括、25
04	3	甕	16.0	6.0	33.0		G	A	赤褐色	完形	貯穴	1
05	5	甕	17.0				G	A	明赤褐色	30%	覆土	19
06	2	甕	20.4		18.9		G	A	灰黄褐色	95%	床直	一括、19

第69号住居跡 (第216図)

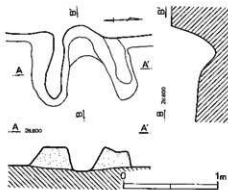
K-10・11 Gridに位置する。新旧関係は7号掘立柱建物跡に切られる。形状は整った正方形を呈する。規模は東西5.16m、南北5.20m、壁高35cmを測る。主軸の示す方位はN-83°-Eを指す。覆土は焼土、炭化物を多量に混入するⅠ黒褐色土、Ⅱ暗茶褐色土が主体で壁下に焼土、炭化物をより多量に混入する灰褐色土がブロック状に認められる。カマドは西壁の南寄りにあり、裾部のみ良好に遺存する。壁外への掘り込み、燃烧面の掘削は認められない。袖部の規模は両袖部外側で1.10m、内側で0.45m、長さ0.75mを測る。貯蔵穴は南西コーナーにあり、形状は長方形、規模は東西1.03m、南北0.67m、深さ28cmを測る。ピットは9ヶ所検出され、内P1~P4が主柱穴である。規模は径30~55cm、深さ16~28cmを測る。他に北西コーナー、南東コーナーに径30~70cmの円形ピットがある。壁溝は存在しない。出土遺物は総数63点を数える。出土状態は貯蔵穴内から甕



第216図 第69号住居跡

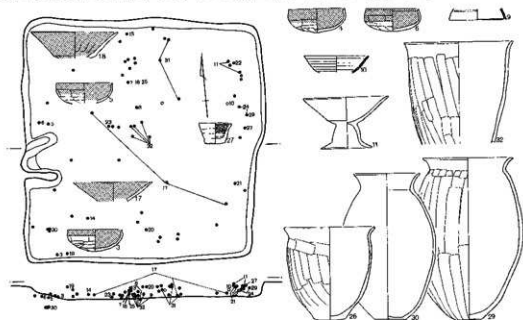
(30)が1点出土し、坏2点(5、6)がカマド周辺が検出された他は全体に散漫な分布を示す。

出土遺物(第219・220図)坏は全て碗タイプで口径は11.0~14.0cmの幅があるが、11.0cmが最も多い。高坏は口縁部が直線的に立ち上がり、下端に段をもって脚部に至る。小型甕は口縁部の屈曲が強く、胴部はあまり膨らまない。甕は長胴で、縦位の筒割りだけで仕上げられるものは器壁が厚い(29、31)。(30)は甕割



第217図 第69号住居跡カマド

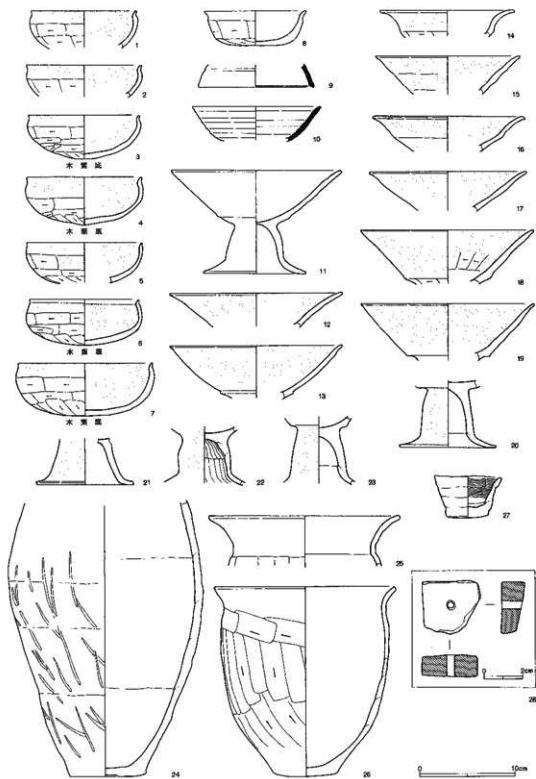
りの後丁寧なナデ整形が加わり器壁も薄く仕上げられる。鉢とした(27)は全体に熟を受けており支脚として使われた可能性がある。(28)は砥石の部分で径1.3cmの穿孔がある。



第218図 第69号住居跡遺物分布

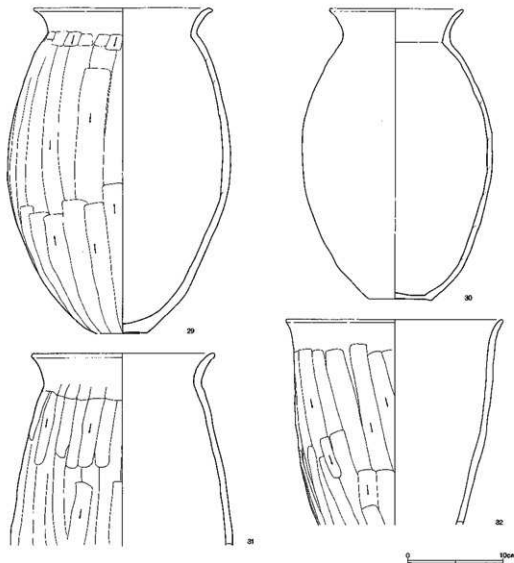
第69号住居跡遺物観察表 (第219-220図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	11	坏A	(11.0)				W-B-G	A	赤褐色	20%	覆土	一拵
02	12	坏A	(12.0)				W-B-G	A	淡棕色	10%	覆土	一拵
03	8	坏A	11.8		4.6		W-B-U-G	A	棕色	70%	カマド	一拵, 51
04	7	坏A	12.0		5.0		W-B-U-G	A	赤棕色	60%	カマド	一拵
05	10	坏A	(12.0)				G	A	棕色	30%	床直	34
06	9	坏A	11.6		4.8	205	W-B-U-G	A	赤棕色	90%	床直	32
07	4	坏A	14.0		5.4		U-W-B-G	A	藍色	80%	覆土	21
08	6	坏F	10.6		3.6	110	W-B-R-U-G	B	浅黄褐色	定形	床直	20
09	13	須蓋	(12.0)				W-B-G	A	淡棕色	10%	覆土	拵
10	1	須坏	(13.6)		( 3.5)		G	A	鈍い橙灰色	5%	覆土	拵, 7
11	28	高坏	18.0		10.8		G	A	明赤褐色	60%	覆土	拵, 1.5
12	26	高坏	(18.0)				W-B-G	A	赤褐色	10%	覆土	一拵
13	15	高坏	18.4				W-B-U-G	A	棕色	45%	覆土	14
14	14	高坏	(14.0)				W-Ha-B-G	A	淡棕色	10%	床直	48
15	21	高坏	(15.0)				W-B-U-G	A	藍色	10%	覆土	一拵
16	22	高坏	(16.0)				W-B-Ha-U-G	A	棕色	10%	覆土	一拵
17	16	高坏	16.6				W-B-U-G	A	藍色	35%	床直	30, 36, 45
18	17	高坏	(18.0)				U-W-B-G	A	鈍い藍色	15%	覆土	20
19	18	高坏	(18.0)				B-U-G	A	藍色	10%	覆土	50
20	23	高坏	10.0				W-B-R-G	A	藍色	40%	覆土	39
21	25	高坏	(10.0)				Ha-W-R-G	A	鈍い藍色	15%	覆土	46
22	24	高坏					W-B-R-G	A	棕色	50%	覆土	3
23	27	高坏					W-B-U-G	A	藍色	40%	覆土	29



第219图 第69号住居跡出土遺物(1)



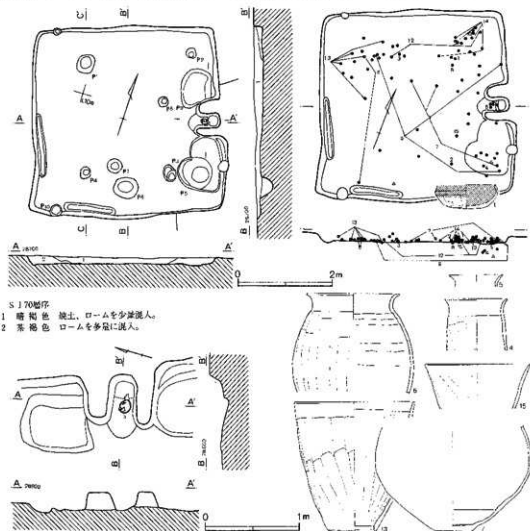


第220図 第69号住居跡出土遺物(2)

24	2	类	(7.8)			G	A	鈍い褐色	5%	覆土	一括.61.62
25	20	类	(20.0)			Ha·U·W·B·G	A	橙 色	10%	覆土	20
26	32	小型壺	(18.8)	(6.3)	(19.8)	W·B·K·R·G	A	浅黄褐色	30%	覆土	18.一括
27	19	鉢	6.8	4.2	4.4	Ha·W·B·U·G	A	浅黄褐色	90%	覆土	60
29	29	壺	18.6	6.5	34.0	G	A	褐色	40%	覆土	一括.61
30	5	罎	(14.0)	(6.5)	30.4	G	A	鈍い赤褐色	40%	貯穴	63
31	31	壺	(19.2)			B·Ha·U·W·R	A	赤褐色	40%	覆土	8.10.13
32	3	瓶	22.8			G	A	橙 色	70%	覆土	一括22.26

第70号住居跡 (第221図)

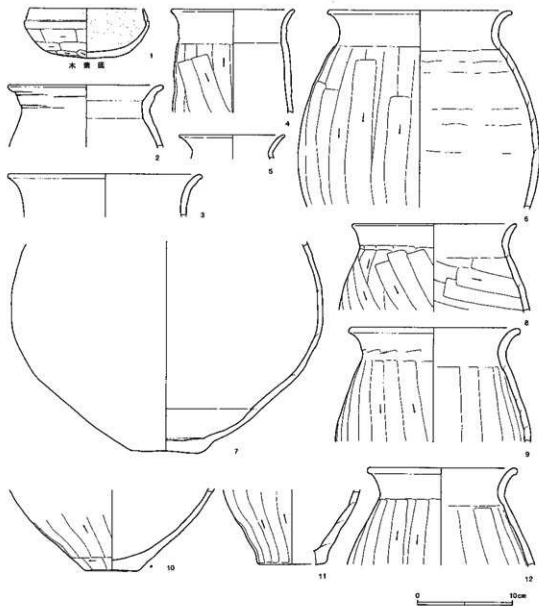
L-10 Grid に位置する。新山関係は東で71号住居跡に切られる。72号住居跡との関係は不明。形状は整った方形を呈する。規模は東西4.13m、南北4.05m、壁高20cmを測る。南西コーナーは若干突き出して変形している。主軸の示す方位はN-73°Eを指す。覆土はローム、焼土を混入する暗褐色土が主体である。カマドは東壁のほぼ中央にあり、煙道部は71号住居跡のピットにより破壊されている。袖部のみ良好に遺存。規模は両袖間の外側で0.78m、内側で0.23m、袖部の長さ0.55mを測る。燃焼面は2-3cmの浅い皿状を呈する。貯蔵穴はカマドの両側に認められる。北に位置するものは形状は南北に長軸をもつ不整形で、東西0.62m、南北0.86m、深さ8cmを測る。南に位置するものは南北に長軸をもつ隅丸長方形で、東西0.68m、南北1.13m、深さ10cmを測る。更に南半部には径0.75m、深さ43cmの円形の掘り込みが切っている。ピットは9ヶ所検出された。主柱穴はP1-P4で径30-40cm、深さ10-40cmを測る。壁溝は西および南壁下の一部に認められ、



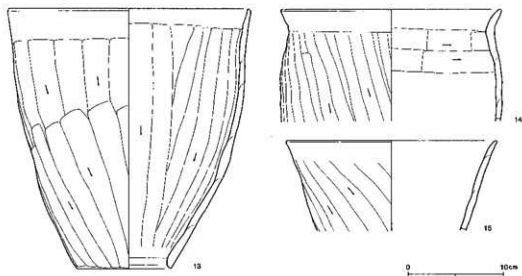
第221図 第70号住居跡・遺物分布・カマド

幅18cm、深さ8cmを測る。遺物は出土総数73点を数える。出土状態はカマド、貯蔵穴内の他P1、P2を中心に分布している。カマド内から小型甕(5)、貯蔵穴内から甕(9)、周辺からも1個体出土している。P1周辺の分布は甕2個体(6、13)を中心とする。いずれも床面直上の出土である。

出土遺物(第222・223図)坏は僅か1点で、圧倒的に甕の出土が顕著である。甕は2系統あり、長胴で肩部が若干張り直線的に底部に至る(4)と長胴で影りみの顕著な(6-12)がある。縦削りが基本であるが、斜位に施こされるもの、削りの後丁寧なナデが加わるもの(7)などがみられる。甕は口縁部の変化がなく、直線的に底部に至る(13、15)、口縁部が明確に「く」の字状に屈曲する(14)がある。



第222図 第70号住居跡出土遺物(1)



第223図 第70号住居跡出土遺物(2)

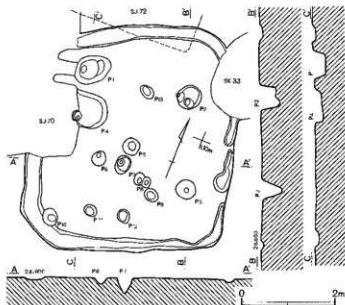
第70号住居跡遺物観察表 (第222・223図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重0	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	13	坏B	12.0		5.2		W・B・U・G	A	橙 色	70%	床直	31
02	4	罍	(16.0)				B・W・R・U・Ha	A	橙 色	10%	貯穴	5
03	7	罍	(12.0)				W・B・U・G	A	橙 色	10%	覆土	46
04	1	小型罍	13.2				Ha・U・W・B・G	A	橙 色	40%	覆土	66
05	2	小型罍	11.0				Ha・W・B・G	A	浅黄橙色	5%	カマド	73
06	6	罍	(19.0)				W・B・R・U・G	A	橙 色	30%	覆土	40,55
07	15	罍		7.0			G	A	明褐色	15%	覆土	2,30,44
08	3	罍	(17.0)				Ha・U・W・B・G	A	橙 色	10%	覆土	33
09	9	罍	(18.0)				W・B・U・G	A	橙 色	10%	貯穴	1,15,59
10	11	罍		5.6			W・B・Ha・U・G	A	橙 色	15%	覆土	20
11	10	罍		7.4			W・B・Ha・U・G	A	橙 色	10%	覆土	一拵
12	5	罍	(16.0)				W・B・U・G	A	赤橙色	20%	覆土	17,28,62
13	14	甗	25.3	9.8	27.2		G	A	黄褐色	60%	床直	42,47,51,53.
14	12	甗	(23.0)				W・B・U・G	A	黒褐色	40%	覆土	16,18,20,24
15	8	甗	(22.0)				W・B・U・G	A	浅黄橙色	10%	覆土	9

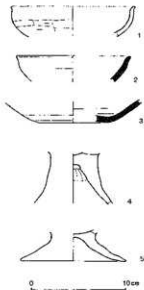
第71号住居跡 (第224図)

L・M-10・11 Gridに位置する。新旧関係は70号住居跡を切り、北東コーナーを29号土壌に切られる。72号住居跡との関係は不明。形状は隅丸方形を呈するものと思われる。規模は東西4.43m、南北4.76m、深さ3cmを測る。主軸の示す方位はN-23°-Eを指す。カマドは東壁中央に焼土、砂質粘土の分布が認められ、壁溝も一部寸断されることからその存在が想定される。貯蔵穴はない。ピットは13ヶ所が検出された。内主柱穴と思われるのはP1～P4で、東半部に位置するP2、P3は径45cm、深さ43cmを測るのに対し、西半部のP1、P2は規模的に貧弱で、配置も乱れており問題が残る。壁溝はカマド想定部分で途切れる他は全周する。規模は幅40cm、深さ6cmを測

る。遺物は総数20点と少なく、大半は図示可能な須恵器の小片であり、時期を決定する資料は乏しい。



第224図 第71号住居跡



第225図 第71号住居跡出土遺物

第71号住居跡遺物観察表 (第225図)

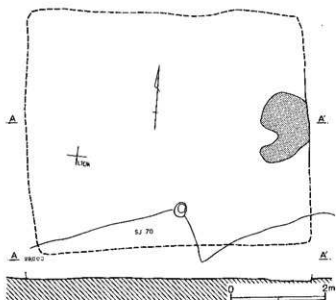
No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	坏E	(13.0)				W・B・U・G	A	赤褐色	30%	覆土	一括
02	3	須坏	(12.0)				Ha・B・W・G	A	灰色	5%	覆土	一括
03	1	須坏		(7.0)			G	A	灰色	5%	覆土	一括
04	4	高坏					W・B・U・G	A	鈍い褐色	30%	覆土	一括
05	5	高坏					W・B・U・G	A	褐色	30%	覆土	一括

第72号住居跡 (第226図)

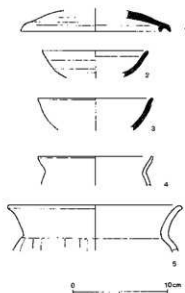
L-10 Gridに位置する。66・70・71号住居跡と重複するが新旧関係は不明。壁の大半は消失し、カマドが僅かにその痕跡を残している。推定される形状は東西に長軸をとる長方形で、規模は東西6.0m、南北5.0mが想定される。主軸の示す方位はN-85°-Eを指す。カマドは東壁のほぼ中央に位置し、粘土の分布から袖部の規模が推定できる。両袖間の幅1.40m、長さ1.04mを測る。壁外への掘り込みはない。焼成面は浅い皿状を呈する。貯蔵穴、壁溝は存在しない。ピットは南壁寄り1ヶ所検出されたが帰属不明。遺物は須恵器蓋、坏、甕の小片を中心に少量出土した。

第72号住居跡遺物観察表 (第227図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	須蓋	(15.8)				G	A	灰色	10%	覆土	覆土
02	1	須坏	(11.2)		(3.0)		G	A	鈍い赤褐色	10%	覆土	覆土
03	3	須坏	(12.0)				W・R・G	A	黄灰色	5%	カマド	一括
04	4	小型甕	(12.0)				W・B・U・G	A	褐色	5%	覆土	覆土
05	5	甕	(18.0)				Ha・W・B・U・G	A	褐色	5%	覆土	覆土



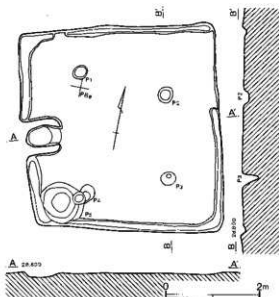
第226図 第72号住居跡



第227図 第72号住居跡出土遺物

### 第73号住居跡 (第228図)

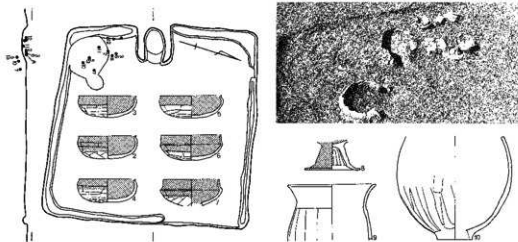
P-7・8 Gridに位置する。新旧関係はない。形状は整った方形を呈する。規模は東西4.22m、南北4.31m、壁高5cmを測る。主軸の示す方位はN-76°-Eを指す。覆土は焼土を少量混入した黒褐色土が上体である。カマドは西壁のほぼ中央にあり、袖部を良好に遺存する。各部位の規模は両袖間外側で0.80m、内側で0.36m、袖部の長さ0.75mを測る。壁外へは掘り込まず、壁体をそのまま使用。燃焼部は東西0.75m、南北0.55m、深さ10cm程の楕円形の浅い皿状を呈する。貯蔵穴は



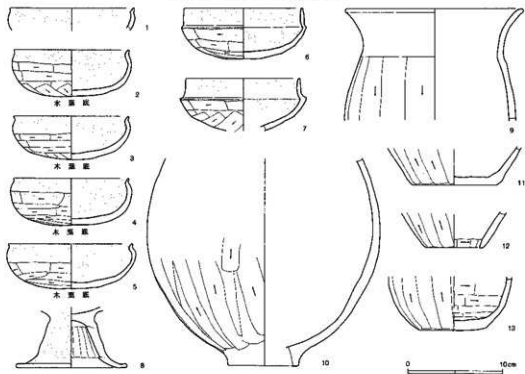
第228図 第73号住居跡

南西コーナーにあり、形状は円形、途中段をもつて掘り込まれている。規模は東西0.90m、南北0.84m、深さ34cmを測る。ピットは支柱穴4ヶ所だけが検出された。規模は径35cm、深さ10~33cmを測る。P4は貯蔵穴と重複している。壁溝はカマド部の他東壁北半部を除く全ての壁下を巡る。規模は幅14~28cm、深さ10cmを測る。遺物は貯蔵穴内およびその周囲から集中して検出された。甕、小型甕は貯蔵穴内、坏類はその周囲から出土している。

出土遺物(第230図)坏は輪タイプが主体で模倣坏の典型例は認められない。甕は長胴が基本で、やや影みの強い(10)も認められる。



第229図 第73号住居跡遺物分布



第230図 第73号住居跡出土遺物

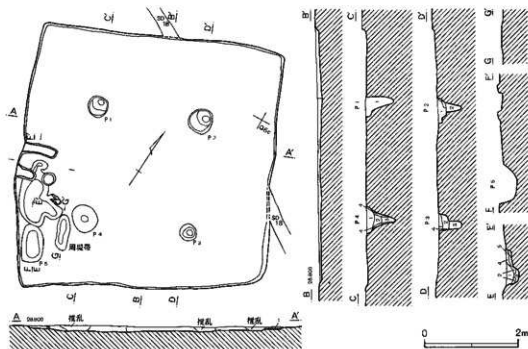
第73号住居跡遺物観察表 (第230図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	3	坏A	(13.0)				W・B・U・G	A	赤棕色	10%	覆土	一括
02	6	坏A	12.0		4.9		W・B・U・G	A	橙 色	70%	覆土	3
03	4	坏A	12.4		4.5	170	W・B・C・G	A	鈍い橙色	完形	床面	5
04	7	坏A	12.4		4.9		W・R・B・G	A	橙 色	60%	覆土	一括
05	5	坏A	13.0		4.6	176	W・B・C・G	A	橙 色	90%	貯穴	10

06	2	坏B	12.4		5.3	187	W・B・U・G	A	赤棕色	完形	床底	5
07	1	坏B	12.0				W・B・U・G	A	浅黄棕色	40%	貯穴	9
08	11	高坏		11.6			W・B・G	A	赤棕色	40%	貯穴	4
09	9	差	18.4				W・B・U・G	A	橙 色	40%	貯穴	
10	13	差		7.5			W・R・B・Ha・G	A	橙褐色	30%	貯穴	1
11	10	差		(9.0)			W・B・Ha・U・G	B	暗褐色	40%	貯穴	2
12	8	小型差		(6.0)			W・B・Ha・U・G	A	褐灰色	5%	覆土	8
13	12	小型差		7.2			S・W・B・U・Ha	B	橙 色	20%	覆土	10

### 第74号住居跡 (第231図)

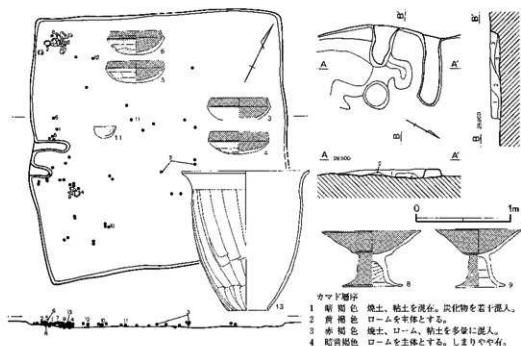
P・Q-6 Gridに位置する。本跡は集落内の最も西に存在するとともに南限でもある。新旧関係は18号溝跡に切られる。形状は整った方形を呈する。規模は東西5.39m、南北5.38m、壁溝は12cmを測る主軸の示す方位はN-60°-Eを指す。覆土はローム、焼土、炭化物を多量に混入する黒褐色土が主体である。カマドは西壁のほぼ中央にあり、袖部を比較的良好に遺存する。各部位の規模は両袖間の外側で0.76m、内側で0.41m、袖部の長さ0.94mを測る。壁外への掘り込みはない。燃焼部はフラットで床面と同レベルを示し、焚き口部には東西0.65m、南北0.50m、深さ



- S J74層序
- 1 黒褐色 ローム、炭化物、焼土を混在。しまり弱く粘性なし。
- ピット層序
- P 1 1 暗黒褐色 しまり弱く若干の焼土、ロームを混入。  
 2 暗黒褐色 若干の焼土、ロームを混在。しまりやや弱い。  
 3 暗黒褐色 しまり弱く若干の焼土、ロームを混入。  
 P 2 1 暗褐色 若干の焼土、ロームを混在。しまりやや弱い。  
 2 暗褐色 1層に比べロームがやや多く、ロームを混在。  
 3 暗黒褐色 しまり弱く若干の焼土、ロームを混入。  
 4 暗黒褐色 ローム、砂判を混入。
- P 4 1 暗褐色 若干の焼土、ロームを混在。しまりやや弱い。  
 2 暗褐色 1層に比べロームがやや多く、ロームを混在。  
 3 暗褐色 しまり弱く若干の焼土、ロームを混在。  
 4 暗黒褐色 ローム、砂判を混入。
- P 5 1 暗褐色 炭化物、焼土をやや多く混入。しまり弱い。  
 (貯) 2 暗褐色 ロームを多量に混入。しまり粘性有。  
 3 暗黒褐色 2層に比べ暗褐色土を多く含み、炭化物、焼土、ロームを混在。  
 4 暗褐色 1層に比べロームを多量に混入。  
 5 暗褐色 ぬめり弱く、しまりやや弱。粘性なし。(土山?)

第231図 第74号住居跡





第232図 第74号住居跡遺物分布・カマド

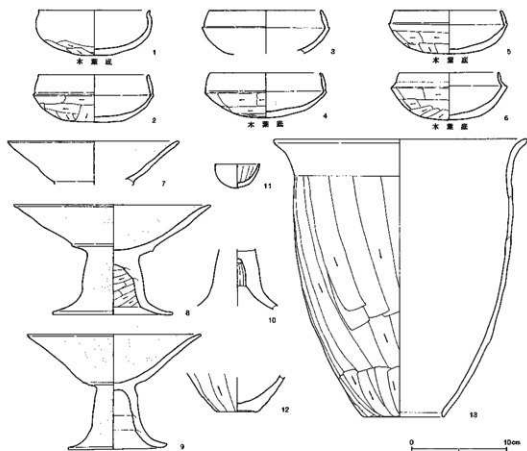
15cm程の楕円形プランを呈する掘り込みが存在する。貯蔵穴は南コーナーにあり、形状は楕円形で西にテラスをもつ。規模は東西0.45m、南北0.80m、深さ30cmを有する。貯蔵穴の周囲には所謂周堤帯が存在する。ピットは支柱穴4ヶ所が存在する。遺存状態が悪いため規模を推定すると、幅30cm、高さ5cm、東西1.15m、南北1.85mの範囲が考えられる。支柱穴の規模は径35-57cm、深さ50-60cmを測る。壁溝はカマド部を除く各壁下を巡る。幅25cm、深さ5cmを測る。出土遺物は総数56点を数える。主にカマドの北側と貯蔵穴周辺、西コーナーに集中している。カマド脇には坏3点(1、5、6)、貯蔵穴周辺には高坏2点(10、13)、坏1点(4)、小型壺1点(12)が、西コーナーには坏1点(2)、高坏2点(7、8)、甑1点(13)が出土している。

出土遺物(第233図)坏は碗タイプは1点と少ない反面、典型的な横做坏の出土もない。全て赤彩を施す。高坏は直線的に大きく開き、下端に段を設ける坏部をやや長胴で裾部が急に開く脚部がのせている。全て赤彩を施す。甑は口縁部が緩やかに外傾、緩やかにすばまり底部に至る大型品である。

第74号住居跡遺物観察表(第233図)

No	測	器種	口径	底径	高さ	重g	胎土	構成	色調	残存	位置	注記番号
01	3	坏A	11.8		4.7		W・B・G	A	鈍い橙色	80%	覆土	37
02	7	坏B	11.6		4.9		W・B・U・G	A	橙 色	80%	床直	52
03	5	坏B	(12.0)				W・B・G	A	明赤褐色	30%	覆土	13, 15
04	1	坏B	11.8		4.7	195	W・B・G	A	橙 色	完形	床直	56
05	6	坏B	11.2		4.5		W・B・U・G	A	鈍い橙色	80%	覆土	36
06	4	坏B	10.6		4.9	186	W・B・U・S・G	A	浅黄橙色	完形	床直	38

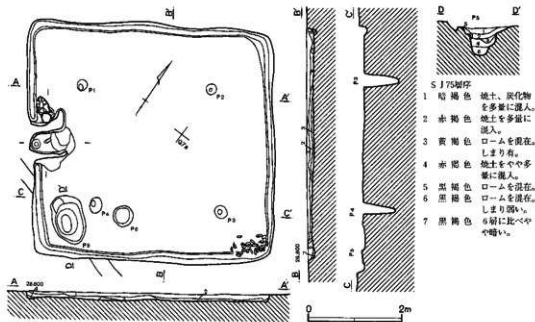
07	8	高坏	(18.0)			W・B・U・G	A	淡棕色	15%	床直	51
08	11	高坏	20.8	12.8	11.5	W・B・U・G	A	明赤褐色	60%	床直	50
09	13	高坏		10.4	12.1	G	A	明赤褐色	60%	床直	55
10	10	高坏				W・R・B・G	A	橙 色	25%	覆土	20
11	2	椀	4.6		2.5	U・W・Ha・G	A	橙 色	90%	覆土	6
12	9	小型甕		4.2		W・R・B・U・G	B	淡棕色	25%	覆土	2
13	12	甕		8.4	29.0	G	A	明赤褐色	60%	覆土	49



第233図 第74号住居跡出土遺物

#### 第75号住居跡 (第234図)

P・Q-6・7 Gridに位置する。新旧関係は南コーナーを18号溝跡に切られる。平面形は整った方形を呈する。規模は東西5.26m、南北5.02m、壁高14cmを測る。主軸の示す方位はN-55°-Eを指す。覆土は焼土、炭化物を多量に含む暗褐色土、赤褐色土が主体で礫層ほど顕著である。カマドは西壁のほぼ中央にあり、袖部の遺存は良い。袖部の規模は外側で0.95m、内側で0.40m、長さ0.70mを測る。焚き口は径50cm、深さ10cm程の円形の掘り込みを呈する。壁外への掘り込みはない。貯蔵穴は南コーナーにあり、形状は楕円形で北にテラスをもち、途中稜をもって底部に至る。規模規模は東西1.06m、南北0.70m、深さ59cmを測る。ピットは5ヶ所検出された。内P1-P4

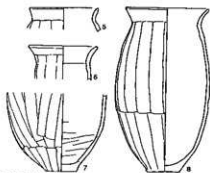


5 J75層序

- 1 暗褐色 焼土、炭化物を多量に混入。焼土を多量に混入。
- 2 赤褐色 ロームを混在。しまり有。
- 3 黄褐色 焼土をやや多量に混入。
- 4 赤褐色 ロームを混在。しまり強い。
- 5 黒褐色 ロームを混在。しまり強い。
- 6 黒褐色 6層に比べやや暗い。
- 7 黒褐色 6層に比べやや暗い。

ピット層序

- P5 1 赤褐色 焼土、炭化物を多量に混入し、しまり強い。
- (野) 2 暗褐色 1層に比べロームを多量に混入。
- 3 暗褐色 2層より暗くロームを若干混入。
- 4 黄褐色 ロームを混在。
- 5 黄褐色 ロームを混入。
- 6 黄褐色 ローム、砂粒子を混在。しまり強い。



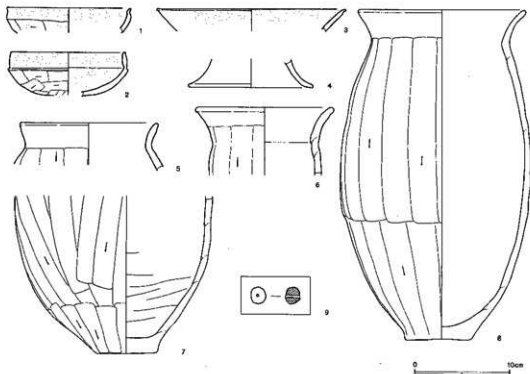
第234図 第75号住居跡・遺物分布

が主柱穴で形状は円形、規模は径25～35cm、深さ55～75cmを測る。壁溝はカマド部を除く各壁下を幅26cm、深さ5cmで巡る。遺物は出土総数113点を数える。カマド内の中央には土製支脚がほぼ使用時の状態で出土した他、カマドの北に小型甕(7)が横転して出土している。東コーナー周辺には長さ15cm、幅5cm程の河原石が27個集中して出土した。特に土器が集中して出土する箇所はなく散漫な分布といえる。

出土遺物(第236図)坯は模倣坯の典型例はみられず、赤彩を施した椀タイプが主体と思われる。甕は長胴で器壁が厚い。篋削りの後ナデが縦位に加わる。土製丸玉(9)は径0.95×0.80×0.70cmを測り、径1mmの穿孔がある。



第235図 第75号住居跡カマド



第236図 第75号住居跡出土遺物

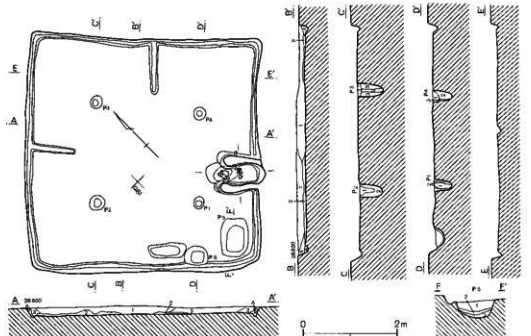
第75号住居跡遺物観察表 (第236図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	坏A	(13.0)				W・B・U・G	A	赤褐色	10%	覆土	4.5.28
02	1	坏B	(12.0)				W・B・U・G	A	赤褐色	20%	野穴	61
03	3	高坏	(20.0)				W・B・U・G	A	鈍い棕色	5%	覆土	一括
04	4	高坏	(13.0)				W・B・U・G	A	赤褐色	10%	カマド	一括

05	6	小形瓦	(14.0)						Ha・U・W・B・G	A	橙 色	5%	貯穴	75.79
06	5	小形瓦	(14.0)						W・R・U・G	A	橙 色	10%	覆土	50
07	7	瓦		6.5					G	A	明赤褐色	40%	カマド	83.84
08	8	瓦	17.6	7.0	34.4				G	A	明赤褐色	95%	床直	84
09	9	上装土							S・U・R・B・G	A	赤褐色	5%	覆土	40

### 第76号住居跡 (第237図)

Q-7・8 Gridに位置する。集落の最も南に位置し、桑原遺跡(集落)の南限を画すると考えられる23号溝まで2mの距離にある。新旧関係はない。形状は整った方形を呈する。規模は東西4.85m、南北5.00m、壁高20cmを測る。主軸の示す方位はN-46°-Eを指す。覆土は焼土、炭化物を多量に含む暗褐色土、暗黒褐色土が主体である。カマドは南東壁のやや西寄りであり、袖部は良好に遺存する。袖部の規模は外側で0.90m、内側で0.42m、長さ0.97mを測る。煙道の壁外への掘り込みは12cmを測る。焚き口部は径45×70cm、深さ20cm程の楕円形の掘り込みを有する。貯蔵穴は南コーナーにあり、形状は略長方形、規模は東西0.79m、南北0.59m、深さ34cmを測る。主柱穴は東西1.9~2.0m、南北2.2mの等距離に配されている。規模は径30cm、深さ40~52cmを測る。北



#### S 76層序

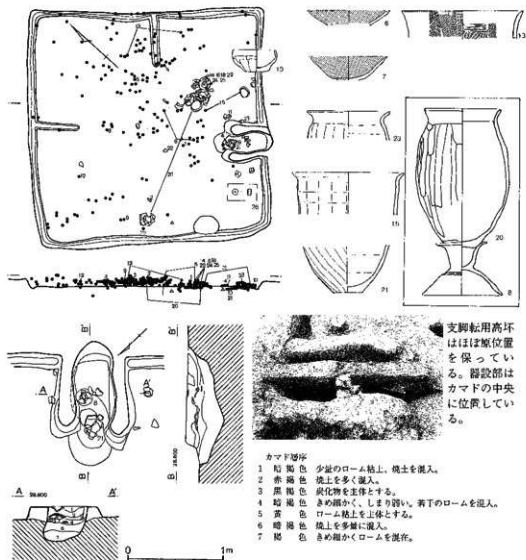
- 1 暗褐色 焼土、炭化物を含みロームを均一に混入。しまりやや弱い。
- 2 暗黒褐色 ローム(径2~3cm)を混在。しまりやや有。
- 3 暗黒褐色 しまり弱く、黒褐色土を主体とする。
- 4 黄褐色 ロームを主体とする。
- 5 暗褐色 焼土、炭化物をやや多く混入。
- 6 暗褐色 4層と近縁する。しまり有。
- 7 暗褐色 1層よりやや強い。若干の焼土、炭化物を混在。

#### ピット層序

- 1 暗褐色 色の細かくしまり弱い。ロームを混在。(柱穴)
- 2 暗褐色 ローム、砂粒子を含みしまり有。

- P 2 1 暗褐色 色の細かくしまり弱い。ロームを混在。(柱穴)
- 2 暗褐色 ローム、砂粒子を含みしまり有。
- P 3 1 暗褐色 ローム、焼土を若干含みしまり有。
- 2 暗褐色 色の細かくしまり弱い。ロームを混在。(柱穴)
- 3 暗褐色 ローム、砂粒子を含みしまり有。
- P 4 1 暗褐色 ローム、焼土を若干含みしまり有。
- 2 暗褐色 色の細かくしまり弱い。ロームを混在。(柱穴)
- 3 暗褐色 ローム、砂粒子を含みしまり有。
- P 5 1 暗褐色 焼土を若干混入。しまり弱い。(貯)
- 2 暗褐色 1層に比べしまり弱く強い。
- 3 暗褐色 ロームを若干多く混入。

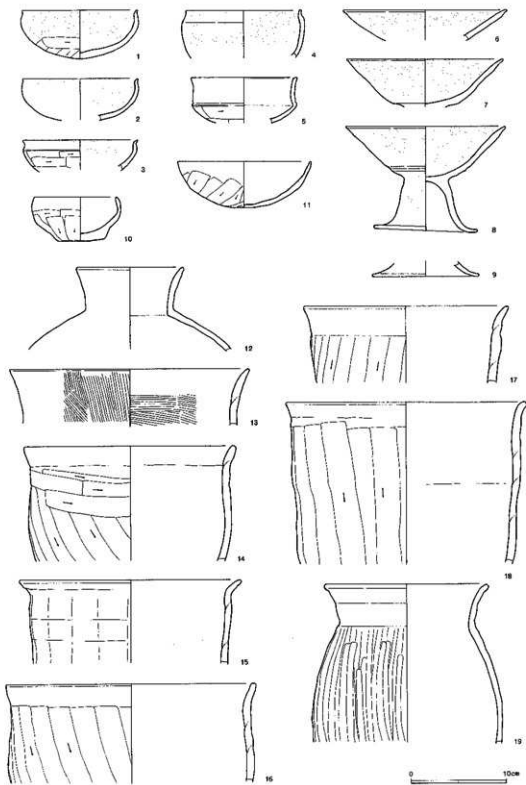
第237図 第76号住居跡



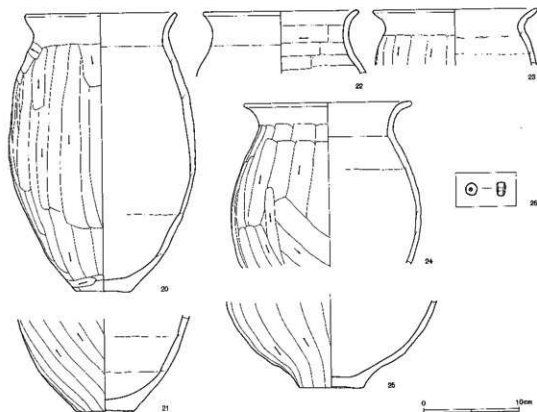
第238図 第76号住居跡遺物分布・カマド

東壁と北西壁のほぼ中央から住居の中央に向かい垂直に所謂間仕切り溝が認められる。規模は幅14cm、長さ1.04m、深さ10cmを測る。遺物は総数172点を数える。カマド内から高坏(2、24)、甕(19、20)、カマドの北側から壺(25)を含む多量の土器が集中して出土している。

出土遺物(第239・240図)坏は碗タイプ(1、2)が主体を占めると思われるが組成の碗(11)、模倣坏(5)も含まれている。高坏は大きく直線的に開き、下端に段を有する坏部をやや長脚の脚部がのせている。全て赤彩がみられる。甕は長胴が主体、整形は縦位の施削りが人勢を占めるが、(19)は磨きに近い丁寧な縦位の笊ナデが加わる。



第239图 第76号住居跡出土遺物(1)



第240图 第76号住居跡出土遺物(2)

第76号住居跡遺物觀察表 (第239・240図)

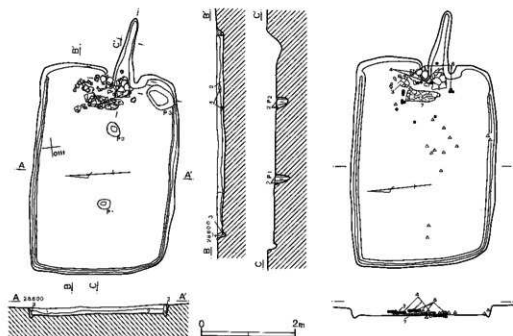
No	測	器種	口径	底径	高さ	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	7	坏A	12.2		5.1		W・B・U・G	A	橙 色	60%	覆土	76
02	3	坏A	(12.0)				W・B・U・G	A	橙 色	30%	覆土	23
03	5	坏A	(12.0)				W・B・G	A	赤褐色	20%	覆土	29
04	4	坏A	(12.0)				W・B・G	A	鈍い褐色	10%	覆土	105
05	6	坏C	(11.2)				W・B・G	A	黄棕色	20%	覆土	56
06	9	高坏	(17.0)				W・R・U・G	A	橙 色	15%	覆土	72.77
07	2	高坏	16.4				W・R・G	A	赤褐色	35%	カマド	一括
08	24	高坏	16.8		10.9	414	G	A	水色	95%	カマド	
09	10	高坏		(11.0)			W・B・U・K・G	A	橙 色	10%	覆土	18
10	8	坏F	7.6	4.8	4.6	132	W・B・U・Ha・G	B	褐灰色	90%	覆土	149
11	1	坏D	14.0		4.9	150	B・W・K・Ha・U	B	淡褐色	90%	床直	151
12	14	壺	11.0				Ha・U・W・K・G	A	赤棕色	20%	床直	155
13	18	瓶	(25.0)				Ha・U・W・B・G	A	橙 色	5%	覆土	124.137
14	12	瓶	(22.4)				K・W・R・U・G	A	橙 色	20%	床直	156
15	16	瓶	23.4				W・B・U・G	A	橙 色	30%	覆土	150.153
16	17	瓶	(26.0)				W・B・U・G	A	浅黄褐色	20%	覆土	156
17	22	瓶	(11.6)				Ha・U・W・B・G	A	鈍い褐色	20%	覆土	73
18	11	瓶	(25.0)				K・Ha・U・W・B	A	浅黄褐色	30%	床直	156
19	13	罍	16.2				W・B・U・Ha・k	A	橙 色	20%	覆土	164



20	25	査	16.0	6.0	29.1	G	A	赤褐色	90%	床直	154.156
21	20	査		6.0		Ha·W·H·K·G	B	赤褐色	20%	カマド	164
22	15	査	(16.0)			W·B·U·Ila·G	A	棕色	10%	覆土	156
23	19	査	(17.0)			Ha·U·W·B·G	A	鈍い黄褐色	10%	カマド	167
24	26	査	17.7			G	A	明褐色	20%	床直	156
25	23	査		6.8		Ha·U·W·B·G	A	棕色	30%	床直	156

### 第77号住居跡 (第241図)

O-11 Grid に位置する。新旧関係はない。形状は東西を長軸にとる隅丸長方形プランを呈する。規模は東西4.41m、南北3.08m、壁高14cmを測る。主軸の示す方位はN-102°-Eを指す。覆土はローム・ブロック、焼土を多量に混入する暗褐色土が主体である。カマドは東壁のほぼ中央にあり、袖部は良好に遺存する。袖部の規模は両袖間の外側で0.82m、内側で0.32m、長さ0.4mを測る。煙道部の壁外への掘り込みは1.15mである。燃燒部は径60cm、深さ8cm程の浅い皿状を呈する。煙道寄りに径17cm、深さ8cm程の小ピットを穿ち、長さ26cm、幅7cm程の自然石を樹立させ支脚として使用している。主柱穴はP1、P2の2本が該当する。長軸線に沿って設けられており。断面に明瞭な柱痕を残す。貯蔵穴は南東コーナーにあり、形状は不整形、規模は東西0.62m、南北0.42m、深さ19cmを測る。壁溝はカマド部分を除く各壁下を幅15cm、深さ5cm程で巡る。遺物の



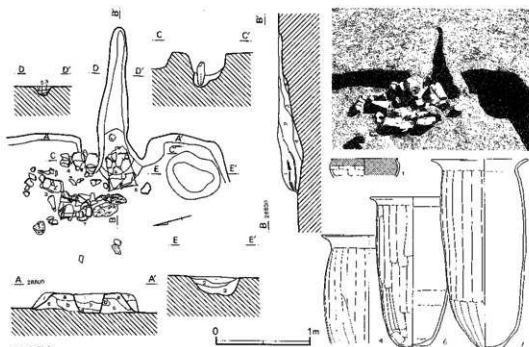
#### S J 77号序

- 1 暗褐色 ローム、焼土を少量混入。
- 2 棕色 ロームを多量に、焼土を少量混入。
- 3 暗褐色 ロームを少量混入。(檜板材の痕跡有)
- 4 暗褐色 粘土ブロックである。

#### ピット層序

- P1 1 暗褐色 ローム、焼土を少量混入。
- 2 暗褐色 (ローム主体)
- P2 1 暗褐色 ローム、焼土を少量混入。
- 2 暗褐色 (ローム主体)

第241図 第77号住居跡・遺物分布



カマド型序

- 1 黒褐色 焼土、褐色粘土を少量混入。
- 2 暗黄褐色 焼土ブロック、褐色粘土を多量に混入。
- 3 暗黒褐色 焼土、褐色粘土を少量混入。
- 4 黒褐色 焼土、炭化物を少量混入。
- 5 暗褐色 焼土を少量混入。
- 6 暗灰褐色 粘土ブロック
- 7 暗褐色 ロームを少量混入。

- 8 黒褐色 ロームを少量混入。
  - a 黒褐色 暗灰褐色粘土ブロック、粘土を少量混入。
  - b 暗赤褐色 焼土、炭化物を多量に混入。
  - c 暗灰褐色粘土 暗褐色土を少量混入。
- 貯蔵穴形状  
3 暗赤褐色 ロームを多量に混入。

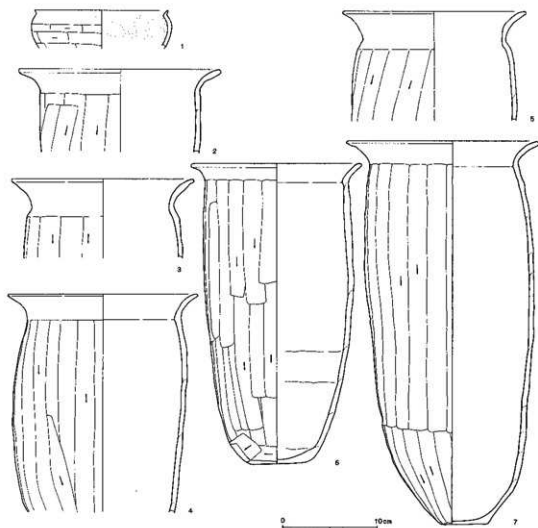
第242図 第77号住居跡カマド

出土総数は17点を数える。北カマドの芯袖材として甕(5)が逆位で出土している他正面から甕が3個体(3、6、7)が出土している。

出土遺物(第243図)甕は全て長胴で口縁は強く外反する。肩部は縦位の発削りにより強い稜をもつ。(7)は発削り後ナデが加わる。

第77号住居跡遺物観察表(第243図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	4	坏A	(14.0)				W・U・B・G	A	赤褐色	10%	覆土	一拵
02	2	甕	(21.0)				S・Ra・U・W・B	A	橙褐色	20%	覆土	一拵
03	1	甕	(19.0)				IIa・U・W・B・G	A	橙褐色	15%	覆土	10
04	7	甕	20.0				G	A	明褐色	60%	床直	2.6.7.8
05	3	甕	(19.0)				Ha・U・W・B・G	A	橙褐色	10%	カマド	一拵
06	5	甕		5.6	31.4		G	A	橙褐色	50%	床直	2.1.5.6
07	6	甕	20.2	5.0	39.9		G	A	橙褐色	75%	床直	一拵

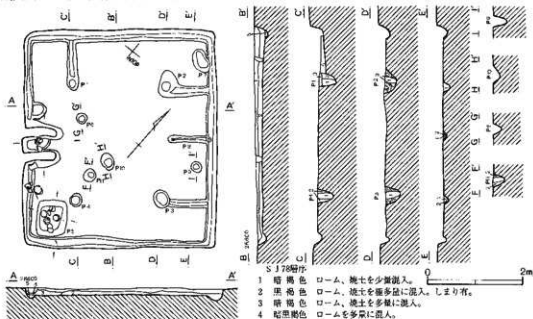


第243図 第77号住居跡出土遺物

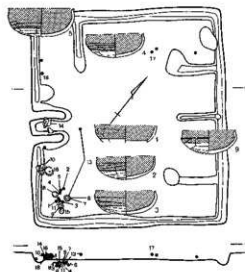
第78号住居跡 (第244図)

N・O-11 Grid に位置する。新旧関係はない。形状は東西に長軸をとる方形を呈する規模は東西4.11m、南北4.54m、深さ16cmを測る。主軸の示す方位はN-49°-Eを指す。覆土はローム、焼土を多量に混入する黒褐色土が薄く床面全体を覆い、その上を暗褐色土が被覆する。カマドは西壁のほぼ中央にあり、袖部の遺存は良好である。袖部の規模は外側で0.93m、内側で0.24m、長さ0.85mを測る。壁外への掘り込みはない。然焼面は径50cm、深さ10cm程の浅い皿状を呈する。貯蔵穴は北コーナーにあり、形状は長方形、規模は東西0.76m、南北0.64m、深さ27cmを測る。ピットは10ヶ所検出され、P1-P4が主柱穴である。主柱穴の規模は径30~60cm、深さ20~45cmを測る。P2-P4およびP2・P3間、つまり北西壁1、北東壁に3本の間仕切り溝がそれぞれの壁から設けられている。規模は幅15cm、深さ平均8cm、長さ0.8mを測る。壁溝はカマド部分を除く各壁下を幅28cm、深さ10cm程で巡る。遺物は出土総数30点と少ないが、カマド内、貯蔵穴から完形

もしくは図示可能な土器を多数検出した。カマド内からは支脚転用の高杯 (14) と小型壺 (17)、貯蔵穴内から坏10個体、高杯 (15) が、カマドと貯蔵穴間に坏2個体が床直で出土している。



- S 178層序
- 1 暗褐色 ローム、焼土を少量混入。
  - 2 黒褐色 ローム、焼土を多量に混入。しまり有。
  - 3 暗褐色 ローム、焼土を多量に混入。
  - 4 暗黒褐色 ロームを多量に混入。



貯蔵穴内に落下した日常雑器、坏10個体、高杯1個体が出土した。

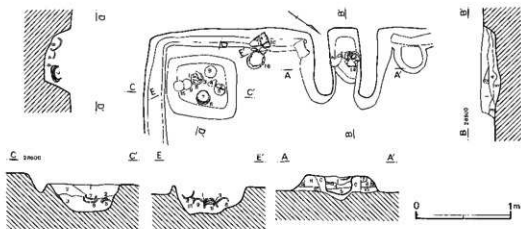


ピット層序

- P 1
- 1 黒褐色 ロームを少量混入。(柱間)
  - 2 暗褐色 ロームを少量に混入。
  - 3 暗灰褐色 ロームを少量に混入。
  - 4 暗灰褐色 ロームを少量に混入。
- P 2
- 1 黒褐色 ロームを少量混入。
  - 2 暗褐色 ロームを多量混入。
  - 3 暗褐色 ロームを少量混入。
  - 4 ハードローム・ブロック
- P 3
- 1 黒褐色 ロームを少量混入。
  - 2 暗褐色 ロームを多量に混入。

- P 4
- 1 暗褐色 ロームを少量混入。(柱間)
  - 2 暗褐色 ロームを多量に混入。
- P 6
- 1 黒褐色 焼土、ロームを多量に混入。カマド右側に設置する。掘り込みの浅いピットである。
- P 7
- 1 暗灰褐色 ロームを少量混入。粘性石。
- P 10
- 1 暗灰褐色 ロームを混入。
- P 11
- 1 暗灰褐色 ロームを少量混入。
  - 2 暗褐色 ロームを多量に混入。

第244図 第78号住居跡・遺物分布



貯蔵穴番号

- 1 暗褐色 ローム、焼土、炭化物を少量混入。
- 2 暗褐色 ローム、焼土を少量混入。
- 3 暗黒褐色 ローム、焼土を少量混入。

カマド層序

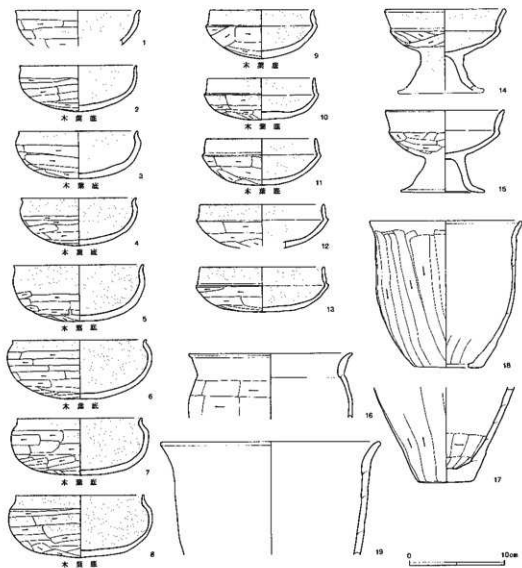
- 1 暗褐色 焼土ブロック、灰褐色粘土ブロックを多量に混入。
- 2 赤褐色 焼土ブロックが主体である。
- 3 暗黒褐色 ロームを多量に混入。
- 4 暗褐色 焼土ブロック、炭化物を多量に混入。
- 5 黒褐色 焼土、ロームを多量に混入。
- 6 暗褐色 焼土を多量に混入。
- 7 赤褐色 焼土ブロックを主体とする。
- 8 黄褐色 粘土を主体とする。
- 9 暗褐色 焼土を若干混入。
- 10 黒褐色 焼土、炭化物を若干混入。

第245図 第78号住居跡カマド・貯蔵穴

出土遺物（第246図）坏は純タイプが主流で典型的な模倣坏は含まない。全て赤彩が施こされる。高坏は坏部に模倣坏をのせるが、全体的にシャープさに欠ける。瓶は（18、19）共、口縁部の外反は弱い。

第78号住居跡遺物観察表（第246図）

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	8	坏A	(13.0)				W-R-U-G	A	赤褐色	20%	貯穴	4
02	5	坏A	12.4		4.8	190	W-R-R-U-G	A	褐色	定形	貯穴	10
03	7	坏A	12.6		4.9	211	B-W-U-G	A	赤褐色	定形	貯穴	5
04	6	坏A	12.2		4.9	204	W-B-U-G	A	赤褐色	定形	貯穴	8
05	4	坏A	13.6		5.9	300	W-B-U-G	A	褐色	定形	貯穴	8.9
06	2	坏A	14.2		6.2	354	W-B-U-G	A	鈍い褐色	90%	貯穴	13
07	3	坏A	13.2		5.9	290	W-B-U-G	A	赤褐色	変形	貯穴	11
08	1	坏A	13.4		6.4	316	W-U-U-G	A	赤褐色	定形	貯穴	7
09	10	坏B	11.0		5.1	210	W-B-U-G	A	藍色	定形	貯穴	2
10	12	坏B	11.4		4.4	160	W-B-U-G	A	浅黄褐色	定形	覆土	15
11	11	坏B	11.6		4.8	176	W-U-U-G	A	藍色	定形	貯穴	6
12	9	坏B	(13.0)				W-R-U-G	A	褐色	30%	覆土	一括
13	13	坏B	(13.0)	(4.6)			W-R-U-G	A	赤褐色	30%	覆土	11, 17
14	17	高坏	12.7				G	A	赤褐色	85%	カマド	28
15	18	高坏	12.5		8.6		G	A	明赤褐色	80%	貯穴	1
16	14	小型罌	(17.4)				W-B-U-G	A	赤褐色	10%	覆土	14
17	16	小型罌		3.8			U-W-B-G	B	淡褐色	5%	カマド	20
18	19	小型瓶		6.8	15.3		G	A	藍色	70%	覆土	一括18
19	15	瓶	(23.5)				U-W-R-G	A	藍色	30%	覆土	一括



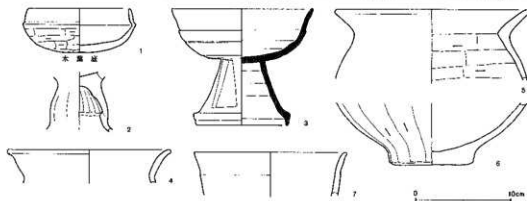
第246図 第78号住居跡出土遺物

第79号住居跡 (第247図)

N-8・9 Gridに位置する。新旧関係はない。形状は隅丸方形を呈する。規模は東西4.20m、南北4.53m、壁高17cmを測る。主軸の示す方位はN-80°-Eを指す。覆土はローム、焼土を多量に混入する暗灰褐色土が主体を占めるが、床面には焼土、炭化物の分布が密である。カマドは西壁のほぼ中央にあり、袖部は良好に遺存。壁外への掘り込みはない。燃焼面は径70cm、深さ7cm程の浅い円形の掘り型を有する。袖部の規模は両袖間外側で1.03m、内側で0.48m、長さ0.66mを測る。貯蔵穴は南西コーナーにあり、形状は楕円形で中間にテラスをもち二段に掘り込まれている。規模は東西0.96m、南北0.78m、深さ21cmを測る。ピットは主柱穴が4ヶ所検出された。規模は径30-35cm、深さ10-40cmを測る。壁溝は存在しない。遺物は出土総数7点と少なく、カマド、貯蔵



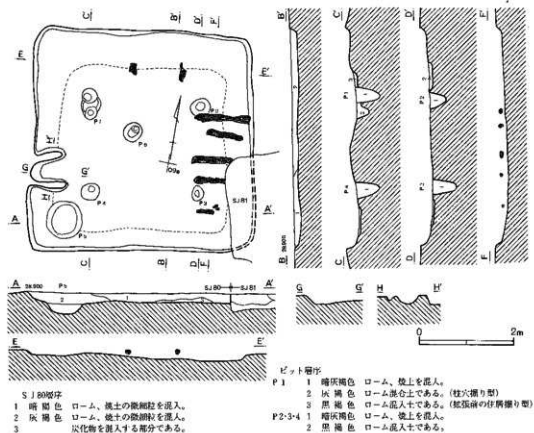
06	6	炭		8.4		W・B・U・G	A	鈍い藍色	5%	野穴	1
07	5	小型瓶 (16.0)				Ha・U・W・R・G	A	緑色	5%	覆土	1 一拵



第249図 第79号住居跡出土遺物

第80号住居跡 (第250図)

O-8・9 Gridに位置する。新旧関係は南東コーナーを81号住居跡に切られる。形状は整った隅丸方形を呈する。規模は東西4.66m、南北4.64m、壁高20cmを測る。主軸の示す方位はN-81°

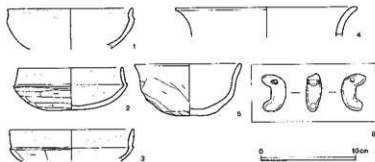


第250図 第80号住居跡



-Eを指す。覆土は壁際を中心に焼土ブロック炭化物(材)を多量に混入する灰褐色が環状に堆積し、その上に暗褐色土が被覆する。カマドは西壁の南寄りにあり、袖部は良好に遺存する。袖部の規模は外側で0.92m、内側で0.40m、長さ0.82mを測る。壁外への掘り込み、燃焼部の掘り込みは認められない。貯蔵穴は南西コーナーにあり、形状はU形、規模は東西0.76m、南北0.74m、深さ21cmを測る。ピットは5ヶ所検出され、内主柱穴はP1～P4でP1は建て替えがおこなわれている。主柱穴間の距離は東四間で2.2m、南北間で1.9mを測り整然とした方形区画を形成している。柱穴と壁の間隔は北壁間で1.2m、南壁間で0.95mを測り、南に寄せて建てられている。床面は壁際0.8mの幅で明確な硬度差が生じている。内区の硬い床面の範囲は東西3.8m、南北3.4mの方形区画を形成している。壁溝は存在しない。炭化材と遺物の出土状態(第250図)東壁と北壁寄りにこぼし根太と考えられる炭化材が7ヶ所検出された。特に東壁側には5ヶ所が遺存している。全て5～10cm程床面から浮いて出土している。設置された範囲はカマドの全面を除く主柱穴間で結ばれた方形区画から壁際までと考えられる。用材は最大のもので長さ1.2m、幅17cm、厚さ10cmを測る。遺物は総数12点と少ない。

出土遺物(第251図) 坏は倣倣坏の典型例はない。土製白玉(6) 全長1.9cm、幅1.2cm、厚さ



0.8cmを計る。穿孔部の径は0.35×0.25cmである。焼成は良好で胎土に黒色粒子、雲母を含む、色調はにぶい橙色を呈する。

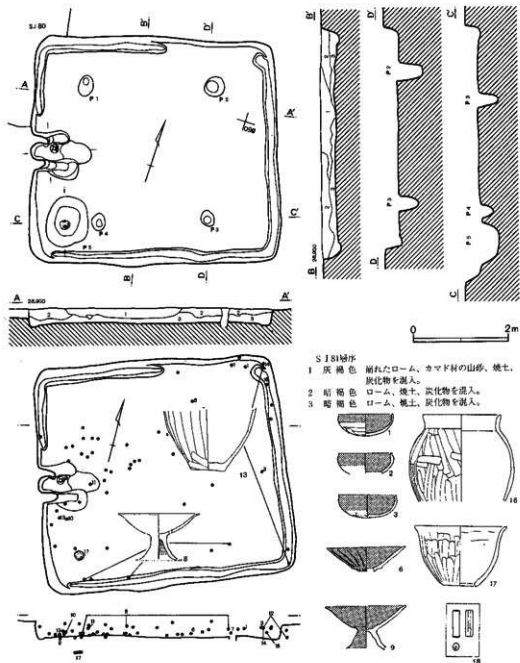
第251図 第80号住居跡出土遺物

第80号住居跡遺物観察表(第251図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	構成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	坏A	(13.0)				W・B・U・G	A	明赤褐色	20%	覆土	一括
02	2	坏B	(11.0)	(4.5)			W・B・U・G	A	赤褐色	30%	覆土	11
03	3	坏B	(13.0)				W・B・U・G	A	赤褐色	10%	覆土	一括
04	4	类	(19.0)				W・B・U・G	A	棕色	5%	覆土	一括
05	5	坏F	13.2		6.3	176	W・B・U・G	A	棕色		覆土	18

第81号住居跡(第252図)

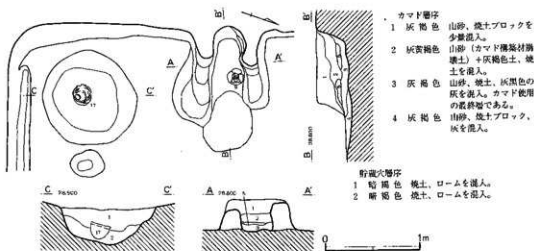
O-9 Gridに位置する。新旧関係は北西で80号住居跡を切る。形状は東西に長軸をとる整った方形を呈する。規模は東西5.37m、南北4.84m、壁高は34cmを測る。主軸の示す方位はN-71°-Eを指す。覆土は炭化物、焼土を多量に混入する暗褐色土が床面を薄く覆い、その上を灰褐色土が被覆する。カマドは西壁のほぼ中央にあり、袖部は良好に遺存する。袖部の規模は両袖間外側で0.92m、内側で0.36m、長さ0.83mを測る。壁外への掘り込みはない。焚き口部は径0.45×0.72m



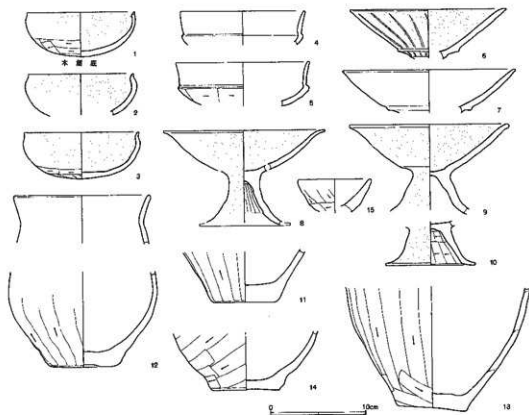
第252図 第81号住居跡・遺物分布

の浅い皿状を呈する。貯蔵穴は南西コーナーにあり、形状は不整形、規模は東西1.05m、南北0.88m、深さ36cmを測る。ピットは主柱穴4ヶ所が検出されている。規模は径35-45cm、深さ30-55cmを測る。柱穴間の距離はP1、P4間が3mと大きく、区画された内区の形状は台形を呈する。壁溝は北壁の東半部と西壁の南半部を除く壁下に幅35cm、深さ5cmで掘り込まれている。遺物は出土総数53点を数える。カマド内から高坏(9)と壺(11)が、貯蔵穴から小型甗(17)が出土している他、カマド周辺に主要な遺物が集中している。

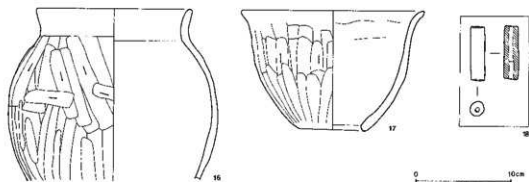
出土遺物（第254・255図）坏は碗形態が主体、高坏は直線的に大きく開き、下端で段をもつ坏部（6、9）と内傾きみで口辺部で急に開く（8）がある。甌は器高に比して口径が大きく、球形胴部で底部は急激にすまる。



第253図 第81号住居跡カマド・貯藏穴



第254図 第81号住居跡出土遺物(1)



第255図 第81号住居跡出土遺物(2)

第81号住居跡遺物観察表 (第254・255図)

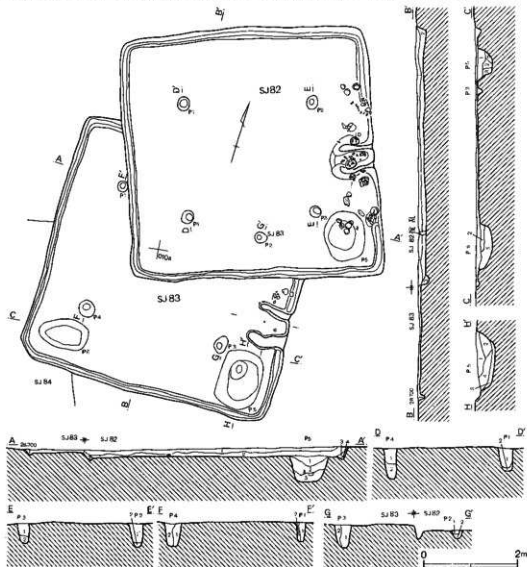
No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	坏A	11.4		4.6		W・B・U・G	A	浅黄棕色	70%	覆土	3
02	5	坏A	(11.0)				W・B・U・G	A	赤褐色	20%	覆土	一括
03	3	坏A	12.0		4.9		W・B・U・G	A	赤褐色	70%	覆土	14
04	6	坏B	(13.0)				W・B・U・G	A	橙 色	10%	覆土	一括
05	4	坏B	(14.0)				W・B・U・G	A	橙 色	20%	覆土	一括
06	10	高坏	16.4				B・W・U・G	A	赤褐色	35%	覆土	9
07	9	高坏	(18.0)				W・B・U・G	A	橙 色	15%	床直	5
08	8	高坏	17.4				Ha・U・W・B・G	A	橙 色	60%	覆土	18.21.24
09	17	高坏	16.8			370	G	A	赤褐色	90%	カマド	
10	7	高坏		9.4			W・B・U・G	A	鈍い橙色	40%	覆土	78
11	14	甕		6.8			W・B・U・G	A	橙 色	5%	カマド	32
12	12	小型甕	14.4	7.2			K・W・B・U・G	B	赤褐色	40%	覆土	2.17
13	16	甕		7.3			G	A	明赤褐色	20%	床直	一括.53
14	13	甕		7.0			W・B・U・G	B	鈍い橙色	5%	覆土	2
15	11	碗	( 7.4)				Ha・U・W・B・G	A	橙 色	40%	覆土	一括
16	15	甕	16.4				G	A	明赤褐色	40%	覆土	1
17	1	小型甕	19.0	6.8	12.4	710	G	A	鈍い橙色		貯穴	16

第82号住居跡 (第256図)

P・Q-9・10 Gridに位置する。新旧関係は南で83号住居跡を切っている。形状は整った方形を呈する。規模は東西5.33m、南北5.35m、壁高は15cmを測る。主軸の示す方位はN-70°-Eを指す。覆土は焼土、炭化物を多量に含む暗褐色土が主体である。カマドは東壁のほぼ中央にあり、袖部は良好に遺存する。袖部の規模は外側で0.78m、内側で0.32m、長さ0.95mを測る。壁外への掘り込みはない。燃焼面は0.90×0.65m、深さ6cmの浅い皿状を呈する。貯蔵穴は南東コーナーにあり、形状は楕円形、規模は東西1.05m、南北0.86m、深さ57cmを測る。ピットは支柱穴が4ヶ所検出された。規模は径30cm、深さ40-60cmを測る。柱穴間の距離は2.5-2.6mの等間隔に配されている。壁溝はカマドの周囲を除く各壁下を幅10-25cm、深さ10cmで巡る。出土遺物は総数175点を数える。出土状態はカマド内、貯蔵穴内とその周囲、カマドと北壁間に大半が集中している。カマド内から坏(1)、甕(2)、高坏(17)、甕2点(23、28)が、貯蔵穴内から坏7個体が、カマド

の北から坏3個体、甕(27)、瓶(31)が出土している。

出土遺物(第259・260図)坏は椀形態、模倣坏、さらにその中間形態が出土しているが、椀タイプが主体と思われる。甕は長胴甕が主体を占めるが球形胴部をなす(25)、小型甕(27)がある。



S J 82層序

- 1 暗褐色 若下の焼土、炭化物を混在し小石を含みしまり持つ。
- 2 暗褐色 1層より明るい焼土、炭化物を混入。
- 3 黒褐色 しまり強い。ロームを若干混入。
- 4 黄褐色 ロームを多量に混入。

野藏穴層序

- 1 暗褐色 ローム(径2cm)炭化、焼土を混入。
- 2 暗褐色 小石を含み焼土、ロームを混在。
- 3 黄褐色 小石、ロームを主体とする。

ピット層序

- P1-2-3-4-1 黒褐色 焼土、炭化物を含み、小砂利及びロームを混入。
- 2 黒褐色 小砂利を多く含み、黒色土を混在。しまり強い。

S J 83層序

- 1 褐色 焼土、炭化物を混在。若下の小石を混在。
- 2 黄褐色 ローム、小石を多量に混入。(陥り床)
- 3 黒褐色 ローム、炭化物を混在。きめ細かい黒褐色土である。

貯蔵穴層序

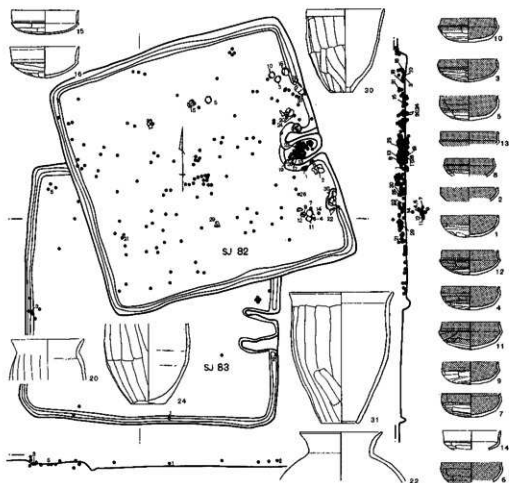
- 1 暗褐色 きめ細かくしまり弱い。ロームを混在。
- 2 黄褐色 砂粒子、ロームを主体とする。
- 3 暗褐色 砂粒子、ロームを主体とする。
- 4 黒褐色 ロームを含み、小石を若干混在。
- 5 褐色 礫を多く混入。

ピット層序

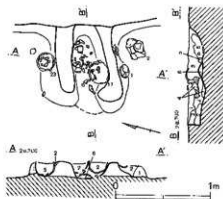
- P1-2-3-4-1 黒褐色 ローム、小石を混入し、やや強い。
- 2 暗褐色 ローム及び小礫を多量に混入。しまり強い。

第256図 第82・83号住居跡

甌は大小3個体出土しているが形態的には口縁部の変化が少ない。胴部中位から底部に向かって急にすぼまることも共通している。



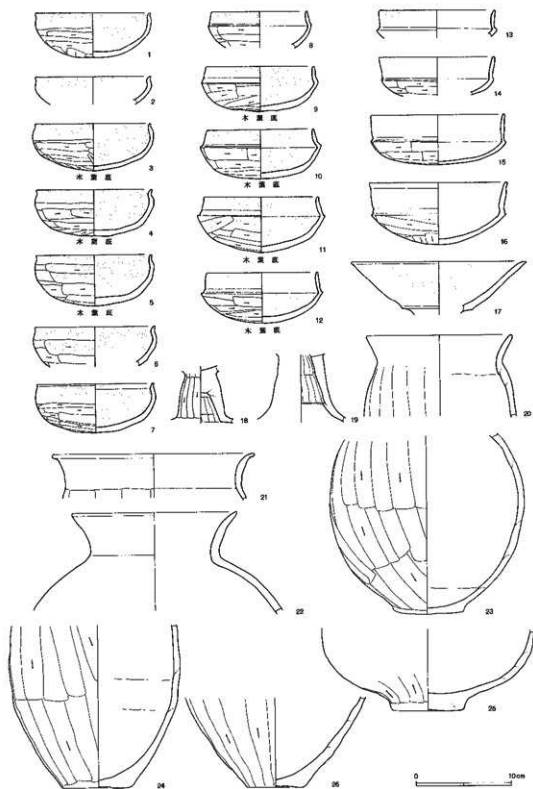
第257図 第82・83号住居跡遺物分布



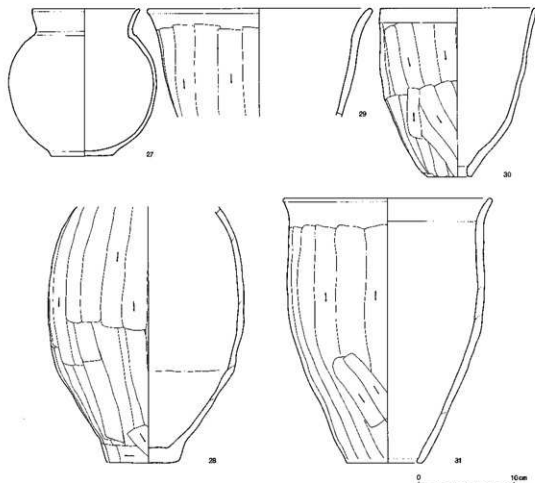
第258図 第82号住居跡カマド

カマド層序

- 1 黄褐色 ローム、焼土、炭化物を混在。しまり有。
- 1' 黄褐色 基本的に1層と同一で焼土の混入が1層より少ない。しまり有。
- 2 暗褐色 ロームを微量、焼土、炭化物を混在。基本的に2層と同一で焼土の含有が多い。しまり有。2層より粘性は欠ける。
- 3 暗褐色 炭化物、ローム(微量)を混在。ややしまりに欠け粘性有。
- 4 黄褐色 焼土が多量、ローム、炭化物が微量に混在。ややしまりに欠け粘性有。
- 5 暗褐色 炭化物(微量)ロームを混在。しまり有。ブロック状に固結する。
- 6 黄褐色 上層は赤化している。炭化物、焼土を混在。粘性有。ややしまりを欠く。



第259图 第82号住居跡出土遺物(1)



第260図 第82号住居跡出土遺物(2)

第82号住居跡遺物観察表 (第259・260図)

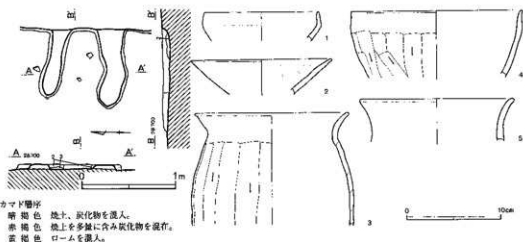
No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	17	坏A	12.0		4.6		W・B-U-G	A	赤棕色	70%	カマド	154
02	16	坏A	(12.0)				W・B-U-G	A	橙 色	10%	カマド	一括
03	14	坏A	12.0		4.9	196	W・B-U-G	A	明赤褐色	完形	床直	95
04	12	坏A	12.2		4.8		W・B-Ha-G	A	赤褐色	70%	貯穴	5
05	8	坏A	12.4		5.3	235	W・B-U-G	A	橙 色	完形	床直	105
06	13	坏A	(12.4)				W・B-U-G	A	橙 色	30%	貯穴	5
07	9	坏A	12.2		5.1	200	W・B-U-G	A	橙 色	完形	貯穴	4
08	11	坏B					W・B-U-G	A	橙 色	20%	覆土	155
09	6	坏B	11.4		4.7	185	W・B-U-G	A	橙 色	完形	貯穴	7
10	3	坏B	11.4		5.1	196	W・B-U-G	A	橙 色	90%	床直	96
11	5	坏B	12.2		5.8	205	W・B-U-G	A	橙 色	90%	貯穴	6
12	2	坏B	11.6		5.2	215	W・B-U-G	A	橙 色	完形	貯穴	8
13	15	坏B	(12.0)				W・B-U-G	A	橙 色	10%	覆土	186
14	10	坏C	(12.0)				W・B-U-G	A	橙 色	20%	貯穴	10
15	7	坏C	14.2		5.2		W・B-U-G	A	橙 色	70%	床直	108



16	4	坏C	14.4		6.4	240	W・B・U・G	A	橙 色	定形	床直	94
17	18	高坏	18.4				W・B・U・G	A	赤橙 色	35%	カマド	188
18	20	高坏					W・B・U・G	A	橙 色	25%	覆土	93
19	19	高坏					W・B・U・G	A	棕 色	25%	覆土	193
20	23	小型甕	(15.0)				H・U・W・B・G	A	黄橙 色	20%	覆土	89.90
21	21	甕	(21.0)				H・U・W・B・G	A	橙 色	10%	覆土	37
22	26	甕	17.4				G	A	明赤褐色	5%	覆土	2.3
23	27	甕		6.6			G	A	黄褐色	80%	カマド	157
24	31	甕		6.7			W	A	赤褐色	20%	覆土	89.90
25	29	甕		7.2			W・B・S・K・U	A	棕 色	30%	覆土	181
26	24	甕		5.8			W・B・U・G	A	浅黄褐色	15%	覆土	11
27	1	小型甕	11.2	6.5	15.4		G	B	明赤褐色	60%	壁溝	
28	28	甕		7.8			G	A	明褐色	30%	カマド	148
29	22	瓶	(23.0)				W・B・U・G	A	鈍い橙 色	15%	覆土	23
30	25	小型瓶	16.3	5.2	17.5		G	A	明赤褐色	60%	覆土	2
31	30	瓶			27.4		G	A	橙 色	50%	壁溝	92

### 第83号住居跡 (第256図)

P・Q-9・10 Gridに位置する。新旧関係は南北でそれぞれ82、84号住居跡に切られる。平面形状は整った方形を呈する。規模は東西5.42m、南北5.40m、深さ5cmを測る。主軸の示す方位はN-91°-Eを指す。カマドは東壁の南寄りにあり、僅かに袖の基部が遺存する。袖部の規模は両袖部外側で0.98m、内側で0.48m、長さ0.85m、高さ5cmを測る。貯蔵穴は南東コーナーにあり、形状は不整隅丸方形、底面に径35cm、深さ6cm程の小ピットが北偏して穿たれている。全体の規模は東西1.23m、南北0.90m、深さ43cmを測る。ピットは5ヶ所検出され、内P1~P4が主柱穴である。P2は上部を82号住居跡に切られる。規模は径25~35cm、深さ40~50cmを測る。南西コーナーに貯蔵穴に類した施設P6がある。形状は不整楕円形、規模は東西1.07m、南北0.63m、深さ30cmを測る。壁溝はカマド部分を除く各壁下を巡っていたものと思われる。幅15~20cm、深さ5cm



第261図 第83号住居跡カマド

第262図 第83号住居跡出土遺物

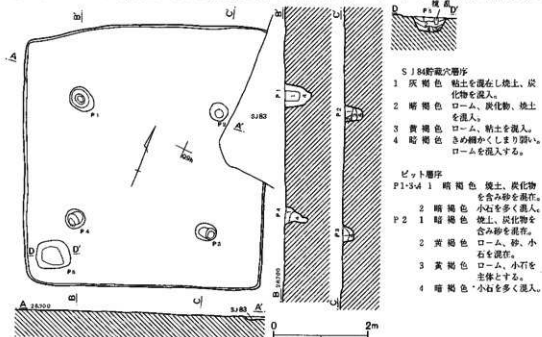
を測る。遺物はカマドから壺の大型破片（3）が出土している他はみるべきものはなく、出土総数25点と少ない。

第83号住居跡遺物観察表（第262図）

No	測	器種	口径	底径	器高	置口	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	坏B	(12.0)				Ha・U・B・G	A	鈍い橙色	5%	覆土	21
02	2	高坏	(15.0)				W・B・U・G	A	橙 色	5%	覆土	20
03	5	壺	(16.0)				W・B・G	A	浅黄橙色	20%	覆土	23
04	3	鉢	(18.0)				Ha・W・B・U・G	A	橙 色	20%	覆土	SK-1
05	4	壺	(16.0)				W・B・Ha・U・G	A	橙 色	5%	覆土	13

第84号住居跡（第263図）

Q-9 Gridに位置する。新旧関係は83号住居跡に切られる。形状は整った方形を呈し、規模は東西5.12m、南北5.48m、深さ9cmを測る主軸の示す方位はN-21°-Wを指す。カマドは検出されていないが、83号住居跡に壊されたものと思われる。83号住居跡南コーナーに位置し、貯蔵穴としたものがカマドの掘り型にあたる可能性が高い。貯蔵穴は南コーナーにあり、形状は隅丸方形、



第263図 第84号住居跡

規模は東西0.71m、南北0.59m、深さ28cmを測る。ピットは主柱穴4ヶ所が検出された。形状は円形、規模は径35~57cm、深さ45~55cmを測る。柱穴間の距離は東西間が3.0m、南北間が2.5mの等間となっている。壁溝は存在しない。出土遺物は図示した2点だけで、共に貯蔵穴内から検出されている。

第264図 第84号住居跡出土遺物

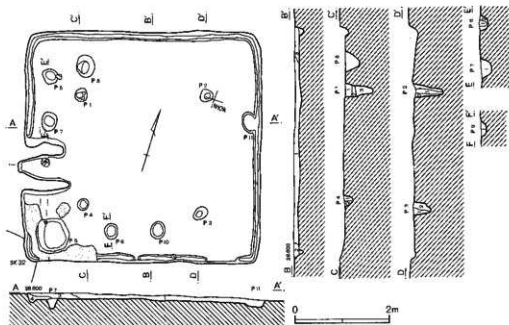
第84号住居跡遺物観察表 (第264図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	構成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	坏A	(13.0)				W・B・G	A	赤褐色	5%	甍土	一括
02	1	坏A	(14.0)				W・B・U・G	A	赤褐色	10%	甍土	一括

第85号住居跡 (第265図)

N-10 Grid に位置する。新旧関係はない。形状は整った方形、規模は東西5.06m、南北4.88m、壁高13cmを測る。主軸の示す方位はN-74°-Eを指す。覆土は壁際にローム、焼土を混入する黒褐色土が主体をなす。カマドは西壁の南寄りであり、袖部の遺存は良好である。貯蔵穴の周囲からは多量の焼土塊が検出された。規模は両袖部外側で1.21m、内側で0.45m、長さ1.04mを測る。壁外への掘り込みはない。焼燃面はフラットで、床面と同一レベルを示す。貯蔵穴は南西コーナーにあり、形状は不整形、規模は東西0.69m、南北0.66m、深さ22cmを測る。ピットは11ヶ所検出され、内支柱穴はP1～P4が該当する。形状は円形、規模は径30～60cmを測る。深度の高いものは北側に集中。P6、P7および、P9、P10は等間でも壁に並行して設置されており、出入り口などの用途が考えられる。壁溝は幅20cm、深さ15cm程でほぼ全周する。出土遺物は総数60点を数える。出土状態はカマド内から高坏(5)が逆位で検出された他は小破片が全体に散漫な分布を示す。

出土遺物 (第267図) 坏は碗形態が主体をなす。高坏は直線的に大きく開き、端部が段をなす坏部を裾部の屈曲の小さな脚部がのせている。全て赤彩を施こされている。



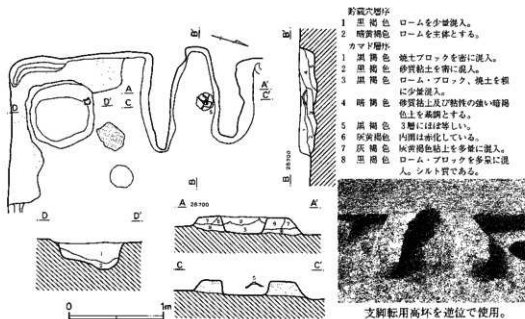
ピット層序

- P 1 1 暗褐色 ロームを少量混入、
- 2 暗褐色 ロームを混入、
- 3 暗黒褐色 ロームを少量混入、
- P 2-3-4 1 暗褐色 ロームを少量混入。(柱礎と思われる)
- 2 暗黒褐色 ロームを混入、
- P 6 1 暗褐色 ローム、焼土を少量混入、

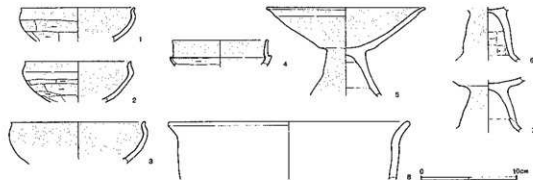
S J 85層序

- 1 暗褐色 ロームを少量混入、
- 2 暗黒褐色 ローム、焼土を少量混入、
- 3 暗褐色 ローム、焼土を少量混入、
- 4 暗褐色 ロームを少量混入、
- P 7 1 暗褐色 ロームを少量混入、
- P 9 1 暗黒褐色 ロームを多量に混入、

第265図 第85号住居跡



第266図 第85号住居跡カマド

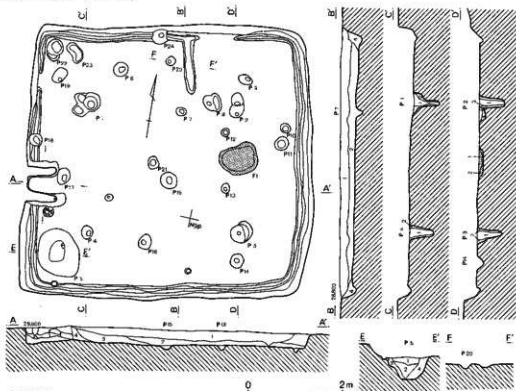


第267図 第85号住居跡出土遺物

第85号住居跡遺物観察表 (第267図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	3	坏A	(12.0)				W-U-G	A	明赤褐色	5%	覆土	3
02	4	坏A	(11.0)				W-B-U-G	A	赤褐色	20%	覆土	39
03	2	坏A	14.0				W-B-U-G	A	橙褐色	30%	覆土	4
04	5	坏B	(10.0)				W-B-U-G	A	橙褐色	10%	覆土	48
05	1	高坏	16.8				W-B-U-G	A	赤褐色	70%	覆土	50
06	6	高坏					K-W-B-U-G	A	橙褐色	15%	覆土	46
07	7	高坏					K-W-B-K-U	A	橙褐色	30%	覆土	7
08	8	瓶	(25.0)				R-W-B-U-G	A	鈍い橙褐色	10%	覆土	24

第86号住居跡 (第268図)



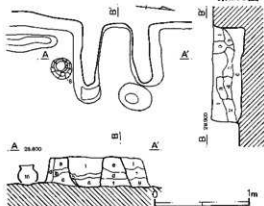
S J 86層序

- 1 暗褐色 焼土、ロームを若干含み、しまりやや持つ。砂粒子を混在。
  - 2 暗黄褐色 ローム (径2-5cm) を混在。しまり粘性やや持つ。焼土、炭化物を混在。
  - 3 茶褐色 焼土、炭化物を多く混在。ローム粘土を混入。しまりやや持つ。
  - 4 暗褐色 ロームを含み1層に比べ暗い。
- か穴層序
- 1 暗褐色 ロームを密に混入。
  - 2 暗褐色 焼土、カーボンを少量混入。
- 貯蔵穴層序
- 1 暗褐色 焼土、カーボンを多量に混入。
  - 2 暗褐色 1層に比べ暗い。焼土、カーボンを多量に混入。
  - 3 暗褐色 砂粒を密に混入。 4 暗褐色 砂粒、焼土を密に混入。

ピット層序

- P 1 1 暗褐色 混入物なし。しまりなし。
- 2 暗黄褐色 ロームを密に混入。
- P 2 1 暗褐色 混入物なし。よくしまっている。
- 2 暗褐色 ローム・ブロックを少量混入。
- 3 暗褐色 焼土、ロームを少量混入。
- 4 暗黄褐色 ローム・ブロック、ソフトロームを密に混入。
- P 3 1 暗褐色 砂礫、ロームを少量混入。
- 2 黄褐色 ローム・ブロック、ソフトロームを多量に混入。
- P 4 1 暗褐色 ローム・ブロックを少量混入。
- 2 暗褐色 砂礫、ローム・ブロックを混入。

第268図 第86号住居跡

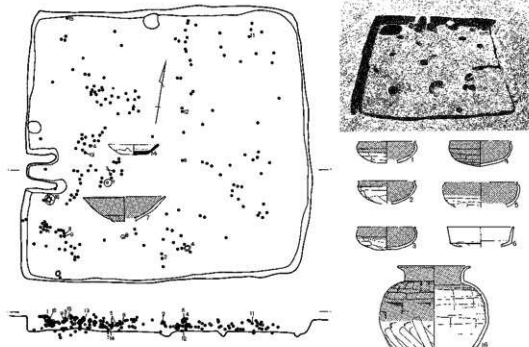


カマド層序

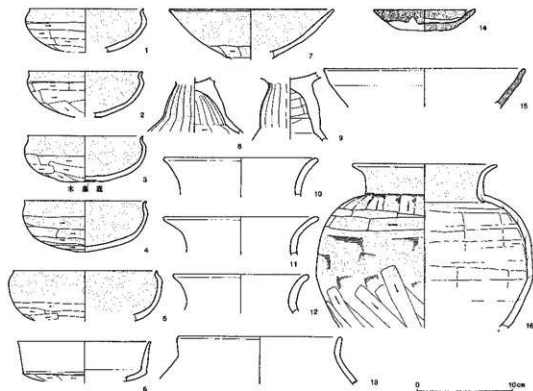
- 1 暗黄褐色 黄灰色粘土に焼上カーボンを少量混入。
  - 2 暗褐色 黄灰色粘土と焼土を多量に混入。
  - 3 黄灰色粘土
  - 4 赤褐色 3層の赤化したもの。
  - 5 茶褐色 焼土を少量混入。
  - 6 暗黄褐色 多量のロームを混入。
  - 7 黒褐色 多量の焼土カーボンを混入。
  - 8 暗黄褐色 ローム、砂礫を多量に混入。
  - 9 暗褐色 若干の焼土及び炭化物を混入。粘性強く粗礫でサカザツている。(積風?)
- a 暗褐色 黄灰色粘土を密に混入。部分的に赤化。  
 b 暗褐色 黄灰色粘土を密に混入。内側のみ赤化。  
 c 黄灰色粘土 黄灰色粘土を密に混入。  
 d 黄灰色粘土  
 e 暗褐色 砂礫・黄灰色粘土を混入。  
 f 茶褐色 ローム、黄褐色土を多量に混入。

第269図 第86号住居跡カマド

N-9 Gridに位置する。新旧関係はない。平面形状は整った方形を呈する。奥板は東西6.16m、南北5.76m、壁高33cmを測る。主軸の示す方位はN-83°-Eを指す。覆土は壁際に焼土、炭化物を密に含む茶褐色土が、レンズ状堆積を示し床面を広く覆う暗黄褐色土、全体を被覆する暗褐色土の3大別できる。カマドは西壁の中央にあり、袖部は良好に遺存。袖部の規模は両袖部外側で0.96m、内側で0.35m、長さ0.85mを測る。壁外への掘りはなく、燃焼面も平坦で床面と同一レベルを示す。北袖の前面に径35cm、深さ23cmの小ピットが付設されている。P2、P3間には地床が存在する。形状は東西に長軸をもつ不整楕円形で、東西0.84m、南北0.67m、深さ10cmを測る。床面が若干赤化している。炉跡の西に偏した南北位置に、径20cm、深さ10cm程の小ピットが2ヶ所検出された。炉跡からそれぞれ30cm弱の等距離にあり、有機的に結びつく遺構と考えられる。貯蔵穴は南西コーナーにあり、形状は不整楕円形、規模は東西1.10m、南北0.89m、深さ48cmを測る。ピットは24ヶ所検出された。内主柱穴と思われるのはP1-P4で、形状は円形、規模は径30-50cm、深さ25-54cmを測る。ピット断面は柱痕を示す分層が可能である。また、北側に位置するP1、P2から数度の立て替えが想定できる。カマド正面、東壁下の2ヶ所、北西コーナーの2ヶ所はそれぞれ小規模なピットで位置的に出入口部が想定できる。北壁下から住居の中央に向い所謂間仕切り溝が認められる。規模は幅24cm、深さ5cm、長さ1.15mを測る。壁溝はカマド部分、西壁下北寄り的一部、北壁中央を除く部分に認められる。幅37cm、深さ6cmを測る。遺物は平面分布を見る限り、貯蔵穴周辺、カマド正面、北西コーナー寄り、南壁下中央、東壁下南東コーナー寄りの5つの集みがみられる。これらは概ね、西から東への流れが看取でき、第2層のレンズ状堆積に合致する。垂直分布から前2者は床直と覆土に区分できる。カマド脇から甕(16)、貯蔵穴内から坏



第270図 第86号住居跡遺物分布



第271図 第86号住居跡出土遺物

(1)と高坏(9)が、カマド正面から完形の坏2点が出土している。出土総数204点を数える。

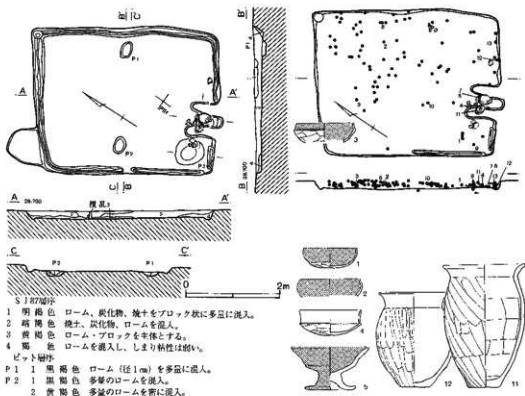
出土遺物(第271図)坏は坏Aが主体。法量的に差がある。高坏は坏部下端が寛削りにより不鮮明である。脚部は柱状部分が膨らみをもち、裾部で急に開く。甕は口縁が直立後外傾、胴部は球状。

第86号住居跡遺物観察表 (第271図)

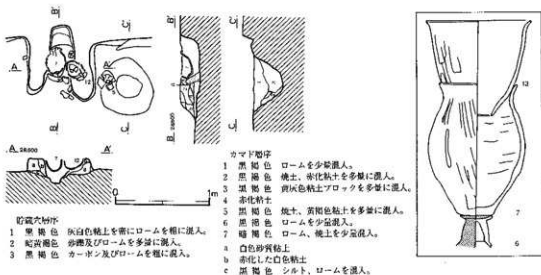
No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	5	坏A	(12.0)				W・B・R・U・G	A	橙 色	20%	貯穴	150
02	15	坏A	(12.0)				W・B・U・S・G	A	橙 色	30%	覆土	70
03	2	坏A	12.2	4.8	180		W・B・K・U・G	A	橙 色	完形	覆土	198
04	3	坏A	12.8	5.3	215		W・B・K・Ha・U	A	浅黄褐色	完形	覆土	194
05	4	坏A	(15.2)				W・B・U・K・G	A	橙 色	30%	覆土	80.81
06	6	坏C	(14.0)				S・R・B・W・U	A	浅黄褐色	10%	覆土	60
07	7	高坏	17.4				W・B・U・G	A	赤褐色	50%	覆土	192
08	9	高坏					W・B・R・K・U	A	赤褐色	40%	覆土	160
09	10	高坏					W・R・B・U・G	A	橙 色	50%	貯穴	159
10	13	甕	(16.0)				W・B・Ha・U・K	A	橙 色	5%	覆土	5
11	14	甕	(16.0)				W・B・Ha・U・K	A	橙 色	5%	カマド	
12	12	甕	(14.0)				W・B・S・R・U	A	浅黄褐色	5%	覆土	58
13	11	甕	(17.0)				Ha・U・W・B・G	A	浅黄褐色	5%	覆土	162
14	1	瀬戸甕	(10.8)	(5.1)	2.2		G	A	浅黄褐色	45%	覆土	120
15	8	瀬戸甕	(21.0)				G	A	灰白色	10%	覆土	21
16	16	甕	15.2				U・W・K・R・S	A	淡赤褐色	60%	カマド	191

### 第87号住居跡 (第272図)

P-11 Gridに位置する。北西コーナーの一部に攪乱を受けている。形状は南北に長軸をとる長方形を呈する。規模は東西3.10m、南北3.98m、深さ14cmを測る。主軸の示す方位はN-31°-Wを指す。覆土は焼土、炭化物、ローンを多量に混入する暗褐色が主体である。カマドは南壁の南西コーナー寄りにあり、袖部の遺存は良好である。規模は両袖部外側で0.73m、内側で0.27m、長さ

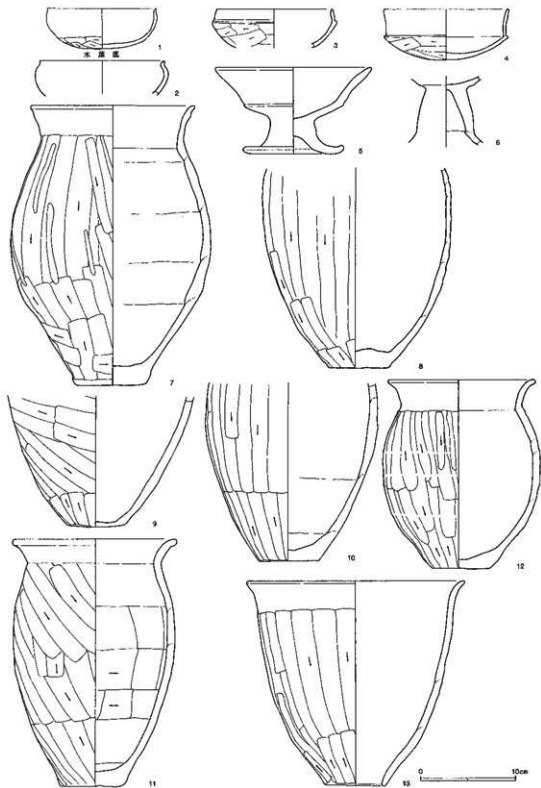


第272図 第87号住居跡・遺物分布



第273図 第87号住居跡カマド・貯蔵穴





第274図 第87号住居跡出土遺物

0.62mを測る。壁外への掘り込みは12cmである。燃焼面は径20×36cm、深さ3cm程の浅い皿状を呈する。貯蔵穴は南西コーナーにあり、形状は楕円形、規模は東西0.64m、南北0.57m、深さ33cmを測る。支柱穴は2ヶ所で、東西壁下の中央にそれぞれ配されている。形状は東西に長い楕円形を呈し、規模は35×25cm、深さ10cmを測る。壁溝はカマド部分と西壁中央の一部を除く全てに認められ、幅10～25cm、深さ3cm程を測る。出土遺物は総数93点を数える。カマドあるいは貯蔵穴に集中し、他は覆土中に散漫な分布を示す。カマドからは支脚転用の高坏（6）、甕（7、8、11）、坏（4）、貯蔵穴内から甕（9）が出土している。

出土遺物（第274図）坏は碗形態、模倣坏、中間形態が認められる。高坏は外反りに大きく外傾する口縁部で下端に強い稜をもつ。甕は長胴で口縁部の外反は弱い。整形は縦位の鏡割りにより仕上げられるが、（7）のようにナデが加わるものもある。甕は口縁部の変化が小さい。底部は急にすぼまり、底部は小さい。

第87号住居跡遺物観察表（第274図）

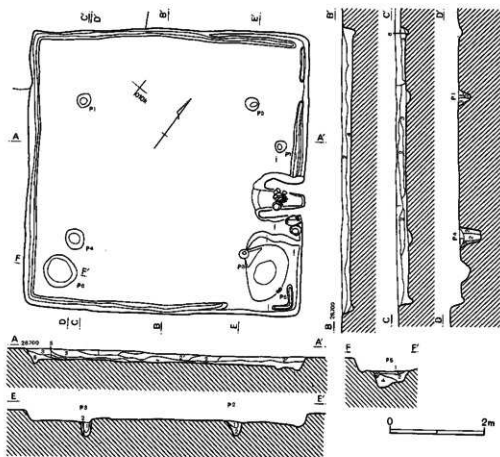
No	測	器種	口径	底径	器高	重口	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	13	坏A	11.4		4.2		W・B・S・R・G	A	鈍い棕色	90%	貯穴	42
02	5	坏A	(13.0)				W・B・U・G	A	赤棕色	10%	覆土	48
03	3	坏B	(12.0)				W・B・U・G	A	赤棕色	20%	覆土	21
04	4	坏C	13.2		5.3		W・B・R・U・G	A	橙 色	60%	覆土	92
05	8	高坏	16.5		9.0		G	A	明赤褐色	80%	貯穴	一括
06	2	高坏					W・B・K・U・G	A	橙 色	50%	カマド	46
07	6	甕		7.6	29.2		G	A	明赤褐色	50%	カマド	
08	12	甕		6.4			G	A	赤褐色	30%	覆土	87
09	7	甕		6.0	(15.0)		G	A	鈍い黄棕色	30%	覆土	44
10	10	甕		6.3			G	A	明褐色	30%	覆土	37
11	1	甕		6.5	25.8		G	A	鈍い赤褐色	50%	覆土	90
12	11	小型甕	15.1	6.1	19.6		G	A	明褐色	55%	覆土	67
13	9	小型甕		6.2			G	A	明褐色	50%	覆土	64

第88号住居跡（第275図）

O-10 Gridに位置する。新旧関係は89号住居跡に切られる。形状は整った方形を呈する。規模は東西5.96m、南北5.98m、壁高19cmを測る。主軸の示す方位はN-55°-Eを指す。覆土はローム、焼土、炭化物を多量に混入する黒褐色土（2・4層）が主体である。カマドは東壁の南寄りにあり、袖部のみ良好に遺存する。規模は両袖間外側で1.04m、内側で0.34m、長さ1.08mを測る。壁外への掘り込みはない。燃焼面は東西1.14m、南北0.7m、深さ5cm程の浅い皿状を呈する。貯蔵穴は南東コーナーにあり、形状は南北に長軸をもつ楕円形を呈し、規模は東西0.93m、南北1.24m、深さ50cmを測る。周囲には周堤帯が存在していたと思われるが、カマドとの間に幅30cm、高さ10cmの規模で遺存する。支柱穴P1-P4で、形状は円形、規模は径30-45cm、深さ26-45cmを測る。南コーナーには形状円形、径67×66cm、深さ31cmのP6が存在する。性格は不明。壁溝はカマド部分および貯蔵穴周囲を除く壁下に認められる。幅15-25cm、深さ8cmを測る。遺物は出土総数42点を数える。大半がカマドおよび貯蔵穴周辺、床直で出土するため覆土中に浮遊するものは少ない。カマドから高坏（20）、甕5個体（30、31、33-35）が貯蔵穴から坏2個体（2、14）、カ

マドの北から甌 (31) が出土している。

出土遺物 (第278・279図) 坏は椀形態、横倣坏、中間形態があるが椀形態が主体。高坏は直線の大きく開き、下端に段を有する坏部をロート状の脚部がのせる (20、21) と柱状の脚部で中間に膨らみをもち裾部で大きく開く (22~24) がある。差は長胴で口縁部は大きく「く」の字状に開く。整形は縦位の施削りで、ナデの加わる (30、31) がある。甌は口縁部の変化が小さく、底部のすばまり方が急なもので底部の小さな (36) と、比較的明瞭に口縁部が外傾する (37、38) がある。



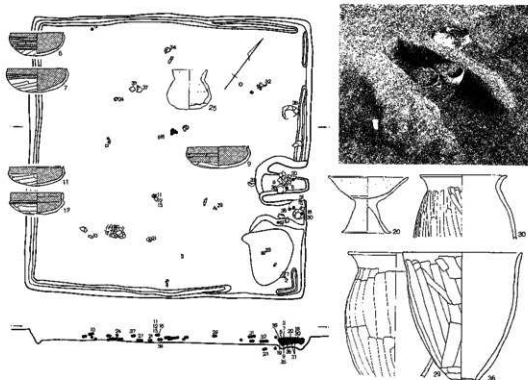
5 J 88層序

- 1 暗褐色 焼土小ブロック、炭化物、ロームを少量混入。
- 2 暗茶褐色 ハードローム・ブロックを多量に混入。(かなり面的な広がりを有つ。ローム混じり面が破壊された)
- 2' 暗黒褐色 2層よりローム・ブロックを多量に混入。少量の焼土・炭化物を混入。
- 3 暗茶褐色 ロームを少量混入。
- 3' 暗茶褐色 ロームの量が3層より若干多い。
- 4 黒褐色 ローム少量、焼土、炭化物を多量に混入。
- 5 茶褐色 焼土、炭化物を多量に混入。
- 6 黒褐色 ローム小ブロック少量混入。

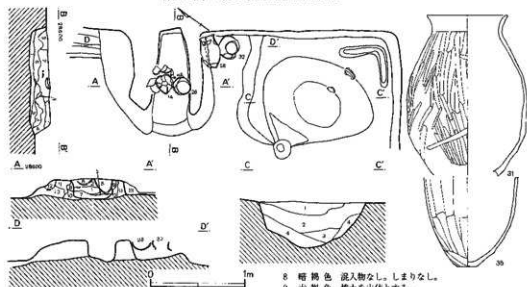
ピット層序

- F1-2-4
- 1 黒褐色 しまりやや削い。焼土、炭化物を混入。
  - 2 暗褐色 若下の焼土、炭化物を混入。
  - 3 黄褐色 ローム、小砂利を混入。
- P 3
- 2 暗褐色 若下の焼土、炭化物を混入。
  - 3 黄褐色 ローム、小砂利を混入。
- P 6
- 1 黒褐色 ローム、炭化物を少量に混入。
  - 2 黄褐色 ロームを多量に混在し、小砂利を混入。
  - 3 黄褐色 2層に比べやや褐色土を混入。
  - 4 茶褐色 しまり削くザラザラした砂質粘土を混在。

第275図 第88号住居跡



第276図 第88号住居跡遺物分布

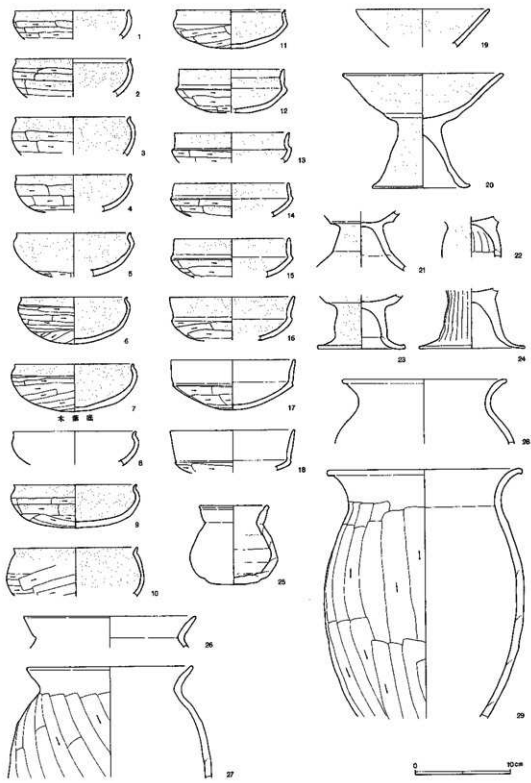


カマド層序

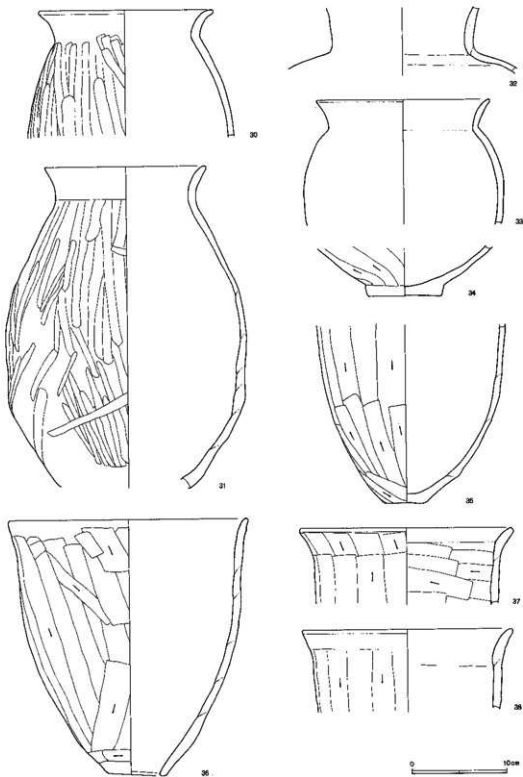
- 1 暗褐色 焼土を少量混入。
- 2 石灰褐色 暗黄褐色粘土ブロック、焼土を多量に混入。
- 3 暗黄褐色 粘土ブロック（下層は焼土によって赤色化している）
- 4 暗褐色 焼土。粘土を少量混入。
- 5 灰褐色 焼土を多量に混入する灰層である。
- 6 暗茶褐色 粘土、焼土、灰を多量に混入。
- 7 明黄褐色 ローム小ブロックを多量に混入。（掘り型埋土）

- 8 暗褐色 混入物なし。しまりなし。焼土を土体とする。
  - 9 赤褐色 焼土を土体とする。
  - 10 暗褐色 焼土。ロームを混入。
  - 11 茶褐色 焼土を混入する。しまり弱い。
  - 12 黄褐色 粘土を土体とする。
  - 13 黄褐色 粘土及び焼土を混入。
- 貯蔵穴層序
- 1 暗褐色 ローム、炭化物を多量に混入。
  - 2 暗茶褐色 ローム3層より多い。
  - 3 暗黄褐色 ローム少量混入。
  - 4 暗黄褐色（ローム土体の砂雜質）壁の崩壊土である。

第277図 第88号住居跡カマド・貯蔵穴



第278图 第88号住居跡出土遺物(1)



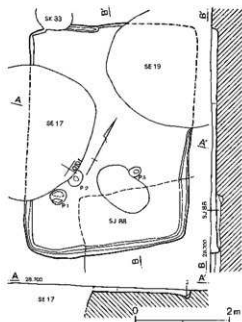
第279图 第88号住居跡出土遺物(2)

第88号住居跡遺物観察表 (第278・279図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重 <sup>g</sup>	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	14	坏A	(12.0)				W・B・U・S・G	A	赤褐色	10%	覆土	一括
02	17	坏A	(12.0)				W・B・U・S・G	A	赤褐色	10%	覆土	1
03	20	坏A	(12.0)				W・B・S・U・G	A	褐色	10%	覆土	一括
04	11	坏A	(12.0)				W・B・U・S・G	A	赤褐色	20%	覆土	一括
05	15	坏A	(12.0)				W・B・U・S・G	A	褐色	30%	覆土	32
06	5	坏A	11.4		4.9		W・B・U・K・G	A	褐色	70%	覆土	一括
07	6	坏A	12.6		4.9		W・B・S・K・U	A	鈍い褐色	80%	覆土	1
08	18	坏A	(13.0)				W・B・S・U・G	A	褐色	10%	覆土	一括
09	7	坏A	12.8		4.5		W・B・U・S・G	A	褐色	80%	覆土	33
10	21	坏A	(13.0)				W・B・K・U・S	A	褐色	20%	覆土	17
11	4	坏B	11.4		4.0	130	S・W・B・U・G	A	褐色	完形	覆土	6
12	8	坏B	(11.0)				W・B・U・R・G	A	鈍い褐色	30%	覆土	6
13	16	坏B	(12.0)				W・B・U・K・G	A	褐色	10%	覆土	一括
14	9	坏B	(12.0)				W・B・U・K・G	A	褐色	20%	覆土	一括
15	12	坏B	(12.0)				W・B・S・U・G	A	褐色	20%	覆土	6
16	13	坏B	(13.0)				W・B・S・U・G	A	赤褐色	20%	覆土	10
17	10	坏C	(13.0)		(5.2)		W・R・B・U・G	A	褐色	20%	覆土	一括
18	19	坏C	(13.0)				W・B・R・U・G	A	褐色	10%	覆土	34
19	23	高坏	(14.0)				W・B・S・U・G	A	褐色	10%	覆土	29
20	3	高坏	17.0	10.2	12.0		G	A	赤褐色	80%	カマド	42
21	26	高坏					W・B・U・S・G	A	褐色	50%	覆土	13
22	27	高坏					W・B・S・K・U	A	褐色	30%	覆土	一括
23	24	高坏	(9.0)				W・B・S・U・G	A	赤褐色	30%	覆土	2
24	25	高坏		(11.0)			W・B・K・U・G	A	赤褐色	30%	覆土	27
25	22	小明礫	(7.0)		(8.2)		W・B・Ha・U・S	A	褐色	60%	覆土	一括
26	35	壺	(18.0)				W・B・U・S・G	A	褐色	10%	覆土	一括
27	32	壺	(17.0)				W・B・U・S・G	A	褐色	20%	覆土	11
28	31	壺	(17.5)				W・B・Ha・U・K	A	褐色	10%	覆土	3
29	2	壺	20.4				G	A	明赤褐色	70%	覆土	5
30	37	壺	(18.2)				G	A	赤褐色	45%	カマド	34
31	36	壺			33.5		G	A	明赤褐色	40%	カマド	35
32	30	壺					W・B・U・S・G	A	褐色	10%	床直	21
33	33	壺	(18.0)				W・B・K・S・U	A	褐色	30%	カマド	
34	34	壺		(7.8)			W・B・S・U・G	A	黄褐色	10%	覆土	18
35	1	壺		4.3			G	A	明赤褐色	40%	カマド	33
36	38	瓶	25.0		26.6		G	A	赤褐色	70%	覆土	23
37	28	瓶	(22.0)				W・B・K・S・G	A	赤褐色	10%	覆土	12
38	29	瓶	(22.0)				W・B・U・K・Ha	A	褐色	10%	覆土	28

## 第89号住居跡 (第280図)

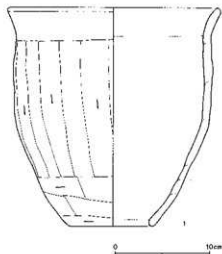
O-10 Gridに位置する。新旧関係は88号住居跡を切り、34号土壌、17、19号井戸跡に切られる。形状は南北に長い長方形を呈する。規模は東西3.43m、南北4.87m、壁高10cmを測る。主軸の示す方位はN-26°-Wを指す。覆土には多量の焼土、炭化物が混入している。カマドは検出されていない。ピットは4ヶ所検出された。内主柱穴と考えられるのはP2 (径34×23×21cm) だけで、他は破壊されて存在しない。壁溝は遺存部分からいくつか寸断部分は存在するが概ね全周するものと



- SJ 89居住  
 1 暗茶褐色 焼土、炭化物を多量に混入。  
 2 暗褐色 ロームを少量混入。

第280図 第89号住居跡

思われる。出土遺物は図示した甌を含め12点に過ぎない。甌(1)は小型で口縁部の変化が小さい。底部のすぼまり方は急で、底径は小さい。整形は縦位の匏削り。



第281図 第89号住居跡出土遺物

第89号住居跡遺物観察表 (第281図)

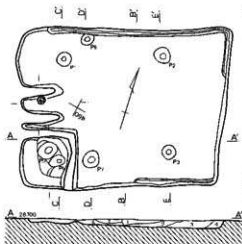
No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	甌	12.4	9.4	23.1		G	A	黄褐色	75%	覆土	2

第90号住居跡 (第282図)

O-9 Gridに位置する。新旧関係はない。平面形状は北辺の長い台形を呈する。規模は東西4.18m、南北3.38m、壁高17cmを測る。主軸の示す方位はN-74°-Eを指す。覆土はローム、焼土を混入する暗黒褐色土を主体とする。カマドは西壁のほぼ中央にあり、袖部は良好に遺存。規模は両袖部外側で0.85m、内側で0.29m、長さ0.92mを測る。壁外および燃焼面への掘り込みはない。貯蔵穴は南西コーナーにあり、周囲を周堤帯が巡っている。周堤帯の規模は幅35cm、高さ6cm、南北1.28m、東西1.15mを測る。貯蔵穴は略隅丸長方形を呈し、内部は小ピットが南北に分ける。規模は東西0.70m、南北0.85m、深さ31cmを測る。主柱穴はP1-P4で、形状は円形、規模は30-35cm、深さ40-46cmを測る。配置はP1のみ北西に偏している。壁溝は東壁の一部、西壁、南壁の中央を除いて認められる。幅16cm、深さ6-10cmを測る。出土遺物は総数11点に過ぎない。カマド内から支脚転用の高坏(3)が逆位で、完形の坏2点(1、2)が床直で出土している。

出土遺物(第284図)坏は碗形態に限られ、模倣坏は含まない。高坏は碗形態の坏部を小型の脚部がのせる。甌は口縁部の変化が小さく、直線的に底部へ至る。



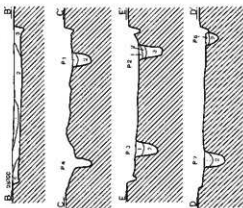


S J 90 層序

- 1 暗褐色 ロームを少量混入。
- 2 黒褐色 ローム小ブロック、焼土を少量混入。
- 3 褐色 ロームを多量に混入。
- 4 暗黒褐色 ロームを少量混入。

ピット層序

- P1-P2 1 暗褐色 きめやや粗雑で若干の焼土を混入。
- 2 暗褐色 砂利をやや多く混入。

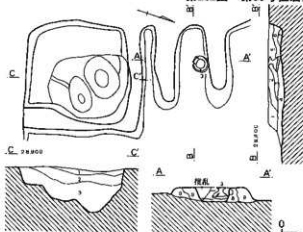


- P 2 1 暗褐色 きめやや粗雑で若干の焼土を混入。
  - 2 暗褐色 砂利をやや多く混入。
  - 3 黄褐色 ロームを混入。
- P 6-7-1 褐色 小砂利を均一に混入。ロームを若干混入。
- 2 暗褐色 砂利を主体とする。しまり持つ。

貯蔵穴層序

- 1 褐色 ローム、焼土、ロームを均一に混入。
- 2 褐色 炭化物、小砂利、ロームを混在。
- 3 黄褐色 ローム、小砂利を混在。

第282図 第90号住居跡



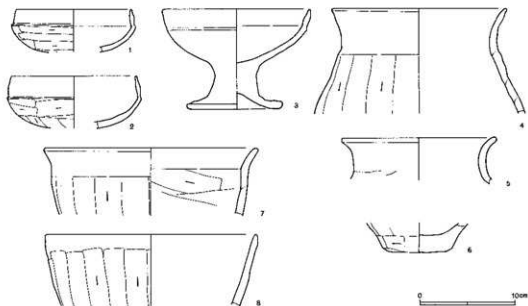
カマド層序

- 1 暗黒褐色 焼土、カーボンを少量混入。
- 2 暗灰褐色 焼土ブロックを多量に混入。
- 3 暗灰褐色 焼土、カーボンを少量混入。
- 4 黒褐色 ロームを多量に混入。
- 5 暗黄褐色 焼土ブロックを少量混入。
- 6 黒褐色 焼土、焼土を少量混入。
- 7 暗茶褐色 焼土を混入。
- 8 ロームブロック 若干の焼土を混入。
- 9 黄褐色 ロームを混入。

第283図 第90号住居跡カマド・貯蔵穴

第90号住居跡遺物観察表 (第284図)

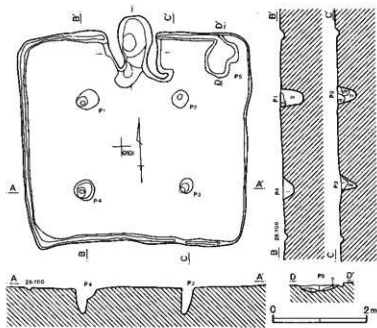
No	測	器種	口径	底径	高さ	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	坏A	(12.0)				W・B・U・S・G	A	明赤褐色	30%	床直	6
02	3	坏B	(13.0)				W・B・U・K・G	A	赤褐色	30%	床直	10
03	1	高坏	15.6	10.0	10.5	537	G	A	赤色	95%	カマド	11
04	4	栗	(18.0)				W・B・Ha・U・K	A	橙色	30%	覆土	2
05	7	栗	(16.0)				W・B・S・U・G	A	鈍い橙褐色	5%	覆土	一括
06	8	栗		7.2			W・D・U・K・S	A	鈍い橙褐色	5%	覆土	一括
07	6	瓶	(22.0)				W・K・IIa・K・U	A	橙褐色	5%	覆土	一括
08	5	瓶	(22.0)				W・B・K・U・G	A	橙褐色	5%	覆土	一括



第284図 第90号住居跡出土遺物

第91号住居跡 (第285図)

Q-10 Grid に位置する。新旧関係はない。形状は隅丸方形を呈する。規模は東西4.95m、南北4.50m、壁高は5cmを測る。主軸はほぼ磁北を指す。カマドは北壁のほぼ中央にある。比較的袖部の遺存は良好で、両袖部外側で1.23m、内側で0.50m、長さ1.02mを測る。壁外への掘り込みは



第285図 第91号住居跡

貯蔵穴層序

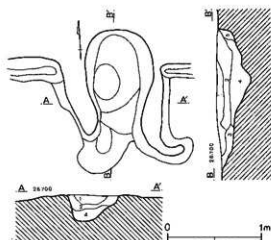
- 1 褐色 石子の焼土を混在。
- 2 黄褐色 ロームを混入。しまり弱い。

ピット層序

- |     |   |     |                     |
|-----|---|-----|---------------------|
| P 1 | 2 | 紅褐色 | ローム、小石を混入。しまりやや持つ。  |
|     | 3 | 褐色  | 炭化物、焼土を主体とする。小石を混入。 |
| P 2 | 1 | 暗褐色 | 褐色ブロック、焼土を混在。       |
|     | 2 | 暗褐色 | ローム、小石を混入。しまりやや持つ。  |
|     | 3 | 褐色  | 炭化物、焼土を主体とする。小石を混入。 |
|     | 4 | 褐色  | 焼土、ロームを混入。しまり弱い。    |
| P 3 | 1 | 暗褐色 | 褐色ブロック、焼土を混在。       |
|     | 2 | 暗褐色 | ローム、小石を混入。しまりやや持つ。  |
| P 4 | 1 | 暗褐色 | 褐色ブロック、焼土を混在。       |

35cmである。焚き口は舌状に張り出し、蒸焼面は形状楕円形、規模は東西0.75m、南北1.05m、深さ（最深部）は30cmを測る。貯蔵穴は北東コーナーにあり、形状は不整形、規模は東西0.56m、南北0.80m、深さ13cmを測る。主柱穴は4ヶ所で、柱間距離は東西2.20m、南北1.90mの等間隔で配

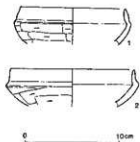
されている。形状は円形を呈し、規模は径30～45cm、深さ40～55cmを測る。P3は北東方向に斜向している。壁溝は東壁下とカマド周辺を除く壁下に認められる。幅15cm、深さ5cmである。出土遺物は8点に過ぎない。



S J91カマド層序

- 1 暗褐色 焼土、ロームを混入。しまり弱い。
- 2 茶褐色 ローム、茶褐色土を主体とする。
- 3 茶褐色 2層より茶褐色土を多く混入し明るい。
- 4 灰褐色 しまり強くザラザラしている。
- 5 暗茶褐色 しまり強くローム粒を混入。

第286図 第91号住居跡カマド

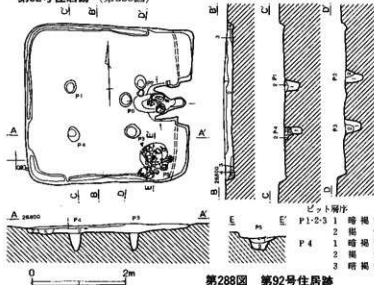


第287図 第91号住居跡出土遺物

第91号住居跡遺物観察表 (第287図)

No	測	器種	口径	底径	高さ	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	坏B	(11.0)				W・B・U・S・G	A	赤褐色	10%	覆土	ビット4
02	2	坏B	(13.0)				W・B・U・S・G	A	淡褐色	10%	覆土	3

第92号住居跡 (第288図)



S J92層序

- 1 暗褐色 ロームを含み砂粒子を混在。ザラザラしている。
- 2 暗褐色 ローム、炭化物を混入し焼土を若干混入。
- 3 黄褐色 ローム・ブロックを混入ししまり持つ。
- 4 灰褐色 きめ細かく若干の焼土、炭化物を混入。
- 5 黄褐色 ローム・ブロックを混入ししまり粘性弱い。

貯蔵穴層序

- 1 褐色 焼土、炭化物を混入。しまり弱い。土器片を出土する。
- 2 褐色 ローム、ローム・ブロックを含み砂利を多く混入。

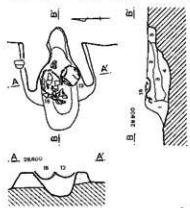
ビット層序

- P1-2-3 1 暗褐色 ローム、炭化物を混在。しまりやや弱い。
- 2 暗褐色 ザラザラしてロームを混入。
- P4 1 暗褐色 ローム、炭化物を混在。しまりやや弱い。
- 2 褐色 ザラザラしてロームを混入。
- 3 暗褐色 しまり弱く焼土、炭化物、砂粒子を混入。

第288図 第92号住居跡

P・Q-10 Gridに位置する。平面形は隅丸方形を呈する。規模は東西3.59m、南北3.38m、壁高は18cmを測る。主軸の示す方位はN-87°-Wを指す。覆土は焼土、ロームを少量混入する暗褐色土を主体とする。カマドは東壁のほぼ中央にあり袖部の遺存は良好。両袖部外側で0.8m、内側で0.38m、長さ0.64mを測る。燃焼部は東西0.87m、南北0.40m、深さ12cmを測る長楕円形の浅い掘り込みが相当する。東壁のカマド付設箇所は30cm程内側に突き出しており、東壁の内側に並行して低い棚状部分を造り出している。床面との高低差は4cmを測る。貯蔵穴は南東コーナーにあり、形状は不整形円形、規模は東西0.60m、南北0.68m、深さ20cmを測る。ピットはカマド正面に径30cm、深さ7cm程の浅い掘り込みがあり、内部に焼土、炭化物を多量に混入している。主柱穴4ヶ所は内側に偏在しており、柱間距離は東西1.30m、南北1.05mと小さい。柱穴の形状は円形、規模は径30cm、深さ35~40cmを測る。壁溝は東壁と西・南壁の一部を除く壁下に認められる。幅19cm、深さ2cmを測る。出土総数は118点である。出土状態はカマド、貯蔵穴内から出土した飯(18)、甕3点(14、15、16)を除くと床面からかなり浮いた状態で出土している。東壁側からの流入と考えられる。

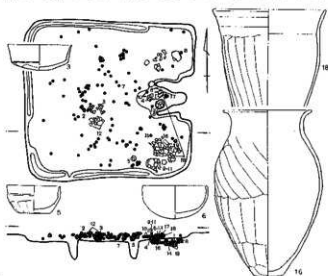
出土遺物(第291・292図) 坏は碗形態はなく、模倣坏と中間形態さらに碗形態(6)が加わる。甕は長胴甕が主体であるが、広口で低く膨らみの弱い(8)や、口縁部の中位に段をもつ人型の(7)がある。瓶は口縁部の変化が小さく、直線的に底部へ至る(18)、丸みをもってすぼまる(19)がある。



カマド略図

- 1 暗褐色 焼土、炭化物を混入。
- 2 赤褐色 焼土ブロックを主体とする。
- 3 褐色 焼土、炭化物を均等に混入。
- 4 黄褐色 ローム・ブロックを混入。
- 5 黒褐色 しまり、軟性弱い。若干の焼土を混入。

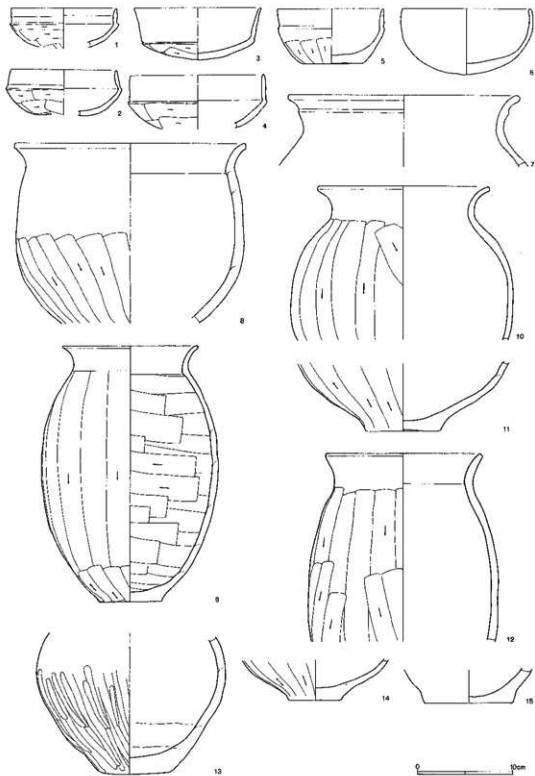
第289図 第92号住居跡カマド



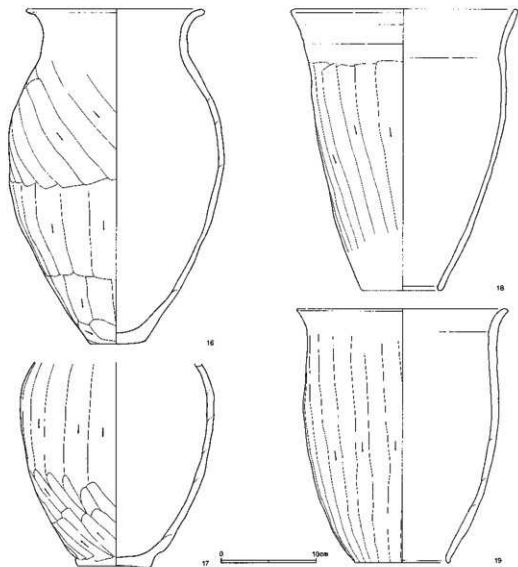
第290図 第92号住居跡遺物分布

第92号住居跡遺物観察表(第291・292図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重9	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	8	坏B	(11.0)				W・B・U・S・G	A	赤褐色	20%	覆土	一括
02	10	坏B	(11.0)				W・B・U・K・G	A	赤褐色	20%	覆土	45
03	5	坏C	13.2		5.4		W・R・B・U・G	A	褐色	60%	覆土	38
04	9	坏C	(14.0)				W・R・B・U・G	A	褐色	10%	覆土	116
05	7	坏F	11.2	6.1	5.8		W・R・B・S・I	A	黄褐色	90%	覆土	19
06	6	坏D	13.4		6.9	320	W・B・S・U・G	B	浅黄褐色	完形	床底	117
07	16	甕	(24.0)				W・R・U・H・G	A	褐色	5%	覆土	97



第291图 第92号住居跡出土遺物(1)

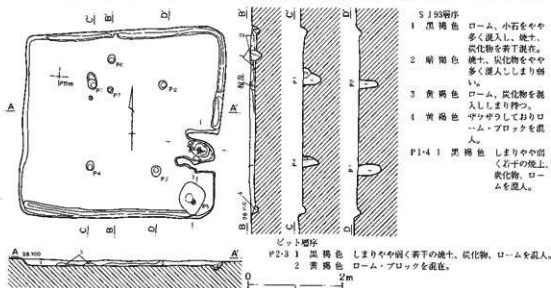


第292図 第92号住居跡出土遺物(2)

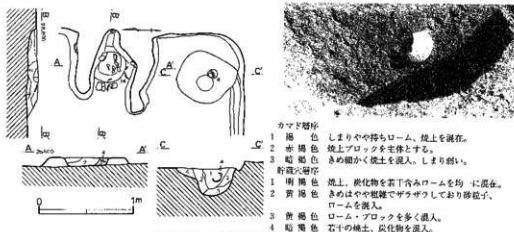
08	15	差	(24.0)			W・B・Ua・U・K	B	鈍い褐色	30%	床敷	111
09	11	差	(14.0)	(6.8)	(26.5)	W・B・Ua・U・G	A	淡棕色	40%	覆土	2
10	3	差	(18.0)			G	A	橙 色	30%	覆土	114, 116
11	17	差	7.8			W・B・U・S・G	A	赤棕色	10%	覆土	2
12	2	差	16.4			G	A	橙 色	40%	覆土	一括, 36, 37
13	18	差		7.2		G	A	明褐色	40%	覆土	117
14	13	差		(7.6)		W・B・U・Ha・G	A	橙 色	5%	カマド	113
15	14	差		(9.2)		W・B・U・Ha・G	A	橙 色	5%	カマド	9
16	1	差	18.6	6.0	35.0	G	A	明褐色	85%	貯穴	7
17	19	小型差		7.8		G	A	明褐色	15%	覆土	116
18	4	差	24.0	8.4	29.5	G	A	明赤褐色	60%	カマド	1, 116
19	12	差	(22.0)	(10.0)	(36.5)	W・B・K・U・G	A	橙 色	30%	覆土	1, 113

第93号住居跡 (第293図)

P-10・11 Grid に位置する。新旧関係はない。平面形は整った隅丸方形を呈する。規模は東西4.25m、南北3.92m、深さ11cmを測る。主軸の示す方位はN-88°-Eを指す。覆土は焼土、炭化物、ロームを含む黒褐色土が主体である。カマドは東壁の東寄りにあり、袖部の遺存は良好である。規模は両袖部外側で0.90m、内側で0.42m、長さ0.83mを測る。壁外への掘り込みはない。燃焼部は径40cm、深さ4cm程の浅い皿状を呈する。貯蔵穴は南東コーナーにあり、形状は不整形、規模は東西0.56m、南北0.67m、深さ29cmを測る。主柱穴P1~P4は形状円形、規模は径20~35cm、深さ35~50cmを測る。柱間距離は東西1.4m、南北1.75mでそれぞれ等間となり。主柱穴で画された内区は整った長方形をなす。P6、P7は性格不明。壁溝は西壁とカマド、貯蔵穴を除く部分に認められる。幅20cm、深さ8cmを測る。遺物は出土総数96点を数える。カマドを中心に貯蔵穴、P4周辺に集中している。カマド内から高坏(2)と甕(10)、小型甕(6)が、貯蔵穴内か



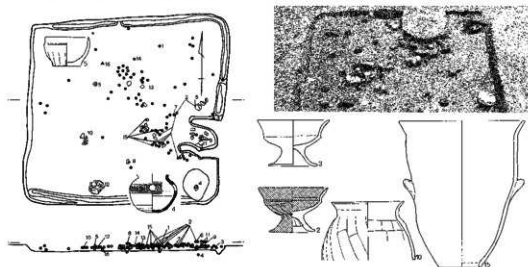
第293図 第93号住居跡



第294図 第93号住居跡カマド・貯蔵穴

ら甕(4)、P4の周周から小型甕(15)、甕(12)が出土している。また、カマドの脇(北側)から須恵器が出土している。

出土遺物(第296図)高坏は坏部口縁が外反りで大きく外傾し、口縁と体部を画する稜は弱く、体部は浅い。須恵器は口縁部を欠失している。肩部の稜は不鮮明で、胴部上半に篋描き沈線を2条めぐらし、その間を櫛描列点文により充満する。穿孔は1穴、径1.58mmを計る。甕は長胴が主体で縦位の篋削りが施こされるが、刷毛目整形もみられる(9)。甕は口縁部が僅かに外傾し、底部が急にすばまり把手をもつ(15)は丁寧なナデが加わる。(14)は胴部が直線的で横位の篋削り整形。(16)は鉄製鎌で先端部が欠失し、50%遺存。

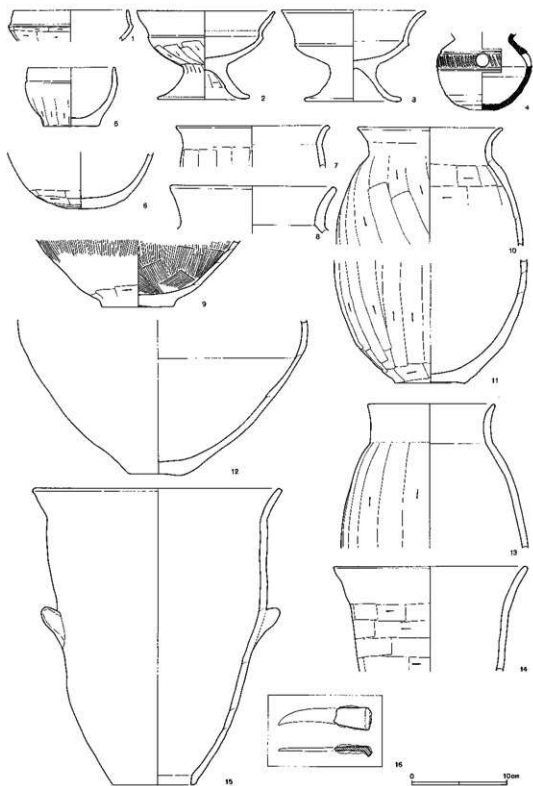


第296図 第93号住居跡遺物分布

第93号住居跡遺物観察表(第296図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	5	坏B	(12.0)				W・B・U・S・G	A	橙色	10%	覆土	4
02	3	高坏	14.6		9.3	375	G	A	明赤褐色	95%	カマド	52, 55, 62, 79
03	4	高坏	15.0	10.2	9.5		G	A	鈍い黄褐色	60%	カマド	91
04	1	須恵		2.7			G	A	灰白色	85%	貯穴	72
05	6	鉢	9.2	5.8	6.2	230	B・W・Ha・U・G	A	橙色	90%	覆土	49
06	12	小型甕					W・B・K・U・Ha	A	褐色	20%	カマド	52
07	8	甕	(16.0)				W・B・U・K・S	A	鈍い赤褐色	5%	覆土	63
08	7	甕	(17.0)				W・B・K・U・S	A	淡赤褐色	5%	覆土	41
09	13	甕		7.8			W・B・K・U・S	A	明赤褐色	20%	覆土	88
10	9	甕	(15.0)				W・B・U・S・G	A	褐色	20%	覆土	43
11	14	甕		7.6			W・B・U・K・S	A	赤褐色	20%	カマド	89, 90
12	15	甕		5.5			G	A	明黄褐色	25%	床直	50
13	2	甕	13.4				G	A	鈍い橙色	25%	覆土	46
14	11	甕	(20.0)				W・R・R・Ha・U	A	淡橙色	10%	覆土	3
15	16	小型甕	(26.4)	8.7	30.8		G	A	明黄褐色	20%	床直	44, 53, 57, 77
16	17	鉄製鎌					G	C		10%	覆土	33

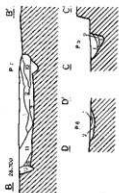
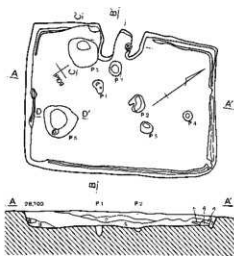




第296图 第93号住居跡出土遺物

第94号住居跡 (第297図)

P-10 Grid に位置する。新旧関係はない。形状は南北に長軸をとる長方形を呈する。規模は東西3.11m、南北4.07m、壁高33cmを測る。主軸の示す方位はN-52°-Wを指す。覆土は壁際に焼土、炭化物を多量を含む暗黄褐色土が認められるが、主体は焼土を含む黒褐色土である。カマドは北壁の西寄りにあり袖部の遺存は良好である。規模は両袖部外側で0.98m、内側で0.32mを測る。壁外への掘り込み、燃焼部の掘り込みは認められない。貯蔵穴はカマドの南に隣接しており、形状は不整形、規模は東西0.56m、南北0.70m、深さ38cmを測る。ピットは6ヶ所検出された。平面規模は様々に径20~70cmを測るが、深さは10~20cmと浅い。壁溝は南壁および北壁下で一部途切れる他はほぼ全周する。幅17cm、深さ5cmを測る。遺物はカマド内から高坏(3)が逆位で出土した他は覆土中から完形の坏2点(1、2)、支脚が出土している。出土総数36点を数える。

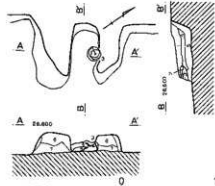


- 5 J94層序
- 1 黒褐色 ソフトローム、ローム・ブロックを密に混入。
  - 2 黒褐色 少量のローム・ブロックを混入。他に混入物なし。
  - 3 黒褐色 焼土、木炭、ローム・ブロックを多量に混入。
  - 4 暗黄褐色 多数のローム・ブロック
  - 5 焼土
  - 6 黒褐色 多数のローム・ブロックを混入。
  - 7 暗褐色 多数のソフトロームを混入。
  - 8 ローム (ソフトローム)
  - 9 黒褐色 多数の焼土を混入。
  - 10 黒褐色 多量の焼土、木炭を混入。
  - 11 暗黄褐色 ソフトローム
  - 12 暗黄褐色
  - 13 暗黄褐色

- 貯蔵穴層序
- 1 暗褐色 ソフトローム、ローム・ブロックを少量混入。
  - 2 暗褐色 ローム・ブロックを密に混入。
  - 3 暗黄褐色 ローム・ブロック、ソフトロームを基調とする。

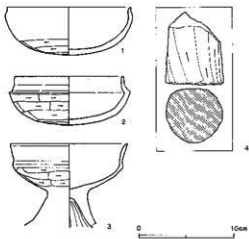
- ピット層序
- F6 1 黄褐色 鈍い色をしている。ローム・ブロックを密に混入。
  - 2 暗黄褐色 ソフトロームを少量混入。よくしまっている。

第297図 第94号住居跡



- カマド層序
- 1 黒褐色 砂質粘土を少量混入。
  - 2 暗黄褐色 砂質粘土である。
  - 3 (水化砂質粘土である)
  - 4 暗褐色 砂質粘土、焼土を多量に混入。
  - 5 黒褐色 ローム・ブロックを多量に混入。
  - 6 暗黄褐色 焼土を密に混入。砂質粘土である。
  - 7 暗褐色 カーボン、灰土を少量混入。

第298図 第94号住居跡カマド



第299図 第94号住居跡出土土遺物

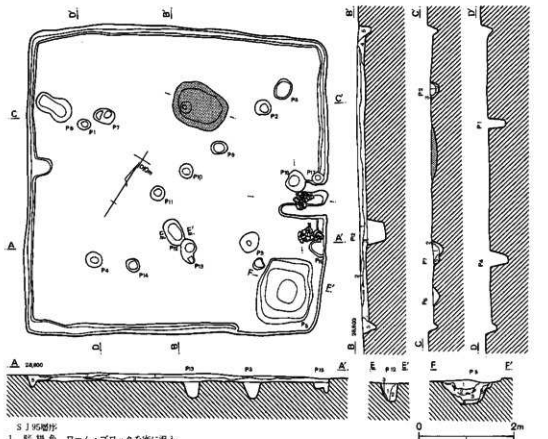
出土遺物（第299図）模倣坏は出土していない。（1、2）はやや浅めの作りで、赤彩している。高坏（3）は口縁部が肥厚し、受部も丸みをもつ。

第94号住居跡遺物観察表（第299図）

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	3	坏A	(13.0)				W・R・U・K・G	A	赤褐色	40%	覆土	28
02	2	坏B	11.6		5.1	195	W・B・U・S・G	A	鈍い橙色	90%	覆土	34
03	1	高坏	12.3				G	A	明赤褐色	85%	カマド	36
04	4	支脚					W・B・U・Ila・S	A	橙 色	30%	覆土	19

第95号住居跡（第300図）

O・P-9・10 Gridに位置する。新旧関係はない。形状は整った方形を呈する。規模は東西6.40m、南北6.43m、深さ16cmを測る。主軸の示す方位はN-56°-Eを指す。覆土はシルト質の



3 J 貯蔵序

- 1 暗褐色 ローム・ブロックを密に混入。
- 2 赤褐色 焼土。
- 3 黒褐色 ローム・ブロックを密に混入。シルト質土である。
- 4 黒褐色 ローム・ブロック、焼土を密に混入。
- 5 黒褐色 ソフトロームを密に混入。シルト質である。

貯蔵層序

- 1 暗褐色 焼土、ローム・ブロックを混入。
- 2 暗褐色 黒褐色シルト・ブロック、焼土を多量に混入。
- 3 暗赤褐色 焼土、ローム・ブロックを基調とする。
- 4 暗褐色 砂礫を多量に混入。
- 5 暗褐色 砂礫、ソフトロームを多量に混入。よくしまっている。

ピット層序

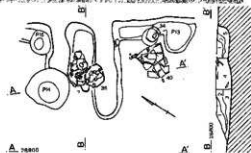
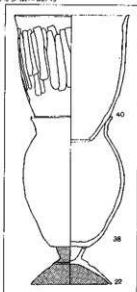
- P 2 1 暗褐色 小粒ローム・ブロック（5mm）を密に混入。
- 2 暗赤褐色 ソフトローム、ローム・ブロックを密に多量に混入。
- 3 暗褐色 ローム・ブロックを少量混入。
- P 7 1 暗褐色 砂礫、ロームを混入。
- 2 暗赤褐色 ソフトローム、ローム・ブロックを密に混入。
- 3 暗赤褐色 ソフトローム、ローム・ブロックを密に混入。
- P 12 1 暗褐色 ソフトロームを基調とする。
- 2 暗褐色 ローム・ブロックを密に混入。よくしまっている。
- 3 暗赤褐色 ソフトローム・ブロックを基調とする。

第300図 第95号住居跡



カマド層序

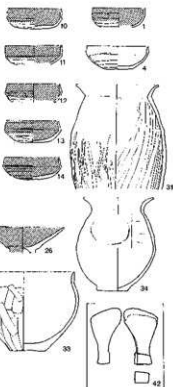
- 1 (黄灰白色粘土)
- 2 赤褐色 上記灰白色粘土の赤化部分である。
- 3 黒褐色 ローム・ブロックを密に混入。
- 4 暗褐色 焼土、ソフトロームを混入。
- 5 黒褐色 焼土、灰白色粘土を多量に混入。



カマド層序

- 1 暗褐色 焼土、カーボンを少量混入。
- 2 暗褐色 赤化粘土をブロック状に混入。
- 3 砂質粘土 内側は赤化している。
- 4 黒褐色 ローム・ブロック、焼土を混入。
- 5 暗赤褐色 砂礫、ローム・ブロックを混入。

第301図 第95号住居跡カマド



第302図 第95号住居跡遺物分布



- 1 暗褐色 カarbon、灰土、ロームを少量混入。  
 2 暗褐色 カarbon、灰土を少量混入、よくしまっている。  
 3 暗黄褐色 カarbonを少量混入、ローム・ブロック混入。

第303図 第95号住居跡炉跡

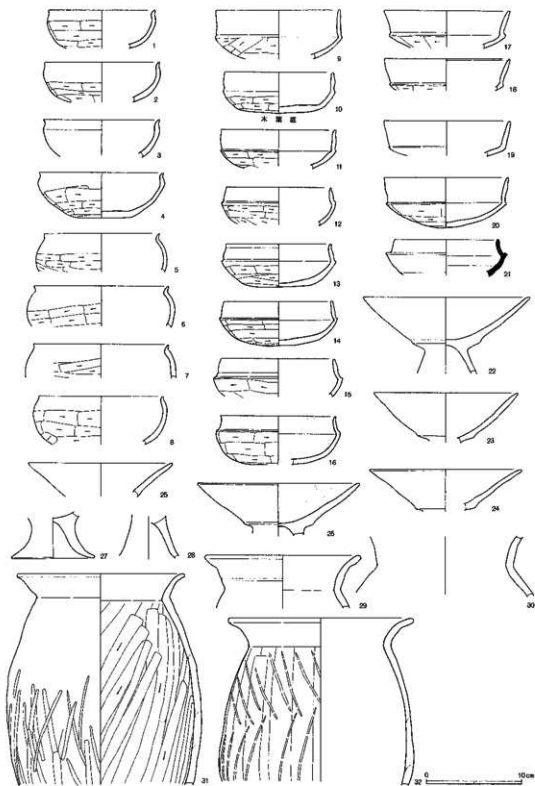
黒褐色土が主体をなすが、ブロック状に焼土塊が混入している。カマドは東壁のほぼ中央にある。袖部の遺存は比較的良好であるが、北袖の先端は後出のピットにより破壊されている。規模は両袖間外側で0.82m、内側で0.22m、長さ0.98mを測る。壁下への掘り込み、燃焼部の掘り込みはない。貯蔵穴は東コーナーにあり、平面形状は略長方形、規模は東西1.20m、南北1.38m、深さ49cmを測る。P1、P2間には地床炉が存在する。形状は楕円形、規模は長軸1.18m、短軸0.93m、深さ8cmを測る。底面は赤変している。ピットは17ヶ所検出された。後出のもの、先行するもののがかなりあると思われる。主柱穴はP1～P4が相当し、形状は円形、規模は30～40cm、深さ20～40cmを測る。検出された遺物総数は290点を数える。遺物の出土傾向はカマド、カマド周辺、貯蔵穴中、P2の周囲、P

3、P4間、P4の6ブロックに分けられる。多くは床直あるいは床面から若干浮いた状態で出土する。カマド内から、高坏(22)、小型甕(34)、貯蔵穴から甕2個体(29、32)が、北西コーナー近くから完形の支脚(38)が出土している。

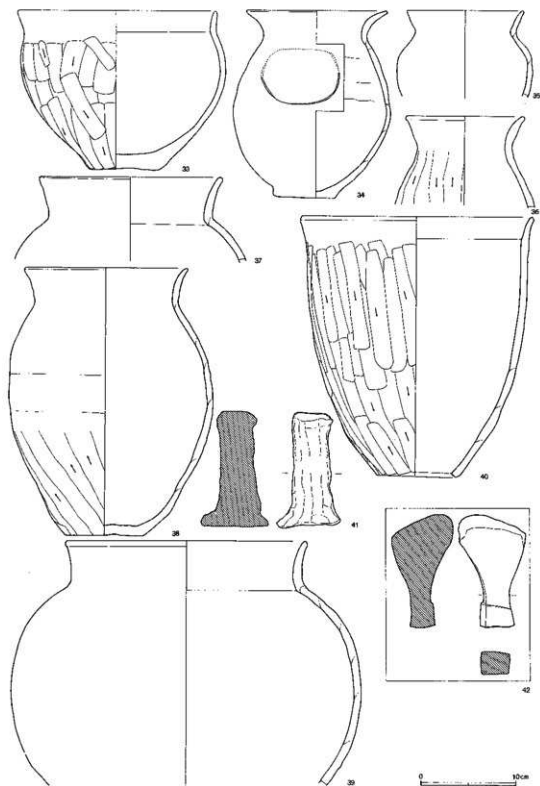
出土遺物(第304・305図)坏A(1～8)、坏B(10～16)、坏C(9、17～20)、坏F(21)の21個体が出土している。数量的には坏A・Bが主体を占める。高坏は直線的で大きく開き、下端に段をもつ坏部を小型で開きの小さな脚部がのせる。甕は長胴甕が主体を占めるが、口縁部中に段を有する(29)を含め球形胴部を呈する(39)、小型の(35、36)、胴部上半に円形の焼成前穿孔(5.8×8.0)がみられる(34)がある。また、直口広口の(33)の存在など多彩である。甕は口縁部の変化が小さく、底部のすぼまり方が急な(40)がある。(41)は完形の支脚で全長12.1cm、先端の径4.2×4.0cm、基部の径7.1×6.7cm、重量460gを計る。(42)は砥石で50%遺存の欠損品であるが、4面を使用。遺存する全長11.7cm、端部の規模7.2×6.4cm、中位の規模3.9×3.2cm、重量420gを計る。

第95号住居跡遺物観察表(第304・305図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	18	坏A	(11.0)				W・B・R・K・G	A	棕色	30%	覆土	277
02	8	坏A	(12.0)				W・B・U・S・G	A	淡棕色	30%	覆土	223
03	17	坏A	(12.0)				W・B・U・K・G	A	赤棕色	30%	覆土	85
04	25	坏A	(13.0)	(4.8)			W・B・K・U・G	A	棕色	50%	覆土	34
05	20	坏A	(12.0)				W・K・B・S・G	A	棕色	20%	覆土	181
06	23	坏A	(14.0)				W・B・U・S・G	A	赤棕色	10%	覆土	134
07	19	坏A	(14.0)				W・B・K・S・G	A	棕色	10%	覆土	272
08	21	坏A	(13.0)				W・B・K・S・G	A	淡棕色	30%	覆土	90,91
09	22	坏C	(13.0)				W・B・S・U・G	A	棕色	20%	覆土	275
10	7	坏B	11.6		4.3	160	W・B・K・U・G	A	浅黄棕色	95%	截土	290
11	13	坏B	(12.0)				W・B・K・U・G	A	赤棕色	40%	覆土	237
12	10	坏B	(11.0)				W・B・U・K・G	A	棕色	30%	覆土	120
13	14	坏B	11.2	(4.4)			W・B・U・K・G	A	鈍い棕色	50%	覆土	27
14	6	坏B	11.4		4.6		B・W・K・U・S	A	赤棕色	80%	覆土	283
15	24	坏B	(12.0)				W・B・U・S・G	A	赤棕色	10%	覆土	278



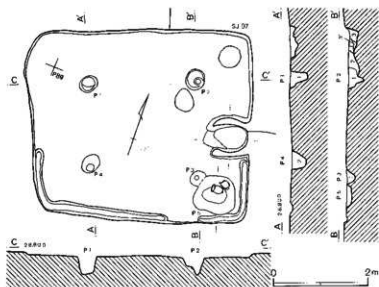
第304图 第95号住后跡出土遺物(1)



第305图 第95号住居跡出土遺物(2)

16	15	坏B	(12.0)			W·R·R·S·G	A	橙 色	40%	覆土	242
17	11	坏C	(13.0)			W·B·U·G	A	橙 色	10%	覆土	177
18	12	坏C	(13.0)			W·R·B·U·G	A	橙 色	10%	覆土	302
19	9	坏C	(13.0)			W·R·B·G	A	橙 色	20%	覆土	97
20	16	坏C	(13.0)		5.3	W·R·B·S·G	A	橙 色	60%	覆土	251
21	5	環坏	(11.0)			W·R·G	A	灰色	30%	覆土	279
22	29	高坏	16.6			W·B·U·K·G	A	明赤褐色	60%	カマド	
23	28	高坏	(15.0)			W·B·K·S·G	A	赤褐色	20%	覆土	66, 227, 231
24	26	高坏	(16.0)			W·B·R·U·G	A	橙 色	20%	覆土	239
25	30	高坏	15.0			W·B·R·U·G	A	橙 色	5%	覆土	242
26	27	高坏	17.0			B·W·K·S·G	A	橙 色	30%	覆土	56
27	32	高坏		8.6		W·R·R·S·G	A	橙 色	40%	覆土	260
28	31	高坏				W·B·S·G	A	明赤褐色	5%	覆土	96
29	34	堦	(16.0)			W·R·Ha·U·G	A	橙 色	5%	貯穴	
30	35	堦				W·B·K·U·Ha	A	橙 色	5%	覆土	278
31	4	堦	17.5			G	A	明褐色	30%	覆土	125, 195, 261
32	41	堦	(19.1)			G	A	明赤褐色	30%	貯穴	
33	3	堦	20.7	7.2	16.5	G	A	明赤褐色	75%	覆土	289
34	1	小型堦	(14.5)	6.9	19.5	G	A	橙 色	70%	カマド	274
35	33	小型堦	(12.0)			W·B·Ha·U·G	A	灰褐色	20%	覆土	199
36	36	小型堦	(12.0)			W·B·U·S·G	A	浅黄褐色	10%	覆土	269
37	37	堦	(19.2)			W·B·R·Ha·S	A	橙 色	5%	覆土	144, 161, 180
38	40	堦		8.2		G	A	褐色	65%	覆土	278
39	42	堦	(25.0)			W·B·Ha·U·S	A	浅黄褐色	20%	覆土	284
40	2	甃	24.0	8.3	27.2	G	A	明赤褐色	完形	覆土	268
41	38	土脚				G	A	赤褐色	完形	覆土	286
42	30	礎石				G	A		90%	覆土	285

第96号住居跡 (第306図)



S J 96層序

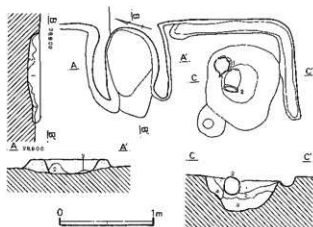
- 1 灰褐色+砂質ローム 掘り型埋め戻し上。
- 2 灰褐色+砂質ローム 掘り型埋め戻し上。1層より砂質ロームが少くない。
- 3 灰黄褐色 掘り型埋め戻し上。灰褐色土を壁かに含むロームである。
- 3' 砂質分の強い部分である。

ピット番号

- P1・2・3 1 灰褐色 ローム、焼土を混入。  
P4 2 黒褐色 ロームを混入。

第306図 第96号住居跡





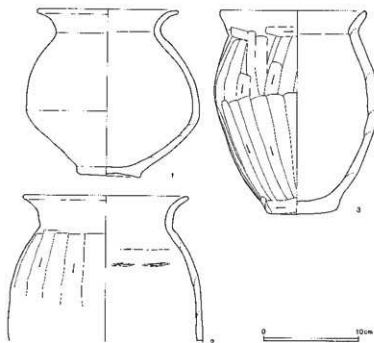
- カマド層序
- 1 灰褐色 焼土、焼土ブロックをこくわずかに混入。
  - 2 灰褐色 灰褐色土+山砂+粘土で構成される。カマド内部に焼土、炭化物、灰等がほとんど見られず使用されていなかった可能性が高い。
- 貯蔵穴層序
- 1 黒褐色 ロームを混入。
  - 2 灰褐色 ロームを混入。
  - 3 黒褐色 焼土、ローム、炭化物を混入。
  - 4 灰褐色 砂質ロームを混入。

第307図 第96号住居跡カマド

P-8 Grid に位置する。新旧関係は97号住居跡を切る。平面形状は、東西に長軸をとる隅丸長方形を呈する。規模は東西4.57m、南北3.93m、壁高10cmを測る。主軸の示す方位はN-73°-Eを指す。覆土はロームを含む暗褐色土である。カマドは東壁のはほぼ中央にあり、袖部を僅かに遺存。袖部の規模は両袖部外側で0.92m、内側で0.47m、長さ0.95mを測る。壁外への掘り込みはない。燃焼部は東西0.95m、南北0.60m、深さ6cm程の浅い皿状の掘り込みが相当する。貯蔵穴は南東コーナーにあり、形状は不整形、規模は東西0.85m、南北0.77m、深さ36cmを測る。ピットは5

ヶ所検出された。内主柱はP1~P4が該当する。規模は径35~45cm、深さ25~40cmを測る。壁溝は南半部のみ認められる。幅20cm、深さ4cmを測る。出土遺物は僅か6点である。全てカマド周辺、貯蔵穴から出土している。

出土遺物(第308図)全て甕である。(1)は胴部下半に最大径をもち、接合痕を顕著に残す。(2)は長胴甕で甕ナデが加わる。(3)は粗雑な作りで器壁が厚い。

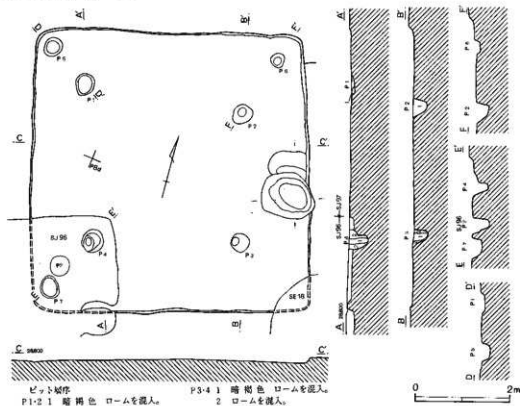


第308図 第96号住居跡出土遺物

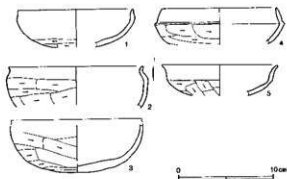
第96号住居跡物観察表 (第308図)

No	測	器種	口径	底径	高さ	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	小型甕	15.0	6.6	17.3		G	A	赤黒色	60%	野穴	
02	3	甕	(17.0)				W・B・R・K・S	A	赤褐色	20%	覆土	5
03	1	小型甕	15.2	12.0	21.2		G	A	橙 色	完形	覆土	1

第97号住居跡 (第309図)



第309図 第97号住居跡



第310図 第97号住居跡出土遺物

O・P-8・9 Gridに位置する。新旧関係は98号住居跡、96号住居跡、18号井戸跡に切られる。形状は整った方形を呈し、規模は東西5.83m、南北5.82m、壁高は8cmを測る。主軸の示す方位はN-74°-Eを指す。カマドは東壁の南寄りにあり、遺存状態は掘り型だけが検出できる程度である。形状は楕円形を呈し、東西1.13m、南北0.97m、深さは最

深部で21cmを測る。主柱穴はP1～P4で、形状は円形、規模は40～45cm、深さは10～30cmを測る。壁溝は存在しない。遺物は坏5点で、(3)以外は全て一括で扱った。

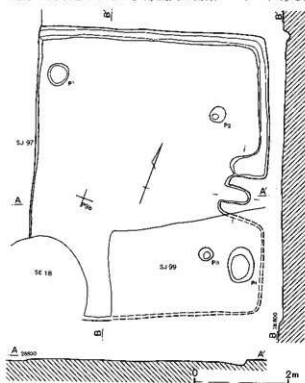
出土遺物(第310図)坏5点の内訳は、坏A(1、2)、坏B(4)、坏E(5)、その他坏G(3)である。(1～4)は赤彩。

#### 第97号住居跡遺物観察表(第310図)

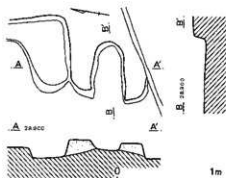
No	別	器種	口径	底径	器高	重り	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	坏A	(12.0)				W・B・R・K・G	A	鈍い棕色	20%	覆土	一括
02	4	坏A	(14.0)				W・B・K・S・G	A	橙色	10%	覆土	一括
03	5	坏	(13.8)		(5.6)		B・W・R・S・G	A	淡棕色	40%	覆土	1
04	1	坏B	(12.0)				W・B・K・S・G	A	橙色	20%	覆土	一括
05	3	坏E	(12.0)				W・B・K・S・G	A	橙色	10%	覆土	一括

#### 第98号住居跡(第311図)

O・P・9 Gridに位置する。新旧関係は本跡のカマドを99号住居跡に壊され、本跡は97号住居跡のカマドを壊している。前後関係を整理するとS J 97→S J 98→S J 99→SE18となる。形状は整った方形を呈する。遺存する規模は東西4.97m、南北6.13m、深さ8cmを測る。主軸の示す方位はN-71°-Eを指す。カマドは東壁のやや南寄りにあり、袖部は南側を99号住居跡に一部削り取られている。規模は両袖間外側で1m(推定)、内側で0.32m、長さ0.85mを測る。壁外および燃焼部の掘り込みはない。貯蔵穴は南東コーナーにある。上半は壊されているが、遺存する規模は東

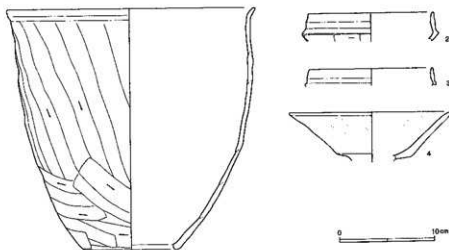


第311図 第98号住居跡



第312図 第98号住居跡・カマド

西0.50m、南北0.76m、深さ23cmを測る。主柱穴はP3が上端を99号住居跡に破壊され、北西に配された(P4)は18号井戸跡により消滅している。形状は円形、規模は径35~45cm、深さ15~50cmを測る。壁溝は北および東壁に認められ、幅20~25cm、深さ10cmを測る。出土遺物は3点到過ぎない。



第313図 第98号住居跡出土遺物

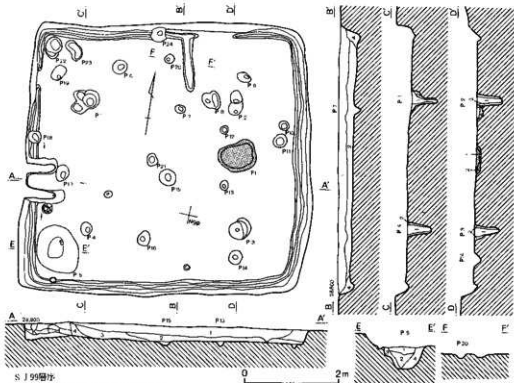
第98号住居跡遺物観察表 (第313図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	鉢	26.0	10.0	25.1		G	A	鈍い橙色	90%	覆土	カマド2
02	2	高坏	17.2				W・B・Ha・U・K	A	橙色	5%	覆土	
03	3	坏B	(13.0)				W・B・K・U・G	A	淡い橙色	5%	覆土	一括
04	4	坏B	(13.0)				W・U・G	A	赤橙色	5%	覆土	一括

第99号住居跡 (第314図)

O・P-9 Gridに位置する。新旧関係は北で98号住居跡を切り、南で100号住居跡と接するが先後関係は不明。形状は整った方形を呈する。規模は東西5.59m、南北5.41m、壁溝20cmを測る。主軸の示す方位はN-58°-Eを指す。覆土は焼土、炭化物、砂礫を混入する暗褐色土が主体、床面は粘性の強い暗褐色が薄い層をなして広く覆う。カマドは東壁の南寄りにあり、袖部の遺存は良好。規模は両袖部外側で0.88m、内側で0.30m、長さ0.92mを測る。壁外、燃焼面への掘り込みはない。貯蔵穴は南東コーナーにあり、形状は円形、規模は東西1.07m、南北1.02m、深さ54cmを測る。主柱穴はP1~P4で、全て途中でテラスをもつ。形状は不整形円形、規模は径40~60cm、深さ45~85cmを測る。壁溝は幅14~31cm、深さ5cmを測る。遺物の出土総数は147点である。遺物が集中するのは、カマド、貯蔵穴およびその周囲で、特に貯蔵穴、周辺から坏4個体、高坏2個体、甕1個体が出土している。

出土遺物 (第316図) 坏A(1)、坏C(12)は各1個体で大半は坏Bに占められる。坏Bの内、本来坏Cに含めるべき(9)も含んでいる。高坏は直線的に大きく開き、下端に段を有し、脚部は柱状部に膨らみをもつ(13)がある。甕は長胴が主体で、口縁部は緩やかに移行、小型甕は口縁が「く」の字状に強く外反。甕は口径が大きく、口縁の変化は小さい。底部のすばまりは急で、底径は小さい。



S 199層序

- 1 暗褐色 焼土、カーボンを少量混入
- 2 暗褐色 砂礫、焼土、カーボンを少量混入
- 3 暗褐色 カーボン、ロームを混入、粘性強い
- 4 黒褐色 礫を多量に混入
- 5 暗褐色 焼土、カーボンを多量に混入
- 6 暗褐色 砂礫、ロームを多量に混入
- 7 暗褐色 砂礫を少量混入
- 8 赤褐色 焼土
- 9 黒褐色 混人物なし
- 10 暗褐色 焼土、カーボンを少量混入
- 11 黒褐色 混人物なし
- 12 暗褐色 砂礫及びロームを多量に混入

断面穴層序

- 1 暗褐色 砂礫、焼土を少量混入
- 2 暗褐色 焼土、ロームを少量混入
- 3 暗赤褐色 焼土を密に混入
- 4 暗褐色 ローム、砂礫を多量に混入
- 5 暗褐色 焼土を多量に混入

- 6 暗赤褐色 ロームを多量に混入
- 7 暗黄褐色 ロームを多量に混入

ピット層序

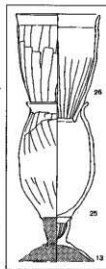
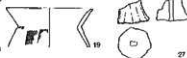
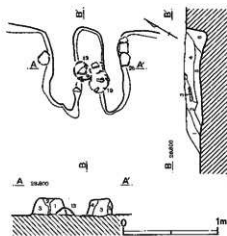
- |       |       |                          |
|-------|-------|--------------------------|
| P 1-4 | 1 暗褐色 | しまりやや弱くローム、炭化物、焼土を混入（柱状） |
|       | 2 暗褐色 | 焼土、ロームを混入                |
|       | 3 黄褐色 | ローム（径2-3mm）を混入し、しまり持つ    |
|       | 4 暗褐色 | 焼土を若干混入、しまり持つ            |
|       | 5 赤褐色 | 焼土、炭化物、ロームを混入            |
| P 2   | 1 暗褐色 | しまりやや弱くローム、炭化物、焼土を混入（柱状） |
|       | 2 暗褐色 | 焼土、ロームを混入                |
|       | 3 赤褐色 | 焼土、炭化物、ロームを混入            |
| P 3   | 1 暗褐色 | しまりやや弱くローム、炭化物、焼土を混入（柱状） |
|       | 4 暗褐色 | 焼土を若干混入、しまり持つ            |
|       | 5 暗褐色 | ローム、焼土を混入、しまり弱い          |
|       | 6 赤褐色 | 焼土、炭化物、ロームを混入            |

カマド層序

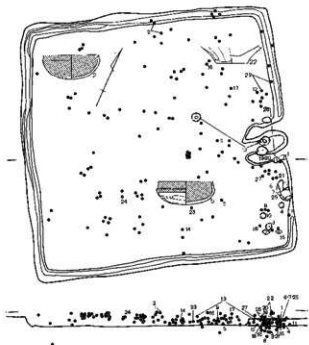
- 1 暗褐色 砂質粘土を多量に混入
- 2 暗褐色 砂質粘土、焼土を多量に混入
- 3 (砂質粘土)
- 4 (赤化砂質粘土)
- 5 黒褐色 ローム、焼土を少量混入
- 6 黄褐色 ローム、焼土を密に多量に混入

カマド（爐）層序

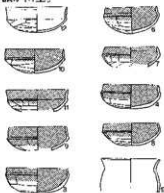
- 1 暗赤褐色 焼土を密に多量に混入
- 2 暗赤褐色 赤化粘土
- 3 暗赤褐色 砂質粘土
- 4 黒褐色 焼土を密に混入
- 5 黒褐色 砂質粘土を多量に混入



第314図 第99号住居跡・カマド



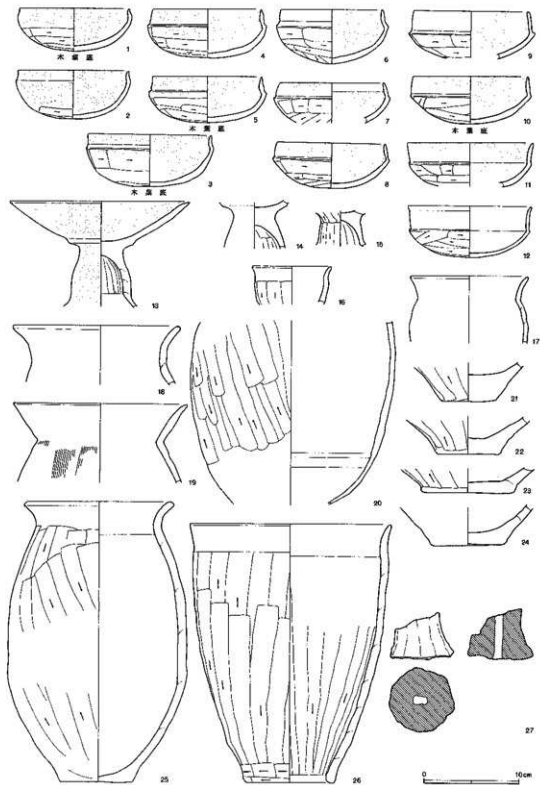
カマド内から支脚転用高坏、長胴甕、甌が出土。



第315図 第99号住居跡遺物分布

第99号住居跡遺物観察表 (第316図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	13	坏A	11.4	4.6			W・B・K・S・G	A	鈍い橙色	80%	覆土	143
02	11	坏B	(11.8)		(5.0)		W・B・K・S・G	A	赤褐色	30%	覆土	34, 37
03	6	坏B	13.2		5.4		W・B・K・U・G	A	赤褐色	80%	覆土	126
04	10	坏B	11.5		5.1		W・B・K・S・G	A	橙 色	60%	床底	124
05	9	坏B	11.6		4.7		W・B・S・U・G	A	橙 色	70%	覆土	109
06	12	坏B	(10.8)	(5.7)			W・B・K・U・G	A	橙 色	40%	覆土	123
07	5	坏B	(11.0)				W・B・K・S・G	A	赤褐色	30%	覆土	123
08	8	坏B	11.4		4.7		W・B・K・S・G	A	黄褐色	80%	貯穴	138
09	7	坏C	(12.0)				W・D・R・S・G	A	橙 色	30%	床底	137
10	14	坏C	12.0		5.0	215	W・B・K・S・G	A	鈍い橙色	90%	貯穴	134
11	4	坏C	(13.0)				W・B・K・S・G	A	赤褐色	30%	貯穴	112
12	3	坏C	12.8		5.4	160	W・B・U・S・G	A	浅黄褐色	定形	覆土	121
13	16	高坏	19.4				W・B・K・S・G	A	橙 色	80%	床底	139, 147
14	26	高坏					W・B・S・K・G	A	赤褐色	20%	貯穴	135
15	27	高坏					W・B・K・S・G	A	淡褐色	20%	貯穴	125
16	23	小型甕	(8.0)				W・B・U・S・G	A	浓褐色	20%	覆土	42
17	25	小型甕	(12.0)				W・B・K・S・G	A	橙 色	20%	覆土	45
18	24	甕	(18.0)				W・B・U・S・G	A	橙 色	5%	貯穴	115
19	20	甕	(18.0)				W・B・K・U・S・G	A	浅黄褐色	10%	覆土	140
20	2	甕					G	A	赤褐色	30%	覆土	140
21	19	甕		5.8			W・B・U・S・G	A	橙 色	5%	床底	114
22	18	甕		6.4			W・D・R・U・S	A	赤褐色	5%	覆土	47, 49
23	17	甕		9.8			W・U・R・K・S	A	橙 色	5%	覆土	106
24	21	甕		7.6			W・B・H・U・S	A	橙 色	10%	覆土	21



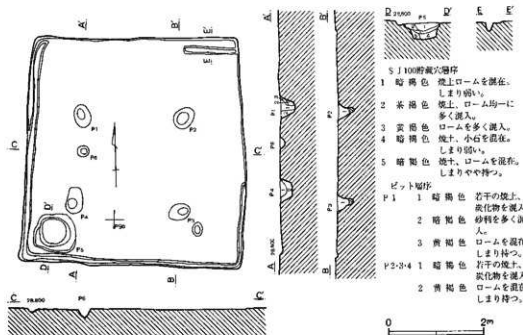
第316图 第99号住居跡出土遺物

25	1	罌	(15.8)	7.5	29.2		G	A	赤褐色	85%	覆土	123
26	15	甌	(21.0)	(9.0)	(27.0)	827	W-R-Ha-S-G	A	橙 色	20%	カマド	90,141
27	22	支脚					G	B	赤褐色	30%	覆土	96

### 第100号住居跡 (第317図)

P-Q Gridに位置する。新旧関係は99号住居跡と接触するが先後関係は不明。形状は正方形を呈する。規模は東西4.70m、南北4.71m、壁高11cmを測る。主軸の示す方位はほぼ磁北を指す。覆土は焼土、ロームを多量に混入する暗褐色土が主体をなす。カマドは検出されなかったが、南壁西コーナー寄りに焼土、砂質粘土の分布が1m四方の範囲で認められる。貯蔵穴は南西コーナーにあり、形状は不整形、中位に段を持ち2重の掘り込みを呈する。規模は東西0.90m、南北0.85m、深さ33cmを測る。ピットは主柱穴4本の他、P1の西およびP2、P3間に認められ計6ヶ所が検出された。主柱穴は形状楕円形、規模は径50cm、深さ30~50cmを測る。壁溝は西壁下と北壁下の一部に設けられ、幅20cm、深さ8cmを測る。出土遺物の総数は28点で全て貯蔵穴内から出土している。

出土遺物(第318図)罌は長胴で、器壁が比較的厚い。整形は縦位の飽削り後、ナデ整形が加わる。甌は口径が大きく、底部は急にすぼまり底径は小さい。

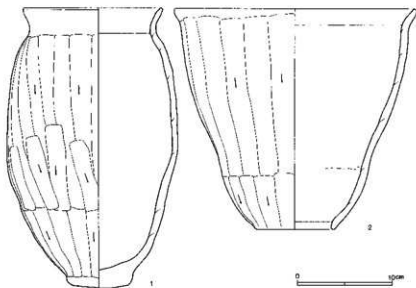


第317図 第100号住居跡

### 第100号住居跡遺物観察表 (第318図)

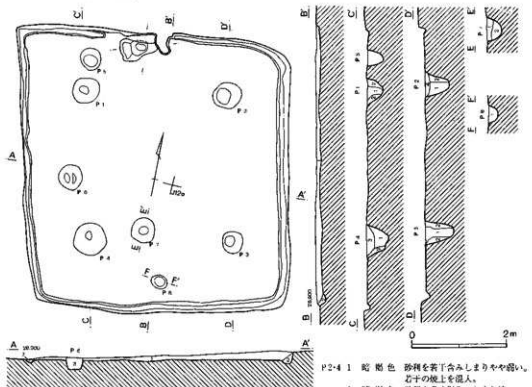
No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	罌		6.2	29.2		G	A	明黄褐色	65%	貯穴	14-17
02	1	甌	(25.5)	(8.4)	23.0		G	A	黄褐色	50%	貯穴	3.7.9.13





第318図 第100号住居跡出土遺物

第101号住居跡 (第319図)



S J 101層序

- 1 暗褐色 小砂粒を多く含みしまり強い。若丁の焼土。炭化物を混入。
- 2 暗褐色 ややきめ細かくしまり持つ。1層に比べやや明るい。
- 3 暗褐色 きめ細かくしまりやや弱い。砂、焼土を混入。

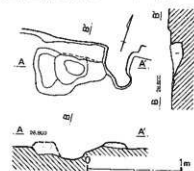
ピット層序

- P 1 1 暗褐色 砂粒を若干含みしまりやや弱い。若丁の焼土を混入。
- 2 暗褐色 砂粒を多く混入。しまり持つ。

- P 2-4 1 暗褐色 砂粒を若干含みしまりやや弱い。若丁の焼土を混入。
- 2 暗褐色 砂粒を多く混入。しまり持つ。
- 3 暗褐色 第1層に比べやや明るい。しまり持つ。
- P 3 1 暗褐色 砂粒を若干含みしまりやや弱い。若丁の焼土を混入。
- 2 暗褐色 砂粒を多く混入。しまり持つ。
- 3 暗褐色 第1層に比べやや明るい。しまり持つ。

第319図 第101号住居跡

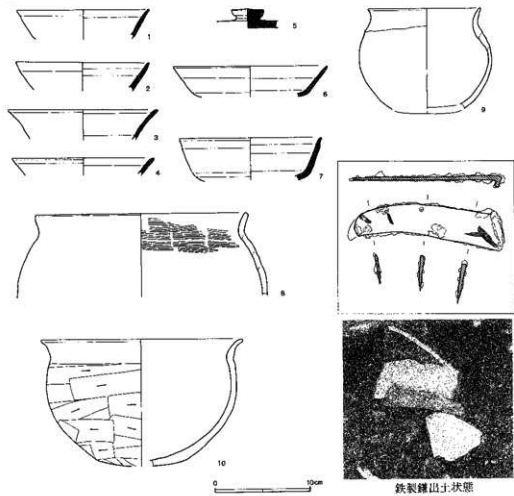
J-12 Gridに位置する。新旧関係はない。形状は不整形を呈する。規模は東西5.67m、南北5.84m、深さ15cmを測る。主軸の示す方位はN-11°-Wを指す。覆土は焼土、炭化物を含む暗褐色土が主体をなす。カマドは北壁のほぼ中央にあり、袖部の大半を失い、掘り型のみが遺存する。



カマド断面  
1 暗褐色 ローム、炭化物、焼土が混在。しまり欠き顕性なし。

壁外への掘り込みはもたず、径50cm、深さ10cm程の浅い皿状の掘り込みを燃焼面として使用。袖部は5~8cmの深さ、幅30cm程の掘り型が遺存。貯炭穴は存在しない。ピットはP1~P4が主柱穴、P8は棟上げ柱と考えられ、他は後出のと思われる。主柱穴の形状は円形、規模は径45~70cm、深さ30~60cmを測る。壁溝はカマド部分を除く各壁下を巡っている。幅26cm、深さ5cmを測る。遺物の出土総数は41点を数える。出土状態はカマド内から須恵坏2個体(2、7)、小型甕(9)、鉄製鎌は東壁下中央、P3の南から須恵器甕の胴部破片と共に出土している。

第320図 第101号住居跡カマド



鉄製鎌出土状態

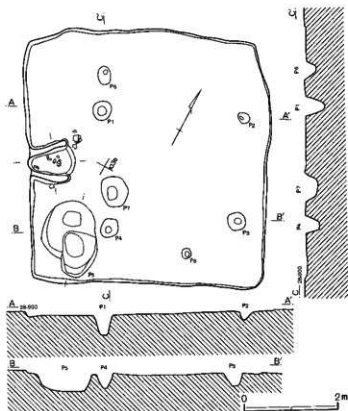
第321図 第101号住居跡出土遺物

鉄製鎌（第321図）刃先を僅かに欠失しているがほぼ全容が窺える。全長15.60cm、刃先部幅2.20cm、中央部2.90cm、基部3.60cm、厚さは刃先で2mm、中央で3.5mm、基部で0.45mmを計る。基部は8mm程を折り曲げている。表面は植物繊維が多量に付着している。

第101号住居跡遺物観察表（第321図）

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	7	須坏	(14.0)				G	A	褐灰色	5%	覆土	28
02	2	須坏	(14.0)				G	A	褐灰色	5%	カマド	7
03	5	須坏	(15.8)				G	A	黄灰色	5%	覆土	一拵
04	6	須坏	(15.0)				G	A	灰色	5%	覆土	一拵
05	1	須蓋					G	A	褐灰色	5%	覆土	一拵
06	3	須坏	(16.0)				G	A	灰色	30%	覆土	35
07	4	須坏	(15.0)				G	A	灰色	15%	カマド	2
08	8	甕	(22.0)				W・B・K・S・G	A	浅黄褐色	10%	覆土	40
09	10	小型甕	11.6				G	A	黄褐色	45%	カマド	6
10	9	甕	(21.0)		(13.3)		W・B・U・S・K	A	浅黄褐色	30%	覆土	31

第102号住居跡（第322図）



S J 102カマド切序

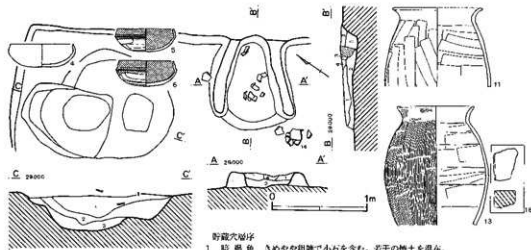
- 赤褐色 焼土を多く混入。しまり弱い。
- 暗褐色 きめ細かく焼土を混入。しまりやや弱い。
- 暗褐色 焼土、砂粒を混入。
- 褐色 きめ細かくしまり強い。
- 褐色 焼土を混入。しまり強い。

第322図 第102号住居跡

J・K-13 Gridに位置する。新旧関係はない。形状はやや不整の方形を呈する。規模は東西5.23m、南北5.34m、壁溝14cmを測る。主軸の示す方位はN-59°-Eを指す。覆土は焼土、炭化物をブロック状に混入する暗褐色土が主体をなす。カマドは西壁のほぼ中央に位置し、袖部は比較的良好に遺存する。規模は両袖間外側で0.90m、内側で0.48m、長さ0.85mを測る。壁外への掘り込みはない。燃焼面は東西1.0m、南北0.65m、深さ6cm程の浅い皿状をなす。貯蔵穴は南西コーナーにあり、形状は略隅丸方形で南にテラス状の付設部をもつ。規模は東西1.15m、南北1.60m、深さ43cmを測る。ピットは主柱穴P J-P 4の他2ヶ所が検出された。主柱穴は形状円形、径30-

40cm、深さ20~40cmを測る。主柱穴の柱間距離は東西2.8mで等間、南北は2.2~2.5mを測る。壁溝は存在しない。遺物は出土総数30点である。出土位置は全てカマド内と、その周囲、および貯蔵穴内に限られる。カマドおよびその周囲から高坏（8）、甕（13）、甌（15）のセットが、貯蔵穴内から甕3個体（10、11、14）が出土している。

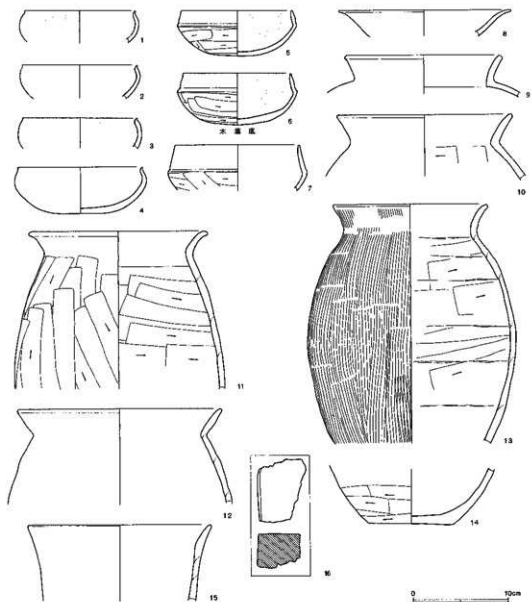
出土遺物（第324図）坏は坏Aが主体で坏B（5、6）、坏C（7）が従的に出土している。坏Aの内（4）は赤彩を施ささない。甕は長胴甕に限られるが、口縁部の外反の仕方にバリエーションがみられる。外面整形も多彩で、縦位の荒削り（11）、刷毛目（13）、ナデ整形を加える（12）がある。甌は口縁部の変化が乏しく直線的な作りである。（16）は砥石の小片である。



第323図 第102号住居跡カマド・貯蔵穴

第102号住居跡遺物観察表（第324図）

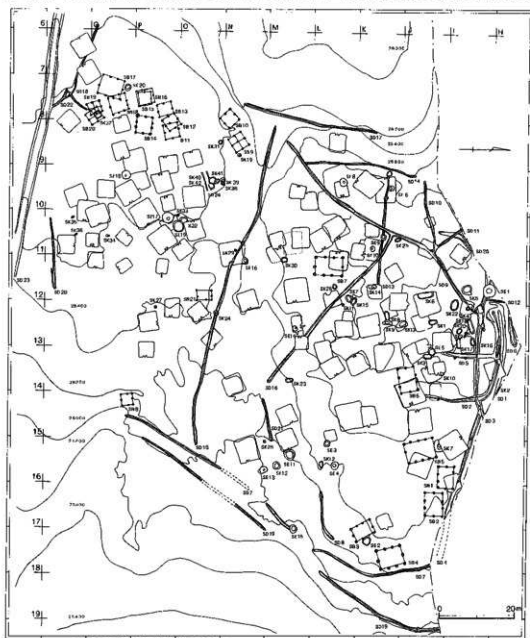
No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	5	坏A	(12.0)				W・B・R・S・G	A	赤橙色	10%	覆土	20
02	3	坏A	(12.0)				W・B・R・S・G	A	赤橙色	20%	覆土	30
03	6	坏A	(12.0)				W・B・S・G	A	暗赤灰色	20%	覆土	78
04	7	坏A	(13.0)		(4.8)		W・B・K・S・G	A	橙 色	70%	覆土	20
05	2	坏B	11.8	4.7			W・B・K・S・G	A	赤棕色	60%	覆土	2
06	1	坏B	11.4	5.4			B・W・K・S・G	A	浅黄褐色	80%	覆土	2.9
07	4	坏C	(13.0)				W・B・R・S・G	A	橙 色	10%	覆土	一拵
08	8	高坏	(18.0)				W・B・R・S・G	A	浅黄橙色	20%	カマド	3.6.9
09	10	盆	16.0				W・B・U・S・G	A	橙 色	10%	覆土	一拵
10	9	甕	(18.0)				W・B・U・K・S	A	赤橙色	10%	貯穴	1
11	15	甕	(18.5)				W・B・Ha・U・S	A	鈍い藍色	20%	貯穴	5
12	14	甕	(21.0)				W・B・Ha・U・G	A	橙 色	10%	覆土	一拵
13	11	甕	(16.0)				W・B・U・K・S	A	明褐色	30%	覆土	12
14	12	甕	(9.0)				W・R・U・Ha・S	A	橙 色	5%	貯穴	6
15	13	甌	(19.0)				W・B・R・S・G	A	赤棕色	5%	カマド	



第324図 第102号住居跡出土遺物

## (2) 掘立柱建物跡

掘立柱建物は21棟が検出された。内訳は桁行2間、梁行1間が1棟、桁行2間、梁行2間が9棟（内総柱建物3棟を含む）、桁行3間、梁行2間が10棟、桁行4間、梁行2間が1棟（総柱建物）である。分布は大きく2つに分かれる。一つは台地縁辺に集中するもので桁行3間、梁行2間の建物を中心とする北のグループと15号溝以南に分布する桁行2間、梁行2間の建物グループである。後者は桁行2間、梁行2間の建物跡余てが倉庫跡と考えられ、本来は総柱構造であったと思われる。

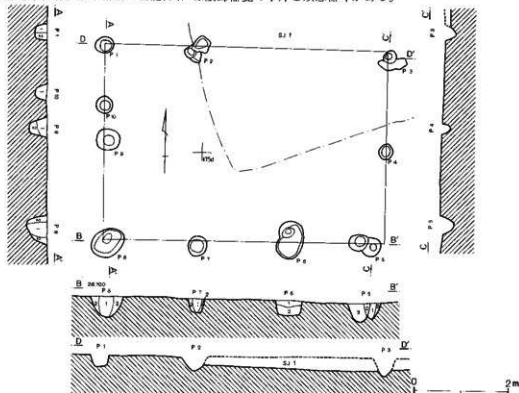


第325図 桑原A遺跡遺構分布

心距離がまちまちで桁行3間、梁行2間が町値で形状正方形を早する14号掘立柱建物も3室構造の倉庫跡と考えることができる。窪穴住居跡が全て北に集中するのに対し、南に倉庫群が15号溝を隔てて分布することになる。遺物は6棟から出土している。

### 第1号掘立柱建物跡 (第326図)

H・I-15・16 Gridに位置する。1号住居跡を切る。規模は桁行3間(5.7)、梁行2間(4.1)の東西棟である。桁行3間(5.7)、梁行2間(4.1)の東西棟である。桁行方向はN-88°-Eを指す。柱間寸法は桁行で1.9~2.1mとやや乱れるが、梁行は2.0mの等間となっている。全体に柱通りが不良である。柱穴は比較的小さく径40cm前後、深さ25~40cmを測る。P2とP3間が欠落している。出土遺物(第327図)は土師器甕の小片と須恵器坏がある。



- |       |          |                 |          |           |
|-------|----------|-----------------|----------|-----------|
| SRI番号 | P7 1 暗褐色 | ロームを少量混入。       | P7 1 暗褐色 | ロームを少量混入。 |
| P1 1  | 暗褐色      | ロームを少量混入。       | P8 1     | 暗褐色       |
| P1 2  | 褐色       | ロームを多量に混入。      | P8 2     | 暗褐色       |
| P5 1  | 暗褐色      | ロームを多量に混入。      | P9 1     | 暗褐色       |
| P5 2  | 暗褐色      | ロームを多量に混入。      | P9 2     | 暗褐色       |
| P5 3  | 暗褐色      | ローム・ブロックを多量に混入。 | P10 1    | 暗褐色       |
| P6 1  | 暗褐色      | ロームを少量混入。       |          |           |

第326図 第1号掘立柱建物跡



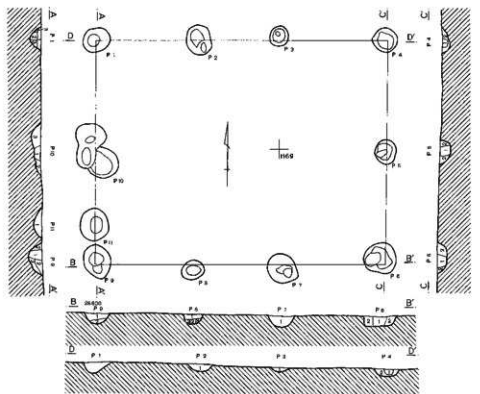
第327図 第1号掘立柱建物跡出土遺物

第1号掘立柱建物跡遺物観察表 (第327図)

No.	測	器種	口径	底径	跡高	重口	出土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	4	坏	(16.0)				W・Ha・B・S・G	A	灰褐色	10%		
02	3	甕	(16.0)				W・B・S・Ha・G	A	灰白色	10%		(P 5)G
03	2	須环	(12.0)				W・B・S・G	A	灰白色	5%	SP-3	
04	1	須环	(16.0)	6.0	3.1		W・Ha・B・S・G	A	灰白色	60%		(P-14-1)G

第2号掘立柱建物跡 (第328図)

I-16 Grid に位置する。規模は桁行3間 (6.1m)、梁行2間 (4.65m) の東西棟である。桁行方向は N-90°-E を指す。柱間寸法は桁行で2.0m、梁行は2.3m で等間となる。南の桁行は柱通りが不良である。柱穴は形状円形、規模は45-65cm、深さ20-30cmを測る。出土遺物はない。



S B 2 順序

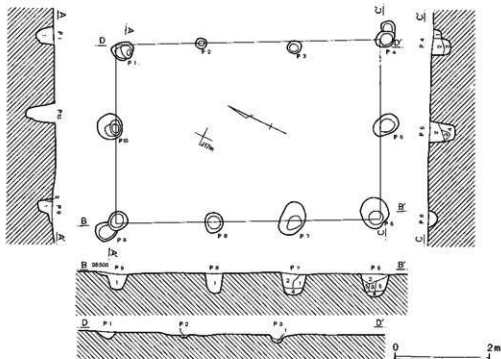
- |     |   |      |              |      |   |      |                 |
|-----|---|------|--------------|------|---|------|-----------------|
| P 1 | 1 | 暗褐色  | ロームを少量混入。    | P 7  | 1 | 黒褐色  | ローム・ブロックを多量に混入。 |
|     | 2 | 黒褐色  | ロームを少量混入。    | P 8  | 1 | 暗褐色  | ロームを少量混入。       |
|     | 3 | 黒褐色  | ローム・ブロックを混入。 |      | 2 | 黒褐色  | ロームを少量混入。       |
| P 2 | 1 | 黒黒褐色 | ロームを少量混入。    |      | 3 | 黒褐色  | ローム・ブロックを混入。    |
| P 3 | 1 | 暗黒褐色 | ローム、焼土を少量混入。 | P 9  | 1 | 黒色   | ロームを少量混入。       |
| P 4 | 1 | 黒褐色  | ローム、焼土を少量混入。 |      | 2 | 暗黒褐色 | ローム・ブロックを混入。    |
|     | 2 | 暗黒褐色 | ロームを少量混入。    | P 10 | 1 | 黒褐色  | ロームを少量混入。       |
| P 5 | 1 | 黒褐色  | ローム、焼土を少量混入。 |      | 2 | 黒褐色  | ローム・ブロックを多量に混入。 |
|     | 2 | 暗黒褐色 | ローム、焼土を少量混入。 |      | 3 | 暗黒褐色 | ロームを少量混入。       |
| P 6 | 1 | 黒褐色  | ローム、焼土を少量混入。 | P 11 | 1 | 黒褐色  | ローム、焼土を少量混入。    |
|     | 2 | 暗黒褐色 | ローム、焼土を少量混入。 |      |   |      |                 |

第328図 第2号掘立柱建物跡



### 第3号掘立柱建物跡 (第329図)

J・K-16・17 Gridに位置する。東に隣接して2号井戸跡がある。規模は桁行3間(5.5m)、梁行2間(3.6m)の南北棟の建物である。桁行方向はN-27°-Wを指す。柱間寸法は桁行東から1.65m+1.95m、梁行は北から1.90m+1.70mで一定しない。柱穴の規模は南西に径70cm、深さ50~60cm、東に径20~30cm、深さ10cm前後を測り、規模・形態共に不揃いで、柱通りも悪い。遺物(第330図)は須恵器環が3点出土している。



S B 3 層序

P 1 1 暗褐色  
P 2 1 暗褐色  
P 3 1 暗褐色  
P 4 1 暗褐色  
2 暗褐色  
3 黒褐色

P 5 1 暗褐色  
2 黒褐色  
3 褐色  
P 6 1 暗褐色  
2 黒褐色  
3 褐色

4 褐色  
P 7 1 暗褐色  
2 暗褐色  
3 褐色  
P 8 1 暗褐色  
P 9 1 暗褐色

P 10 1 暗褐色  
2 黒褐色  
3 褐色

第329図 第3号掘立柱建物跡

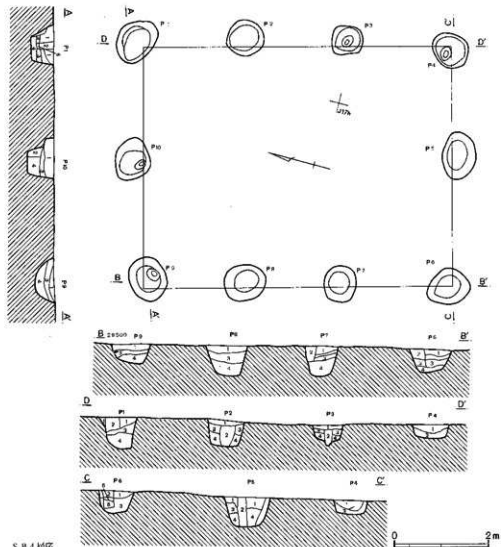


第330図 第3号掘立柱建物跡出土遺物

### 第3号掘立柱建物跡遺物観察表 (第330図)

No.	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	3	須環	(12.0)				W・B・S・G	A	灰白色	5%		
02	2	須環	(16.0)				W・B・S・Ha・G	A	灰白色	10%		
03	1	須環		(11.0)			W・B・K・G	A	灰色	10%		

第4号掘立柱建物跡 (第331図)

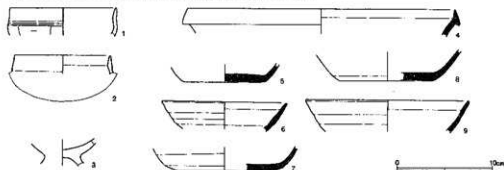


SH4 編年

- |     |       |                       |       |                |      |       |                       |
|-----|-------|-----------------------|-------|----------------|------|-------|-----------------------|
| P 1 | 1 黒褐色 | 焼土、ローム、炭化物を混入。        | 3 褐色  | ロームを混入し、しまり強い。 | P 7  | 1 黒褐色 | 焼土、ローム、炭化物を混入。        |
|     | 2 黒褐色 | きの細かく焼土、炭化物を混入。しまりなし。 | 4 褐色  | ローム、砂を混入。      |      | 2 黒褐色 | きの細かく焼土、炭化物を混入。しまりなし。 |
|     | 3 褐色  | ロームを混入し、しまり強い。        | 5 黒褐色 | ローム、炭化物を混入し、   |      | 3 褐色  | ロームを混入し、しまり強い。        |
|     | 4 褐色  | ローム、砂を混入。             |       | きの細かくザラザラしている。 |      | 4 褐色  | ローム、砂を混入。             |
| P 2 | 1 黒褐色 | 焼土、ローム、炭化物を混入。        |       |                | P 8  | 1 黒褐色 | 焼土、ローム、炭化物を混入。        |
|     | 2 黒褐色 | きの細かく焼土、炭化物を混入。しまりなし。 |       |                |      | 2 褐色  | ロームを混入し、しまり強い。        |
|     | 3 褐色  | ロームを混入し、しまり強い。        |       |                |      | 3 褐色  | ローム、砂を混入。             |
|     | 4 褐色  | ローム、砂を混入。             |       |                | P 9  | 1 黒褐色 | 焼土、ローム、炭化物を混入。        |
| P 3 | 1 黒褐色 | 焼土、ローム、炭化物を混入。        |       |                |      | 2 黒褐色 | ロームを混入し、しまり強い。        |
|     | 2 黒褐色 | きの細かく焼土、炭化物を混入。しまりなし。 |       |                |      | 3 褐色  | ローム、砂を混入。             |
|     | 3 褐色  | ロームを混入し、しまり強い。        |       |                | P 10 | 1 黒褐色 | 焼土、ローム、炭化物を混入。        |
|     | 4 褐色  | ローム、砂を混入。             |       |                |      | 2 黒褐色 | きの細かく焼土、炭化物を混入。しまりなし。 |
| P 4 | 1 黒褐色 | 焼土、ローム、炭化物を混入。        |       |                |      | 3 褐色  | ロームを混入し、しまり強い。        |
|     | 2 褐色  | ロームを混入し、しまり強い。        |       |                |      | 4 褐色  | ローム、砂を混入。             |
| P 5 | 1 黒褐色 | 焼土、ローム、炭化物を混入。        |       |                |      |       |                       |
|     | 2 黒褐色 | きの細かく焼土、炭化物を混入。しまりなし。 |       |                |      |       |                       |
|     | 3 褐色  | ロームを混入し、しまり強い。        |       |                |      |       |                       |
|     | 4 褐色  | ローム、砂を混入。             |       |                |      |       |                       |
| P 6 | 1 黒褐色 | 焼土、ローム、炭化物を混入。        |       |                |      |       |                       |
|     | 2 黒褐色 | きの細かく焼土、炭化物を混入。しまりなし。 |       |                |      |       |                       |

第331図 第4号掘立柱建物跡

1・J-17 Gridに位置する。集落の最も東にあり、本跡に並行して南北2号溝が走る。規模は桁行3間(6.4m)、桁行2間(5.1m)の南北に長い建物である。桁行方向はN-14°-Wを指す。柱穴間の中心距離は桁行東から2.4m+2.2m+1.8m、梁行北から2.5m+2.6mと一定せず不揃いであるが、対峙する相互の距離は等しい。柱穴の形状は円形、規模は径0.66m-1.02m、深さ45-67cmを測る。平均的には径1m、深さ60cmでかなりしっかりした掘り形である。ほぼ全ての柱穴に柱痕を想定できる分層が描ける。遺物は土師器坏2点、須恵器坏5点、甕1点が出土しているが、本跡の所産時期としては土師器を除外した段階と考えられる。



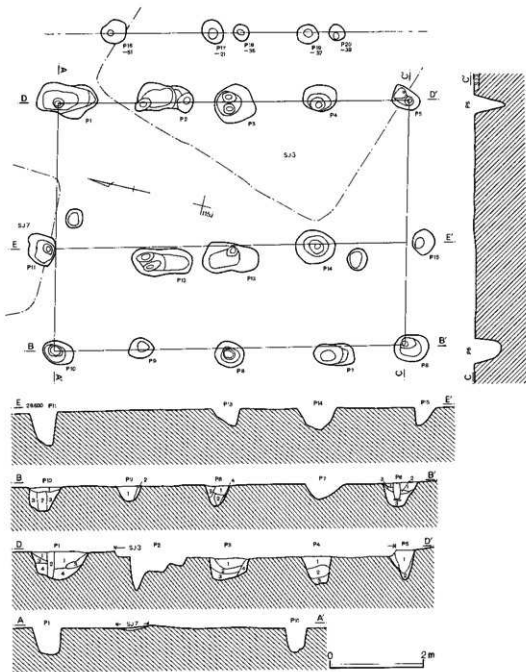
第332図 第4号掘立柱建物跡出土遺物

第4号掘立柱建物跡遺物観察表 (第332図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	6	坏B	(10.0)				W・B・S・G	A	赤褐色	5%	P3	
02	5	坏B	(11.0)				W・S・B・G	A	赤褐色	5%	P4	
03	4	台付甕					B・U・W・S・G	A	鈍い褐色	10%	P2	
04	7	須壺	(28.0)				W・B・G	A	灰色	5%	P4	
05	1	須坏		8.0			W・Ha・B・S・G	A	灰褐色	20%		
06	8	須坏	(13.0)				W・Ha・B・S・G	A	灰白色	5%	P8	
07	2	須坏		(10.0)			W・Ha・B・G	A	灰白色	10%		
08	3	須坏		(10.0)			W・B・Ha・S・G	A	灰白色	10%		
09	9	須坏	(17.0)				W・B・S・G	A	灰白色	5%	P8	

第5号掘立柱建物跡 (第333図)

1-14・15 Gridに位置する。北で7号住居跡、東で3号住居跡を切っている。平面規模は桁行4間(7.6m)、梁行2間(5.2m)を測る南北に長い総柱建物跡と考えられる。南北にそれぞれ棟持ち柱を有する。桁行方向はN-13°-Eを指す。柱間の距離は桁行東から1.9m+1.8m+2.0m+1.8m、梁行は北から3.0m+2.2mで対峙する柱間は等間隔である。柱の通りは棟持ち柱間が極めて悪く、P12、P13はほとんど通らない。柱穴の規模はP2~P4、P13~P15は溝もちで東西0.8m、南北1.3m、深さ65cmを最大に、平均径0.8m、深さ50cmを測る。他は径0.7m、深さ50cmで形状は円形が多い。柱痕を想定できるものが比較的多く、P1、P5は顕著である。東側には桁行に並行して5ヶ所のピット列が存在する。本跡に伴うか否かは定かでないがP16以外は2ヶ所一組の構成と考えられる。ピット列との距離は1.5mを測る。出土遺物はない。



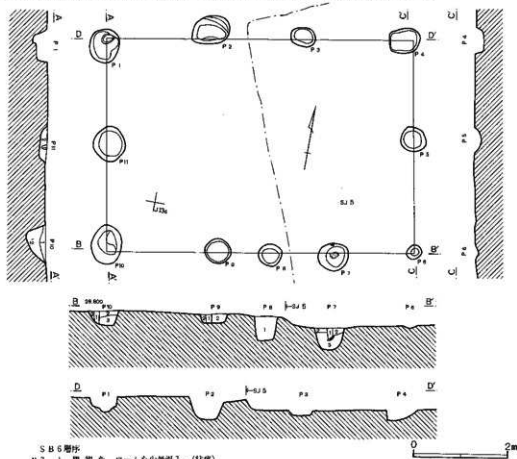
S B 5 層序

- |     |        |                |       |             |                |              |              |               |
|-----|--------|----------------|-------|-------------|----------------|--------------|--------------|---------------|
| P 1 | 1 暗褐色  | ローム・ブロックを混入。   | 2 暗褐色 | 炭化物、焼土を混入。  | 4 暗褐色          | ローム・ブロックを混入。 |              |               |
|     | 2 暗褐色  | ローム、炭化物を混入。    | 3 黄褐色 | ロームをやや多く混入。 | 1 暗褐色          | ローム・ブロックを混入。 |              |               |
|     | 3 黄褐色  | ローム・ブロックを多く混入。 | P 5   | 1 黒褐色       | 黒色土に砂粒を多く混入。   | P 10         | 1 暗褐色        | ローム、砂を混入。     |
|     | 4 暗褐色  | ローム・ブロックを混入。   |       | 2 黒褐色       | 黒色土多量混入、しまり有。  | 2 暗褐色        | ローム、炭化物を混入。  |               |
| P 3 | 1 暗褐色  | ローム・ブロックを混入。   | P 7   | 1 褐色        | ローム・ブロックを多く混入。 | P 11         | 1 暗褐色        | ローム・ブロックを混入。  |
|     | 2 暗褐色  | ローム・ブロックを混入。   |       | 2 黄褐色       | ローム・ブロックを多く混入。 | 2 暗褐色        | ローム、炭化物を混入。  |               |
|     | 3 黒褐色  | ローム・ブロックを混入。   |       | 3 暗褐色       | ローム・ブロックを混入。   | 3 暗褐色        | ローム・ブロックを混入。 |               |
|     | 4 明黒褐色 | しまり、粘性強い。      | P 9   | 1 暗褐色       | ローム・ブロックを混入。   | P 12         | 1 暗褐色        | ローム・ブロックを混入。  |
| P 4 | 1 暗褐色  | ローム・ブロックを多く混入。 |       | 2 暗褐色       | ローム、炭化物を混入。    | P 13         | 1 暗褐色        | ローム・ブロックを混入。  |
|     |        |                |       | 3 暗褐色       | ローム・ブロックを混入。   | 2 黄褐色        | 2 黄褐色        | ローム・ブロック多量混入。 |

第333図 第5号掘立柱建物跡

第6号掘立柱建物跡 (第334図)

I・J-13 Gridに位置する。東で5号住居跡を切る。規模は桁行3間(6.5m)、梁行2間(4.5m)を測る東西に長い建物跡である。桁行方向はN-80°-Eを指す。柱穴間の距離は桁行北から2.2m+2.1m+2.2m、梁行東から2.2m+2.3mを測るやや不揃いである。柱穴の形状は円形ないし楕円形、規模は径60-70cm、深さ10-52cmでかなり一定しない。出土遺物(第335図)は培培土、土師器等の他本跡に帰属すると思われる須恵器坏2個体が出土している。

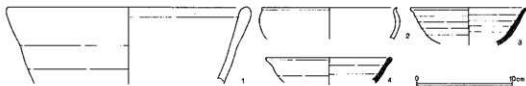


S B 6層序

- P 7 1 黒褐色 ロームを少量混入。(柱痕)  
 2 暗黒褐色 ロームを少量混入。  
 3 褐色 ロームを多量に混入。(砂質)
- P 8 1 暗褐色 焼土を少量混入。  
 P 9 1 黒褐色 ロームを少量混入。(柱痕)  
 2 暗黒褐色 ロームを少量混入。  
 3 褐色 ロームを多量に混入。(砂質)

- P 10 1 黒褐色 ロームを少量混入。(柱痕)  
 2 暗黒褐色 ロームを少量混入。  
 3 褐色 ロームを多量に混入。(砂質)
- P 11 1 黒褐色 ロームを少量混入。(柱痕)  
 2 暗黒褐色 ロームを少量混入。  
 3 褐色 ロームを多量に混入。(砂質)

第334図 第6号掘立柱建物跡

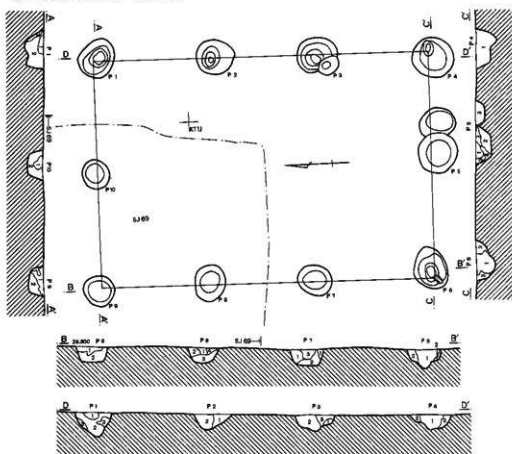


第335図 第6号掘立柱建物跡出土遺物

第6号掘立柱建物跡遺物観察表 (第335図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	内耳鍋	(25.0)				W・B・U・S・G	A	灰白色	5%	P7	J-13-d)G
02	4	坏A	(14.0)				W・B・S・G	A	赤褐色	5%	P9	
03	1	須环	(12.0)				W・Ha・B・S・G	A	灰白色	15%	P2	
04	3	須环	(13.0)				W・Ha・B・S・G	A	灰白色	5%	P2	

第7号掘立柱建物跡 (第336図)

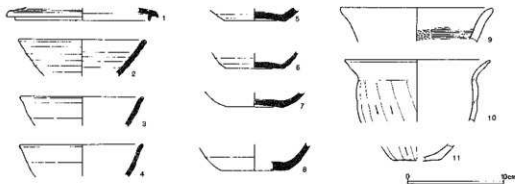


S B 7 号序

- |     |   |      |               |     |      |               |                |
|-----|---|------|---------------|-----|------|---------------|----------------|
| P 1 | 1 | 明茶灰色 | 粘土、ロームを混入。    | 2   | 灰褐色  | ローム、小径礫を少量混入。 |                |
|     | 2 | 灰褐色  | ローム、小径礫を少量混入。 | 3   | 暗茶褐色 | 粘土、ロームを混入。    |                |
|     | 3 | 灰茶褐色 | 砂質ロームを混入。     | 4   | 灰褐色  | 粘土を少量混入。      |                |
| P 2 | 1 | 暗茶褐色 | 粘土、ロームを混入。    | P 6 | 1    | 灰褐色           | ローム、小径礫を少量混入。  |
|     | 2 | 灰褐色  | 粘土を少量混入。      | 2   | 灰茶褐色 | 砂質ロームを混入。     |                |
| P 3 | 1 | 灰褐色  | ローム、小径礫を混入。   | 3   | 灰褐色  | 粘土を少量混入。      |                |
|     | 2 | 暗茶褐色 | 粘土、ロームを混入。    | P 7 | 1    | 灰茶褐色          | 砂質ロームを混入。      |
|     | 3 | 灰褐色  | 粘土を少量混入。      | 2   | 暗茶褐色 | 粘土、ロームを混入。P 9 |                |
| P 4 | 1 | 灰褐色  | ローム、小径礫を少量混入。 | 3   | 灰褐色  | 粘土を少量混入。      |                |
|     | 2 | 暗茶褐色 | 粘土、ロームを混入。    | P 8 | 1    | 明茶灰色          | 粘土、ロームを混入。P 10 |
| P 5 | 1 | 明茶褐色 | 粘土、ロームを混入。    | 2   | 灰茶褐色 | 砂質ロームを混入。     |                |
|     |   |      |               | 3   | 暗茶褐色 | 粘土、ロームを混入。    |                |

第336図 第7号掘立柱建物跡

K-10・11 Grid に位置する。北西で69号住居跡を切る。規模は桁行3間(7.1m)、梁行2間(4.7m)を測る、南北に長い建物跡である。桁行方向はN-2°-Eを指す。柱穴間の距離は桁行東から2.4m+2.2m+2.4m、梁行は北から2.5m+2.2mでそれぞれ対峙する柱間距離は等しい。柱穴の規模は北に位置するもの程大きく、形状は円形、径85-95cm、深さ35-50cmを測る。南半に位置するのは径60-70cm、深さ30-35cmである。遺物(第337図)は須恵器蓋、杯の他小型甕等本跡の所産時期と思われる遺物が比較的多く出土している。



第337図 第7号掘立柱建物跡出土遺物

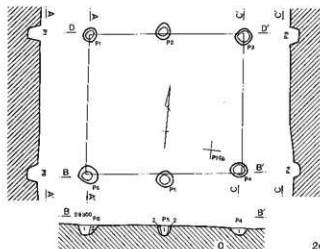
第7号掘立柱建物跡遺物観察表(第337図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	6	須恵蓋	(14.0)				W・U・S-G	A	灰褐色	5%	P3	
02	5	須恵杯	(13.0)				B・W・Ha・S-G	A	灰白色	10%	P5	
03	2	須恵杯	(13.0)				W・Ha・B・S-G	A	灰白色	10%		
04	1	須恵杯	(13.0)				W・U・B・S-G	A	灰白色	10%		
05	8	須恵杯		(6.4)			W・Ha・S・B-G	A	鈍い褐色	20%	P4	
06	4	須恵杯		6.2			W・B・K・S-G	A	灰白色	20%	P5	
07	7	須恵杯		(6.6)			W・B・S-G	A	灰白色	20%	P2	
08	3	須恵杯		(7.0)			W・Ha・B・S-G	A	灰白色	20%	P5	
09	9	甕	(16.0)				K・B・S・Ha・W	A	褐色	5%		
10	10	小型甕	(15.0)				B・U・W・S-G	A	褐色	10%		
11	11	甕		(5.0)			W・B・U・S-G	A	褐色	5%		



第338図 掘立柱建物跡群(総柱建物)

第8号掘立柱建物跡 (第339図)

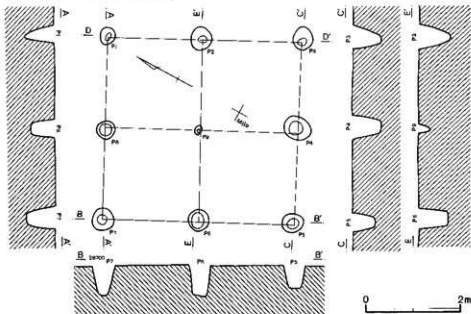


S R 8 掘跡		P 4	1 黒褐色	ローム・ブロックを混入。	
P 1	1 黒褐色	ローム・ブロックを混入。	P 5	1 黒褐色	ローム・ブロックを混入。
	2 黒褐色	ローム・ブロックを混入。		2 暗茶褐色	ロームを多量に混入。
P 2	1 黒褐色	ローム・ブロックを混入。	P 6	1 黒褐色	ローム・ブロックを混入。
P 3	1 黒褐色	ローム・ブロックを混入。		2 暗茶褐色	ロームを多量に混入。

第339図 第8号掘立柱建物跡

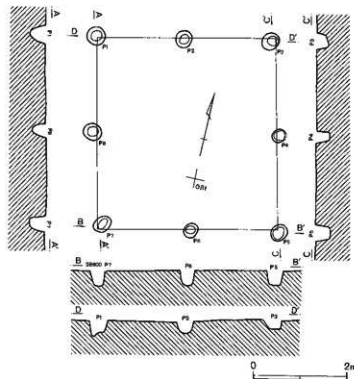
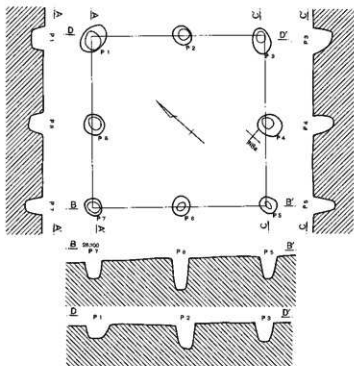
第9号掘立柱建物跡 (第340図)

M-8 Grid に位置する。規模は桁行2間(4m)、梁行2間(3.8m)の総柱建物跡である。桁行方向はN-26°-Wを指す。柱間寸法は桁行で2mの等間、梁行は1.9mの等間を示す。柱穴規模は径40-60cm、深さ50-68cmで、P9のみ径20cm、深さ25cmと小規模である。平面形状は正円に近く、柱の通りも良い。出土遺物はない。



第340図 第9号掘立柱建物跡





第341図 第10・11号掘立柱建物跡

### 第10号掘立柱建物跡

(第341図)

M・N-7・8 Grid に位置する。規模は桁行2間(3.65m)、梁行2間(3.5m)の総柱建物跡と思われる。桁行方向はN-42°-Wを指す。柱間寸法は桁行で1.8mの等間、梁行は1.75mで等間を示す。柱穴規模は径40-65cm、深さ30-68cmを測り、平面形状は円形である。柱の通りは良い。出土遺物はない。

### 第11号掘立柱建物跡

(第341図)

N・O-8 Grid に位置する。西で12号掘立柱建物跡と重複するが新旧は不明。規模は桁行2間(4.0m)、梁行2間(3.8m)の総柱建物跡と思われる。桁行方向はN-14°-Wを指し、南北に長軸をとる建物跡である。柱間寸法は桁行2mで等間、梁行は1.9mで等間を示す。柱穴規模は径30-40cm、深さ25-35cmを測る。平面形状は円形を示す。柱の通りは良い。出土遺物は土師器の甕と甗の小片が出土しているが本跡に帰属するか否かは不明。

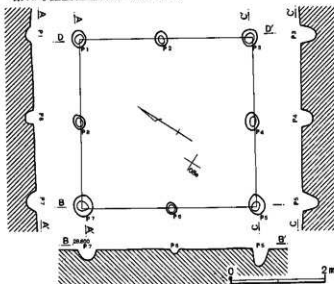


第342図 第11号掘立柱建物跡出土遺物

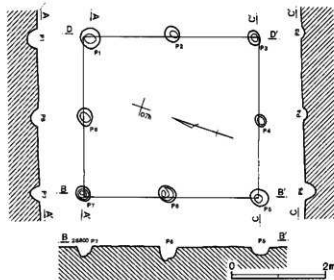
第11号掘立柱建物跡遺物観察表 (第342図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	罎	(20.0)				W・B・S・G	A	棕色	5%		
02	2	瓶	(24.0)				W・Ha・U・B・S	A	棕色	10%		

第12号掘立柱建物跡 (第343図)



N・O-7・8 Grid に位置する。11、13掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明。規模は桁行2間 (3.7m)、梁行2間 (3.5m) の総柱建物跡と思われる。桁行方向は N-33°-W を指す。柱間寸法は桁行で1.85m の等間、梁行は1.75m で等間を示す。柱穴規模は径30-45cm、深さ15-35cm を測り、平面形状は円形を呈する。柱の通りは良い。出土遺物はない。



第13号掘立柱建物跡

(第343図)

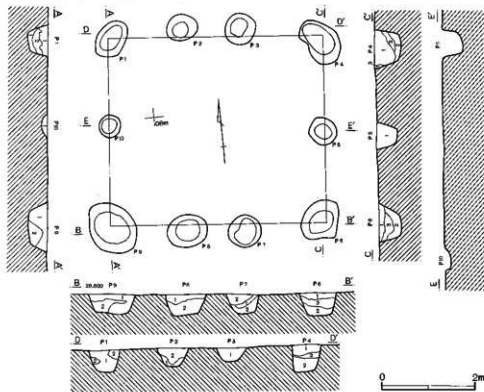
O-7 Grid に位置する。P3 は12号掘立柱建物跡の P1 と共有するが新旧は不明。規模は桁行2間 (3.6m)、梁行2間 (3.3m) の総柱建物跡と思われる。桁行方向は N-19°-W を指し、南北に長軸をとる建物である。柱間寸法は桁行で1.8m の等間、梁行は1.65m で等間を示す。柱穴規模は径30-45cm、深さ15

第343図 第12・13号掘立柱建物跡

～30cmを測り、平面形状は円形を呈する。柱の通りは良い。出土遺物はない。

### 第14号掘立柱建物跡 (第344図)

O-7・8 Gridに位置する。新旧関係はない。規模は桁行3間(4.7m)、梁行2間(4.2m)を測る東西に長軸をとる建物跡である。桁行方向はN-85°-Wを指す。柱間寸法は桁行北から1.6m+1.3m+1.8mと一定せず、かなり不揃いである。梁行は2.1mの等間を示す。柱穴規模は径0.5～1.05mと幅があるが、0.7～0.8mのものが多い。深さは40～50cmを測る。平面形状は円形である。柱の通りは良い。出土遺物はない。



S B14番号

- |     |     |            |                  |      |                  |            |                  |
|-----|-----|------------|------------------|------|------------------|------------|------------------|
| P 1 | 1   | 暗褐色        | 微細ロームを混入。        | 2    | 暗褐色              | ロームを少量混入。  |                  |
| P 2 | 1   | 暗褐色        | ロームを多量に混入。       | 3    | 黒褐色              | 有機質を含む。    |                  |
| P 2 | 2   | 暗褐色        | ロームを少量混入。        | P 7  | 1                | 暗褐色        | ロームを少量混入。        |
| P 3 | 1   | 暗褐色        | ロームを多量に混入。       | 2    | 暗褐色              | ロームを多量に混入。 |                  |
| P 3 | 2   | 黄褐色        | 暗褐色土を含む砂質ロームである。 | P 8  | 1                | 暗褐色        | ロームを少量混入。        |
| P 4 | 1   | 暗褐色        | 微細ロームを混入。        | 2    | 暗褐色              | ロームを多量に混入。 |                  |
| 2   | 暗褐色 | ロームを少量混入。  | P 9              | 1    | 暗褐色              | 微細ロームを混入。  |                  |
| 3   | 暗褐色 | ロームを多量に混入。 | 2                | 黄褐色  | 暗褐色土を含む砂質ロームである。 |            |                  |
| P 5 | 1   | 暗褐色        | ロームを多量に混入。       | P 10 | 1                | 黄褐色        | 暗褐色土を含む砂質ロームである。 |
| P 6 | 1   | 暗褐色        | 微細ロームを混入。        |      |                  |            |                  |

第344図 第14号掘立柱建物跡

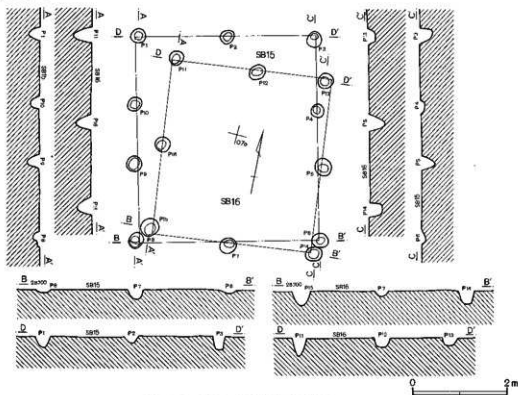
### 第15号掘立柱建物跡 (第345図)

O-7 Gridに位置する。16号掘立柱建物跡を切っており、P 5とP 7が16号跡のP 4、P 6と共有している。規模は桁行3間(4.3m)、梁行2間(3.8m)を測る、南北に長軸をとる建物跡である。桁行方向はN-15°-Wを指す。柱間寸法は桁行東から1.4m+1.0m+1.7mと一定せず不揃

いである。梁行は1.9mの等間である。柱穴の形状はほぼ正円に近く、規模は径30～35cm、深さ15～25cmを測る。柱の通りは良い。出土遺物はない。

#### 第16号掘立柱建物跡 (第345図)

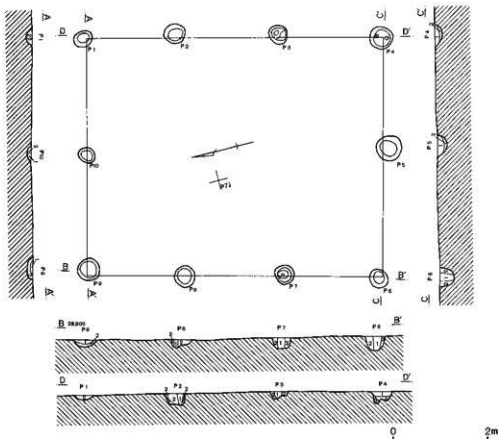
O-7 Gridに位置する。15号掘立柱建物跡に切られる。P4とP6は共有。規模は桁行2間(3.6m)、梁行2間(3.4m)を測る北辺の短い台形を呈する。桁行方向はN-8°-Wを指す。柱間寸法は桁行1.8mで等間、梁行は北から1.8m+1.5m、南から1.7m+1.8mで一定せず不揃いである。柱穴の形状は円形を呈し、規模は径30～40cm、深さ20～40cmを測る。柱の通りは良い。出土遺物はない。



第345図 第15・16号掘立柱建物跡

#### 第17号掘立柱建物跡 (第346図)

P-7 Gridに位置する。北東で18号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明。規模は桁行3間(6.2m)、梁行2間(5.1m)を測る南北に長い建物跡である。桁行方向はN-15°-Eを指す。柱間寸法は桁行が2.1mでほぼ等間、梁行北から2.5m+2.6m、南2.75m+2.35mとやや一定せず不揃いである。柱穴規模は径35～40cm、深さ10～25cmを測る。平面形状は円形である。柱の通りは良い。ほぼ全ての柱穴に柱痕が確認できる。遺物は出土していない。



S B17層序			
P 1	1	暗褐色	ローム・ブロックを少量混入。
P 2	1	黒褐色	ロームを少量混入。
	2	暗褐色	ローム・ブロックを少量混入。
	3	暗黄褐色	ロームを主体とする。
P 3	1	黒褐色	ロームを少量混入。
	2	暗褐色	ローム・ブロックを少量混入。
P 4	1	黒褐色	ロームを少量混入。
	2	暗褐色	ローム・ブロックを少量混入。
	3	暗黄褐色	ロームを主体とする。
P 5	1	黒褐色	ロームを少量混入。
	2	暗褐色	ローム・ブロックを少量混入。
P 6	1	黒褐色	ロームを少量混入。
	2	暗褐色	ローム・ブロックを少量混入。
P 7	1	黒褐色	ロームを少量混入。
	2	暗褐色	ローム・ブロックを少量混入。
P 8	1	黒褐色	ロームを少量混入。
	2	暗褐色	ローム・ブロックを少量混入。
P 9	1	黒褐色	ロームを少量混入。
	2	暗褐色	ローム・ブロックを少量混入。
P 10	1	黒褐色	ロームを少量混入。
	2	暗褐色	ローム・ブロックを少量混入。

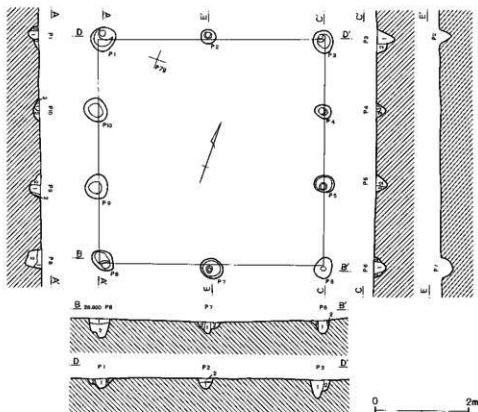
第346図 第17号掘立柱建物跡

#### 第18号掘立柱建物跡 (第347図)

P-7 Grid に位置する。西で17号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明。規模は桁行3間(4.9m)、梁行2間(4.8m)を測る。桁行方向はN-20°-Wを指す。柱間寸法は桁行東から1.55m+1.60m+1.75mと不揃いである。梁行は2.4mの等間である。このため間数は2間3間であるが桁行と梁行がほぼ同値となっている。柱穴規模は径35~55cm、深さ15~42cmを測る。平面形状は円形を呈する。柱の通りが良い。ほぼ全ての柱穴に柱痕が想定できる。遺物は出土していない。

#### 第19号掘立柱建物跡 (第348図)

P-Q-7 Grid に位置する。新旧関係は22号溝跡、20号掘立柱建物跡、42号土壌に切られる。



S R18号序

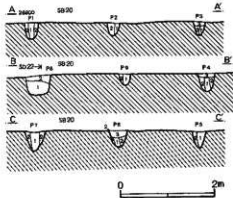
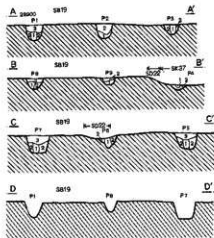
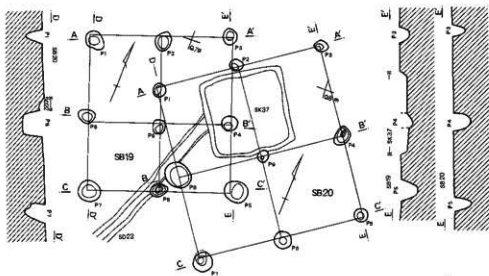
P 1	1	黒褐色	ロームを少量混入。	P 6	1	黒褐色	ロームを少量混入。
	2	暗褐色	ローム・ブロックを多量に混入。		2	暗褐色	ローム・ブロックを多量に混入。
P 2	1	黒褐色	ロームを少量混入。	P 7	1	黒褐色	ロームを少量混入。
	2	暗褐色	ローム・ブロックを多量に混入。		2	暗褐色	ローム・ブロックを多量に混入。
P 3	1	黒褐色	ロームを少量混入。	P 8	1	暗褐色	ローム・ブロックを多量に混入。
	2	暗褐色	ローム・ブロックを多量に混入。		2	暗黒褐色	ロームを少量混入。
P 4	1	黒褐色	ロームを少量混入。	P 9	1	黒褐色	ロームを少量混入。
	2	暗褐色	ローム・ブロックを多量に混入。		2	暗褐色	ローム・ブロックを多量に混入。
P 5	1	黒褐色	ロームを少量混入。	P 10	1	黒褐色	ロームを少量混入。
	2	暗褐色	ローム・ブロックを多量に混入。		2	暗褐色	ローム・ブロックを多量に混入。

第347図 第18号掘立柱建物跡

規模は桁行2間(3.2m)、梁行2間(3.0m)を測る総柱建物跡である。柱間寸法は桁行1.6mで等間、梁行は1.5mで等間である。柱穴規模は径35-50cm、深さ15-30cmを測る。平面形状は円形ないし隅丸方形を呈す。柱の通りは良い。ほぼ全ての柱穴に柱痕が想定できる。遺物は出土していない。

第20号掘立柱建物跡(第348図)

P・Q-7・8 Gridに位置する。新旧関係は22号溝跡に切られ、19号掘立柱建物跡を切る。42号土壌との関係は不明で同時期存在も考えられる。規模は桁行2間(3.6m)、梁行2間(3.6m)を測る総柱建物跡である。柱間寸法は桁行1.8mで等間、梁行東から1.7m+1.9mで若干不揃いである。柱穴規模は径25-45cm、深さ20-43cmと一定せず不揃いである。平面形状は円形ないし楕円形を呈する。柱の通りは良い。ほぼ全ての柱穴に柱痕が想定できる。遺物は出土していない。



S B 19層序

- |     |   |     |                 |
|-----|---|-----|-----------------|
| P 1 | 1 | 黒褐色 | ロームを少量混入。       |
|     | 2 | 暗褐色 | ローム・ブロックを多量に混入。 |
|     | 3 | 明褐色 | ローム・ブロックを少量混入。  |
| P 2 | 1 | 暗褐色 | ローム・ブロックを多量に混入。 |
|     | 2 | 明褐色 | ローム・ブロックを少量混入。  |
| P 3 | 1 | 黒褐色 | ロームを少量混入。       |
|     | 2 | 暗褐色 | ローム・ブロックを多量に混入。 |
| P 4 | 1 | 黒褐色 | ロームを少量混入。       |
|     | 2 | 暗褐色 | ローム・ブロックを多量に混入。 |
| P 5 | 1 | 灰褐色 | ロームを少量混入。       |
|     | 2 | 暗褐色 | ローム・ブロックを多量に混入。 |
|     | 3 | 明褐色 | ローム・ブロックを少量混入。  |
| P 6 | 1 | 黒褐色 | ロームを少量混入。       |
|     | 2 | 暗褐色 | ローム・ブロックを多量に混入。 |
| P 7 | 1 | 黒褐色 | ロームを少量混入。       |
|     | 2 | 暗褐色 | ローム・ブロックを多量に混入。 |
|     | 3 | 明褐色 | ローム・ブロックを少量混入。  |
| P 8 | 1 | 黒褐色 | ロームを少量混入。       |
|     | 2 | 暗褐色 | ローム・ブロックを多量に混入。 |
|     | 3 | 明褐色 | ローム・ブロックを少量混入。  |
| P 9 | 1 | 暗褐色 | ローム・ブロックを多量に混入。 |
|     | 2 | 明褐色 | ローム・ブロックを少量混入。  |

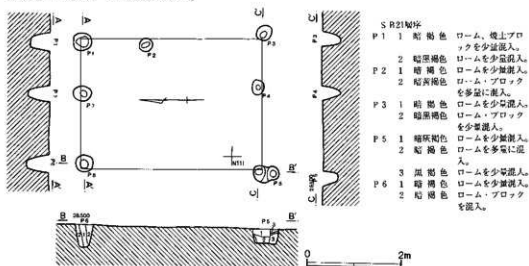
S H 20層序

- |     |   |     |                 |
|-----|---|-----|-----------------|
| P 1 | 1 | 黒褐色 | ロームを少量混入。(柱状)   |
|     | 2 | 暗褐色 | ローム・ブロックを多量に混入。 |
| P 2 | 1 | 黒褐色 | ロームを少量混入。(柱状)   |
|     | 2 | 暗褐色 | ローム・ブロックを多量に混入。 |
| P 3 | 1 | 黒褐色 | ロームを少量混入。(柱状)   |
|     | 2 | 暗褐色 | ローム・ブロックを多量に混入。 |
|     | 3 | 明褐色 | ローム・ブロックを少量混入。  |
| P 4 | 1 | 黒褐色 | ロームを少量混入。(柱状)   |
|     | 2 | 暗褐色 | ローム・ブロックを多量に混入。 |
|     | 3 | 明褐色 | ローム・ブロックを少量混入。  |
| P 5 | 1 | 黒褐色 | ロームを少量混入。(柱状)   |
|     | 2 | 暗褐色 | ローム・ブロックを多量に混入。 |
| P 6 | 1 | 黒褐色 | ロームを少量混入。(柱状)   |
|     | 2 | 暗褐色 | ローム・ブロックを多量に混入。 |
|     | 3 | 明褐色 | ローム・ブロックを少量混入。  |
| P 7 | 1 | 黒褐色 | ロームを少量混入。(柱状)   |
|     | 2 | 暗褐色 | ローム・ブロックを多量に混入。 |
| P 8 | 1 | 黒褐色 | ロームを少量混入。(柱状)   |
|     | 2 | 暗褐色 | ローム・ブロックを多量に混入。 |
| P 9 | 1 | 黒褐色 | ロームを少量混入。(柱状)   |
|     | 2 | 暗褐色 | ローム・ブロックを多量に混入。 |

第348図 第19・20号掘立柱建物跡

### 第21号掘立柱建物跡 (第349図)

O-14 Gridに位置する。新旧関係はない。規模は桁行2間(3.9m)、梁行2間(2.9m)を測る南北に長い建物跡であるが、本来はP2、P3間、P5、P6間に柱穴が存在した可能性もある。その場合桁行の柱間寸法はP1、P2間と等しく1.3mの等間となる。梁行は北で1.1m+1.5mとなり不揃いである。桁行方向はほぼ磁北を指す。柱穴の規模は径30~54cm、深さ35~45cmを測る。柱の通りは悪い。出土遺物はない。



第349図 第21号掘立柱建物跡

第2表掘立柱建物跡一覧表

遺構名	桁行(m)	梁行(m)	桁行方向	出土遺物	備考
S B 1	5.70(3間)	4.10(2間)	N-88°-E	土師器・須恵环	
S B 2	6.10(3間)	4.65(2間)	N-90°-E		
S B 3	5.50(3間)	3.60(2間)	N-27°-W	須恵环	
S B 4	6.40(3間)	5.10(2間)	N-14°-W	土師器・須恵环	
S B 5	7.60(4間)	5.20(2間)	N-13°-E		総柱建物
S B 6	6.50(3間)	4.50(2間)	N-80°-E	須恵环	
S B 7	7.10(3間)	4.70(2間)	N-2°-E	須恵环・蓋	
S B 8	3.30(2間)	3.00(1間)	N-85°-E		
S B 9	4.00(2間)	3.80(2間)	N-26°-W		総柱建物
S B 10	3.65(2間)	3.50(2間)	N-42°-W		総柱建物
S B 11	4.00(2間)	3.80(2間)	N-14°-W	土師器・鉄	総柱建物
S B 12	3.70(2間)	3.50(2間)	N-33°-W		総柱建物
S B 13	3.60(2間)	3.30(2間)	N-19°-W		総柱建物
S B 14	4.70(3間)	4.20(2間)	N-85°-W		
S B 15	4.30(3間)	3.80(2間)	N-15°-W		
S B 16	3.60(2間)	3.40(2間)	N-8°-W		
S B 17	6.20(3間)	5.10(2間)	N-15°-E		
S B 18	4.90(3間)	4.80(2間)	N-20°-W		
S B 19	3.20(2間)	3.00(2間)	N-71°-E		総柱建物
S B 20	3.60(2間)	3.60(2間)	N-35°-W		総柱建物
S B 21	3.90(2間)	2.90(2間)	座標北		



### (3) 土壙と井戸跡 (第350~第373図)

全て遺跡の西側調査区から検出されている。土壙は42基、井戸跡は20井を数える。土壙は主に北半部に集中しているが、他の遺構との有機的なつながりをもつものは少なく、時期・性格共に不明のものが少なくない。僅かに15号土壙で大型甕、坏など多数の土器を伴い、6世紀後半代の年代が与えられる。桑原遺跡の集落の初現段階に伴う遺構として重要である。井戸跡は6世紀代、8、9世紀代、中世段階に概ね区分されるが、出土した遺物の時間幅が比較的に長いものが多く、時期決定しづらい遺構といえる。

**第1号土壙 (第350図)** I-12-f Gridに位置する。10号住居跡を切る。平面形状は略隅丸長方形を呈する。規模は長軸2.30m、短軸1.10m、深さ26cmを測る。中央と北端に径20cm、深さ20cm程の小ピットを伴う。長軸の示す方位はN-7°-Wを指す。出土遺物は須恵器甕底部片が出土。



第350図 第1~9号土壙跡

第1号土壇遺物観察表 (第351図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重 $\phi$	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	瀬戸鉢		(11.0)			W・B・G	A	鈍い黄褐色	5%		一括

第2号土壇 (第350図) G-13-p Gridに位置する。1号溝跡を切る。末調査区に含まれるため50%を調査。平面形状は不整形形を呈するものと思われる。規模は東西0.95m、深さ9cmを測る。出土遺物はない。

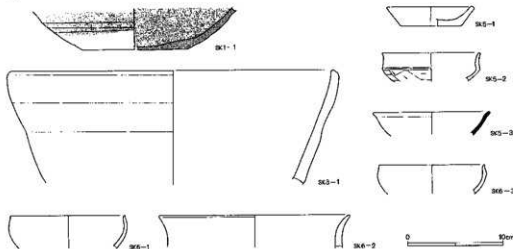
第3号土壇 (第350図) I-13-e・i Gridに位置する。13、27号住居跡を切り、5号井戸跡に切られる。平面形状は隅丸長方形を呈し、規模は長軸2.30m、短軸1.10m、深さ15cmを測る。長軸の示す方位はN-2°-Wを指す。覆土中から土鍋の大型破片が出土している。

第3号土壇遺物観察表 (第351図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重 $\phi$	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	土鍋	(35.0)				W・B・U・S・G	A	灰色	5%		一括

第4号土壇 (第350図) H-12-e Gridに位置する。11号住居跡を切る。平面形状は不整形形を呈し、規模は長軸1.08m、短軸1.05m、深さ24cmを測る。長軸の示す方位はN-102°-Eを指す。南東部に径30cm、深さ13cmの小ピットを伴う。

第5号土壇 (第350図) H-11-g・k Gridに位置する。上面は倒木跡に破壊されている。平面形状は不整形形を呈する。規模は長軸2.80m、短軸2.60m、深さ23cmを測る。長軸の示す方位はN-38°-Eを指す。小ピット5ヶ所を伴う。覆土中からカワラケ坏、坏E、須恵器坏が各1点出土している。



第351図 第1～6号土壇跡出土遺物

第5号土壌遺物観察表 (第351図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重 $\rho$	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	カワラケ	(9.0)	(6.2)	(2.0)		G	A	鈍い褐色	5%		1
02	1	坏B	(10.0)				G	A	明赤褐色	5%		一括
03	3	須坏	(12.0)				W・B・S・G	A	灰白色	5%		一括

第6号土壌 (第350図) I-11-h・1 Gridに位置する。9号住居跡を切る。平面形状は隅丸長方形を呈する。規模は長軸4.25m、短軸1.56m、深さ45cmを測る。長軸の示す方位はN-14°-Wを指す。中央に径56cm、深さ12cmの小ピットを伴う。覆土中から土師器壺口縁部片、坏A 2点が出土している。当該期の墓塚の可能性を有する。

第6号土壌遺物観察表 (第351図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重 $\rho$	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	坏A	(12.0)				W・B・K・G	A	橙 色	10%		64
02	2	灰	(20.0)				W・B・U・K・G	A	橙 色	5%		33
03	3	坏A	(11.0)				W・B・S・G	A	赤褐色	5%		54

第7号土壌 (第350図) I-15-a Gridに位置する。2、7号住居跡を切る。平面形状は略円形を呈する。規模は長軸1.65m、短軸1.16m、深さ28cmを測る。長軸の示す方位はN-1°-Eを指す。出土遺物はない。

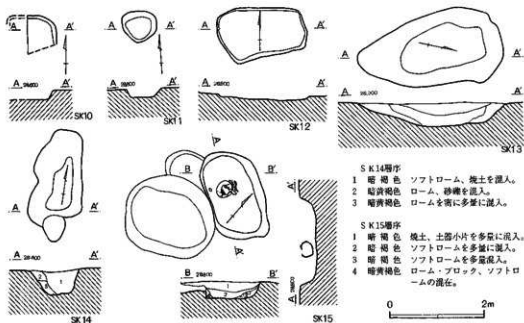
第8号土壌 (第350図) J-12-e・f Gridに位置する。17号住居跡を切る。平面形状は隅丸長方形を呈し、北西部に小ピットを伴う。規模は長軸2.45m、短軸1.04m、深さ30cmを測る。長軸の示す方位はN-90°-Eを指す。覆土上面に40cm×20cmの自然石が検出された。

第9号土壌 (第350図) J-12-f Gridに位置する。8号土壌を切る。形状は不整形、規模は長軸2.42m、短軸1.05m、深さ90cmを測る。長軸の示す方位はN-90°-Eを指す。出土遺物はない。

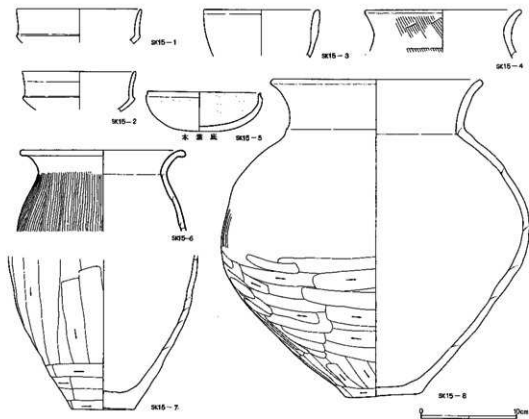
第10号土壌 (第352図) I-13-b・c Gridに位置する。12、14号住居跡を切る。形状は略方形を呈すると思われるが、南半は把握できない。規模は東西1.1m、南北は不明。覆土に炭化物が混入。出土遺物はない。

第11号土壌 (第352図) K-11-h、K-12-e12 Gridに位置する。新旧関係はない。形状は不整形、規模は長軸0.72m、短軸0.65m、深さ26cmを測る。長軸の示す方位はN-90°-Eを指す。出土遺物はない。

第12号土壌 (第352図) K-15-o Gridに位置する。新旧関係はない。形状は不整形、規模は長軸1.90m、短軸1.05m、深さ9cmを測る。長軸の示す方位はN-90°-Eを指す。出土遺物はない。



第352図 第10～15号土坑跡



第353図 第10～15号土坑跡・出土遺物

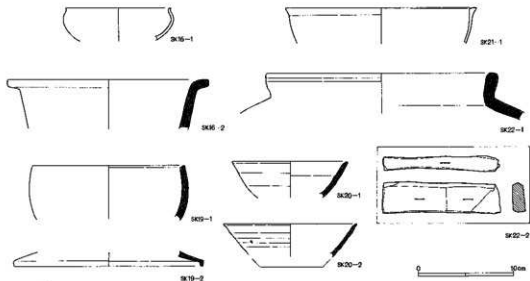
第13号土壌 (第352図) I-12-n、J-12-b Gridに位置する。新旧関係はない。形状は不整形円形、規模は長軸3.06m、短軸1.56m、深さ75cmを測る。長軸の示す方位はN-18°-Wを指す。覆土はレンズ状を呈し最下層に焼土、炭化物の混入がみられる。出土遺物はない。

第14号土壌 (第352図) J-11-k・o Gridに位置する。25号住居跡を切る。形状は不整形、規模は長軸2.12m、短軸1.08m、深さ57cmを測る。長軸の示す方位はN-11°-Eを指す。覆土にローム、焼土を多量に混入する。出土遺物はない。

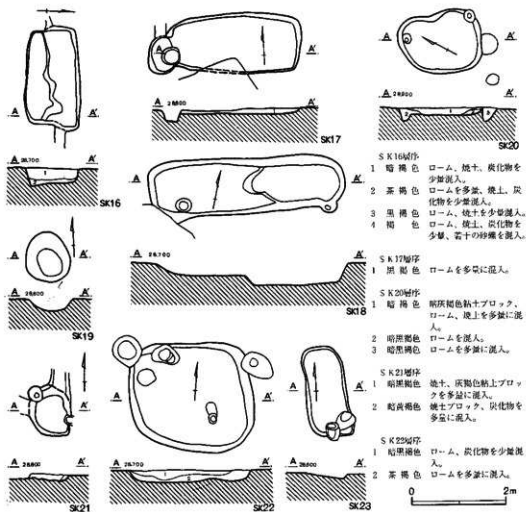
第15号土壌 (第352図) K-11-d Gridに位置する。西側は近古の土壌状の掘り込みにより一部破壊される。形状は不整形、規模は長軸1.86m、短軸1.21m、深さ35cmを測る。長軸の示す方位はN-37°-Eを指す。覆土はローム、焼土混入の暗褐色土である。出土遺物は中央やや北寄りに大型の甕形土器(7)が完形で出土している他、坏3点、甕3点が検出された。

第15号土壌遺物観察表 (第353図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	坏C	(13.0)				G	A	橙 色	5%		3
02	1	坏C	(12.0)				G	A	橙 色	5%		一括
03	4	坏	(12.0)				G	A	橙 色	5%		一括
04	3	甕	(16.0)				G	A	赤褐色	5%		11
05	6	坏A	13.0		4.1		W-B-K-S-G	A	赤褐色	60%		一括
06	5	甕	(17.0)				W-B-S-G	A	橙 色	10%		4.6.8一括
07	8	甕		6.6			W-B-S-R-G	A	橙 色	30%		
08	7	甕	22.3	7.7	38.0		G	A	明赤褐色	80%		



第354図 第16~22号土壌跡出土遺物



第355図 第16～23号土坑跡

第16号土坑（第355図）H-12-g・h Gridに位置する。36号住居跡を切る。形状は不整形長方形を呈し、規模は長軸2.10m、短軸1.15m、深さ29cmを測る。長軸の示す方位はN-90°-Eを指す。覆土は焼土、炭化物を多量に混入する黒褐色土が主体である。覆土中から坏A1点、須恵器の甕の小片が出土している。

第16号土坑遺物観察表（第354図）

No	測	器種	口径	底径	器高	重G	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	坏A	(11.0)				W・B・S・U・G	A	褐色	10%		1
02	2	須恵器	(21.0)				W・B・K・U・G	A	灰白色	10%		2

第17号土坑（第355図）H-12-a-b Gridに位置する。36、37、43号住居跡を切る。形状は不整形長方形、規模は長軸2.83m、短軸1.30m、深さ10cmを測る。長軸の示す方位はN-90°-Eを指す。覆土はローム混入の黒褐色土。出土遺物はない。

第18号土壌 (第355図) H-12-j・k Gridに位置する。11、40号住居跡を切る。形状は略方形、規模は長軸4.17m、短軸1.17m、深さ46cmを測る。長軸の示す方位はN-77°-Eを指す。出土遺物はない。

第19号土壌 (第355図) M-8-k・l Gridに位置する。新旧関係はない。形状は円形、規模は長軸1.05m、短軸0.95m、深さ27cmを測る。長軸の示す方位はN-2°-Eを指す。覆土中から須恵器碗、蓋の小片が出土している。

第19号土壌遺物観察表 (第354図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	須志碗	(16.0)				B・W・K・Ha・S	A	灰白色	10%		一拵
02	2	須志蓋	(20.0)				W・B・Ha・S・G	A	灰白色	5%		一拵

第20号土壌 (第355図) H-12-k Gridに位置する。43号住居跡を切る。形状は不整円形を呈する。規模は長軸1.76m、短軸1.17m、深さ18cmを測る。長軸の示す方位はN-34°-Wを指す。覆土はローム・ブロック、焼土を多量に混入する黒褐色土が主体。覆土中から須恵器坏2点が出土している。

第20号土壌遺物観察表 (第354図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	須坏	(12.0)				W・B・Ha・S・G	A	灰白色	30%		一拵
02	2	須坏	(16.0)				W・B・Ha・S・G	A	灰白色	5%		一拵

第21号土壌 (第355図) H-12-k Gridに位置する。43号住居跡を切る。形状は略楕円形を呈する。規模は長軸1.05m、短軸0.88m、深さ13cmを測る。長軸の示す方位はN-7°-Wを指す。北西と南東にそれぞれ径30cm、深さ15cm程の小ピットを伴う。覆土は焼土ブロック、粘土ブロックを混入する暗黒褐色土が主体。覆土中から碗1点が出土。

第21号土壌遺物観察表 (第354図)

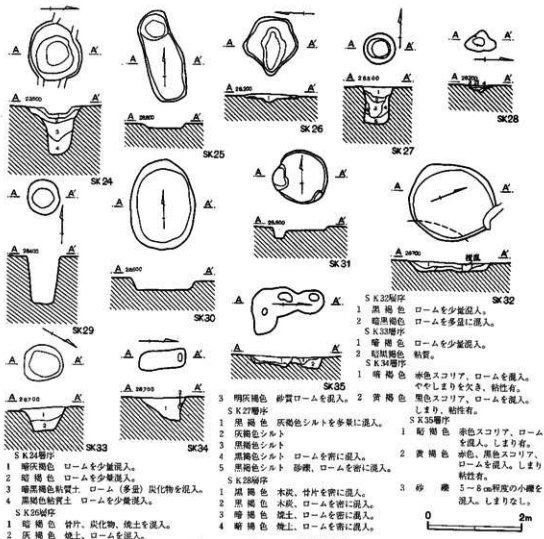
No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	須志碗	(20.0)				W・B・R・S・G	A	灰白色	5%		一拵

第22号土壌 (第355図) H-11-k・l、H-12-e・i Gridに位置する。形状は不整隅丸方形を呈する。規模は長軸2.65m、短軸2.32m、深さ29cmを測る。長軸の示す方位はN-3°-Wを指す。径38-72cm、深さ30-59cmのピット4ヶ所を伴う。覆土はローム、炭化物を混入する暗黒褐色土が主体。覆土中から須恵器直口壺および砥石が出土している。

第22号土壌遺物観察表 (第354図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	須恵壺	(24.0)				W・B・U・S・G	A	灰白色	5%		一括
02	2	砥石	両面使用。規模は全長12.5cm、幅3.2cm、厚さ1.3cmを計る。									

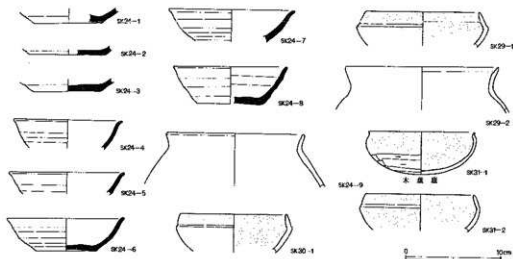
第23号土壌 (第355図) L-13-g・k Grid に位置する。形状は略隅丸長方形を呈する。規模は長軸1.90m、短軸0.85m、深さ5cmを測る。長軸の示す方位は座標北を指す。市端に径40cm、深さ30~35cmのピットを2ヶ所伴う。出土遺物はない。



第356図 第24~35号土壌跡

第24号土壌 (第356図) N-12-a・b Grid に位置する。15号溝跡を切る。形状は略円形を呈する。規模は長軸1.16m、短軸1.13m、深さ96cmを測る。長軸の示す方位はN-90°-Eを指す。覆土はローム・ブロック、焼土を混入する黒褐色土系が主体である。出土遺物はない。





第357図 第24～31号土壌跡出土遺物

第25号土壌遺物観察表 (第357図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	4	須環		(7.0)			W・B・Ha・K・G	A	灰白色	5%		一括
02	7	須環		(8.0)			W・K・S・G	A	灰白色	10%		一括
03	8	須環		(7.0)			W・Ha・K・U・S	A	浅黄色	10%		一括
04	3	須環	(11.0)				W・B・Ha・S・G	A	灰白色	10%		一括
05	5	須環	(12.0)				W・Ha・B・S・G	A	灰白色	5%		一括
06	9	須環	(12.2)		(3.4)		W・B・U・S・G	A	灰白色	60%		一括
07	2	須環	(13.0)				W・B・Ha・S・G	A	灰白色	10%		一括
08	1	須環	(12.0)		(3.9)		W・B・Ha・K・S	A	灰白色	40%		一括
09	6	小型壺	(14.0)				G	A	鈍赤褐色	5%		一括

第25号土壌 (第356図) J-10-c Grid に位置する。新旧関係はない。形状は長楕円形を呈する。規模は長軸1.55m、短軸0.84m、深さ12cmを測る。長軸の示す方位はN-15°-Wを指す。出土遺物は、須恵器環8点、甕1点が出土している。須恵器環の口径は12.0-13.5cmの幅が認められる。が12.0cmが主体。分量比は口径<2×底径で、床面は(8)が全面回転彫削りの他、回転糸切り。

第26号土壌 (第356図) K-11-g・k Grid に位置する。新旧関係はない。形状は不整形を呈する。規模は長軸1.24m、短軸1.15m、深さ12cmを測る。長軸の示す方位はN-90°-Eを指す。覆土は焼土、炭化物を含む灰褐色土が主体。出土遺物はない。

第27号土壌 (第356図) O-12-1 Grid に位置する。新旧関係はない。形状は略円形を呈する。規模は長軸0.66m、短軸0.65m、深さ80cmを測る。長軸の示す方位はN-90°-Eを指す。覆土は黒褐色系のシルトが主体である。出土遺物はない。

第28号土壌（第356図）M-15-a Grid に位置する。新旧関係はない。形状は不整形を呈する。規模は長軸0.65m、短軸0.22m、長軸の示す方位は座標北を指す。覆土は炭化物、骨片を含む黒褐色シルト質土を主体とする。火葬跡の可能性はある。出土遺物はない。

第29号土壌（第356図）M-10-1 Grid に位置する。68号住居跡を切る。形状は略円形を呈する。規模は長軸0.74m、短軸0.68m、深さ98cmを測る。長軸の示す方位は座標北を指す。出土遺物はない。

第30号土壌（第356図）L-11-i Grid に位置する。71号住居跡を切る。形状は楕円形を呈する。規模は長軸1.15m、短軸1.11m、深さ10cmを測る。長軸の示す方位は座標北を指す。覆土中から坏B1点が出土している。瓦1点が出土している。

第30号土壌遺物観察表（第357図）

No	測	器種	口径	底径	器高	重り	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	坏B	(12.0)				W・B・K・S・G	A	赤褐色	5%		一括
02	2	瓦	(16.0)				W・B・S・U・G	A	橙 色	5%		一括

第31号土壌（第356図）N-8-b Grid に位置する。形状は円形を呈する。規模は長軸1.15m、短軸1.11m、深さ10cmを測る。長軸の示す方位は座標北を指す。北西と南東にそれぞれ径20～50cm、深さ10～20cmのピットが2ヶ所作う。出土遺物は坏A、坏Bが各1点出土している。

第31号土壌遺物観察表（第357図）

No	測	器種	口径	底径	器高	重り	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	坏A	(11.0)		(4.5)		W・B・U・S・G	A	橙 色	50%		一括
02	2	坏B	(11.6)				W・B・S・G	A	橙 色	5%		一括

第32号土壌（第356図）N-10-m Grid に位置する。新旧関係はない。形状は円形を呈する。規模は長軸1.82m、短軸1.60m、深さ15cmを測る。長軸の示す方位はN-22°-Eを指す。覆土はローム混入の黒褐色土が主体をなす。覆土中から坏B1点が出土している。

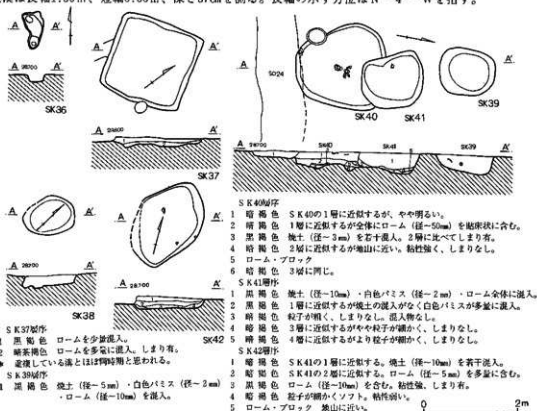
第32号土壌遺物観察表（第357図）

No	測	器種	口径	底径	器高	重り	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	坏B	(11.0)				W・R・S・G	A	明褐色	5%		一括

第33号土壌（第356図）O-10-a Grid に位置する。89号住居跡を切る。形状は円形を呈する。規模は長軸0.84m、短軸0.76m、深さ49cmを測る。長軸の示す方位はN-23°-Wを指す。覆土は粘質の強い暗褐色土が主体。出土遺物はない。

**第34号土壌** (第356図) P-10-k Grid に位置する。新旧関係はない。形状は不整形を呈する。規模は長軸0.96m、短軸0.39m、深さ41cmを測る。長軸の示す方位は座標北を指す。覆土は赤色スコリアを密に含む暗褐色土が主体。出土遺物はない。

**第35号土壌** (第356図) Q-10-l Grid に位置する。新旧関係はない。形状は不整形を呈する。規模は長軸1.50m、短軸0.56m、深さ37cmを測る。長軸の示す方位はN-4°-Wを指す。



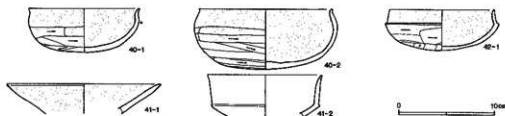
第358図 第36～42号土壌跡

**第36号土壌** (第358図) Q-10-g Grid に位置する。新旧関係はない。形状は不整形を呈する。規模は長軸0.76m、短軸0.34m、深さ34cmを測る。長軸の示す方位は座標北を指す。出土遺物はない。

**第37号土壌** (第358図) P-7-1-p Grid に位置する。19、20号掘立柱建物跡との新旧関係は不明。形状は整った方形を呈し、規模は長軸1.78m、短軸1.77m、深さ16cmを測る。長軸の示す方位はN-27°-Eを指し、20号掘立柱建物跡とほぼ等しい方位を示す。覆土はローム・ブロック混入の黒褐色土を呈し、重複する溝跡と等しい。出土遺物はない。

**第38号土壌** (第358図) N-9-b Grid に位置する。39号土壌に切られる。形状は楕円形を呈する。規模は長軸1.07m、短軸0.81m、深さ23cmを測る。長軸の示す方位はN-69°-Wを指す。覆土は焼土を混入する黒褐色土が主体。出土遺物はない。

第39号土壌 (第358回) M-9-n, N-9-b Gridに位置する。38号土壌を切る。形状は不整形を呈する。規模は長軸1.22m、短軸0.97m、深さ35cmを測る。長軸の示す方位は座標北を指す。覆土は焼土を含む黒褐色土である。出土遺物はない。



第359回 第36～38号土壌跡出土遺物

第40号土壌 (第358回) N-9-b・c・l・f Gridに位置する。41号土壌、24号溝跡に切られ、42号土壌を切る。形状は不整形を呈する。規模は長軸1.95m、短軸1.70m、深さ26cmを測る。長軸の示す方位はN-58°-Eを指す。覆土は焼土混入の黒褐色土が主体。覆土中から坏2点が出土している。

第40号土壌遺物観察表 (第359回)

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	坏F	11.8		4.6		W・B・K・S・G	A	褐色	80%		1.2
02	1	坏A	14.0		6.3		W・B・R・K・S	A	橙褐色	60%		一括

第41号土壌 (第358回) N-9-b・c Gridに位置する。40号土壌を切り、24号溝跡に切られる。形状は不整形を呈する。規模は長軸1.35m、短軸1.08m、深さ44cmを測る。長軸の示す方位はN-22°-Wを指す。覆土は焼土を混入する黒褐色土が主体。出土遺物は坏C1点、高坏の坏部一点が出土している。

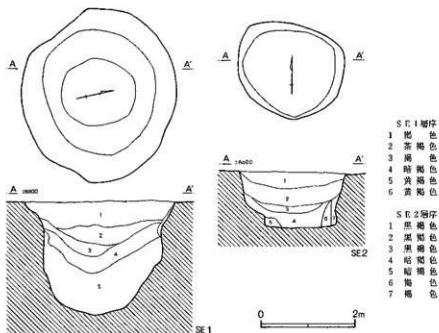
第41号土壌遺物観察表 (第359回)

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	高坏	(16.0)				W・B・K・S・G	A	赤褐色	10%		一括
02	1	坏C	(12.0)				W・B・R・S・G	A	橙褐色	10%		一括

第42号土壌 (第358回) N-9-b・f Gridに位置する。40号土壌、24号溝跡に切られる。形状は不整形を呈する。規模は長軸1.80m、短軸1.33m、深さ29cmを測る。長軸の示す方位はN-42°-Eを指す。焼土、ロームを多量に混入する黒褐色土が覆土の主体を占める。出土遺物は坏B1点が出土している。

第42号土壌遺物観察表 (第359回)

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	坏B	(11.0)		(4.3)		W・B・S・K・G	A	鈍い橙褐色	50%		3



第360図 第1～2号井戸跡

第1号井戸跡（第360図）G-11-o、H-11-e・d Gridに位置する。3号溝跡を切る。形状は円形を呈する。規模は長軸3.57m、短軸3.30m、深さ2.47mを測る。長軸の示す方位は座標北を指す。覆土はシルト質の黄褐色土を主体とする。覆土下層から美濃系の攪鉢、常滑の甕が出土している。

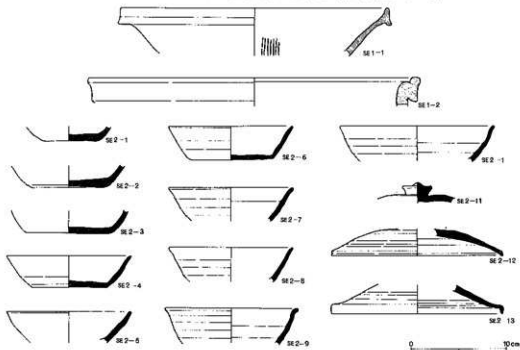
第1号井戸跡遺物観察表（第361図）

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	攪鉢	(28.0)					A	浅黄褐色	5%		一括
02	1	常滑甕	(35.0)				W・K・G	A	黄灰色	5%		一括

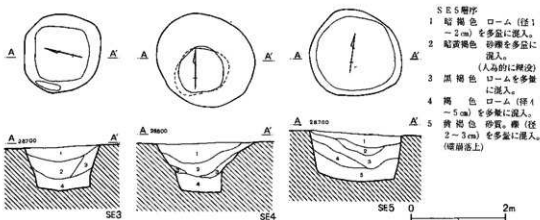
第2号井戸跡遺物観察表（第361図）

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	8	須恵坏		5.2			W・Ha・B・S・G	A	灰 色	30%		一括
02	13	須恵坏		7.6			W・B・Ha・S・G	A	灰白色	20%		一括
03	9	須恵坏		8.8			W・Ha・B・S・G	A	灰白色	40%		一括
04	7	須恵坏	13.0	8.0	3.3		W・Ha・B・S・G	A	灰白色	70%		一括
05	5	須恵坏	(13.0)				W・B・U・S・G	A	灰 色	20%		一括
06	3	須恵坏	(13.0)	( 8.8)		3.5W・Ha・B・S	A	灰白色	40%		一括	
07	4	須恵坏	(13.0)				W・Ha・B・S・G	A	灰白色	20%		一括
08	2	須恵坏	(13.0)				W・Ha・S・U・G	A	灰白色	20%		一括
09	1	須恵坏	(14.0)				W・B・S・G	A	灰白色	20%		一括
10	6	須恵坏	(16.0)				W・B・Ha・S・G	A	灰 色	20%		一括
11	11	須恵盖					W・B・Ha・S・G	A	灰 色	20%		一括
12	12	須恵盖	(18.0)				W・Ha・B・K・G	A	灰白色	40%		一括
13	10	須恵盖	(18.0)				W・Ha・B・S・G	A	灰白色	5%		一括

第2号井戸跡(第360図) J-17-i・j・m・nに位置する。3号掘立柱建物跡、8号住居跡との同時性が想定できる。平面形状は略円形を呈する。規模は長軸2.26m、短軸2.04m、深さ1.14mを測る。長軸の示す方位はN-90°-Eを指す。内容的には井戸として機能したか否かは疑問が残る。覆土は黒褐色系シルトを主体とする。遺物は須恵器坏10点、蓋3点が出土している。



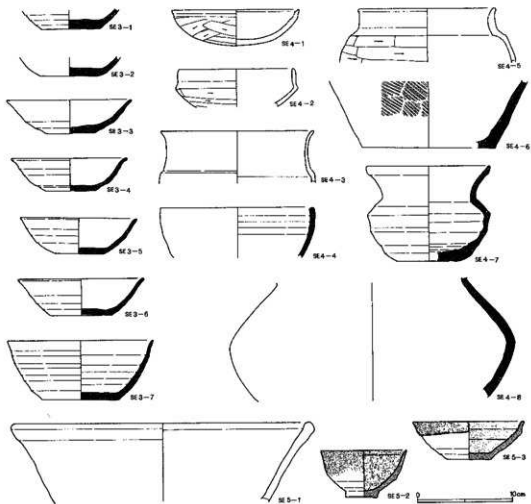
第361図 第1~2号井戸跡出土遺物



- SE3層序
- 1 暗褐色 小礫、微量の焼土、ロームを混入。しまり有。須恵器の破片を包含する。
  - 2 黒色 全体に粗粒でしまりなし。ローム(厚2~3cm)小礫を少量混入。
  - 3 褐色 ロームを少量混入。しまりなし。
  - 4 暗褐色 砂礫質。しまりなく、濡れやすく水分を多く含む。縦溝には崩落下ロームを混入。

- SE4層序
- 1 暗褐色 石を多く、焼土、炭化物を混入。
  - 2 暗褐色 石、ロームを混入。
  - 3 暗褐色 小石を含み、ロームを混入。
  - 4 砂礫層 黒色土を中間に混入し、周りの砂礫層が崩落したと考えられる。
- \* 須恵器・土師器片を出土する。

第362図 第3~5号井戸跡



第363図 第3～5号井戸跡出土遺物

第3号井戸跡（第362図）K-15-i Gridに位置する。18号住居跡を切る。平面形状は隅丸方形を呈する。規模は長軸1.70m、短軸1.65m、深さ1mを測る。長軸の示す方位はN-90°-Eを指す。覆土は壁の崩落と思われるローム・ブロックを多量に混入する黒色土が主体である。遺物は須恵器6点、縄1点が出土している。

第3号井戸跡遺物観察表（第363図）

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	4	須恵杯		6.0			B・W・S・G	A	灰白色	30%		一括
02	3	須恵杯		6.0			W・B・Ha・S・G	A	灰白色	30%		一括
03	7	須恵杯	(13.0)	5.0	3.5		W・Ha・B・S・G	A	灰白色	70%		一括
04	2	須恵杯	(12.0)	5.0	3.4		W・Ha・B・S・G	A	灰白色	50%		一括
05	6	須恵杯	(12.0)	(5.0)	3.7		W・Ha・B・S・G	A	灰白色	50%		一括
06	1	須恵杯	(13.0)	6.4	3.8		W・Ha・B・S・G	A	灰白色	30%		一括
07	5	須恵柄	(15.0)	8.0	6.2		B・W・S・G	A	灰白色	60%		一括

第4号井戸跡（第362図）K-15-g・k Gridに位置する。新旧関係はない。平面形状は円形、開口部から中位までがロート状に開き、以下は円柱状を呈する。規模は長軸2.09m、短軸1.97m、深さ1.07mを測る。長軸の示す方位はN-90°-Eを指す。覆土は砂礫を多量に混入する暗褐色土が主体である。遺物は坏2点、壺2点、須恵器碗1点、甕2点、小型壺1点が出土している。

第4号井戸跡遺物観察表（第363図）

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	碗	(13.0)		(3.7)		W・B・U・S・Ha	A	橙色	40%		一括
02	1	坏B	(12.0)				W・B・K・S・G	A	赤褐色	30%		一括
03	5	壺	(16.0)				W・B・U・S・G	A	褐灰色	10%		一括
04	3	須恵碗	(16.0)				W・B・Ha・S・G	A	灰白色	10%		一括
05	6	甕	(14.0)				W・B・U・S・G	A	橙色	10%		一括
06	7	須恵壺		(14.0)			W・B・S・K・G	A	灰白色	5%		一括
07	4	須小壺	(13.0)	6.8	10.0		W・B・S・K・G	A	灰白色	60%		一括
08	8	須恵壺					W・B・Ha・S・G	A	褐灰色	20%		一括

第5号井戸跡（第362図）I-12-h、I-13-e Gridに位置する。26、39号住居跡、3号土壌を切る。平面形状は略円形を呈する。規模は長軸1.95m、短軸1.80m、深さ1.04mを測る。長軸の示す方位はN-90°-Eを指す。覆土は壁崩壊のローム・ブロックを多量混入の黄褐色が主体である。遺物は土鍋、瀬戸碗、瀬戸製天目茶碗各1点である。

第5号井戸跡遺物観察表（第363図）

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	3	内耳鍋	(32.0)				W・B・U・S・G	A	灰白色	5%		一括
02	2	瀬戸碗	9.0	3.3	4.9	135	良瀬	A	灰白色	完形		一括天目茶碗
03	1	瀬戸碗	11.6	4.8	4.0	160	良瀬	A	灰白色	完形		一括

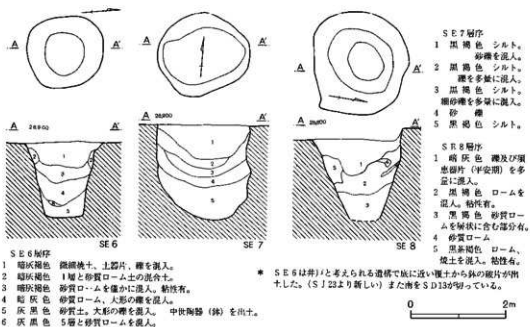
第6号井戸跡（第364図）J-9-b・f Gridに位置する。23号住居跡、13号溝跡を切る。平面形状は略円形を呈する。規模は長軸1.62m、短軸1.50m、深さ1.53mを測る。長軸の示す方位は座標北を指す。覆土は砂礫多量混入のシルト系灰黒色土が主体である。遺物は土鍋2点が出土している。

第6号井戸跡遺物観察表（第365図）

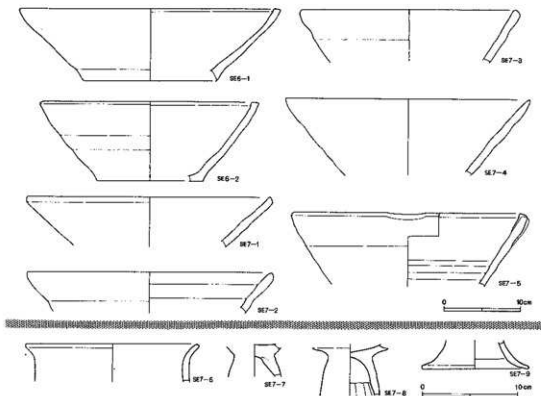
No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	内耳鍋	(34.0)				W・B・U・S・G	A	灰白色	30%		一括
02	1	内耳鍋	(29.0)	(14.0)	(10.5)		W・B・K・S・G	A	灰白色	20%		一括

第7号井戸跡（第364図）K-11-d Gridに位置する。新旧関係はない。平面形状は略円形を呈する。規模は長軸1.95m、短軸1.80m、深さ2.09mを測る。長軸の示す方位はN-90°-Eを指す。覆土は砂礫を多量に混入する黒褐色土が主体である。遺物は甕1点、高坏3点、土鍋3点が出土している。





第364図 第6~8号井戸跡

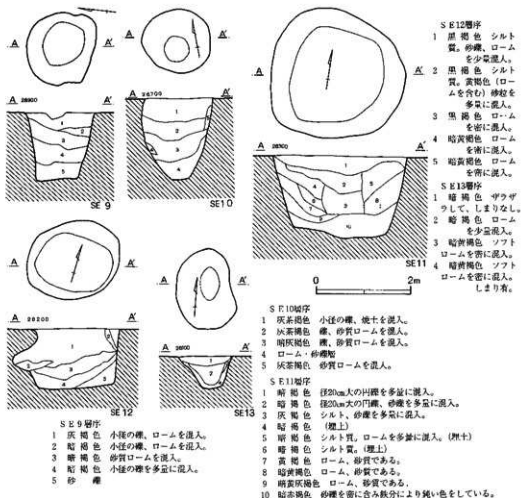


第365図 第6~7号井戸跡出土遺物

第7号井戸跡遺物観察表 (第365図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重口	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	7	内耳鍋	(32.0)				W・B・U・S・G	A	灰白色	10%		一括
02	5	内耳鍋	(32.0)				W・B・S・U・G	A	灰白色	10%		一括
03	6	内耳鍋	(28.0)				W・B・K・S・G	A	灰白色	10%		一括
04	8	摺鉢	(32.0)				W・B・S・U・G	A	灰白色	5%		一括
05	4	内耳鍋	(30.0)				W・B・U・S・G	A	浅黄褐色	20%		一括
06	9	甌	(18.0)				W・B・R・K・S	A	褐色	5%		一括
07	1	高坏					W・B・R・U・G	A	褐色	20%		一括
08	3	高坏					W・B・U・S・G	A	淡褐色	20%		一括
09	2	高坏		(11.0)			W・B・U・S・G	A	赤褐色	10%		一括

第8号井戸跡 (第364図) K-9-a-b-e-f Gridに位置する。42号住居跡を切る。平面形状は略隅丸方形を呈する。規模は長軸2.18m、短軸2.00m、深さ1.97mを測る。長軸の示す方位はN-90°-Eを指す。覆土はローム・ブロックを多量混入の黒褐色土を主体とする。遺物はない。



第366図 第9～13号井戸跡

第9号井戸跡（第366図）J-10-f・g Gridに位置する。13号溝跡を切る。平面形状は略円形を呈する。規模は長軸1.55m、短軸1.45m、深さ1.51mを測る。長軸の示す方位はN-90°-Eを指す。覆土は砂質ローム混入の暗褐色土を主体とする。遺物は須恵器坏1点、砥石1点が出土している。

第9号井戸跡遺物観察表（第367図）

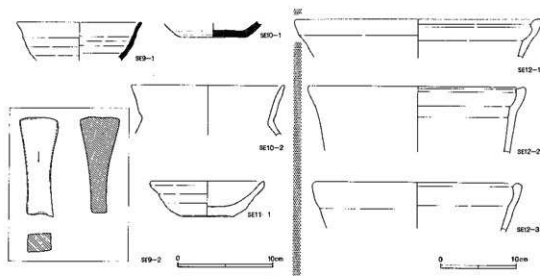
No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号	
01	1	須恵坏	(13.0)				W・B・Ha・U・S	A	灰白色	20%		一括	
02	2	砥石	全長10.1cm、幅4.1cm、厚さ4.0cm、重さ150g								50%		一括

第10号井戸跡（第366図）J-10-k・l Gridに位置する。55号住居跡を切る。平面形状は略円形、断面は西壁側中位で若干オーバーハングがみられる。規模は長軸1.45m、短軸1.35m、深さ1.75mを測る。長軸の示す方位はN-90°-Eを指す。覆土は砂質ローム混入の灰茶褐色を主体とする。遺物は壺1点、須恵器坏1点が出土している。

第10号井戸跡遺物観察表（第367図）

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	須恵坏	(7.0)				W・R・B・S・G	A	灰白色	20%		一括
02	2	壺	(16.0)				W・B・U・R・G	A	橙 色	5%		一括

第11号井戸跡（第366図）L-15-f・j Gridに位置する。31号住居跡を僅かに切る。平面形状は略円形を呈し、断面形は逆台形である。規模は長軸2.86m、短軸2.73m、深さ1.65mを測る。長軸の示す方位は座標北を指す。覆土は径20cm大の円礫を多量に混入する暗褐色土を主体とする。遺物はカワラケの坏1点である。



第367図 第9～12号井戸跡出土遺物

第11号井戸跡遺物観察表 (第367図)

No	測器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	キワタリ杯	12.0	5.6	3.7	154	R・B・S・G	A	浅黄褐色	95%		一括

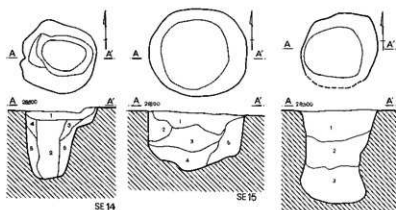
第12号井戸跡 (第366図) L-15-k-o Grid に位置する。新旧関係はない。平面形状は略円形を呈し、断面は西壁下にオーバーハングがみられる。規模は長軸2.08m、短軸1.62m、深さ1.31mを測る。長軸の示す方位はN-51°-Eを指す。覆土はシルト質の黒褐色土が主体である。遺物は土鍋3点が出土している。

第12号井戸跡遺物観察表 (第367図)

No	測器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	内耳鍋 (32.0)				W・B・U・S・G	A	灰白色	10%		一括
02	2	内耳鍋 (28.0)				W・B・U・S・G	A	鈍い黄褐色	10%		一括
03	3	内耳鍋 (26.0)				W・B・U・S・G	A	鈍い褐色	5%		一括

第13号井戸跡 (第366図) L-15-o-p、M-15-c-d Grid に位置する。新旧関係はない。平面形状は楕円形を呈する。規模は長軸1.69m、短軸1.13m、深さ61cmを測る。長軸の示す方位は座標北を指す。覆土はローム・ブロックを多量に混入する暗褐色土が主体である。出土遺物はない。

第14号井戸跡 (第368図) L-12-g Grid に位置する。49号住居跡を切る。平面形状は不整形円形を呈する。規模は長軸1.50m、短軸1.47m、深さ1.44mを測る。長軸の示す方位は座標北を指す。覆土は焼土、ロームを多量に混入する暗褐色土を主体とする。内容的には井戸跡とすることに疑問が残る。遺物は須恵器の大甍片が出土している。



SE14層序

- 1 暗褐色 焼土、ロームを多量に混入。(S149床下の覆土)
- 2 暗褐色 少量の焼土、多量の須恵器を混入。
- 3 暗黄褐色 ロームを密に混入。
- 4 暗黄褐色 ロームを密に混入。
- 5 暗褐色 シルト質。ソフトローム、礫を多量に混入。

SE15層序

- 1 暗黒褐色 ローム、焼土を少量混入。
- 2 黄褐色 ロームが主体である。砂礫粒を多量に混入。
- 3 暗黒褐色 ロームを混入。
- 4 黄褐色 ロームが主体である。砂礫粒を多量に混入。
- 5 黒褐色 粘質、ロームを混入。

SE16層序

- 1 暗褐色 ローム少量混入。傘大の円礫を混入。
- 2 暗黒褐色 扇高ロームが壁際に塊状に混入。傘大の円礫の混入は1層より少ない。
- 3 暗褐色 粘質土。扇高ロームを混入。

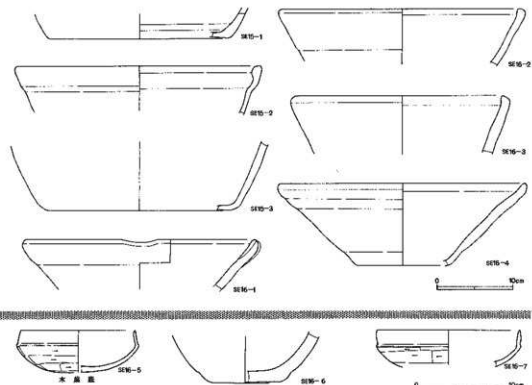
0 2m

第368図 第14～16号井戸跡

第15号井戸跡 (第368図) L-16-h, L-17-e Gridに位置する。7号溝跡を切る。平面形状は略円形を呈する。規模は長軸2.06m、短軸1.84m、深さ1.23mを測る。長軸の示す方位は座標北を指す。覆土は壁際に壁の崩壊を示す黄褐色上がみられ、中央は黒褐色土と黄褐色土が交互に平行堆積が認められる。遺物は土鍋3点が出土している。

第15号井戸跡遺物観察表 (第369図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	内耳鍋		(24.0)			W・B・U・S・G	A	鈍い橙色	5%		一括
02	1	内耳鍋	(32.0)				W・B・U・S・G	A	灰白色	10%		一括
03	3	内耳鍋		(24.0)			W・B・U・S・G	A	灰白色	10%		一括

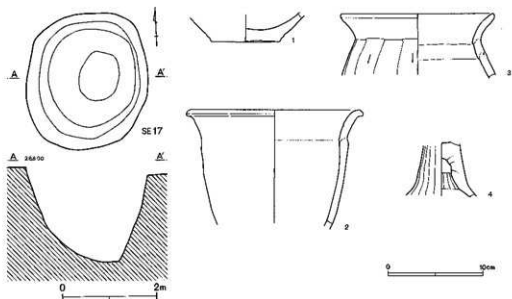


第369図 第15~16号井戸跡出土遺物

第16号井戸跡遺物観察表 (第369図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	7	内耳鉢	(30.0)				W・S・B・U・G	A	橙色	10%		一括
02	4	内耳鉢	(32.0)				W・B・U・S・G	A	淡い橙色	5%		一括
03	3	内耳鉢	(28.0)				W・U・S・B・G	A	灰白色	5%		一括
04	6	槽鉢	(32.0)	(12.0)	10.8		W・U・B・S・G	A	灰白色	20%		一括
05	1	坏B	12.0		4.3		W・B・U・S・G	A	赤棕色	20%		一括
06	5	陶磁器		3.5			W・U・B・S・G	A	浅黄棕色	10%		一括
07	2	坏B	(15.0)				W・B・K・S・G	A	浅黄棕色	10%		一括

第16号井戸跡 (第368図) M-11-e-i Grid に位置する。68号住居跡を切る。平面形状は略円形を呈する。規模は長軸1.79m、短軸1.58m、深さ2.03mを測る。長軸の示す方位はN-49°-Eを指す。覆土は暗黒褐色系シルトが主体である。遺物は坏2点、甕1点、土鍋3点が出土している。

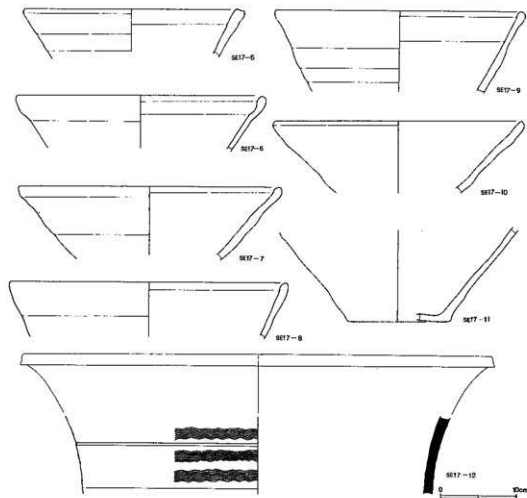


第370図 第17号井戸跡・出土遺物

第17号井戸跡 (第370図) O-10-a-e Grid に位置する。89号住居跡を切る。平面形状は略円形を呈する。規模は長軸2.86m、短軸2.58m、深さ1.91mを測る。長軸の示す方位は座標北を指す。覆土はシルト系の黒褐色土を主体とする。遺物は甕3点、高坏1点、須恵器大甕1点、土鍋6点である。

第17号井戸跡遺物観察表 (第370-371図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重口	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	7	甕		(7.0)			W・B・S・G	A	淡い褐色	10%		一括
02	3	甕	(18.0)				W・B・U・S・G	A	橙色	10%		一括
03	6	甕	(16.0)				W・B・U・S・G	B	赤褐色	20%		一括
04	9	高坏					W・B・S・U・G	A	橙色	20%		一括
05	11	内耳鍋	(28.0)				W・R・S・U・G	A	鈍い橙色	10%		一括
06	4	内耳鍋	(32.0)				W・U・B・S・G	A	灰白色	10%		一括
07	10	内耳鍋	(34.0)				W・B・S・U・G	A	灰白色	20%		一括
08	12	内耳鍋	(36.0)				W・U・B・S・G	A	灰白色	10%		一括
09	2	甕鉢	(32.0)				W・U・B・S・G	A	灰白色	20%		一括
10	1	内耳鍋	(32.0)				W・B・K・U・S	A	浅黄褐色	20%		一括
11	5	内耳鍋		(13.0)			W・U・B・S・G	A	灰白色	20%		一括
12	8	須恵甕	(60.0)				W・B・S・G	A	灰白色	10%		一括



第371図 第17号井戸跡出土遺物

第18号井戸跡（第372図）P-9-a・b・e・f Gridに位置する。97、98号住居跡を切る。平面形状は略円形を呈する。規模は長軸2.36m、短軸2.25m、深さ1.51mを測る。長軸の示す方位は座標北を指す。覆土は粘土質の灰褐色土を主体とする。遺物はカワラケ杯1点、土鍋1点が出土している。

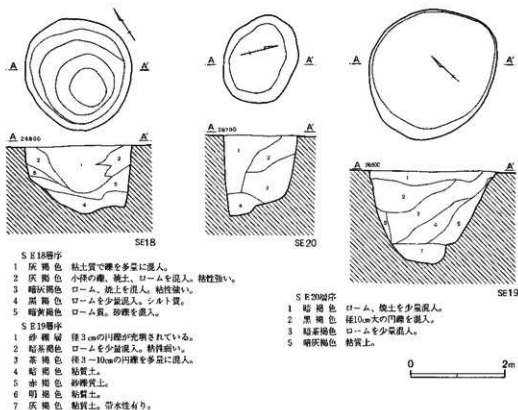
第18号井戸跡遺物観察表（第373図）

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	内耳鍋	(32.0)				W・B・U・S・G	A	灰白色	5%		一拵
02	1	カワラケ杯	7.2	5.0	1.8		W・B・U・S・G	A	浅黄橙色	85%		一拵

第19号井戸跡（第372図）N-10-m・n、O-10-b・c Gridに位置する。89号住居跡、33号土塙を切る。平面形状は略円形を呈する。規模は長軸2.92m、短軸2.57m、深さ1.56mを測る。長軸の示す方位はN-90°-Eを指す。覆土はローム混入の粘土質が主体である。遺物は砥石1点、土鍋5点が出土している。

第19号井戸跡遺物観察表 (第373図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	4	内耳鍋	(34.0)				S・W・K・G	A	灰白色	5%		一括
02	6	指鉢	(29.0)				W・U・S・B・G	A	鈍い棕色	10%		一括
03	1	内耳鍋		(13.0)			W・B・S・U・G	A	灰白色	20%		一括
04	2	内耳鍋	(34.0)				W・U・B・S・G	A	灰白色	10%		一括
05	3	内耳鍋		(12.0)			W・S・U・B・G	A	灰白色	10%		一括
06	5	砥石	全長5.8cm、幅2.8cm、厚さ2.2cm、重さ65g							40%		一括



SE18層序

- 1 灰褐色 粘土質で礫を多量に混入。
- 2 灰褐色 小礫の礫、粘土、ロームを混入。粘性強い。
- 3 暗灰褐色 ローム、焼土を混入。粘性強い。
- 4 黒褐色 ロームを少量混入。シルト質。
- 5 暗黄褐色 ローム質。砂礫を混入。

SE19層序

- 1 砂礫層 径3cmの円礫が充満されている。
- 2 暗茶褐色 ロームを少量混入。粘性弱い。
- 3 茶褐色 径3-10cmの円礫を多量に混入。
- 4 暗褐色 粘質土。
- 5 赤褐色 砂礫質土。
- 6 明褐色 粘質土。
- 7 灰褐色 粘質土。帯水性有り。

SE20層序

- 1 暗褐色 ローム、焼土を少量混入。
- 2 黒褐色 径10cm大の円礫を混入。
- 3 暗茶褐色 ロームを少量混入。
- 5 暗灰褐色 粘質土。

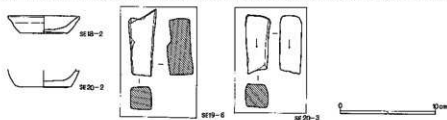
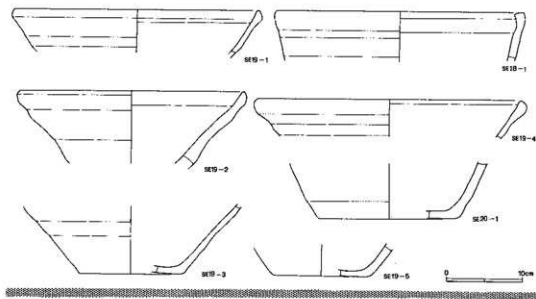
第372図 第18～20号井戸跡

第20号井戸跡 (第372図) P-7-a・b Gridに位置する。新旧関係はない。平面形状は楕円形を呈する。規模は長軸1.80m、短軸1.50m、深さ1.56mを測る。長軸の示す方位はN-47°-Wを指す。覆土は円礫を多量に混入する黒褐色土が主体である。遺物は甕、土鍋、砥石各1点が出土している。

第20号井戸跡遺物観察表 (第373図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	指鉢	(18.0)				W・B・U・S・G	A	鈍い棕色	10%		一括
02	1	甕		5.2			W・B・K・S・G	A	棕色	10%		一括
03	3	砥石	全長6.1cm、幅2.6cm、厚さ4.2cm、重さ55g							50%		一括





第373図 第18~20号井戸跡出土遺物

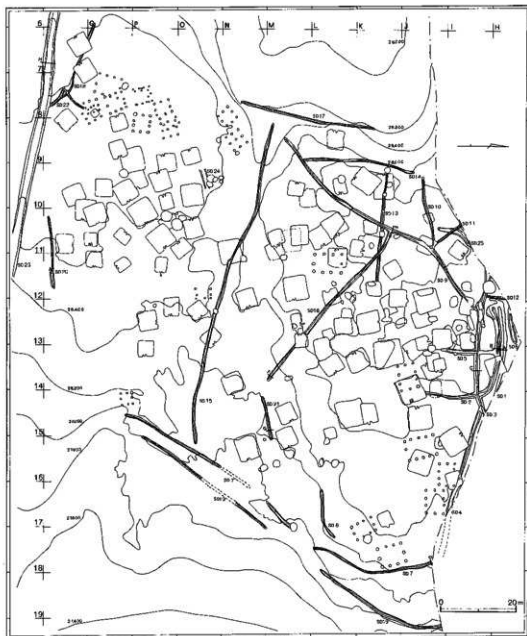
桑原A遺跡 井戸跡一覽表

單位 m

	形状	開口部径	深度	遺物		形状	開口部径	深度	遺物
SE1	円形	3.57×3.30	2.47	播鉢缶	SE11	略円形	2.86×2.73	1.65	鉢付鉢
SE2	略円形	2.26×2.04	1.14	須恵坏缶	SE12	略円形	2.08×1.62	1.31	内耳鍋缶
SE3	隅丸方形	1.70×1.65	1.00	須恵坏缶	SE13	楕円形	1.69×1.13	0.61	
SE4	円形	2.09×1.97	1.07	須恵坏缶	SE14	不整形	1.50×1.47	1.44	内耳鍋缶
SE5	略円形	1.95×1.80	1.04	始磨鍋缶	SE15	略円形	2.06×1.84	1.23	内耳鍋缶
SE6	略円形	1.62×1.50	1.53	始磨鍋缶	SE16	楕円形	1.79×1.58	2.03	内耳鍋缶
SE7	略円形	1.95×1.80	2.09	始磨鍋缶	SE17	略円形	2.86×2.58	1.91	内耳鍋缶
SE8	隅丸方形	2.18×2.00	1.97		SE18	略円形	2.36×2.25	1.51	内耳鍋缶
SE9	略円形	1.55×1.45	1.51	須恵坏缶	SE19	略円形	2.92×2.57	1.56	内耳鍋缶
SE10	略円形	1.45×1.35	1.75	須恵坏缶	SE20	楕円形	1.80×1.50	1.56	内耳鍋缶

#### (4) 溝 跡

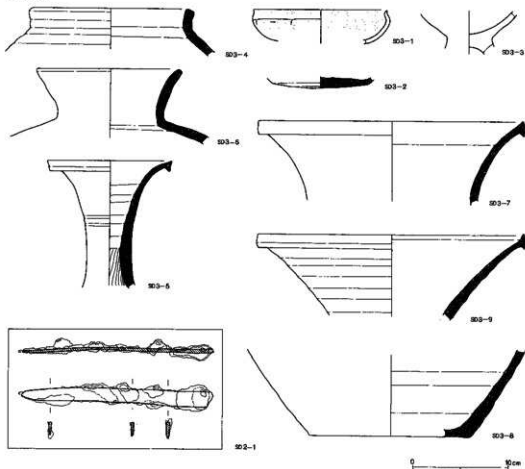
検出された溝跡は25条、全て西半部の調査区に存在する。Ⅲ-1遺跡の概要で触れた通り、概ね3時期に分けられる。最も古い段階は集落の初現となる6世紀中葉で、ほぼ東西に面する15、16、23号溝跡の3条が該当する。15、16号溝跡は同期の住居跡との間に新旧関係をもつことから、機能した時期が比較的短期間であるのに対し、23号溝跡は6～8世紀までの継続使用が考えられる。ま



第374図 桑原A遺跡遺構分布

た、南側を除く三方は自然地形により高度を減じ、遺跡(集落)の領域は独立した台地部分が相当する。次段階は8-9世紀を中心とするもので、二条一組の溝が該期の集落を包み込むように配されている。つまり、北は崖線と3、4号溝跡、東は7、19号溝跡、西は14、17号溝跡がそれぞれ二条一組を成し、自然地形を巧みに利用した配置が窺え、更にその内部(集落)を8、16、21号溝跡が分割している。当然、他の遺構との新旧関係も多く、最低3時期の変遷が考えられる。南部の掘立柱建物跡の一部は20、22、23号溝跡が外部との境界を成している。最後の段階と考えられるのは15-16世紀を中心とする時期で、1、2、5、6、8、13号溝跡が該当する。21号掘立柱建物跡と井戸跡および掘立柱建物が、ほぼ同一時期と考えられるが、北側の1、2、5号溝跡に区画性が認められる他は掘削の意図は不明である。総じて遺物量は少ないが、23溝跡は多量の完形土器を含む。

第1号溝跡(第374図) H-11-d-G-14-m Gridに位置する。新旧関係は6号住居跡、2号土塼、2号溝跡を切る。ほぼ東西方向を指向する。総延長は28.50m、幅員上場0.83m、同下場0.32m、深度0.15mを測り、断面形は皿状を呈する。立ち上がり中位に棚状部分をもつ。出土遺物はない。



第375図 第2~3号溝跡出土遺物

第2号溝跡(第374図) Q-12-m~I-14-e Gridに位置する。新旧関係は1号溝跡を切り、5、6、15号住居跡、3、5号溝跡を切る。東西、南北にほぼ「く」の字状を呈する。総延長は41.20m、幅員上場1.70m、深度0.30mを測り、断面形は皿状を呈する。溝底に小ピットを伴う。出土遺物はない。

第2号溝跡遺物観察表(第375図)

No	測	器種	全長	基部幅	背幅	重9	備考	残存	位置	注記番号
01	1	刀子	21.1	1.60	0.22		基部はなく全長は全て刀身を表示	60%	覆土	一括

第3号溝跡(第374図) H-11-f~H-14-g Gridに位置する。新旧関係は2、4、5、11号溝跡、1号井戸跡に切られる。ほぼ東西方向を指向する。総延長は40.40m、幅員上場1.20m、同下場0.30m、深度0.45mを測る。断面形は箱矢研を呈する。溝底に小ピットを伴う。出土遺物は台付甕1、坏1、須恵器甕4、壺3を検出した。

第3号溝跡遺物観察表(第375図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重9	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	10	坏A	(14.0)	10.0			W・B・U・S・G	A	赤棕色	20%		一括
02	3	環坏					W・B・S・K・G	A	灰色	20%		9
03	9	台付甕					W・R・K・B・S	A	浅黄棕色	5%		6
04	5	須恵壺	(17.0)				W・B・S・K・G	A	灰白色	5%	39	
05	1	須恵壺	(13.0)				W・B・S・G	A	灰色	20%		
06	4	須恵壺	14.4				W・B・U・Ha・G	A	灰色	20%		
07	2	須恵壺	(28.0)				W・B・K・S・G	A	灰色	10%		
08	8	須恵壺		(17.0)			W・K・U・B・S	A	灰白色	5%		24
09	6	須恵壺	(28.0)				W・B・S・G	A	灰白色	5%		36

第4号溝跡(第374図) H-14-f~H-16-O Gridに位置する。新旧関係は1、2号住居跡を切る。3号溝跡との関係は同時期か或いはやや古い時期と考えられる。地形に則してほぼ南北を指向する。総延長は30.50m、幅員上場0.73m、深度0.12mを測る。断面形は皿状を呈する。壁面に小ピットを伴う。出土遺物は土師甕1点である。

第4号溝跡遺物観察表(第376図)

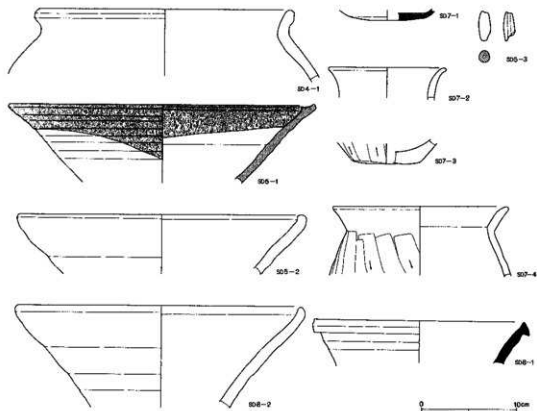
No	測	器種	口径	底径	器高	重9	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	甕	(26.3)				G	A	浅黄棕色	5%		

第5号溝跡(第374図) H-13-a~J-13-a Gridに位置する。新旧関係は38、39号住居跡を切り、2、3号溝跡は概ね同時期と考えられる。ほぼ南北を指向する。総延長は13.00m、幅員上場1.05m、同下場0.60m、深度0.35mを測る。断面形は矢研を呈する。出土遺物は美濃瀬戸鉢1、土鍋1、上鉢1、須恵大壺1である。

第5号溝跡遺物観察表(第376図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重9	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	瀬戸鉢	(32.0)				G	A	灰白色	10%		1

02	3	内耳縁 (30.0)			W・S・B・U・G	A	灰白色	10%	一括
03	2	土踵 全長3.10cm、幅1.20cm			W・R・S・G	A	浅黄褐色	90%	一括



第376図 第4～8号溝跡出土遺物

**第6号溝跡** (第374図) G-12-i-G-12-h Gridに位置する。新旧関係はないが、1号溝跡に並行して東西方向を指向する。総延長12.30m、幅員上場1.20m、同下場0.65m、深度0.27mを測る。断面形は皿状を呈する。中に棚状部分有り。出土遺物はない。

**第7号溝跡** (第374図) I-17-h-O-14-O Gridに位置する。新旧関係はない。19号溝跡と一对で機能する溝と考えられる。途中2ヶ所寸断部分があるが、総延長は94.50mに及ぶ。陸橋部分(寸断部分)は北から7.50m、12.00mを測る。断面規模は幅員上場0.70m、同下場0.37m、深度0.21mを測る。断面形は矢研を呈する。出土遺物は土師器甕2、小型甕1、須恵器環1点である。

第7号溝跡遺物観察表 (第376図)

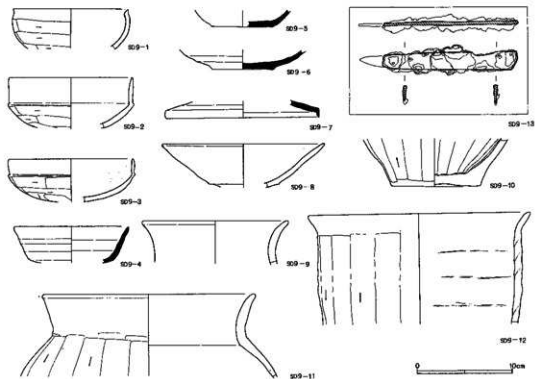
No	測	器種	口径	底径	器高	重0	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	4	須環					W・B・S・G	A	灰白色	5%		一括
02	1	小型甕 (12.0)					W・B・U・S・G	A	浅黄褐色	5%		一括

03	3	罎	(7.0)		W・U・S・B・G	A	橙色	5%	一括
04	2	壺	(18.0)		B・U・W・S・G	A	赤褐色	5%	一括

第8号溝跡(第374図) K-16-i~K-17-e Gridに位置する。新旧関係は15号井戸跡に切られる。遺構の性格は7、19号溝跡同様集落を内包する機能をもつものと考えられ、地形に則して配されている。総延長は14.10m、幅員上場0.50m、深度0.12mを測る。断面形は皿状を呈する。出土遺物は須恵器壺1点である。

第8号溝跡遺物観察表(第376図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	須恵壺	(22.0)				W・B・S・G	A	灰白色	5%		一括
02	1	内耳銅	(30.0)				W・B・K・S・G	A	灰白色	20%		一括



第377図 第9号溝跡出土遺物

第9号溝跡(第374図) H-11-1~L-8-i Gridに位置する。新旧関係は11、21、53号住居跡、10、11、14、16号溝跡を切る。総延長は66.42m、幅員上場0.92m、同下場0.62m、深度0.24mを測る。断面形は皿状を呈する。溝底、壁面に小ピットが11ヶ所認められる。出土遺物は土師器坏3、高坏1、甕3、甗1、須恵器坏3、蓋1点である。

第9号溝跡遺物観察表 (第377図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	坏A	(12.0)				W・B・S・U・G	A	赤褐色	20%		一括
02	3	坏C	(13.0)				W・B・R・S・G	A	褐色	20%		一括
03	8	坏B	(13.0)				W・B・R・U・S	A	赤褐色	30%		一括
04	2	須环	(12.0)				W・Ha・B・S・G	A	灰色	10%		一括
05	4	須环		(6.4)			W・B・S・G	A	灰白色	20%		一括
06	6	須环		(6.6)			W・Ha・B・R・S	A	淡褐色	20%		一括
07	7	須恵蓋	(16.0)				W・B・S・G	A	灰白色	20%		一括
08	5	高坏	(17.0)				W・B・U・R・G	A	赤褐色	10%		一括
09	11	甕	(15.0)				W・B・R・U・S	A	浅黄褐色	5%		一括
10	9	甕		9.6			W・B・K・U・S	A	鈍い褐色	30%		一括
11	10	甕	(22.0)				W・U・B・S・R	A	浅黄褐色	10%		一括
12	12	甕	23.0				W・B・U・S・G	A	鈍い褐色	20%		一括

鉄製刀子(第377図) 基部欠欠、刀身のみ残存。全長14.30cm、幅1.40-1.85cm、背幅0.20-0.42cmを計る。

**第10号溝跡** (第374図) H-12-e~I-9-i Gridに位置する。新旧関係は11、21、22号住居跡、3、11号溝跡を切り、9号溝跡に切られる。総延長は39.98m、幅員上場0.50m、同下場0.23m、深度0.29mを測る。断面形は略矢研を呈する。溝底は小ピット多数が検出された。出土遺物はない。

**第11号溝跡** (第374図) H-10-j~I-10-k Gridに位置する。新旧関係は21号住居跡、9、10、25号溝跡を切る。総延長は10.38m、幅員上場0.44m、同下場0.28m、深度0.21mを測る。断面形は略矢研を呈する。出土遺物はない。

**第12号溝跡** (第374図) G-11-l~H-11-d Gridに位置する。溝の性格は2、5号溝跡同様区画を意図したものであろう。新旧関係は3号溝を切る。総延長は5.00m、幅員上場0.38m、同下場0.25m、深度0.16mを測る。断面形は略矢研を呈する。出土遺物はない。

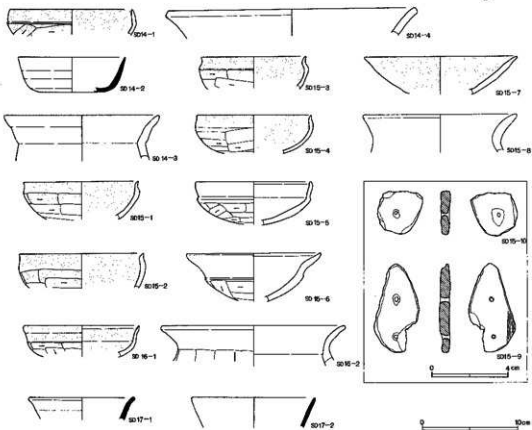
**第13号溝跡** (第374図) J-9-e~J-11-k Gridに位置する。新旧関係は23、25、55号住居跡、6、9号井戸跡、9、16号溝跡を切る。総延長は29.10m、幅員上場0.49m、同下場0.16m、深度0.18mを測る。断面形は略矢研を呈する。出土遺物はない。

**第14号溝跡** (第374図) I-9-i~L-8-d Gridに位置する。溝の性格は7、19号溝跡同様、集落を内包する機能をもつ溝で17号溝跡と一対をなすと考えられる。新旧関係は9号溝跡に切られる。総延長は29.83m、幅員上場0.39m、同下場0.15m、深度0.16mを測る。断面形は略矢研を呈する。出土遺物は土師器坏1、甕2、須恵器碗1である。

第14号溝跡遺物観察表 (第378図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	3	坏B	(13.0)				S・W・B・U・G	A	鈍い褐色	10%		一括

02	2	須坏	(11.0)	(7.0)	(3.6)	W・B・S・G	A	灰色	30%	一括
03	1	甕	(16.0)			W・B・U・S・B	A	橙色	5%	一括
04	4	甕	(26.0)			W・B・S・U・G	A	橙色	5%	一括



第378図 第14～17号溝跡出土遺物

第15号溝跡（第374図）L-8-m-N-15-i Gridに位置する。新旧関係は47、68号住居跡を切り、25号土壌に切られる。23号溝跡とはほぼ並行する位置関係にある。総延長は約93.7m、幅員上場0.56m、同下場0.30m、深度0.20mを測る。断面形は略矢筈を呈する。出土遺物は石製模造品2、土師器甕1、高坏2、坏5である。

第15号溝跡遺物観察表（第378図）

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	坏A	(12.0)				W・B・K・S・G	A	鈍い橙色	10%		一括
02	3	坏A	(13.0)				W・B・U・S・G	A	赤橙色	20%		一括
03	5	坏A	(11.0)				W・B・U・S・G	A	橙色	20%		一括
04	6	坏A	(12.0)				W・B・R・S・G	A	淡い橙色	20%		一括
05	7	坏B	(12.0)				W・B・S・U・G	A	鈍い橙色	30%	4	一括
06	1	高坏	(14.0)				W・U・B・S・G	A	赤橙色	10%		一括



07	4	高坪	(15.0)			W・B・S・G	A	赤褐色	10%		一括
08	8	茨	(16.0)			W・B・K・U・S	A	棕色	5%		一括

石製模造品（第378図）9銅形品全長4.60cm、幅2.10cm、厚さ0.50cm、重量25.00gを計る。材質は滑石製。一部欠失（90%残存）10銅形品全長2.30cm、幅2.20cm、厚さ0.40cmを計る。材質は滑石製。残存30%

**第16号溝跡（第374図）** J-10-f-L-13-p Gridに位置する。新旧関係は34、55、62号住居跡、13号溝跡に切られる。8、21号溝跡と一体になって、集落を内包する機能をもつものと考えられる。総延長は51.60m、幅員上場0.55m、同下場0.23m、深度0.12mを測る。断面形は皿状を呈する。出土遺物は土師甕1、坏1である。

**第16号溝跡遺物観察表（第378図）**

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	坏	(12.0)				W・S・R・G	A	浅黄褐色	10%		一括
02	1	茨	(19.0)				W・Ha・B・S・G	A	棕色	5%		一括

**第17号溝跡（第374図）** J-8-i Gridに位置する。新旧関係はない。14号溝跡と二条一組で該期の集落を内包する機能をもつものと思われる。総延長は24.20m、幅員上場0.73m、同下場0.28m、深度0.36mを測る。断面形は略矢研を呈する。出土遺物は須恵器坏2である。

**第17号溝跡出土遺物観察表（第378図）**

No	測	器種	口径	底径	器高	重	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	1	須坏	(11.0)				W・D・Ha・S・G	A	灰白色	5%		一括
02	2	須坏	(13.0)				W・D・Ha・S・G	A	灰白色	5%		一括

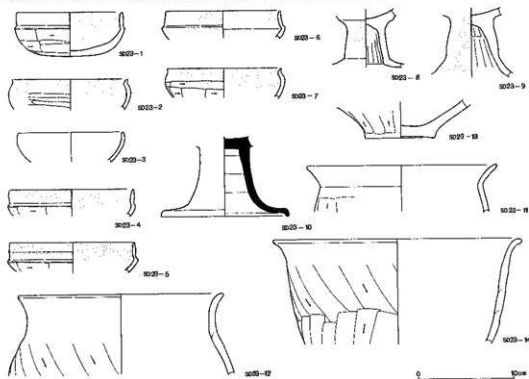
**第18号溝跡（第374図）** P-5-p-Q-6-f Gridに位置する。新旧関係は74、75号住居跡を切り、22号溝跡に切られる。溝跡掘削の意図は不明であるが南西に集中する倉庫群を内包する機能が考えられ、20号溝跡と一体をなすものとも考えられる。総延長は27.55m、幅員上場0.26m、深度0.04mを測る。断面形は皿状を呈する。出土遺物はない。

**第19号溝跡（第374図）** I-19-a-O-15-i Gridに位置する。新旧関係はない。7号溝跡と二条一組で集落を内包する機能を有するものと考えられる。途中2ヶ所で陸橋部を設けることは、位置的に概ね7号溝跡に対応する。陸橋の規模は西から18.00m、10.30mである。総延長は96.00m、幅員上場0.40m、深度0.04mを測る。断面形は皿状を呈する。出土遺物はない。

**第20号溝跡（第374図）** Q-10-m-Q-11-p Gridに位置する。新旧関係はない。18号溝跡同様倉庫群を内包する機能が考えられる。総延長19.40m、幅員上場0.47m、同下場0.27m、深度0.07mを測る。断面形は皿状を呈する。出土遺物はない。

第21号溝跡（第374図）M-14-b-L-15-m Gridに位置する。新旧関係はない。7、8号溝跡と一体となり集落を内包する機能が考えられる。その場合、両側は陸橋となり通路としての機能が想定される。総延長は9.34m、幅員上場0.69m、同下場0.34m、深度0.21mを測る。断面形は皿状を呈する。出土遺物はない。

第22号溝跡（第374図）P-7-p-Q-7-o Gridに位置する。新旧関係は19、20掘立柱建物跡、38号土塼、23号溝跡を切り、18号溝跡に切られる。総延長は16.12m、幅員上場0.55m、同下場0.39m、深度0.15mを測る。断面形は皿状を呈する。出土遺物はない。



第379図 第23号溝跡出土遺物

第23号溝跡（第374図）Q-4-i-R-8-a Gridに位置する。新旧関係は22号溝跡に切られる。総延長は本遺跡内で50.40mであるが、大半は南に隣接する田鳥遺跡、西の棚田遺跡に含まれるため全容を把握するには至っていない。推定では350m～400mと考えられる。幅員上場2.12～2.40m、同下場1.18～1.44m、深度0.35mを測る。断面形は略矢筈を呈する。ほぼ東西を指向しており、本遺跡における集落の初現段階（6世紀中葉）から8、9世紀の集落までの南限を意図して機能していたことが考えられる。（南の田鳥遺跡の集落は7世紀を中心とすることから、7世紀には北限を意図した溝とすることができる。）出土遺物は坏7、高坏2、甑1、壺3、須恵高坏1である。

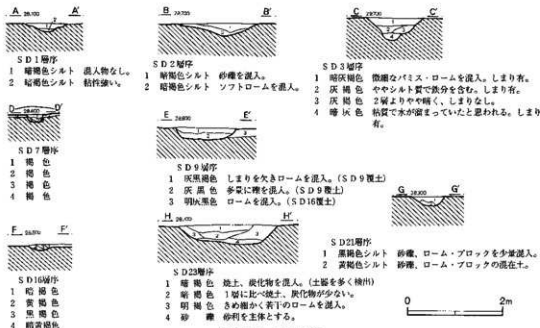
第23号溝跡出土遺物観察表 (第379図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	2	坏B	11.0		4.6		W・B・R・S・G	A	橙 色	80%		一括
02	4	坏A	(12.0)				W・B・S・G	A	橙 色	10%		一括
03	5	坏D	(11.0)				W・B・U・S・G	A	橙 色	5%		一括
04	6	坏B	(13.0)				W・B・S・G	A	橙 色	10%		一括
05	7	坏B	(13.0)				W・B・U・S・G	A	橙 色	10%		一括
06	8	坏B	(12.0)				W・U・R・S・G	A	赤橙色	20%		一括
07	9	坏A	(12.0)				W・B・U・K・G	A	橙 色	10%		一括
08	12	高坏					W・B・S・G	A	赤橙色	20%		一括
09	13	高坏					W・B・S・R・G	A	橙 色	20%		一括
10	3	須高坏		13.4			W・B・Ha・S・G	A	暗灰色	50%		52
11	10	甕	(20.0)				W・S・B・R・G	A	橙 色	5%		一括
12	11	甕	(21.0)				W・B・U・S・G	A	橙 色	10%		一括
13	14	甕	(7.3)				W・B・S・U・G	A	浅黄橙色	5%		一括
14	1	甕	(26.0)				W・B・U・S・G	A	浅黄橙色	20%		一括

57規 材質は粘板石。全長18.0cm、幅6.6cm、厚さ2.2cmを計る。黒溜まりは1.7cm、平均0.2cmを削り出す。

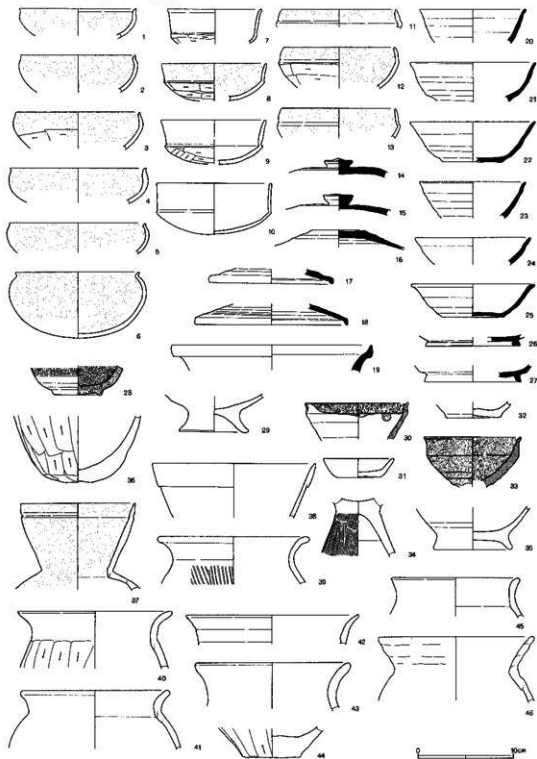
第24号溝跡 (第374図) N-9-e-N-9-f Grid に位置する。新旧関係は41、43号土壌を切る。総延長は削平のため遺存部分が僅かで3.68mを残すのみである。幅員上場0.98m、同下場0.76m、深度0.12mを測る。断面形は皿状を呈する。出土遺物はない。

第25号溝跡 (第374図) H-10-k-I-10-b Grid に位置する。新旧関係は11号土壌を切る。3号溝跡同様北部の集落を内包する機能をもつものと考えられる。総延長は10.92m、幅員上場1.30m、同下場0.82m、深度0.16mを測る。断面形は皿状を呈する。出土遺物はない。

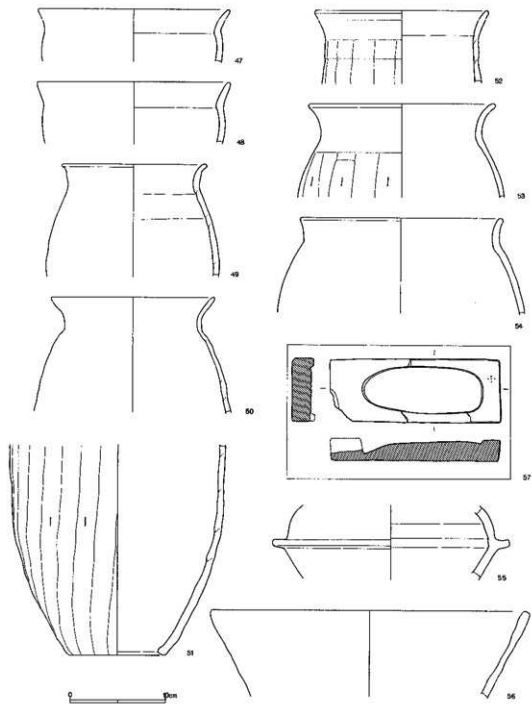


第380図 溝跡層序

(5) グリッド出土の遺物



第381図 グリッド出土遺物(1)



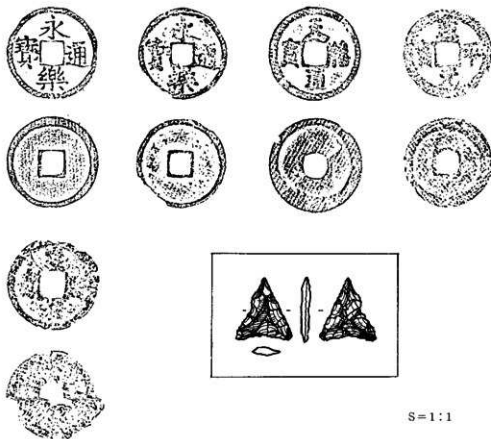
第382図 グリッド出土遺物(2)

グリット出土遺物観察表 (第381-382図)

No	測	器種	口径	底径	器高	重9	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	45	坏A	(12.0)				W・B・U・S・G	A	暗褐色	5%		一括
02	6	坏A	(12.0)				W・B・U・S・G	A	橙 色	20%	Q-6	一括
03	26	坏A	(13.0)				W・B・U・S・G	A	褐灰色	20%		一括
04	47	坏A	(14.0)				W・B・S・U・G	A	赤褐色	20%		一括
05	48	坏A	(14.0)				W・B・U・S・G	A	暗褐色	20%		一括
06	17	坏A	13.0		6.9		W・U・B・K・G	A	赤褐色	70%		一括
07	50	坏C	(10.0)				W・B・U・R・S	A	橙 色	20%		一括
08	2	坏B	(11.0)				W・B・S・U・G	A	赤褐色	30%	J-9	一括
09	49	坏C	(11.0)				W・B・S・U・G	A	橙 色	30%		一括
10	1	坏C	12.0		5.3		W・B・R・U・G	A	橙 色	60%	Q-6	一括
11	29	坏B	(12.0)				W・S・B・R・G	A	橙 色	10%		一括
12	27	坏B	(11.6)				W・B・U・S・G	A	橙 色	10%		一括
13	28	坏B	(12.0)				W・B・S・G	A	橙 色	20%		一括
14	41	須恵蓋					W・B・Ha・S・G	A	灰白色	20%		一括
15	7	須恵蓋					W・B・U・S・G	A	灰白色	10%		一括
16	43	須恵蓋					W・U・B・S・G	A	灰白色	30%	H-12	一括
17	40	須恵蓋	(13.0)				W・Ha・B・S・G	A	灰白色	5%	K-9	一括
18	4	須恵蓋	(16.0)				W・B・Ha・S・G	A	灰 色	15%	J-13	一括
19	23	須恵蓋	(21.0)					A	灰白色	2%		一括
20	18	須恵坏	(11.0)				W・B・Ha・S・G	A	灰白色	20%	L-12	一括
21	32	須恵坏	(13.0)		(4.2)		W・S・G	A	灰白色	10%		一括
22	3	須恵坏	(13.0)		(4.2)		W・B・R・U・G	A	灰白色	30%	J-13	一括
23	38	須恵坏	(11.0)				W・B・S・G	A	灰白色	5%	K-9	一括
24	39	須恵坏	(12.0)				W・S・Ha・B・G	A	灰白色	5%	K-9	一括
25	57	須恵坏	12.8	6.4	3.4		W・Ha・B・S・G	A	灰白色	80%	河川路	一括
26	42	須台坏		(10.0)			W・Ha・B・S・G	A	灰 色	5%	P-8	一括
27	35	須台坏		(10.0)			W・B・Ha・S・G	A	灰 色	10%	P-12	一括
28	15	磁器		(5.0)					淡灰褐色	30%		一括
29	53	台付蓋	(7.4)				W・R・U・K・S	A	浅黄褐色	10%		一括
30	24	瀬戸輪	(11.0)				B・W・G	A	灰白色	5%		一括
31	13	サワサワ	7.5	4.4	2.0		W・B・U・S・G	A	褐灰色	70%	K-15	一括
32	52	サワサワ	(6.0)				W・R・B・G	A	浅黄褐色	20%		一括
33	44	天目輪	(10.0)				W・G	A	褐灰色	20%	H-8	一括
34	56	台付甕					W・B・U・S・G	A	鈍い橙 色	10%		一括
35	16	台付坏	(8.0)				W・B・U・S・G	A	橙 色	30%		一括
36	21	甕					W・B・U・S・G	A	橙 色	20%	Q-6	一括
37	5	甕	12.0				W・B・U・S・G	A	橙 色	10%	N-7	一括
38	9	甕	(17.0)				W・B・U・S・G	A	浅黄褐色	5%	Q-6	一括
39	51	甕	(16.0)				W・B・K・S・G	B	橙 色	5%		一括
40	10	小型甕	(16.0)				W・B・Ha・U・S	A	鈍い橙 色	5%	Q-6	一括
41	33	甕	(15.0)				B・W・Ha・U・G	A	赤褐色	5%		一括
42	55	甕	(18.0)				W・U・B・S・G	A	赤褐色	5%		一括
43	11	甕	(16.0)				W・B・U・Ha・S	A	赤褐色	5%	Q-6	一括
44	25	甕		6.0			W・B・U・Ha・S	A	橙 色	10%	Q-6	一括
45	46	小型甕	(13.0)				S・W・U・B・G	A	橙 色	5%		一括
46	36	甕	(16.0)				W・B・Ha・U・S	A	橙 色	10%	G-6	一括
47	14	壺	20.0				W・B・K・S・G	A	橙 色	10%	J-12	一括
48	12	壺	(20.0)				W・B・K・U・S	A	浅褐色	5%	G-12	一括

49	19	小型莖	(15.0)				W・B・U・Ha・S	A	橙 色	20%	Q-6	一括
50	37	莖	(17.0)				W・R・U・S・G	A	橙 色	10%		一括
51	8	板		(10.0)			W・B・U・S・G	A	橙 色	30%	N-20	一括
52	54	板	(18.0)				W・Ha・B・U・G	A	鈍い橙 色	10%		一括
53	22	莖	19.0				W・B・S・U・Ha	A	淡い橙 色	10%	Q-6	一括
54	20	莖	(21.0)				W・B・U・Ha・S	A	橙 色	5%		一括
55	31	内耳銅					W・B・S・U・G	A	灰白色	20%	N-20	一括
56	30	内耳銅	(33.0)				W・B・S・U・K	A	灰白色	20%	K-12	一括

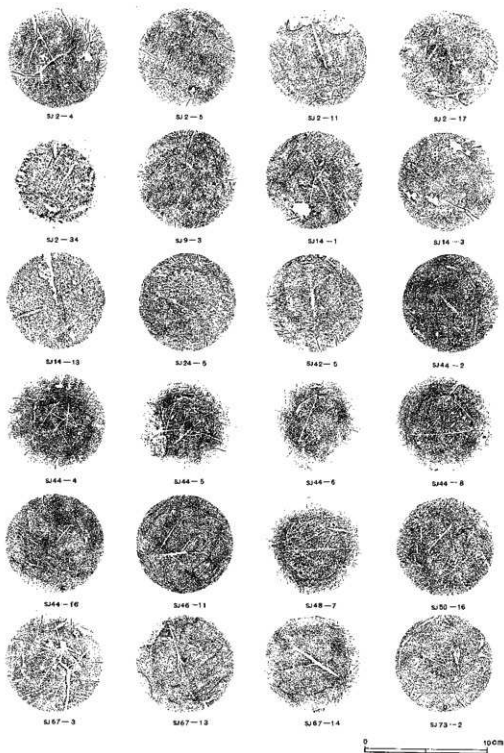
(57) 硯全長18.0cm、幅6.6cm、厚さ2.2cmを計る。墨溜まりは1.7cm、平均0.2cmを削り出す。材質は粘板岩である。



第383図 桑原A遺跡出土古銭

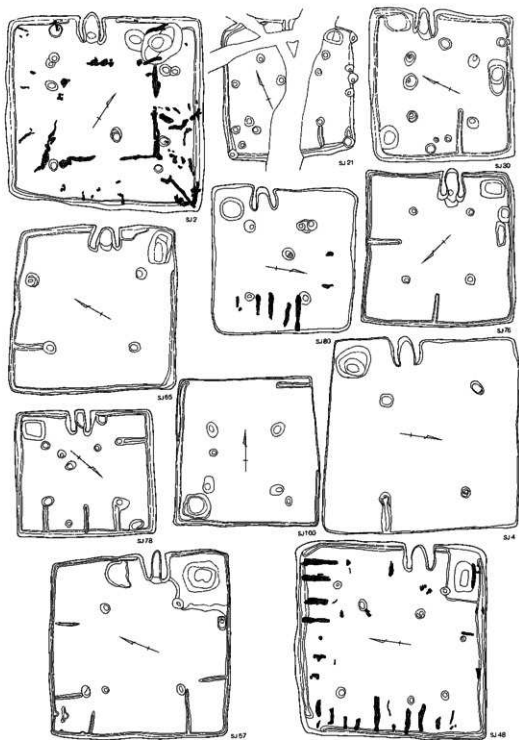
桑原遺跡出土古銭観察表 (第383図)

No	銘	初銭年	書体	出土位置	No	銘	初銭年	書体	出土位置
1	永享通寶	1411(室町)	楷書	桑原B遺跡	4	咸平元寶	998(北宋)	テン	S K 6
2	永享通寶	1411(室町)	楷書	S K 6	5	□□元寶		テン	表採
3	天輔通寶	1017(北宋)	テン	S K 6					



第384图 坏木葉底拓影图





第385図 桑原A遺跡住居跡集成

## IV 桑原B遺跡

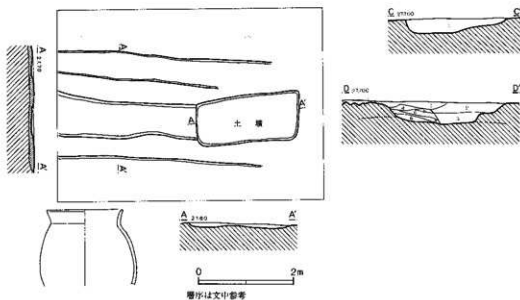
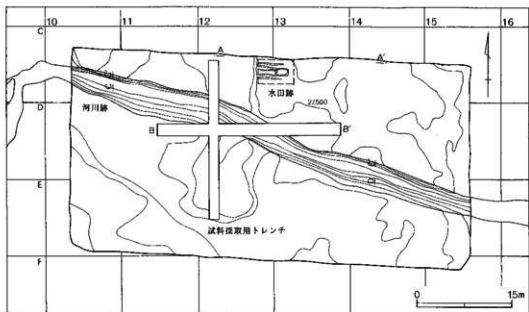
### 1 遺跡の概要

桑原B遺跡は坂戸市大字堀込字桑原230他に所在する。標高は約28mで、現水田面に位置しており、桑原A遺跡などの低台地上の遺跡群とは約1mの比高差がある。調査区は本調査に先立って昭和59年度から3ヶ年にわたって行なわれたプラント・オパール定量分析によって得られたデータを基に、当初沢木地区と堀込地区の2ヶ所が設定された。しかし、翌年再度行なったプラント・オパール分析の結果、データの密度が濃く、層位の比較的是っきりしている堀込地区（桑原B遺跡）に絞って調査を進めることになった。調査方法は、V-2のプラント・オパールの項でも述べられているようにプラント・オパール調査の対象面積が広大なことから、全体を通しての基本層序の設定が困難であった。このため、予めプラント・オパール調査で得られた成果の層序から可能性の高い層位を抽出し、上層から次第に下げていくという方法が採られた。

調査は、まずプラント・オパール用のGridを基に東西30m、南北25m、幅2mのトレンチを設定し、断面上に認められる畦畔を検出することから始めた。調査地点は現在でも水田耕作が行なわれており、第387図に示した試料採取トレンチの断面観察に於いても第3層までの層中には植物遺体が含まれる。第4層以降は次第に粘性を帯びて、植物遺体の量は減少傾向を辿る。覆土は相対的にシルト質で、稀に間層として砂層或いは砂の混入が認められる。砂層は一定でなく、シルト層とシルト層の間に入り込んでいるような状況にあり、層位を成す場合は少ない。完全な形で砂層は第7・8層で、下層程その堆積は顕著であり、河川の氾濫等によるものと考えられる。従って、調査対象となった第6層は、河川の氾濫等による堆積後に形成されたものと考えられる。また、断面には灰白色および青灰色の粘土層が各々現水田面から60cm余り下の第3層、70cm余り下の第5層の位置に確認することができる。プラント・オパールではこれらの層にもイネ科の密度が比較的濃いことから、水田面である可能性も十分に高いことが指摘されている。しかし、こうした粘土層を均一に広げていくことは技術的に無理があり、これらの層については断念せざるを得なかった。このような状況から、シルト層上に堆積している砂層が顕著な第6層に絞って調査を進めることとなった。なお、第6層を部分的に覆っている砂層は、第387図中の層序説明では省略してある。

#### 第6層の調査

調査区はD-12 Gridを中心にして拡張し、東西60m、南北33mの約2000m<sup>2</sup>の範囲とした。Gridは12mを1 Gridとした。前記のように第6層に絞って調査を進めるにあたり、10ヶ所余り及びトレンチを設定したため、結果的には確認面の一部を壊してしまうことになった。第6層は調査区の東側では殆ど確認できず、C・D-12 Gridより西側に限られた。確認面は平坦であるが、河床跡とみられるSD1を挟んで緩やかに傾斜し、更に調査区の南西隅付近では桑原A遺跡の外郭線



第1号土壇

第386図 桑原B遺跡全体図・水田跡・土壇

に沿って流れる小川(桑原A遺跡とB遺跡の中間に位置する)に向かって、急な傾斜が認められる。

調査の対象となった第6層は、現水田面から約80cm下に位置し、明灰褐色土層を呈し、部分的に確認できる砂層中に白色粒子を含むシルト層で、やや粘性がある。層の厚さは10~20cmで、部分的には30cm余りに及ぶ地点もある。断面観察では、数mおきに畦畔状の凸部が認められるが、必ずしも等間隔ではない。畦畔状の凸部は調査区の東側ほど不鮮明で、次第に凸部は確認が不可能になる。また、植物遺体は少量認められるが、水分に含まれる鉄分のため黄褐色色がかっている。

## 2 検出された遺構と遺物

### 水田跡 (第386図)

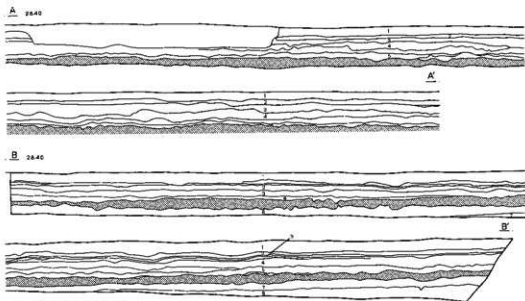
C-12・13 Gridにおいて、東西約6m、南北4mにわたって検出された。遺構は帯状の畦畔と水田面からなっており、東西方向に主軸をもっているものと考えられる。西側は試掘トレンチや攪乱によって、東西の一部をSK1に壊されている。さらにその東側については、南側と同様、畦畔と水田面との差が明瞭な痕跡は検出できなかった。畦畔と水田面は交互に二列づつ検出されたが、河床跡に面した南側は緩やかに傾斜している。畦畔と水田面を覆っている砂はやや粒子が粗く、2~7mm程の砂礫も混入している。畦畔の幅は40~45cm、基本的には周囲の土を盛りあげて作られており、特別な工夫などは認められない。水田面との比高差は2~3cm程あり、河床跡に寄った側がやや深くなっており、水はけ等を考慮して全体に微妙な傾斜がつけられているものとみられる。また、畦畔上には足跡等による落ち込みがみられ、多くの砂の流入が認められる地点が存在する。水田面は畦畔に比べ凹凸は少なく、緩やかに東側及び南側に傾斜している。遺物は土師器(第388図32)が水田検出地点の約3m南側の同一面から出土している。全体に風化しており、調整痕は明確でないが、部分的には胴部は斜方向の剝削り、口縁部は横ナデとみられる。

### 第1号土壇 (第386図)

C-13 Gridにおいて検出された。畦畔と水田面を壊して構築されている。規模は長辺2.3m、短辺1m、深さ10~15cmを測る。覆土は青灰色~黄灰色を呈し、砂粒が少量含まれ、粘性がある。確認時において、水田面や畦畔とは異なって砂粒が表面に殆どみられないことから、水田が廃絶した後に構築されたものと考えられる。遺物は出土していない。

### 河床跡 (第386図)

調査区内では、C-10~E-15 Gridにかけて検出された。幅は2~5m、深さは10~40cm程の規模をもっている。しかし、底面における段差は流路としての人為的に構築されたものとは考えにくく、自然の流路の可能性が高い。この遺構はトレンチ調査の結果、更に東西方向に延びており、西側では台地(桑原A遺跡)に沿うような形でC-9・10 Grid付近で大きく南方方向に折れ、また西側に向かって延びている。東側はさらに東流した後、次第に流路は細くなり、流れを次第に北方方向に向けているものと思われる。河床跡の覆土は大きく2層に分層される。覆土の上層は基本的に砂層で、細かいものから粗いものまで断面を観察した箇所によって異なっている。植物遺体もこの



水田面確認トレンチ層序説明

- 1 暗灰褐色土 暗黄褐色ブロック多量含む。他に砂礫少量含む。(シルト)
- 2 暗灰褐色土 焼土粒少量含む。暗褐色ブロック少量含む。(シルト)
- 3 暗灰褐色土 黄褐色ブロック少量含む。(シルト)
- 4 暗黄褐色土 粗砂粒多量含む。(シルト)
- 5 黄灰褐色土 白色粒少量含む。やや粘性あり。水田の可能性大。(シルト)
- 6 暗灰褐色土 (スクリントン部分) 水田面
- 7 明灰褐色土 白色粒少量含む。やや粘性あり。水田の可能性大。(シルト)
- 8 砂 礫 粗砂粒多量含む。厚さは一定ではない。

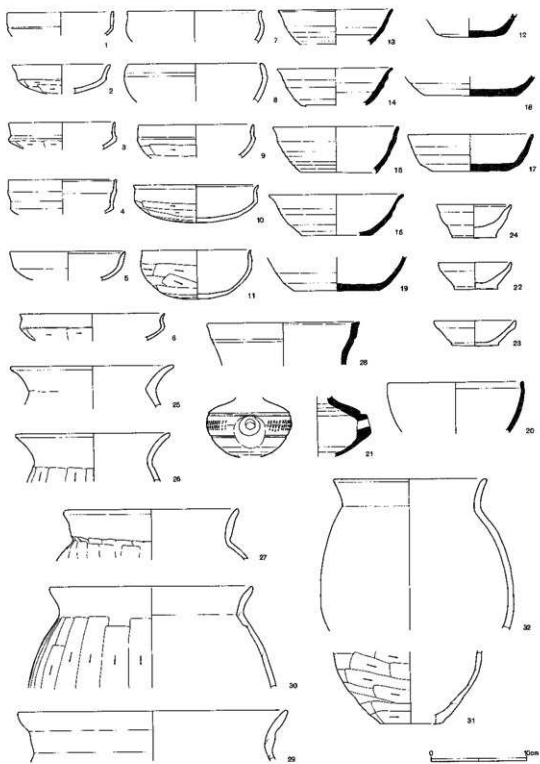
0 5m

### 第387図 桑原B遺跡水田面確認トレンチ層序

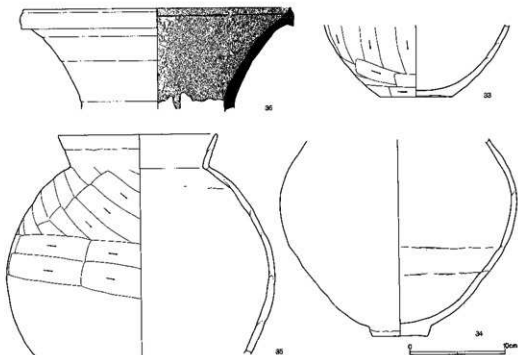
砂層中に比較的多く含まれている。下層は砂礫層で、2～5cm程の直径をもつ礫が粗い砂粒を伴う。植物遺体は殆ど認められないが、層の色調は鉄分によって黄褐色化している。第388・389図に示した遺物の殆どはこの河床跡から出土したもので、しかも大部分は下層から出土している。なお、断面観察からは出土遺物による細かい年代別の層序や河床跡の規模については確認することができなかった。

#### 出土遺物と水田跡について

出土した遺物は第388図に示した32を除いて、河床跡から出土している。前記したように32の土師器甕は水田面と同一面から出土しており、出土状況から考えて、水田跡と同時期或いはそれに近い時期のものとみられる。一方では、水田の埋没時に砂や礫とともに流れ込んできたものと考えられるが、現状では一つの時期決定の傍証としておきたい。次に河床跡から出土した遺物についてみると、いずれも下層から出土しているにも拘らず、その時期については相違が認められる。遺物の多くは完形品が少なく、器面は風化しているものが多い。遺物の時期は大きく古墳時代後期、奈良時代、中世以降の三時期に分けられる。古墳時代後期の土器群は土師器坏、甕、瓦等である。形式的には、幾分古い型式の土器群もみられるが、6世紀中・後半～7世紀前半が主体である。土師器



第388図 桑原B遺跡出土遺物(1)



第389図 桑原B遺跡出土遺物(2)

坏は内面から口縁部にかけては赤彩されているが、風化などのためにはがれている場合が殆どである。坏の大部分は「比企型坏」もしくはそれに類似したタイプのもので、口縁部の屈曲に大きな特徴がある。6・7は破片のため、復元直径がやや大きくなっているが、実際には10の坏Aとしたものに近い数値の可能性もある。土師器壺は口縁部が「く」の字状に開き、その屈曲は比較的強い。古式の甕は胴部に最大径があり、中央部～下半部にかけての膨らみが強い。やや新しい甕は口縁部の破片が多く、古式のものに比べやや屈曲が緩やかになる。全体的に口縁部・胴部の調整痕は風化のために不明瞭である。28の須恵器壺は口縁部だけの破片であるが、これらの土器群の中では古式である。奈良時代の土器群は須恵器坏・碗・甕である。いずれも破片であるため口径は推定の域を出ないが、坏は二時期以上の細分が可能である。古式のものでは底径が大きく、底部の調整は、全面或いは中心部を除く大部分を回転篋削りし、19のように体部下半に及ぶものもある。新式のものでは口縁部～体部にかけて、ロクロ痕を明瞭に残し、口唇部がやや屈曲する。底部の調整は破片のため明確ではないが、回転糸切り後未調整か周辺部回転篋削りとみられる。碗は口径14.5cmとやや小振りであり、須恵器甕とともに新しい一群に位置づけられよう。いずれも胎土から南比企産の須恵器と考えられる。中世の遺物は、22-24に示したカワラケの坏形土器で、表面の風化が著しい。

このように河床跡より出土した遺物は、大きく三時期に分けられる。これらの遺物と水田跡付近から出土した土師器甕との時期的な要素を考慮すると、水田跡と河床跡は同時期に機能していた可能性も考えられるが、一方では、調査において水路などの灌溉施設が未検出であるとはいえ、このような自然流路的な水路がある程度恒常的に使用されていたかは疑問の残るところである。今後、頻例等に注目していきたい点である。水田跡の年代は、水田跡付近より出土した甕や南側の低台地

に営まれた桑原A遺跡の集落の状況を考慮すると、桑原B遺跡は現時点の評価としては古墳時代後期の水田跡の可能性が高いと考えられる。しかし、周辺は水田が営まれている沖積地であり、周辺の河川の氾濫等を考え合わせると、周辺の集落から混入してきたことも充分考慮されるべき点であろう。トレンチによる試掘調査において、同様な河床跡が数ヶ所検出されており、沖積地内には何条かの河川が存在が推測され、古墳時代後期～中世にかけての集落が立地する低台地との比高差は1m余りであることは、多少の自然災害でも集落を飲み込むことは容易とみられるからである。

#### 入西地域における古代～中世の水田跡の可能性

従来より、坂戸市入西地区（坂戸市沢木から長岡地区に至る範囲）の越辺川右岸に広がる沖積地は、「入西条里」として知られてきたが、今回の調査によって条里制以前に遡る水田跡の可能性が高まったといえる。入西地区の水田耕作面は、調査前まで耕地整理が行なわれておらず、比較的良好な保存状態であったと思われる。第2図にみられるように、現在の水田の畦畔に区画の乱れの生じている部分は西側から延びる毛呂台地の低台地部に当たる。現在の水田は「中耕」周辺ではこの低い台地の一部は水田耕作が行なわれているが、大部分は耕作の手が及んでいない。耕作が行なわれたのも水田面と台地との比高差の少なくなった後世のことと考えられる。この低台地は調査以前は「島」状に沖積地内に残っており、台地部の延長としてよりも越辺川によって形成された自然堤防として考えられていた。しかし、調査によって、台地内に谷部が生じることによって高低差が生じるものの、基本的に稲荷前遺跡付近から中耕遺跡付近までは「陸続き」であることが明らかになった。この低台地を挟んで南側と北側には沖積地がひらけるが、南側は毛呂台地との距離が狭く、しかも谷地形は毛呂台地寄りに深くなっており、水田耕作には適合しにくいものと考えられる。毛呂台地北縁は相対的に深い谷地形を形成しており、絶えず水溜まり状になっている地点が存在する。一方、低台地の北側は低台地寄りや中央部は広い谷地形が存在し、河川とみられる流路も緩やかな傾斜で流れており、比較的平坦な地形を形作っている。この為、水の取り入れや耕作などの作業がしやすく、稲作には適した要素が整っているといえる。次にこうした地理的な背景をふまえてその水田経営がいつ頃から始められたかを考えてみると、プラント・オパール分析試料をサンプリングする際、桑原B遺跡水田面の三層ほど下面にも水田面の可能性が指摘できる面が検出されており、古墳時代後期以前の水田が存在したことが明らかになった。しかし、出土遺物等はなく、この層における、年代決定は困難である。台地上に目を移すと、毛呂台地や低台地上には弥生時代後期～古墳時代前期の集落や方形周溝墓群、古墳時代後期の集落や古墳群、奈良・平安時代の集落や生産遺跡、中世の館跡などが数多く存在する。いずれの時代の遺跡も規模が大きく、その背景には肥沃な土地に基づく生産体制があったものと考えられる。また、遺跡群の立地は台地の北斜面にも拘らず大型化しているのは、ベースとなる水田経営が整えられたためとみられる。特に、古墳時代後期以降は集落が飛躍的に増大し、その後も殆ど切れ間なく中世へと移行するとみられ、発掘調査の成果はその繁栄ぶりと文化圏の広がりを物語っている。



桑原B遺跡出土遺物観察表 (第388-389回)

No	測器種	口径	底径	器高	重g	胎土	焼成	色調	残存	位置	注記番号
01	13 坏B	(11.0)				W・R・K・S・G	A	浅黄棕色	10%	N-6	SD-1
02	14 坏B	(10.0)				W・Ha・B・S・G	A	橙 色	10%	O-B	
03	15 坏B	(11.0)				W・B・U・R・G	A	橙 色	10%	N-5	SD-1
04	16 坏F	(11.0)				W・B・S・U・G	A	橙 色	10%	N-5	SD-1
05	31 坏F	(12.0)				W・B・K・S・G	A	橙 色	10%		SD-1
06	32 坏F	(15.0)				W・B・S・G	A	橙 色	10%	N-8	SD-1
07	12 坏A	(14.0)				W・B・U・S・G	A	浅黄棕色	10%	N-6	SD 1
08	11 坏B	(14.0)				W・B・S・U・G	A	鈍い棕色	10%		一括
09	5 坏B	(12.0)				W・B・S・U・G	A	赤棕色	10%	M-4	SD-1
10	2 坏A	13.0		3.9		W・B・R・S・G	A	橙 色	70%		I-7
11	23 碗	11.2		5.1		W・S・B・G	A	橙 色	70%		河床跡
12	21 須恵坏	(7.0)				W・Ha・B・G	A	灰白色	20%		河床跡
13	19 須恵坏	(12.0)				W・B・S・Ha・G	A	灰白色	10%		O-4
14	20 須恵坏	(12.0)				W・B・Ha・S・G	A	灰 色	10%		5 D
15	17 須恵坏	13.0	7.4	4.7		W・Ha・B・S・G	A	灰 色	60%	N-5	SD-1
16	18 須恵坏	(14.0)	(7.4)	(4.3)		W・U・B・S・G	A	灰白色	20%	O-1	SD-1
17	1 須恵坏	13.2	7.8	3.8		W・Ha・B・S・G	A	灰白色	70%		O-8
18	3 須恵坏		9.8			W・B・K・S・G	A	灰白色	20%		O-1
19	4 須恵坏		(9.0)			W・B・K・S・G	A	灰 色	30%		B-0
20	9 須恵碗	(14.0)				W・B・Ha・S・G	A	灰白色	10%		一括
21	28 須恵盃					W・B・K・S・G	A	灰白色	40%		SD-1
22	6 777坏	7.6	4.3	2.8		W・B・S・Ha・G	A	橙 色	60%		上堀
23	7 777坏	8.4	4.8	2.6		W・B・S・Ha・G	A	橙 色	50%		上堀
24	8 777坏	7.8	4.6	3.4		W・R・Ha・B・G	A	橙 色	80%		上堀
25	27 类	(17.0)				W・R・B・S・G	A	橙 色	5%		O-4
26	22 类	(16.0)				W・B・R・S・G	A	橙 色	5%	M-5	SD-1
27	24 类	18.0				W・U・S・G	A	鈍い橙色	20%		O-4
28	10 須恵碗	(16.0)				W・B・G	A	灰白色	5%		一括
29	26 类	(28.0)				W・R・U・B・S	A	橙 色	10%		G-16
30	33 类	(22.0)				W・B・U・S・G	A	鈍い橙色	10%		O-5
31	30 类	(6.4)				W・B・U・S・G	A	橙 色	20%		O-5
32	36 类	16.1				U・W・R・S・G	A	赤褐色	50%		B-5
33	29 类		7.4			W・R・Ha・U・S	A	浅黄棕色	20%	N-8	SD-1
34	34 类		5.8			W・B・U・S・G	A	鈍い棕色	40%		O-4
35	35 类	(17.0)				W・B・U・S・G	A	浅黄棕色	40%		D-4
36	25 須恵碗	(28.0)				W・B・K・S・G	A	灰 色	10%		O-8

参考文献

- 長岡 孝志 1989 『金井遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第86集  
 村田 健二 1990 『広面遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第89集  
 村本 達郎 1960 『埼玉大学研究紀要社会科学編8』「関東地方西部の条里遺跡」  
 一友国五郎 1960 『埼玉大学研究紀要社会科学編8』「関東地方の条里」

# V 鑑定報告

## 1 桑原A遺跡出土の炭化材

株式会社 パレオ・ラボ (藤根 久)

桑原A遺跡は、坂戸市入西地区内にある。この遺跡より奈良、平安の焼失家屋の一部として、炭化材が出土した。ここでは、当時の建築材として使用した樹種を検討するために、これら出土した炭化材の同定を行なう。炭化材の中には、屋根材と思われる2方向に直交して重なる異なった炭化材が含まれている。これらの炭化材は組織が明瞭で、比較的硬質の部分を取り出し、実体顕微鏡下で3方向の断面(横断面(木口と同義)、放射断面(柃目と同義)、接線断面(板目と同義))を剃刀を用いて作成した後、金を蒸着して走査型電子顕微鏡(日本電子製JSMT-100型)で観察を行なった。以下に、同定の根拠等を示し、最後に図版として示す。なお、炭化材の同定は、松谷暁子氏(東大総合研究資料館)にご指導いただいた。

I. カシ類 *Quercus* (*Cyclobalanopsis*) sp. ブナ科. 図版IV-1. 1a~1d. 第48号住居跡(C)、第79号住居跡、第80号住居跡(2~7)、第80号住居跡(C) 横断面において、大型の道管が放射方向に配列する放射孔材で、軸方向柔細胞は、独立帯状からなる。接線断面において、放射柔組織は、単列同性と複合の2種類の細胞からなる。放射断面において、道管は単穿孔で、道管と放射組織の接する部分では、槽状の壁孔が見られる。

以上の形質から、ブナ科コナラ属のうち、常緑のアカガシ亜属(*Cyclobalanopsis*)の材であることがわかる。この亜属には多数の種があり、現在関東には、アカガシ(*Quercus acuta*)、アラカシ(*Q. glauca*)、シラカシ(*Q. myrsinaefolia*)などがあり、東北地方南部以南の暖帯に広く分布し、照葉樹林の主要な構成要素のひとつである。通常樹高20m、幹径1mに達する常緑高木で、硬く弾力があり、水湿に強く狂いが少ない。建築材、農具など広い用途がある。

2. タケ亜科 Subfam. Bambusoideae イネ科図版IV-1. 2a~2c. 第80号住居跡(C) 維管束には、原生木部の小道管の左右や外側に大型の道管が1対あり、その外側には支部があって、さらにその全体を厚壁の繊維からなる維管束鞘らしきものがとりかこんでいる。このような維管束が柔組織の中に散在して、全体では不斉中心柱をなしている。

以上の形質から、イネ科タケ亜科の稈であると同定される。タケ亜科には大型のタケ類と小型のササ類とがある。この材は、上記のカシ類の材とはほぼ直交し、重なって出土する。また、葉の中心は周囲の土壌が充填していることから、中空であることがわかる。稈の直径は、1cm程度である。

3. 環孔材A 第05号住居跡 図版IV-2. 3a~3d

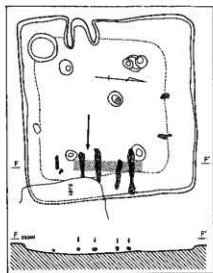
横断面において、年輪のはじめに大道管が3～4列並び、これより小型の小道管が樹皮方向に径を減じて接線方向に2個程度複合して分布する環孔材である。軸方向柔組織は、周囲状からなる。接線および放射断面において、放射柔組織は、異性細胞からなり、1～3細胞幅、1～21細胞高からなる拡散状を呈する。また、放射柔組織の上下末端の細胞は、直立細胞からなる。道管の穿孔は単一で、壁面には明瞭ではないが対列または交互状の壁孔がある。なお、小道管の内壁には、らせん肥厚は認められない。

以上の形質から、樹種の断定はできないが、落葉広葉樹のクロウメモドキ科のケンボナシ属 (*Hovenia*) や落葉広葉樹のウルシ科のヌルデ (*Rhus javanica* Linn.) などが考えられる。

#### 4. 環孔材B 第80号住居跡(1)、図版Ⅳ-2. 4a～4d

横断面において、年輪のはじめに大道管が2～3個複合して並び、これより樹皮方向に径を減じて分布する環孔材である。軸方向柔組織は、連合異状からなる。接線および放射断面において、放射柔組織は、同性細胞からなり、1～3細胞幅、1～21細胞高からなる拡散状を呈する。道管の穿孔は単一で、内部にはゴム状物質が見られ、壁面には明瞭ではないが対列または交互状の壁孔がある。また、放射断面において、小道管の内壁には、らせん肥厚が見られる。

以上の形質から、樹種の断定はできないが、落葉広葉樹のマメ科のネムノキ (*Albizia julibrissin* Durazz) や、落葉広葉樹のムクロジ科のムクロジ (*Sapindus mukorossi* Gaertn) などが考えられる。



第390図 桑原A遺跡炭化材採取地点

## 2 プラント・オパール分析調査報告

杉山真二（古環境研究所）

### 1 はじめに

調査対象区は、高麗川と越辺川の合流点付近から広がる低地の西側に位置しており、東西約1000m、南北約700mにわたる広大な地域である。この付近は、地形上の地割などから古代条里遺構の存在が考えられていたところである。（1984事業団年報）

今回の調査は、住宅・都市整備公団による坂戸市西部（入西地区）地区の開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査地内における古代水田跡の有無や、その分布状況の把握を目的として、プラント・オパール分析による水田跡の探査を行なったものである。調査は、地点毎に昭和59年～同61年の3ケ年にわたって実施され、昭和62年には桑原B遺跡の調査に伴い検出された水田跡と思われる遺構部分について現地調査（試料採取）を実施した。

以下、各年次に共通する記載、プラント・オパール分析法を述べた後、年度毎の報告を行なう。

### 2 プラント・オパール分析法

#### (1) プラント・オパール<sup>1)</sup>

イネ科植物には、スキ、ヨシ、タケ・ササなど数多くの野草・雑草の他に、イネ、ヒエ、アワ、キビ、ムギなどの重要な栽培植物が含まれている。このイネ科植物は別名珪酸植物とも呼ばれ、多量の珪酸（ $\text{SiO}_2$ ）を吸収することで知られている。植物体内に吸収された珪酸は葉身中の特定の細胞の細胞壁に選択的に集積され、植物学的にはこれを「植物珪酸体」とよんでいる。植物珪酸体は、その主成分が科学的に安定な珪酸であるため、植物が枯死した後も土壤中に永く残留し、「プラント・オパール（Plant Opal）」と呼ばれる微化石となる。

このうち機動細胞珪酸体（葉身の強度を保ち、乾燥の著しい時に葉身を巻き込んで水分の蒸発散をおさえる作用をしていると思われる）に由来するプラント・オパールは、比較的大形（約50ミクロン）で植物種により固有の形状をもっていることから、これを用いて給源植物を同定することが可能である。

#### (2) プラント・オパール定量分析法の手順<sup>2)</sup>

100ccの試料筒筒管（採土管）で採取された土壌試料は、実験室に持ち帰り、乾燥機で105℃、24時間絶乾させた後、重量を測定する。この重さを体積100ccで割って土の乾燥密度（仮比重）を求めておく。

つぎに、絶乾させた試料土から約1g（1/10,000の精度で秤量）を無作為に抽出し、これにプラント・オパールと同じ成分・粒径（50ミクロン）を持ったガラスビーズを一定量混入させる。ガラスビーズの単位重量あたり個数はあらかじめ測定してあるので、試料土中に混入されたガラスビーズの個数は計算により求めることができる（約30万個）。

プラント・オパールと土粒子を分離し、プラント・オパールに付着した汚れを取り除いたり、ガラスビーズを均等に分散させるため、脱有機物処理、超音波処理、ストークス法処理が行なわれる。

こうした処理の後、サンプル瓶の中に残っているのは粒径20~100ミクロンの土粒子とプラント・オパール、それにガラスビーズである。このうち土粒子はそのほとんどが結晶鉱物であるため、偏光顕微鏡で観察すると非晶質であるプラント・オパールやガラスビーズとは容易に識別できる。

検鏡時に、視野の中にあるプラント・オパールを同定し、その数をカウントしながらガラスビーズとは容易に識別できる。

検鏡時に、視野の中にあるプラント・オパールを同定し、その数をカウントしながら同時にガラスビーズの数もカウントする。この比率をとることにより、1gの試料土中に含まれているプラント・オパール個数(単位:個/g)が算出される。この値に土の乾燥密度(仮比重)を掛け、試料1ccあたりのプラント・オパール個数(単位:個/cc)が求められる。

#### (3) 生産量(水田址、畑作址等)の探査<sup>5) 6)</sup>

以上のようにして、各土層におけるイネのプラント・オパール密度を測定していくと、生産量が埋蔵されている層にピークが現れるのが通例である。

通常、イネのプラント・オパール密度が5,000個/cc以上の場合、生産量(水田址)の可能性があると判断しているが、直上にさらに高密度の層があった場合は、その層からプラント・オパールが落ち込んだ危険性を考慮して慎重な判断をしている。また5,000個/cc以下の密度の場合には、直上にイネのプラント・オパールの見られない層があった場合でも、プラント・オパールの水平的な流れ込みの可能性を考慮して慎重な判断をしている。

#### (4) 植物体生産量の推定<sup>4)</sup>

植物体中に含まれる機動細胞珪酸体の密度は植物種により固有であり、各植物についての換算計数(機動細胞珪酸体1個に対する植物体各部の乾燥重量)が求められている。

表1 各種物の換算計数(単位:10<sup>2-5</sup>g)

植物名	葉身	全地上部	種実
イネ	0.51	2.94	1.03
シロヒエ	1.34	12.20	5.54
ヨシ	1.33	6.31	—
ゴキダケ	0.24	0.48	—
ススキ	0.38	1.24	—

プラント・オパール密度にこの換算計数を掛けることにより、試料土1cc中に供給された植物体量を推定することができる。

たとえばイネの場合、1ccの土壌中から1万個のイネ機動細胞プラント・オパールが検出されれば面積10アール(1000m<sup>2</sup>)換算で1cmの体積期間中に、イネ地上部で約3t、イネ根で約1t(ともに乾燥重量)の植物体が生産されることが推定できる。

なお、この生産量の値は、収穫方法が穂刈りで行なわれ、イネの葉身がすべて水田内に残されたことを前提として求められている。従って、収穫が株刈りで行なわれ植物体の大部分が水田外に持ち出されていた場合や、堆肥などの形で稲ワラが水田内に還元されていた場合は、その割合に応じて推定値は修正されなければならない。

イネの換算計数は、赤米など古い系統とされる日本稲(Japonica)数品種から求められた。

#### (5) 古環境の推定

イネ科植物の中で、特にヨシ(アシ)やマコモは低湿地など湿潤な土壌条件の所に生育し、逆に

ススキやタケ・ササは比較的乾いた土壌条件を好む。

このことから、これらの植物の生産量とその変化をプラント・オパール分析法で調べることであり、水分条件を中心とした当時の周辺の環境と、その推移を推定することが可能である。

#### － 昭和59年度調査 －

### 3 試料

試料の採取は、試掘坑内の土層断面において、最上層から最下層まで各層ごとに、100ccの試料円筒管（採土管）を用いて行なわれた。

今回の調査では、調査地点の間隔が約100mと広く、層序の対応が困難であったため基本層序は定められていない。層名は各地点において層相の変化ごとに付けられたものであり、地点間の対応関係を示したものではない。

調査対象区の全体図とサンプリング地点を図1に示した。

地点数は12点、試料数は150試料である。

### 4 分析結果

イネ、キビ族、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族の機動細胞プラント・オパール密度（試料1ccあたりのプラント・オパール個数）を表2に示した。

このうち、イネの機動細胞プラント・オパール密度についてグラフに表わし、図2に示した。

またイネ、ヨシ、タケ亜科について植物体生産量（1cmの堆積期間中に面積10アールあたりで生産された植物体の乾燥重量）を推定し、図3にグラフで示した。柱状図左側のポイントは、地表面から1mごとに付けられたスケールである。

### 5 考 察

#### < 古代水田址の探査 >

上記(3)で述べた判定基準により、古代水田址の可能性があると判断されたのは次の通りである。

A21地点の3・4層、E21地点の3層、F21地点の3層下部、H20地点の4層。

#### － 昭和60年度調査 －

### 3 試 料

調査対象区域は、東西約1,200m、南北約800mの広大な地域である。ここに100mメッシュを設定し、東西に9～21、南北にA～Jとした。さらに100m区画内に10mメッシュを設定し、東西に0～9、南北にa～jとした。（図1）

100mメッシュ交点ごとにピット（試掘坑）を屈削し、土層断面の最上層から最下層まで各層ごとに、100ccの試料円筒管（採土管）ならびにポリ袋を用いて試料採取された。事情によりピットが屈削できない地点については、1.5mおよび3.0mのボーリング棒を用いて、ボーリングにより採取された。重要と思われる地点については、その周囲に調査地点が追加された。メッシュ交点以外

の調査地点の地点名については、最寄りの北西端の交点に付けられた地点名を頭にし、後ろに10mメッシュの地点名を付けて、たとえばB19-a 5のように表わした。(図2)

なおG12、G13地点については11月下旬の洪水期においても湧き水が激しく、地盤が軟弱でピットの屈削が不可能であったため、試料採取は断念せざるを得なかった。

地点数はピットが63地点、ボーリングが52地点で、合計115地点。試料数はピットが1059試料、ボーリングが599試料で、合計1658試料である。

今回の調査では、調査地点の間隔が100mと広く、層序の対応が困難であったため、基本層序は定められていない。また火山灰等は確認されておらず、考古学的遺物も、C14地点で磨耗した土器片が1片検出されただけで、各層の堆積時期を推定する手がかりは乏しい。層名は各地点において層相の変化ごとに付けられたものであり、地点間の対応関係を示したものではない。

参考試料として、7号住居址(古墳時代後期)のカマド内焼土と周囲の土壌を採取した。

#### 4 分析結果

イネ、キビ族、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ属の機動細胞プラント・オパール密度(試料1ccあたりプラント・オパール個数)を表2(1~24)に示した。

このうち、イネの機動細胞プラント・オパール密度についてグラフに表わし、図3(1~13)に示した。

また、主要な地点についてイネ、ヨシ、タケ亜科の植物体生産量(1cmの堆積期間中に面積10Aールあたりで生産された植物体の乾燥重量)を推定し、図4(1~7)にグラフで示した。柱状図左側のポイントは、地表面から1mごとに付けられたスケールである。

水田址の埋蔵されている可能性の判定資料とするため、地表面から30cm深ごとのイネ機動細胞プラント・オパール密度の大小を4段階の記号で表わし、表3および図5(1~4)に示した。

なお、調査区域の全体的な傾向を見るために、前年度に区域内の東端で行なった分析の結果も、合せて表示した。

#### 5 考 察

##### <古代水田址の探査>

調査区域内の金井遺跡で検出された住居址(古墳時代後期)に伴う、カマド内の焼土を分析したところ、多量のイネ機動細胞プラント・オパールが検出された。遺構を覆っている覆土や周囲の土壌などより明らかに密度が高く、後代のプラント・オパールが落ち込んだこと等は考えにくい。この時期にイネが栽培されていたことは確実であろう。

本調査区域では、基本層序が定められておらず、堆積時期を決定する手がかりは、C14地点の地表下100cm深で磨耗した土器片(御領式、古墳時代前期?)が1片検出されただけである。これだけから、当時の水田面がどの深さのどの土層に対応するのか判定するのは困難であった。そこで、地表面からの深さを30cmごとに区切り、その中で水田址の可能性を追及することにした。

地表面から採取された試料からは、全ての地点で多量のイネ機動細胞プラント・オパールが検出

され、調査区の全域にわたって、ごく最近まで稲作が行なわれていたことが確かめられた。

プラント・オパールは大きさが約50ミクロン(1/20ミリ)と微小なため、水田耕作に伴う人為的な攪乱などにより、水平もしくは垂直的な移動をする事が考えられる。このため、深耕の影響が及ぶと思われる地表面から30cmまでは、現在もしくはごく最近の水田耕作に由来するプラント・オパールが落ち込んでいる恐れがあるものと見て、31cm以深について古代水田址の可能性を考察した。

水田址が埋蔵されている可能性があるとする判断の基準は、密度が5,000個/ccを越えていることと同時に、イネのプラント・オパール密度のピークが確認されることである。したがって密度が5,000個/ccを越えていた場合でも、直上にさらに高密度の層があり、イネ機動細胞プラント・オパールの落ち込みの危険が考えられた場合には対象から除外した。

このようにして地表面下31~60cm深に水田址が埋蔵されている可能性があるかと判断された地点を図6に、また61cm以深に水田址が埋蔵されている可能性があるかと判断された地点を図7に示した。

地表面から31~60cm深に水田址が埋蔵されている可能性があるかと判断された地点は、調査区の北東部一帯、東端の一帯、それに調査区西側のうち北端と西端を除く広い地域である。これらの水田址は、その深度から見て比較的新しい時期のものではないかと思われる。なお土器片が検出されたC14地点では、イネ機動細胞プラント・オパールは地表面下35cm深までしか検出されず、土器が包含されていた層からは全く検出されなかった。

地表面から61cm以深に水田址が埋蔵されている可能性があるかと判断された地域は、金井遺跡の近傍(G11, H12)、調査区域の北東部(B17, B19, B20を中心とする地域)、調査区域の南東部(H20, G20-h6の周辺)それにD11-f5地点とF16地点である。

G11地点では70cm~100cm深に、またH12地点では65cm~85cm深に10,000個/ccを越える明瞭なイネ機動細胞プラント・オパール密度のピークが認められた。G11, H12地点は金井遺跡に近いため、古墳時代の住居に伴う水田が埋蔵されている可能性が大きいと考えられる。今回試料採取ができなかったG12, G13地点周辺も可能性が考えられるため、これらについてもさらに細かい調査を行なう必要があろう。

調査区域の北東部では、8地点で水田址が埋蔵されている可能性があるかと判断された。このうちピット内の土層壁面から採取された試料では、A19-f0地点で地表面下65cm~85cm深と100cm~120cm深に、B16-b7地点で65cm~75cm深に、B19地点で80cm~100cm深に、B19-a5地点で60cm~85cm深にそれぞれイネ機動細胞プラント・オパール密度の明瞭なピークが認められ、ここに水田址が埋蔵されている可能性が高いと判断された。

またボーリングによる試料でもA17-d5地点で80cm~100cm深に、B16-f5地点で50cm~80cm深に、B17地点で80cm~100cm深に、B20地点で60cm~70cm深にそれぞれイネ機動細胞プラント・オパール密度の明瞭なピークが認められた。

これらは、基盤と見られる青灰色シルト層の直上に位置し、酸化鉄を含んだ茶褐色もしくは赤褐色の土壌で、他の層とも区別が可能である。またこの周辺は比較的層序が安定しているため、遺構の残りも良いものと思われる。この周辺を中心にトレンチ調査を行なうなど、さらに細かい調査が必要であろうと思われる。



調査区域の南東部のH20(a)地点では、地表面下50cm深から垂直に突き刺さった長さ約50cmの杭状の材が検出された。また70~82cm深の4層にイネのプラント・オバールのピークが見られたことから、ここが水田址の一部である可能性が大きいと考えられた。しかしこの周辺は川の影響を大きく受けた形跡があるため、遺構の残存性に危惧がもたれる。

<古環境の推定>………図4を参照されたい

古代水田址と堆積環境との関係を知るために、主な地点周辺の古環境について考察を試みた。

調査区域の北東部の堆積環境について、その特徴が最もよく現れているのはB19-a5地点である。ここでは、地表面下140cmの6層堆積当時から現在まで、ヨシは全く見られず普遍的にタケ亜科(タケ・ササ)が見られた。このことから、ここでは古くから比較的乾燥した土壌条件のもとで堆積活動が続けられ、稲作が開始されたと思われる85cm深以降も、同様の環境条件で現在まで推移したものと考えられる。

なお地元の人話によると、この周辺は現在でも水はけが良く、イネ穂の反当り取量も調査区域内では比較的高い所だと言うことであった。

一方、調査区域の中央部から西側にかけては非常に水はけが悪く、地表面に絶えず水が浮いている状況であった。この地域の大部分では水田が放棄され、一面にヨシが繁茂していた。

この中のG11地点では125cm深の4層堆積当初からヨシが現れ、いくらかの増減はあるものの現在に至るまでタケ亜科を圧倒している。このことから、ここでは4層堆積当時から比較的湿潤な土壌条件のもとで堆積活動が続けられ、約90cm深の時期から稲作が開始された後も、同様の湿潤な状態で現在まで推移したものと考えられる。同地域の他の地点についても、同様にヨシの卓越が見られ、古くから比較的湿潤な土壌条件であったことを物語っている。

## — 昭和61年度調査 —

### 2 試料

昭和61年12月1日~12月6日の6日間にわたって現地調査(試料採取)を行なった。

調査対象区は、東西約1,000mの広大な地域であり、ここに100m間隔のメッシュが設定されていた。このうち、図1に示した40地点にビット(試掘坑)を掘削し、試料採取地点とした。

試料は、ビット内の土層壁面の最上層について、各層ごとに5~10cm間隔で採取した。採取にあたっては容量50ccの採土管ならびにポリ袋を用いた。採取した試料数は570試料である。

今回は、調査地点の間隔が50~100mと広く、層序の対応が困難であったため基本層序は定めていない。層名は各地点で層相の変化毎に付けたものであり、地点間の対応関係を示したのではない。

### 3 分析法

プラント・オバールの抽出と定量は「プラント・オバール定量分析法(藤原,1976)」をもとに、次の手順で行なった。

乾燥試料約1gにガラスビーズ混入(直径約40 $\mu$ m,約30万個)、電気が灰化法または過酸化水素水による脱有機物処理、超音波による分散、沈底法による20 $\mu$ m以下の微粒子除去、乾燥、オイキ

ット中に分散、プレバカート作成、検鏡・計数。

同定は、機動細胞に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）を対象に、400倍の偏光顕微鏡下で行なった。

計数はガラスビーズが300個以上になるまで行なった。これは、ほぼプレバカート1枚分の精査に相当する。試料18あたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけ、さらに仮比重をかけて単位体積あたりのプラント・オパール個数を求めた。

このようにしてイネのプラント・オパール密度を測定していくと、水田跡が埋蔵されている層にピークが現れるのが通例である。通常、イネのプラント・オパールが試料1ccあたり5,000個以上の場合に、水田跡の可能性があると判断している。

また、表1の換算計数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体各部乾重：藤原,1979の第1表を一部改変）をかけて植物体量を算出した。これは実際の植生を定量的に把握するのに有用である。

#### 4 分析結果

イネ、キビ族（ヒエなど）、ヨシ属、タケ亜科（竹筴類）、ウシクサ族（ススキなど）のプラント・オパール密度（試料1ccあたりのプラント・オパール個数）を表2に示した。上記以外については、検出数が少ないため割愛した。

このうち、イネのプラント・オパール密度についてグラフに表わし、図2に示した。柱状図内のドットは、試料を採取した位置を示している。

また、イネ、ヨシ属、タケ亜科について植物体生産量（1cmの堆積期間中に面積10アールあたりで生産された植物体の乾燥重量）を推定し、図3にグラフで示した。柱状図左側のポイントは、地表面から1m深ごとのスケールである。

これらのグラフの試料名のうち、○で囲んであるものは青灰色シルト層であり、（ ）を付けたものは黄白色のシルト～粘土層である。

水田跡探査のための判定資料とするため、イネのプラント・オパール密度を[ ]の4段階の記号で表わし、図4に示した。このうち、1～5は地表面から25cm深ごとの分布状況を示し、図4-6は黄白色のシルト～粘土層、図4-7は青灰色シルト層についての分布状況を示している。

#### 5 考 察

##### (1) 古代水田跡の探査

当調査区では、対象面積が広大なこともあって統一的な基本層序を設定するのは困難であったが、調査区の北東部一帯と西部では、地下30～50cmで黄白色のシルト～粘土層が、地下50～100cmで青灰色シルト層の分布が見られた。このうち、青灰色シルト層では、調査区内の稲荷前遺跡と同層を検出面とする古墳時代の方形周溝遺構が検出されている。

これらの層で検出されたイネのプラント・オパール密度を[ ]の4段階の記号で表わし、図4-6・7に示した。このうち、[ ]印はイネのプラント・オパール密度が5,000個/cc以上、[ ]印は10,000個/cc以上を表わし、ともに水田跡の可能性が高いことを示している。また、[ ]印はイネの

プラント・オパール密度が5,000個/cc未満のところであり、水田跡の可能性は考えられるものの、上層からの落ち込みや他所からの混入なども想定される。□印はイネのプラント・オパールが検出されなかったところである。

青灰色シルト層では、同層の分布が見られた15地点のうち11地点でイネのプラント・オパールが検出された。このうち、5地点ではプラント・オパール密度が5,000個/cc以上であり、明らかなピークが認められた。このことから、これらの地点周辺に水田跡が埋蔵されている可能性が高いと考えられ、調査区北東部のC8地点周辺と西部のE3地点周辺にまとまりが見られた。

黄白色のシルト～粘土層では、同層の分布が見られた23地点のうち18地点でイネのプラント・オパールが検出された。このうち、7地点ではプラント・オパール密度が5,000個/cc以上であり、明らかなピークが認められた。このことから、これらの地点周辺に水田跡が埋蔵されている可能性が高いと考えられる。これらの地点は、前述と同様なところにまとまりが見られたが、調査区北東部では分布範囲がやや広がっている。

上述の層が見られないところについても水田跡の可能性を判定するため、地表面から25cm深ごとのプラント・オパール密度と分布状況を図4（1～5）に示した。これらの図を順を追って見ることによって、当調査区における水田開発の変遷がだまかに読み取れる。

101cm以深では、2地点でイネのプラント・オパールが検出されたが、いずれも量的には少ないため、上層からの落ち込みと思われる。

76～100cm深では、10地点でイネのプラント・オパールが検出された。これらの地点は、調査区北東部のC8地点周辺と西部のE3地点周辺にまとまりがみられた。これは青灰色シルト層で水田跡の可能性が高いと判断された分布域にほぼ対応している。

51～75cm深では、17地点でイネのプラント・オパールが検出された。これらの地点は、前述と同様なところにまとまりが見られたが、分布範囲がやや広くなり、プラント・オパール密度も高くなっている。なお、イネのプラント・オパールが検出されないところは、調査区の中央部および北東端にまとまりが見られた。このうち、調査区の中央部ではヨシ属が卓越していることから、当時ここはヨシの繁茂する溼原であったものと推定される。

26～50cm深では、24地点でイネのプラント・オパールが検出された。これらの地点の分布は、前述よりもさらに拡大されている。しかし、調査区中央部の一部および北東端では依然としてイネのプラント・オパールは検出されなかった。これらの地点は現在でも常時短水していることから、当時も水田耕作には適さなかったものと推定される。

0～25cm深では、すべての地点でイネのプラント・オパールが検出され、密度もほとんどの地点で5,000個/cc以上となっている。現在の耕作面から浅いことから、これらのプラント・オパールは現在もしくは最近の水田耕作に由来するものと考えられる。

## (2) 稲稈生産総量の推定

古墳時代と見られる青灰色シルト層で水田跡の可能性が高いと判断された地点（図4-7の○印）について、そこで生産された稲稈の総量を算出した。その結果、面積10アールあたり平均13.2tと推定された。当時の年間収量を10アールあたり100Kgと仮定すると、約130年間以上にわたって稲

作が行なわれたものと推定される。

なお、これらの値は、収穫方法が穂刈りで行なわれ稲ワラがすべて水田内に残されたことを前提として求められている。ここで推定した稲穂の生産総量ならびに稲作期間は、あくまでも目安として考えられたい。

#### 一 昭和62年度調査一

### 2 試料

サンプリングを行なったのは、昭和62年5月8日～5月12日である。

堀込地区では、D地点杭を中心に十字形にトレンチが掘削され、5m間隔でサンプリング地点が設定された(図1)。土層は大きく1層～4層に分層され、2層および3層はさらにa～cの3層に細分された。このうち、3a層は青灰色シルト層の上部であり、前年度のプラント・オパール分析調査によって水田跡の存在が予測されていた層である。同層は分布域が限定されており、N5以北、E10～E25、S25付近では分布が見られなかった。W10地点は壁面が崩壊して危険であったので、サンプリングを行なわなかった。したがって、サンプリング地点数は15地点である。試料は3a層を中心として、その上下層について5～10cm間隔で採取した。

沢木地区では、北トレンチと南トレンチの2本のトレンチが掘削された。このうち北トレンチでは、N1～N9の9地点(5m間隔)について、南トレンチではS2～S10地点の5地点(10m間隔)についてサンプリングを行なった(図2)。

土層は大きく1層～5層に分層された。このうち、5層は青灰色シルト層であり、同層の直上(4層に相当)は60年度のプラント・オパール分析調査によって水田跡の存在が予測されていた層である。試料は5層を重点的に、その上下層について5～10cm間隔で採取した。

採取にあたっては容量50ccの採土管ならびにポリ袋を用いた。なお、火山灰等は確認されておらず、考古遺物もほとんど検出されていないなど、各層の堆積時期を推定する手がかりは乏しい。

採取した試料数は151点であり、これらすべてについて分析を行なった。

### 3 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法(藤原、1976)」をもとに、次の手順で行なった。

試料土の絶乾(105℃・24時間)→仮比重測定→試料土約1gを秤量→ガラスビーズ混入(直径約40μm、約30万個)→脱有機物処理(電気炉灰化法または過酸化水素法)→超音波による分散(150W・26kHz・15分間)→沈降法による20μm以下の微細粒子除去→乾燥→オイキット中に分散→プレパレート作成→検鏡・計数。なお、試料土とガラスビーズの秤量は電子分析天秤を用いて1万分の1gの精度で行なった。

同定は、機動細胞に由来するプラント・オパール(以下、プラント・オパールと略す)を対象に、400倍の偏光顕微鏡下で行なった。プラント・オパールの計数は、ガラスビーズ個数が300以上になるまで行なった。これはほぼプレパレート1枚分の精査に相当する。

計数結果（各プラント・オパール個数/ガラスビーズ個数）に試料1gあたりのガラスビーズ個数をかけて、試料1gあたりのプラント・オパール個数を求めた。これに仮比重をかけて、試料1ccあたりのプラント・オパール個数を求めた。

こうして求められたプラント・オパール密度に、表1の換算計数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体各部乾重）をかけて、植物体生産量（t/10a・cm）を算出した。これに層厚をかけて、その層の堆積期間中に生産された植物体の総量（t/10a）を求めた。

#### 4 分析結果

イネ、キビ族（ヒエなどが含まれる）、ヨシ属、タケ亜科（竹笹類）、ウシクサ族（ススキなどが含まれる）について同定・定量を行ない、数値データを表2に示した。上記以外については、検出数が少ないため割愛した。

図3に、イネのプラント・オパール密度と変遷を示した。柱状図内のドットは、試料の採取箇所を示している。

図4に、イネ、ヨシ属、タケ亜科について植物体生産量と変遷を示した。柱状図内のポイントは、地表面から1m深ごとのスケールである。





#### 5 考 察



##### (1) 水田跡の探査

土層断面において、上層から下層までの土壌試料を連続的に分析していくと、水田跡が埋蔵されている層にイネのプラント・オパール密度のピークが現れるのが通例である。通常、イネのプラント・オパールが5,000個/cc以上検出された場合に、水田跡の可能性が高いと判断している。

以上の判断基準によって、当遺跡における水田跡の可能性について考察した。


##### <掘込地区>

ここで水田跡の存在が予測されていたのは3a層である。同層で検出されたイネのプラント・オパール密度を、の3段階の記号で表わし、図3に示した。このうち、印はイネのオウラント・プラント・オパール密度が5,000個/cc以上を表わし、水田跡の可能性が高いことを示している。印はイネのプラント・オパール密度が5,000個/cc未満のところであり、水田跡の可能性は考えられるものの、上層からの落ち込みや他所からの混入なども想定される。印はイネのプラント・オパールが検出されなかったところである。

W15、W5、S10地点（印）では、イネのプラント・オパールが5,000個/cc以上検出され、明らかなピークが認められた。したがって、これらの地点の3a層に水田跡が存在している可能性は高いと考えられる。また、印のうちW20、E40、S15地点では、イネのプラント・オパール密度は3,500個/cc以上～5,000個/cc未満とやや低いものの、明らかなピークが認められた。したがって、これらの地点の3a層に水田跡が存在している可能性も考えられる。

以上の7地点の分布状況から、3a層水田跡の分布域はつぎのように推定される。すなわち、基準柱（D8）の西側でほぼ南北に帯状に広がる地域、および調査区の東端周辺である。

## < 沢木地区 >

ここで水田跡の存在が子測されていたのは4層および5層である。上述と同様に、4層および5層で検出されたイネのプラント・オパール密度を、の3段階の記号で表わし、図4に示した。これを見てもわかるように、4層および5層ではイネのプラント・オパールはまったく検出されなかった。したがって、これらの層に水田跡が存在している可能性は考えにくい。

N7地点とS4地点では、現地表面から最下層まで連続的に分析を行なった。その結果、N7地点では1層（現地表面）と1層下部-2a層でイネのプラント・オパールが5,000個/cc以上検出され、明らかなピークが認められた。したがって、1層下部-2a層に水田跡が存在する可能性は高いが、同層より下層に水田跡が存在する痕跡は認められなかった。また、S4地点では、1層（現地表面）と3層でイネのプラント・オパールが5,000個/cc以上検出され、明らかなピークが認められた。したがって、3層に水田跡が存在する可能性は高いが、同層より下層に水田跡が存在する痕跡は認められなかった。

以上のことから、沢木地区で稲作が開始されたのは、早くとも3層の時期以降と考えられる。

### (2) 稲穀生産総量の推定

堀込地区において、3a層に水田跡が存在する可能性が高いと判断された3地点について、そこで生産された稲穀の総量を算出した。その結果、面積10アールあたり平均8.3tと推定された。当時の年間収量を10アールあたり100kgと仮定すると、約80年間にわたって稲作が営まれたものと推定される。

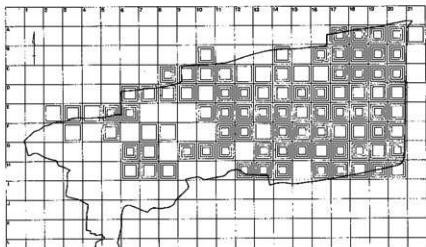
なお、これらの値は、収穫方法が穂刈りで行なわれ稲わらがすべて水田内に還元されたことを前提として求められている。ここで推定した稲穀の生産総量ならびに稲作期間は、あくまでも目安として考えられたい。

## ◎ 引用文献

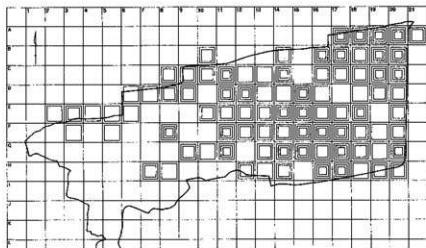
- 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 年報(5) 1984 p.27
- 日本住宅・都市整備公団 坂戸西部地区土地区画整理事業地内 埋蔵文化財発掘調査  
視察資料 1986 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 藤原宏志 1984 垂穂遺跡における水田跡の研究 青森県埋蔵文化財調査報告書  
(垂穂遺跡) 青森県教育委員会 139-152
- 藤原宏志 1976 プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) - 数種イネ科栽培植物の珪酸体標本  
と定量分析法-考古学と自然科学 9:15-29
- 藤原宏志 1979 プラント・オパール分析法の基礎的研究(3) - 福岡・板付遺跡(夜臼式)水田お  
よび野馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(O. sativa L.)生産総量の推定-考  
古学と自然科学 12:29-41
- 杉山真二・藤原宏志 1984 プラント・オパール分析による水田址の探査 那珂川  
遺跡Ⅱ 福岡市埋蔵文化財調査報告書(福岡市教育委員会)第106集:11-15
- 藤原宏志・杉山真二 1984 プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分  
析による水田址の探査-考古学と自然科学 17:73-85



プラント・オパール調査  
(試料採取地点)

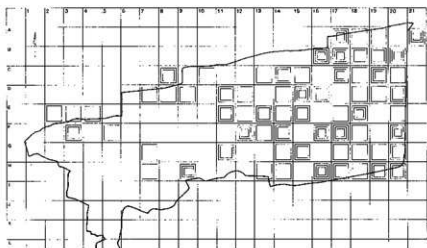


第 1 層  
(耕作上)

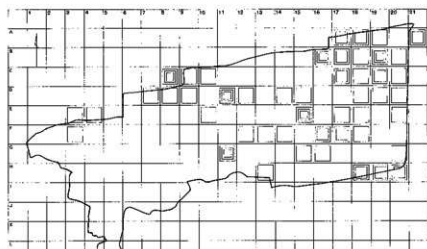


第 2 層

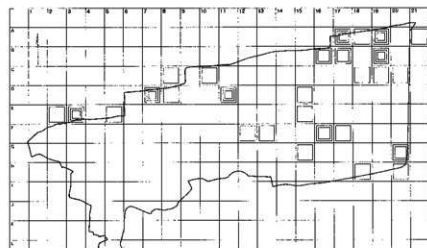
第391図 プラント・オパール調査(1)



第 3 層



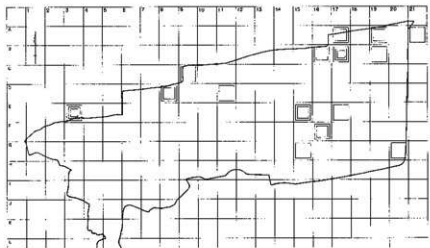
第 4 層



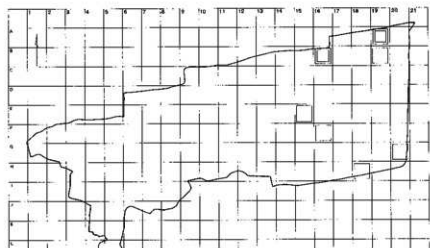
第 5 層

第392図 プラント・オバル調査(2)

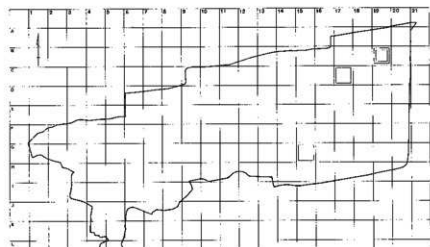




第 6 図



第 7 図



第 8 図

第393図 プラント・オパール調査(3)

プラント・オパール定量分析結果

試料名	試料Ice当たりアクリル・in-β個数 (A21地点)				ウシクサ族 (Miscan.)
	イネ (O.satl.)	キビ族 (Panl.)	ヨシ族 (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	
1	4594	0	0	28311	1930
2-1	8739	0	874	16173	874
2-2	7631	0	587	18785	587
3	14162	0	3727	17888	2236
4	8868	0	0	11058	1588
5-1	0	0	0	22011	0
5-2	810	0	0	15484	0
6	1049	0	0	12584	0

試料名	試料Ice当たりアクリル・in-β個数 (G21地点)				ウシクサ族 (Miscan.)
	イネ (O.satl.)	キビ族 (Panl.)	ヨシ族 (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	
1-1	3757	0	0	29429	6880
1-2	3844	0	0	39398	20179
2	1183	0	581	14524	1744
3	1220	0	0	15254	4271
5	2801	0	0	12139	934
7	8951	0	832	21486	4424
8	897	0	0	18934	2990

試料名	試料Ice当たりアクリル・in-β個数 (A17地点)				ウシクサ族 (Miscan.)
	イネ (O.satl.)	キビ族 (Panl.)	ヨシ族 (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	
1-1	14687	0	0	11758	0
2-1	7952	0	0	15925	0
2-3	10208	0	2552	8380	1276
3-1	5943	0	1696	11868	0
3-2	10180	0	782	10160	1563
4-1	8868	0	0	9998	0
4-2	3165	0	0	8704	791
4-4	3817	0	904	17182	904
4-6	0	0	886	14188	0
5-1	0	0	0	22392	0
6-1	0	0	1247	38642	0
6-2	0	0	0	42409	0
6-5	0	0	1143	43291	0

試料名	試料Ice当たりアクリル・in-β個数 (A19地点)				ウシクサ族 (Miscan.)
	イネ (O.satl.)	キビ族 (Panl.)	ヨシ族 (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	
1-1	11980	0	991	10889	0
1-3	9801	0	0	12474	0
2	16283	0	1670	14958	0
3	2089	0	1004	10040	1004
4	2064	0	0	7225	2064
5-1	8845	0	0	16427	1264
5-2	8315	0	1188	8315	0
5-3	3452	0	0	21861	0
5-4	11574	0	1157	17361	0
5-5	12484	0	0	16230	1248
6-1	7526	0	1075	21508	0
6-2	1978	0	3957	20776	0
7-1	4793	0	957	32526	0
7-2	5576	0	0	18118	0
7-5	0	0	1844	32353	0

試料名	試料Ice当たりアクリル・in-β個数 (B17地点)				ウシクサ族 (Miscan.)
	イネ (O.satl.)	キビ族 (Panl.)	ヨシ族 (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	
1	18174	0	0	15183	0
2	15804	0	1054	17911	0
3	11736	0	0	17695	1956
4	5305	0	1061	10810	1061
5	8679	0	0	21697	1065
6-1	0	0	0	26537	0
6-2	10032	0	1003	15550	2006
6-4	0	0	0	12783	0
7-1	0	0	0	13677	0
7-2	0	0	0	34876	0
7-3	0	0	0	24284	0
8-1	0	0	1295	22010	0
8-2	0	0	1114	14487	0
8-4	0	0	1144	20597	1144

試料名	試料Ice当たりアクリル・in-β個数 (B19地点)				ウシクサ族 (Miscan.)
	イネ (O.satl.)	キビ族 (Panl.)	ヨシ族 (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	
1-1	15687	0	826	20653	826
1-3	6503	0	0	18509	0
2-1	8435	0	0	23197	3163
2-2	10779	0	1347	12126	5389
2-4	9404	0	0	17633	0
3	8794	0	1099	17588	0
4-1	7750	0	0	9042	0
4-2	1947	0	0	14135	524
4-4	5478	0	0	16433	0
5-1	18413	0	0	15240	0
5-2	9398	0	0	12922	0
5-3	22245	0	0	18903	1171
5-4	8083	0	0	24014	0
8-1	2807	0	0	18474	0
6-3	1823	0	0	9203	0
6-5	0	0	1095	18421	0

試料名	試料Ice当たりアクリル・in-β個数 (C14地点)				ウシクサ族 (Miscan.)
	イネ (O.satl.)	キビ族 (Panl.)	ヨシ族 (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	
1-1	5879	0	880	18610	1960
1-2	11362	0	1035	14487	1035
2-1	9908	0	2702	10808	4503
2-2	11170	2031	1015	14216	6092
2-3	10081	840	0	9241	1680
3-1	6389	0	2133	14907	0
3-2	873	0	2618	21818	0
3-3	3437	0	0	12028	1718
3-4	0	0	684	19829	0
4-2	0	0	0	10941	744
4-3	0	0	0	12388	2461
4-4	0	0	1405	15457	783
4-5	0	0	777	24878	0
4-7	0	0	845	17755	0
5a-1	0	0	789	10260	0
5a-2	0	0	0	20272	861
5b-1	0	0	0	11613	2111
5b-2	0	0	0	21160	0
5b-4	0	0	0	25697	1195
5b-5	0	0	0	27844	2048

試料名	試料Ice当たりアクリル・in-β個数 (B11地点)				ウシクサ族 (Miscan.)
	イネ (O.satl.)	キビ族 (Panl.)	ヨシ族 (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	
1-4	10721	0	893	30276	893
1-5	15358	0	2048	26620	2048
1-6	7952	0	994	32802	2982
2-4	16987	0	1126	26146	4503
2-5	9467	0	0	26298	4287
2-6	5882	0	0	22351	0
4-5	846	0	0	20802	0
4-6	1800	0	0	21800	0
4-7	0	0	0	36752	0
5-4	0	0	0	21800	917
5-5	0	0	780	21840	780
5-8	0	0	0	18247	0
6-5	0	0	840	11783	2521
6-8	0	0	1946	11925	649
6-7	0	0	2447	8871	816
6-8	0	0	1513	10588	2289
7-6	0	0	1180	20826	1180
7-7	0	0	782	21325	1523
7-8	0	0	0	14877	676
7-9	0	0	0	13584	3001

試験1cc当たりアブラト・in'→菌数 (D15地点)					
試験名	イネ	キビ族	ヨシ族	タケ亜科	ウシクサ族
(O.satl.)	(Pani.)	(Phrag.)	(Bamb.)	(Miscan.)	
1-1	18080	0	0	45201	8780
1-2	8806	0	0	49663	1258
1-3	10919	0	1112	25591	5561
2-1	8023	0	0	36550	1783
2-2	3578	0	1533	21467	1533
2-3	7449	0	1655	19885	8277
3-1	7813	0	1737	31262	8684
3-2	3015	0	754	23365	1507
3-3	0	0	2758	58877	5518
4-1	0	0	822	33695	2465
4-2	0	0	894	52744	894
4-3	0	0	1678	46160	3257
4-4	0	0	0	32794	863
4-5	0	0	1631	45857	3281
4-11	2494	0	1663	24944	2494
5-1	884	0	0	13829	2593
5-2	0	0	0	11364	1515
5-3	0	0	0	0	0
5-4	0	0	0	0	0

試験1cc当たりアブラト・in'→菌数 (F13地点)					
試験名	イネ	キビ族	ヨシ族	タケ亜科	ウシクサ族
(O.satl.)	(Pani.)	(Phrag.)	(Bamb.)	(Miscan.)	
1-1	1583	0	1050	7388	528
1-3	4293	0	549	12088	0
2-1	5803	0	738	15496	0
3-1	1929	0	2573	8361	0
3-2	4435	0	1478	11828	1478
3-4	787	0	0	787	0
4-1	2551	0	510	3062	0
4-3	639	0	638	10228	639
4-5	959	0	1918	7871	0
5-1	1481	0	3329	17739	1481
5-3	394	0	1577	22862	1183
5-5	0	0	1488	28646	0

試験1cc当たりアブラト・in'→菌数 (G11地点)					
試験名	イネ	キビ族	ヨシ族	タケ亜科	ウシクサ族
(O.satl.)	(Pani.)	(Phrag.)	(Bamb.)	(Miscan.)	
1-1	8572	0	3688	14806	779
1-2	16244	0	2732	13859	0
1-3	8586	0	0	16633	1279
2-1	5754	0	0	10230	639
2-2	16778	0	1664	13671	0
2-3	6580	0	598	14356	1196
3-1	4902	0	600	4802	800
3-2	7678	0	0	14588	0
4-1	8988	0	2077	14536	2077
4-2	11518	0	3544	16832	886
4-3	3700	0	1480	16278	1480
4-4	1211	0	2422	16345	805
4-5	0	0	5359	28748	1337
5-1	0	0	0	13254	0
5-2	0	0	0	0	926
5-4	0	0	0	1378	0

試験1cc当たりアブラト・in'→菌数 (C6地点)					
試験名	イネ	キビ族	ヨシ族	タケ亜科	ウシクサ族
(O.satl.)	(Pani.)	(Phrag.)	(Bamb.)	(Miscan.)	
1-1	7600	0	908	25900	0
1-2	4900	0	1990	29800	900
2-1	4600	0	2300	25300	0
2-2	2500	0	2300	20200	0
2-3	11400	0	1200	19000	0
3-1	2200	0	0	21400	0
3-2	3200	0	2100	21800	0
4-1	8800	0	0	33400	0
4-2	3900	0	900	31900	900
4-3	3100	0	1090	32100	3100
4-4	0	0	900	48400	0
5-1	800	0	0	26700	800
5-2	0	0	3000	19200	4000
5-3	0	0	2300	29200	500

試験1cc当たりアブラト・in'→菌数 (F17地点)					
試験名	イネ	キビ族	ヨシ族	タケ亜科	ウシクサ族
(O.satl.)	(Pani.)	(Phrag.)	(Bamb.)	(Miscan.)	
1-1	7500	0	0	13828	0
1-3	2617	0	0	14632	0
2-1	2788	0	554	6643	554
2-3	10543	0	0	12802	0
3-1	10522	0	877	24550	877
3-3	5882	0	980	10784	0
4-1	8995	0	2021	9084	0
5-1	3885	0	2319	4636	0
5-2	0	0	2875	10187	0
5-3	0	0	2941	9803	0
6-1	0	0	3767	14127	0
6-3	0	0	0	15855	0
7-1	0	0	1212	9485	0
7-3	0	0	1064	7445	0
8-1	0	0	988	8978	0
8-3	0	0	0	7836	0
9-1	0	0	0	0	0
9-2	0	0	0	1109	0

試験1cc当たりアブラト・in'→菌数 (C10地点)					
試験名	イネ	キビ族	ヨシ族	タケ亜科	ウシクサ族
(O.satl.)	(Pani.)	(Phrag.)	(Bamb.)	(Miscan.)	
1-1	3600	0	0	19190	5400
1-2	5200	0	1700	23400	800
2-1	5200	0	0	16800	3190
3-1	2800	0	0	17800	1800
3-2	1800	0	900	15700	2800
3-3	2800	0	0	21600	1800
4-1	1700	600	1700	36300	5300
4-2	0	0	4100	25600	2400
5-1	0	0	1300	25700	4000
5-2	0	0	0	18400	5900
5-3	600	0	2000	45300	5300
5-4	0	0	1300	25800	5500

試験1cc当たりアブラト・in'→菌数 (H19地点)					
試験名	イネ	キビ族	ヨシ族	タケ亜科	ウシクサ族
(O.satl.)	(Pani.)	(Phrag.)	(Bamb.)	(Miscan.)	
1-1	3844	0	3075	30751	2306
1-2	8983	0	998	34913	854
1-3	5975	0	0	34148	0
1-4	16184	0	1132	46394	0
2-1	850	0	0	5089	850
3-1	1983	0	1903	38151	3805
3-2	2388	0	0	21976	1189
3-3	3793	0	0	31475	3554
3-4	7837	0	0	43536	0
3-5	2782	0	0	29672	2782
4-1	916	0	0	7330	0
4-2	3905	0	0	10465	0
4-3	1103	0	0	8617	0
4-4	2124	0	0	18055	0
4-5	5094	0	0	22157	1889
4-6	0	0	0	4605	0

試験1cc当たりアブラト・in'→菌数 (D3地点)					
試験名	イネ	キビ族	ヨシ族	タケ亜科	ウシクサ族
(O.satl.)	(Pani.)	(Phrag.)	(Bamb.)	(Miscan.)	
1-1	8800	0	1600	24700	4900
1-2	2800	0	808	25800	2800
2	5600	0	1000	20300	5000
3-1	3100	0	0	21900	4100
3-2	3800	0	1900	15400	8700
4-1	700	0	700	11600	3100
4-2	700	0	1500	11700	1500
4-3	2300	0	700	12700	2300
5-1	10200	0	0	26700	8000
5-2	12800	0	800	30800	5100
5-3	8900	0	0	33800	2800
5-4	7000	0	1780	21900	1700
6-1	12900	0	1680	28600	3200
6-2	8500	0	4180	28000	3300

試験料cc当たりアラブ・シロ・イネの個数 (E20地点)  
試験料名 イネ キビ族 ヨシ族 タケ茎料 ウシクサ族  
(O.sati.)(Pani.)(Phrag.) (Bamb.) (Miscan.)

1-1	4670	0	0	17123	2335	
1-2	7196	0	800	43977	0	
2-1	7850	0	981	35324	0	
2-2	5617	0	0	27285	3219	
2-3	3124	0	0	22186	90	
2-4	3050	0	0	28117	3905	
2-5	5071	0	0	26781	2968	
3-1	3651	0	2736	26286	2736	
3-2	5593	0	932	45685	1964	
3-3	6014	0	0	17162	3436	
3-4	4310	0	0	16377	1724	
3-6	4543	0	0	27257	4543	
4-1	1772	0	0	19495	2656	
4-2	929	0	0	18588	0	
4-3	866	0	1733	14728	2599	
5-1	961	0	0	1922	13457	1922
5-2	4636	0	1159	11590	0	
5-3	2061	0	0	1481	9624	0
5-4	1899	0	0	0	3797	0
5-5	3440	0	0	0	8192	668
5-6	0	0	0	0	7257	0

試験料cc当たりアラブ・シロ・イネの個数 (E1地点)  
試験料名 イネ キビ族 ヨシ族 タケ茎料 ウシクサ族  
(O.sati.)(Pani.)(Phrag.) (Bamb.) (Miscan.)

1-1	4200	0	1000	29800	4200	
1-2	6400	0	0	27769	1000	
2-1	0	0	0	13990	1100	
2-2	3600	0	0	14780	3600	
3-1	0	0	0	8560	1000	
3-2	0	0	1000	4200	1000	
4-1	0	0	0	6100	0	
4-2	0	0	0	10780	1000	
4-3	0	0	1000	12100	2000	
5-1	11600	1100	0	40500	3500	
5-2	1600	0	0	18509	1000	
5-3	3300	0	0	26000	0	
5-4	2200	0	1100	21500	0	
6	0	0	1500	14100	2300	
7-1	0	0	0	13900	700	
7-2	0	0	0	13900	1100	
7-3	0	0	0	7100	23900	3000

試験料cc当たりアラブ・シロ・イネの個数 (E3地点)  
試験料名 イネ キビ族 ヨシ族 タケ茎料 ウシクサ族  
(O.sati.)(Pani.)(Phrag.) (Bamb.) (Miscan.)

1-1	4900	0	0	20200	0
1-2	2000	0	1000	16200	2000
2-1	1500	0	1500	4600	0
2-2	0	0	0	4200	0
2-3	0	0	1400	7300	0
2-4	0	0	0	10700	0
3	0	0	1200	13900	1200
4-1	0	0	0	12600	0
4-2	0	0	0	6800	0
5-1	0	0	0	13700	0
5-2	0	0	0	26800	1800
5-3	1000	0	0	25200	1000
5-4	0	0	900	27300	0
6-1	1600	0	2800	19700	0
6-2	3000	0	3000	19000	1600
6-3	1800	0	900	29400	0

試験料cc当たりアラブ・シロ・イネの個数 (E4地点)  
試験料名 イネ キビ族 ヨシ族 タケ茎料 ウシクサ族  
(O.sati.)(Pani.)(Phrag.) (Bamb.) (Miscan.)

1	9400	0	900	12200	900
2a	2000	0	3100	15500	2000
2b	2300	0	0	10600	1100
3-1	6900	900	2900	11800	0
3-2	2900	0	0	11800	1000
3-3	0	0	1800	20100	0

試験料cc当たりアラブ・シロ・イネの個数 (E3地点)  
試験料名 イネ キビ族 ヨシ族 タケ茎料 ウシクサ族  
(O.sati.)(Pani.)(Phrag.) (Bamb.) (Miscan.)

1-1	1900	0	2900	16700	2900	
1-2	3000	0	0	18500	1000	
1-3	3000	0	0	12200	2000	
1-4	1900	0	0	20800	900	
2-1	1500	0	0	700	13800	2300
2-2	0	0	0	700	13900	3000
2-3	1500	0	0	1500	10700	2300
3-1	3000	0	0	5300	12400	6200
3-2	4400	0	0	5300	12400	4400
3-3	5200	0	0	1700	22700	1200
3-4	3600	0	0	1600	17500	7200
3-5	6700	0	0	4700	24800	8600
3-6	900	0	0	900	23100	12900
4-1	900	0	0	900	26500	16700
4-2	0	0	0	2700	51200	12600
4-3	0	0	0	6400	68300	10100
4-4	0	0	0	2600	52800	8900
5-1	0	0	0	3700	63000	10100
5-2	0	0	0	2600	57100	9500
5-3	0	0	0	8100	54100	8100
5-4	0	0	0	2900	26000	7700

試験料cc当たりアラブ・シロ・イネの個数 (E2地点)  
試験料名 イネ キビ族 ヨシ族 タケ茎料 ウシクサ族  
(O.sati.)(Pani.)(Phrag.) (Bamb.) (Miscan.)

1-1	4800	0	3900	31200	3900	
1-2	3800	0	900	18200	2800	
1-3	2800	0	1800	21700	4700	
2	1900	0	0	900	27100	900
3-1	4000	0	0	0	28200	0
3-2	1800	0	3200	15100	1900	
3-3	2000	0	1000	14600	3100	
4-1	0	0	2000	18800	4100	
4-2	0	0	0	19900	2200	
5-1	3200	0	0	26300	6500	
5-2	2000	0	0	22300	3000	
6-1	0	0	1000	28500	1000	
6-2	0	0	1100	29700	2200	
6-3	0	0	1000	26400	1000	
7-1	0	0	1100	29400	0	
7-2	0	0	1000	28900	3100	
7-3	0	0	0	0	29100	1000

試験料cc当たりアラブ・シロ・イネの個数 (E4地点)  
試験料名 イネ キビ族 ヨシ族 タケ茎料 ウシクサ族  
(O.sati.)(Pani.)(Phrag.) (Bamb.) (Miscan.)

1-1	3800	0	0	16300	1800
1-2	3100	0	3100	15600	2000
1-3	4900	0	0	27600	2900
2-1	1900	0	0	11900	2900
2-2	900	0	1900	13400	900
3-1	1900	0	0	10700	0
3-2	2900	0	980	6800	900
3-3	3900	0	2050	9900	1000
4-1	2900	0	900	11700	3900
4-2	4800	0	0	5600	3800
4-3	1900	0	0	13600	900
4-4	900	0	0	6600	1600
5-1	0	0	0	14500	9500
5-2	0	0	0	14800	3900
5-3	0	0	0	13400	3100
5-4	0	0	0	13200	3100

試験料cc当たりアラブ・シロ・イネの個数 (E10地点)  
試験料名 イネ キビ族 ヨシ族 タケ茎料 ウシクサ族  
(O.sati.)(Pani.)(Phrag.) (Bamb.) (Miscan.)

2c	6000	0	0	15900	0
3a	7400	0	0	27800	1800
3b	0	0	0	5200	700

試験料icc当たりア <sup>ラ</sup> ット <sup>・</sup> fn <sup>・</sup> →s個数 (B19地点)					
試験料名	イネ (O.sati.)	キビ族 (Pani.)	ヨシ族 (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Niscan.)
1-1	15937	0	826	20853	826
1-3	8903	0	0	18509	0
2-1	8435	0	0	23187	3183
2-2	10779	0	1347	12126	5389
2-4	8494	0	0	17633	0
3	8794	0	1099	17588	0
4-1	7750	0	0	9942	0
4-2	1047	0	0	14135	524
4-4	5478	0	0	16433	0
5-1	18413	0	0	15240	0
5-2	9398	0	0	12922	0
5-3	22245	0	0	18863	1171
5-4	8803	0	0	24614	0
6-1	2907	0	0	16474	0
6-3	1023	0	0	8203	0
6-5	0	0	1095	18421	0

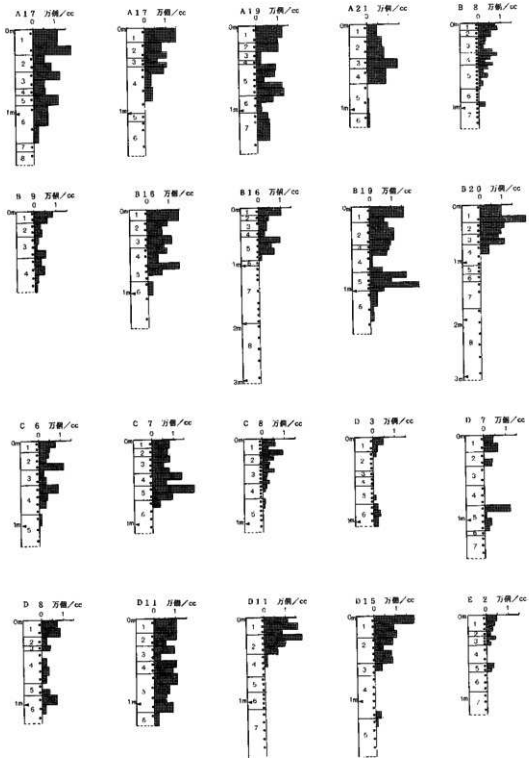
試験料icc当たりア <sup>ラ</sup> ット <sup>・</sup> fn <sup>・</sup> →s個数 (D8地点)						
試験料名	イネ (O.sati.)	キビ族 (Pani.)	ヨシ族 (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Niscan.)	
1-1	6900	0	0	23800	900	
1-2	8200	0	1900	17600	2080	
2	2000	0	0	2900	18700	0
3	3800	0	0	900	18300	0
4-1	0	0	0	0	12800	0
4-2	2100	0	0	1000	15700	0
4-3	3200	0	0	0	18000	1000
4-4	2000	0	0	0	15400	0
5-1	0	0	0	0	15200	0
5-2	3500	0	0	3500	27100	0
6-1	6800	0	0	1600	38500	2900
6-2	1900	0	0	0	21600	2900
6-3	0	0	0	0	8000	2000

試験料icc当たりア <sup>ラ</sup> ット <sup>・</sup> fn <sup>・</sup> →s個数 (G20地点)						
試験料名	イネ (O.sati.)	キビ族 (Pani.)	ヨシ族 (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Niscan.)	
1-1	5746	0	2298	10343	0	
1-3	14192	0	0	24328	3841	
2-1	5887	0	0	18643	1862	
3-1	2872	0	0	17370	4099	
3-2	1197	0	0	16784	0	
4-1	0	0	0	9258	1543	
4-2	3078	0	0	5131	1028	
5-1	7632	0	0	9813	2181	
5-2	9867	0	0	13097	2015	
5-4	2337	0	0	7011	0	
6	2540	0	0	1270	1270	0
7-1	0	0	0	722	18055	0
7-2	1140	0	0	2280	14817	0
7-3	4390	0	0	2500	15051	1881
7-4	0	0	0	1413	12715	2826
7-5	0	0	0	1250	22610	2512
7-6	0	0	0	0	16974	0

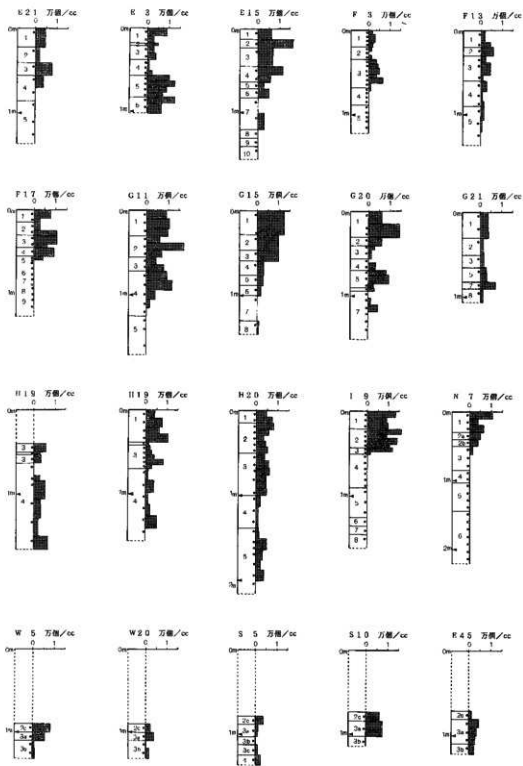
試験料icc当たりア <sup>ラ</sup> ット <sup>・</sup> fn <sup>・</sup> →s個数 (H7地点)							
試験料名	イネ (O.sati.)	キビ族 (Pani.)	ヨシ族 (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Niscan.)		
1-1	10400	0	0	19400	0		
1-2	3600	0	0	10800	0		
1-3	6400	0	0	12900	0		
2a	5000	0	0	3700	7500	2500	
2b	3700	0	0	0	7400	2400	
3-1	1200	0	0	0	26500	0	
3-2	0	0	0	0	23100	0	
3-3	0	0	0	0	7100	1100	
4-1	0	0	0	0	16900	0	
4-2	0	0	0	0	13300	0	
5-1	0	0	0	0	13600	1900	
5-2	0	0	0	0	900	19800	0
5-3	0	0	0	0	1000	18800	0
5-4	0	0	0	0	0	15900	900
6-1	0	0	0	0	0	15100	0
6-2	0	0	0	0	0	18300	1100
6-3	0	0	0	0	0	11400	0
6-4	0	0	0	0	0	28600	0
6-5	0	0	0	0	0	49600	0
6-6	0	0	0	0	0	33900	1000
6-7	0	0	0	0	2200	27900	0

試験料icc当たりア <sup>ラ</sup> ット <sup>・</sup> fn <sup>・</sup> →s個数 (I88地点)									
試験料名	イネ (O.sati.)	キビ族 (Pani.)	ヨシ族 (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Niscan.)				
1-1	7700	0	0	11500	0				
1-2	8500	0	0	13200	800				
2	5400	0	0	13600	900				
3-1	3400	0	0	7600	0				
3-2	2800	0	0	900	12500	800			
3-3	2200	0	0	0	7000	1500			
3-4	6200	0	0	0	10700	800			
4-1	8400	0	0	0	10500	0			
4-2	5200	0	0	1000	14700	0			
4-3	3100	0	0	2100	9500	1000			
4-4	6300	0	0	1000	9500	1000			
5-1	4300	0	0	0	13100	0			
5-2	1900	0	0	0	9900	0			
5-3	4000	0	0	0	24000	0			
5-4	900	0	0	0	900	17100	0		
5-5	1800	0	0	0	3600	28400	0		
5-6	1900	0	0	0	2000	29900	1000		
6-1	0	0	0	0	0	22180	900		
6-2	0	0	0	0	0	800	25300	4800	
6-3	0	0	0	0	0	1000	22200	2000	
6-4	0	0	0	0	0	4900	33700	1800	
7-1	2800	0	0	0	0	0	36500	900	
7-2	0	0	0	0	0	0	1900	36900	5800
7-3	0	0	0	0	0	0	1800	45200	980
7-4	0	0	0	0	0	0	1900	27300	4860
7-5	0	0	0	0	0	0	1800	45400	0

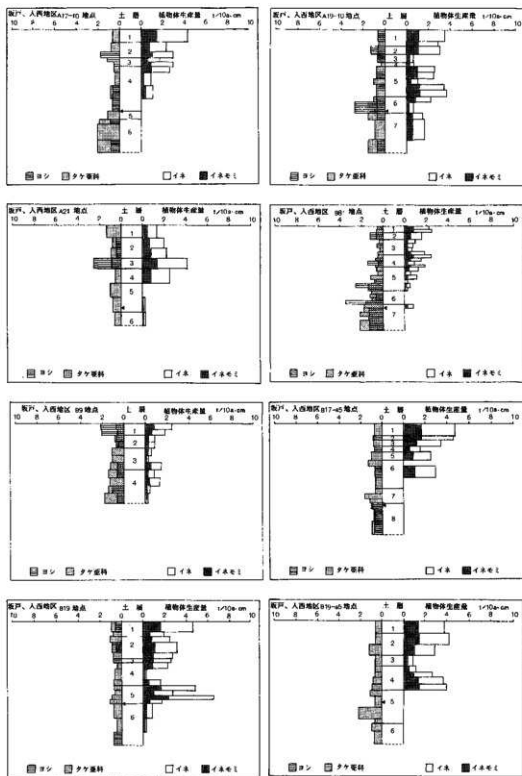
試験料icc当たりア <sup>ラ</sup> ット <sup>・</sup> fn <sup>・</sup> →s個数 (C8地点)								
試験料名	イネ (O.sati.)	キビ族 (Pani.)	ヨシ族 (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Niscan.)			
1-1	5800	0	0	18400	0			
1-2	8000	0	0	1000	23200	0		
1-3	2700	0	0	0	24000	0		
2-1	9200	0	0	1000	19500	0		
2-2	4000	0	0	0	2000	23000	0	
2-3	5200	0	0	0	2000	28200	0	
2-4	2000	0	0	0	1000	22400	0	
3-1	3400	0	0	1100	23800	0		
3-2	2700	0	0	0	800	18500	0	
3-3	5400	0	0	0	900	13500	0	
3-4	1900	0	0	0	900	13900	0	
3-5	1900	0	0	0	0	11600	0	
4-1	2900	0	0	0	900	22200	0	
4-2	1800	0	0	0	900	9200	0	
4-3	1000	0	0	0	0	11100	0	
4-4	0	0	0	0	1900	14300	0	
4-5	0	0	0	0	2000	13600	0	
5-1	900	0	0	0	1900	32600	2600	
5-2	900	0	0	0	2700	39400	6400	
5-3	0	0	0	0	1900	900	56900	8800
5-4	0	0	0	0	0	0	39800	6700
5-5	0	0	0	0	0	900	33900	4700
5-6	0	0	0	0	0	0	32800	7600



第394図 プラント・オバールの出現傾向(1)

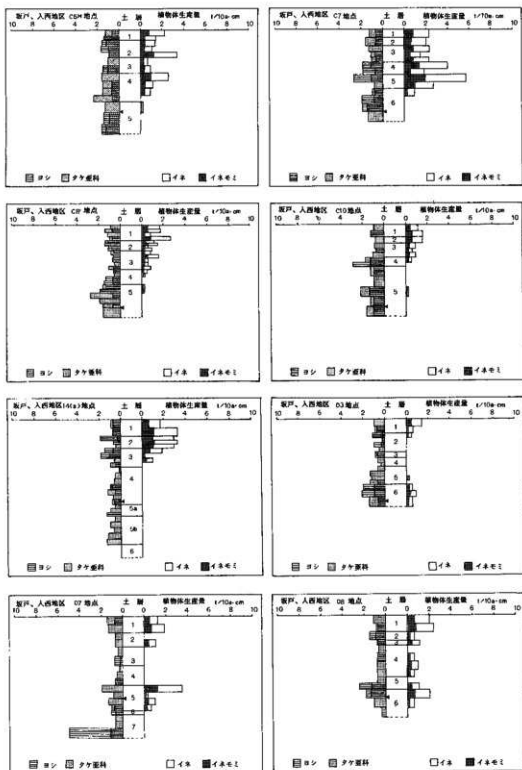


第395図 プラント・オバールの出現傾向(2)

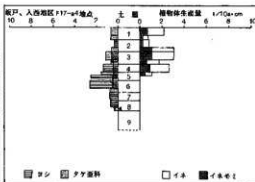
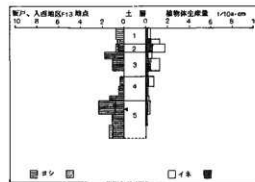
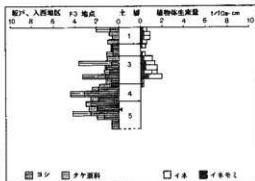
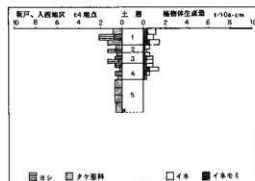
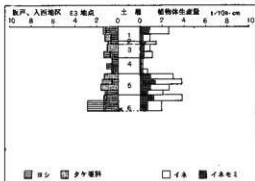
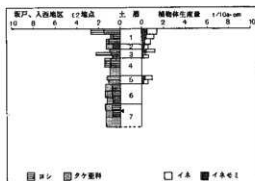
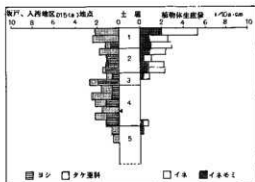
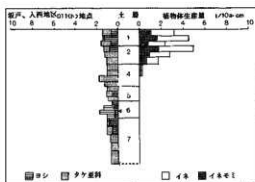


第396図 植物体生産量の推定値(1)

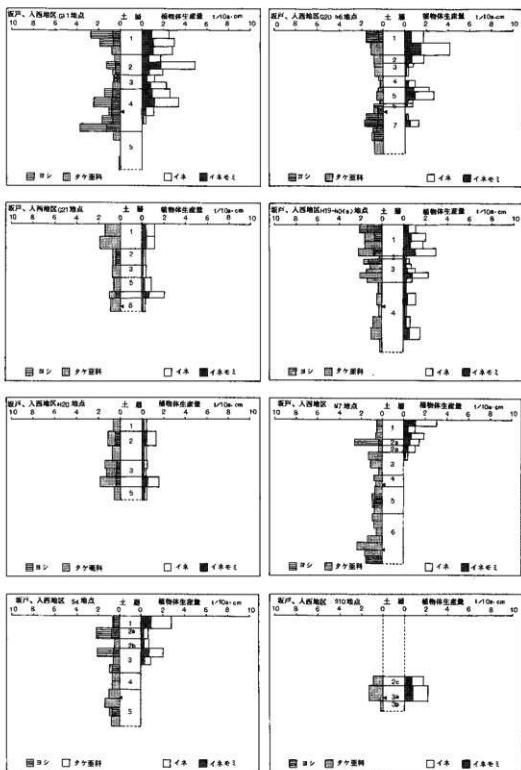




第397図 植物体生産量の推定値(2)



第398図 植物体生産量の推定値(3)

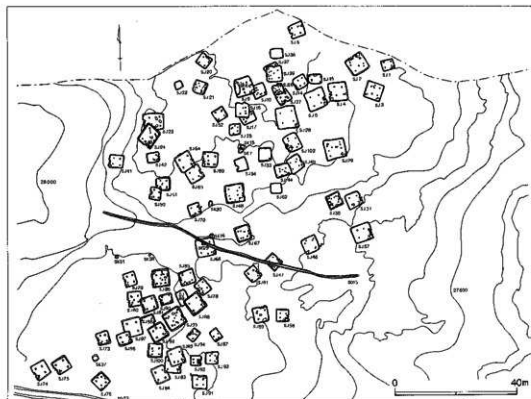


第399図 植物体生産量の推定値(4)

## VI 結 語

### 1 「古墳時代後期」の集落と出土遺物

桑原 A 遺跡の主体となる時期で、竪穴住居跡76軒が検出された。その大半は、所謂「鬼高式土器」の古相に含まれ（5世紀末葉から6世紀前半）、集落の初現から終息に至る時間幅は概ね60～80年前後と短い。鬼高期の集落に先行する遺構は、僅かに「和泉期」の竪穴住居跡1軒が検出されたが、「鬼高期」の集落の出現との間には凡そ2、3型式の時隔経過が考えられ、明らかに空白部分が存在する。また、桑原 A 遺跡で検出された和泉期の住居跡は、未だ竈が採用されない段階である。隣接する棚田遺跡20号住居跡からは、壁から遊離した竈の存在が報告されている。入間地域に於ける初現期の竈であることは明らかである。初現期竈を有する20号住居跡の出現以降、壁に敷設された「作りつけ竈」の存在が報告されており、遺物の対比から桑原 A 遺跡の一部が同時に存在していた可能性も考えられる。桑原 A 遺跡に於ける当該期の切り合い関係は、SJ 84→83→82、SJ 97→96→98、SJ 97→98→99で明らかのように3組の3軒からなる新旧関係が認められ、最低3時期以上の集落の変遷が考えられる。しかし、無遺物に近い住居跡との切り合いなど、総じて比較検討できる資料は少ない。また、「転ばし根太」等の遺存状態が比較的良行な焼失住居 SJ 2・48・



第400図 古墳時代後期の集落

古墳時代後期の住居跡分布

80の存在から、本来の土器組成を知る上で重要な資料となる。ここでは、出土頻度の高い坏形土器の分類を通してその推移を探ることとする。また、資料操作をする上での定点として、隣接する棚田遺跡の資料を援用することとし（1989 遺跡発掘調査報告会資料）、特徴的な個々の住居跡の検討は、それぞれの段階に於ける集落変遷の箇所と触れることにした。

#### (1) 出土土器の分類

器種は、甕、小型甕、甌、高坏、坏、鉢、てづくね土器が存在するが、出土頻度の高い器種は坏、高坏、甕、小型甕、甌である。坏の形態分類は例言に準拠している。

##### [坏形土器]

坏A類………椀形態の坏（前段階の和泉式土器の系譜を引くが、赤彩を施すものが主体）

A 1…口縁部は「S」字状、体部は椀状をなす。当初から法量差が存在し、大型、小型の認識があったと考えられる。（例えばSJ-48-1、SJ 82-1～7）

A 2…体部上半で屈曲し直線的に底部へ至るもの。細分可。

A 3…口縁部が「コ」の字状をなす。（例 旨のE類に該当し、所謂「比企型坏」）

坏B類………須恵器身模倣の坏。（器壁が厚く、赤彩が施される等地城色が濃い）

B 1…口縁部は直立、体部は椀状をなす。口辺部が急に所傾し「コ」の字状をなすものを含む。（例えばSJ 82-15・16）

B 2…口縁部は外傾、体部は椀状をなす。口唇部が急に外傾し「コ」の字状をなす。

B 3…縁部は内傾、体部は椀状をなす。（SJ 28-3、SJ 78-12・13）

坏C類………須恵器蓋模倣の坏。（器壁が薄く、精緻な胎土を用い、赤彩は施されないものが主体であるが、一様ではない。）

C 1…口縁部は直立、体部は椀状をなす。端部の作りはシャープ。

C 2…口縁部は外傾、体部は椀状をなす。

C 3…口縁部は外傾、底部は平底で、内面及び外面の体部上半までに赤彩を施す。

坏D類………椀形態の坏 便宜上坏とした。口縁部に変化がなく、椀状をなす。（SJ 27-1）

坏E類………平底の坏で口縁部は外傾（口縁部はヨコナデ、体部は篋削り整形）。

##### [高坏形土器]

高坏A類………坏部は須恵器模倣、脚部は短脚で円錐状をなす。

A 1…口縁部は強く外傾、体部との境は明瞭な段有り、脚部は短脚で小振。（SJ 64-13）

A 2…口縁部は直立、脚部は短脚。（SJ 64-14）

A 3…口縁部は直線的に外傾、体部は浅く、段は不明瞭、脚部は円錐状。（SJ 48-27）

高坏B類………坏部は直線的に外傾、体部下端に段をもつ。（SJ 1-5、SJ 27-3）

高坏C類………坏部は椀状を呈し、脚部は短脚で円錐状をなす。（SJ 90-3）

高坏D類………坏部は須恵器蓋模倣坏、脚部は柱状の短脚で裾部は急激に開く。（SJ 44-27）

高坏E類………口縁部は緩やかに外傾して立ち上がり端部で外反、短脚で裾部は外反（SJ 15-18）

〔甍形土器〕

- 甍A類………口縁部は強く外反、中位に段をもち、球形胴部を呈する。量的には僅かで、主体をなすものではない。(SJ 48-29、SJ 57-7)
- 甍B類………口縁部は強く外反、最大径は胴部中位で、球形胴部を呈する。比較的出土頻度が高い。(SJ 81-16、SJ 88-23)
- 甍C類………口縁部は直立して立ち上がり中位で強く外反、球形胴部を呈し、胴部は磨き加わる。(SJ 24-2、SJ 86-16)
- 甍D類………口縁部は緩やかに外反、胴部は長胴化し、整形は縦笥削り。最大径は胴部下半から中位にある。前者が古、後者が新。(SJ 4-10)
- 甍E類………口縁部は緩やかに外反、胴部は長胴化、胴部は刷毛目整形。出度頻度は低い。(SJ 24-23、SJ 102-13)

〔小型甍形土器〕 器形的・機能的には壺として認識されるものも含めた。

- 小型甍A類・口縁部は直立気味に外反、胴部は球形をなす。(SJ 50-39)
- 小型甍B類・口縁部は短く直立気味に外反、胴部は球形をなす。(SJ 41-19、SJ 50-31)
- 小型甍C類・口縁部は直立、器高が低く胴部は半球状をなす。(SJ 41-25)
- 小型甍D類・口縁部は短く、直立気味に外反、胴部に最大径をもち、胴部は長胴化の傾向にある(SJ 46-28)
- 小型甍E類・口縁部は緩やかに外反、胴部は長胴化の傾向にある。(SJ 41-20)
- 小型甍F類・口縁部は強く外反、胴部整形は刷毛目ナデが施される。(SJ 41-24・34)
- 小型甍G類・口縁部は強く外反、胴部は球形で丸底をなす。(SJ 45-11)

〔甌形土器〕

- 甌A類………底部から直線的に外傾しながら立ち上がり口縁部で僅かに外反、中位に把手を斜位に貼付。口縁部と胴部の境が不明瞭(SJ 20-10、SJ 48-49・50)
- 甌B類………底部から緩やかに外傾しながら立ち上がり、口縁部は強く外反、中位に把手を斜位に貼付する。(SJ 30-19、SJ 62-7、SJ 93-15)
- 甌C類………底部は緩やかに立ち上がり、頸部まで直線的に立ち上がり、口縁部は僅かに外傾、中位に短い把手を垂直に貼付。(SJ 9-22)
- 甌D類………底部から緩やかに立ち上がり、口縁部は僅かに外反。(SJ 2-24、SJ 24-25)
- 甌E類………口縁部は緩やかに外反、胴部は長胴化する。(SJ 35-11)

〔小型甌形土器〕

- 甌A類………口縁部は短く強く外反、器壁が厚い。(SJ 58-23、SJ 78-18)
- 甌B類………底部から直線的に立ち上がり、口縁部との境が不明瞭。(SJ 59-8)
- 甌C類………口縁部は緩やかに外反、器高が低く胴部は半球状をなす。(SJ 81-17)

〔鉢形土器〕

- 鉢A類………半球状で底径が小さい。(大型の球状胴部の甍B類胴部下半に類似)
- 鉢B類………小型の鉢で、椀状を呈するが作りは粗雑。

## (2) 集落変遷と出土土器

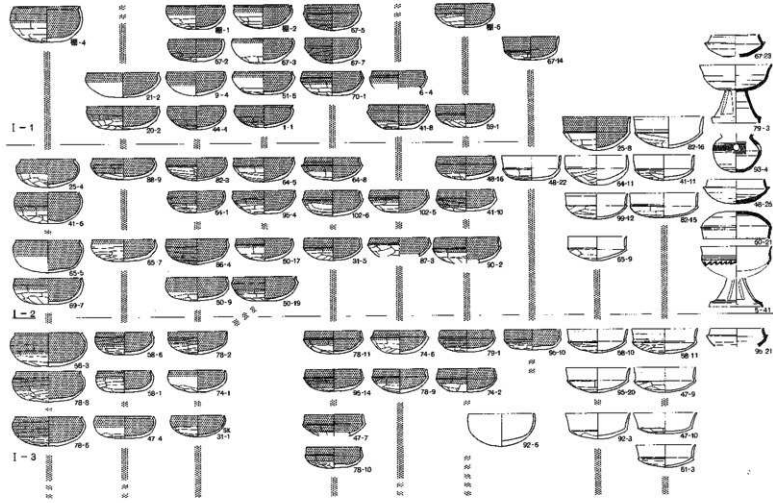
I-1期 [5世紀第4四半期後半～6世紀初頭] …… (SJ 1・2・4・6・9・20・21・24・45・51  
・57・59・67・68・70・73・80・84・85・棚田遺跡 SJ 4)

桑原 A 遺跡の初現となる集落は、低台地上の東西にそれぞれ二軒一組の構成をもって出現する。該当する20軒の住居跡は、更に細分可能である。因みに、I-1期を新・古期に分けると、古段階は桑原遺跡に先行する棚田遺跡 SJ 4 (以下棚田 SJ 4) が最も古く、続いて桑原遺跡の SJ 67、SD 23が該当する。SD 23は、棚田遺跡で既に集落と共生しており、I-1期古段階に初現が求められる。また、桑原遺跡の一部、前出の SJ 67等は、棚田 SJ 4 の集落形成時には存在していた可能性が高い。桑原遺跡の21軒を主軸方位、位置関係から住居跡分布を整理すると、SD 16の西に SJ 51・68、SJ 59・85、SJ 67・70、SJ 80・73、SJ 74・84の10軒が、東には同様に SJ 1・4、SJ 2・20、SJ 6・9、SJ 21・24、SJ 45・57の10軒が認められる。これらは二軒一組の住居跡は、主軸方位、住居跡間が等しく、集落を構成する上での基本単位と考えられる。また、その組み合わせが、大型住居跡+小型住居跡或いは、中型住居跡+小型住居跡となる可能性が極めて高いおとに注目される(註1)。個々の住居跡については、等間隔に配置された4本の支柱穴、竪脇に設けられた貯蔵穴の存在、煙道部及び燃焼部未発達の高等、当該期住居群が画一的な内容を具備していたことが解る。更に、支脚転用の高坏が多用される甕の存在、所謂「間仕切り溝」を含めた「転ばし根太」の存在など共通の慣習、先進の技術等が定着した時期といえる。

I-1期とした土器群の内、まず須恵器蓋模倣の C1・2類に注目してみる。C1・2類は、未だ定着せず量的にも極めて僅かな段階、或いは未だ出現をみない段階とすることができる。前者の例として SJ 25-8 が挙げられる。この時期の主體的な坏は、所謂「S」字口縁の A1・A2類と須恵器坏身模倣の B1・B3類で、C3類が従的に存在する。A2類は、前代「和泉期」の椀に系譜が辿れるもので、口縁部は内傾し、最大径を体部上半にもつ。口縁部の「S」字部分はしっかりした作りで内稜は鋭いが、大半は磨滅して赤彩部分は剝げ落ちている。SJ 1 及び棚田 SJ 4 にその好例が求められる他、東松山市舞台遺跡 A 区58号住居跡 2 が該当する。また、この段階から、棚田 SJ 4-4 のような大型(径14.5cm)製品が認められ、一般型(径12.0cm)を含め当初から分量差の異なる2種が存在していたことが理解できる。用途別に意識して製作されたものであろう。B1・B3類は、口縁部長=体部長で、口縁部が直立するものが主体である。底部に木葉痕を残す頻度は50%程度である。蓋模倣と考えられる C 類の特徴は、前代(和泉期)の平底化の影響下にあり、丸底へ移行する漸移的な形態と考えられ、底部の整形痕はみられず、統べて木葉底である。類例は SJ 67-11-14、16、17の他、本庄市後張遺跡 SJ 29-31にも認められ、後張 VI b 期の範疇として6世紀前半代の年代が与えられている。SJ 67から須恵器坏身(23)が出土している。新段階の特徴は、A1類の口縁部内稜の作りに顕著に表われ、SJ 1 或いは棚田 SJ 4 にみられた鋭い内稜が失なわれ、断面形状が本来の「S」字を呈するようになる。

高坏は、脚部の柱状部下端が絞られて急激に開く器形で、前代の影響を未だ強く残す棚田遺跡例が古相を示し、桑原遺跡 SJ 1-5、59-4 などが近接した位置を占める。しかし他の多くは、口徑

第401图 罐年图(1) 环形土器





の規模が増し、坏部の器高が減じ、脚部はロート状に開く傾向にあり、新しい段階として認識できる特徴が表出してくる。

甕は、長胴化の過渡的段階といえる。主体をなすD類は、口縁部は明確な「く」の字をなさず、緩やかに胴部へ移行し、最大径は胴部下半にあって下膨れの形状をなす。SJ 67-31、32、SJ 59-9、SJ 69-31にその典型例が求められる。整形は、刷毛目梨形（E類）が僅かに認められる他、縦範削り後磨盤きが多用される。口縁部中に段をもつA類は、SJ 45-8、SJ 57-5、7に認められる程度で主体をなすものではない。胴部は球形で、長胴化の影響は弱い。

小型甕のバリエーションは豊富で、器形的には小型壺と認識されるもの（A・B・G類）も包含している。A・B・E類が主体で、C・D・F・G類が従的に出土。C類はSJ 57-6、D類は槽田遺跡例、F類はSJ 1-12、G類はSJ 45-11が例として挙げられる。A類には低い脚部をもつSJ 24-18などもみられ、内外面に赤彩を施したものも存在する。

甗は、SJ 67-28、30、SJ 69-32に象徴されるように口縁部が僅かに外傾する程度で変化に乏しく、「逆舟形」状の直線的なシルエットものが先行し、漸次口縁部と胴部の境界が明瞭で、胴部全体に丸みを増すものへ移行する。把手の貼付される頻度は高く、位置は胴部上位に貼付されるものが多い。小型甗は、SJ 45-14、SJ 59-8にその典型例が求められ、大型のもの以上に簡略で直線的なプロポーシオンを呈し、口縁部との境界が不鮮明なものが多い。把手を貼布する例はなく、大型甗固有の特徴と考えられる。

I-2期 [6世紀第1四半期] …………… (SJ 5・14・23・25・27・28・30・31・34・36・41・42  
・44・46・48・50・64・65・69・76・79・81・82・83・86・87・88・90・91・93・99・102)

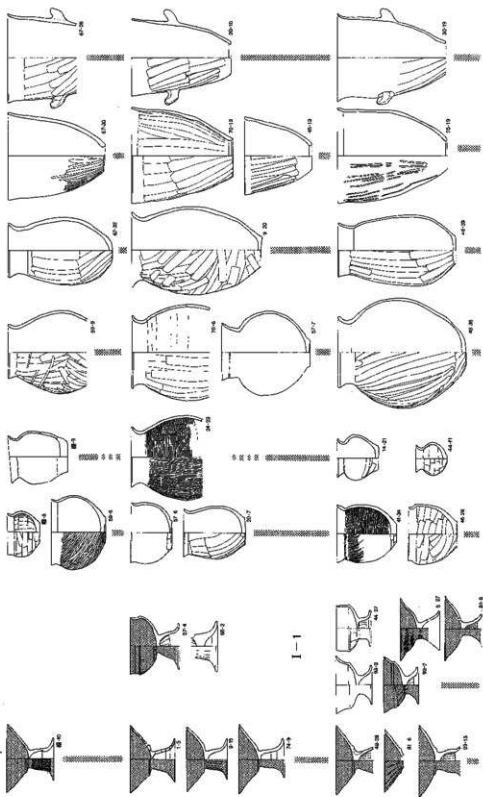
集落は、低台地を南北に深く浸食した低地を境として、南西部に11軒、北東部に19軒が検出された。この32軒の住居跡は、新旧関係の存在と主軸方位の違いにから2時期以上にわたって営まれたことが想定される。住居跡内の土器組成を再度検討する必要があるが、ここでは概ね妥当と思われる範囲で3期の細部を試みた。I-1期に直接後続可能なSJ 25・28・36、SJ 34・44・48、79・81・86、SJ 83・91・93の12軒をとりえずI-2の古段階とし、SJ 5・102、SJ 23・64、SJ 76、78・87・88の8軒を新段階に、SJ 14・27・69、SJ 30・31・46、SJ 41・42・50、SJ 82・90・99、SJ 65の13軒を古と新段階の中間に置いてみた。集落の特徴は、低台地の南西と北東にそれぞれ3軒一組を単位とした住居跡が2群づつ、計4群により構成されることで、主軸も東西方向を指向することで一致している。中間に設定した段階では、平場を広くもつ北側に集中し、3軒を一組とした単位が3群、南西に1群の構成を採る。主軸方位が東に大きく振れていることも共通しており、同時存在の一つの傍証となるかもしれない。また、SJ 65→64は近接した遺物内容から短時間内の建て替えを想定しておきたい。新段階の8軒は、従前とは異なり、北に2軒一組の構成を採る住居が2群、南西は3軒一組の構成が1群とSJ 76が存在する。南北それぞれ4軒づつの構成であるが、住居跡間の距離或いは主軸方位に支障があり成立は難しい。更に検討する必要性を感じる。基本的には、I-1期以降集落の基本単位となっている2軒一組或いは3軒一組の構成は引き続き継承されているものと思われる。

I-2期を古・中・新の時間幅を設けた集落の変遷と、坏の編年観には細部に於いて整合しない部分が存在するため、古→新への変遷はその傾向程度にとどめたい。I-2期古段階の特徴は、蓋模倣坏C1・2類に、口径11.5~12.5cmのもと大型の14.0~14.5cmの2種類が存在することである。特に後者は口径が大型化するタイプの出現後間もなく、器高が低く口径の大きなタイプ(SJ 82-5)が現われることに注目される。これは明らかに大型の須恵器蓋 SJ 50-21の影響下で出現したものであろう。SJ 82-15の系譜は、以後I-3期の新段階まで確認することができる。蓋模倣坏C類の変遷は、第401図で示した通りであるが、明確なC1類はSJ 48-21・24で代表されるように器高が高く、端部の作りも良い。しかし量的に僅かなC1類は、端部が緩やかに外傾し体部が肥厚するC2類に吸収されていく。C1類の範囲に含めたSJ 30-7は、口縁部が緩やかに内湾し端部で僅かに外反するタイプで、口径に比して器高が高く脚部内面を除く全面に赤彩が施されるなど占相の特徴を示している。C3類は、I-1期以降も強い保守性を保ち、SJ 48-19は端部の作りがシャープで外傾が増し、底部は平底で肥厚する。このようにC類は、口縁部が外反するC2類が主体を占め、体部がやや潰れ、法量比が口縁部長=体部長となる。C1類の中から口径が大型化し、器高が低く器壁の薄いものが現われるが、新しくなるにつれ器高を減じ、扁平となる傾向は前記した通りである。このような傾向はA類にもみられ、A1・2類共従来の椀状の体部を呈するものの他、口径が大きく体部上半が強張り出し、器高の低いタイプがI-1期以降も系譜として残るが、体部上半の肩部は不鮮明となる。新段階では、A類全体が一定の口径を保つ反面、器高を減じることからA1類は大型、A2類は小型、A3類は扁平の中型というように識別も未だ容易である。A3類は、坂戸市上谷遺跡のように蓋模倣坏出現以前から普遍的に存在するようである。

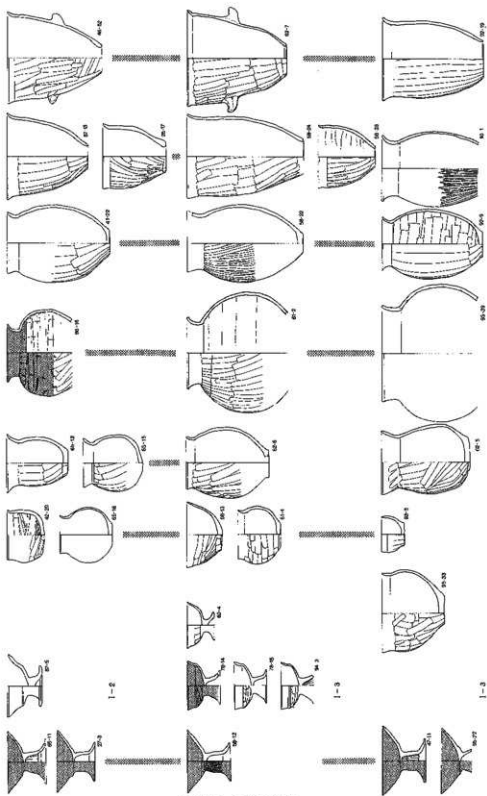
高坏は、I-1期同様B類が主体であるが、形態のバリエーションは豊富である。B類の坏部は口縁部の開きが大きく浅いものとなり、脚部は柱状部が不明瞭となる。新段階では、その傾向が更に強くなる。次に出土頻度が高いA類は、A1類にSJ 93-2・3が、A3類にSJ 48-27が認められ、A1類の中では赤彩され、口縁部の開きが大きい後者が先行する。類例は、若宮台遺跡SJ 36-33に求められるが、伴出の蓋模倣坏から6世紀第3四半期とかなり新しい年代を与えている。D類はSJ 44-27のみで、類例は本市市後張遺跡SJ 24-27に求められ、後張IVb期6世紀前半の年代が与えられており、本例とほぼ一致する。C類、E類共、SJ 41で検出されたのみで、従的な存在である。

甍は、口縁部の開きが弱く直線的に立ち上がり、胴部下半に最大径をもつ長胴甍のD類(SJ 46-39)と球形胴部のB・C類の二者があり基本的には前代をそのまま踏襲している。しかし、胴部に対して軌跡に加えられた寛幅は部分的に施される程度で、全面縦位の寛削りが2~3段施されるものが多くなる。刷毛目整形のE類も僅かであるが遺存する。(SJ 41-32、34)

甗は、口縁部の外反が顕著となり、内径も存在することから、胴部との境いが明瞭となる。I-1期で主体的であった胴部が直線的に立ち上がる大型甗は姿を削し、径の小さな底部から膨らみをもったタイプに変貌していく。甗同様胴部整形は縦来の寛削りが主体となる(SJ 46-51)。また、胴部が円筒状で底径が大きいSJ 64-25は、兎玉工業団地関連の川越田遺跡SJ 1-92にその類例が求められI-3期に含めた模倣坏C2類と伴出していることから新しい要素として捉えることができる。



第402图 罐年图(2)

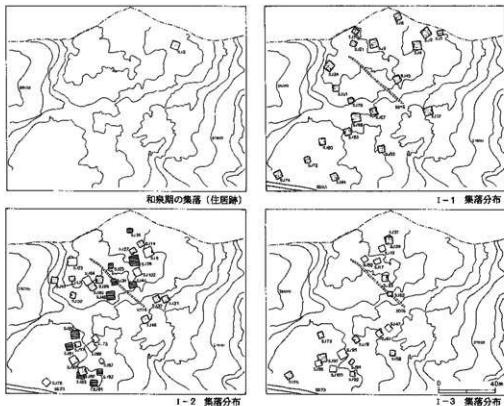


第403图 编年图(3)

I-2期の須恵器は器種、量共に比較的豊富であるが、若干の型式差が認められる。土師器の福年観とは異なり、SJ 48と50の間では整合せず新旧関係は逆転する。SJ 5-41の短脚無蓋高坏、同34-37の蓋、SJ 48-25の坏、SJ 50-21の蓋、SJ 93-4のが検出されている。

I-3期 [6世紀第2回半期～第3回半期] …………… (SJ 10・17・33・37・39・47・52・58・61  
・62・74・75・78・92・94・95・96・97・100・SK 35・SD 23)

I-3期の集落は、住居跡20軒と集落の南限を示す大溝1条 (SD 23)、土壌SK 37から構成される。新旧関係はSJ 37・39・96・97の2例が存在し、新・古2段階に細分した。古段階としたものは (網掛け部分)、SJ 33・39、58・62、74・75、78・94、79・97の5組10軒が、新段階は10・37、17・52、47・61、62・100、95・96の5組10軒が相当する。比較的土器形成の明確なSJ 47・58・61・92を拠り所として、同時性を容易に認識できるSJ 17他5軒を加えた結果、主軸方位が共通し、しかも隣接する2軒一組を単位とする住居群の存在が想定される。つまり、集落の中央に存在する低地部を挟んで東西に対峙する形をとり、西に7軒、東の2軒により構成される。南西に位置するSJ 92・100、或いは北東に位置するSJ 17・52は、それぞれSD 16・23とほぼ等しい主軸方位 (東西方向) を示すことから、溝による規制が働いていたものと考え、同時存在の傍証とすることができる。他の6軒の主軸方位はN-52°-E-N-66°-Eの間にある。個々の住居跡の平面形態は、統一性が薄れ明確な長方形 (SJ 17) をなすものも現れ、内部施設も貯蔵穴・柱穴の欠如等が認められる。



第404図 集落の変遷(古墳時代後期)

坏は、A1・2類、C類が主体で、従的にB・Dが存在する。この時期の特徴としては、A1、C類が小振りとなり、体部の器高も更に減じて、底部が扁平に近くなることが挙げられ、新段階にはその傾向が一層顕著となる「S」字状口縁のA1・A2類も同様の推移が認められ、口径が11.0～12.0cm、口縁部に最大径をもつタイプが増加し、口縁部の内縁は消失する。また、A1・2類間の識別が困難となるのもこの段階と考えられる。このような傾向は、舞台遺跡B区4号住居跡でも窺うことができる。坏壺模倣のC類は、口縁部が直立するC1類が姿を消し余べて外傾するC2類に占められる。体部が浅く前代に比してやや小振りの形態となる。口縁部中位で内傾気味のものもあり、総じて端部の作りが甘い。古段階から新段階への変化は、法量比の差としても顕著に表われ、古段階(SJ 58-10、11)では口縁部長 $\geq 2 \times$ 体部長、口径12.0cm～13.0cmが主体であるのに対し新段階(SJ 47-10、SJ 61-3)では、口縁部長 $> 2 \times$ 体部長、口径=11.0cm～12.0cmが主体となるように口径・器高共縮小する傾向が認められる。同様の推移を辿る例としては、川越山遺跡SJ1→SJ7への変遷に求められ、内傾するものを未だ含ない段階で、C2類が主体を占める時期である。

高坏は、B類が主体で、口縁部の外反が強い短脚のA1類、坏部が碗状に近いA3類が僅かに認められる(SJ 62-4)。変遷が明確に捉えられるのはB類で、古段階(SJ 58-12)では坏端部の段が不鮮明になりつつあり、脚部は円錐状に開くものが姿を消して柱状下端部分が上端と同値まで絞られ、裾部で一気に関く形態のものが主体となる。新段階では、その傾向が一層強まり坏部は口径が大きく下端の段は消滅する(SJ 47-11)。脚部は柱状となり、下端の絞りが強まる。A1類(SJ 78-14)は、坏部口縁部の外反の度合いが増し、赤彩されなれないものも出現する(SJ 78-15・94-3)。

壺は、球形胴部を呈するA類は稀な存在となり、長胴壺D類が主体となる。器壁はやや薄手のものがみられ(SJ 92-9)、胴部下半に縦位の柄が施されるものも伴出している(SJ 10-1)。A類は、口縁部が直立気味で、口径25cmを上回るSJ 95-39に象徴されるように大型化している。

甔は、胴部全体に丸みが増し、口縁部と胴部の境がより明瞭となる。小型甔の伴出も従前通り認められ、大型甔同様長胴化する傾向にある。把手をもつタイプは急激に減少し、古段階では僅かにSJ 62-7が認められるに過ぎず、新段階では消滅している。

古墳後期の集落は、上記の通り3期6分類の試案を基に第404図のような変遷が考えられる。ここで読み取れることは、和泉期以降、一定量の住居跡が限られた領域内(低台地部)で集合・拡散を繰り返していることと南西と北東の集合(住居跡群)がほぼ同規模で対峙しながら変遷していくことである。また、2軒一組の基本的な構成(基本単位)が成立しそうである点にも注目される。

6世紀以降、吉林古墳群に代表されるように、台地上には埼玉県有数の墓域群が高密度で造営され、越辺川右岸の広大な可耕地を北に臨む低台地部の入西遺跡群(註2)は、まさにその墓域群を形成した基盤としての集落に他ならない。桑原A遺跡は、和泉期以降、5世紀後半～6世紀後半中葉を中心とする集落であるが、此ほどの規模を有する当該期の遺跡を周囲に見いだすことはできない。同様に5世紀後半を中心とした棚田遺跡、7世紀前葉を中心とした塚ノ越遺跡、7世紀後半の金井遺跡など時期の限定されたものが多く、所謂複合集落の性格を帯びたものは少ない。言い換えれば、60～80年周期で近接した位置に集落を移していることになる。これらは、東西に延びる毛凸

台地・坂丁台地の北側稜線を沿うように、台地の最下位を形成する低台地に占地している。可耕地である越辺川右岸の沖積地との比高差は殆ど認められないほどの低地に営まれたことになる。しかし、限られた調査域ではしばしば起り得ることであるが、間断の無い集落変遷はなかなか望めず、欠落する時期が存在する。桑原 A 遺跡の場合、古墳時代後期の集落は 6 世紀中葉以降、その営みは突然終息する。SJ 77 等に代表される 7 世紀前葉の集落が出現するまでの凡そ 50～60 年の間は空白となる。

現段階では、この空白部分を埋める良好な遺跡を坂戸市域に見いだすことはできないが、唯一候補として人西遺跡群の西端に隣接する長岡遺跡が挙げられよう。古墳時代後期を主体とした大規模な集落の存在が想定されており、同時代の若林古墳群は南に隣接している。

編年上で示した実年代は、伴出した僅かな須恵器を目安として位置付けてみた。多少補足すると、最も古く位置付けた SJ 67-23 の坏身は口径 10.0cm と小振りで、陶邑編年に比定した場合、大型化する前段階の範疇として捉えられることができ、SJ 79-3 の無蓋高坏も同様な解釈から TK 47 の枠に含めることが可能であろう。SJ 48-25 の坏身、或いは SJ 50-21 の坏蓋の口径は、それぞれ 11.8cm、13.6cm を計り、MT 15 段階の最多製品として捉えることができる。また、SJ 93-4 も開きが急で顔部が低く押さえられている点は古い要素として捉えられる反面、肩部の張りが弱く、胴部下半から底部に至る荒い鋭削りに加え、肩部の沈線間を櫛による刺突で充填する手法等を考慮すれば TK 47 以降の所産とすべきで、MT 15 の範疇で捉えておくのが妥当と考える。近似した資料は、本庄市夏目遺跡からも出土しており、伴出した須恵器養模倣坏の形態的特徴からはほぼ同時代の位置付けが可能と考えられる。実年代については、稲荷山古墳出土の辛亥銘鉄剣の年代観と、括れ部出土と伝えられる高坏 (TK 47) の位置付けが未だ流動的な状況にあるが、都出比呂志・白石太一郎説を尊重し、土師器との整合性を基にした解釈にたてば、TK 47 の坏を擁する I-1 期は 5 世紀第 4 四半期後半に、MT 15 の蓋を伴出した I-2 期は 6 世紀初頭の年代が考えられる。

土師器は、編年図及び本文で触れた通り入間地域では外来の模倣坏 C 類、特に口縁部が外傾する C 2 類の変遷を中心に考え、故地である児玉地方の資料を参考にした。その結果、桑原 A 遺跡に於ける在地産の坏 A 類、B 類と C 2 類との整合性から、特に I-3 期の位置付けが再確認できた。

(註 1) 住居跡を大型、中型、小型に区別して呼称しているが、特に厳密な基準を設けている訳ではない。

概ね大型は 5 m 以上、中型は 4 m 以上、小型は 3 m 前後を一つの目安としておく。

(註 2) 越辺川右岸の初現集落は、中耕遺跡の縄文中期まで遡るが、その後弥生時代後期～古墳時代前期に出現し 4 世紀後半で再び消滅、凡そ 1 世紀後の 5 世紀後半に桑原遺跡が出現する。

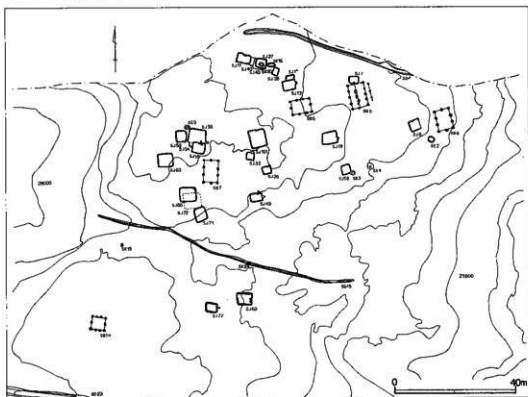
## 2 「7世紀」以降の集落と出土遺物

7世紀以降の集落は、竪穴住居跡24軒、掘立柱建物跡5棟、井戸跡6井、土壇跡2基、溝跡3条が検出されている(第405図)。集落(古代)の最終末が10世紀前後であるから、単純に計算すれば一時期3-4軒を単位として推移していくことになり、極めて小規模な集落構成であったことが窺える。出土遺物の内、8世紀以降の須恵器は、既報告の金井遺跡、塚ノ越遺跡同様、遺跡の北側丘陵に所在する尾山麻跡群から供給されていると思われ、安定した器種構成を示している。ここでは住居跡を中心に、確実に帰属する土器を機械的に8期に分類し、集落の変遷を摸索してみることにする。8期区分は既ね連続するが、7世紀の第1四半期(Ⅱ-1)以降は凡そ1世紀強の断絶があり、以後8世紀中葉から10世紀前後まで継続する。(高、7世紀第1四半期の土器資料については、図版作成上割愛した。本文第77号住居跡、第243図参照)

### 集落変遷と出土遺物

#### Ⅱ-1期 [7世紀第1四半期] ..... (SJ16・77・89)

僅かに3軒が該当するだけで他の遺構は検出されず、SD4・15・23も機能していないと思われ、孤立した存在である。なお時期不明ではあるが、主軸(棟揃い)が等しい総柱建物跡(SB14)が存在した可能性を留めておきたい。SJ77からは口縁部が大きく開く長胴の甕6点が、SJ89からは口径が大きく、器高の低い甕1点が出土している。



第405図 集落の変遷



II-2期 [8世紀2・3四半期] ..... (SJ 12・13・49・72・101, SB 7・14?)

堅穴式住居跡5軒、掘立柱建物跡2棟により構成される。東西に走る3条の溝は機能していたと考えられる。SD 4・15に内包されたSJ 13・49・72・101の4軒は主軸がほぼ等しく、等距離に位置するSB 7を加え、整然とした集落構成を示す。SB 14は単独で存在するが、SB 7との棟揃いは一致する。当然消滅した住居の存在を想定する必要がある。

土師器は、大きく「く」の字に開き、胴部が縦筋削りされる甕と短口縁の小形甕、口唇部が鋭角的で碗状の坏 (SJ 12-3) が認められる他、赤彩された所謂比企形坏の存在も破片で確認できる。

須恵器坏は、口径12.5cm、14.00cm、16.00cmの3種が存在し、共に底部調整は全面回転削りが施される。蓋は天井部と裾部の間に段を有し、カエリをもつタイプで、紐は扁平に近いものが多い。第407図に掲載したSJ 55-1の「比企型坏」は若干時期を上げるべきかもしれない。

II-3 [8世紀第3四半期] ..... (SJ 8・53・63?, SB 4・5)

堅穴住居跡3軒、掘立柱建物跡2棟により構成される。II-2期同様SD 4と15により内包された空間に全ての遺構が存在する。その配置は西側に堅穴住居2軒 (SJ 53・63)、50m隔てて東側に堅穴住居1軒、掘立柱建物2棟から構成されるグループに分かれて存在する。後者は棟揃いが等しく、SB 5の正面が東面する。対峙するSB 4、SJ 8を加えた構成は明確な一つの単位を示している。II-3～II-4段階は、土師器供膳器が急激に減少し、須恵器にその任が移行する段階と思われるが、桑原遺跡では絶対量が少ないためその傾向を明確にすることができない。僅かに、カエリを消失した須恵器蓋が一定量出土しているが余てII-3段階と考えられる他、前代に比して須恵器供膳器の法量の縮小化が始まる。(SJ 63-4)。埴山IV期 (HIV期) に相当する。

II-4期 [8世紀第4四半期] ..... (SJ 18・55・63)

堅穴住居跡3軒で構成される。溝により内包され、東西に分かれて分布する配置は、II-3段階と同様な傾向が窺える。特に、西側に位置する2軒は、SJ 53→SJ 55の新旧交替、SJ 63の存在を認めざるを得ない。このような傾向は、II-3期→II-4期の時間幅がかなり近接乃至は、一部重複した結果であろう。

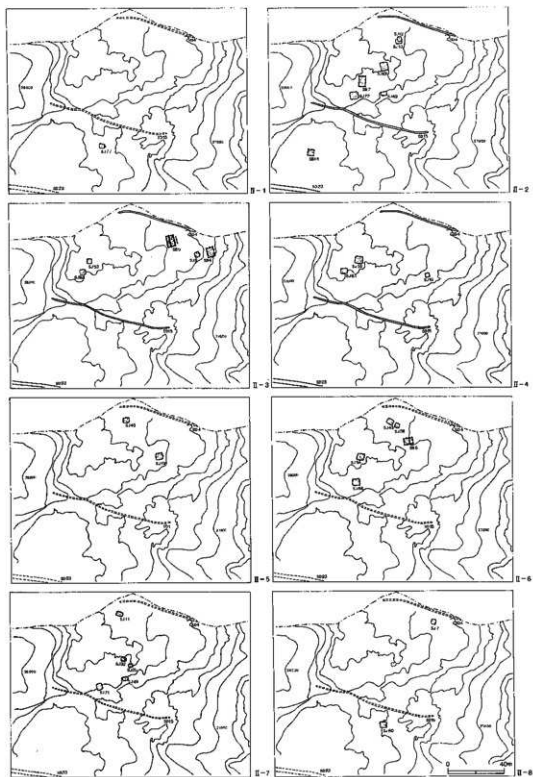
II-5 [8世紀第4四半期～9世紀第1四半期] ..... (SJ 19・63)

堅穴住居跡2軒が検出されたに過ぎないが、II-4期との関わりかたが明確でないため集落の構成は定かではない。溝の機能は既に消滅していると思われる。

土師器は煮沸形態だけとなり、供膳器は須恵器に限られる。また、須恵器供膳器の法量の縮小化が進む。SJ 19-2は、底径6.6cm、糸切り後の再調整はない。

II-6 [9世紀第2四半期] ..... (SJ 38・43・54・66, SB 6)

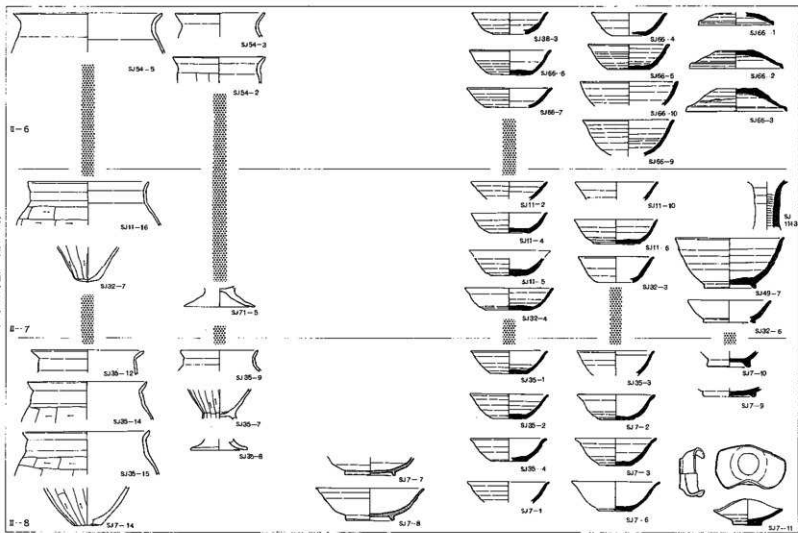
堅穴住居跡4軒、掘立柱建物跡1棟により構成される。東端にSB 6を配し、4軒の堅穴が西に弧を描く配置で中央に広場を設ける。これまでの集落構成同様、溝跡を意識した分布が認められる。



第406図 集落の変遷(古代)



第408圖 轎車圖(5)



ことから、旧溝が形を変え「垣」として機能している可能性も考えられる。

土師器の煮沸器は、最大径を胴部上半にもち、口縁部が大きく開く「く」の字壺の他、小形の台付甕が出現する。須恵器の供膳器の資料は前代に比べ飛躍的に豊富となる。坏は小形化が進み、口径12.0cm～13.0cmが主体となり、法量比も口径≤底径×2となる。また、底面は切り離し（糸切り）後の調整が施されないものが大勢を占める。蓋も小型化する傾向にあり、12.0cmのものも現れる。また、肩部の寛削りが省略され、天井部は鈕を持たずに糸きり痕をそのまま残す。

Ⅱ-7期【9世紀第3・4四半期】……………（SJ11・32・35・49・71）

堅穴住居跡4軒により構成される。Ⅱ-6期の占地とほぼ同じ空間を使用しているが、畝は逆に東にとる分布を示し、広場を西に求めており、旧溝を意識した配置が看取される。

土師器甕は「コ」の字状口縁が主体となり、最大径を胴部上半に、胴部整形は横寛削り、底部は急激にすぼまり底面は所謂「砂底」を呈し、整形痕は認められない。小形の台付甕も業同様「コ」の字状口縁をなす。須恵器坏は、体部の立ち上がり方が更に緩やかとなり。法量比は口径=底径×2、口径=12.0cmが主体となり、明らかに、小型化する傾向にある。底面は、糸きり後の調整はない。鳩山Ⅷ期（H-Ⅷ）に相当する。

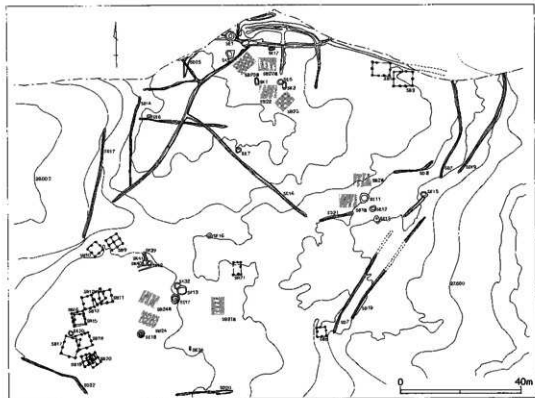
Ⅱ-8期【9世紀第4四半期～10世紀第1四半期】……………（SJ7・35・60）

堅穴住居跡3軒により構成される。南北に40～50mの間隔をもって分布するが同時期にどのような集落構成であったかは不明。明確な時期が提示できるものは少ない。

土師器甕の口縁部は、明瞭な「コ」の字状をなし、胴部整形は横寛削り、底面は砂底をなす。須恵器坏の口径は、12.0～12.5cmに集中し、法量比は、口径>底径×2となり、底部は極端に小型化する。SJ7出土の灰釉陶器（SJ7-8）は腰部に緩やかな張りがあり、直線的に「ハ」の字状に開くプロポジションをもち、付け根高台の外側は付け根部分から高台の上半を外傾し、「く」の字状の後を作り出す光ヶ丘1号窯式に比定できる。なかでも、高台の内側が外傾しながら下半を内傾したものを三日月高台第1類とし、10世紀の後半の年代を与えK-90並行としており、実情とはかなりの差が生じてしまう。ここでの年代観は須恵器および土師器の編年観を基に、鳩山Ⅷ期（HⅧ期）が相当すると考えられる。

### 3 「中世」以降の集落変遷

検出された遺構は掘立柱建物跡14棟 (SB 1、2、8-13、15-21) 井戸跡12井 (SE 1、5-7、11-13、15-19)、溝跡 (SD 15と23を除く全て) である。遺物は掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡から内耳鍋・播鉢等の存地産製品、刀子、硯、北宋銭などが出土しているが、総じて微量である。これらの遺物の内、SE 5の瀬戸・美濃産天目茶碗、緑袖小皿からは概ね15世紀中葉-後半の年代観を得ることができる。当該期の遺構の配置は第409図に示す通り、2間×3間のSB 1・2が南西の台地縁辺に、SB 17は台地の北西に、SB 21は台地の中央部に位置する。前者の2棟は桁行を南北にすることから同時存在が想定できる。また、2間×2間の正方形を平面プランとする掘立柱建物跡9棟および2間×3間のSB 18はSB 9・19同様総柱建物と同様の機能をもった建物の可能性が高く、倉庫等の収納施設が考えられる。SB 11・12およびSB 19・20の新旧関係と主軸が異なるSB 17の存在から少なくとも3期以上の変遷が考えられる。この他、中世に帰属する陶器類が集中する箇所が幾つか認められることから、発掘調査により検出できなかった掘立柱建物 (礎石持ちの建物を含む) の存在が相当数考えられる。井戸跡は、掘立柱建物群の南に3井 (SE 11-13)、北西に3井 (1・5・7)、南東に3井 (17-19) が確認でき、他は全て単独で存在する (6・7・16・20)。また、建物群、井戸、土壌を有機的に結び付ける溝の存在は、掘立柱建物群の主軸方位を規定する大きな要因となっている。また検出された遺構全てが溝の内部に存在することも桑原 A 遺跡の大



第409図 中世の集落

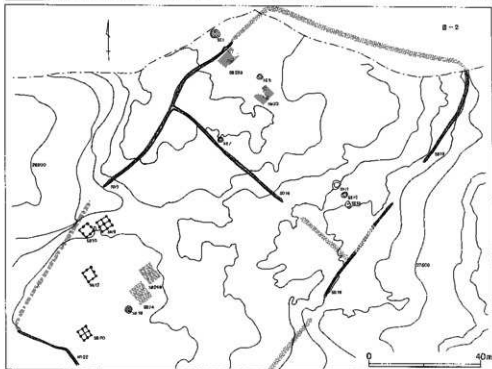
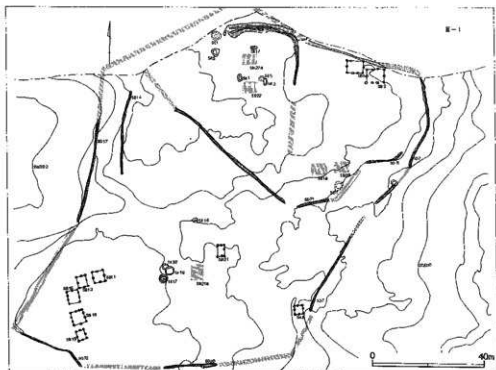
きな特徴といえる。これらの情報を基に、建物群の推移を想定すると次の様な変遷が考えられる。

Ⅲ-1期 掘立柱建物跡の軸線が概ね南北を指す9線(SB1・2・8・11・13・16・18・19・21)と、本来存在していたと想定される母屋など5線(SB1a・2a・21a・22・22a=スクリーン部分)から構成され、垣内として機能していた範囲は、SD7・19、SD14・17の二重に巡る溝により内外の明確な区別がなされていたと考えられる。更に、その中央を東西に走るSD8・16・21により南北に分けられる。南および北の現界はSD4・20が相当するものと考えられる。北の遺構分布は崖線に沿ってSB1・2がSD4を意識して位置する。これら2線は北面する崖線上の位置関係から母屋の可能性は薄く、倉庫等の機能が考えられる。SB1a・1bとしたのはSE11の位置関係から礎石立ち母屋の存在を想定した(註1)。西北部は有力な井戸跡の存在とSD1の区画溝の在り方、当該期の遺物集中区の存在からSB22a、22bの存在を想定した。南西に集中する5線から構成される倉庫群(2×2間)は「L」字状の配置で、広場として大きく残した東に、SB21とSE17・19が存在する。また、付近に遺物の集中箇所がみられることからSB21aの存在を想定した、同一主軸のSB8も倉庫としての機能が考えられる。集落の北半を東西に区画する溝跡は、連続せず、内部には4箇所の寸断が認められる。これらを出入り口とすれば全て東側に集中して設けられたことになり、南に位置する建物群との境界を明確なものとしている。

Ⅲ-2期 掘立柱建物跡の線揃いがN-25°-40°-Wを指す4線(SB9・10・12・20)と、想定した2線(SB23・23a)により構成される。想定根拠は、明確な井戸跡の存在と遺物の集中箇所による。次に、溝跡を中心とした垣内の範囲を考えてみると、溝により区画される領域は、ほぼⅠ期のそれに近く、建物群の線揃いに概ね等しいSD9・19・22により東西80m、南北140mの長方形区画が考えられる。内部は東西に走るSD16により南北に二分され、北の領域には建物群の検出はない。SE7の存在から、周囲にSB23・23aを想定してみた。或いは、SE12・13の周囲にも想定できるかも知れない。南の領域はⅢ-1期にはほぼ近い規模の倉庫群と規模の大きなSE18の存在から母屋にあたるSB24・24aの2線を想定した。Ⅲ-2期は長方形の外囲いを基調として、内部もそれに準拠した方形区画により垣内が構成されていたものと考えられる。南半の溝囲いについては、地形に則した想定で根拠はない。

Ⅲ-3期 SB17、SE20が最も新しい遺構として認識されることから設定を試みた。SD13・17の方位と一致することからⅢ-2期同様南北に長軸をもつ長方形区画が想定可能である。しかし、所産時期を示す資料の欠如、および同時存在の遺構を想定するための情報量不足のため割愛した。一方、SD19の東には、外側で東西50m、南北60m以上、内側で東西33m、南北50m以上の規模を有し、二重の溝による方形区画が存在する(第411図)。SD19の一部を埋め戻して構築されていることから最も後出の遺構であることは明らかである。出土遺物は、僅かな染付の茶碗と内耳鍋が検出されたに過ぎず、概ね近世として認識しておく。SB17、SE20との同時存在を仮定した場合、西半の溝跡の多くは既に機能を停止していたと考えられる。

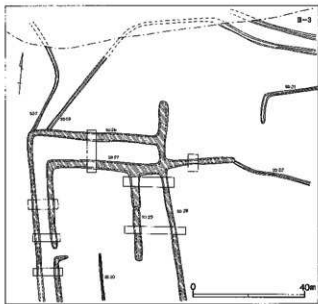
Ⅲ-1期-Ⅲ-3期の実年代については、遺構内の出土遺物に概ね1世期の時間幅が存在することをまず念頭に入れて於かなければならない。その対応として、遺構の新旧、遺物の出土位置(層



第410図 集落の変遷(中世)



位)を的確に捉え、遺構の下限として指標となる資料を最大限尊重していく他はない。SE 1 を例にとれば、常滑の甕は14世紀後半～15世紀初頭をSE 1 の上限に、16世紀前半の瀬戸・美濃製の播鉢は下限となる。また、SJ 12 に含まれている瀬戸・美濃製緑釉小皿2点は15世紀後半と考えられるが、製作年代は明確な法量差から2→3の新旧が存在する。これらは何れも当時としては所謂「貴重品」に属するもので、世代を越えて珍重され引き継がれる製品と考えられる。このように、製作年代を異にする製品が同時に存在しても極自然である場合が多々あるわけ



第411図 集落の変遷(近世)

で、編年観もとりわけ「アバウト」なものとなっていく。Ⅲ-1期は、SE 5 出土の瀬戸・美濃製大目茶碗、緑釉小皿から15世紀中葉～後半の年代が考えられ、Ⅲ-2期はSE 1 出土の瀬戸・美濃製の播鉢、SE 11 出土のカワラケ、内耳鍋、播鉢等の在産の資料から16世紀前半の年代が考えられる。Ⅲ-3期は染付けなどから17世紀以降が考えられるが、遺構の配置を想定できるほど明確ではない。

構跡、井戸跡を中心に、多くの建物を想定し、15・16世紀の村落形態の復元を試みてみた。溝跡の性格については、獣害からの防衛、外敵からの防衛、戸別の区画等が考えられるが、桑原遺跡のそれは、浅い筋掘り風の施設であることや建物跡の練揃いに整合することから「垣内」としての解釈ができ、「溝」としての機能より「境」を強く意識した施設として理解される。一方、桑原A遺跡が位置する低台地の南、比高差10m～15m程の毛呂台地上には、土塁を伴う館跡の存在が早くから知られている。同時代の所産とすれば、当該地域における領主居館とすることもでき、居館を中心とした同心円状の支配構成が想定できるかもしれない。その場合、桑原A遺跡の位置付けは、居館に比較的近接した位置関係にあり、領主と取巻を受ける側との中間的な階層と考えられる。また、村と館が関わりをもって存在する事例は、主として15世紀以降の存在形態と考えられており、館のみ、村のみは概してそれに先行する形態と考えられる。一般的には、13世紀末～15世紀後半期の社会背景を反映して、村の形態は散村～集村に向かう傾向にあるとされ、桑原A遺跡は、潤度、散村から集村に向かう段階の段階として捉えることができるのかも知れない。

(註1) 「一進単絵」などで表現される土塁の礎石は人頭か、それ以下の自然石を用いており、廃絶後礎石が原位置を保つことは少ないと思われる。発掘調査の事例としては、広島県福山市草戸千軒町遺跡が挙げられる。(3間×4間の規模で雨落ち溝を伴う)

参考文献(1~3)

- 田邊 昭三 1966「陶邑古窯址群Ⅰ」平安学園考古学クラブ
- 谷井 彪他 1973「田木山・弁天山・舞台・宿ヶ谷戸・附川」埼玉県遺跡発掘調査報告書 第5集
- 田中 一郎 1976「上谷遺跡」坂戸市教育委員会・東坂戸団地遺跡調査団
- 井上 肇他 1979「舞台」埼玉県遺跡発掘調査報告書 第18集 埼玉県教育委員会
- 中村 倉司他 1979「宇佐久保遺跡」埼玉県遺跡調査報告書 第38集
- 田邊 昭三 1981「須恵器大成」角川書店
- 郡山比呂志 1982「前期古墳の新占と年代論」『考古学雑誌』第67巻第4号 日本考古学会
- 利根川章彦 1982「古墳時代集落構成の一考察」土曜考古第5号
- 田口 昭二 1982「美濃窯の灰軸陶器と緑軸陶器」考古学ジャーナル211
- 松下 正司他 1983「草戸千軒町遺跡」広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
- 酒井 清治 1984「関東地方」『日本陶磁の源流』-須恵器出現の謎を探る-柏書房
- 大和 修他 1983「若宮台」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告 第28集
- 立石 盛詞 1983「後張本文編Ⅱ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告 第26集
- 長谷川 勇他 1985「夏目遺跡発掘調査報告書」本庄市埋蔵文化財調査報告書 第5集2分冊
- 白石太一郎 1985「年代決定輪②」『岩波講座日本考古学』1 研究の方法
- 富田 和夫他 1985「立野南・八輪太神南・惣野太神南・今井遺跡群・丁田・川越田・梅沢」  
埼玉県埋蔵文化財調査報告書 第46集
- 斉藤 孝正他 1985「愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅳ)」愛知県教育委員会
- 加藤 恭朗他 1987「古代のさかど」坂戸市教育委員会
- 坂本 和俊他 1987「東国における古式須恵器をめぐる諸問題」第8回三県シンポジウム 第Ⅱ分冊  
千曲川水系古代文化研究所他
- 坂口 一 1987「群馬県における古墳時代中期の上器の編年」『研究紀要4』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 恭朗他 1987「附島遺跡発掘調査報告書Ⅱ」坂戸市教育委員会
- 加藤 恭朗他 1987「古代のさかど」坂戸市教育委員会
- 酒井 清治 1988「渡来人の移住と模倣土器」『季刊考古学』24
- 佐々木保俊 1988「城山遺跡発掘調査報告書」埼玉県志木市遺跡調査会
- 加藤 恭朗 1988「附島遺跡発掘調査報告書Ⅲ」坂戸市教育委員会
- 加藤 恭朗 1988「坂戸市遺跡群発掘調査報告書 第1集」坂戸市教育委員会
- 比田井克久 1988「南関東五世紀土器考」『史館』第20号 史館同人
- 渡辺 一他 1988「鳩山窯跡群Ⅰ」鳩山窯跡群遺跡調査会
- 浅野 晴樹 1988「関東における中世生産土器について」『研究紀要4』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 谷井 彪他 1988「埼玉の中世城館跡」埼玉県教育委員会
- 水藤 真 1989「村や町を囲うこと」国立歴史民俗博物館研究報告 第19集
- 疑問 孝志 1989「金井遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告 第86集
- 川口 潤他 1989「本郷前東遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告 第78集
- 立石 盛詞 1989「御伊勢原」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告 第79集
- 赤穂 浩一 1989「坂戸市棚田遺跡の調査」第22回遺跡発掘調査報告会 埼玉考古学会
- 大谷 徹他 1989「東国における後・終末期古墳の基礎的研究(1)」『研究紀要5』埼玉県埋蔵文化財調査事業団

栗田

- 中村 倉司 1989 「関東地方における磁・大型甗・須恵器出現時期の地域差」『研究紀要5』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 富田 和夫他 1989 「中山谷遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告 第76集
- 渡辺 一 1990 「南比企窯跡群の須恵器の年代」『埼玉考古第27号』
- 峰岸 純文他 1990 「中世居館」季刊 自然と文化 30
- 宮瀧 文二 1991 「堂山下遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告 第99集
- 益間 孝志 1991 「塚の越遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告 第101集
- 長谷川 厚 1991 「土師器の編年 関東」『古墳時代の研究』6 土師器のと須恵器 鎌山閣
- 岩瀬 諒 1991 「橋詰・砂田前」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告 第102集
- 村松 篤 1991 「焼谷・権現堂・権現堂北・山ノ腰遺跡」川本町発掘調査報告書 第5集

### 3 「円窓土器について

桑原 A 遺跡46、95号住居跡から出土した坏および小型甗の中には焼成前、体部下半あるいは胴部上半に鋭利な筥状工具により円形にくりぬかれたものが含まれている。このような所謂「円窓土器」は、3・4世紀に盛行し葬送儀礼に用いられた底部穿孔土器と同列に扱われている胴部穿孔土器とは明確に区別する必要がある。また、尾張地方の弥生時代後期に散見される「円窓土器」の系譜に連なるものか否かも現状では定かでない。一方、その性格についての解釈は、胴部穿孔・底部穿孔土器が比較的容易であるのに対し、「円窓土器」は用途・機能面ではほとんど未解決な土器と云ってよい。また、「円窓」を施された土器が、特定の目的をもって製作された器種・形状を採用せず、ごく一般的な日常の土器組成に組込まれていることも、その大きな特徴といえる。ここでは、関東地方を中心に管見する範囲の資料（第412回）を集成し、若干の検討を加えておきたい。

1 坏（ニツ木遺跡118号住居跡19 群馬県佐波郡境町大字三ツ木字白光坊）

〔口径12.0cm：器高3.5cm：穿孔位置 体部上半：穿孔径2.6×3.8cm：穿孔 焼成前〕

4世紀から11世紀までの集落跡で、235軒が調査。時期：8世紀後半

2 坏（桑原 A 遺跡46号住居跡5 埼玉県坂戸市堀込字桑原）

〔口径12.2cm：器高4.6cm：穿孔位置 底部：穿孔径6.7cm：穿孔 焼成前〕

出土位置はカマドと対峙する東壁下、床面直上で出土。一括廃棄と思われる。時期：6世紀初頭

3 坏（桃原遺跡3号住居跡16 群馬県渋川市行幸田）

〔口径12.2cm：器高6.0cm：穿孔位置 体部下半：穿孔径1.1×1.6cm：穿孔 焼成前〕

住居全体の50%程の調査であるが、ころばし根太、貯蔵穴、石組の伊跡など主要な施設が遺存。遺物は貯蔵穴に集中して認められる。カマド出現前夜の集落と思われる。時期：5世紀後半

4 小型甗（大井東山遺跡19号住居跡19 千葉県東葛飾郡沼南町大井）

〔底径3.3cm：器高11.8cm：穿孔位置 胴部下半：穿孔径3.6×5.0cm：穿孔 焼成後〕

舌状台地上に占地。5世紀末～7世紀末の住居跡が35軒が調査。19は柱穴内から出土しており、柱材を抜き取った後埋置されたもので、かたづけ行為後の鎮魂的色彩をもつものと考えられる。

同遺跡内45号住居跡からは胴部上半に径17cm程の穿孔を有する胴部中位で打ち欠いた甕が出土している。「カマド形土器に類似した壘形土器」と呼称しているが、火焼を受けた痕跡はない。

同様な例は手賀沼北岸の我孫子市日秀西遺跡に認められる。時期：6世紀前半

5 小型壘 (種ヶ谷津遺跡10号住居跡13 千葉県千葉市生実町)

【口径12.0cm；底径5.4cm；器高13.5cm；穿孔位置 胴部中位；穿孔径2.37×1.64cm；焼成後  
路線内ではあるが台地上に6世紀代の住居跡11軒が調査された。貯蔵穴、カマド周辺から住居構  
成員の必要量に相当する煮沸具、供膳具が集中して検出されたが、13は貯蔵穴脇から単独で出  
土。特異なものは含まれていない。時期：6世紀初頭

6 小型壘 (腰巻遺跡14号住居跡4 千葉県佐倉市腰巻)

【口径6.3cm；底径4.2cm；器高14.0cm；穿孔位置 胴部下半；穿孔径3.5×3.0cm；焼成前]  
同時期の集落は4軒で構成。台地平坦部を避け、台地縁辺あるいは斜面に占地。調査者は住居と  
はせず、農作業用の出先の小屋と捉えている。時期：8世紀初頭

7 小型壘 (溜ノ台遺跡1号住居跡4 栃木県小山市大塚町溜ノ台)

【底径5.0cm；穿孔位置 胴部下半；穿孔径3.5×5.4cm；穿孔 焼成後]  
4世紀後半以降の方形周溝墓と集落により構成。方形周溝墓を含め器台が欠落。4は多くの高坏  
と共に貯蔵穴周辺から出土。時期：5世紀初頭

8 小型壘 (二の宮貝塚4号住居跡35 茨城県稲敷郡江戸崎町佐倉)

【口径14.20cm；底径6.90cm；器高17.00cm；穿孔位置 胴部上半；穿孔径5.1×7.9cm；穿孔焼成  
前] 古墳時代後期～平安時代の集落跡で、13軒中古墳時代後期は5軒。土器組成は球形胴部の  
壘、多量の小型壘、口縁部が外傾する須恵器蓋横做坏、少量の短頸壘、高坏、壘形で把手を有す  
る甕により構成される。コーナーに寄せて造られた壘の脇に貯蔵穴を設ける一般的な住居跡。貯  
蔵穴内から出土。時期：5世紀末～6世紀初頭

9 小型壘 (森戸遺跡居館跡出土 茨城県那珂郡那珂町額田北郷)

【口径14.2cm；底径7.1cm；器高22.2cm；穿孔位置 胴部上半；穿孔径7cm；穿孔 焼成前]  
遺跡は、4世紀後半に構築された所謂豪族居館跡とその後形成された集落跡により構成される。  
小型壘7は居館跡の南北堀上層から多量の小型壘、埴、高坏とともに出土している。居館跡廃絶  
後も祭祀行為が継続していたと考え、用途もその範疇で捉えられている。時期：6世紀初頭

10 壘 (荒川附遺跡58号住居跡 埼玉県蓮田市関山4丁目)

【口径16.0cm；底径5.4cm；器高23.5cm；穿孔位置 穿孔径8.8cm；穿孔 焼成前]  
路線内の為詳細不明。調査区内4～5軒が調査。カマド周囲に完形の壘、甕が集中。カマド脇か  
ら出土。時期：6世紀初頭(註1)

11 小形壘 (河越館址1号井戸跡 埼玉県川越市上戸)

口径14.00cm；底径8.7cm；器高19.4cm；穿孔位置 胴部上半；穿孔径6.2×7.8cm；形状 円形；  
穿孔 焼成前] 古墳時代後期～平安時代の集落跡で、多くは「河越館址」造営に伴い破壊され  
た。井戸跡内からは、長胴の壘、碗状の坏、無頸壘が出土している。時期：6世紀半

12 小型壘 (桑原A遺跡95号住居跡34 埼玉県坂戸市堀込字桑原)

- [口径14.5cm：底径6.9cm：器高19.5cm：穿孔位置 胴部上半：穿孔径5.8×8.2cm：焼成前]  
古墳時代後期の集落跡で、当該期の住居跡82軒が調査。カマド、貯蔵穴を中心に煮沸・供膳土器が集中して出土。34はカマド内から出土。炉跡を併設する。時期：6世紀初頭
- 13 小型甕 (舞台遺跡 A-49号住居跡 6 埼玉県東松山市大字田木字舞台)  
[口径12.4cm：底径7.4cm：器高19.2：穿孔位置 胴部上半：穿孔径5.9×8.4cm：焼成前]  
古墳時代後期の集落跡で、6世紀時代の住居跡80軒が調査された。A-49号住居跡は貯蔵穴だけが遺存。甕、甕など煮沸形態の土器と共に出土。時期：6世紀初頭
- 14 壺 (大山遺跡 D区 2号土壘 4 埼玉県北足立郡伊奈町小室字大山)  
[口径13.4cm：底径7.2cm：器高21.4cm：穿孔位置 胴部上半：穿孔径5.4×8.0cm：焼成前]  
古墳時代前半～奈良・平安時代まで継続する集落跡で各時期10軒前後の比較的小規模な構成。D区は北側斜面に位置し、2基の土壘の周囲に遺構はない。甕、甕が伴出する。時期：6世紀初頭
- 15 甕 (熊谷遺跡 3号住居跡40 群馬県渋川市行幸田)  
口径21.4cm：底径8.2cm：器高25.5cm：穿孔位置 頸部：穿孔径0.9cm：穿孔 焼成後]  
詳細は14参照 一对で認められることから釣り提げる目的か、補修用と考えられる。
- 16 壺 (畑田遺跡10号住居跡 1 茨城県東茨城郡鉾田町畑田)  
[口径18.2cm：底径8.8cm：器高23.5cm：穿孔位置 胴部上半：穿孔径8.2cm：穿孔 焼成前]  
出土位置はカマド東袖。周囲から甕、甕等の器種を中心とした多量の完形土器と共に出土。高坏、坏の組み合わせが考えられる。時期：6世紀前半 (初頭)
- 17 甕 (後張遺跡39号住居跡 8 埼玉県児玉郡児玉町下浅見字下モ田)  
[口径16.6cm：底径6.0cm：器高28.4cm：穿孔位置 胴部上半：穿孔径6.3cm：穿孔 焼成後]  
古墳時代前期から後期まで継続する集落跡で、188軒が調査。貯蔵穴とその周囲から坏、高坏、甕、甕など概ね一軒の需要を満たす煮沸・供膳用土器群と共に出土。時期：6世紀前半
- 18 小型甕 (舞台遺跡 A-51号住居跡 2 埼玉県松山市大字田木字舞台)  
[口径17.0cm：底径6.0cm：器高23.5cm：穿孔位置 胴部中心：穿孔径8.3×9.1cm：焼成前]  
貯蔵穴とその周囲から坏、高坏、碗、甕、甕など概ね一軒の需要を満たす煮沸・供膳土器群と共に出土。時期：6世紀初頭
- 19 甕 (多摩ニュータウンNo207遺跡 2号土壘 東京都八王子市南大沢)  
[口径25.6cm：底径10.0cm：器高28.0cm：穿孔位置 胴部下半：穿孔径6.0×6.2cm：焼成後]  
南傾する緩斜面に6世紀代の住居 5軒、同期の埋壘土壘 3基が検出されている。埋壘土壘は集落から距離を置き、ほぼ南北に直線的に配されている。2号土壘は甕と甕が検出されているが、前者は上半部を打ち欠き疑似口縁としたものを逆位で据え置かれ、本体土器として使用。甕は転倒しているが被覆土器として使用したかは不明。明らかに埋葬時の使用。時期 6世紀前半
- 20 甕 (古川端遺跡10号住居跡 6 埼玉県本庄市大字栗崎字古川端)  
[口径25.0cm：底径10.0cm：器高31.7cm：穿孔位置 胴部中心：穿孔径11.4×13.2cm：形状不整形：穿孔 焼成後] 古墳時代中期～奈良・平安時代の集落跡で50軒を調査、内12軒が中・後期に属する。土器組成は、甕、小形甕、高坏、坏、甕から構成される。甕は全て長胴化するとか

ら比較的新しい様相を示すが、高坏の坏部及び円錐状に延びる脚部の作り、須恵器蓋模倣の坏は概ね古い様相が看守される。時期：6世紀初頭

21 小型台付甕 (芳賀東部団地遺跡360号住居跡4 群馬県前橋市鳥取町他)

[口径14.6cm；底径10.4cm；器高19.6cm；穿孔位置 胴部上半；穿孔 焼成後]

奈良・平安時代中心の集落跡。台付甕は壁際、床面直上で単体で出土。時期：9世紀中葉

22 小型台付甕 (海外A・B遺跡11号住居跡 群馬県箕郷町生原)

[口径9.1cm；器高(12.6cm)；穿孔位置 胴部上半；穿孔径2.2cm 穿孔 焼成前]

台地上に占地。古墳時代後期と9～11世紀の集落。東甕の小型住居で、台付甕は住居の南壁下から出土。時期：9世紀中葉

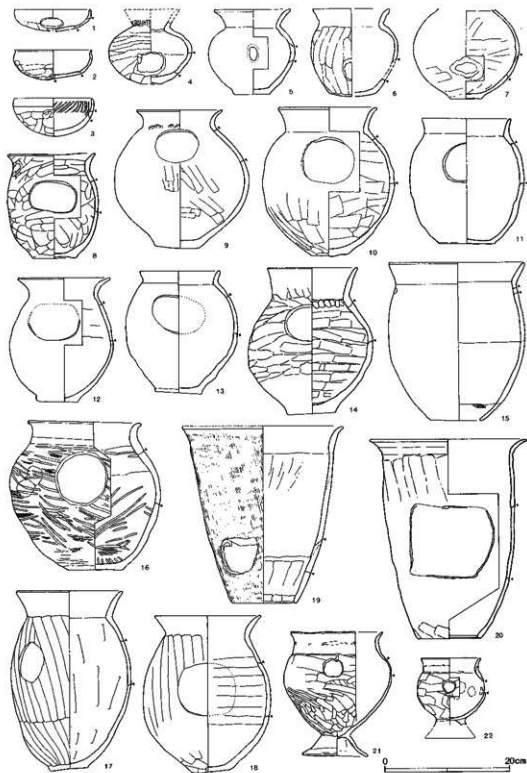
以上、22の事例を挙げてみた。その他、今回の集成に漏れたが、焼成後穿孔の例として埼玉県大里郡岡部町砂田遺跡62号住居跡5の壺(胴部上半に穿孔)が、児玉町川越田遺跡SJ1-52の高坏(脚部に焼成前穿孔)が挙げられる。時期は6世紀初頭及び中葉である。特異な器形に穿孔する事例として、茨城県東茨城郡東海村塚越遺跡の一括資料の中に胴部穿孔の弧形土器が挙げられる。共に、廃絶時期は6世紀初頭と考えられる。所謂「円窓土器」にはいくつかの共通項が認められる。無論22(23)例の内には、個々の報文中で触れられた通り、葬送儀礼で用いる仮器の器として理解すべき4、～7、釣り提げれることを第一義的な使用と思われる15が含まれている。これらを除外した上で、共通項を整理すると、(1)「円窓」が出現する時期、(2)「円窓」が施される器種、(3)「円窓」が施される位置、(4)「円窓」の形状、(5)「円窓」を施す時期、(6)「円窓土器」の出土状態等が挙げられる。

(1) 出現時期については、蕨田市荒川附遺跡58号住居跡、伊奈町大山遺跡2号土壺、坂戸市桑原46、95号住居跡、東松山市舞台遺跡49、51号住居跡、児玉町後張遺跡39号住居跡、本庄市古川端遺跡10号住居跡など埼玉県内のほぼ全域から良好なセット関係が把握され、概ね5世紀末～6世紀前半の年代幅が考えられるが、検出されるのはこの段階に限られ、一過性的現象である。同様な傾向は渋川市籠屋遺跡3号住居跡、那珂町森戸遺跡居館跡、鉾田町畑田遺跡など群馬、茨城両県でも確認することができ、北関東に集中する傾向にある。先行する例として5世紀初頭に位置付けられる栃木県小山市沼ノ台遺跡1号住居跡4が、後出例として9世紀中葉の群馬県芳賀東部団地遺跡360号住居跡が挙げられるが、器種、穿孔時期に問題が残るようである。

(2) 器種は、上記の5世紀末～6世紀前半に限定するならば小型壺(甕)、甕、坏に限られる。特に、整形は共通しており、斲削り後の器面は入念に磨かれたものが多い。後張遺跡では縦斲削り後の器面に、焼成後穿孔されており特異である。

(3) 穿孔位置は、胴部上半・中位に集中し、頸部或いは胴部下半にも稀に認められる。しかし、それらは焼成後に限られ、出現時期についても、先行・後出段階に後者が認められることから、本来は、胴部上半或いは中位に限定されるものと思われる。

(4) 形状は、正円か楕円(必ず横位を長軸とする)にほぼ限られるが、先行・後出段階には不定形のもの为主体となる。その要因は穿孔する時期にあり、当然焼成前の穿孔が前者、焼成後が後者の穿孔である。



第412図 円窓土器集成

(5) 穿孔時期は、焼成前に限られ、鋭利な鉋状工具を用い一気にくりぬかれている。後張遺跡39号住居跡出土土器は焼成後の穿孔ではあるが、比較的丁寧で形状は円形である。

(6) 出土状態は、周溝墓、土壌墓など明らかに葬送儀礼に用いられた場合を除き、住居構成員が必要とする数量の煮沸具、供膳具に混存する形をとることは明らかである。出土位置はカマド周囲の他、貯蔵穴内に一括出土で検出される場合にはほぼ限られる。抜き取られた柱穴内に埋置された大井東山遺跡例などは極めて稀であるが、「円窓土器」を考える上で示唆的な資料となる。

以上、(1)～(6)の事実から古墳時代後期初頭の限られた時間帯の中で受容したことは明らかである。また、このように画一的な内容の背景には、西からの新規の文化に付帯して招来した「信仰・儀礼」の存在が読み取れるのである。検出された地域を東日本に限定した場合、関東地方、強いていえば北関東に集中する傾向にある。これらの地域には、カマドの導入をいち早く招来した地域を多数包含しており、初期須恵器の導入、在地須恵窯の出現する地域を内包していることも無縁ではなかろう。その傍証として、関東地方の広範の地域で「円窓土器」の出現時期が5世紀末～6世紀前半に集中することも偶然とは考え難い。用途、機能面についての記述は、僅かに茨城県那珂町森戸遺跡において検出された居館跡南東堀一括出土の土器群に対して、祭祀色の強いものと述べた、に過ぎない。また、東松山市舞台遺跡では尾張地方の弥生時代後期の「円窓土器」との関連について付言さに留まっている。現段階では理に合った解釈の方法を持ち合わせていないが、極めて稀な例として、愛知県名古屋市錦神社遺跡出土資料の中に須恵器製の割部中位に焼成前の穿孔が施されている例が報告されている。時期は概ね6世紀であろうか。この錦神社遺跡の壺を介在として、やや時期を遡って類推すると、関東地方に於ける初期須恵器、初期壺導入段階に同時にたたらされた「竈神」信仰の一部を成すものと想定したい。従来、竈神信仰（偶像としての）の対象と考えられてきたのは、竈中央に設置された「支脚」に他ならないが、本来は支脚と対をなすもう一方の偶像が存在したと考えてみたい。もしこのような仮定が可能であれば、壺導入の段階の壺、甑、支脚という煮沸機能を満たす為に不可欠な土器組成の一部として、実用的な「偶像」の一方が命脈を得て受け継がれ、他方は招来した文化を忠実に模倣した段階のみ使用されたに留まり、急速に廃れていったものと考えられる。このような解釈に立てば、「円窓土器」が堅穴住居跡内の厨房の領域である壺から貯蔵穴に至る狭い範囲から検出されることも一つの傍証となるかも知れない。

何れにしても、全てが推測の域をでない内容であり、今後の類例の増加とその出土状態を逐一検証していかなければならないであろう。特に、関東地方と畿内を結ぶ経路の資料が不可欠となる。

(註1) 現在整理中。木戸春夫1992「荒川附遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第112集として刊行予定

#### 参考文献

- 斉藤 忠他 1974「茨城県資料 考古資料編 古墳時代」茨城県史編纂室  
城近 憲一他 1977「河越館址発掘調査報告書」川越市教育委員会  
小久保 徹他 1978「東谷・前山2号墳・古川堀」埼玉県遺跡発掘調査報告書 第16集 上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書 埼玉県教育委員会  
井上 啓他 1979「舞台」埼玉県遺跡発掘調査報告書 第18集 埼玉県教育委員会  
谷井 彪他 1979「大山」埼玉県遺跡発掘調査報告書 第23集 埼玉県教育委員会



- 高橋 杏二 1980「畑田遺跡」茨城県教育財団調査報告Ⅴ
- 田辺 昭三 1981「須志器大成」角川書店
- 比田井克仁 1982「多摩ニュータウン遺跡 昭和56年度」(財)東京都埋蔵文化調査センター
- 立石 盛河他 1983「後張」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告 第26集
- 中東 彰了他 1984「芳賀東部団地遺跡Ⅰ」前橋市教育委員会
- 大木神一郎 1985「三ツ木遺跡」群馬県教育委員会(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 富田 和丈他 1985「立野南・八幡大神南・惣野大神南・今井遺跡群・町田・川越田・梅沢」  
埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告 第46集
- 小林 清隆他 1987「大井東山遺跡・大井大畑遺跡」(財)千葉県埋蔵文化財センター
- 石倉 亮治他 1987「腰巻遺跡」千葉県土地開発公社(財)千葉県埋蔵文化財センター
- 田口 一郎他 1988「海行A・B遺跡」群馬県箕郷町教育委員会
- 大塚 昌彦他 1988「市内遺跡Ⅰ」茨城県発掘調査報告書 第19集
- 小林 清隆他 1989「千葉市種ヶ谷津遺跡」千葉県埋蔵文化財センター報告 第170集
- 後藤 信祐他 1990「留ノ台遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告 第107集 栃木県教育委員会
- 西野 剛史他 1990「北部C遺跡 森戸遺跡」茨城県教育財団文化財調査報告 第55集
- 堤 隆 1990「住居廃絶時における竈解体をめぐる」東海史学 第25号
- 梶木 美治 1991「二の宮貝塚」茨城県教育財団文化財調査報告 第65集
- 岩瀬 譲 1991「樋詰・砂田前」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告 第102集

桑原A遺跡 住居跡一覧

遺構名	時期	規模(東西×南北-深さ・面積)	形状	主軸方位	切り合い
S J 1	古墳時代後期	4.52m×3.91m-18cm・17.40m <sup>2</sup>	隅丸長方形	N-10°-E	SJ1→SB1→SD4
S J 2	古墳時代後期	6.40m×6.35m-30cm・39.40m <sup>2</sup>	正方形	N-33°-W	SJ2→SJ7→SD4
S J 3	古墳時代中期	5.80m×5.76m-12cm・32.00m <sup>2</sup>	方形	N-72°-W	SJ3→SB5
S J 4	古墳時代後期	6.32m×6.34m-12cm・40.60m <sup>2</sup>	略方形	N-81°-E	
S J 5	古墳時代後期	6.60m×6.54m-14cm・42.10m <sup>2</sup>	方形	N-68°-E	SJ5→SB6→SD2
S J 6	古墳時代後期	5.04m×5.00m-16cm・21.90m <sup>2</sup>	方形	N-68°-E	SJ6→SD1→SD2
S J 7	平安時代	3.18m×4.50m-5cm	長方形	磁北	SJ2→SJ7→SK7
S J 8	奈良時代	3.74m×3.59m-9cm・13.00m <sup>2</sup>	方形	N-68°-W	
S J 9	古墳時代後期	6.30m×5.94m-20cm・35.00m <sup>2</sup>	方形	N-75°-E	SJ10→SK6→SJ9
S J 10	古墳時代後期	4.23m×4.30m-20cm・17.90m <sup>2</sup>	方形	N-19°-W	SJ10→SJ9→SK1
S J 11	平安時代	4.81m×3.07m-15cm・14.70m <sup>2</sup>	長方形	N-14°-E	SJ40→SK4・9→SJ11
S J 12	奈良時代	3.37m×3.02m-18cm・9.60m <sup>2</sup>	方形	N-80°-E	SJ14→SJ13→SJ12
S J 13	奈良時代	4.62m×3.45m-5cm・14.50m <sup>2</sup>	長方形	N-80°-E	SJ14→SJ13→SJ12
S J 14	古墳時代後期	4.63m×4.50m-31cm・19.50m <sup>2</sup>	略方形	N-63°-E	SJ14→SJ13→SJ12
S J 15	古墳時代後期	4.50m×3.05m-5cm・13.90m <sup>2</sup>	長方形	磁北	SJ15→SD2
S J 16	古墳時代後期	4.76m×4.55m-14cm・20.70m <sup>2</sup>	方形	磁北	SJ17→SJ16
S J 17	古墳時代後期	5.10m×3.30m-5cm・16.70m <sup>2</sup>	長方形	N-66°-E	SJ17→SJ16→SK9
S J 18	奈良時代	3.23m×3.10m-4cm・9.80m <sup>2</sup>	方形	N-75°-E	SJ18→SE3

遺 構 名	時 期	規模(東西×南北-深さ・面積)	形 状	主軸方位	切 り 合 い
S J 19	平 安 時 代	5.13m×4.11m-9m・20.00m <sup>2</sup>	長 方 形	N-80°-E	SJ29→SJ19
S J 20	古墳時代後期	4.28m×4.24m-36cm・19.00m <sup>2</sup>	正 方 形	N-37°-E	SK45→SJ20
S J 21	古墳時代後期	4.24m×4.56m-36cm・18.20m <sup>2</sup>	方 形	N-55°-W	SJ21→SD10→SD11
S J 22	古墳時代後期	2.77m×2.52m-10cm・5.60m <sup>2</sup>	略 方 形	N-71°-E	SJ22→SD10
S J 23	古墳時代後期	6.95m×5.30m-14cm・33.60m <sup>2</sup>	長 方 形	N-89°-E	SJ24→SJ23→SD13
S J 24	古墳時代後期	6.35m×5.60m-26cm・34.70m <sup>2</sup>	長 方 形	N-36°-E	SJ24→SJ23
S J 25	古墳時代後期	4.00m×3.75m-12cm・14.40m <sup>2</sup>	隅 丸 方 形	畿 北	SK15→SJ25→SD13
S J 26	古墳時代後期	3.62m×3.32m-18cm・12.00m <sup>2</sup>	隅 丸 方 形	N-17°-W	SJ26→SE 5
S J 27	古墳時代後期	4.47m×4.70m-7cm・16.20m <sup>2</sup>	長 方 形	N-34°-W	SJ26→SK 3→SJ27
S J 28	古墳時代後期	7.33m×7.59m-8cm・50.60m <sup>2</sup>	略 台 形	N-10°-W	
S J 29	古墳時代後期	6.89m×7.02m-8cm・45.90m <sup>2</sup>	方 形	N-12°-W	SJ29→SJ19
S J 30	古墳時代後期	4.87m×4.67m-22cm・22.60m <sup>2</sup>	方 形	N-65°-E	
S J 31	古墳時代後期	5.02m×4.98m-16cm・24.50m <sup>2</sup>	正 方 形	N-70°-E	
S J 32	平 安 時 代	4.00m×2.75m-20cm・10.90m <sup>2</sup>	隅 丸 長 方 形	N-1°-W	SJ33→SJ32
S J 33	古墳時代後期	4.30m×4.56m-16cm・19.40m <sup>2</sup>	略 方 形	N-87°-E	SJ33→SJ32
S J 34	古墳時代後期	3.98m×4.34m-20cm・17.40m <sup>2</sup>	長 方 形	N-76°-E	SJ34→SD16
S J 35	平 安 時 代	3.12m×2.62m-14cm・8.20m <sup>2</sup>	長 方 形	N-19°-W	SJ44→SJ35
S J 36	古墳時代後期	4.40m×3.36m-30cm・14.10m <sup>2</sup>	長 方 形	N-88°-E	SJ36→SK17・18
S J 37	古墳時代後期	4.62m×4.90m-16cm	方 形	N-60°-E	SJ39→SJ38→SJ37
S J 38	平 安 時 代	不明 ×不明 -10cm	方 形	不 明	SJ39→SJ38→SJ37
S J 39	古墳時代後期	5.36m×5.20m-23cm・27.60m <sup>2</sup>	正 方 形	N-86°-E	SJ39→SJ38・37
S J 40	平 安 時 代	3.70m×2.85m-12cm	長 方 形	N-14°-E	SJ43→SJ40→SJ11
S J 41	古墳時代後期	3.70m×2.85m-12cm・20.50m <sup>2</sup>	隅 丸 長 方 形	N-14°-E	
S J 42	古墳時代後期	4.40m×3.45m-26cm・14.90m <sup>2</sup>	長 方 形	N-81°-E	SJ42→SE 8
S J 43	平 安 時 代	4.11m×3.77m-7m	隅 丸 方 形	N-78°-W	SJ43→SJ40
S J 44	古墳時代後期	5.75m×4.15m-20cm・22.60m <sup>2</sup>	長 方 形	N-76°-E	SJ45→SJ44
S J 45	古墳時代後期	4.90m×3.35m-13cm・24.80m <sup>2</sup>	方 形	N-58°-E	SJ45→SJ44
S J 46	古墳時代後期	5.23m×4.93m-15cm・24.20m <sup>2</sup>	方 形	N-64°-E	
S J 47	古墳時代後期	5.05m×5.13m-13cm・25.10m <sup>2</sup>	方 形	N-52°-E	SJ47→SD15
S J 48	古墳時代後期	6.31m×6.17m-45cm・38.60m <sup>2</sup>	方 形	N-84°-E	
S J 49	奈 良 時 代	3.87m×2.83m-13cm・10.70m <sup>2</sup>	隅 丸 長 方 形	N-3°-W	SJ49→SE14
S J 50	古墳時代後期	3.97m×4.31m-22cm・16.00m <sup>2</sup>	長 方 形	N-15°-E	SJ51→SJ50
S J 51	古墳時代後期	4.61m×4.35m-23cm・20.30m <sup>2</sup>	隅 丸 方 形	N-2°-E	SJ51→SJ50
S J 52	古墳時代後期	4.16m×3.88m-8cm・16.60m <sup>2</sup>	方 形	N-58°-E	
S J 53	奈 良 時 代	3.50m×3.71m-4cm・12.60m <sup>2</sup>	方 形	N-1°-W	SJ53→SD 9
S J 54	平 安 時 代	5.45m×4.20m-5cm・22.40m <sup>2</sup>	隅 丸 長 方 形	N-95°-E	SJ55→SJ54→SJ56
S J 55	奈 良 時 代	5.86m×4.60m-2cm	長 方 形	N-78°-E	SJ55→SJ54→SJ56
S J 56	平 安 時 代	4.47m×3.38m-10cm・13.90m <sup>2</sup>	長 方 形	N-9°-E	SJ55→SJ54→SJ56
S J 57	古墳時代後期	6.04m×5.89m-20cm・35.20m <sup>2</sup>	正 方 形	N-21°-W	
S J 58	古墳時代後期	4.12m×4.12m-22cm・16.80m <sup>2</sup>	正 方 形	N-87°-E	
S J 59	古墳時代後期	5.03m×4.73m-20cm・23.50m <sup>2</sup>	台 形	N-9°-E	
S J 60	平 安 時 代	5.32m×4.02m-20cm・20.50m <sup>2</sup>	隅 丸 長 方 形	N-99°-E	
S J 61	古墳時代後期	4.27m×4.38m-20cm・18.40m <sup>2</sup>	方 形	N-58°-E	SJ61→SD21
S J 62	古墳時代後期	3.56m×3.31m-25cm・11.70m <sup>2</sup>	方 形	N-86°-E	SJ62→SD16
S J 63	奈 良 時 代	4.08m×3.37m-8cm・13.40m <sup>2</sup>	長 方 形	N-4°-W	SJ64→SJ63→SD 9
S J 64	古墳時代後期	5.38m×5.74m-15cm・30.20m <sup>2</sup>	方 形	N-58°-E	SJ65→SJ64→SJ63

遺構名	時期	規模(東西×南北-深さ・面積)	形状	主軸方位	切り合い
SJ 65	古墳時代後期	5.45m×5.34m-16cm・28.30m <sup>2</sup>	正方形	N-60°-E	SJ65→SJ64
SJ 66	平安時代	5.53m×4.67m-12cm・25.00m <sup>2</sup>	長方形	N-87°-E	SJ65→SJ66→SJ72
SJ 67	古墳時代後期	5.19m×5.04m-23cm・24.80m <sup>2</sup>	方形	N-73°-E	
SJ 68	古墳時代後期	5.95m×5.93m-13cm・34.60m <sup>2</sup>	正方形	N-78°-E	SJ68→SK31→SD15
SJ 69	古墳時代後期	5.16m×5.20m-35cm・25.80m <sup>2</sup>	正方形	N-83°-E	SJ69→SB 7
SJ 70	古墳時代後期	4.13m×4.05m-20cm・15.80m <sup>2</sup>	方形	N-75°-E	SJ70→SJ71
SJ 71	平安時代	4.43m×4.76m-3cm・20.50m <sup>2</sup>	隅丸方形	N-23°-E	SJ70→SJ71→SK29
SJ 72	奈良時代	6.00m×5.00m-0cm	長方形	N-85°-E	SJ70→SJ72
SJ 73	古墳時代後期	4.22m×4.31m-5cm・18.20m <sup>2</sup>	方形	N-76°-E	
SJ 74	古墳時代後期	5.39m×5.38m-12cm・29.80m <sup>2</sup>	方形	N-60°-E	SJ74→SD18
SJ 75	古墳時代後期	5.26m×5.02m-14cm・24.50m <sup>2</sup>	方形	N-55°-E	SJ75→SD18
SJ 76	古墳時代後期	4.85m×5.00m-20cm・22.70m <sup>2</sup>	方形	N-46°-E	
SJ 77	古墳時代後期	4.41m×3.08m-14cm・13.40m <sup>2</sup>	隅丸長方形	N-102°-E	
SJ 78	古墳時代後期	4.11m×4.54m-16cm・18.40m <sup>2</sup>	方形	N-49°-E	
SJ 79	古墳時代後期	4.20m×4.53m-17cm・18.80m <sup>2</sup>	隅丸方形	N-80°-E	
SJ 80	古墳時代後期	4.66m×4.64m-20cm・22.40m <sup>2</sup>	隅丸方形	N-81°-E	SJ80→SJ81
SJ 81	古墳時代後期	5.37m×4.84m-34cm・25.00m <sup>2</sup>	方形	N-71°-E	SJ80→SJ81
SJ 82	古墳時代後期	5.33m×5.35m-15cm・27.70m <sup>2</sup>	方形	N-70°-E	SJ83→SJ82
SJ 83	古墳時代後期	5.42m×5.40m-5cm・29.10m <sup>2</sup>	方形	N-91°-E	SJ84→SJ83→SJ82
SJ 84	古墳時代後期	5.12m×5.48m-9cm・28.00m <sup>2</sup>	方形	N-21°-W	SJ84→SJ83
SJ 85	古墳時代後期	5.06m×4.88m-13cm・24.00m <sup>2</sup>	方形	N-74°-E	
SJ 86	古墳時代後期	6.18m×5.76m-33cm・33.90m <sup>2</sup>	方形	N-83°-E	
SJ 87	古墳時代後期	3.10m×3.98m-14cm・11.80m <sup>2</sup>	長方形	N-31°-W	
SJ 88	古墳時代後期	5.96m×5.98m-19cm・34.60m <sup>2</sup>	方形	N-55°-E	SJ88→SJ86
SJ 89	古墳時代後期	3.43m×4.87m-10cm・16.20m <sup>2</sup>	長方形	N-26°-W	SJ88→SJ89→SK
SJ 90	古墳時代後期	4.18m×3.38m-17cm・14.10m <sup>2</sup>	台形	N-74°-E	
SJ 91	古墳時代後期	4.95m×4.50m-5cm・20.80m <sup>2</sup>	隅丸方形	N-2°-E	
SJ 92	古墳時代後期	3.59m×3.38m-18cm・10.70m <sup>2</sup>	隅丸方形	N-87°-W	
SJ 93	古墳時代後期	4.25m×3.92m-11cm・16.00m <sup>2</sup>	隅丸方形	N-88°-E	
SJ 94	古墳時代後期	3.11m×4.07m-33cm・11.80m <sup>2</sup>	長方形	N-52°-W	
SJ 95	古墳時代後期	6.40m×6.43m-16cm・40.50m <sup>2</sup>	方形	N-56°-E	
SJ 96	古墳時代後期	4.57m×3.93m-10cm・18.40m <sup>2</sup>	隅丸長方形	N-73°-E	SJ97→SJ96
SJ 97	古墳時代後期	5.83m×5.82m-8cm・34.90m <sup>2</sup>	方形	N-74°-E	SJ97→SJ96→SJ98
SJ 98	古墳時代後期	4.97m×6.13m-8cm・29.80m <sup>2</sup>	方形	N-71°-E	SJ97→SJ98→SJ99
SJ 99	古墳時代後期	5.59m×5.41m-20cm・29.10m <sup>2</sup>	方形	N-58°-E	SJ98→SJ99
SJ 100	古墳時代後期	4.70m×4.71m-11cm・22.10m <sup>2</sup>	正方形	磁北	
SJ 101	奈良時代	5.67m×5.84m-15cm・32.50m <sup>2</sup>	方形	N-11°-E	
SJ 102	古墳時代後期	5.30m×5.34m-14cm・26.10m <sup>2</sup>	方形	N-59°-E	